

転生したら殺人鬼ポジ だった件

クリーニング黒兎

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

前世は病弱でぼっくり逝ってしまった青年が、生まれ変わったら殺人鬼ポジだった話。

(ただし前世記憶と原作知識はなし)

多少原作改変やオリキャラ要素、その他地雷多めなので苦手な方はご注意ください。
基本ギャグと昼ドラと鬱で構成されてます。

*21/07/20にて本編完結。以降は加筆修正含め、番外編執筆中。

目次

一章

1 話	息を吹き返した芽	1
2 話	アツチツチ	17
3 話	好事家アイロニー	27
4 話	窒息わんわん	39
5 話	熱で雪は溶けるのか	55
6 話	平穩デイズ	70
7 話	男偏と女偏と男偏	91
8 話	二色の境界線	102
9 話	安心してください、履いてませ んよ!	123
10 話	くいしんぼうのチエケラ	220

133

1 1 話 中身がはみ出たクロワッサン

148

1 2 話 眠眠（ミンミン）突く突く

166

1 3 話 最終回にみんなで「おめでと

う」と手を叩くタイプのハッピーバース

デー

1 4 話 笑う角に 来る

1 5 話 切ったら止血、然らずんば毒

を見る

1 6 話 どこまでも遠くて、青い

220

ぼくらは。―― 234

二章

18話 ねこはいるよのび太くん

256

19話 かげおくり―― 269

20話 生成り―― 281

21話 キラクイスイツチ―― 293

22話 後ろの正面だあれ―― 307

23話 クーデレ? ツンデレ? ヤンデ

レ?―― 320

24話 先生、ピンククッションの中に

入り込んだ針が取れません―― 334

25話 ひよっこり―― 351

26話 僕はタヒにましえん―― 360

27話 ランランル―― 370

28話 あつ―― 380

29話―― 396

30話 進む針―― 414

31話 星は眩く天に浮かぶ―― 427

ぼくは。―― 442

三章

33話 サタデイヌーンファイバー

465

34話 ガッツだぜ! オラア!!

484

35話 立ち入り禁止―― 496

605	4 3 話 (例の世にも奇妙なBGM)	593	4 3 話 追憶のソナタ	712
	4 2 話 必勝	「太陽拳」! 受	5 0 話 「おかえり」と言って	678
	4 1 話 キラニヤン	578	4 9 話 「いいか絶対に押すなよ!」は	665
	4 0 話 番町爪屋敷	569	4 8 話 鏡よ鏡、この世で一番美しい	651
	とつての「聖母」	551	4 7 話 歩こう×2 わたしは元気	637
	3 9 話 星にとつての「正義」、鬼に		4 6 話 星の運命	627
539	3 8 話 ライターは持ったか?	522	4 5 話 じっちゃんの名にかけて。	617
	3 7 話 今、あなたの家の前にいるの		4 4 話 ソーニヤンス	
	3 6 話 シンバルウツキー			

52話 みみみみみ | 720

四章

53話 わんダフルデイズ | 735

54話 犬も歩けばバランに当たる

752

55話 犬も朋輩鷹も朋輩 | 768

56話 尾を振る犬は叩かれず

781

57話 煩惱の犬は追えども去らず

793

58話 犬骨折つて鷹の餌食 | 813

59話 犬 | 825

60話 犬は人に憑き、猫は家に着く

| 837

61話 主人公「同僚」(偽) | 860

62話 しあわせはく歩いて来ない。

だから歩いて行くしかない。 | 876

63話 本当にあつた○○な話

886

64話 ぼくのパパはパパじゃない

903

65話 覚悟の準備をしておいてくだ

さい | 919

66話 異界入り | 932

67話 讃歌が聞こえたか? | 943

68話 一億年と二千年前からスタン

バってました 1093

69話 「吉良吉影」は平穩に暮らした 76話 I F保健医√【悪魔は誰だ】

い 1105

わたしは。 987 77話 心音は、さぎ波と共に流るる

番外編

71話 しもしもく？ボックスー！① 1119

1024

72話 しもしもく？ボックスー！② 1131

79話 山岸由花子は広瀬康一を愛している 1146

73話 しもしもく？ボックスー！③ 1040

80話 流浪に幽霊 1159

74話 I F泉飛鳥√ 1077

75話 I F泉飛鳥√【1+1】 1057

81話 わるいこ 1174

82話 ガタンとゴトン 1195

83話 盗んだ自転車で衝突する 1146

1371	90話	アメリカ滞在記【中編】	1568
1345	89話	アメリカ滞在記【前編】	1546
	88話	てテ手ハーレム	1517
1294	87話	読者とは何たるか【後編】	1500
1282	86話	読者とは何たるか【前編】	1488
	85話	ウチユウジンとネコ	1472
		S市	1455
		ヤツらの心霊探訪記 in	
		1269	
		1237	
		アダルト	
	93話	これでも「吉」が二つある	1414
1442	94話	真夜中の面談	
	95話	ねれない子たち。	
	96話	羊水の中	
	97話	木工用ボンドルド	
	98話	『シ』アワセ	
	99話	呪いのビデオ(笑)	
	100話	魔女の一撃	
		純情ボーイズと、BLACK K	
		アメリカ滞在記【後編】	
	91話		
	1395		

1
0
1
話

一
月
三
十
日

|

1595

一章

1話 息を吹き返した芽

享年16歳、死亡理由は生まれつきの持病が悪化し、容態が急変したことによる病死。一生をほぼベッドの上で過ごし、そのまま最期は両親の顔を見ることもできずに死亡した。

そんな人生だったからか、インドア派がやっていそうな物事は一通り行った。

特に好きになったのは漫画やアニメなどのオタク文化。少しはしゃぎ過ぎて、サイリウム両手に生ライブを観戦してた時は死にかけて。

親の号泣からの事実を知ったりリアルドン引き顔は忘れられない。

(でも、もう死ぬのか…)

両親にはまともに恩返しもできず、不出来なひとり息子だったと思う。

自分も同年代の子供のように、学校に通い遊びたかったものだ。

「普通」ではない自分が恨めしく、「普通」な周囲が妬ましくて、そんな感情を抱いてし

もう自分が嫌いだった。

せめて他人の前では明るく振る舞ったものの、いつも心の奥底には鬱暗い闇を抱えていた。

だから二次元には何度も心を救われた。

王道や邪道もの等のジャンルを問わず漫画を読んでいた時は、その主人公に自己を投影して心の縁エッジを作った。

しかし、それももう叶わない。

ただ心の底ではもう苦しまなくていいと、ホツとしている自分もいる。

薬の投与によつて生じる全身の激しい痛みも、倦怠感も感じなくていい。一定のリズムを知らせる機械の音も、点滴や呼吸器をつけた感触にもおさらばだ。

(けれどももし次があるのなら、その時はただ「普通」に暮らさせてよ、神様)

知ってるんだ、神なんているわけがないってことは。でも、それでも、救いが欲しかった。

本当、最後に馬鹿みたいだ。

——さようななら、平等に不平等な、このクソツタレな世界。

そのまま意識は闇に吞まれるように消えていった。

??????

ぼくは所謂、「幽霊」や「悪魔」といった非科学的なものを信じていない。

そりやあ古きから神道を重んじている国家に生まれたのだから、お盆や彼岸は毎年行うし、正月に叶うとは微塵も思っっちゃいないが一年の健康を祈ったりする。

ただ誰かに入れ知恵されたわけでもなく、小さい時から「普通」というものを求めていた。

もはや取り憑かれているといってもいいかもしれない。

日本人は「空気を読む」国民性だとかどこかの本で書いてあったが、ぼくもその輪に漏れず目立たないよう生きてきた。

保育園や幼稚園の時から先生の手伝いをしたり、子供っぼくおもちゃで遊んで、子供に「かして」と言われたら快く貸した。

最近では教育熱心な母親の気持ちに応えられるように習い事をしつつ、「普通」の枠から

出ないよう調整している。

そんなぼくは齡6歳にして、人生に疲れていた。

元々赤ん坊の頃の記憶があり、「自我」が強かったのが影響しているのかもしれない。毎日毎日を遣い続けるばかりで、ふと帰り道の青空を見たら「もうどうでもいいや」と思ってしまった。

この精神は帰宅帰りに電車で自殺する人の「もういいや」に、似ていると思う。今は通学路にある公園のブランコに座り、リストラされたおっさんのように黄昏ている。

公園に住み着いているサングラスをかけたリアルマダオもいるが、彼は現在、酢昆布をむしゃぶるチャイナっ娘に現実を突きつけられ死にそうだ。平和である。

『』

ちようど夕方5時を知らせるチャイムが鳴る。

いつもだったら1時間前には家に帰っている。

5分帰るのが遅いだけでも迎えに来る母親だから、今頃警察沙汰になっっているかもしれない。そう考えるだけで自然とため息が出た。

ぼくが疲れているのは、親の愛情が重すぎるせいもある。

食事はともかく風呂も就寝もすべて一緒（流石にトイレまではついて来ないが）。

自由があるのはそれこそ学校にいる時と習い事がある時のみ。それ以外の時間はずっと親の目があるというのは、ぼくにとつて精神がすり減るものでしかない。

娯楽に関してもゲームやテレビは教育云々を理由に禁止で、唯一楽しめる本も「娯楽性」のあるものはダメだ。仮に選んでも親が確認するので意味がない。

日本の純文学は一通り読み尽くしたし、この間の誕生日プレゼントなんて「漢字・用語辞典」だった。

ちなみにサンタさんは死亡扱いになっている。とんだ被害者だ。

「普通」を目指すぼくらしくもないが、もうこのままどこかへ行ってしまうたい。

手の届かぬ青い空がひどく憎ましく感じられた。

「パパみてっ、らんどせる！」

少し舌つたらずな声が聞こえたと思つたら、ぼくのすぐ側にピンクのワンピースを着た少女がいた。

髪はややピンクがかかった茶髪のショートヘアで、天真爛漫さを宿した目が輝いている。

「鈴美、走ったら危ないだろ」

「ごめんなさい……でも、れいみもあとふたつおおきくなったら、らんどせる、かってもらえるんだよねっ！」

「まあな……。ごめんね、うちの子が急に」

「いえ」

恐らくこの子供は幼稚園か保育園の帰りなのだろう。走った拍子に頭から落ちた黄色い帽子が、首の後ろに下がっている。

尚も少女は少し引き気味のぼくにグイグイくる。

「ねえねえ、おにーちゃん。れいみがね、しよつてもいい？」

「こら、迷惑をかけちゃダメだろ！」

「……別に、いいよ」

断つたらこれがいずれ波となって、ぼくに返ってくるかもしれない。

内心は疲れていても、変わらない「普通」への気持ちに苦笑いが溢れる。

「ちよつと重いけど、大丈夫？」

「づつ、うう………ぜんぜんおもくない……も、ん……」

「……………」

仕方がないから、後ろから留め金の部分を持ち上げるように支えた。

その後、親子と少しだけ会話した。そして少女のブランコを押してあげて、遊びに付き合ってから少しして、二人は帰っていった。

父親の方には心配されたけど、家はすぐ近くだ——と嘘を言った。

「…もう帰るか」

少し少女と遊んだおかげか、気持ちが悪くなった。

それか純粹なあの笑顔と比べて、自分の鬱屈とした感情がちっぽけに見えたせいかもしれない。

ともあれ帰ろう、まだ春先だけど夜になると少し冷え込むし。

帰ったら案の定、警察沙汰になっていた。母は怒らず号泣してぼくを抱きしめ、帰ってきた父も怒ることはなく、息子を心配するばかり。

何となく父親に叱られていたあの少女が、羨ましく思えた。

???????

ぼくの家は旧家でそれなりに裕福な家庭である。

ただ疑問に思うのは両親が純粋な日本人なのに、自分の顔が異様に日本人離れていることだ。

何故黒髪の両親（父は既に白髪になってしまったが）から金髪が生まれるのか、何故黒目じゃなく紫目しめめなのか。

本当に何でなんだ……？

それからのこと、両親は染料材の悪影響がどうたらと言っていたものの、ぼくがごねにごねて、最終的に子供にも殆ど影響のない染料材で黒髪デビューした。

これが8歳の時で、今は9歳である。

今まで目立つ容姿のせいで遠巻きにされていたけれど、ようやく心の平穏が訪れる。

周囲も最初こそぼくの変わりように驚くだろうが、すぐに慣れるだろう。というか慣れてもらわなきゃ困る。

今までいじめの対象にならないよう上手く回ってきたが、その気苦労ともお別れだ。

ぼくは完全な陰キャデビューを果たしたんだ！

と子供らしく思っていた時期が、ぼくにもあった。

「クソツ……何故なんだ……一ヶ月も経てば目立たなくなると思っていたのに、一年経ってもほぼまったく変わらないじゃないか……」

「きゅ、急にどうしたの……？」

現在ぼくは2つ下の女子と共に図書室で宿題をしている。

この学校は放課後5時までなら生徒に自学目的で部屋を貸し出している。ただし日の入りが早い時期は4時半まで。

親には友人と勉強をするといつも言っている。流石に男友達までに口出しすることはない。

ただこれが女となると母の目が厳しくなる。故に「友人」と言っている。

学校側から情報が漏れる可能性は殆どない。何度か学校には警察沙汰になって迷惑

をかけたこともあり、ぼくの母がどういった人物なのか向こうは理解している。

それに息子のことになるヒステリックにもなる親御に、望んで関わりたくはないだろう。その姿勢がいじめを容認してゐるんだろうが。

ぼくからも担任に怯えた風を装い言つてあるので、問題ないだろう。ただ過信する気はない。

また生徒から親づてに知られることもあるまい。

男女が一緒にいるということでも色めき立つ奴もいるかもしれないが、この学校は人数も多い。その中の一人と一人が一緒にいたからといって、騒ぎ立ててもすぐに他の話題が出る。親にわざわざ言うこともないだろうし、母はぼくにつきつきりで親同士の付き合いも悪い。

「もしかしてお兄ちゃん、まだクラスの子から遠目にされてるの?」

「お兄ちゃん」はやめてくれ、目立つ。……そうなんだ、自分で言うのも変だけど、前よりかなり地味になつてゐるだろ?」

「あ、ごめん。……えっと、それ本気で言つてるの?」

「本気だけど?」

この少女——鈴美と知り合ったのは、彼女がまだ4歳の時だった。

それから二年経って彼女がこの学校に入学し放課後に図書室で再会してから、たまに勉強会を開くようになった。軽い雑談ぐらいなら周囲もしているから、さほど目立たない。

以前のいかにも子供な彼女だったら断固拒否していたが、今の鈴美はかなり女子らしくなり、話してもストレスにはならない。

むしろ楽しいと思えるのは、ぼくが普段人に避けられてばかりで、同年代の子供と話す機会が少ないからだろう。

「えーとき、いつもはクラスの女の子からどういう風に見られてる？」

「どうって……たまにチラチラ見られている時はあるかな？ そんなに金髪から黒髪に変えたのがヘンだったのかは、知らないけど」

「じゃあ男の子は？」

「こつちも睨んでくる奴がたまに。目立つのは嫌だから基本避けるけど、絡んできたらまあそれなりに、隠れて仕返ししてるよ」

「うわあ……私聞いちゃいけないこと、聞いちゃった？」

「ふん、君はどうせ誰にも言わないだろ」

「えへへ、まあね」

普段は子供らしく上部を取り繕っているけど、鈴美は長めの付き合いだから素になることが多い。

彼女は唸るようにして目を閉じてから、ぼくを見る。

「一つわかったことがあります」

「うん」

「あなたはとても鈍ちんです」

妙に仰々しく彼女は言った。ぼくが鈍感クソ野郎だつて？

「そこまでは言っていないじゃん！」

「じゃあトロい方の意味で、クソ運動音痴野郎だと？そう言いたいんだな君は、なんてひどい奴だ」

「だから言っていないって！さては話聞いてないでしょ！」

話は聞いている。運動音痴は生まれ持ったものだ。どうやっても高跳びは人間魚雷になるし、球技系は全て魔球となつて明後日の方向へホームランする。運動会では毎回気をつけているのにやらかして伝説を作ってしまった、影では「ぶどうヶ丘小の悪魔」と呼ばれているのも知っている。非常に解せない。

余談だが同じ「ぶどうヶ丘」でも、小学校は市立で、中高一貫は私立だ。

「…オホン、つまり私が言いたいのね、吉良くんが自分がカツコイイことに、気づいてないってこと」

「……………」

「何言つてんだコイツ…？」みたいな顔しないでよ……」

「ごめん、言ってることがわからなかったから、つい」

「えー……ほら、おてがみもらったりしない？まあどこか怖いところとか、あの運動会の事件を見て、「うわあ……」ってなってるのかもしれないけど」

「事件言うな」

ラブレターは時折もらうことがあるが、別に靴箱いっぱいには……みたいなことはない。

それくらい今じゃ誰にでもあるものじゃないのか？ぼくの知識は純文学による所が多いから、どうしても現代の話題に疎いところがある。

文通なんて今の時代の若者がやってないと気付いた時は、驚いたくらいだ。
というか、さり気なく歳下に貶された。

「ぼくの顔の偏差値については知らないけど、君がかわいいのはわかるよ」

「ふえ!!」

「すぐかわいいと思う、鈴美はモテたりしないの？ぼくだったらすぐアタックするの

に」

「……………ゼツタイからかつてる」

「うん。かわいいと思ってるのは本当だけど」

「くくくッ！そういうところが鈍ちんなの!!」

鈴美は顔を真っ赤にして、丸めた算数の教科書で殴ってきた。そんな怒らなくても……イタッ！

「ちよ、やめっ……予想以上に改訂版の教科書が厚くて痛い…!!」

「バカアホバカ!」

そのまま可愛らしい効果音（意識）でポカポカ殴られること数分。5時を告げるチャイムが鳴り、勉強会はお開きとなった。

その後ぼくは顔の見目が目立つ理由の一つになっているならと、少しサイズの大きい丸刈メガネと上げ気味だった長めの前髪を下ろした。

すると前よりクラスメートに距離を置かれることは少なくなった。

依然流行の話についていけないので、友人らしい友人はできず本を読んでいる毎日だが、「普通」らしく過ごさせている。

これこそぼくの望んでいる平穩たる毎日だ。

しかし学校でのストレスは軽減されたものの、家でのストレスはなくならない。

未だに「目」が終始ある生活と、成長するにつれ増えていく母の愛情とそれに伴うスキんシップ。

父はそんな母に注意をすることもなく、それなりの点数を取ったり習い事の成績が良ければ母と一緒に褒める。

別に嫌じゃない、嫌じゃないんだ。

ただ無性に吐き気のない気持ち悪さが、夜中にふと腹の底から湧き起こってくる。肌
が意図せず立ち、親から躰られているのに爪を噛んでしまう。

重い頭の中では同時に、鬱暗い感情が全身に痺れていく。

思考はその時、真っ黒になるのだ。ただ瞳が異様に熱くなり、脂汗と共にしきりに喉
が渴く。

水を飲んでしばらく座っていれば落ち着くが、年々この症状はひどくなっている気が
した。

何かの病気と思い調べれども、該当しそうな病名はない。親に相談しても面倒になる

だけなので、言えずにいる。

今日も家族3人で川の字になって寝ていれば、いつもの症状が出た。

フラつきながら台所へ行って、渴いた喉を麦茶で潤した。

頭を抱えて椅子に座っていること10分ほど、気持ち悪さは収まり呼吸も普通にできるようになった。

「…寝よ……あれ？」

ふと頭から手を離して爪を見た時、妙に伸びていた。朝切ったばかりのはずなのに、何故だろう。

「まあいいか、明日切れば」

しかし訪れた眠気には勝てず、そのまま布団に潜り込み眠った。

2話 アツチツチ

5年生になった。

1学期は家庭訪問や運動会など神経を使う行事がとにかく多い。

どうにも身体を動かすことは苦手だ、身体の使い方が上手く出来ないというか…。

6月にプール開きもあるけれど、ぼくが一年の時に立て続けに溺れて大騒ぎになったことで、一人免除になった。

ただ何もしないわけにはいかないので、学校司書の監督下の中、行うのは勉強や読書。

そしてあつという間に夏休み。

少し早い気もするがぼくは来年受験生なので、勉強尽くしの日々が待っている。

受験予定は来年S市からここ杜王町に移転してくる中高一貫の「ぶどうヶ丘高校」である。

別段ぼくとしては来年の今頃から勉強しても十分受かるとは思うが、勉強熱心な母の指示ゆえ従うしかない。

向こうは私立だが普通に入っても金銭面の余裕がある。しかし母としては「特待」の

枠に入つて欲しいらしい。

「優秀」なわたしのことも。

母がよく言っている。家庭訪問にきた先生にも近所の人にも言っている。

何度も言うがぼくは「普通」に生きたい、三度の飯よりも目立ちたくない。

だが母のために目立ちすぎないよう気を遣いつつ、それなりの成績を取っている。

そして、あくまで凡才の人間が努力を重ねて勝ち取ったものであるかのように、自分の自由を削り、習い事や勉強に時間を費やす。

爪は隠さなくてはならない、平穩に生きるためには当然のことだ。

然してまあ、ぼくの安息の地が見つかからない。

その事実気づいたのは、かつて一度逃げ出そうとして公園で黄昏ていた時よりも前のこと。

ぼくは逃げられない。この家の子供として生まれてしまった以上、二人の気持ちに応えながら「普通」を目指すしかない。

「大丈夫？ 吉良くん」

「……鈴美か」

今日は午前中に習い事があつたが午後は自由だったので、冷房の恩恵を求め自転車を飛ばし、学校の図書室の窓側の席で勉強していれば、ふいに視界に影ができた。

見ると鈴美がトートバックを片手に立っており、人の許可も取らず前の席に座る。年下のくせに相変わらず図々しいヤツである。

「勉強会の誘いは受けたけど、今日じゃなかったはずだろ」

「きよ、今日はたまたま一人で勉強しようと思つて、学校に來ただけ！ か、勘違いしないでよ、吉良くんがいたらいいなあ……なんて思つて來たわけじゃないんだからねっ!!」

「君はいつからツンデレになつたんだ」

「吉良くんつて「ツンデレ」を知つてたの……!？」

「ぼくだつてそれなりに、今の流行りを知ろうと努力してるんだ」

主に情報収集源は、クラスの男子の会話だが。

本を読みながら聞き耳を立てているぼくを想像して気持ち悪いと思つた奴、あとで校舎の裏に來い。

「それで……ちよつと顔色悪そうだったけど、大丈夫？」

「大丈夫さ、これでもこの間返つてきた健康手帳に、すべて「異常なし」と書かれていたくらいだ」

「それは健康診断受けた時は、でしょ。今は悪そうに見えるよ」

彼女は徐に前のめりになり、ぼくの額に左手を当てた。

「……ッ！」

ワンピースの隙間から微かに見えた胸元よりも、額に触れた熱が思考の全てを絡め取る。

白くて、柔らかな感触。少し鼻を掠めた甘いミルクのような匂いも、ダイレクトに脳に伝わる。

思わず手を握りしめたら、爪が不可思議に肌に食い込んでいく感覚がした。頭が沸騰して、何も考えられなくなる。

「吉良くん、大丈夫？顔真っ赤だけど熱あるんじゃない？」

「ぼ、ぼくちよつと……ぼく、ごめん……」

「えっ……吉良くん!？」

司書の人が、彼女のあまりの大声にこちらを振り向く。後ろの鈴美の制止を無視し、ぼくはそのまま逃げるように廊下を走った。

全身の昂った熱を紛らわすように、いつの間にか着いていたのは屋上。フェンスにもたれかかるようにして、そのまま地面の汚れも気にせず座り込んでしまふ。鼓動はおかしいくらい速く脈を打っていた。ひどく喉が渇く。

「ハア…ぼくいったい、どうしちゃったんだよ……」

コンクリートの日射温度に乗じて感じる暑さより、熱くなる身体の一部。

これが何なのか、いくら流行に疎いぼくでも小4の保健体育で教わったから知っている。クラス別で分かれ泊まっていた宿泊学習の時も、好きな子の話から少し下世話なトークで周囲の奴らが話題にしていた。

ただ連中が持ち込んでいた官能本（エロ本というらしい）を見せられた時、ぼくはそこに情欲をそそられなかった。

別にピュアというわけでもない。

だが考えてしまふ。あの時女性の裸体を見てドキドキできていたら、どれだけマシだったろうかと。

思い出してしまうのは、つい先日図書館で調べ物をしていた時にいつもは興味がなく、立ち入らない芸術コーナーで目にしてしまったもの。

『Leonardo da Vinciの世界のすべて』を読んだ時、ぼくは運命的な出会いをした。

しかし同時に大人の成長（暗喩）を体験して、自分の「異常性」を疑うきっかけとなり、先生にエロ本が見つかり持ってきた男子がぶん殴られた事件で、確信に変わった。

「ぼくは……女性の手にしか、興奮できない」

とことん「普通」からかけ離れていく自分に、嫌気がした。

???????

あの後一旦賢者モード（風に当たって熱を冷ましたただけである）になってから、図書

室へ向かった。

戻つてまず一番に水筒の麦茶を飲み、喉を潤す。そして時たま先ほどの感覚を思い出しそうになりつつ、わからないところを教えてあげた。彼女は心配そうな表情を浮かべていたが、無視した。

気付けば時刻は4時。

夏は日の入りが遅いが、その時間になると夏休みということもあつて残つていた——といつても最後はぼくと鈴美だけだったが——生徒はもれなく追い出される。

結局自分の勉強は進まなかった。帰ったらどれだけやったか母にノートをチエックされるので、憂鬱だ。叱られはしないけど、その怒りのない口調がまた居心地の悪さを覚える。

「ねえねえ吉良くん」

自転車を押して歩いていたら、後方にいた彼女が駄菓子屋を指す。帰り道は途中まで同じだ。

「今日はすごく暑いよね」

「狙いはアイスか。ぼくに奢らせようたって無駄無駄ア」

「ブー、ケチんぼ」

…まあ今日は急に席を外してしまったこともあるし、買ってやらないこともない。

「男子のツンデレはあんまり需要ないと思うよ?」

「…うるさい、3秒以内に決めなかったらこの話は無しだ」

「えっ!? わわ、待って待って!」

彼女は慌てた様子で自転車を止め、駄菓子屋の方に走り出した。

幸い万が一の時のためにと持たされている金がある。アイス一つ買う分には余裕で足りるだろう。

彼女が少し悩んで決めたのは、パピコだった。

お菓子や甘いものは健康に悪い、と言われ育ったぼくは食べたことがないものだ。

まあ無駄に糖や脂質を摂取する気もないから、進んで食べたいとも思わない。

「はい、一本あげる!」

「え?」

「一緒に食べると美味しいんだよ!」

「……………」

「やっぱり体調悪いから無理だったかな…?」

「…いや、食べるよ、ありがとう」

外にあったベンチに座ってアイスを渡された時、一瞬手が触れ鳥肌が立つような感覚

に襲われたが、深呼吸して受け取る。

うだるような熱さに感じる冷たさは、悪魔的だった。味どうこうというよりは、夏の熱さの中体内を冷やすこの感じが癖になるのかとふと思った。最高にハイって奴だ。

「ぼくは常々大人どもが酒や煙草をするのに疑問を抱いていたけど、こういう中毒になる感覚がたまらないのかもしれないね」

「何でアイス一つで、そんなビッグな話になったの……？」

食べ終わったアイスは、駄菓子屋に設置されているゴミ箱に捨てた。

思えばぼくは家族や学校の給食などの機会を除けば、こうして寄り道して誰かと一緒に食べるのは初めてかもしれない。

こちらを窺う彼女にぼくは笑いかける。

「……悪くない」

「えへへ、よかった」

抑えきれないといった風に微笑んだ彼女の顔は、夕焼けの空のように紅く色づいていた。

ぼくよりもよっぽど鈴美の方が、病人じゃないか。

「病院行った方がいいよ」と伝えたら、彼女は一瞬真顔になり、舌を出してライダーの如き身のこなしで自転車バイクに乗って去っていった。

3話 好事家アイロニー

受験も終わり、ぼくは無事特待で「ぶどうヶ丘高校」の中等部に入学した。

ここは私立だから、殊更に小学校の同級生は少ない。

問題の体育は、「普通」にやろうとしても混沌を呼び起こしてしまうだけなので、極端に手を抜くようになった。

おかげで小学校の頃のような異名は付けられずにいる。周りの認識は「運動音痴な陰キャ」くらいだろう。成績は「C」だが、目立つよりはマシだ。

まあ、身体のコントロールが成長するに連れ
—— 否、大人になるに連れて、上手くできるようになったのも影響しているのだろう。

元々子供の頃から隠していただけで、思考は大人と大差なかったのだし。

そして入学してから一年経ち、二年生になった。

勉強熱心だが人との付き合いはあまりない、地味な少年
—— というのがぼくの

イメージとして定着している。

ちなみに部活は書道部。委員会は図書委員だ。

自分で言うのもなんだが、完璧に目立っていない。

小学校の時の（主に運動面だが）経験を生かし、平穏な一般生徒A：いやこの場合はKとして過ごせている。

だがしかし、相変わらず異様な喉の渇きを伴う不調は治っていない。

むしろ頻度が上がり、週に1〜2回は起こるようになった。それも時を選ばず起こるのだから、迷惑である。

親にも隠しきれなくなり病院に連れて行かれたが、身体に異常はなく原因は不明。

ひとまず発症した時用に吐き気止めだけ処方されている。

「ハア……」

今日も3時限目の授業中体調が悪くなり、保健室に向かった。新学期早々無様である。

保健医はいなかったが担当授業の先生には言ったので大丈夫だろうと判断し、薬を飲んでからベッドに潜る。

寝る前に上履きを揃えて、脱いだ上着を皺にならないよう丁寧に畳んでまくらの横に

置き、メガネも外した。

「……きもちわる……」

症状は時々によるが、今は吐き気と耳鳴りがひどい。

とつこの前に薬が効かないことはわかっている。

ぼくのこの症状は精神的なものだ。

ストレスの波が一定以上超えてしまった時に現れる。

好みの女性の手を見ていると少し発散されるが、見続けていると「あの手で慰めたい」
だとか、「舐めたい」だとか、思考がヤバい方向にいく。

解決方法としてはストレスを発散させるべきなんだろう。

だがろくに趣味も作れない家庭事情な挙句、多少はストレスが軽減されていた鈴美との勉強会もない。

男友だちと遊ぶか?…いや、部活があるし門限もある。

母親の束縛も強くなったせいで、遊ぶのも家うち以外は難しい。

自分の部屋のモナリザはいいとして、集めてる爪など、その他見られるとドン引きされるものが色々ある。

勉強も6時半までなら図書室兼自習室を使えるが、誘うにしても男はおつむが弱いヤ

ツばかり。

女も「陰キヤがイキってキモ」と思われたら死ぬ。剩えその噂が広まったら面倒だ。というか何故この学校は私立のくせに、やたらと長ラン・ボンタンを着てる輩が多いんだ？もつと厳しく風紀を取り締まるべきだろう。

「あら、誰かいるの？」

ふいに保健室の扉が開き、柔和な声が室内に響いた。不思議と耳に残る声だ。借りている旨を話す前に、ベッドを仕切っていたカーテンが開く。

「ふふ、なんてね、職員室を出る時に連絡きたから知ってるよん」
「…そうですか」

前の保健医とは違う、亜麻色の少しハネた長い髪が特徴的な女の保険医。赤いフレームのメガネをかけているが、ずいぶん眠たげな印象を受ける。ふと視界に白衣の裾から覗く白い手が見えた。

少し肉付きは薄いものの、長い指が美しい——
——そこまできてハツとして、
咄嗟に視線を逸らす。

先ほど水を飲んだばかりだというのに、喉が渴いた。

「新しく赴任してきたんだ。まあ新任紹介の時には呼ばれてないから、行つてないけど」
「…いえ、プリントに名前だけ載っていたので覚えてますよ。確か佐藤」
「ぼくが言い終わる前に、保健医はメガネを少し上げると、笑いながら言った。」

「佐藤安希恵」つて言います、よろしくねー」

なんだか間延びした語尾の、ほわほわとした先生だ。

???????

それから週に1回ほどは、佐藤保健医の元にお世話になつている。

後からわかつたことだがこの保健医、かなりドジである。よくプラスティック瓶に入つたガーゼを落としたり、何も無いところで転倒している。おまけに天然ときた。

しかし巨乳で美人の部類に入るからか、男子の人気は高いようだ。ぼくとしては脂肪

の塊よりも手の方が魅力的だと思う。

時季は6月半ばにもなり、じめつとした天気が続いている。

午後に体調を崩し保健室で横になっていると、用事から戻った佐藤保健医が襲来した。

「あらら、吉良くんまた体調崩してるんだってね」

「まあ…はい」

回数を重ねていけば、いくら気が合わなくても雑談くらいはするようになる。

彼女は保健医であり生徒の相談を聞く機会が多いからこそ、聞き上手だった。

ぼくも例外ではなく、他愛もない話から全てとまではいかないが、自身の悩みを話すようになった。

この何気ない会話がぼくのストレス緩和剤になると気づいたら、やめる理由もないだろう。

「吉良くんは親御さんにストレスを感じちゃうんだよねえ、反抗期なら仕方ないとも思いうけど」

「反抗期で済んだらいいんですけどね」

「うーん……ストレスの抱え方が尋常じゃないっていうか、普通そこまで溜められる？
ていうくらい溜まつてるんだらうね」

「おかげさまで身体がしよつちゆう不調ですネ」

「いやいや、身体はまだしも心にまで影響が出たら大変だよ？」

彼女は茶を二人分入れ、こちらに持ってきた。

冷房が効いていなくなったら絶対に飲むのを避けただろう。しきりに緑の水面に息を吹きかけている相手を見る。

「猫舌なら何でお茶にしたんですか」

「間違えちゃったのー。もう………熱あふっ！」

やはりこういう何気ない会話は楽しいものだ。

「ねえねえ、そう言えば吉良くんの小学校の先輩から聞いたんだけど、君が「ぶどうヶ丘
小の悪魔」って呼ばれてたって本当？」

「ゴフツツ」

飲もうとした茶が見事にシートにかかった。急に何を言い出すんだ、この女……？

渡されたティッシュで口元やシートを拭きつつ、相手をジト目で見る。

「…周囲が勝手に呼んでただけです。小学生なんて、変なあだ名を付けたがる年頃でしよう」

「ふーん、本当に呼ばれてたんだあ…なんか意外だな。吉良くんは「ジミー」って感じなのに、「悪魔」なんて似合わなさそうじゃない」

「ぼくも同感ですね。平凡なぼくなら正しく「ジミー」がお似合いですよ」

「え！じゃあ私が「ジミーくん」って呼んでも…」

「先生、帰り道には気をつけてくださいね」

「しゅみましえん」

ついでに小声で「ほんとに悪魔や…」とも言ってきた。ノリがいい先生で何よりだ。脅す際に使う30cm定規の出番はなくなった。

『』

話していれば、チャイムの音が鳴った。

これが6時限目の終了の合図なので、もうすぐ部活時間になる。

今日は同じクラスの部員に休むことを伝えて帰ろう。

しかし立とうとして、一瞬フラついた。

「……つと」

前にあつた別のベッドにつんのめるよりも先に、伸びてきた手に腕を引つ張られる。

佐藤保健医がぼくを助けようとしたのだと思つた束の間、彼女の「あつ」という間拔けな声が聞こえた。例の如く転んだらしい。

彼女はそのままこちらに覆い被さる形で、ダイレクトアタック（攻撃150）を繰り出す。

LPの殆どないぼくは大ダメージを受けた。この女、本当いつペン死んでみたらどうだろうか。

「いやだ、ごめんまた私つたら…」

「ハハ…大丈夫で——、」

彼女のしなやかな右手が、ぼくの腕を掴んでいる。対し左手はバランスを取ろうと思つたのか、視界のすぐ右にあつた。

ゾクリとしたものが背筋をかけ、自分でも無意識に彼女の手首を掴んでいた。

思つたよりも冷たいその手は、きめ細やかで肌に吸い付く。

同年代の女子の手もいいと思う時があるが、大人の美しい手には劣る。しかも今触れているのは、成熟した綺麗な手。

保健医に視線を向ければ、一瞬彼女は肩を震わせた。

その様は肉食獣にターゲットにされた草食動物のようである。

「……………」

「きゃっ」

そこで我に返り、相手を突き飛ばしてしまった。彼女はその勢いのまま向かい側のベッドに尻もちをついた。

冷静を取り戻した脳が、今の状況を処理していく。

このまま逃げるべきか？…いや、これからも保健室は使う羽目になる。だったら何かしら理由をつけて謝るべきだろう。

そもそもこの女が転げてきたのであって、言うなればぼくは被害者。むしろ謝るべきは向こうだ。

しかし女性を突き飛ばしたのは、いくらなんでもまずい。

やはりぼくが謝るべきかと、彼女の腕を掴み引っ張る。その瞳はメガネが反射しているせいで、窺うことができなかつた。

「あの…すみません、急だったから驚いてしまつて」

「……………ねえ」

「はい？」

淡い色とは対照的な黒い瞳が、じっとぼくを見つめる。

「吉良くんさつき……すごく怖い目してたよ」

「そりゃあぼくも思春期の男の子ですから、先生みたいな美人と急に至近距離になつたら、おっかなくもなります」

「えつ、そう？ 私美人かなあ……」

「男子の間ではよくかわいいたか、美人な先生として話題になつてますよ」

「え？ えへへ〜そーお？ えへ、やだあ、照れちゃうじゃない〜！」

人のことを打楽器だと思つてるのかと思うほど、照れ隠しに背中を叩かれる。昇つた熱よりも次第に苛立ちが増し、ため息をついて帰ろうとした。

「あ、そうだ吉良くん」

「ハア……何ですか、さつきのこと報告する気なら先生だつて……」

「いやいや、それはもういいよ」

彼女はそう言つて、ぼくの手を握つた。

「私の手、もつとさわりたい？」

いつもの柔和そうな表情は一転して、蠱惑的な色を含めうっとりぼくを見つめてい

た。
否、ぼくの「眼」を見つめていた。

4話 窒息わんわん

杉本鈴美

彼女の初恋は、4歳の時だった。

当時幼稚園の年中だった彼女は、早くもランドセルに憧れていた。

しかしまだ早いからと買ってもらえず、拗ねる日々が続いていた。

そんなある日少女は父親との帰宅帰り、蝶を視線で追っていた折に、公園のブランコに座る少年の黒いランドセルに目を留めた。

幼児の興味は簡単に蝶からランドセルへと移り、頬を紅くして一直線に少年の元へと走ったのである。

かつてのことを思い出すと、鈴美は顔から火が出そうになる。初恋の相手など、言葉にしなかっただけで完全に引いていた。

明確に彼女がフォーリンラブしたのは、ランドセルへの興奮も収まりブランコを少年に押ししてもらった時。

夕焼けに色付いた世界の中、後ろを向いた時に見えた少年の笑顔。そこでようやく少女は、少年の姿をはっきりと捉える。

金髪に紫の目。目の前の年上の子供は、まるで外国人のような見目をしていた。絵本の中の白馬に乗った王子様の図を重ね、少女の頬はまた紅くなった。

それから近所から「ヤンチャ娘」とまで謳われた姿は身を潜め、少女は実に女の子らしくなった。

同じ小学校に通うのだから、いつかまたあの少年と出会える機会があるはず。彼が王子様で自分がお姫様なら、運命的な出会いをしようのだろうか――。

そんな乙女な妄想を抱きながら、少女は小学生になった。

元から絵本など本が好きだった彼女は、すぐに図書室に行つて本を借りるようになった。

そしてある時高い所にある本を取ろうと手を伸ばしていた際、年上の少年に本を取ってもらつた。

『あ、ありがとう』

『いや、気にしないで。名札がぼくのと違って赤いから、君は新入生だろ？ こういう時は年上を頼つてよ』

『うん……あつ！』

『何だい？……あれ、君は……』

二回目の出会いは図書室で。

お互い本好きだとわかり、少女は内心舞い上がったものだ。さらに放課後に時たま勉強する仲にまで至った。

少し寂しかったのは少年の親が過保護なこともあり、二人で遊びに行ったりすることができなかつたことだろう。それでも少年と共に過ごす時間は、彼女にとつて幸せのひとつときだった。

それから少年は卒業し、私立の「ぶどうヶ丘高校」の中等部に入学。

必然と好きな人と同じ学校に行きたいと思つてしまうのは、恋の性^{さが}で。

しかし彼女の家計は決して貧しいというわけではなかつたが、中高にお金をかけられるほど裕福でもなかつた。

ゆえに彼女は猛勉強して、堂々と「特待」の席を勝ち取つた時は、「恋の力つてすごいよ」と母親がロマンチックに語っていた。

その一方父親はソファアーに座り、最近飼ひ始めた犬のアーノルドに顔を舐められても、微動だにしなかつた。娘の恋路はお父さんのシヨックが大きかつたらしい。

家庭事情は一旦置き、かくして彼女は、春から新品のセーラー服を身にまとう中学生

となった。

友人もすぐにはでき、順風満帆な日々を送っている。初恋の相手の新しい異名が生まれているかもしれないと思ったが、そんなことはなく。

むしろ「憧れの先輩」やら「気になる先輩」などの話題で、まったく上がらないときた。

彼が目立つことを嫌い、「普通」な日々を送りたいと言っていたのは覚えている。

小学生の頃はその日本人離れた容姿が目立ち、染めてメガネをかけ地味になっても、もはや奇跡と言つていい運動音痴や地の顔の良さ。滲み出る冷たいオーラから、良い意味でも悪い意味でも周囲から一目置かれていた。

勤勉さと頭の良さは、前者に述べた理由のせいで霞んでしまっていたが。

彼女はてつきり中学でも彼が目立っているとばかり思っていたが、実際は本当に目立たず「普通」の男子生徒として過ごしている。

周囲に聞いても「そんな人いたっけ？」やら、「ああ、彼か」といった反応ばかり。

些かあの運動神経が直ったとは思えなかったが、多少改善はされているらしい。知った時は天変地異の前触れかと思った。

「勤勉で成績はいいけど、あんまり人との付き合いがない地味な生徒——か」

しかしどんな印象でも、「好き」であることに変わりはない。

初恋を未だに抱き続ける彼女は、純真と言えるだろう。

ただ彼女は純粹過ぎた。

二年の月日というのは、歳を取れば短く感じてしまう歳月であるが、まだ感性の若い少年少女にとっての二年とは、途方もなく長く感じるもの。

己の欲望に対しまだ青く知ったばかりであり、或いは知らない若者は、些細な変化で感情を揺さぶられる。

そして鈴美は久しぶりの初恋の相手と、予定調和のように図書室で発見した。

一高校生も使う図書室は図書館と比肩する広さを持つ。他にも受験のため勉強する高校生に混じって、一人彼は窓際の席で勉強していた。四人席だが偶然なのか、彼以外人はいない。

ちなみに今日は中間テストの試験週に入った初日で部活は休みである（彼女はまだ入っていない）。

真面目な生徒も中にはいるが、ブームな「ツツパリ」の影響か、ヤンチャで不真面目な生徒が殆ど。

さらに初日ということも相まって、人はさほど多くなかった。まあそれも、もう少し日にちが経てば人の数は増えるだろう。

「吉良、くん……」

彼の髪は前に見た時よりも伸びており、長い前髪が見目の良さをわからなくしている。少しもつたいない気はした。

二年間小学と中学の違いで会う機会がなかったので、制服姿も新鮮だ。

だが、最も驚いたのは伸びた身長である。

小学の時は鈴美の成長期が早かったこともあり、お互いの身長はほぼ同じだった。

しかし今は相手が座っていてもわかるほど、身長の違いを感じる。恐らく立ったら自身の視界が彼の胸元辺りになる。

その事実には妙な嬉しさと恥ずかしさの混ざった感情が、鈴美の頭の中でグルグルと回る。

前のように元気よく名前を呼ぼうとした声は、思った以上に小さくなってしまった。

「——鈴美？」

「へえっ!?!わ……」

「しっ、ここは図書室だぞ」

「あ、うん、そうだったね……ごめん」

「とりあえず座るといい」

自然と持っていた鞆を持たれ、拳句彼の座っていた前の席に誘導される。

「なんだか頭が熱く、「うん…」と頷くだけで、終始上の空になってしまう。頭の魚が酸素を求めて口をパクパクさせた。」

「二年ぶりかな？随分雰囲気が変わったね」

「吉良くんに言われたく……ないかなあ」

「フン、そりゃあ二年もあれば、多かれ少なかれ人は変わるだろ」

「なんか、男の子から男の人になったっていうか……身長低かったくせに」

「なんだ、身長のことを気にしてたからでもってたのか？随分可愛らしいじゃないか」

「か、かわいいって……!!」

思わず彼女は声を上げて立ち上がってしまった後、ふと周囲の視線を集めてしまったことに気付く。

すぐに顔を真っ赤にして、席に座った。目の前の男は手で口元を隠し小さく笑っている。いい性格だ。

「ぼくが指摘してあげてたっていうのに」

「絶対狙って言ってたでしょ、バカッ！」

「おやおや、そんな口聞いていいのかい？仮にもぼくは先輩だぞ」

「吉良くんなんて「先輩」じゃなくて、「くん」で十分だもんね」

彼女はお返しにと、相手の脛を蹴った。彼は呻き声を上げそのまま足を抑えて固まる。彼女は内心でザマアみろと、舌を出した。

だがそこで目立ってしまったことを思い出し、相手の顔色を窺った。

自分はよくとも、彼の信念にそぐわないことをしてしまったのだ。外見には出ていなくとも、本当は怒っているかもしれない。

「えっと、その…」

「目立ってごめん」——かな？別に構わないよ。ただ小学生の時のように一緒に勉強…っていうのは、難しいかな」

「…ツー」

思わず相手の顔を見た時、前髪と眼鏡で二重に隠れた瞳の奥が暗い色をはらんでいることに気付く。

それで目の前の人物が相変わらず親に縛られているのだと、彼女は察した。

小学校の時とは違い、彼の家庭事情について学校側は知らないのだろう。でなければ、断られなかったはずだ——と、思いたい。

「母親に女子生徒と勉強したなんてバレたら、家で勉強しなくちゃいけない。父親も既に還暦を過ぎて退職しているから、余計家に居づらいんだ」

「そつ、か…」

当たり前のように一緒に過ごせると思っていた彼女は、暗い気持ちになった。

落ち込む彼女を見て、彼は優しく話しかける。

「一緒に勉強したかったんだよね？ぼくが親の目を恐れているせいで…ごめんね、鈴美」
「い、いいの、「きつと大丈夫」って思い込んでた私が悪いんだし…」

「そう、落ち込むなよ。同じ学校には通ってるんだし、何かしら話す機会はあるかもしれないだろう？」

「……じゃあ入ってる部活を教えてください。入部見学の時色々回ったけど、吉良くん見つからなかったの」

「部活は書道部だが…習い事もあるから、いないことが多いよ？」

「それでもいい、入ってやるもん」

「そうかい…まったく、何で君はぼくに懐いたんだか…」

「懐いてるわけじゃないよ」

「違うのか？」

大人びた顔立ちが、きよとんとした表情を見せる。彼女はその顔をじっと見つめて、理由を言おうか口ごもった。

相変わらずこの男は、利発さとかけ離れた鈍さを持つ。彼女の秘めたる恋心を見抜い

てくれたなら、こちらもとうの昔に吹っ切れて告白でもして玉碎し、別の恋に行けたかもしれない。

しかし現実には、ずっと初恋で灯った炎を胸の内に燻らせたまま。

「このクソ鈍ヤロー……」

「女の子が「クソ」とか言うんじゃあない」

「じゃあバカ、あんぼんたん」

「はいはい、今日は許すからさっさと勉強を始めましょうね、鈴美さん」

「そんな気分になれないもん……ほんと、吉良くんのバカ……」

机に突っ伏し尚も文句を言っていたら、彼にため息が聞こえ、頭を撫でられる。

あまりの突然のことに一瞬彼女の心臓が止まりかけたが、顔を上げれば真っ赤な顔がバれるので、そのまま語彙力のなくなった状態で文句を言い続けた。

「君は変わったようで……変わってなかったな。ちょっと安心したよ」

そう一言言って相手は手を離し、勉強を再開した。

彼の含みのある言葉を彼女は少し疑問に思ったが、そのまま春の陽気を残す暖かさ
と、聞こえるシャーペンの音に次第に瞼が重くなり、気付けば寝入っていた。

その後起こされ、変な体勢で寝ていたため頬に手の跡が残っていたことを指摘し笑った相手に、お構いなくバッグで殴った。

そして鈴美は翌日、彼女たちを図書室で偶然見かけたという友人に、ある噂を聞かされた。

3年B組の吉良先輩って、保健医の佐藤先生と付き合ってるらしいよ。

思わず彼女は、持っていたバッグを地面に落とした。

???????

「一年の杉本さん、吉良くんの幼馴染だって話、本当?」

「…相変わらず情報がお早いですね、先生」

「あははーこれでも保健の先生だからねえ、色んな子が来るから必然と情報が集まるのよ」

「ベタベタ触らないでくれますか、二重の意味でよごれる」

「ええーひどい、さつきまで愛を確かめ合ってたのに」

「確かめ合っていないです。頭がイかれてるのか、アンタ…?」

佐藤保健医と利害関係ができたのは、二年のいつ頃だったか。

性的なマイノリティーを持つ人間は少なからずいる。同性愛者だったりトランスジェンダーだったり……。それがぼくの場合は女の美しい「手」で、彼女は美しい「目」だったこと。

ともかくぼくは、彼女の誘いに乗った。お互いの利害関係は一致していたし、こちらとしても悪化する体調不良にほとほと困っていたこともある。

関係ができてから理解させられたのは、ぼくが自分の欲望に対し思った以上に従順だったこと。

彼女の手を愛でている時は、全てのしがらみから解放されたように感じられる。親もストレスも「普通」への渴望も、ぼくを邪魔することははない。

「本当に…最初のアレは黒歴史だ…」

「私は行為中にキレイな目を舐めるのが好きだから、またしてもいいけど」

「二度としないし、初体験が保健室で保健医なぼくの気持ちなんて、アンタにはわからな

いでしようね」

「でも誘いに吉良くんは乗ったじゃない」

「あれは……抑えが、利かなくなつて……」

「まあ「手」を愛でている君を誘導したのは、私なんだけど」

「……………」

「ご、合意の上じゃない、ほら、ちゃんと避妊もしたし。なんてつたつて私は保健の先生ですから！」

「へー最近の保健の先生は、生徒を食い物にするんですね初めて知りましたぼく」

「あう、そんな怖い目しないですよ——興奮しちゃう」

「……………もういい」

「この関係は月に数回程度。こちらが体調を悪くした時に彼女の手に触る。逆に彼女はぼくの目を舐……まあそこら辺は表現の気持ち悪さから、割愛させていただきます」

「ところで杉本さんとは、もう会ったの？」

「先日図書室で会いましたけど」

「ふーん……」

彼女は唇を尖らし上目遣いでぼくを見てくる。

何でアヒル口になっているんだ？この女。

「幼馴染ってことは、もしかして好きだったりするの?」

「好きですけど」

「えっ」

「フフ、彼女の手…久しぶりに見たんですけど、より女性の手になっていて、綺麗になっていたんです。彼女自身は相変わらず子どもっぽい印象を受けましたが」

「本当は触りたかったが人目もあつたし、何より少年と少女ではなく男と女に近付いている中で、過度な接触は憚られるべきだろうとやめた。」

「よかった、やっぱり吉良くんは手にしか興味がないのね」

「でも…そうですね」

「?」

鈴美自身も髪が伸びて、綺麗になったと感じた。ぼくの性癖は相変わらずだが、感性は正常に働いている。

ぼくの言葉にアヒル先生は、少し拗ねたように腹を小突いてくる。変態だ。

「ふーん、ふーん?」

「ちよつと、生徒にセクハラしないでください」

「セクハラじゃありません、先生と生徒の過剰なスキンシップです」

「おいやめろ、この変態クソカス保健医」

「……………き、吉良くんって偶に、すごく口が悪くなるよね」

かなり癪だがこの保健医との関係もあって、ぼくの精神バランスが保てていることは事実だ。

中学生にもなつて子供の頃とずっと変わらない…いや、より悪化しているこの現状。

一番ひどいのは母との距離か。最近母の接触に嫌悪感しか感じられない。ぼくを見る目が、「息子」ではなく一人の「男」を見ているようで、吐き気がする。

「愛情は過ぎると、異質なものになる。吉良くんは大人に近付いてるから、余計かもね」
「急になんだ」

「お母様はきつと、こんな立派な息子を持つて幸せでしょうね。自分に従う息子——そんな息子が自分の意思にそぐわないことをしたら、怒るのかしら？」

「……………怒りませんよ、悲しむだけです」
「へえ…それはすごく、窮屈ね」

褒められたり喜ばれたり、カゴの中へと押しやって大切にされる日々。

時折自分が人間ではないかのように感じる、鎖を付けられ愛されるばかりのペットではないのかと。もう既に逃げようとした首輪は締まって、窒息寸前だ。

「ああほらまた、怖い目してる」

彼女の言う「怖い目」の意味は相変わらずわからない。

でもきつとぼくは自分の中のその怖いぼくに気付いたら、戻れなくなると思う。

ぼくは欲望に忠実だ。しかし「普通」に暮らすことを望む。

この二つの性質が、ぼくを形作っている。

5話 熱で雪は溶けるのか

ぶどうヶ丘高校は中高一貫のため高校進学の試験はなく、エスカレーター式で上がる。また高校から入学できる形式も採用している。

中学3年の時期、高校受験を間近にした一般生徒と比べれば余裕がある。そのため空いた時間は専ら、趣味の読書に使っていた。

「にしても大雪だな……」

元々降雪地帯であるが、朝起きたら予想以上に積もっており、一面の銀世界。

予報でも夜にかなり降ると言っていたが、早起きしてみれば案の定だ。

両親が高齢なため、雪かきは大抵ぼくの仕事だ。父は去年一回腰をやってしまった。る。

1時間ほどかけて一通り終え、服を着替えて朝食を食べ、学校に向かう。時間の都合で日課の新聞には目を通すことができなかつた。

普段は自転車通学だが、雪の日は怪我をしたら危ないからと、親の送迎になる。

基本送り迎えは父で、他愛ない話をする。近所でぼくは、反抗期のない良い子——としてちよつとした人気だそうだ。話の出どころは、息子自慢ばかりする母。近所の奥様

方に陰口を叩かれているのを知らないのだろう。幸いその悪意がぼくにまで向かうことはないけど。

一応言っておくと、ぼくは親に対しストレスを感じているが、嫌いなわけではない。そも育ててもらっているのだから、反抗などすべきではない。

だからってぼくはこのまま親に、何も言わないままでもいいのだろうか。

「吉影？大丈夫か、また体調でも悪いのかい？」

「…え？あ、ああ、大丈夫だよ父さん」

信号は赤。止まった車内で、父は心配そうにぼくを見る。

父は子煩悩でぼくを溺愛している。両親の愛情が深過ぎるのは、彼らが歳を経てできなかった子供がぼくであるから。

殊に母はまだ若い時流産を何度も経験し、父の両親に白い目を向けられた経験がある。そんな母の愛情を避けては、ならない。

しかし「普通」に生きようとするほど、ぼくに付けられた首輪は締まっていく。

佐藤保健医の言っていたように、まさしく窮屈だ。今のぼくの生き方は。

その時ふと視界の先で、自転車を漕いでいた少女が転ぶのが見えた。同じ学校の制服

だと思えば、転倒して身体を起こした少女と目が合う。

口元が「きらくん」と、動いたのが見えた。信号は青に変わり、そのまま車が発車する。

「手、怪我してたな…」

「何か言ったかい、吉影や?」

「…何でもない、事故らないように気を付けてよ、父さん」

彼女よりも手の方の怪我を心配したぼくは薄情者なんだろうか。それとも、おかしいのだろうか。

触れた窓は、ひどく冷えていた。

???????

先日、同級生の一部の女子の間で流行っている噂話を聞いて以来、鈴美は一人悶々としていた。

初恋の相手が保健医と付き合っているという話が授業や食事中、寝ている時など、忘

れようとしては浮かんでくる。

あくまで噂話なのだから、本当に付き合っているのか本人に聞けば真相はわかる。

(いやでも、そんなこと聞いたら、まるで私が吉良くんのこと気になってるみたいじゃん!!すっ、好きだけど……)

絶賛恋わずらいの彼女は、登校中雪に前輪を取られ転倒した。

咄嗟に手をつけて大きな怪我はしなかったものの、手のひらは一部剥き出していたアスファルトにこすれ、擦り傷だらけに。

「朝から最悪……」

なんとか立ち上がり自転車を起こしていれば、ふと視界の先で、車からこちらを見ていた少年と目が合った。

名前を呼んでしまったが、向こうには聞こえなかっただろう。

薄紫の瞳は彼女を捉えていて、驚きの色が窺えた。

転んだところを見られたという羞恥や、顔を見れた嬉しさ。複雑な感情が絡み目線の下に向けた間、車は学校の方へ走り去ってしまう。

「……ハア」

残ったのは惨めな気持ちで、彼女は歩きながら自転車を押した。

そして学校に着いたのは、遅刻ギリギリという時間。怪我の痛みや気持ちの問題もあり、その後自転車を漕ぐ気になれなかったのだ。

教室に鞆を置き保健室に來た彼女はそこで、件の噂の相手が保健医であったことを思ひ出す。

だがその時すでに、保健室の扉を開けてしまった後。

「あら、また怪我人かなー？今日は一段と多いにやあ〜」

「1年A組の杉本です。えつと…佐藤先生、ですよね？」

「そうです、私が保健室の天使^{エンジェル}——改め、佐藤先生です」

「保健室の…：…天使？」

自分で言っただうするんだ。出かけたツツコミを飲み込み、鈴美は手当てを受ける。

同性でも見惚れてしまうほど、佐藤は美人であった。顔立ちもそうだが、色素の薄い長髪にも自然と目が向く。

「やだ…こんなに可愛い子にじつと見つめられたら、アキエ新しい扉開いちゃう！」

「新しい扉？」

「…：…いえ、何でもないので。私の心が汚かったわ、ごめんなさい。とりあえず消毒はしたから、あとは絆創膏を貼って終わりね」

「あ、はい…」

佐藤の百合は発言した後悔と共に流され、手当てが終わる。

戻ろうとも考えたが悩みの件もあり、立ち上がったまま下を向く鈴美。

彼女を見かねた保健医は椅子に座るよう促し、自分もまた生徒の前にあるデスクチェアに腰掛ける。

「何かお悩みなら聞くわよ。私は生徒の相談役でもあるからね」

「悩み……」

「そう、中学生って悩みがある子が多いから、先生は少しでもそういう子供たちの手助けになれたらと思うの」

「……その」

「うん、なあに？」

佐藤の、例えるなら赤子に接しているような優しい声色に、鈴美は肩の力が抜けていくのを感じた。

気付けば自然と、口が開く。

「あ、あの、先生が……さ、3年B組の吉良くんと付き合ってるって噂、本当ですか？」
一瞬詰まったが、鈴美は悩みを打ち明けた。

言い終えた後に、顔が熱くなっていくのを自覚する。こういう時吉良なら「もつと冷静に行動しろ」とでも言いそうだ。

はぐらかされるか、それとも肯定されるのか。願わくば否定の言葉が返ってくることを望んだ。

「あれ、その噂って私が広めたやつじゃない」

奇面組よろしい等身になった鈴木美は、ズコ——ツ！と、床に転けた。すぐに等身を戻すと、保健医に詰め寄る。

「ど、どういうことですか、広めたって!？」

「いやあ、吉良くんってよく体調崩して保健室に来るんだけど、それを何か怪しい……ってことで勘繰ってきた女子生徒がいたから、面白半分で「先生と生徒の禁断の恋よ……」って言ったの」

「…ほ、本当に付き合っていないんですね？」

「うん。付き合っては、いないわ」

「そうなんだ……よかった……」

気が抜けたせいか、彼女は後ろの壁に寄りかかるように倒れる。

ついでに連日の睡眠不足が、一気に身体に襲ってきた。

しかし全く、先生が生徒にホラを吹くのは如何なものであろうか。嘘がなければ一部

の同級生の間で噂が広まることも

「……ん？」

鈴美はそこで、ある重要なことに気が付いた。

噂話の出所は先生と女子生徒の間であり、噂話が広まったのが同級生の間ということ
を踏まえると、佐藤に尋ねた生徒は一年の可能性が高い。

何故一年の女子生徒が、わざわざ「地味」でキャラ作りをしている三年の吉良と保健
医の関係が気になったのか、疑問に感じた。

彼女も恋愛話にミーハーな部分があるので、誰と誰が付き合っているかもしれないと
いう話を聞いたら、盛り上がってしまう時はある。

妙な女の勘に、彼女は恐る恐る保健医を見た。

「もしかして、その…噂話を聞いた女の子って……」

「あら、杉本さんも恋バナに花を咲かせたいのね」

「……………」

「ふふ、吉良くんは普段保健室で寝る時にメガネを取っているのよ。それを偶然見てし
まった女の子がいても、おかしくはないじゃない？」

「じゃあ、やっぱり……」

その生徒は恐らく、保健医と生徒の禁断の恋——という意味で佐藤に話を切り出した

のではなく、吉良自身に好意を抱いていたから聞いたのだ。

自分のように彼に好意を持っている人物はいないだろうと、高を括っていた。

しかし本当は彼女が知らなかっただけで、ライバルがいるという事実には、鈴美は焦りを覚える。

「ふふ、青春ね」

メガネの奥で生徒を見て、微笑む保健医。

鈴美は佐藤の視線を受け、自分の感情がモロバレしてしまったことに気付いた。羞恥で顔が沸騰するやかんののように、ドンドン熱くなっていく。

『プルルル』

その時鳴った、保健室の電話。

保健室がそれに応答するのを見つつ、鈴美は顔を覆って床に転げたい感情に襲われた。ふと窓の外を見ると、雪がちらつき始めている。

帰ったらまた雪かきかと、ぼんやりと考える。熱がある程度引けば部屋の暖かさもあり、眠気の誘惑はすぐそこにまで迫っていた。

「失礼します」

ちようど彼女の顔が支えを失いガクンと動いた時、扉が開いた。聞こえた声に彼女の落ちかけた意識が、一気に現実引き戻される。

慌てて壁に寄りかかった際に乱れた髪を、手ぐしで直して背筋を伸ばす。

「やあ吉良くん、今日もサボりかなあ?」

「体調不良です、佐藤先生。: 鈴美、大丈夫かい?」

「う、うん。さつき先生に手当てしてもらったから」

「そうか…」

吉良は徐に鈴美の怪我をした右手に触れてきた。瞬間、冷たい男の手の体温を感じて肩が跳ねる。

触れられるのは頭を撫でられた時以来だが、こうして顔を間近で見られる距離にいると、心拍数が異常に上がる。

相手の視線は手に向いているが、顔を見られたら恥ずかしさで殴ってしまうかもしれない。

「うん、すぐに治りそうかな。君、朝転んでただろう? 心配したよ…: 全く」

「本当に心配してたの? どうせ車の中で、「ツフ、転んでますわよ愚民が…」とか思ってたんじゃないの?」

「何で君の想像の中のぼくは、お嬢様目線でものを言ってるんだ…？心配して来てやっただろがバカみたいじゃあないか」

「えっ、私のこと心配して来てくれたの？ほ、本当に？」

「……さあね」

彼は視線を逸らして、そのままベッドに向かいカーテンを閉じてしまう。

鈴美はふわふわした気持ちで、頭上の明かりを見た。

顔中真つ赤の彼女に、佐藤はニヤついた笑みを隠さない。

小学生のように「ヒューヒュー」と囁し立てたりもしたが、ベッドから絶対零度の「黙れ」を食らい静かになった。

しかし数分経って、懲りずにまた話し出す。

「まあ杉本さん、噂話なんて鵜呑みにしない方がいいものよ。真実の是非がわからぬものを信じることほど、愚かなものはないからね。その点、勇気を持つてあなたが今日私に尋ねたことは、大いに素晴らしいと思う。自分の目で確かめることは大事だわ」

「噂の根源は先生のせいですけど」

「うっ………そ、そうね…それはごめんなさい。でも、ほ、ほら、生徒の見る目を育てるっていうの？私は大事だと思おなうかなうなんて………いや、その、本当にすみませんでした」

生徒に格好つけてイイことを言おうとした保健医は、結局頭を下げる。鈴美は笑って「もう大丈夫です」と流すと、部屋を出て行った。

部屋に残ったのは保健医とベッドに潜った吉良のみ。

二人だけの時、彼らの欲望でできた皮は一枚剥がれる。

「先生には見えてたわよ、「心配した」の前に「手を」って入ってたの」

「……………」

「無視ツ!?先生スルーされるのが一番嫌いなのに…」

「……………」

「大丈夫?おっぱい触る?」

「……………」

反応のない吉良に、佐藤は不審に思いもう一度声をかけてから、カーテンを開ける。自分で言っておいてなんだが、胸の件を流されたのはかなり恥ずかしい。

相手は毛布にくるまっており、ベッドの上に歪な丸が出来上がっていた。

近くに行くと先ほどまでは聞こえなかった音が、よりしつかりと聞こえてくる。

ガリッ、ガリッ、ガリ

それはまるで、何かを引つ搔いているような音。

無遠慮は承知で布団をめくれば、中には丸くなつて爪を噛んでいる少年がいた。異様な光景に保健医は眉を寄せる。

この状態でもきちちんと上履きや上着を綺麗に整えて置いてあるのがまた、異常と言える。

普通なら抱えきれない感情を抱いてしまった時、人は脱ぎ散らかすか、着の身着のまままでベッドに倒れるだろう。

「血、出てるけど」

「ぼくはおかしくない、ぼくは普通だ。ぼくは、ぼくは……」

「うわあ、肉まで噛んでるじゃない」

「ぼくは、ぼくはぼくはぼくは……」

保健医の言葉など、まったく耳に入っていない様子だ。

彼と保健医の利害関係ができてから1年、吉良本人は身体の不調が少なくなつたと考

えているようだが、実際は違ふと彼女は認識している。

手の欲望を満たした今、少年の欲は渴きを癒す快樂を知り、暴走しかかっている。

彼の内側に存在する狂気は時折、彼女の好きな目玉の中に現れる。

怖い目———その中の彼は彼女を見ているようで、彼女の手しか見ていない。

それ以外の全ては切り取って手だけを取り出し、己の欲望を満たしている。

彼女は吉良と同種の目をする人間を、知っている。

「吉良くんは今日の新聞見た？ 私は好きな記事を切り取って保管する癖があるのだけれど、今日もいい記事があったの」

彼女に手を止められた吉良は我に返ったのか、じつと彼女を見ている。

「見て……ないです」

「じゃあ帰つたら見てみるといいよ。マイノリティーの人間は何も性的嗜好に限つたことじゃない。社会のマイノリティーも一般人が思っている以上に、普通の中に紛れ込んで息をしているものよ」

彼女はそう言つて面の一部が切り取られた新聞を丸めて、軽く彼の頭を叩いた。

「……………」

「いたツツ!!」

少年はその新聞を奪い取ると、勢いよく彼女の頭を叩き返した。

6話 平穩デイズ

佐藤保健医に部活を休む旨を伝えてもらうよう頼み、ぼくは部活終わりまで眠りについた。

自分の異常性を鑑みていたら、普段のように保健医の手に振れることすら躊躇われた。

帰りは朝と同じく父である。包帯を巻かれた息子の手を見るや否や、顔を真っ青にして近付く。

「よ、吉影や、怪我でもしたのかい!?今からでも病院に……」

「大丈夫だよ父さん。それより早く帰ろう、少し疲れてるんだ」

「…そうかい」

車内は朝と違って無言。父は時折、新聞を握り締めている息子の手を見てくる。

やはり父は世間一般から見て、ぼくが変だということに気付いているのだろうか。

母は自分の内心ばかりでぼくの内情など微塵も慮つちやくれないが、父はまだ理解がある。

「父さん、ぼくはストレスがある時、爪を噛む癖があるでしょ」

「…ああ、そうじゃな。行儀が悪いからと、母さんが注意しておるが」

「今日はちよつと嘯みすぎて、血が出ただけなんだ」

「……まさか、お前はクラスの子に…」

「いじめられてるわけじゃあないよ」

父に顔は向けず、こんな僕が変か、率直に聞く。

返ってきた答えは「否」だ。愛する息子なのだから、そんなことを思うはずがない——という何とも父親らしい返答である。

「まあ今は多感な時期じゃ、悩むこともあるだろう。何かあったらワシや母さんに伝えなさい」

「……うん」

多感な時期、か。将来家を出て平穩に暮らしてさえしまえば、ぼくは「普通」を謳歌できるだろう。

しかし安穩と過ごしたところで、ぼく自身さえ理解しきれていない得体の知れない感情が、甚だ消えるとは思えない。そもそも「普通」の尺度は人によつて違う。ぼくのはあくまで一般の目を意識した平均値を求めて、「普通」と述べているだけだ。

普通に生きられないマイノリティーの連中は、いったいどのように社会に紛れ込んでいるのだろうか。

「……」

一先ず今朝見逃した新聞に目を通そうかと、揺れる車内に身を任せて瞳を閉じた。

???????

休日少し調べ物があり図書館に赴いたら、幼児を抱っこしている鈴美と遭遇した。

『図書』と付いたら、ぼくたちは出会わなければならぬ運命でもあるというのか。

「いやはや驚いたな、君に息子がいたなんて」

「なっ……私が産んだわけじゃないでしょ！冗談もほどほどにしてよね！」

叩かれた肩が地味に痛い。弟かと思ったが、どうやら近所に住む夫婦の子供だそう
だ。両親同士の付き合ひがあり、面倒を見ることが多いらしい。

「ほら露伴ちゃん、吉良おにーちゃんだよ」

「……ないっ！」

露伴というらしい子供はぼくと鈴美の顔を交互に見て、彼女に強く抱きつき、拒絶の意思をみせる。ぼくがいつた貴様に何をしたというんだ。

「あはは…露伴ちゃんね、結構人見知りなの。ちよつと変わつてるところもあるけど、根はいい子なんだ」

「変わつてる、つて?」

「えつと、人見知りの割に好奇心旺盛でね。夏に家族ぐるみでキャンプに行った時なんか、気になるものから手当たり次第に突撃して行ったの」

「ふーん…」

変人の部類というヤツか、この子供もマイノリティーの部類に入る人間なのかもしれない。

そう言えばキャンプで思い出したが、ぼくも小三の時に学校主催のサマーキャンプに参加した。

周囲に気を遣いつつも珍しく楽しめたが、川釣りで流されうっかり桃太郎の気分を味わった。ふざけてぼくの背を押しガキどものことは一生忘れないし、向こうもぼくのことを悪い意味で一生忘れられないだろう。

「今日は絵本の読み聞かせがあるんだよねえー、露伴ちゃん」

「ももちやあうまれちゃ、ももちやろう」

「その歳で桃太郎侍なんて見てるのか……」

「おじいちゃんの影響で、好きになつたらしいの」

父親が時代劇好きでよく聞かされるため、ぼくも知識はある。

「……………」

「あれ、露伴ちゃんどうしたの？」

鈴美から降りた子供は、一直線にこちらへ向かつてくる。

覚束ない足取りに心許なさを感じ、いつでも助けられるよう屈んだ。

「ちえい！」

「……………」

「ちええい!!」

「そこはやられたフリだよ、吉良くん！」

「……………ウ、ウワー」

尻餅をつくように倒れたぼくを、子供はやり切った顔で見た。

その顔にイラツときたが、顔に出してはいけない。相手はまだガキなんだから。

「吉良おにーちゃんが遊んでくれてよかったね」

「まちやちゆまらぬものをきつちえしまつちや」

「カツコいいわ、ロハ右衛門ー!!」

「おれのなは、ろはんしやんしえー」

「ロハ右衛門じゃなくてロパンなの……!?」

幼児と接する彼女は、普段よりも随分優しく微笑んでいる。

ぼくと違つて子供の扱いも上手い。将来保育士にでもなれそうだ。

「ぼくはそろそろ行くよ」

もう少しで聞いた読み聞かせの時間になる。場所を移動しようとした所で、裾を引っ張られた。

ロパンの仕業かと思ひ振り向けば、犯人は鈴美だった。彼女はなぜか、顔を紅くしている。

「え、えつと……もう行つちやうの?」

「いや、ここに蔵書されている新聞に用があるから、そっちに向かうだけだよ」

「そ、そうなんだ……あつ!ここで話して大丈夫だった?」

「大丈夫だろ、ぼくと君は部活動が同じという繋がりがある。ならば偶然出会つて話していてもおかしくはない」

もし母さんに知られたら何を言われるかわかったものではないが、学校で放課後二人きりで過ごしているよりは問題ごとになるまい。

「じゃあよい週末を、鈴美と露伴くん」

「う、うん！バイバイ吉良くん！」

「……………」

「ほら、露伴ちゃんもおにーちゃんに「バイバイー」って」

「……………」

露伴幼児はまたぼくと鈴美の顔を交互に見る。

さつきの遊びで機嫌が良くなっていたが、見る見るうちにぶすくれた顔になる。泣かれたら困ると付き合ってたというのに、何が気に食わないのか。これだからガキは嫌なんだ。

「れーみおねーちゃ」

「うん、どうしたの露伴ちゃん？」

「しゅき？」

「うん？そりやあ露伴ちゃんのことだーいすきよ！」

「こいちゅ」

「…え？」

露伴幼児は小さい手でぼくを指し、鈴美を見た。一回り上の人間を「コイツ」呼ばわりとは、中々イイ度胸をしているじやあないか。対し彼女は目を白黒させた後、声にならない声をあげ、顔を露骨に真っ赤にさせる。

フン、ガキのくせに、歳上に一丁前なことを言う。

「露伴くん、歳上をからかうもんじゃないよ。鈴美もこういう時はきちんと叱ってやらないと」

「え?…う、うん!!おねーちゃんのことからかつちやダメだよ!」

「じゃあきりやい?」

「き、嫌いでは……」

まだガキだというのに、貴様はベテランの入国審査官かと思われる雰囲気で、幼児は彼女に詰め寄る。

見かねて助けに入り、最終的に鈴美は「友だちでしゅ!!!」と、ここがどこだかを忘れて大声で叫んだ。おかげで人の視線が集まってしまった。

思った以上に彼女は、色恋沙汰に純情ピュアらしい。

多感だ多感だ——と周りに言われているぼくと同様、彼女も思春期真っ盛りであろう中学生。見目もいいのだから、付き合いたいという男子は引く手数多だろう。

「じゃ、今度こそよい週末を」

「……うん、ばいばい」

「れーみおねーちゃ、こつち」

「……うん」

ガキは最後までぼくに別れの挨拶を告げることなく、フラフラ歩く彼女の手を握って去って行った。

まだまだガキの奴が彼女に抱いている感情は「姉」への独占欲か——それとも、既にマせているのか。

まあ、ぼくには関係のない話だ。どちらでも構わない。

「さてと……ようやく本題に入れるか」

ついこの間切り抜かれた新聞の部分の家ものど照らし合わせ、見た記事の内容。

それには未成年犯罪者に対する『実名報道問題』が、5年前強姦と強盗の容疑で身柄を拘束された当時12歳の「少年K」の例が挙げられ、記述されていた。

頭に過るのは、佐藤保健医が言っていた社会的マイノリティーについて。

自分がその少数に入ると思っているからこそ、ぼくはわざわざ図書館にまで足を運んで調べている。

少数に当てはまる人間の思考を探れば、「普通」に生きるための鍵が得られるかもしれない。

保健医の実際の意図はわからないが、概ね悩める生徒にヒントとして言ったのだと思

う。

にしても、興味のある記事を切り取る癖とは：己の爪収集と比べると、後者が際立つて異質に感じられる。

しかし、何かを集める癖を持つ奴は、それなりにいるはずだ。だから、おかしくはない。

それから新聞を読み漁り、目当ての5年前に起きた「少年K」の事件に辿り着いた。

12歳という年齢と、犯した罪の内容から多くのメディアで取り上げられたようだ。

青少年の犯罪は『少年法』によって、実名で報道されることはない。殺人を犯して少年死刑囚になった者など、中には例外もあることは留意しておく。

結果、得られた情報は「少年K」の異常さと、家庭内で受けた虐待。

あとは少年の身柄を捕まえたのが、杜王町に勤める警察官だったということ。

個人として気になった内容は頻繁に起こっていたという虐待についてだが、詳細が載っていない。

新聞を一通り読んで作り上げた「少年K」の人物像は、まだリアリティーが欠けているように思える。虐待といっても親にどのような暴力を受けていたかで、少年Kのイ

メージは変わってくる。

「捕まえた警察官ならあるいは、知ってるのだろうか……」

新聞を広げ考え込んでいたら、閉館間近を告げる放送が入った。

時刻を見たら5時を過ぎている。平日は7時までだが、休日は5時半までなのでさつさと片付けて帰らなければならない。

大量の新聞を戻してから外に出れば、辺りは真つ暗だった。

街灯に沿って駐輪場に着いた時、ぼくの自転車の隣にもう一台自転車があった。そこにいたのは、サドルに腰をかけて、猫背気味に頬杖をついている少女。

「…鈴木?」

「やつほー」

「やつほー、じゃあないよ。帰ったんじゃなかったのか」

「偶には夜空を眺めるのもいいかなって。ほら、この季節の空って、よく澄み渡って見えるじゃない? 露伴ちゃんも親御さんが迎えに来たから、もう帰ったけど」

マフラーから覗く顔は赤い。

ただでさえ冬は寒さの厳しい地域だというのに、外にどれだけ長くいたというのか。

「露伴くんが帰ってから、何時間経ってるんだい?」

「え? えっと、読み聞かせが2時に終わって少し遊んでから帰ったから…2時間くらい

かな」

「それなら何で帰ってないんだ、空を眺めるだけなら家で幾らでもできるだろ。それに中学生だからって、夜に女子一人は危ない」

「いや、その、実はもうちよつと吉良くんと喋ってから帰りたいなーって思つて……でもまだ中にいたみたいだから……」

「なら図書館の中に入ればよかつただろうに」

「大声出してたの司書の人に見られてたし、ちよつと一人だと居づらかつたんだもん……。勉強用具とか持つてきてなかつたし、かといつて本を読む気にもなれなくて……」

「……ハア、わかつたよ。じゃあ少し話してから帰ろうか」

「ほ、本当？」

「ああ、桃太郎は一昔前、今の桃を割つたら中から赤ん坊が——つていう話じゃなく、桃を食べたおじいさんとおばあさんが若返つて出産したのが桃太郎——つていう話が主流だつたらしいよ」

「桃太郎はもういいよ……」

げんなりした様子で彼女は言う。どうやら読み聞かせが終わつた後、あの幼児に散々桃太郎侍に付き合わされたらしい。

他にもハートフルストーリーでお馴染みなババア汁に切り込みたかつたが、今回はよ

しとしておく。

「君から桃太郎の話サムライよろしく斬ったんだ、何か話題を振ってくれ」

「え、ええー……じゃあ今日は寒いね」

「それを言ったら冬は毎日寒いだろ」

「そうだけど……あ、じゃあね、一つ聞いてもいい？」

「いいよ、何だい？」

時々少し遠くにある道に車が通るのみで、辺りは静まり返っている。

街灯に照らされて浮かび上がった白い息は、すぐに消えていった。

その時ふと、意識しないようにしていた彼女の手を見る。手袋とコートで白い肌の色は見えない。

覆うものを剥いで触りたいと思ったが、寸前で生唾を飲んで、視線をそらす。

何を考えているんだろうか、ぼくは。そんなことすれば翌日から変態のレッテルを貼られて終わりだぞ。

「吉良くんは、佐藤先生と付き合っていないよね？」

「……ああ、この間の話か。先生が吹聴した話だって、本人から聞いたと思うけど」

「吉良くんの口から聞きたいの」

「別にぼくから聞かなくてもいいと思うが……？まあ、付き合つてはいないよ。そもそも倫理的に考えろ、生徒と先生だぞ」

「……そつか。まだ少し不安だったけど、これで安心できるや」

「安心？」

単なるぼくの噂話で、彼女が安心を得る？

確かに仮に噂が本場で生徒と先生が付き合つてるなんてバレたら、スキヤンダルどころじゃないだろう。

——いや、既に既成事実ができてしまっている以上、ぼくはグレーゾーンを生きているのか。

利害関係で成り立つぼくと佐藤保健医は、考えればお互いが相手の秘密たり得る爆弾を握っていることになる。

しかしバラされて立場上不利なのは、大人である彼女の方。

並々ならないフエチを持ってしまったぼくと、佐藤保健医。お互い自分の欲求に忠実だからこそ、根拠はないが秘密をばらすことはないと確信できる。

あの女の嘘を言つて生徒を惑わす行為は、たいへん遺憾であるが。

思考が逸れていた時、ふいに手袋をしていない手に温もりを感じた。

驚いて顔をあげれば、至近距離に鈴美がいる。柔らかい女の手の感触は、今のぼくに毒。思わず彼女の手を振り払ってしまった。

「…………ツ、な、何だ」

「吉良くん手袋してないし、寒いと思ったから…………でも、ごめん。嫌だったよね」

「いや、嫌じゃない…………けど……………悪かった」

「じゃあ、握ってもいい？」

「それ、は…」

何か今日の彼女は変だ。普段は冗談を言えば顔を真っ赤にする、からかい甲斐のある後輩であるというのに、妙に違和感を感じる。

それが距離感の違いだと思いつけるのに、また手を握られるまで気付かなかった。

「れ、鈴美、手…………」

「今日は本当に寒いね」

「無理やり感…………が、あるぞ」

「そうかな？」

何も考えないように意識するだけで精一杯で、いつものように話せない。

手の熱を感じるほど、頭の中がバカになっていく。さながら餌を前にして、飼い主に“伏せ”を強要されている犬だ。

学校生活の中、好みの手を前にして耐えているぼくに誰か、綺麗な手をくれ。

「…吉影くん」

「うん」

「好きです」

「うん」

……………ん？

何か、欲を耐え過ぎて、重要な言葉を聞き逃した気がする。

あとさらつと普段あまり呼ばれない名前で呼ばれた気もする。

「もう一回いいかい？」と聞こうとして、相手の顔が泣きそうになっていたためさらに驚く。

右から左へ受け流してはいけない内容を鈴美は話した。思い出せば、一瞬過去に学校開催の陸上記録大会で、『よしよしよし影くん』と誤字られて呼ばれたことを思い出したが、リフレインすべきは彼女の言葉だ。

———
すきです

「そうだ、「すきです」と言った。……すきです？……すき焼きです？」

「鈴美、すき焼きおごって欲し」

「……っ」

この吉良吉影、完全に選ぶ言葉の間違えたみたいだ。しかし間違えたからといって、ペナルティとして「よしよしよし影」とは呼んでくれるな。殺意が湧く。

鈴美は泣きそうから、泣いてしまった。彼女は人の金で食う焼肉を食べたいわけじゃない。いや、普通に考えていきなりそんなこと言うわけないだろ。

「だったら何だ、脳内変換の仕方が悪かったのか？「すきです」の意味をもう一度考えろ、すき焼きじゃないなら、「すき」は好……」

好きです。

「……君は、ぼくのこと好き、だったのか？」

「……そうだよっ、そう……言ったじゃん……バカあ……!!」

彼女は泣きながら、力加減なしに人の肩を何度も叩いてきた。

感じる痛みよりも今は何故か、泣かせてしまったことに居た堪れなさを覚える。

「勇気出した私が、ばかみたいじゃん……」

「……ごめん」

「一世一代の告白に、「すき焼き」って……」

「それは本気ですまない」

「………ばか」

「……ごめんよ、鈴美」

また手を握ろうとしたのか伸ばされた手を見ないようにして、抱きしめてやる。

女子に好意を向けられたことは何度もあるが、今までその心中を理解できず、また恋

人の必要性も感じず断ってきた。

ぼくは今彼女に告白されて何を感じたのだろうか。「普通」ならどう思うのか。

見目の可愛い少女に告白されて、「普通」の男子だったらぼくが手を見た時のように心

臓を掴まれるのだろうか。

手以外考えられなくなるように、その子以外考えられなくなるのだろうか。

——ぼくは一般にいう「恋」を、理解できない。

何故理解できないのか。まるでその感情を感じる部分だけ綺麗に切り取られてしまっているようだ。

何と言えはいいのだろう。いつそぼくの秘密を打ち明けてしまおうか。

…いや、ダメだ。自分が異常と理解できている上ですべき行動ではない。

「ぼくはね、君のことを……なんていうのかな、妹のように感じていると思う」

嘘は言っていない。二つ下の子供で、妹に接するように最初は接していた。

それから学校という立場において、先輩後輩として接してきた。

彼女の目を見ながら、声を努めて優しいものにする。

「ぼく自身、君をどう思っているのかわからないし、恋愛的な意味で好きかどうかもわからない。君が覚悟を決めた言葉に対して、どう返していいのかも…悩んでるよ」

「……………」

「ただね、ずっと付き合いがあるからこそ感じることもある。君が泣いている姿を見るのは、辛い」

「……………吉良、く……」

「鈴美は笑っている方が、似合っている」

「……かわいいじゃ、ないんだ」

「今は真面目に答えているからね」

「ふーん……」

彼女は落ち着いたのか涙を拭って、こちらを見上げてきた。

少し腫れぼったくなつた顔で、視線をガン合わせである。昔から覚悟が決まったら揺るがないところがあるが、こちらの気持ちももう少し慮つてくれないだろうか。

「それで、答えは」

「……言わなきゃダメかな？」

「言わなかつたら、あなたがいかに薄情者つてことを、学校で言い広めてやります」

「それは……怖いな」

鈴美だつたら本当にはしないだろう。恐らく抱えて一頻り落ち込んで、立ち直つたらケロッと普段のように接してくる。

——ああ、そうか。彼女の性格がある程度わかるほど、ぼくらは出会つてから長いのか。

「わからない。……でも、わかるかもしれない」

もし付き合ったらぼくは彼女の手ではなく、鈴美自身を好きになれるのだろうか。

自分の欠落している部分を見つけ出せたら、ぼくは「普通」になれるのかな。

「付き合ってみても……いいですか?」

「…何、その言い方」

「付き合ってみたいです?」

「……」

「つ、付き合ってください」

「いいでしょう」

何故かぼくが告白した流れになっているのが不本意だが、まあいいか。

これがぼくの転機となるかは、わからない。少なくともいつかバレることを見越して親に事情を話さねばならないため、目先の平穩は崩れるとは思う。

しかし、本当に自分の幸福を望むためには必要な過程だ。

そこまで考えて、客観的に見た時この付き合いを一つの手段として捉えている自分に
気付き、虚しさのようなものと頭の痛みを覚えた。

7話 男偏と女偏と男偏

彼女を作るといふ行為に、父は否定的ではない。

ぼくが小学校時代、もつと言え、その前から異性との付き合いを控えてきたのは、母の視線があつたから。

母が過去に口に出して言ったことはないが、ぼくが異性といふことを良しとしない。その心中はぼくにはわからないし、わかりたくもない。

ただ初めは確かに「息子」に対して向ける感情だつたはずだ。しかし、今は違う。

鈴美を送り帰ってきた息子を心配する母に、ぼくは「恋人ができた」と告げた。

母の返事は意外にも「あら、そうなのね」と、穏やかなものだった。

その時、今まで自分が考え過ぎていたのかと思つた。

しかし意図的に逸らしていた母の顔に視線を向ければ、目が笑っていないかつた。その視線は鈴美がぼくに向けていたのものと似ていて、それ以上にドス黒い何かできていた。

その日の夕食は両親の前で表情をつくろい無理をして食べ、夜中に食後からマトモに

働かない胃が不調を来して、嘔吐した。

中身がなくなっても続く吐き気は、一種の拷問のように感じられた。

??????

図書館で調べてから、「少年K」に関わりのある警察官について、後日アクションを起こそうと考えていた。

ただ多少は良くなったものの、連日の体の不調が思考を鈍らせる。表面を作るのは慣れているので、疑問に思われることは早々ない。

しかし鈴美と付き合ってから、母以外に他にも視線を感じるようになった。時にその視線は悪意を交えて、我が身に降りかかる。

「吉良くうーん、ちよつといいかなあ」

「…何ですか？」

あの時——彼女と付き合うことを決めたぼくは、手の欲望と「普通」への望みを前に、失念していた。

鈴美は容姿も性格（多少難はあるが）も良く、学年を問わず彼女を狙う輩がいた、というのを。

“彼氏”という座をモブのネクラに奪われた奴らにとつて、ぼくは相当気に食わないよ、で、絡まれることが増えた。

またこの学校の不良率が異様に高いことも、忘れてはならなかった。

彼女は言いふらしてはいない。しかし学生の中には、恋愛ダウジングセンサーを身に付けている奴がいる。

距離の近くなった二人に、必然と勤づいたのだろう。

隠しておきたい気持ちはあつたが、コソコソするのはずっと好きだったらしい彼女に悪いと、周囲の目を気にしないよう伝えてある。

絡まれるのは大抵人の目がない時だ。

前もつて荒事を避けることには慣れていたので、遭遇率は低い。数えて今回で六回目。

塾のため部活を休み帰ろうとした駐輪場で、突然茂みから出てくるゲームのモンス

ターよろしく、襟足三人衆が現れた。

しかも初めての高等部連中。そのまま囲まれた状態で、テンプレの体育館裏へ密猟されたぼく。

言葉は選び方次第で武器になる。一回目から五回目は、それで穩便に済ませた。

しかし今日は体調の悪さが祟って、保健室で嘔吐もしている。脳が上手く回らない。

あの空気を読めない保健医が気を遣い、寝ようとするぼくの手を黙って握っていたほどだ。

…いや、にぎにぎしていた。生殺しである。

「キミみたいなネクラ優等生くんがさ、杉本ちゃんと付き合つてるとかマジなワケ？」

「純情そうに見えて意外にビッチって噂あつたじゃん。先輩が抱いたって自慢してたし、俺ワンチャンイけると思ってたんだぜ？」

「いや、オメエの顔じゃ無理だつて。おら、カバン寄越せよメガネくーん」

いつもは向こうが話す前に言葉で負かせているが、こうして聞いてみると想像以上にあることないこと噂されているらしい。

「…っ」

喉の渴きと胃が痙攣したような動きに、口元を抑える。落ち着け、こんなところで

バースしたらそれこそ格好のネタにされる。

まったく……次からは癪だが、体調の悪い時は父に迎えに来てもらおう。

「財布は……うおっ！教科書ちゃんと持ち帰ってるよ、さっすが優等生くんだわー…」

「ハハッ、おい見てみるよ、コイツ泣きそうだぜ！」

「おい、一人一発ずつ腹に入れようぜ」

暴力は「普通」の対極にあるから好かない。無論ぼくの平穏な生活を邪魔するというのなら、黙らせるために一つの手段として利用したことはある。

だがあくまでやむなしの手段で、平和的に解決するならそれに越したことはない。

「ごめんなさい……もう、やめてください……」

強者である奴らが弱者であるほくにこれでやめるなら、巻き取られた金はくれてやろう。

しかしやめないと言うのなら、仕方がない。

「ギャツハハ!!聞いたかよ、さっきの震えた声!!」

「あークソダツサ、本当に彼氏なのかよ？コイツが自分で出まかせ言ってるじゃねエの」

「はーい、ボクちゃん一発いつきまーす」

男の一人が宣言通り、腹めがけて殴ってくる。場合によっては暴力も受けるが、今はムリだ。

相手の拳を掴み、驚いている隙に拳を眼球に向けて、殴りつける。

人間は普段視覚に頼って生きているため、そこに痛みを与えると途端に戦意を失う。失明しないよう加減はしているから大丈夫だろう。

「ぎいつ…！あああああ、め、目がツツ！！！」

「テメエェのクソガキ！！！」

「死ねツ、ポケカスがああ！！！」

目を抑えて転げ回る男は滑稽で、清々しい気分になる。

続けざまに殴って来た二人は後ろに避けてから懐に入り、一人は腹に膝で蹴りつけ、もう一人は脛を蹴って倒れたところを、派手な髪をつかんで地面に数度ぶつける。

「がっ、あ、」

「フフ…」

サデイストの気でもあったのか。血を流して醜態を晒す連中を見ていたら、背筋に一瞬、痺れが走った。

妙な多幸福感に、思わず口角が上がる。

人間の血は赤く生温い。その熱が妙に、肌に焼き付いた。もつとこの熱を感じていた

い。

だが加減が利かなくなりそうなので、一旦頭をつかんでいた手を離した。

「ぼくの不良のイメージは鉄パイプで殴ったりとか、そんなイメージだったんだが…普通はこんな感じなんだね」

「ヒッ」

「大丈夫かい？…ああ、鼻血……出ているね。ぼくがティッシュを持っていてから、あげるよ」

「う、うつ、あ…」

見たところ目が充血している人間は恐怖で動けなくなっており、腹を蹴った人間はダングムシのように蹲っている。

鼻血を垂らしている人間は、無様にも失禁していた。

「ああ…最悪だ」

地面に落ちたカバンが汚れてしまった。幸い、中身はぶちまけられていなかったののでよしとしよう。

コイツは洗うから明日はリュックだ、仕方ないね。

ティッシュで男の鼻血を拭ってやり、シャツのボタンが掛け間違えていることにも気付いて、無性に腹が立ちながら直す。

汚れた手をよく洗ってから帰ろうと、立ち上がって視線を下に向けた時、自分の制服にも血が付いていることに気づいた。

「も、もう、ゆるひ、ゆるひて……」

「……………」

「おねが、おねがいします、もう関わりませんから、だから……」

血で顔中を汚した男が空気を求める魚のような顔をして、足にしがみついてくる。ジャケツトだけじゃあなく、スラックスにまで血が付いた。

「ぎっ、いっ」

下に転がっていた頭を足で踏みつけじつくりと、ゆつくりと、脳の軋みを体感させてやる。

「死」の恐怖に染まった人間の顔は、感慨深いものがある。何と言えはいいのだろうか、壊しがいがある。

「……………君たち知ってるとは思うけど、こここの中等部の制服は紺の高等部と違って、緑の色が強いんだよね。だからシミが一度付くと目立つ上に落ちにくいし、血つてもシミと同じで落ちにくい。明日も学校があるつてのに、ぼくは血で汚れた制服を着て行かなくちゃいけないのか？かといつて、朝から一人だけ体操着つても目立つんだよ。すご

く、困ったなあ。本当にすごく困った。おまけに君がスラックスに触れたものだから、さらに汚れてしまった」

「……あ、あ……あ」

「よかつたね、ここは土だ。頭を打ち付けても、コンクリートよりは痛くない」

「や、やだ、やめ……」

「う、あああああああ」

逃げた目を負傷している男に向かって、拾った石を投げる。とつきの運動神経であらぬ方向に行ったが、男の傍をすり抜けて、フェンスにぶち当たった。

男はそれを見て、力を無くしたようにへたり込む。ボールの音など部活動の体育館の騒音に混じって、悲鳴は虚しくもかき消された。

「二人ずつ、順番だ。もしこの事を他人に言ったらどうなるか、わかってるよね?…じゃあ始めようか、すぐに終わるさ」

そも教師に告げられたところで不良のヤツらと、普段真面目に取り組んでいるばかりでは、どちらの言い分を信じるかなど目に見えている。

逆にケガから仲間内で暴力を行ったのだと疑われ、停学にでもなるだけだ。

連中をしつけし終えたのは20分後で、建物に顔をぶつけ鼻血を出してから手を洗っている。

黽つている際に人の視線は感じなかったもので、見られていた、ということもあるまい。そもそもここは学校内でも人目が付きにくい。それゆえの、校舎裏なんだが。

鼻血を抑えているように、すれ違うほとんどの人は気付かずスルーしていく。そして帰って転んだ旨を伝えれば、いつものように心配された。

その後、噂で高等部の数名が自主退学したらしいと聞いたが、ぼくには関係のない話だった。

ましてや鈴美が知ることのない話で、ぼくが絡まれていることも彼女は知らない話。

時間が経つにつれて絡まれる回数も減り、冬休みを挟んで一ヶ月も経てば、視線も徐々に減っていった。

「君のかわいさも中々罪だね、鈴美」

半ば本気で言った昼食時のぼくの発言に、「冗談にしてもひどい！」と、彼女は顔を

真つ赤にして殴つてきた。

自分も何か変わったかと思つたが、相変わらず気付けば彼女の手を見てしまうため、
ぼくも中々罪深いと思つたのは余談である。

8話 二色の境界線

冬休み期間、いつもは染めている髪を放置した。

使っている染料材は髪への刺激が少ない代わりに、デメリットとして色落ちしやすい。
い。

放っておけば一ヶ月ほどで元の色に戻る。

そして一週間ほど放置した現在。色は薄まり、茶髪に近いこげ茶になっている。

鈴美のピンクがかかった茶髪はまだわかるが、保健医の亜麻色の髪はミステリーだ。

不良は普段見慣れている。あとは学生時代ヤンチャだったらしい鈴美の父親から、「スカマン」と呼ばれる裾が細く絞り込んであるズボンを拝借し、おまけにマスクを付ければ、ツツパリ野郎が完成した。メガネは邪魔なので外してある。

鈴美に何に使うのか聞かれたが、そこは言葉を濁した。

彼女はよくが何か悪いことに使うと察したのか、口止め料として要求されたのがこの格好の写真である。人の顔を見てニヤニヤしていたのは気持ちわ…少々引いた。

最近休日に家を出る理由として、自学目的や習い事以外に、「彼女」の件を持ち出すようになった。

男友だちなら家で遊ぶよう言われるが、彼女となると母は何も言っていない。ただこちらを見る目が気持ち悪くなる。

あまり方法として使いたくないが、使い勝手はいいため時折利用した。

朝から吐き気を覚えながらも家を出て、途中のコンビニで着替えてから交番の前を通る。

背を曲げてポケットに手を突っ込む歩き方は、姿勢を悪くしそうで二度としたくないものだ。

「おうおう、こんな真つ昼間から、そんな辛気臭い面^{ツラ}してどうしたんだ」

「……………別に」

吐き気と不良姿の嫌悪感のせいで、今のぼくは側から見れば近寄りがたい顔つきだろう。

中年ほどのガタイのいい警察官が、交番から出てきて人の頭に手を置いてくる。

中にいるもう一人の警官は机で作業をしながら、「やれやれまたか」といった様子で、ガタイのいい警官を見ていた。

「まったく最近の不良ときたら、一昔前と比べて随分派手に暴れやがる。若さつてのはいいもんだが、他所様に迷惑をかけるもんじゃあないぜ」

「離せオツサン」

「おっさ……俺は確かにお前より年上の娘がいるが、まだおっさん呼ばわりされるほど老いちゃおらんわ!」

「東方さん、子どもにムキにならないで。というか早く巡回に行つてきてください」

デスクにいる警官に指摘され、「東方」と呼ばれた警官は渋々と、交番の傍の駐車場から自転車を取り出した。

ぼくの目当ての警官はどちらなのか。最悪すでに少年Kを捕まえた警察官が辞めている可能性もある。

「おい、若造」

「……何?」

立ち止まっているぼくに警官は豪快に笑って背を叩き、巡回に付いてこいと言う。

男の内心を計りそこねていると、先ほどの笑みは一転して、柔らかいもの変わった。

「何か悩みがあるなら、俺が聞いてやるぞ?」

その言葉が、妙に胸に刺さった。冷えた氷が太陽の下へ放り出されて、溶かされていくような。そんな感覚を覚える。

この男がぼくの苦手なタイプであると同時に、少年Kと関わりがある人間だと、妙な確信を持った。

??????

東方良平は、かれこれ20年以上交番に勤め、杜王町の平穏を守っている。

娘も今年大学生になり、あと数年もすれば社会人となる。

親の役目もそろそろ終わるといふ寂しさの傍ら、今日も一日街の平和を守るために働いていた。

「片桐がまた娑婆に出るのか……」

彼は近々少年院を出る、かつて捕まえた「少年K」——片桐安十郎について、思考を巡らせていた。

12歳で強姦と強盗という非道をなした子どもは、一度少年院へ送られた。

そして更生後、また犯罪を犯し少年院送りになり、春ごろ俗世に戻ってくる。

更生の見られない少年……否、青年に、良平が感じるのはい抹の不安。

「若者が道を外さんようにするのが、大人の役目だが……」

片桐は導火線が点いた爆弾だ。もう止まることはないと感じている。

ゆえに警官として来るべき時は、命を賭して町の人々を守る所存だ。

そんなある日、良平は一人の少年を見つけた。

格好こそこちらの仕事を増やす不良であったため、軽く声をかける程度に止めようと考えた。

しかし少年の目を見て、一瞬背筋に悪寒が走った。

——似ている。

彼は似た経験を、少年Kを初めて見た時に体験した。

今でこそ自分の快楽を満たすだけの腐った目をしているが、最初見た時はヘドロよりもドス黒い目をしていた。

人生というものを諦めていて、人間というものを嫌っていて、すべてを憎んでいて。溜まりに溜まったそのヘドロは、あらゆるものをぶち壊す狂気を秘めていた。

到底少年が浮かべていい目ではない。

その子供の虐待の過去を知った良平は、警官ではなく娘を持つ一人の親として、やるせなさを抱いた。

茶髪の少年は気分が優れない様子だった。不穏を感じた良平は少年に関わることを決め、半ば強引に見回りへと連れ出したのである。

少年は素っ気ない態度が多かったが、次第に口数が増える。

話は良平の娘の話から少年の好き嫌いの話になり、その悩みへと移っていく。

「…悩み聞いてくれるって言ったよね、あんた」

「ああ、俺に話せるなら、聞くぞ」

少年はポツポツと、「親の愛情が重く生きづらい」と、語った。

その中身は、今まで不良たちから聞いてきた内容と同レベルのもの。

中には虐待を受けてグレた子どももいるので、少し拍子抜けしたくらいだ。

「愛情……虐待とかは、受けてないんだな？」

「受けてない」

虐待を受けている場合は、本人が隠したがる傾向がある。しかし他人に助けを求める心理はあるので、別の理由を付けることも多い。

少年もその類かもしれないと、腕や腹を許可を取って見たが、特に何も無い。

むしろ傷一つない、綺麗すぎる印象に、多少の気味の悪さを覚える。

「まあ、若いうちは多少グレちまうのも、仕方がないのかもしれない。俺も警察官を目指そうと思うまでは、ヤンチャだったからな」

「だからその歳で大学生の娘がいるのか」

「ハハ：俺も若かったってことだ。嫁には逃げられて、それでも娘と二人三脚でやってきたよ」

「そう……」

少年は何か続けようとして口を閉じ、真っ直ぐに良平を見据える。

「なあ、おれみたいな奴は、どうやって生きればいい？ どうやったら真っ当に、普通に生きられる？」

「そうさなあ……」

普通に生きるとはいつても、例えば良平自身を例に挙げればいいのか、同僚の警察を例に出せばよいのか悩む。

極論働いて飯を食べて寝れば、それが真っ当であると言える。犯罪に手を染める奴らをよく見てきたからこそ、普通の尺度を決めるのは難しかった。

「ひとまず悪さをしないで生きるんだったら、今少しぐらいグレてても、俺はいいと思うぜ」

「……難しい」

「重苦しく考えることはねえよ。お前さん、かなり考え込んでしまうタイプだな？」

「………」

「どうした？」

少年は立ち止まって、じつと何かを見ている。

良平が視線を同じ場所に向けると、高校生らしき女子が二人、並んで歩いていた。

「なんだ、女のケツでも見てんのか？」

「……いや、何でもない」

「そういう年頃なのはわかるがなあ、女つてのは結構視線に敏感なんだ。気をつけた方

がいい」

「………」

今度は完全にそっぽを向いてしまった少年に、良平は仕方ないと、コンビニの肉まんを奢った。

少年は湯気の出ているそれを凝視し、相手に視線を向ける。

「冷めないうちに食っちゃいな」

「………いただき、ます」

おずおずと少年は肉まんを口にし、目を丸くして感嘆の声を漏らす。

何ともあどけない表情をした少年に、良平は微かに笑みを浮かべた。

「美味いか？」

「……うん」

「デヒヒヒくそうだろそうだろ、よく娘も子どもの頃買ってやったら喜んでたもんだ」

「……貴方は、いい親だね」

少年の言葉に良平は目を見開き、自転車を押しながら静かに空を仰ぎ見た。

「……なあ、お前さんよ、もう少し時間空いてるか？」

「大丈夫だよ、あまり家にはいたくないし」

「……そうか」

二人はゆっくりと歩き始めた。

子供を虐げる理由は何も暴力だけではない。

そんな当たり前のことに気付けなかった自身に良平は、一人歯噛みする。

「まあ軽く聞いてくれればいい、お前さんに似た子どもの話だ——」

空からはほろほると、雪が落ち始めていた。

???????

吉良が東方から解放されたのは、時刻も5時を過ぎた頃。

その間何があったかというところ、「少年K」の話について聞いたたり、娘の自慢話を聞いたたり、巡回中に乱闘騒ぎになっている不良たちを抑える手伝いをさせられたり、娘の自慢話を聞かされた。

圧倒的な娘の自慢話率である。

それから別れてコンビニで服を着替え、帰りに頼まれていたおつかいを思い出し、スーパーで卵を購入した。

帰りは6時過ぎになるだろう。伝えておいた帰宅時刻よりもかなり遅くなってしまうことに、気が憂鬱になった。

またあの目の下に我が身が晒されるのかと思うと、昼に食べた肉まんが、胃から迫り上がってくる気がする。

「クソツ、せつかく落ち着いていたのに……」

朝から吐き気を感じていたが、東方という警官と接している間に、自然とその気持ち悪さは収まっていた。

少年にとってあの警官は初めてと喋っているほど、マトモな親に感じられた。

一方で鈴美の両親とは、少し話した程度しか付き合っていない。

いや、自身の親と比べてしまうからこそ、吉良自身が意図的に避けている。

「少年K……名を「片桐安十郎」か」

東方は真面目な警官であるが口が滑りやすく、何度か少年Kの本名を出してしまっていた。

吉良が少年Kについて探っていたのは知らないため、仕方ないとも言える。

相手の心につけ込みやすいよう、わざわざ不良の格好をしたかいたがあった。

片桐には母親がおらず、杜王町で父親と二人暮らしだったらしい。

父親は普段から連れ込んだ女から金をせびり、働きもせず酒に溺れる毎日。

少年だった片桐は毎日のように、男から暴力を受けていたそうだ。

東方は少年の吉良に配慮しボカしていたが、暴力の中に性的な意図があったことも話の中で読み取れた。

新聞の内容で初犯時に強盗に入った家が男のもので、そこに「強姦」というワードがあったことが常々疑問だったが、片桐少年の過去をつかんだことでパズルがそろった。

人生には吉良や保健医のように、手フエチや眼球フエチがいるのだ。バイという奴もいる。

そんなマイノリティーな連中の生き方を模索していた彼だが、結局は答えを見出せず
にいた。

警官は最後「もし辛い時は、いつでも大人に助けを求めていい」と言っていた。

——ぼくは別に虐待を受けてるわけじゃない、親の愛情が重いだけだ。

両親は少し他の親と違うだけで、ごく普通の人間だ。

母親は息子に対して少し変質した愛情を抱いているだけであり、父親もそんな母に口を出さないだけ。

普通の親なんだ、だから自分も普通の子どもなのだ。

自分に言い聞かせるように小さく呟く彼の手は、白くなるほど握られていた。

「あれ、吉良くん？」

のろのろと彼がスーパーの駐車場を歩いてた時、後ろから声をかけられた。

振り返るとそこにいたのは、スーパーの袋を両手に提げた佐藤保健医。

普段は白衣だが、今日はベージュのコートを羽織り、下は黒いジャージと素足にサンダルを身につけている。何ともものぐさな格好である。

「…先生」

「メガネを取ってるし髪も上がっているから、一瞬誰かと思っちゃった。体調悪そうだけど、大丈夫？家まで送ってあげようか？」

「……………大丈夫です」

「あはは、そんなフラフラで言われてもにやあ」

抵抗らしき抵抗ができない吉良の背を押し、保健医は自身の黒い車に乗せた。

彼女の袋は荷台に置き、彼を助手席に乗せる。

「あらあら、そんなに強く握っちゃって」

保健医はエンジンを入れつつ、卵の入った袋を握りしめている少年の手を見つめた。

白くなっている手に触れれば、雪でも触ったかのように冷たい。

「風邪、つてわけじゃないか。冬休み前からあんまり食べられていなかったみたいだけ

ど……」

「………るな」

「え？」

「ぼくに、さわるな」

その言葉に彼女は一瞬目を見開き、愛おしげに微笑むと、手を絡ませるように距離を詰める。

「そりゃあ学校が休みで一週間以上経てば、溜まってきちやうよね」

「犯すぞ」

「ふふ、いいわよ。私の家ここから近いから、いらっしやいな」

「…冗談です、自分で歩いて帰ります」

彼女はシートベルトを外し車から降りようとした少年の手を掴み、引き寄せた。

吉良がその行動に虚を突かれている隙に、お互いの距離が縮まり、呼吸が間近になる。

キスを、された——。

そう彼が思った時には、すでに離れていた距離。少年は顔を真っ赤にするでもなく、眉間に皺を寄せて口元を拭う。

「私とのキスははじめてだったよね、吉良くん」

「……生徒の初体験の次はファーストキスまで奪うなんて、とんだアバズレ女ですね」

「あら、私のはじめてだったの？ てつきり杉本さんと、もうしたかと思つたのに」

「やつぱりぼくと鈴美が付き合つたのは、知つてたんですか。彼女とは手を繋いだままでですね。結構向こうは純情なんですよ」

「やつぱり——つてことは、少なからず私が二人のことを知つていいのか、気になつてたつてことね」

「……一応、あなたと利害関係はあるので」

「その感情は罪悪感から来るの？ それとも、別の感情？」

いつもと雰囲気の違う保健医に、吉良はたじろいだ。

細腕のどこにそんな力があるのが、握つてくる手の力は骨を軋ませる。

「ああ……そうね、君は恋愛感情がわからなかつたのよね。杉本さんと付き合つたのは、大方その感情を理解するための方法かしら？」

「……………」

「吉良くんらしいなあ、でも一つ君は見誤つている。「恋心」が何たるかを知らないまま、彼女と付き合うべきではなかつた。私の感情も知らないで……本当にひどい男の子ね」

「……おつしやつてる意味がわからないんですが」

彼にとって佐藤保健医との関係は、利害が一致しているが故の付き合いでしかない。それは本人が卒業する間までの関係になるだろうし、彼女が別の場所へ移った際は、彼は別の手となる女性を見つける。

ストレス発散の方法として便利だと彼女との付き合いで知ったため、新しい関係を築くのは確実だ。

「君は見目がいいからその気になれば、私の代わりはいくらでも見つかるでしょうね」

「それは先生にも当てはまるんじゃないですか？」

「ふふ、以前はそういう関係の男が何人かいたけど、今は君だけよ」

「……」

「んもう、そんなに嫌そうな顔しないでよ。きっと君の眼ほど美しい人間とは、そうそう出会えない」

白いしなやかな手が少年の両頬に触れる。

吉良がその手に恍惚とした表情を浮かべている間、彼女は快楽に浸る目に紅い舌を伸ばし、ねつとりと、舐め上げた。

呼吸を乱しつつ糸が引いた先の女の顔は、普通の男なら思わず息を呑んでしまうほど卑猥で、蠱惑的で。

保健医は彼の耳元で甘く囁く。

「私は君の眼が好き、でも君自身も好き。嫉妬する女は何を仕出かすか、わからないものよ」

吉良はしかし、白い手に頬ずりしながら見つめ返す。

「ぼくに鈴美と別れるとおっしゃりたいんですか？」

「本音を言うならそうね、別に私でも構わないでしょ？ 杉本さんと同じくあなたに好意を抱いているのだから、条件は同じだわ」

「ダメですね、だってあなたは普通じゃあない。ぼくは鈴美が普通の人間だったからこそ、了承したんだ。普通でないあなたといれば、今みたいに欲に溺れるだけの関係になる」

「あら、人間は快楽を享受する生き物でしょ？ なら、今の行為だって普通だわ」

また顔を近づけキスをした佐藤。吉良は顔を顰めたが、避けることはない。

荒波を立てないようにつつ、この状況を冷静に対処しようと鈍った頭を動かしている。

「吉良くんが付き合ってくれないのなら、君の性癖みんなに言っちゃおうかなあ」

「先生はよつぽど強制わいせつ罪に問われたいんですね」

「合意の上じゃない〜!」

「いくらでも言いようはあるので」

佐藤はあざとく頬を膨らまし下から目線で相手の目を見るが、無視される。

彼女はワントーン声を落とした。

「ならいいわ、私は誰よりも快樂に忠実になれる。私の欲のために君の周囲が壊れようとも、構わない」

「あなたはぼく以上に失うことになりませよ」

「失うものなんて……これ以上、ないわよ」

——吉良吉影、あなたは私と関わった時点で、己の欲望を知った時点で、墮ちているのよ。

暗として譲らない意思をみせた彼女に、吉良は小さくため息を吐く。

当初は秘密を言わないだろうと考えていたが、女の恋心を理解できないのが誤算となつた。

つゝの苛立ちと、溜まっていた手の欲望。母の目に対する気持ち悪さ。

すべてが脳をかき混ぜていく。無意識に片手に持っていた卵のパックを握り潰した。だがそのことにも気づかず、ゆっくりと視線は女の手に向かう。その時暖房のきいた車内の曇った窓ガラスから、一滴、雫が溢れた。

「邪魔だ」

この白い手は美しい。しかし手の持ち主が不必要であると感じた。

爪が「ギギ…ギ」と不快な音を立てて伸びていく。少年の手の変化を目に留めた保健医は、そこに意識を取られる。

「邪魔だ」

再度呟かれた刹那、爪の伸びる両手が細い首へと近付いていった。

吉良は身を竦ませた女の下半身に膝を乗せ体重をかけて、両手に力を込めていく。

その瞳孔は完全に開いており、本人の無意識の内に口角が上がっていた。

一瞬佐藤は腕をつかみ抵抗をみせたが、なぜか自分の首を絞めている相手の両頬に触れる。

「きれい、な…め」

「……………ツ！」

その言葉と同時に、激しくぶつかる音がした。我に返った少年が自分の行動に驚き身体を起こした拍子に、車の扉にぶつかったのだ。その衝撃で車内が大きく揺れる。

「——ゴホ、ゴホッ!!」

「……………あ」

深く咳き込む彼女の横で、吉良は顔を青くし、自分の両手を見つめながら小さく震え出す。

佐藤は喉を抑えながらその姿を見つめ、緩く笑んだ。少年は彼女の首を絞めたことにより、隠された自分の本性を垣間見た。

彼女は抑えきれない興奮のまま、少年の乱れた前髪を耳にかける。

「かわいそう、こんなに震えちゃって」

「ぼ、ぼくは……………ぼくは…」

「大丈夫よ。ほら、この跡があなたの欲望の表れよ。すぐくステキね」

「……………ぼくは…」

「ねっ、私の家にいらっしやいな」

「……………」

「私を、あつためて」

佐藤の言葉にゆっくりと吉良は顔を上げる。青白かった顔はさらに血の気が引いて死人のようだ。

何も喋らない少年を、彼女は熱を分け合うように抱きしめた。

「好きよ、吉良くん」

9話 安心してください、履いてませんよ！

妙に肌寒さを感じ目を開けると、視界に広がっていたのは見知らぬ部屋。

アパートらしき部屋は多少散らかっているものの、白でシンプルに統一されている。サイドテーブルのデジタル時計が表示するのは、『AM05:35』。日付は翌日になっていた。

「…何が、あつたん……………」

妙な寒さの正体がようやくわかった。この真冬にいくら毛布が掛かっていたとはいえ、下着一枚じゃそりゃあ寒い。

自分の服や荷物は床に散らばっていた。普段のぼくじゃ絶対にあり得ない。

「んにゃ…」

そんな間の抜けた声と共に、腰に柔らかく温かい感触がした。

下に視線を向けるとシーツに広がる亜麻色の髪が目に入り、布団でギリギリ見えないが、おそらく全裸の女の身体が見えた。人の腰に腕を回して抱きついている。

寝ぼけながら「んん、ニヤンちゆうだにゃん…」と曰う彼女の白い手に、身体の温度が上がる。

しかし普段はセーターのどつくりどつくりに隠れている首の跡あしを見て、一気に下がった体温。

「う……っ」

昨夜のことを思い出し、頭が無理やり揺らされた感覚に陥る。

自分の意思とは反対に湧き起こる吐き気に、壁に手をつきながらトイレを探った。

何とか床を汚す失態は避けつつ、胃の中身が完全になくなった状態で、しばし放心する。

そのまま床に座り込めば、下から熱が一気に奪われていった。

「結局……そうだ昨日は、保健医の家に連れられて……」

学校づてに電話で親には、「倒れていたので保護した」とか、そんな嘘八百なことを言っていた。強ち間違いではないのだが。

両親は迎えに来ようとしたようだが時間も遅かったため（普段は二人が既に寝ている時間だ）、押し通す形で翌日家まで送る算段を、ベッドの上のものぐさ姫は立てていた。

よくぼくの両親に意見を通せたものだ。保健医という地位も、押し通せた理由の一つだろう。

吐き気が落ち着いた後、口の酸味に気色悪さを覚え、水道へと向かった。

口をゆすいでいければ、背後に気配を感じて振り向いた。同時に肩に厚手の毛布をかけられる。

また首の跡を見て嘔吐きそうになり、咄嗟に逸らした視線。

「おはよー吉良くん」

「一生おやすみなさい、先生」

「やだなあ、朝から冬のフローリングのように冷たいんだから。愛を確かめ合った翌朝は、もっとこう……甘くならなくちゃ。女の子に嫌われちゃうよ?」

「人によるでしょう。というかあなたは、自分が女の子という年齢だと思いで?」

「まだサンタクローズを信じてるくらい純情よ」

「サンタは死にました」

「え……?」

なぜか本気でショックを受けている女を無視し、布団小僧になりながら冷蔵庫を探る。

意外と料理はするらしく、パックに詰めるなど、きちんと整頓されている。

そう言えば卵を見て、おつかいを失敗したことを思い出した。

牛乳は胃的に躊躇われ、麦茶を取ろうとした瞬間。背後から腕が伸び、目の前の冷蔵

庫が大きな音を立てて閉められる。

佐藤保健医は行為中でも見たことがないほど顔を真っ赤にして、ぼくの前に立ち冷蔵庫を隠した。

「…どうしたんですか、急に」

「いや、あの、えっと、あはは……」

「…もしかして他人に冷蔵庫の中を見られると、恥ずかしいタイプなんですか?」

「うう…だって「意外に料理してるんだなあ」とか、「嫁力高いんだ」結婚しよ」とか、思われちゃうじゃない」

「前者は思いましたが、後者はまったく思いつきませんでした」

ぼくだったら部屋を散らかす人間とは付き合えない。

障子の枠の些細な埃やシャンプーボトルの裏の滑りなど、親の仇レベルで絶対に許せない。

「とういかまず、全裸の人間に言われたくない」

「……あつ」

彼女は先以上に顔を赤くして、ぼくの装備を奪い布団女になった。おかげで一気に寒さが肌に突き刺さる。

イライラが勝り、「男の前でも平然と肌を晒してそんな商売女のくせに」だとか、口汚

く罵つてしまった。

こういう時彼女はマゾなのか知らないが、顔を紅くする。

「もう、しようがないなあ……じゃあ一緒にお布団に入る？」

「一緒に入りませんが、お風呂沸かしといてください。服も洗つといて欲しいですが無理なので、そのまま着て帰ります」

「仕方ないな、覗くので勘弁してあ・げ・る」

「……………」

睨むように見れば、向こうはわざとらしく怯える。子兔のように見えて、中身は蜂の巣を襲うラーテルのごとき女だ。

昨日のアレはすべて、ぼくでさえ知らなかった一面を見せるための演技だったのかと思ふ。

しかし、一瞬見せた怯えは本物だった。すぐにぼくの目を見て恍惚とした表情をみせたのが、変態の鑑だと思ふが。

その後、一回洗ったコップで麦茶を飲んでから、沸かしてもらった風呂に入った。

女の部屋に来たらドキドキするものだとクラス男子が言っていたが、甘酸っぱさの欠片も感じられない。むしろ汚れを発見する都度、嫌悪感が増す。

7時頃朝食になった時のぼくの顔はひどいものだったらしく、いつものとつくりを着た彼女は心配してきた。貴様のせいで不機嫌なんだ。

「汚い汚い、汚すぎる……」

「あ、あんまりそういうこと言わないでよ……」

「風呂の天井の換気扇も汚かった……」

「やだッ、どこまで見てるの!?!」

一先ずボールペンを拝借して、チラシの裏に『掃除しておけリスト』を書いて渡した。二度と来たくはないが次にもし掃除されていなかったら、強制的に掃除して捨ててやる。

一方用意された朝食はというと、食べられるか不安だったが、胃に優しく作られており半分は食べられた。

料理の腕前はいいんだ、掃除もできればカンペキだというのに。

フォークを置いたぼくを見て、彼女は柔らかに微笑む。

ふいに手を見ていたら箸の持ち方が気になり、席を立てて背後から持たせ直した。

「……吉良くんってまさか、私のお母さんだった?」

「気になると我慢ならない性分なんです、黙って直せ」

「その丁寧からの乱暴な感じも好きだなあ……」

この女は何をされても、すべて自分に都合よく変換してしまうのか。

「そう言えば結局、杉本さんとは別れてくれるの？」

「別れないと言ったはずだが？ あなたが眼球舐めをやめて普通になるなら、考えてあげますけどね」

「それは無理かにああ。吉良くんだって女性の手への執着をやめること、無理でしょう？」

「…そうですね」

ぼくのフェチは多分死ななきや治らない、一生つきまとう欲求だ。

伸びた爪を彼女に見せ、口角を上げる。昨日見ていたのだから、爪のことはもうわかってはいるはずだ。

「ぼくの爪、伸びるの早いですよ。女性の手への欲が抑え切れなくなった時に、特に伸びが早い。先生は自分の「爪」が伸びるのを止められる人間がいると思いますか？…ええ、無理ですよ。本当に、困ったものです」

「フフ」と、小さく息を立てて笑い声を漏らすと、息を呑む音がした。

黒い目がぼくを凝視している。人の目にまた欲情しているのかと思ったが、違うよう

だ。

「君は、ちよつと…怖いな」

「ぼくの目じやあなく?」

「目も冷たい色の中で光る虹彩がとても綺麗で悍ましくて、ステキよ。でも君は私の思った以上に怖いと…感じちやつたかな。そこがまた、好きなんだけど」

「……………」

首元を触つた彼女に思わず視線を逸らした。

昨日の感覚がリアルにフラッシュバックする。

指に食い込む肌の感触も、熱い体温も、掠れた呼吸も、全て背徳的で。

忌まわしい行為であるべきなのに、甘い痺れとなつて背筋を伝い、全身に広がる。

女の手に触れている時以上に、満たされたような感覚。緩む顔を隠すように、口元を覆う。

「…吉良くん、今私に「悪いことをした」って、思ってる?」

「ええ、思つて…ますよ。とても罪悪感で、いっぱいだ」

「本当に?」

「本当に。だってそうじゃなきゃ、ぼくは……普通じゃ、ないですから。あなたに罪悪感を覚えていて……それで、謝りたいと思ってる。罪の意識に苛まれてる」

「……吉良くん」

「だから……だから、ごめんなさい、ごめんな、さい……」

普通に囚われて、実際は罪悪感なんてこれっぽっちも感じていない自分に、途方もない気色悪さを覚える。

自分の感情に折り合いを付けることができず、冷静を努めていた脳は焼け焦げていった。

頭の異様な重さに保健医に向ける謝罪は途切れ途切れになる。

「大丈夫だよ」

「……」

抱きしめられて感じた熱は温かく、余計に頭の中が歪められる。

彼女は幼児にでも話しかけるように、優しい声で話した。

「別に、もういいよ。君が杉元さんを選んだのは事実なんだから。それに私たちは、もつと人間的な欲求で繋がっている。ふふ、セフレつてのに似てるのかしら」

「……」

「腹を見せ合えるからこそ、寄りかかるにはとても安心できるでしょう。あなたが求めてくれるなら、私はそれでいいわ。あなたのことが好きだから、いくらでも捧げられる」
「：アガペーのようなことを言う。神にでも：いや、この場合は聖母にでもなったつもりか？」

「私は神なんて柄じゃないよ。寧ろ悪魔ね、与える代わりに求めるの」

「悪魔より悪霊だろう。例えばリリスだ、サタンの嫁になった説がある」

「あら、いいわね。じゃ今日から佐藤・リリス・安希恵あきえにしようかしら」

彼女 リリスは無邪気に笑い、対価として肉体関係を求めてきた。

作動しない頭はゆっくり縦に動く。鈴美に対して罪悪感よりバレたら大変そうだと考えている頭が、浮世離れして感じられた。

そう言えばリリスはユダヤの伝承だと、男児を害すると信じられていた女性の悪霊だったと思い出した。

10話　くいしんぼうのチエケラ

母の接触が増え、鈴美と談笑しながら他愛のない日常を過ごし、佐藤保健医と互いの欲望を満たし合う。

月日はいつの間にか2年が過ぎ、高二になった。来年は受験を控えており、D学院の文学部にする予定である。今のところ「B」判定だが、調整しなければ現在の学力でも受かるだろう。

これは慢心ではない、正確に自分の能力を把握した上で述べている。
かといって難関大学を受ける気はない、エリートコースに興味はないのだ。

ぼくは「普通」に生きたいだけだ。

そう——普通に。

「大丈夫、吉影くん？」

「……ああ、少し眠いだけだ」

中等部と高等部の違いはあるものの、ぼくと鈴美は昼食時は二人で過ごしている。屋上は難しいため、使うのは外にある校舎横の目立たないベンチである。

箸の進みが遅いぼくに、彼女は自分の弁当の卵焼きを近づけてきた。

「はい、あーん」

「食べる気分じゃないんだが」

「むう、本当は私が手作りしてあげたいのに」

「……ハア、わかった、3分の1にしてくれたら食べるよ」

「……吉影くんはダイエツト中の女子か何かなの？」

そうは言いつつ、切り分けた卵焼きを口に押し込まれた。最初は他人の箸に抵抗感しかなかったが、流石に慣れる。

あと誰がダイエツト中の女子だ。

「だってその……親のストレスもあって、あんまり食べられなくなっちゃったでしょ？」
「君という時は割りかし食べられる方だよ」

「それはっ、嬉しいけど……栄養剤ばつかじや早死にするよ？裏で『リボヒタ栄養剤マスター吉良』って呼ばれてるの知らないの？」

「嘘だッ」

「嘘だよ」

「コイツ……さらつとぼくのことをからかっている。最近かなり性悪女になった。」

「…来年のそのまた来年になったら、吉影くんとは離ればなれになっちゃうのか」

「仕方ないだろう、二歳離れているんだ。君はまた同じ場所に通いそうだが」

「うーん、それなんだけどね。大学は違う場所にしようかな、って思ってるの」

「ホォー……ぼくと同じ学校がいいからって、勉強を頑張った君が？」

「あの時はまだ子どもだったの……なんかね、露伴ちゃんの面倒とか見てて、子どもって可愛いなって思うようになったの。だから保育士の資格が取れる大学にしようかなーって考えてる」

落ち葉が舞う少し肌寒い陽気の中、日の下に照らされた彼女は柔く笑んだ。

その表情が眩しく感じられ、つい顔を逸らす。

「それにたまたま露伴ちゃんの面倒見るの手伝ってもらった時、吉影くん、「子供の世話が上手だね」って言ってくれたでしょ」

「…それだと目指すきつかけが、ぼくの一言みたいじゃないか」

「そうよ、結構嬉しかったんだから」

彼女は顔を赤らめて、人の肩を叩く。そのまま腕を絡ませて、肩に頭を乗せてきた。

大人しく瞳を細めて、こちらを窺ってくる。

「私は次の誕生日が来たら、吉影くんは次の次が来たら、もう結婚できるんだよ」

「……な、中々ぶっ込んできたな」

「だってまだ、その……（ゴニヨゴニユ）…は、したことないでしょ」

「セックス？」

「ぼかしたのに声に出さないで!!」

茹で上がったタコのような顔になった彼女の一撃が、脇腹にヒットする。内臓はダメだ、内臓は。

「鈴美はぼくとしたいのかい？」

「それ、は……」

顔は相変わらずりんごのように赤いが、瞳の奥に潜んでいる「欲」が、桃色の中に浮かんだ。

ぼくよりはよっぽど欲に疎いものの、彼女も一人の快楽を享受する人間なのだと思いつく。不浄とは対極に位置しているはずの、彼女が。

「…そうだね、君が16歳になったらいいかな」

「……ほ、本当？」

「ああ、フフ、それまで我慢できるかい？」

意地悪く笑ってやれば、彼女は小さく唸ったのち頷く。その後上目遣いで催促された

ので、軽く唇に触れる。薄い唇は幸せそうに弧を描いた。

「吉影くんは…」

「何だい？」

「……ううん、何でもない」

彼女の瞳はどこか、寂しそうだった。

???????

『欲にきりなし、地獄に底なし』——ということわざがある。

人の欲には際限などなく、次から次へと増大していくという意味だ。

まるでそれは、互いの肉を食らい合っているほくらのようだ。ふと、そう思った。

「何考えてるの？」

「………」

休日の昼下がりに。保健医の部屋でぼくはぼんやりと、彼女が最近飼い始めたペットを眺めていた。

顔の部分は黄色っぽく、その他の部分は緑がかった色をしている。

「ふふ、なんか鳥を狙ってる猫みたい」

「……………」

「待つて待つて!!もしかして私のぴーちゃんを本気で殺ろうとしてるでしょ!!」

テーブルに置いてあつたハサミを手についたぼくに、下着姿のまま保健医は慌てて止めに入る。

「違うさ、飛べないようにするだけだ」

「そうやって頭をちよん切る気なんですよ、私知ってるんだから」

「風切羽を切る『クリツピング』つてあるだろ。自由に飛べないように、ペットシヨップや動物園の一部の鳥に行われてる方法だ。されてないみたいだから、ぼくがやろうと思つて」

「ダメです」

持ったハサミは没収された。

被害を免れた鳥はかごの中で首を左右に振りながら、木の上をうろうろしている。

飛べる「自由」がありながら閉じ込められているよりは、飛べる「自由」がなく閉じ

込められている方が、よっぽど幸せだろうに。

確か、このペットで何匹目だったか。

一人暮らしの彼女が寂しいからと、最初飼われたのは犬で、次はウサギ。あとはネズミもいた気がする。全部すでに死んだ。

彼女はどうも、ペットを飼うのが苦手らしい。掃除は綺麗にするようになったが。

「ポチは首輪が締まって。うーたんは寒さに耐えきれず。ハム次郎は脱走からの踏んづけ。これを全部意図的に、事故にみせかけたはどこ誰だったかしら？」

「ネズミを踏んづけたのはあなたじゃないですか」

「ケージを閉め忘れた」って言ったのは、吉良くんよね…？それにネズミじゃなくて、ハムスターだから。まさかスリッパの中にいるとは思わないじゃない」

「先生はさぞ重かっただろうね」

「…意地悪言うなら、今度イタズラしちゃうから」

生き物の命が消える瞬間は不思議なものだ。先ほどまで動いていた物体が、時間が経つにれて筋肉が硬直していくと共に、体温を失っていく。

その「熱」がどこへ行ってしまったのか、生物の「死」を体感すると感じる時がある。

一概に言えるのは、死体はこの女のように口喧しく喋らないということ。

静かな彼女はきつと、すごく可愛いに違いない。

「きーらーくん？」

「はい、何ですか」

「ハア……人の話聞いているようで、聞いてないわね」

保健医が何か宣っていたようだが、水中から外の音を聞くような感じで、意味が曖昧にしか捉えられない。

欲に溺れすぎて普通と異常の境界が曖昧になっている今、脳裏に過つたのは母胎と、へその緒で繋がった胎児のイメージ。

「あなたはもうすぐで30になるんだったか」

「女性に年齢を聞くななんて失礼よ。まあ、来年で30にはなるけど……私が望んだら、受け入れてくれるっていうの？」

「子ども、ね」

「ぼくも一応まだ子どもだ。普通ならあり得ない赤ん坊の頃からの記憶があっても、子ども。」

肉体差はあれど精神年齢がなぜか近いのは、付き合いの長くなつたこの女も感じている。

そう言えば子供らしいといえ、ネズミのアレがあった。

来年の春ごろにネズミの樂園ができる。杜王町からは遠いが、鈴美がねだっていたので、一度は行くべきか。

「もしできたら、ぼくが取り出そう」

「……本気にするけどいいの？」

「生産期になったら、包丁で……割いて、取り出して、子供は夢の国のネズミが好きだから、お祝いにそのオモチャをお腹に入れてあげないとね」

「うわぁ……気色悪」

結構いい案だと思ったが、珍しく彼女に本気で引かれた。

彼女の手の美しさと他の命を奪うあの幸福感を幻視して、重くなった身体をベッドに下ろす。

「……大丈夫？」

「……」

頭の中では何度も彼女の首を絞めた感触がリフレインされ、ついで動物たちの濁った無数の目が、頭の中を回る。

人間も動物もあつげなく死ぬし、殺すことができる。

爪の伸びるぼくの手を、彼女は優しく触った。

リス悪の手が、今は救いの手に見える。

「この感情は、どうやったらなくなるんだ」

「無理じゃないかな。諦めて、その感情を受け入れたらラクになれるのに」

「…嫌だ。受け入れたらぼくは、本当に異常者になる。誤魔化してきた努力も何もかも、水の泡だ」

「きつと人を殺したら、気持ちいいわよ」

「……………」

もしぼくが人を殺すなら、一番最初はこの女だろうと、不意にしなやかな手を見て思った。

ぼくの秘密を知る存在。ゆえに最初に手をかけ、次は鈴

「ぼくは……………何をツ、考えて……………!!」

無意識に嘔んでしまった爪からは血が溢れ出していた。

???????

高三にもなって親と寝ているのは、もはやどう考えてもおかしい。

だが母が「家族なのだから、一緒に寝るのは普通」と言うのだから、普通なんだ。

受験生ということで部活には偶にしに行かず、基本毎日家で勉強だ。

「人と一緒に勉強の質が落ちるでしょう？」と、これまた母が。

塾の代わりに家庭教師になり、完全に家に囚われている。大学も家から通うように言われている。

殆ど毎日母の気色の悪い目に晒され、過剰なスキンシップを受ける。

救いになる手が欲しい。ここに來て保健医との関係が思春期の性欲を発散させていたのだと、虚しくも感じた。

「吉影や、ちよつといいかい？」

母が買い物に行っている間、勉強に使っている部屋に入ってきたのは父。

「どうしたの、父さん。何か頼みたいことでもあるの？」

「…いや、まあ、ちよつとな」

「?」

父がポケットから取り出したのは、数枚の紙。

それがネズミの描かれたチケットだとわかると、思わず目を見開く。

「お前も頑張つとるじゃろう、もうすぐ夏休みになるんだし、一日くらい友人と楽しんできてもバチは当たらんと思うてな」

「……父さんは、いいのかい?」

「お前のことだ、ワシや母さんで行つても自由に羽を伸ばせんじやろう」

「父さん……」

父はわざとらしく咳払いをして、顔を背ける。

「まあ、友人が難しければ、彼女でもいいと思うがの。ワシは一応男友だち前提で用意したから、母さんには「彼女と」なんて言わないぞい」

「親父……」

二枚だときつと母の目が厳しくなる。場合によっては「家族で行きましょう」となる。

だから複数枚用意し、「男友だち」と付け足して用意した。父は妻に従順で嘘を吐かないため、母は信じ込む。

恐らく人生初の父の粹な計らいに、かつてあの警官に頭を撫でられた時のような、温かさを感じた。

どんな表情をしていいかわからないぼくに、父は何故か涙ぐんでいた。怖。

「う、うう…吉影がワシを「父さん」じゃなく、「親父」と初めて呼んでくれたわい…！」
「いや、そんなことで泣かれても…！」

「今日は赤飯じゃ〜!!」

「と、父さん…！」

結局本当に夕飯は赤飯になった。ついでにネズミーの件も無事通つたのは、幸いだつた。

翌日、手元にある四枚のチケツトを、手持ち無沙汰に見つめる。

指定日は夏休みと重なっているので、早めに人を選ばねばならない。ぼくと鈴美は確定で、残りは二人分。

父の協力もあり両親の見送りは家までなので、共に来る人物についてはバレない。

当日は朝早くに出て、電車と新幹線を乗り継ぎ向かう予定だ。

「じゃあ露伴ちゃんを連れて行くようよ！」

「言うと思った」

鈴美に相談したところ、案の定あの小僧が選ばれた。薄々予想していたので、まあい

いだらう。

残り一人——考えていたら、彼女が保健医はどうかと尋ねてくる。なぜここであの女が出てくるんだ。

「だって吉影くん、しよつちゆう体調崩しては佐藤先生にお世話になってるじゃない。こういう時にお礼として誘うのもいいと思って」

「人選が謎すぎる……それにあの先生がいると、絶対に面倒なことになる」

「佐藤先生つて面倒見がいいから、きつと露伴ちゃんのも面倒も見てくれると思うし」

「さりげなく黒い一面を見せたな、君」

「そ、そういう意味で言ったんじゃないよ！もしいざって時に大人がいた方が、安心だろうと思ったの」

小僧を押し付けけるための生け贄じゃないのか。話の中一瞬鋭い視線を向けた彼女に違和感を覚えたが、何だろう。

……ああ、確かネズミーの翌日は彼女の誕生日だったか。

「何か一つ欲しいものがあるなら、買ってあげるよ」

「そういうことじゃないんだけど……まあくれるっていうなら、考えとく」

「……う？、そうかい」

結局彼女の真意はわからないまま時間は過ぎて、ネズミー当日になった。

電車から乗り換え新幹線に乗り、通路を挟んだ向かいで年甲斐もなくはしゃぐ三十路間近と、かわいらしくテンションの上がつている彼女。

そして左で黙々と絵を描いている少年を見ながら、小さくため息を吐いた。

「というか君、上手すぎないかその絵」

「フン、あたりまえだ」

「手持ち無沙汰でね、見てもいいかい？」

「ぼくの絵が見たいの？ああもちろん——だがことわる」

「……………」

殴ってやりたかったが抑えた。このガキ、年々生意気度が上がっている気がする。

11話 中身がはみ出たクロワッサン

夢の国に来た一行は、自然と吉良と鈴美、そして露伴と佐藤に別れていた。

鈴美に手を引かれてアトラクションを回っている吉良は、すでに死にかけている。

暑さと彼女の上がったテンションに、付いていけないのだ。

一方露伴は乗り物には乗らず、ひたすら人間や景色をスケッチしている。一日で全ページが埋まりそうだと、ふと佐藤は思った。

「岸边くんは乗り物に乗らなくていいの？」

「ぼくはうわさのネズミの国の中がどうなっているか、ちよーきにきたんだ」

「……なんか、変わってるね。クレープ食べる？」

「たべる！」

食欲は相応に子どものような。彼女は4つ分買い、一つを露伴に渡す。

そして帰ってきた二人にも渡したが、吉良の方は首を横に振った。残された一つは、鈴美の口の中へ吸い込まれていく。

「キミ太るよ……痛たたた！」

「何か、言った？吉影くん？」

「何もツ、何も言つてないから、脇腹をつねるな！」

気の取まらない鈴美は、付けていた猫耳カチューシャを彼の頭に付けた。そして写真を撮ると、満足げにカチューシャを戻す。

「ふふ、仲良さそうだね、あの二人」

「……………」

「んー？んー…ああ、そういうことねえ」

手を止めブスくれた表情の露伴に、佐藤は愉快げに口角を上げる。

中学生くらいであればからかいの一つでも言うのだが、相手はまだ子ども。ゆえに優しく肩を押すだけに留めて、鈴美を指差した。

「鈴美お姉ちゃんに、遠慮してるんでしょ？」

「……………べ、べつに、きょうみがないだけだし」

「一緒に回りたいものがあつたら、ちゃんと説いた方がいいよ。きつと彼女も岸边くんと一緒に回りたいって思ってるから」

「……………」

「さ、行つてらっしゃい」

露伴はベンチから降りておすおすと、二人の方向に歩いて行つた。

途中、談笑に気を取られ、子どもに気づかぬ高校生の波に巻き込まれそうになったが、

寸前で鈴美が少年を抱きとめる。

それから少年が上手く場に馴染めたのを見届け、佐藤は麦わら帽子を目深にかぶり、サングラスをかけたまま足を組み、寛いだ。

周囲の男の視線を鬱陶しく感じつつ、自動販売機で買ったジュースを、一口飲む。「若いつていいわね」

彼女も子どもであつたならばしゃげたかもしれないが、童心に帰れるほど若くはなく、純粹でもない。

「その点吉良くんは結構、楽しんでるみたいだけど」

普通を取り繕つて歪に生きている少年——いや、もう青年か。

青年は殺人欲求と平穏を望む中で、精神を極端にすり減らしながら生きていく。

佐藤との関係がなければ騙し騙し、もう少し平和に生きられただろうが。

「欲」に奔放な彼女からしてみれば、自分を騙してまで己の欲を隠す青年の生き方が、不思議でならなかった。

男と体を重ねて快楽を貪る。その生き方はどこまでも人間的だが、穢らわしい。

「ふーん……そういう純粹な顔、彼女の前じゃするんだ。私には冷たいクセに」

鈴美と接する時の青年は、本人も知らない内に柔らかなく微笑んでいることが多い。

その点佐藤の前では快楽に溺れきり、あるいは今にも殺しそうな冷えた目を向ける。

好きな相手に様々な表情を向けられたいと思うのは、おかしなことだろうか。
「いいや、おかしくない」

彼女は自分の快楽に忠実だ。妖艶に笑む様を目にした男や女までも、ついと見入ってしまう妖しさが覗く。

「佐藤先生」

不意にその時、声がかげられた。目深にかぶっていた麦わら帽を上げれば、先まで彼女が見ていた青年が立っている。

どうしたのか——と尋ねれば、バトンタッチを要求された。

「もう…限界なんです」

「えー、アツキーこういう場所でキャツキャできるほど若くない」

「バスの中じゃ、あんたが一番テンションが上がってただろうが」

「このクレープ美味しいって聞いてたから、楽しみにしてたの。もう食べたし用はないのよね」

「……とりあえず、行ってきたください」

無理やり腕を引っ張って立たされ、背中を押される。

彼女が文句を言っていれば、相手は大きいため息を吐いた。

「ぼくのためだと思って」

「そう言えば私が了承すると思ってる？貸しは利子付きで高くつくわよ？」

「……………わかりました、いってらっしゃい」

「ふおっふお、お主も悪よのう」

はよ行けど、蹴り出される勢いで押され、佐藤は体勢を崩した。

彼女は自身の麦わら帽を吉良に被せると、口角を上げた。相手は客層が若いことも

あつて、大分参っているのだ。

「私のフェチのこと散々言ってるけど、君のも大概だね」

「……………うっさい」

手で追い払う動作をされ、彼女は笑いながら遠くのアトラクションに並んでいる二人の元へと向かった。

???????

時刻はあつという間に過ぎ、夕方になった。あとはパレードを見て土産屋に寄り、帰るだけである。

露伴少年は遊び疲れ、鈴美の背中中で眠っている。ぼくは荷物持ちだ。

本当に疲れた。どこぞのバランスを付けた小僧がネズミの着ぐるみを剥ごうとしたり、興味のあるものに突進して迷子——本人曰く、迷子になったのはぼくらの方だそうだ——になったり、過激なアトラクションのせいでグロッキーになったり、3分の2ぐらい覚醒した小僧のせいで疲れた。

「露伴ちゃん見てみて、パレード始まったよ！」

「……すう……」

「ダメだ、起きないや」

着ぐるみを着た人間たちや派手な催しものが、前方を練り歩いていく。

場所を取っていた（というより疲れて死んでいた）ぼくのおかげもあり、前を取れたのは幸いだった。

「先生もお化粧直しに行つてから、ぜんぜん戻つてこないし……」

「放つておけよ。ほら、一番デカいのが来るぞ」

この夏の暑さだ、女性は色々大変なのだろう。

しかし保健医と違って、鈴美は化粧をしていない。白いきめ細やかな手の肌を見てわかる通り綺麗なのだから、若さは得だ。

「わあ……」

彼女が小さく感嘆の息を溢す。

城を模した乗り物の上で、キヤラクターたちが観客に手を振っていた。その周囲では踊り子たちが華麗に舞っている。

ぼんやりと眺めていたら、突如花火が四方に上がり、眠気が一気に吹き飛んだ。

周囲の人間の声が騒音となって耳に届く。よくバラン小僧はこの中で眠れるな。

「キレイだね、吉影くん」

「……まあ、それなりにね」

今日は本当に大変な一日だった。

暑いわ、小僧の面倒が疲れるわ……それでも、悪くない時間だったと思う。

それは一時でも、両親のストレスから解放されたからだ。

ただ、離れていても、いい子の仮面は外せない。

だから保健医の手助けもあったが、鈴美に甘えた少年が羨ましく思えた。

この場を楽しめたことはぼくにとって、いいものである。反面美しい手にばかり目がいってしまい、早々に精神的に参ってしまったが。

「今日はみんなと来れて、すごく楽しかった。誘ってくれてありがとうね」

「別に、父さんがチケツトをくれたから来れたんだよ。ぼくは何も……」

「でも、一番最初に私を誘ってくれたでしょ？」

「君が「一緒に行きたいなあ……」って、前に言ってたからね」

「覚えてくれたの？」

「覚えてなくとも、ぼくも一度は訪れてみたかったから、その時は君を誘ったよ」

花火の光が幻想的に世界を彩って、観客を照らす。

彼女の笑顔はとても綺麗で、しかしやはりどこか燻っている。

「……どうしたんだい？前から少し変だよ？」

「……別に」

花火を見ていた横顔が視線を合わせないまま、少しだけこちらに向く。

「……吉影くん、明日は何の日か覚えてるよね」

「8月13日、君の誕生日だね」

「そうです。ついでに前に行ったことも覚えてる？」

「何か一つ欲しいものを買う……だったかな？」

「そう、私の欲しいものを一つ吉影くんが与える」

少し改ざんされている気がする。大きいぬいぐるみを催促されそうだと、親に渡された分とは別で自分の現金を持ってきたが、いったい何を買わされるのだろうか。

「16歳になったら——約束」

クレープを頬張ったりアトラクションを見てはしゃいでいた彼女は、少女から、女の顔になっていた。

思わず目を見開いたぼくに、彼女はゆっくりと、顔を近付ける。

「…吉影くん」

「そ、そうだね…そうだね。約束、してたね」

「受験で忙しいと思うけど、全く時間が取れない…つてことはないでしょ？」

「…うん、難しいけど、何かしら都合は作れると思う」

そもぼくに「受験勉強は必要なのは？」と、鈴美は言った。

思った以上に彼女は、ぼくを見ているみたいだ。…いや、好きなのだから、見ていて当然なのか。やはりどうにも恋愛のハウツーは掴みにくい。

「本当に、ぼくでいいのか？」

「男に二言はないものよ」

「……ぼくは」

ぼくは、欲にまみれた人間だ。女の手が好きで、命を奪う行為を罪悪感もなく行えてしまう人間だ。

そんなぼくと穢れない真っ白な彼女が、交わってもいいのだろうか。

その考えを思い浮かべたこと自体不思議で、頭の糸がこんがらがる。

いいよ、と言えばそれで済む。

しかし言うことができないのは、ぼくが彼女を好きになることができたからじゃないか？ 大切に思うから傷付けまいとして、避けようとしているんだ。

現に彼女に触れようとして——彼女の手に、触れようとして——、

「吉影くん」

綺麗な桃の目が、真っ直ぐにこちらを見つめる。なぜかぼくを咎めているように感じられた。

「ぼくは、君のことが……好き、だよ」

「吉影……くん」

「……めん、ぼくは……」

肉欲を晒したら、きつとぼくは歯止めが利かなくなる。

今まで隠していた手の欲や、恐ろしい衝動を彼女にぶつける。

ぼくの本性を知って、純粋な彼女が耐えられるわけがない。

まだ異常に理解がある保健医だからこそ、自分の欲を見せられた。しかし普通の彼女では、受け止めきれない。

ぼくの本性を知ってその上で周囲に知らされたら、平穩には暮らせない。

少しでも害になり得るのなら、彼女の手だけを残して、手にかけてしまうかもしれない。

「……………」

少なからず鈴美に死んで欲しくないという気持ちはある。

彼女の手が美しいと思うが、浮かべる笑みも可愛らしいと思う。

この感情が「恋」に準じる好きなのか、やはりわからない。

普通を求める思考と、狂気に満ちた思考に板挟みにされて、精神がぐらついた気がした。

喉の渴きに、無意識に温くなったお茶を口に入れる。

しかし、約束したのだ。一度だけなら耐えられるはず。

言葉にしようとしたと同時に、花火の音にかき消された。

「おつまた、戻ってくるの遅くなっちゃってごめん！小腹空いたと思って、ポップコーン買ってきたよ」

花火の色が、空気の中に溶け込んでいく。

ポップコーンの、それもバケツト付きを4つ装備して保健医は戻ってきた。

匂いに釣られて起きた露伴少年は、自分と鈴美の分を奪っていく。味は全てキャラメルのような。

「……………」

「露伴ちゃん、どこ行くの？」

「…ついてくるな」

「あ、ちよつと！」

バケツトを首に提げた少年は、少し駆け足で走っていく。鈴美も慌ててその跡を追った。どうやらお手洗いらしい。

遊びっぱなしの後に寝てしまったので、行く時間がなかったのだろう。

「あの、私行ってくるね。迷子になったら大変だから」

「わかった、気を付けるんだよ」

「うん……あと答え、帰りまでにちゃんと出してね」

「……ああ」

そのまま彼女は少年の跡をついて行った。

残されたのは、ぼくと保健医の二人。パレードはまだ続いており、人混みの多さに嫌気が差してきた。

「吉良くんもどうぞ」

「バケツトつてかなり高くなかったですか？」

「まあ、これくらいは奢ってもいいじゃない。サービスサービスうー！」

アラサーに指を立ててウインクされても、何もときめかない。

無理やり提げられたバケツトの紐は、重力に沿って首元に落ちた。

「ねえ、さつきイイ雰囲気だったみたいだけど、杉本さんと何話してたの？」

「他愛もないことですよ」

「ふーん、それにしても距離が近いみたいだったけど」

「寝ているガキがいたとはいえ、カツプル二人並んでいるんですから、甘い雰囲気になってもいいでしょう」

「ふふ、青春ねえ」

サングラスに彼女の瞳は隠されており、いつものように感情を窺うことができない。

抱くならば嫉妬や怒りだろうか。どことなく儂げに見えるのは、なぜだろう。

「……私こういうところ、初めて来たのよね」

「かなり遊んでいそうなイメージがあるのにですか？」

「男の人とはね。人がいっぱいいるところは、あんまり得意じゃないの」

「意外ですね」

「きつと子どもの頃に来ていたら、もつといっぱい楽しめたと思うわ」

その視線の先に映し出されているのは、親子連れの三人の姿。

ぼくの場合、子どもの頃は情操教育だと、よく親に連れられ色んな場所に行った。

家族が一緒に時点で疲労にしかならないが、経験としてはいいものだった。

父は気遣いばかりするぼくの様子を見ていたから、受験前の気晴らしも兼ねて粋なことを考えてくれたのだと思う。

「私母子家庭で、子どもの頃はいつも一人だった。友だちとかも作れなくて……」

「そうだったんですか？ 普段のあなたはコミュニケーションお化けに見えますが」

「ふふ、そう？ 大学で心理学を学んだのが大きいわ。人という生き物を知りたくて専攻したのだけれど、苦学生だったから大変だったな。こつそり水商売もしてまし」

過去に浸る彼女は、目の前の快楽を貪るいつもの姿とは違う。

ただの弱い——、人間のようだ。

「…あなたらしくくないですね」

「私らしいって何かしら？君だって自分らしさが何なのか、わかってないでしょう？」

「……………」

「自分らしさもそうだけど、君が大好きな普通だって、いったい何が「普通」なのか、人の解釈次第で無限に答えは出てくる」

「普通は普通ですよ。一般人として生きることが普通で……………」

「じゃあ例えば、事故で足を失った人間は？先天性の障害で、重度の知的障がいを持った人間は？彼らは「普通」じゃないってどういうの？彼らは足りないなりに自分たちの生き方を模索して、懸命に生きている。そんな彼らを君は否定できるの？」

「別に、否定はしてないですよ」

「否定しないというなら、私や君のように異常性癖を持つ人間を否定しないわよね？どうして異常な自分を否定するのか、私にはわからないのよ」

「…否定はしていいない。だが一般から見たら、何かしら疾患を持っている人間や、ぼくらのような人間が異質に見えるのは、避けられないことだ。その好奇の目を避けるためにも普通になりたいと願うのは、別段おかしくないでしょう」

「君が「普通」に固執するのは、それが理由？」

「ぼくの、理由……………」

幼い頃からぼくは「普通」に執着していた。誰に問われるでもなく、ずっと当たり前のこととして認識していた。

そのこと自体おかしいんじゃないのか？

敢えて、考えないようにしていた。否、忘れてしまった幼少期の疑問がぶり返す。

まるで誰かの意識を引き継いでいるような、自分とは違う別の人間の思考のような、得体の知れない恐怖。

ぼくが、ぼくじゃないみたいじゃないか。ぼくは「吉良吉影」で、それ以外の何者でもない。

「普通」を指す君と本能のままに生きたい君、私はどちらが本当の君なのか知りたい」「どっちも…ぼくだ。いや、面倒な本能なんか、本当はいらぬ…：普通に生きられれば、それだけでいい」

「君そのままだと、いつか精神の方が保たなくなるよ」

そんなのわかっている。もう限界が近いのはわかっている。

ただ、人を殺しちやダメなんだ。耐え切れずに衝動のまま動物を殺してしまったこと

はあるが、人を殺したらお終いだ。

どうにかして自分の欲望を制御しなければ、きつと近いうちに誰かを殺す。それも恐らく、手の綺麗な女を。

ぼくを真の意味で満たしてくれるのは、美しい彼女たちだけだから。

「楽になればいいのに」

「黙れ…」

「ふふ、人がいっぱいいるから、前みたいに首を絞めることはできないわね」

「……………」

「そんな怖い目しちやって、ドキドキしちやう」

突如保健医が顔を近づけてきたと思ったら、頬にキスをされた。

自然と眉間に、皺が寄る。

「何すんだ、この変態教師…」

「このくらいいいじゃない。それに岸辺くんの面倒を私が見てた時、こつそり杉本さんとちゆうしてたの、知ってるんだから。一応譲歩はしてるのよ」

「…………ハア」

やはりこの女は連れてくるべきじゃなかった。鈴美に見られてたら腹パン待ったなしだ。後から視線を探らせて姿がなかったのは、不幸中の幸いだ。

「…そう言えば、あなたはなぜ人間の目なんか、好きになったんですか？」
「えー、聞きたい？」

「教えてくれないなら別にいいです」

「あははー、ウソウソ、教えるって」

耳を近付けるよう促され、一瞬さつきのことを思い出し警戒したが、特に何もされることはなさそうだ。

「幼い時に私をレイプした男の目が、忘れられないから」

彼女は笑って、そう言った。

12話 眠眠（ミンミン）突く突く

露伴少年が何故か一人で戻ってきて、『杉本鈴美ちゃん』の迷子のお知らせがあったのは、その10分後だった。

聞いた瞬間三人が三人仲良くそろって浮かべた、豆鉄砲を食らったような顔。

どうやら少年を追っていたものの、人の混雑に吞まれて見失ってしまったらしい。迷子センサーにいた彼女は憔悴した様子で、顔には泣き腫らした跡があった。

「んもお——！心配したんだからね、露伴ちゃん!!」

「だから、ぼくはついてこなくてもいいって言った」

係の人曰く、ギャン泣きしていた彼女を見かねて保護したらしい。高校生にもなつて、こつちの方が恥ずかしくなる。

鈴美の抱きまくら状態の少年はというと、彼女を心配と呆れが混ざった表情で見ているた。

「とりあえず早く行くぞ。買い物時間は誰かさんのせいで、少ししか残ってないからな」
「露伴ちゃんも冷たいけど、吉影くんも冷たい…グスン」

「大丈夫よ杉本さん、私が慰めてあげるから。いくらでもこの先生のおっぱいに飛び込

んでおいで！」

「せんせえ〜〜！」

「うげっ！」

茶番に巻き込まれた少年は女性二人に挟まれている。思春期男子ならハンカチを噛んで妬む光景だ。うらやましい限りだ、あんな綺麗な手に両サイドから触れられて。

それから土産を買い、新幹線と電車を乗り継いで、夕日が沈みきる前に杜王駅に着いた。

保健医は駅付近の駐車場に向かい、少年は迎えにきていた親御さんに回収されていた。

鈴美も少年と一緒に帰るのかと思ったが、こちらと同じ自転車らしい。ここまで来ると、全て運命に仕組まれている気さえする。

「……………」

土産はリュックの中で、その他の荷物が入ったバッグを後ろの荷台に固定している最中、ずっと視線が突き刺さる。重苦しい空気に耐えかねて、口を開いた。

「えつと…送っていくよ」

「彼氏なら当たり前です」

「……ハハ、これならバイクの免許でも取ればよかったかな」

車の免許は大学の間に時間をみて取る。行動範囲が広がるのは純粹に助かる。

「それで答え、出た？」

「…あ、ああ、そうだったね」

あからさまに肩を跳ねさせてしまった。隣にいる彼女の顔を見ることができない。

「これじゃあ、このぼくがまるで、怯えているみたいじゃないか。」

「…一歩、進むことはできる」

「できるけど、何？」

「……………」

「吉影くん、何か隠してる」

それは、断定した物言いだった。

確かにしよつちゆう彼女の手に視線がいく。

手フェチとまではいかずとも、ぼくが鈴美の手を好きということをわかっているのだろう。殺人衝動は絶対に他言できないが、手のことはこれ以上隠せまい。

「あのね、鈴美、ぼくは…」

腹を決めて横に視線を向けた時、彼女は――、

「……っ、う」

——泣いていた。

「え、どうしつ……」

「さわらないで!!」

ぼくが伸ばした手は、悲痛な声と共に振り払われた。自身が体勢を崩した拍子に、自転車が派手な音を立てて倒れる。ああ、荷物が汚れた。

「ずっと、なんとなく……思ってた。もしかしたら、そうなんじゃないかって……でも、やっぱり見ちゃったら……もう吉影くんの言うこと、何も信じられないよ……!」

「鈴木……ぼくは、その」

「聞きたくない!!」

彼女は蹲り、さらに泣き出してしまった。手に触ろうとして、ハツと息を呑む。

こんな時に、何を考えているんだろうか、ぼくは。

今考えるべきは手のことではなく、彼女のことだろう。付き合っているのなら尚更。

「その……ごめん。泣かせるつもりはなかったんだ。ただ、言い出しづらくて……」

「……………」

「けど知ったらばくのこと気味悪がるんじゃないかって、ずっと言い出せなかったんだ」
「……………それ、本気で言ってるの？」

「？本気も何も……………」

パシんと、乾いた音が鳴った。

突然起きた頬の衝撃に、一瞬理解が遅れる。

アスファルトに落ちた眼鏡と、だんだんその存在感を主張していく頬の痛みにも、叩かれたのだと自覚した。

このぼくが、女に叩かれた——。

地面に手をつけて、呆然と頬を抑えるこちらの前に立つ彼女。

怒っているが、悲しそうで、辛そうで、なぜ泣いているのかわからない。そんな疑問と、沸々と増していく自尊心を傷つけられた怒りが、腹の奥で溜まっていく。

しかし空気の読めない——脳内でガンダム主人公に扮した金髪アフロヘアーにサングラスをかけた——アフロ・レイが、「親父にもぶたれたことないのにッ！」と悲痛な心中を語った。誰だ貴様は。

「先生と、付き合ってるんでしょ？」

「付き合っては、いないが…」

「嘘つかないで!!」

保健医と利害関係はあるが、恋愛関係はない。肉体関係が利害関係にプラスされたが、それまでの話だ。

「見たの、露伴ちゃんを見失って一度戻った時、吉影くんと先生が……キス、してるの」
「あれは…先生の戯れみたいなやつだよ。実際された場所は頼だし、向こうがいきなりしてきたんだ」

「……………嘘つき」

「鈴木、一回落ち着こう、お願いだ。きつと疲れてるんだよ」

「嘘つき!!!」

立ち上がったばかりから逃げるように、彼女は距離を置く。

その拍子に今度は彼女の自転車が倒れて、カゴに入れていた土産やバッグが散乱する。

ここまでの感情的になった彼女は、今まで見たことがない。

「……じゃあなんで、たまに先生と同じ香水の匂いがしてたの？ 気のせいかもしれないって、思うようにしてたわ。でも今日先生に抱きついた時、やっぱり同じなんだって思った。ずっと、泣きたかった。まださつき聞いた時に本当のこと言ってくれたなら、こんな……傷付かなかつたよ……!!」

ああ、なるほど。ぼくとしたことが、香水の匂いとは失念していた。

女性は男性以上に匂いに敏感だと聞く。肉体関係ができたのだから、余計に配慮して然るべきだったか。

まあ、入浴して一晩立っても取れないのだから、仕方ないか。同じ考えだと母にもバレーていそうだが、年齢で五感が衰えていることを考えると、気づいていないだろう。

むしろ最近付ける香水の匂いが強まって苦手だ。家で付ける理由なんて、ないはずなのに。

もうここまでできたなら佐藤のことは隠せない。必然的に彼女と利害関係を結ぶに至ったばかりの性癖のことも、話さねばならない。

隠そうとすればするほど、余計に相手の気分を害してしまう。

そしてこちらの精神もまた、街灯のない暗闇に引きずり込まれる。

「…うんわかった、言うよ。保健医から言わせてみると、ぼくと彼女の関係は「セフレ」らしい。ぼくからすると、お互いの欲を満たすだけの関係なんだが」

「……っ」

「ぼくが君の手を好きなのは、薄々わかつてるんじゃないかな？訂正するとしたら君の手だから好きなんじゃなくて、女の手だから好きなんだ」

そして、お互い異質なフェチを持つ者同士の関係ができた。

「……先生のごことは、抱いたの？」

「うん。といつても君と付き合う前のことで、確か中二の時だったかな。君と付き合い合ってから長らくなかったけど、中三の時に肉体関係を求められた。あの時は仕方なかったというか…まあ結局、受け入れたのはぼくだ」

「……」

「ぼくは女性の手を前にすると…フフ、なんていうのか、すごく、ドキドキするんだ。手のこと以外考えられなくなって、どうしようもなくなる」

殺したくなる、の部分は省く。

「どうして、私と付き合ってくれたの？私の手が……好きだったから？」

「君の手は好きだよ。かわいらしくて、今も触れたい。ぼくはね、一般にいう「恋」がよくわからないんだ。鈴美と付き合えば何かわかるかもしれないと思った、だから付き合った」

「……………わたしのこと好きに、なった？」

「それ、は……正直、わからない」

鈴美の笑顔は好きだ。何も知らない無垢な笑顔とでもいうのか。

ぼくのように穢れてはおらず、本当に幸せそうに笑う。

そんな表情が羨ましくて、彼女の元にいれば何か自分が変われるのではないかと思っ
た。

ぼくはどうしようもなく、エゴイストだ。

「もっと早くに気付けばよかったんだと思う。君とぼくは別れるべきだった」

「……………」

ぼくはどう足掻いたところで、己の欲望から逃れられない。片足を泥に突っ込みながら、強要される人生。

しかし異常者であるとわかりつつ、「普通」でありたい。

そんな人間が彼女のような一般の人間と付き合い続けられれば、相手を壊してしまう。

ぼくのような奴が平穏な幸福なんて、掴めるわけがない。

夕子の悪い性癖や衝動に悩まされない周囲の人間が、羨ましくて妬ましくて——
殺したい。

「他人のあるべき「幸福」を害する資格は、ぼくにはないんだよ……鈴木」

小さく呟いた言葉は、誰にも届くことはなく。

辺りにはセミのかしませい声、散乱した荷物と倒れた二台の自転車、平穏を望む愚か者。この三つだけが残されていた。

汗で張りついた前髪がとて、気持ち悪い。

13話 最終回にみんなで「おめでとう」と手を叩くタイプのハッピーバースデー

鈴美が吉良と保健医の關係に気がつき始めたのは、いつ頃だっただろうか。

一年の時は気付かず、二年の時はたまたま薄っすらと香る女ものの香水に、妙な違和感を感じた。

その匂いが保健室のものと似ている気付いたのは、同年の終わり頃。三年の頃には疑惑を抱き始めていた。

思い出したのは、吉良と保健医が付き合っているという噂。

それは、保健医のジョークで終わったはずだった。

しかし時がたち、そのジョークが頭に浮かぶ度、ギョツと、見えない手に心臓を握られた。

それから鈴美が彼と付き合ってから暫くして、一部の間で彼は「ミステリアスな先輩」として度々話題に上がった。

その理由が一部の人間が鈴美と付き合ったことに嫉妬し、吉良に絡んだ結果の延長戦

で広まったものだと言った。

頭によぎったのは、とある日の言葉。

『君のかわいさも中々罪だね、鈴美』

からかわれただけなのだと言ったが、裏では一部の男子によるいじめがあったことは容易に推測できる。吉良は何も言わず、いつも隠す。

ただいじめられて終わる人間ではないため、いじめた相手は痛い目をみたに違いない。

その部分が回り回って、「ミステリアス」として出回ったのだ。

「うっ……っ」

日が沈み、街灯の光が地面をポツポツと照らす道。辺りにはやかましい虫の音が響く。彼女は無我夢中で走っていた。

涙で視界が霞むことも厭わず、時折おえつを溢した。

彼と保健医の関係が確信に変わったのは、二人の様子を目撃してしまった時。

心のどこかでは気のせいだと、ずっとごまかしていた。だがキスをしていたところを見て、もう自分を騙せなくなった。

露伴のことが頭からすっぱ抜け、係の人間に迷子として処理されるほど泣いたというのに、涙が止まらない。

「うぐ、……ふえ」

彼女にとつて初恋であり、叶った時は誰よりも幸福だったに違いない。

しかし恋の終わりとしては、これはあまりにもみじめではないか。

「でも……わたしもきつと、わるかったんだ……」

想い人を前にして、浮かれ立つ気持ちは仕方あるまい。

好きな相手の一挙一動すら目で追ってしまるのが、「恋」というもの。

恋人になり距離がより近くになったからこそ、さらに相手のことを知れた。自分の手をよく見ていることに気付いた時は、わざと腕を絡めて甘えた。

吉良が隠そうとする薄暗い部分にも気付いていたが、相手が他人の干渉を意図して避けていたので、触れることはなかった。

「そこに踏みいつてたら、すこしは、ちがったのかな…」

もう随分と走り続けた。頭や脛が重い。鈴美はたどり着いた橋の上で、とうとう座り込んだ。

夜風に吹かれると、頭の熱が少しだけ引く。荷物や自転車を置いてきてしまったことに今更気付いた。

「どうしよう……」

荷物はこの際仕方ないとして、タクシーで送ってもらおうか考える。

人通りは遠くの民家の明かりが見え、時たま車が通るくらいで、タクシーは来そうにない。

「へいへい、そのキャワゆいカノジョ！乗ってかな〜い？」

悩んでいたちようどその時、チャライ声がかげられた。

彼女が顔を上げれば、一台の白い車が少し後方に止まっている。車がゆつくりと彼女の傍に来ると、助手席の窓が開いた。

うす闇の中で、亜麻色の長い髪が揺らめく。

「さ、佐藤先生!？」

「はい、あたくしが佐藤・リリス・安希恵あきえでございます」

「な、なんでここに……」

鈴美としては、今吉良の次に会いたくない人物である。二人の関係を探るため保健医の参加を提案したが、見事設置した地雷を自分で踏み、自爆してしまった。

吉良の「肉体関係を迫られた」という言葉も相まって、佐藤の見方が今までと大きく変わる。

「……………」

「とりあえず乗りなよ、夜に女の子一人じゃ危ないし、ね?」

「……………わかり、ました」

前は柔らかな佐藤の微笑みが可愛らしいと感じていた。しかし今は、男を誘う毒の蜜にしか見えない。

生徒に優しい彼女を見ていたがゆえに、裏切られた、という気持ちが強まる。

自分がいながら他の女性と関係を持っていた吉良が許せず、同じくらい佐藤も許せない。

そしてこんな醜い感情を抱いてしまう自分にも、嫌気がさす。

様々な感情が頭の中で混ざり、涙がまた、あふれ出した。

「大丈夫、杉本さん？」

「……先生はっ……」

「うん、私が何かな？」

「吉影、くんと……」

「……あら、彼、言っちゃったのね」

淡々と言った保健医を、鈴美は睨め付けた。

それでもここで泣いたら自分の負けだと、涙を拭う。

「どうして、吉影くんと……私が付き合っているのは、知ってたはずですよ」

「知ってたよ。でも勘違いしないでね？杉本さんが吉良くんと付き合う前から、私は彼のこと好きだった。私が奪おうとしていると考えてるなら、それは私から「奪った」杉本さんが、言える義理じゃあないのよ」

「……そん、なの……知らなかった」

「ええ、だって私は、自分の感情を意図的に出さないようにしているもの。人の本質は衝動的なの。だから「理性」で、その欠点を補わなければならぬ」

快樂に忠実ではあるが、それを律する心もまた保健医は備えている。

鈴美は視線を逸らさぬよう、相手を見続ける。心はずでに挫けそうだった。

「吉影くんが中二の時に……その、したって、聞きました」

「ふふ、あんまり彼のこと責めないであげてよ。最初の時はちよつと、無理やり感もあつたから」

手の欲望にトリップ状態だった少年を懐柔した。佐藤は自分の欲望に従って、一人の少年を沼に引きずり込んだのだ。

「何で、そんなこと……それに、生徒と先生なのに……」

「普通だったたら、おかしいのかもね。でも、私も彼も欲望を前にしたら常識なんて無意味」

「欲望って……」

「彼は自分の性癖もあなたに言ったの？ 私は人の目が好きなの。眼球にはその人間の中身が一番現れる」

信号が赤になり車が止まる。佐藤は視線を横に向け、鈴美の頬に黒いグローブを付けた手を伸ばす。袖の下で、白と黒の境界線が一瞬覗く。

鈴美は触られて肩を震わせたが、保健医の浮かべる艶を帯びた笑みに目を奪われた。

「あ、えっ」

「吉良くんの目が冷たくて綺麗な印象なら、杉本さんのはかわいいって感じかにやあ……」
「わ、ま、ちよ……!!」

お互いの吐息がかかるほど顔が至近距離にある。鈴美は真つ赤になり慌てて顔を逸らした。

それに性悪な笑みを浮かべ、保健医は満足そうに顔を離す。

「冗談よ、女の子は食べないから安心して。守備外よ」

「た、た、食べるって……!?!」

「ぐふふ、先生はわるーい大人だからねえ〜」

「……………」

信号が青に変わり、車が走り出す。ガオガオさせていた佐藤の手は、ハンドルに戻った。車内には白けた空気が流れる。

頬を少し膨らます助手席の少女に、保健医は苦笑を溢した。

「ごめんにつて、よかつたらお詫びに、ジュースでも飲む?」

「生徒をからかうのは、…その、やめてください」

「そんな反応されたら本当に食べちゃうよ?」

「……………つ、先生のバカ!」

鈴美は保健医の手からオレンジのペットボトルを引つたみると、からかわれた怒りや恥ずかしさのまま、ぐいぐい飲んだ。

喉を潤す液体は随分と生ぬるい。朝買ったが飲まず、そのまま車内に放置していたのだろう。C級のもてなしだ。

「おじさんくさいねえ」という運転手の女は無視し、半分ほど減ったところで蓋を閉め、ドリンクホルダーに置く。衝撃で少し揺れた。

「…謝つてはくれないんですね」

「私も杉本さんと同じ彼のこと好きだから、謝れない」

「……多分私も先生と同じ立ち位置だったら、謝れないと思います」

「お互い譲れないってことか」

小さく頷いた鈴美に、保健医は息を吐く。

「一応聞いておきたいけど、私や吉良くんのこと誰かに言う?」

「…言わないです。言ったら吉影くんが、困っちゃうから」

「杉本さんは彼の「普通」を求める姿勢には、肯定的なのね」

「子どもの頃から目立つのが嫌いだったのは知ってるから、その気持ちを踏みにじりたくはないんです」

「そうやって考えると、普通」なのかもね」

保健医はダツシユボードを開けると、中にぎっしり入っていた棒飴をひとつ取り出し、包装を解いて口の中に入れる。そのまま飴を舌で遊ばせた。

「先生つて結構、甘いもの好きなんですね」

「まあね、あと口に何かないと落ち着かないっていうか」

「手袋も意外でした」

「ふふ、ハンドルに手汗が付いた状態にしとくと変色するじゃない？先生嫌なのよね、そういうの」

「潔癖なんですか？吉影くんみたいですね」

「にやはは、……あれは……うん、引くよね」

最初はギスギスとした空気が流れていたものの、佐藤の態度もあつてか、少しは柔らかくなった。

お互い同じ男を好きという点では共通点がある。聞き上手であり、話し上手である保健医を、鈴美は濡れた頬を拭いながら見つめる。

長い艶のある亜麻色の髪に、カラス羽のような目。白い肌に、薄い唇。

同性から見ても綺麗と思うのだから、男性だったらきつと簡単に心を奪われてしまうに違いない。

吉良の「欲を満たす関係」を思い出し、また少し涙が出た。

彼は保健医のことを好きなのだろうか。

頬を叩いてしまった感触を思い出し、右手を強く握りしめる。きつともう元の関係には戻れない。

別れるべきだったと告げた少年の心中はわからない。しかし自分のことはもういらなくなつたのだろうと、暗い気持ちに渦を巻く。

大人である保健医と比べて鈴美はまだ子供。精神も肉体も何もかも、すべてが劣っているように感じられた。

「吉影くんは…先生のこと、好きなんじゃないか」

保健医と二人でいた時の彼は、心の距離が近いように見えた。鈴美では及ばない暗く危うい部分で。

今更知ろうとしても拒絶される。なら相手の幸せを考えて身を引くのが、一番ではないだろうか。

考えれば考えるほどやはりよぎるのは、「彼のことを好きだ」という感情。

「吉良くんは私のこと、好きじゃないわよ」

「……え？」

「私とあなたの違いは「普通」か「異常」か。私にとってはカレイとヒラメぐらいの違いだけど、彼にとっては線引きされる大きな違い」

「……手とか、目が好きなのってそんなに変なんですか？ その、男性によつては女性の好きな部分は違うと思うし。私も吉影くんが髪を上げた時のギャップとか見ると、ドキドキしますけど……」

「ふふ、杉本さんは思ったより異常性癖に理解があるのね」

「『フェチ』ってやつですよ、人それぞれなんじゃないですか？」

「ふふふ、それもそうね」

保健医は2個目の飴を啜えた。

鈴美は白い棒が動く様をぼんやりと見つめる。まるで生き物のようだ。その時ふと性的なことを考えてしまい、顔を真っ赤にして逸らした。

見えたのは街灯もない暗闇。周囲は森で車は舗装されていない、そこだけ中をくり抜いたかのような深い森の奥へ、車は進んでいく。頼りになるのは前部に付けられたヘッ

ドライトのみ。

車中は時折大きく揺れ、枝を踏むような「パキッ」という音が鳴る。

「先生これ、ろくに……!」

鈴美は言葉を発そうとしたが、うまく呂律が回らず、瞳を見開いた。

慌ててシートベルトを外し外に出ようとしたものの、どんどん身体の力が抜けていく。

「杉本さん、明日誕生日なのよね」

先ほどの柔らかい声とはうって変わり、抑揚のない冷たい声が車内に響く。

「16歳になったら一線を超えるんだっけ？ 私はまだ早いと思うけど」

「……………!……………」

「それは、どこで知ったのか、って顔かな？ 先生地獄耳だから、いろんな情報が集まってくるのよ。学校でそういう話しちゃダメよ？ せめて誰もいない学校帰りとかだったら、私も知らずに済んだのに」

「でも知っちゃったからもうダメ」と、保健医は微笑んだ。

車が着いた先には今にも倒壊しそうな廃屋が一軒、静寂の中に佇んでいる。

鈴美は眠ってはならないと、懸命に睡魔にあらがう。

「彼は多分、自分の秘密を知ったらあなたが耐えられなくなると思っ
ているけど、話してみてもやっぱり思った。あなたは優しさと愛をもつて、
受け入れられてしまう。そうしたら私の居場所はなくなる」

「……………」

「人を好きになったこと、あなたはあるでしょうね。恥ずかしながら、
私は今までなかったのよ。あの目に囚われて男の欲を受け入れること
でしか、生きる価値を見出せなかった」

「……………せん…せ」

「でも、はじめて吉良くんの悍ましい目を見た時、思ったの。私を殺し
てくれるのは彼だ——！つて。自分で死ぬのは最も愚かなことだと
わかっているがゆえの、希望。大好きな彼に殺されたらきつと幸せよ」

「……………つ」

「さあ、おやすみ杉本さん。いい誕生日にしましょうね」

保健医のその言葉を最後に、鈴美の意識は落ちていった。

14話 笑う角に が来る

鈴美がいなくなって数分。いつもよりノロク動く頭を動かし、倒れていた二台の自転車を起こした。

盗難されてはまずいと、可愛らしいデザインのバッグと土産袋を前カゴに入れ、自転車を漕ぎ出す。

「暑い……」

普段はタオルで拭う汗を、乱雑にシャツの袖で拭った。

一時間ほど周囲を探したが、彼女の姿は見つからなかった。

流石にこれ以上遅くなると、警察騒ぎにされる（というかもうなっているかもしれない）。

「どこかに行ったんだ……」

彼女はやはり、ぼくの異質さに耐えきれなかったのだろう。

走り出した鈴美の後ろ姿をぼんやりと見つめるのみで、追えなかった自分がおかしく感じられる。

心のどこかでは、受け入れてもらえなかったのかもしれない。彼女ならぼくを、普通の人間として扱ってくれるのではないかと。

だが結論、彼女は逃げた。

逃げ出した彼女をどうするべきか。幸い知った秘密は手と、保健医の関係だけ。様子からしてどちらの秘密も以前から勘づいていたと思われる。

鈴美なら言わないか？…いや、流石に逃げ出したくらいだ、疑惑が確信になり、自分では抱えきれないほどのぼくの秘密を知った。心を軽くするために、他人に言う可能性がないとは言えない。ぼくの平穩が彼女によつて壊されたら困る。

「……殺すか」

自然と出た言葉。

その内容に自分でもゾツとして、口を押さえた。

疲れもあるせいで、理性が焼き切られ、思考は本能の方へと引きずられている。

一先ず帰り、親に頼んでも探す人手を増やそう。ぼくが探している内に彼女が駅に戻つて帰宅している可能性もあるので、杉本家への連絡も忘れず。

そして自転車を飛ばしあと15分ほどで着くというところで、前方からきたハイビームの眩しさに、思わず目を瞑る。

白い車は通り過ぎ、ハザードランプを出して少し前の路肩に止まった。

「およよー？ 吉良くんじゃない。まだ帰ってなかったの？」

「……佐藤先生ですか」

運転席から出てきたのは、佐藤保健医。乗っていた車と彼女の格好に違和感を感じた。

以前は白ではなく、黒の車に乗っていたはずだ。買い替えたならまあ、納得がいく。

あと気になったのはグローブか。ぼくだったら気にして付けると思うが、大きっぱな彼女がつけていると違和感しかない。

「車、買い替えたんですね」

「やだー気付いちやった？ 黒って熱吸収すごいからもう夏なんか暑くつて、だから買い替えたのよね」

「…そうですか」

彼女と話している暇はない。さっさと帰ろうとして、自転車に跨る。

「随分遅い帰りの割に焦ってるみたいだけど、何かあったの？」

「別に、なんでもないですよ」

「水くさいなあ、先生と生徒な仲じゃない」

「ベタベタ触るな暑苦しい、轢きますよ」

わざとらしくベルを鳴らして、走り出そうとした。だが発進寸前いきなりハンドルを掴まれて、体勢を崩す。

咄嗟に自転車が倒れた方向と反対向きに身体を傾けた。受け身を上手く取れず、肩から地面に転ぶ。このクソ保健医何をするだ。

「あつ、ごめん……大丈夫？」

「……生徒を治療する立場の人間が、その対象をケガさせるなんていい度胸ですね」

「うわあ、そのニッコリ顔もステキ……じゃなくて、どうして吉良くんが杉本さんが持っていたバッグを持つてるの？」

「単なる彼女の忘れ物ですよ、今から届けようと思っただけなんです」

「……何かあったの？だから焦ってるんですよ」

「……………」

この保健医は観察眼があるから厄介だ。ぼくが手フエチであることもすぐに気付いたし、なんなら自分でさえ知らない「殺人欲求」についても、かなり前から気付いてい

る。

「…もしかして、杉本さんと何かあった？」

「誰かさんが公衆の面前でキスなんてしなれば、こんなに面倒くさいことにはなつてなかつたですよ」

「……フラれたの？」

「その問いには、まだ、としか答えられませんね。別れるかどうかは、後で話し合うつもりです」

少しふらついたぼくに彼女は歩み寄り、身体を支える。

しなやかな手がグローブに隠されているのが憎らしく、無理やり腕を掴み暴くと、闇夜に白い色が映える。不意に聞こえたのは、生唾を飲む音。

「……」

何かを羨望するような目に、じつとりとした気味の悪さを覚えた。

「よければ、何か手伝おうか？」

「あなたには関係のない話なので、結構」

「でも、私の行動も原因になっちゃったみたいだし…」

「そう思うなら今度から気をつけてください」

「あつ……」

ぼくの手が離れた瞬間、切なげな声が聞こえた。今日は本当に普段の保健医と違う。まあ、彼女に何かあつたとしても、ぼくにはどうでもいい。

「うーん、仕方ないにゃあ」

バチツと、背を向けたと同時に、腹に太い針で刺されたような激痛が走つた。

口からはカエルのつぶれた鳴き声のような悲鳴が漏れ、地面に倒れる。

衝撃を受けた左の脇腹の周囲に感覚がない。足が正座をして痺れた時のような、ジリとした痛みが押しつけては引く。

「な、につ……」

「携帯用のスタンガンよ。私みたいなかわゆくい子が夜道を歩いてると、暴漢されちゃうから」

ピンクの小型のスタンガンを手に持ち、笑う保健医。

痛みの中「暴漢」という言葉を聞いて、今日彼女から聞いた言葉を思い出した。

「素直に「じゃあ鈴美を探すの手伝ってくれ」って言ってくれればよかったんだけど、中々言わないんだもん」

「この、クソカスがッ……」

「よーちよち、先生がだっこちてあげまちゆからねえ」

身動きが取れないほどの身体は、正面合わせで抱える形で運ばれる。彼女よりもタツパのある身長により、足が地面に引きずられる。

また、わざとらしく顔面に胸を押し付けられるせいで、呼吸がマトモにできない。

「あん、やだあ。暴れないでよえつち」

微かに動く手で抵抗したら喘がれた。殺してやろうかコイツ。

「ふふ、次はおくすりの時間よ、吉良くん」

車に運ばれ助手席に不恰好な形で座らされる。運転席に移動した彼女は、麻縄でぼくの両手を一括りにして縛った。

そして中身の半分ほど減ったオレンジジュースをドリンクホルダーから取り、フタを開けて飲もうとする。

次に何をされるのか、イヤでも想像がつく。

「やめろやめろやめろ!!」

「なんでよくキスなら何回かしたじゃない」

「それとこれとは別だッ！ただでさえキスなんぞ細菌を交換するだけの行為なのに……」
「…吉良くんって本当夢がないね。こんな美人にちゅーされるんだから、もつと興奮しなさいよ」

「黙れ痴女…クソツ、屈辱だ……絶対に殺してやる…」

「ふふ、殺すだなんて……怖いなあ、吉良くんは」

彼女は無邪気に笑い、睡眠薬入りであろう飲み物を口に含んだ。

「最高」に「最低」な時間を耐えたのち、意識は暗闇へと沈んでいった。

???????

ピチャン、という音がし、沈んでいた意識が浮上する。

そういえば昨日は雨が降っていた。

「……っ」

スタンガンを当てられた箇所の痛みがない。寝ている間に足も縛られたようで、さら

に長時間横臥で寝ていたせい、身体のあちこちが痛い。

室内は真つ暗で、窓から差す月明かりだけが頼りだ。臃げな闇しか見えないが、物などは置かれていない。

外はまだ薄暗く、眠ってから丸一日は経っていないと思われる。

器用に肘や膝を使い身体を起こし、壁にもたれかかった。

「何のつもりだ、あの保健医…」

あの女はぼくが鈴美を探しているのを知っていたようだし、こちらが「手伝ってくれ」と言うのを待っていた。

思い出すのは彼女の乗っていた白い車。あれは本人の物でない可能性が高い。恐らく盗難したものだろう。グローブは指紋を残さないためのもの。

あとは痕跡が残らないよう処理して、プレートを外し池や海にでも捨ててしまえば、証拠は残らない。

「オレンジジュースの中身は半分減っていた。と、すると…」

先に車に乗っていた先客がいたはず。それが鈴美か。

そうならば保健医が、ぼくが鈴美を探しているのを知っていたことに納得がいく。疑問はなぜぼくらを拉致したのか。

パレードでのキスの一件も彼女のねらいだ。わざと恋人が来るのを待つて、頬にキス

をしたと思われる。クソ、本当に覚えてろあのアマ…。

——いや、そもそもぼくと利害関係を結んだこと自体、何か裏があったのか？

不干涉——とは、一応こちらから言っておいた。

ぼくは都合がいい関係だと割り切っていたが、向こうには欲の関係以上に目的があった可能性がある。その目的まではわからない。

彼女の過去にはほぼ興味がない。一方で彼女はぼくの心理を知ろうとして、何度も自爆していた。ぼくに首を絞められた事件が最たるものだ。

そして自分の過去についても、時折女は言っていた。

「レイプされた」という言葉。美人だがどこか妖しい雰囲気をもとう彼女に、電光に群がる蛾のように男は集まる。

スタンガンは今回の件に使うため用意した物ではなく、自前のものだろう。

だが実際の中身は、欲をむさぼるケモノだ。快楽を享受し男に捕食され、時に被食側にも回る厄介な女。

「普通強姦されて、あんなに色欲に走れるか…？」

女性ならば男に無理やり犯された時、トラウマになるのが一般的だ。

場合によってはPTSDにもなり得るし、生涯暗い闇が付きまとうのかもしれない。所詮男のぼくが、その心中を理解するのは難しい。

彼女が「異常」であるから、その強姦さえも快樂に感じた——だったら、いいんだが。

「……………」

ぼくが首を絞めた時、保健医の瞳の中には「恐怖」があった。

もし自分の恐怖を隠すために、あえて快樂を享受するようになったのだとしたら、事はより複雑になりそうだ。

こちらの考えが正しかった場合、彼女は異常者ではない。ただ内の恐怖を押し殺そうとする、壊れた普通の女になる。

「…フフ、フフフ」

静寂な室内に、自分の笑い声だけが響く。

その音を蹴散らすように少し遠くからカツカツと、床を歩く音と、床の軋む音が響く。

暗闇に慣れてきた目は闇の輪郭を正確にとらえ出し、この家が思ったよりも古い廃屋であることを連想させた。

部屋の前で足音は止まり、耳障りな音を立てて扉が開く。床を踏んでいた音はたまに聞く保健医のものとは違う。

「なアーに笑ってんだ、テメエ」

ぼくよりも少し歳上の男はキャップをかぶっており、顔全体を窺い知ることにはできない。体格はよく、身長も高い。

服は白いTシャツと長ズボンの上に作業員のようなつなぎを着て、土で少し汚れた運動靴を履いていた。

男は座っているぼくに近づき、乱雑に髪を掴んで顔を上げさせる。

間近で見た顔は陰鬱な印象を受けた。

「ここは森の奥だ、たとえ大声を出しても見つからねエ。例えばオレがお前をなぶって殺しちまっても、誰にも気付かれないってわけだ」

「それは、怖いな」

「……テメエ、調子に乗ってるな？ そのおキレイな顔が歪んで、惨めに助けを乞うまでい

たぶってやろうか」

立ち上がった男に間髪入れず腹を蹴られる。わざとつま先をめり込ませてくる蹴りに、肺の息がおかしな音を立てて漏れた。

床に転がって呻くぼくに、相手は卑しく笑う。

「やつぱりいい気になってる奴をいたぶるのは、イイコトをした気になるぜエ」
「ゲホッ……う、ぐっ」

加減のできない子供のように腹を重点的に蹴られ続ける。回数がわからなくなったところで、視界が回る感覚と共に床に嘔吐した。内臓が少々やられたのか、赤い血が混じっている。

その間上から聞こえた、「きったねえ」という声。

「そういう答えてもらってねえよな、何でテメエ笑ってたんだよ。怖さにチビつちまったのかア？」

「……？言つてなかったか？…いや、言つてないか」

尾を引きずるように続く睡眠薬の思考の鈍りと、敏感に感じる痛みを相反して、口角が上がった。

「彼女が異常じゃないってことは、ぼくも異常じゃあない、だろ？フフ…」

ぼくと彼女は欲に忠実な者同士、お互いが似ていることを理解している。

彼女が「普通」だとわかった今、ぼくも普通なのだとわかったんだ。それって、すごく、喜ばしいことだろ？

「……………」

先まで邪悪に笑っていた男の笑みが消え、気色悪いものを見るかのように歪んだ。

「オレでもわかる、テメエはイかれてるよ」

15話 切ったら止血、然らずんば毒を見る

陰鬱な男に引きずられて来たのは、廃屋のかつてリビングであっただろう場所。

広い部屋の雰囲気や設置されている暖炉からして、洋館だったのだろう。壁には古い老婦人の絵が飾られ、一つのボロいソファアが隅に置いてある。

「おら」

乱雑に投げ捨てられ、落とされた拍子に長年積もったホコリが舞う。月夜に照らされ一見幻想的に見えなくもないが、やはり汚い。

どうにか身体をよじって、座る体勢になった。後ろ手に縛られた腕が軋む。

男は派手な音と共にソファアに腰かけた。ギシッと、不快な音が響く。

ソファアの側には保健医と、彼女の腕の中に手足を拘束された鈴美がいた。まだ眠っているようだ。

同じ量の睡眠薬を飲まされたのだろうが、効き目には個人差がある。そう考えるとぼくには効きにくかったのだろう。

「というか、何してんだあんた」

「何って…何が？」

平然と服の上から女子生徒の胸を揉んでるんだが、何してんだコイツ。

男は完全にスルーしている。保健医の奇行に慣れ切つてるとでもいうのか。嘘だろ、
どういう神経してるんだ。

「先生ね、杉本さんだったら女の子でもいいかな——つて」

「人の彼女にやめろ、手つきも親父くさい」

「びえーん、吉良くんがいじめるよお、安十郎くん！」

「……………」

わざとらしく泣き、抱きつこうとした女を男は身体をズラして避けた。眉間に皺が寄つたのでムカついてはいるのか？

———とか待て、安十郎？

頭の中で、点と点がつながっていく。

保健医が『少年K』の記事をぼくに勧めたのは、迷える生徒を導く鍵として助言したのだと思っていた。

いや———今考えればあれは、ぼくが自分の異常性に勘づかせるために投げた、ひとつ

の布石だったのだろう。

まるでぼくが「異常」になるのを促しているかのようなだ。

薄々と感じていたもの。時折欲望にまみれた中で、保健医が覗かせていた羨望と畏怖の目。

彼女はぼくに何かを望んでいる。別の意図があるのかもしれないが、まるで死のポーズを待っているかのようで、気色悪い。

もし仮にそうだったら、幼い時にレイプされこの世に絶望しているのだとしたら、自分で勝手に死ねばいいものを。

「……先生が少年Kと関わりがあったなんて、初めて知りましたよ」

「あれ、今更気付いたの？ てつきり吉良くんだったら記事を見るよう勧めた時にでも、可能性の一つとして気付くと思ってたのに」

「ぼくはそこまで疑り深くはないですよ」

「えー、本当？」

本当だ。この保健医は人を信頼させ、その心の隙に巧妙につけ込む。ぼくの場合、当時は精神不良でそこまで考えられなかったのもあるが。

ぼくの闇が依る場所として、彼女の懐は最適だった。疑心をゆるめてしまえるほどに

は、居心地がいい。

疑ってしまえば、保健医を信じられなくなる。人の肉の味を覚えた飢えた獣を放してしまえば、その後何が起るのか容易に想像がつく。

だからこそぼくは無意識のうちに、「疑う」という選択肢を捨てた。これも彼女のねらいだったらすえ恐ろしい。

「悪女ですね、あなた。ぼくをこんなに壊すなんて」

「やだにやあ壊してないよ。君は壊れてない。ただ少しヒトと違って、生きづらいだけ。

それは私も、アンジェロ安十郎くんも同じ」

「……………」

黙ったままの片桐は、いつの間にか取り出した折り畳み式のナイフを手持ち無沙汰にいじっている。市販で多く流通していそうな、安物のナイフだ。

「あつ、そういえば私たちの関係について話してなかったよね？腹違いの姉弟なのよ、私たち。片桐くんと会ったのは私が中学生ぐらいの頃で、たまたま彼の父親がママの家に金をたかりに来た時に会ったの」

曰く、片桐は赤ん坊の頃母親に捨てられ、父親の元に置いていかれたらしい。

当然父親が赤ん坊を育てることはなかった。生き延びられたのは、男と関係のある女たちが不憫に思い世話してくれたからだ。

だが世話をする女がいなくなり、泣くばかりの子どもが邪魔になった。ゆえに男は金をせびりにいくついでに、昔の女の元に置いていこうとしたのだという。

潔いまでの父親のクズさだ。

「ママは私一人で手いっぱいだったから、突っぱねちゃったけど。でも私は可哀想だと思つたから、偶にこつそりご飯をあげに行つたのよ。ね、安十郎くん」

「……………」

「やだ、反抗期？ふふ、それもまたいいけれど」

腹違いではあれど、この姉弟には確かな絆があるのだろうか。さながら暗がりの寂れた家に単食うクモの糸のように、何重にも絡まりあつて。

「ちなみに私をレイプしたのが、彼の父親ね」

一瞬、自分の顔が強張つたのを感じた。男に襲われたという事実を知つた時も、かわいそうだと思つただけだが、今は無性な気持ち悪さを覚える。母への嫌悪感から来る吐き気と似ている。

“彼の父親”と表現しているが、ようは自分の父親ということ。

文化的にあつた時代はまだしも、現在では近親はご法度だ。

倫理はもちろん、同系統の交配は遺伝子疾患が起こりやすい。

インセスト・タブーを犯すべきではない。倫理のかけた殺人欲求が熱盛なぼくでもわかる。

“私の父親”と言わないあたり、彼女の中で自己防衛が働いているのか。無意識に第三者のように扱って、精神的負担を減らしているのだろう。

それでも、男にレイプされたという事実はなくなならない。

「——ふふ、吉良くんの驚いた顔見れちゃった。言つてよかった」

「……気でも狂っているんですか？」

「イかれているのはわかっているよ。それは君もアンジェロくんも同じ。「普通」な人間なんて、本当は多くないのかもね」

保健医は鈴美のスカートの下に手を潜らせ、太ももや膝、ふくらはぎに触れる。

こちらの表情を楽しそうに窺いながら、ついで剥き出しの肩に触れた。

透き通る手に向かったところで、ギシツと、齒軋りが鳴る。

「刺身を目の前でちらつかされて、我慢できない猫みたい」

「……ちよつと先生のこと抱きしめたくなつたので、縄を外してもらつてもいいですか？」

「だあめ」

意地悪く笑い、鈴美の手を保健医は握つた。

ぼくの彼女に触れるなど言いたい。同時に自分の愛する手が淫らに絡まり合つて、途方もないエクスタシーを感じる。

ああ、ダメだ、本当に。

爪が伸びる感覚と喉の渇き、気持ち悪さと興奮が混ざつて目頭が熱くなる。荒い息を吐いた直後、男の声が聞こえた。

「……正気かこの野郎」

「安十郎くんも人のこと言えないじゃない、私も言えないけど」

女の手に触れたい、頬擦りしたい、舐めたい、殺したい、殺したい、殺したい、殺したい――

「吉良くん、大丈夫？」

幼児にでも話しかけるように、鈴美の手に触れていた白い手がぼくの頬に触れる。

絶対今のぼくは人には見せられない顔になっている。しかし保健医は随分嬉しそうに見る。

「先生の手、ください」

「いいよ、その代わりに君も私にちようだいね」

欲望のまま言ってしまった言葉に、保健医は肯定を示す。

代わりに彼女が求めたのは肉欲ではなく、ぼくの平穩。ろくに頭が回らなくなつてきた中、耳元で囁かれる。まるで、悪魔の誘いだ。

「君は私を殺す、もつと堕ちて、もつと欲望のままに生きて」

ゆつくりと脳に言葉が染み込んでいく。やはりこの女はぼくに殺してほしいのか。

手をくれるならいいかもしれない。しかし生身から切り離された手はいずれ、ただの腐った肉の塊になる。ゴミと大差ない。

なら多少ジャマな本体を我慢してでも、触れていた方がよっぽどいい。ぼくの欲求も手さえ身近にあれば薄れる。

「合理的じゃあない」

「そう？ せっかくだと思っただのに」

保健医は男の側に戻っていく。ちょうどその時、呻き声が出た。

「……あ、れ、(っ)……は？」

起きたのは鈴美だ。眠たげな目で周囲を見回し、保健医や見知らぬ男である片桐を見て驚き、ついでぼくを見る。

何か言いかけたみたいだが自分縛られていることに気づいて、ようやく事態を察してみたかった。

「な、何が……何で私と吉影くんが縛られてるの、先生？ それにその、男の人は……」

「遅いお目覚めだね杉本さん、もう君の誕生日になっちゃったよ」

「えっ……？」

状況がわからないのは仕方ない。ぼくとしても、なぜこのタイミングで向こうが事起こしたのかわからない。

方や死ぬ気で、方や犯罪者なので、罪をなすことに抵抗はないのだろう。

考えるならタイミングか？ ぼくに殺して欲しいのだったら、鈴美は必要ない。

片桐も普通姉が死ぬのに協力するのか？ 所詮強姦と強盗をなした男の頭の中など、わからないが。

今日：いや昨日は、四人で出かけた帰りだ。

鈴美もいることを踏まえると、目的は彼女の誕生日である今日か。しかし保健医が動く理由が今日である必要性を、イマイチ見出せない。

鈴美は16になり結婚できる歳になったが、それだけでは――、

――ああ、そうか。ぼくと鈴美の約束か。

「その顔は、全部まるっとお見通しだ！――って顔だね。そう、先に手をつけちゃえばいいと思って。それも一番幸せなタイミングの時に」

「イイ気になつてる奴の絶望した顔を見るのは、最高に気持ちいいからなア」

学校の情報屋である保健医なら、知られていておかしくはなかった。：いや、流石に地獄耳すぎるだろ。

鈴美はまだ話の意味を理解できていないようだ。悪いがぼくの一言で眠気を吹っ飛ばさせてもらう。

「男に犯される屈辱を知っているくせに、同じことをするんですか？」
 「前に言ったでしょ、嫉妬した女は怖いって。そうだな、例えばだけど——」

——中国の三大悪女の一人である皇后呂雉りよちは、皇帝である劉邦から寵愛を受けた側室である戚夫人せきを奴隷にし、両足や目や聴覚、声を奪い人豚にした。さらにその息子さえ毒殺している。

そこには戚夫人が劉邦に彼女の息子を皇太子にするよう頼んだことが、恨まれる理由となっている。

劉邦は戚夫人の息子を皇太子に——と考え始めたが、結局周囲の反対意見もあり、皇太子は呂雉の息子となった。

「呂雉の息子はね、母親のひどい行いにショックを受けて、酒に溺れ早世してしまうの。呂雉は子どもの葬儀の時嘆きはすれど、泣きはしなかった。多分自分の地位を心配してたんじやないかしら？まさか国を指導する者がいなくなり、民を憂えていたわけがない」

しかしそんな悪女でも呂雉が戚夫人を恨んだ理由に、皇帝の寵愛を受けていたことへ

の嫉妬があつたはずだと、彼女は言った。

鈴美の笑顔がかわいらしいものならば、保健医は本当に綺麗に笑う。

「そう考えたら私つて、すごく優しいでしょ。ね、杉本さん」

「……い、いや」

鈴美は自分が何をされるのかわかつたのか、首を振つて小さく震え出した。

絶望の色が瞳の中に浮かぶ。その色を愛おしそうに保健医は見つめた。片桐はソファーに座つて鈴美を見て、舌なめずりをしている。

ぼくはぼくで、うっかり人を殺してしまひそうなくらいには昂つている。

本当に、マイノリティーな奴しかここにはいないな。

「足だけ縄を切つちやうから、暴れないでね」

「いや、いやっ……やめて、……おねがい、せんせえ……」

「暴れると、うっかり刺さつちやうかもしれないわよ？」

「やだ……やだっ……!!」

保健医ならまだしも、鈴美がレイプされたら壊れるだろう。……いや、保健医も死を望むほどには相応に壊れている。

座つた状態で見ていたら恐怖に引きつった目と合う。

普段つけているカチューシャは落ち、長い前髪が顔にかかっていた。

「吉良くんも動けないから無理だよ、諦めなつて」

「やめ、やめて……おねがいます……おねがい……」

「ふふ、初めて犯された時つて痛いよ。私の時は気持ち悪くて気持ち悪くて、仕方がなかった。視界に映る男の顔も、息遣いも、匂いも、何もかもイヤだった。微塵でも「気持ちいい」と思った自分も気持ち悪かった。全てが——気持ち悪かった」

まあその男ももういないんだけどねと、保健医は笑う。

その横に移動した男が、前でボタンを留めるタイプのピンクのトップスをはいだ。白い下着が露わになる。

最早悲鳴さえ聞こえない。ただ掠れた声が耳に届いた。

「たすけ、……て」

瞬間、ぼくは駆け出した。

「なっ……!？」

片桐に勢いのままタツクルし、驚いて固まっている保健医の手から縛られた手で器用にナイフを奪う。

口に咥えて縄を切った直後、男の拳が振りかぶった。頬をかすつたがしやがんで避け、そのまま足で顎に蹴りを食らわせた。白目を剥き男は倒れる。

「どう……やって……」

鈴美の縄を切つてからシャツで唾液や指紋を念入りに拭いて、片桐の手に握らせる。何かあつても誘拐で片をつけられるようにしたい。なに、ぼくには暴力を受けた跡がある。

縄を解いた理由は、引きずられていた時に落ちていたガラスを拾つたとも言えまいだろう。逃げている最中、どこかに無くしたとも付け加えて。

「忘れたんですか？ ぼく、爪伸びるの早いですよ」

「……あつ」

呆然と口を開けて驚く保健医はけっこう、幼く見えた。

「鈴美」

「……よしかげ、く……」

震える身体を抱きしめてやり、立ち上がらせた。足取りはしつかりしているから大丈夫だ。むしろぼくの方がふらついてしまった。今になって腹を殴られたのが身体に出てきているのだろう。

ついでに落ちていた彼女の服も拾って、肩にかけさせる。

「……あの」

「今は喋らなくていいよ。おぶろうかい？」

「……………」

小さく鈴美は首を振った。地べたに座り込んで下を向いてしまった保健医を背に、華奢な身体を支える形で歩き出す。

場所は途中車で見えた景色から、ある程度の位置は把握している。

杜王町は海と山がある高低差が大きい場所だ。なら下つていけばいい。

人がいるところまで今の状態だとだいぶ時間がかかりそうだが、片桐が復活する前にはお縄にかけられるはずだ。縄はボロボロになって、拘束は難しい。

そも逃げ出してきた設定なら、誘拐した相手を拘束できる余裕があるわけがない。

ギャンブルは好かないが、今は目覚めないことに賭けよう。運動音痴だが破壊力には自負がある。

「……吉良くん」

扉を出る際、保健医の掠れた声が聞こえた。

「あなたの手、好きでしたよ」

ぼくは彼女との関係に、手を切った。

16話 どこまでも遠くて、青い

じつとりとした、蒸し暑い日だった。ミンミン、と聞こえるセミの声。網戸の向こうの景色はカゲロウのように、ゆらゆら揺れている。

外の暑さと内の熱さが、混じっては溶けていく。

溶け落ちた水はそのまま、畳の上に落ちた。

ズツ、ズズツと、何かを引きずるような音。

足にかろうじてスカートを引っかけた少女が、芋虫のように這う。

畳の目に爪を立てて、ガリガリと削った。

揺らめくカゲロウに少女は手を伸ばす。

『私も、混ざりたい』

あるいはアイスのように溶け、そのまま蒸発したい。残るものはきつと何も無いのだろう。

しかしどれだけ願っても、少女の身体は溶けない。

ふるいにかけられたように、穢れた身体は消えない。

その事実を改めて理解した時、少女は唇を噛みしめ小さく、小さく泣いた。

セミの声や外を通る車の音にかき消され、小さな声は消えていく。いよいよ陽は落ち、部屋は真っ暗になる。

アパートの一室で灯りのない中、一人泣く少女。

そのことに気付く者は、どこにもいなかった。

彼女は独り、だった。

四角い暗い箱の中で、少女は立ち上がる。

闇の中一糸まとわぬ姿は、さながら聖母像の如し。

色の薄い髪が不思議な魔力をもって怪しく揺らめいた。

少女は殴られた部分をひとつひとつ、指でなぞる。

荒れた室内。ベッドの傍に落ちているセーラー服。

『いらして、やる』

少女は形のない包丁を、手に取った。

夕暮れ時は蒸し暑かったというのに、今は少し肌寒ささえ覚える。
時折つまずきそうになりながら、鈴美の手を引いてぼくは歩いた。

時間が経てば暗闇にも目が慣れ、よろめく回数も減る。

「……………」

お互い喋らない。ただ手は拒まれることなく、強く握りしめられている。

自分よりも高いこの手の体温が、多少の不安を和らげてくれた。

咄嗟の判断とはいえ、粗が目立つ作戦だ。片桐が起きれば車を使つて追いかけてくるはずだ。保健医はあの様子では流石にもう、何かをしてくることはないだろう。

「……………」

また少しふらついた。ゾクリとした寒気のようなものが、少しずつ背中から上へと這い上がっている。

「……………だ、い、丈夫?」

「……………うん、ちよつと蹴られたところが悪かつたんだと思う」

鈴美や保健医がいなければ、ぼくの精神衛生上何度か仕返しに殴つた。あくまで殺さなければいい。

にしても、ぼくよりよつぽど酷い目に遭つた彼女に心配されるとは。

「あの…男の人に、やられたの？」

「逆に先生が蹴ると思うかい？まああの保健医が怒りに身を任せて人を蹴っていたら、少し面白そうだけど」

「……………」

冗談を返せるほど元気ではないらしい。

ぼんやりと前を見ながら喋る様子に、一抹の不安を覚えた。

「鈴美？」

「……………なに？」

「やっぱりおぶるよ」

「……………」

否定の言葉を言って彼女は俯いてしまう。危うさを感じ、一先ず離れないよう肩を抱き寄せた。

その間にもまたよろめいて、そのまま手が離れた。手は虚空をかすめ、ぼくは地面に倒れる。

「吉影くん…!？」

「……………何か、力が…」

磁石でくつつかれちゃったみたいで、身体を起こせない。蹴られた身体の方が本格的

に参つちまったのか。

彼女はぼくの腕を掴んで引き起こしたが、重さに耐えるだけで一歩も歩けない様子だ。

「……先、このまま真つ直ぐ行つたら、大きな道路に出る。下り坂の方に歩いていけば、民家が見えてくるはずだ」

「で、でもっ……!!」

「君じゃぼくを持ってないだろ。いいから行って、今の君を一人で行かすのは心許ないけど」

「……吉影、くん」

「大丈夫だから、ほら」

彼女の背を強く押した。身体は再度地面に落ちる。

鈴美は戸惑った顔をし、意を決したように走り出す。だんだん遠くなっていく後ろ姿を見つめながら、ぼんやりと来た方の道を振り返った。

辺りには虫の鳴き声や、パキッ、という音と共に小動物の声が聞こえる。

ぼくの身体じゃないみたいに、五感が自分の手から滑り落ちて行く。

混濁していく意識の中で最後に見たのは、強烈なほど眩しく感じられる二つの丸い光と、エンジンの音だった。

???????

『Good morning. A.M. 5:00をお伝えします』

車から聞こえた軽快なラジオの声に、吉良は目を覚ました。

「うっ……」

覚ましたはいいものの、身体が鉛のように重い。シートにもたれるようにして上を向いていた頭を起こすだけで、相当な気力を使った。

目のフロントガラス越しに、薄明るい世界が見える。視界には辺り一面に海が広がっていた。

数羽のカモメがその白い羽を広げ、揚々と空を旋回している。

「おはよう」

隣から聞こえた柔らかい声に、吉良は視線を向ける。

朝日に霞むおぼろげな輪郭を捉え、胸元に流れる亜麻色の髪をつたい烏色の瞳にたどり着く。優しげに微笑む女に、眉間に皺を寄せた。

「なぜ…あなたが？」

「片桐くんだと思つた？残念だつたかしら、私で」

「いえ、あの男よりはあなたの方がまだマシですよ」

「ふふ、そう？」

吉良は気怠い身体にむち打って、動かそうと試みる。腕は持ち上げられるが、全身を動かすとなると思うようにはいかない。何かの支えなしではまず歩行も困難そうだ。

いくら怪我を負っているとしても、明らかにおかしい。そこでふと一つの可能性を見出す。

「まさか…睡眠薬以外に、何かぼくに盛つたのか？」

「遅効性の薬物よ。吉良くんが眠つた後に、ちよつち盛つてたの」

カバンから保健医が取り出したのは数本の注射器。流石の吉良もこれには顔を青ざめさせた。

「大丈夫だつて、依存性はあんまりなかったと思うから」

「だからってバカみたいに何本も使うか普通…!!」

「だって効くかどうかわからなかったんだもん。まあ睡眠薬もあまり効いてなかったみたいだから、多めに注射しておいて正解だったかな」

静寂になった室内にラジオの曲が流れる。

曲はイギリスのロックバンド、クイーンが1970年代に発表した曲『*Killer Queen*』。

佐藤はその曲を口ずさみながら、バッグから一本の刃先が布に包まれた包丁を取り出した。

布を取り払われた包丁が、光を受けて淡く光る。

「なんだかこの曲って女に振り回されるけど、それでも彼女のことを愛してる男目線な内容の歌じゃない？」

「…ハハ、まさしく今のあなたのように、『She is a Killer Queen』ということですか」

「確かに男を悩殺できちゃう私はキラークイーンなのかも。でも違うわ、君が殺人鬼になるのよ」

保健医は彼の腕を掴み、包丁を握らせた。

「…ぼくは、人は殺さない」

「それは今だけ。人を殺す快樂を知ったら、君は絶対に止まれなくなる」

「死にたいのなら、勝手に死ねばいいだろ」

「君じやなきやダメなの、吉良くんに殺されたいの。ねえ、おねがい…」

懇願の色を含む瞳がゆっくり近付く。一瞬薄い唇が触れ、離れた。

不意に吉良は、そういうえば口紅はあまり付けない女だったと、思った。

「あなたの弟なら逆鱗にでも触れれば、殺してくれるんじゃないのか」

「安十郎くんは君と同じでヒトを殺しても罪悪感を抱かない人間だけれど、時たま電話で生存確認をされるぐらいには、情を持たれているわ」

「情……ね」

家族の情など兄弟がいない吉良にはわからない。歪な環境下で育ったせいで、家族としての情もわからずにいる。例えば幼い頃、親に叱られる鈴美が羨ましいと思ったことはある。しかし所詮は子どもの頃のこと。

今は歪に育った中で、生まれた欲求を抑えるだけで手いっぱいだ。

「だったら尚更弟は、あなたが死ぬのを望んじやいなくないと思うが」

「どうかしらね、本当の安十郎くんだったら少しは、悲しんでくれるのかな。あの子の感情は私でも深くまではわからない」

「本当の……ことは…」

「本物は今勾留中。アレは、私が用意した従順な偽物の協力者。本物の場合 // 今の吉良

くん”じゃ、殺されちゃうから。…あ、話してたのはほとんど本当だからね？」

「…ハア、もうあなたの発言全般が信じられませんか」

「まあ、確かにそうかも。けっこう平気で嘘言っちゃうから、私」

「自分で言うのか…」

嘘を吐いたらすぐに顔に出る鈴美が可愛らしく感じるほどだ。

彼女は無事保護されたのか。ならば警察が動いているはずだ。

「先生にとつて「死」が幸福なんですか？」

「幸福？……違うよ、うーん……ふふ、罪、かなあ…」

「罪？」

どこぞの男にでも恨みを買われているのか。裏面の彼女を見ているからこそ、うっかり夜中に包丁で刺されても不思議ではない。

「本当の、私が目に固執するようになった理由はね、とある目が忘れられないからなの」「強姦された時に見た男の目ではない、ということですか？」

「うん……まあ、同じ人間ではあるけれど」

それは佐藤の性癖の原点。償わなければいけない十字架。

「私ね、ある男を殺したの」

空中をさまよう保健医の目を、吉良はじつと見つめた。

前にも見た弱い彼女。普段の取り繕った仮面を付けていない女の姿。

「絶対に殺すために入念に計画を立てた。人通りのない時間帯やカメラの位置、全部全部殺すために、復讐のために考えた。そして……殺した」

彼女のシナリオ通り夜中に泥酔した男が、階段から落ちて死亡した。昼間に一瞬放送されるような小さなニュースにもなったが、事故として片付けられた。

全てが完璧にいった。しかし彼女は間もなく死を考えるまでに伏せてしまった。

「忘れられないの、突き落とした時の男の目が。私を襲った時に浮かべていた気色悪い目も忘れられない。でもそれ以上に突き落とした時に一瞬合った目が、今でも頭にこびりついて消えない」

それは紛うことなき罪悪感からなる感情。

吉良では抱くことがない、人を殺したことによる罪への意識だった。

「あの男に抱かれて、少しでも快樂を感じてしまった自分の罪滅ぼし。この身体は、男の性処理道具。そうすることで私の罪が……少しでも……少し、でも……」

保健医の唇が小さく震えた。その震えは身体全体に広がっていき、嗚咽をこぼす。

泣いている彼女の顔を吉良は初めて見た。

本当に、本当にただの普通の人間だった。

異常に振る舞うことでしか生きられない、哀れな女だった。

「ずっと待つてた。私を殺してくれる人を探してた。人を殺しても罪悪感なんて抱かないクズみたいな人間を」

「誰がクズだと？」

「ふふ、吉良くんのこと。そんな君に殺される私はもつとクズで、生きていてもどうしようもない……生きる意味もない、女かな」

ころして、と呟く女。

吉良は握らされた包丁を持っただまま、吸い込まれるような空を見た。

朝日が地平線から覗いている。その光が海を輝かせて、とても美しい。

「殺してくれないなら、このまま一緒に心中しちゃうんだから」

「本物の片桐ならばくを殺してしまうと、偽物を用意したあなたが？」

「それとこれとは別。……本気よ」

保健医の手がシフトレバーに向かう。パーキングからドライブに変わり、車はゆっくりと前に進み出した。

ここは海が一望できる。言うなれば断崖絶壁の場所。人通りのないこの場所は知る

人ぞ知るスポットだ。

一面に広がるのは全てを抱擁する、柔らかな世界。

天国ももしかしたらこんな優しい色でできているのかもしれない。

無意識に彼の口は動いていた。

「一緒に、死にましようか」

生きるだけで辛いのは彼も同じだった。

つきまとう母親の行き過ぎた愛情。女の手への異常なまでの欲望。そして、殺人欲求。

特に手の欲望と殺人欲求は、生きていれば絶対に後ろについて回る。

殺してしまえばいつそ楽なのかもしれない。しかし彼は「普通」に囚われている。

望んだ平穩を結局は生きてからこの方、送れたことさえもないのかもしれない。

今不思議と感じるさぎさみなみのような安らぎに、吉良は目を細めた。

「いい…の？だって君は、平穩に生きたいって……吉良くんらしくない」

「自分らしきなんてわからない、あなたがおっしゃったんでしよう。確かにぼくらしく

ない。でも一瞬抱いた感情に流されるのもまた、人間らしいでしょう？」
「……………」

綺麗な顔を歪めて涙をこぼす彼女。メガネを取り袖で水滴を拭いても、次から次へと落ちてくる。

何となく吉良は、その頬に手を伸ばした。

「ぼくが普通になれないなんて、とうの昔にわかってる」

「…………ふふ、そうだね」

「なら一緒に、付き合いますよ」

吉良は重い身体をどうにか動かし、薄い唇に口付けた。

「吉良くんは、ずるいなあ」

彼女はしかし、幸せそうに微笑んだ。

例えるならお経のように、男は延々「普通に」と呟いている。

かすれた呻き声から発せられる声は不気味だ。

『……………』

吉良は真顔のままゆっくり顔を離した。胸にストンと、妙な確信を持つて、これが自分なのだ、理解した。

「普通」に縛られている彼。その鎖がこれなのだ。

『フ…フフ、ぼくは本当に、心の底からイかれてるみたいだ』

いつの間にか彼の手には一本の包丁が握られていた。

その先が横たわる男の上へと向けられる。白い世界の中、刃が鈍く光った。

ズプツと、肉に突き刺さる包丁の音が響き、続いて引き抜く時に脂肪や血液、肉を引

きずって粘着質な音が聞こえた。

そのまま何度も何度も、吉良は自分を刺し続けた。

身体にかけられた白い布がボロボロになり、赤黒い血が部屋中に散乱した頃、ようやく彼は止まった。

身体から一気に力を失ったように座り込む。跳ね返った血で、全身は水しぶきでも浴

びたように真つ赤だ。

『何が、何が平穩だ……「普通」に生きたいだ……。どうあがいたところで、ぼくの欲求が消えるわけがない』

本人が一番自分の生き方の矛盾を理解している。

しかし理解していても、変えることができない。そう、とても滑稽なのだ。彼をテーマにしたら一本の不条理文学でも書いてしまいそうな。

『……?』

不意に吉良を覆うように影ができた。

視線を上げれば、先ほど刺した男が立ち上がっていた。身体には何も身にまとっていない。えぐれた上半身の所々から血が吹き出し、皮膚を伝って下に落ちていく。

顔にかけられていた小さめの布は血で張り付き、男の顔付きをぼんやりと浮かび上がらせている。

『……』

言葉にならない声を上げる男に、吉良は目玉だけ動かし睨め付ける。紫目の中で底冷えた狂気が渦巻いた。

『……死ぬ』

湧き出る殺意を抑えることができない。ただひたすら目の前の男を殺したい。

さすれば己の歪んだ生き方がきつと変わるはずだ。その思いは懇願に近かった。
『死ぬ、死ぬ死ぬ死ぬ』
『死ぬ!!』

らしくもなく大声で叫び、男につかみかかる。彼の人生で一番感情的になった。
今度は顔の原型をなくすほどに刺し続ける。いつの間にか浮かべていた笑みに、吉良
本人は気付かない。

『ハア、ハア……』

酸素を求めて、激しい呼吸を繰り返す。刺し続けるにもそれなりの体力がいる。

彼は動かなくなつた肉塊から立ち上がり離れる。カランと、包丁が地面に落ちた。

そのまま全身の力を失い、後ろの壁にぶつかつてへたり込む。もう指一本動かすこと
すら億劫だつた。

『また、気味の悪い声だ。』

顔を少し上げると、男の手に彼の落とした包丁が握られているのが目に入る。

赤黒い刃が少しずつ近づき、彼の喉にゆっくりと刺さつていった。

そして頭が落ちる感触と共に、吉良の意識は途絶えた。

???????

目を覚ました直後、電光灯の光が眼球に刺さった。

外の光も相まってハレーションを起こす。ようやく落ち着いてきた頃に看護婦が部屋に来て、慌てて主治医を呼びに行った。

看護婦が連れてきた男の医者によると、どうやらぼくは二週間もの間昏睡状態にあつたらしい。

その間父と母がつきつきりで見病していたそうさ。

「君は二日も縛られて車内にいたんだよ。仮にあと数日見つからなかったら、脱水症状などで死んでもおかしくなかったんだ」

「……そ、です……か」

口から出たのはひどくかすれた声。強い倦怠感と妙な違和感に眉を寄せた。まるで自分の身体じゃないみたいだ。ベッドの上で寝ているというのに、ふわふわした感覚がある。

「なんか…変な感覚が、する」

「薬物の影響だよ。今後治療をしていくことになるが、今はまだ眠っていないさい」

「……、……」

そういうえば保健医はどうなったのか。鈴美は無事なのか。

聞きたいことは幾つかある。しかし遅かれ早かれ、警察が事情聴取に来るだろう。

今はもう少し、微睡の中に沈んでいたかった。

二日後には補助は必要だが、自力で歩けるようになった。母があらかじめ家族以外の面会を断っていたため、来るのは両親のみ。

ただでさえ身体の不調が顕著だというのに、母の時は特に追い討ちだ。

「ちよつといいかね」

父が面会に来ていた午後、二人の警官が病室を訪れた。

一人は恰幅のいい髭を蓄えた中年で、もう一人は細身の眼鏡をかけた青年だ。

事件の事情聴取ということで、父に席を外させ一時間ほど話すことになった。

事件は当初片桐安十郎を名乗っていた男と、佐藤が共犯して起こした身代金目的の誘

拐として、進められていたようだ。

しかし男の方は「己が片桐安十郎である」という催眠をかけられていたらしく、現在は主犯を佐藤容疑者とみて進めている。

鈴美は無事に保護されたと聞き、少し安心した。

「佐藤先生がなぜ誘拐なんか……」

「そのことだが、彼女は随分前から高級ホストクラブに通っていたそうだね、金銭面でトランプがあつたらしい」

「先輩、喋りすぎです」

「おっと……そうだな」

細身の警官に注意され、恰幅のいい警官は一つ咳払いをし、話を戻す。

ホストクラブの件は、金がないと思わせ、誘拐したと見せかける保健医の策だ。

「ぼくが旧家の出でそれなりに裕福であることや、保健室によく通っていたことを踏まえれば、ねらう理由にはなる。」

「杉本くんにも色々と聞くことになつたが、無理はしないように。しかし正直には答えて欲しい。また、聞いた情報については他者に漏らすことはないから、そこについては安心してくれ」

「……はぐ」

保健医が用意しておいた誘拐の線に乗って、ぼくも自分の都合の悪いことは隠しつ

つ、話を進めた。

発見された状況についてだが、朝現場に釣りに来た男性が不審な車を見つけ、車内の様子を窺った。

そこに手足を縛られた状態で倒れていたぼくを見つけ、あわてて警察に連絡したそう
だ。

話の合間を縫い、ぼくは気になっていた疑問を聞いた。

「あの…佐藤先生は今、どうしてるんですか？」

警官はこちらを観察するように見て、口を開く。

「佐藤容疑者は海に身を投げ、自殺したよ。先週現場から数キロ離れた浜辺で遺体が発見されている」

背にじつとりとした汗が流れた。

口を開けて固まったぼくに、恰幅のいい警官の目が少し鋭くなった。

「物的証拠などから、警察側は事件が誘拐で間違いないと見ている。しかし私人としては、少々引つかかることがあってね」

「引つかかる、ことか?」

「ああ、佐藤容疑者がなぜ君だけでなく、杉本くんを攫ったのか疑問だね。聞けば君は彼女の恋人だそうじゃないか」

「……………」

「彼女は言葉を濁していたが、君と佐藤容疑者の間には、並々ならぬ関係があったのではないのかね?生徒の一部が、君と佐藤容疑者が付き合っているという噂を、聞いたことがあるという裏も取れている」

額から汗がしたい、ゆつくりと頬を滑って、シャツの上に落ちる。

身体が小さく震え出し下を向いたぼくに、警官は強い口調で話を続けるよう指示する。何が無理をしないように、だ。細身の警官は上司に少し落ち着くよう諭した。

あくまで怯えたふうに、表情や声を繕う。

「中二の…時でした」

「中二の時が、何だね?」

「……先生が、ぼ、ぼくに」

「君に?」

「……………関係を、迫ったん、です……………」

口元を抑え、手が白くなるほど強くシャツを握りしめる。

そのまま小さく泣き出したぼくに、恰幅のいい警官は表情を変えず続ける。

「それから関係は続いたのか？」

「……はい」

「その関係は君の合意があつたんじやないのか？ 中学ならまだしも、成人男性と大差なくなれば、無理にでも拒むことができたはずだ」

「……おどされて、たんです。断つたらバラすと」

「脅されていたとしても、警察や親に隠れて助けを求めることができたはずだ。それをしなかったのはなぜだね」

「それ、は……」

暫し黙り込んだ。しかしこちらに向く鋭い目が外されることはない。一つの可能性としてこの男は、ぼくを疑っている。

ゆっくりと顔を上げ、視線を合わせた。

「母親に、知られたく……なかった」

警官の表情が変わった。

ぼくの家の事情について調べたのなら、小学校時代の話を通じて、母の息子に対する

異常なまでの過保護さを知っているはずだ。その上で聞いたのは、調査の一環として仕方あるまい。

嘘をつく時は、半分真実を添えるとより信憑性が増す。恰幅のいい警官は、すまなかつた、と頭を下げ謝罪した。

「杉本くんもそうだが、君も辛い目にあつたと思う。普段の生活に戻れるよう警察側もサポートをする所存だよ」

「……………」

「あと使われた薬物についてだが、車内にあつた佐藤容疑者のバッグにスタンガンと、10本以上の空になった違法ドラッグが見つかつている。異常と思わざるを得ないが、誘拐する際君に使用されたのが検査でわかっている。また何度か事情を聞きに来るかもしれないが、そこは了承してくれ」

「……………」

「警部、そろそろ時間です」

「ああ、わかつた。私たちはこれで失礼するよ」

二人の警官は部屋を後にした。恰幅のいい男のデリカシーのない言葉には遺憾だったが、無事終わった。

あの調子だと強姦に遭いかけた鈴美の地雷をえぐっていきそう、恐ろしい。一時間の事情聴取を終えて、ようやく緊張の糸が解けた。

「にしてもやはり、彼女は死んだか」

保健医が最後に言っていた「ずるい」という言葉。

本人もぼくと一緒に死ぬ気など、さらさらないことに気付いていた。

しかし、ぼくからはじめて口付けた時、本当に嬉しそうに笑った。妙齢の女が、穢れない少女のように。

保健医は本当にぼくを愛しているとわかっていたからこそ、絶対に殺さないと確信していた。「愛」がなんたるかをわからないぼくが言うのも、お門違いだが。

彼女の言う通り、ぼくは人間のクズなんだろう。でもぼくは平穩に、普通に生きたいのだ。まだ人生の半分も生きていないのに死ぬ気など毛頭ない。

「まあでも、ただ死ぬだけで終わる女ではなかったな」

最初使われたのは数本だけだった。だが死ぬ前にあの女は、持っていた残りの薬物を

すべてぼくに打った。

思い出したのは彼女に口付けた後のこと。

あの時も意識がかなり混濁していた。幸せそうな彼女に抱きしめられ、意識が落ちた。多分その後、冥土の土産に打たれたのだろう。この場合死んだのは彼女の方だが、一步間違えればぼくも死んでいた。

殺しはしない。けれど勝手に死んで一緒に来てくれるのなら、いいかもしれない。そんな彼女の思いが、透けて見えた気がした。

「薬、飲まなきゃあな……」

ベッドサイドにある薬の入った袋に手を伸ばし、何種類かの錠剤を一粒ずつ水で流しこむ。

どれも種類は精神安定剤の類だ。医者は薬物の後遺症として依存性は薄い代わりに、今後精神疾患が引き起こされるリスクがあると Saying していた。現に飲み忘れると意識がぼんやりとしていく。

薬は好きじゃない。まるで自分が普通じゃないみたいで、子供の頃から苦手だった。病院もなぜか苦手意識がある。

「そう言えば、結局アイツはいつたい……」

夢で見た何とも気色悪い存在。いや、自分自身だったか。

せめて夢の中ぐらい植物のように平穩にいさせて欲しい。

勢力の薄れたセミの声に耳を傾けて、外を見る。以前よりも日の光が眩しく感じられるようになった。

眼下には街があり、さらに遠くではかすかに海が見える。

佐藤の笑みと共に見たあの朝焼けは、とても美しかった。

ぼくは非科学的なものを信じちゃいない。

けれど、天国はもしかしたらあるのかもしれない。全てを包み込む柔らかい光が、罪人の魂さえ浄化する。

確かにぼくは死ぬ気などなかった。しかしあの眩い世界を見て、そして彼女の「幸福」のような顔を見て、死もいいと感じてしまった。全くもって、吉良吉影らしくない。

ただ、死んだ後には穏やかな平穩がある。

死んだ彼女がほんの少し、一粒の砂糖ぐらいには、うらやましいと感じた。

「本当に……罪深い女性だよ、あなたは」

警官が去り際、ついとこぼしていた「所詮弟も異常者なら、姉も異常者だ」という言葉。

その内容が脳にじんわりと滲んで、ろ過ぎれていく。

彼女は普通のかわいそうな人間だった。その事実を知るのはぼくだけでいい。

窓から覗く空は、どこまでも清々しい蒼い色が広がっていた。

???????

吉良は目を覚ましてから1ヶ月後、退院した。

すでに学校は始まっており、誘拐事件にあつたという事実から、遠巻きにされることが多くなった。保健医と本当に付き合っていたのでは?という噂も相まって、余計に。

鈴美は友人が多く、彼女を心配してくれる人間が多い。対し吉良は付き合い程度の関係しかない。

本人はしかし、気にした風もなく過ごした。一応事件に遭つた人間として、以前よりも影が増した雰囲気は装った。

そして時間は過ぎ、大学受験を終わらせた吉良は無事卒業式を迎えた。春からはD学院の文学部に通う。

午前中に式を終わらせた彼は、親に友人と祝いに行くと言え、今はひとりブランコに腰掛けています。家にいたくないがゆえの、軽い逃避行。

夕暮れも前な時間に高校生が公園のブランコに乗っている図は、なんともシユールだ。

「やつほー、吉影くん」

公園で遊んでいた子どもが異質な高校生にそろって逃げ出した中、声がかげられる。

吉良は地面を見つめていた顔を気怠げに起こした。

「…鈴美か、久しぶりだね」

「うん、久しぶり。誰かさんがずっと会うの避けてたから、こうして話すのはあの時以来かな」

「面会は親が断ってたから仕方ないよ。思ったより元気そうでよかった」

「まあ、かつてヤンチャ娘として名を馳せたのは伊達じゃないから」

「………そうかい」

鈴美は彼の自転車の隣に自分のも止めると、ブランコまで来て彼の上に乗った。無言で頭を叩かれ、非難の声をあげる。

「女の子に手を出すなんてサイテー!!」

「隣に座ればいいだろ、何でぼくの膝の上に乗るんだ」

「対面して乗った方が良かった?」

「……もういい帰る」

立ち上がろうとした青年の手を彼女は引いた。

何か意を決した色を浮かべる桃の目に、吉良は思わず眉を寄せる。

「何で、私を避けるの?」

「事件のことを思い出すから」

「…嘘は嫌いよ、ちゃんと教えて。助けてもらったお礼も…言えてないのに」

「君は所詮、ぼくと保健医の痴情のもつれにあつたに過ぎない。言うなれば被害者だ、合
わす顔もないよ」

「本当に、そう思ってる?」

「じゃあなんて言つて欲しいんだ、ぼくに何を求めてる」

紫目が獐猛な色を宿したことに彼女は気付きつつ、見て見ぬふりをした。

彼から言つてもらわなければ意味がないのだ。

「吉影くんのこと、教えて」

「ぼくの知らないところなんてないだろ、それなりに長い付き合いなんだから」

「長いってもんじゃないよ、10年以上経ってる。私たちまだ二十歳にもなってないのに」

「でもぼくらはもう子供じゃない、ほとんど大人だ」

「…そうね」

「たとえ付き合いが長くても、大人になれば別れたいくつもの道に沿って離れていく。むしろ時間を長く共にできたことを幸運だと思つて、過ごしていくのも一つの賢い選択だ」

暗にそれは、「別れよう」という吉良の遠回しな物言い。

鈴美はしかし首を縦に振らない。相手が食い下がれば食い下がるほど、苦手になることを知っている。

「私は吉影くんと、一緒にいたい」

「ぼくは彼女がいながら他の女と寝る最低な男だぞ、やめとけ」

「うん、知ってる。でも私は吉影くんが好き」

「……ハハ、随分と趣味が悪いんだね、君は」

どちらも譲る姿勢をみせない。

彼女は仕方なしと、吉良の膝の上に乗っていた手に指を伸ばす。触れた瞬間、相手の肩が跳ねた。

「私の手、好きでしょ？」

「…いつぞやの保健医と同じことを言わないでくれ。好きではあるが」

「どうして一緒にいちゃダメなの？…理由を教えてください」

「カンニングはダメだ、自分で答えを見つけて」

「教えて」

鈴美の両手が彼の冷たい手を包む。

ギリツと、歯軋りの音が鳴った。

「そんなに、知りたいのかい」

底冷えた声だ。鈴美は思わず彼の顔を見たが、ちょうど前髪に隠されて見えない。

ただ口元だけは、うっすらと弧を描いていた。

「せっかく、逃したのに、どうして自分から捕まりに来るんだ」

「逃がし……？」

「このぼくが君の「幸福」のためを思ったのに、人の気なんて知らないで…簡単に言ってくれるじゃあないか」

「……吉影、くん？」

突然肩をつかまれ、鈴美の瞳に一瞬恐怖が浮かんだ。異常なまでに震え出した華奢な身体に吉良は目を見開いて、小さく「ごめん」と呟き、離れる。

鈴美はそれでももう一度、手を伸ばす。彼はその細く白い手を見つめ、握り返した。

「君の手が、好きだ」

「…うん」

「女の手が好きだ。ぼくを「幸福」にしてくれる。女の美しい手がどうしようもなく好きで」

「うん」

吉良の空いた手が彼女に首に近付き、指をほんの少し、食い込ませる。

「殺したい」

艶さえ含んだ声は、空気に溶けた。

彼女の目は溢れんばかりに開き、また首を縦に振った。その薄い唇は震えている。

「それが、吉影くん…なんだ、ね」

「君を殺したいと思ったのは、一度や二度じゃない。保健医も何度も殺したいと思った。その他の女も殺したいと思ったことがある」

「……そう、なん……だ」

吉良は「恐怖」に染まった様子の彼女を見て、今更後悔した。

やはり、言うべきではなかった。しかしこれ以上隠すこともできないと、諦めに似た気持ちが悪化する。

「ぼくが、怖いだろ」

「……」

「だからもう、近付かないでくれ」

「……」

「君を傷つけない。ぼくは誰も殺したくない。だから関わるな」

「……ッ」

離れようとした男の手を彼女は握る。

「……それでも、一緒にいたい」

「……理解できないな。ぼくは君を殺すかもしれないんだぞ」

「好きだから、だよ」

「……やっぱり、理解できない」

佐藤の言動も、鈴美の言動も、理解はできない。だが感情の部分に共感することが、彼
はできない。

その欠けた部分を補うように、彼女は吉良の心に寄り添おうとする。

「…何でもするから、おねがい」

「じゃあ別れよう」

「それはダメ！」

「…：大概ワガママだよね、君って」

じゃあと、吉良は彼女の正面を向き手を引き寄せる。

「わたしの手になってくれ、杉本鈴美」

その瞳がまるで獲物をねらう猫のようだと、彼女は思った。

同時にもう後戻りはできないと、生唾を飲み込む。それでも、「否」とは、言わなかった。

「…わかった」

「フフ、そうかい」

青年は微笑みブランコから降りて、片膝を立たせ座る。

そして彼女の肌に吸い付くような陶磁器の如き手に、愛おしげに口付けた。

二章

18話 ねこはいるよのび太くん

大学生になり二ヶ月近い夏休み期間中に吉良は車の免許を取った。

そして読書系のサークルに入った彼は一部の横暴な先輩のパワハラを受け、肝試しに強制参加させられていた。

幸い誘拐の件や、小学校時代の不名誉な異名を知る者はいない。

平穩に過ごせてはいる。ただ作ったネクラなイメージに拍車がかかり、なめられやすくなっていた。

四人乗りの車に何人もの一年生が押し込まれる地獄絵図。冷房をつけたところで蒸し暑さは余計に増すばかり。

後部座席の窓側で潰されていた吉良の脳内では、終始物騒な言葉が飛び交っていた。

県境にある寂れた廃墟に着いたのは、日もすっかり沈んだ夜。

ここではかつて一家心中が起きたという噂がある。

先輩からのパワハラと道中の蒸し風呂地獄で、一年生はすでに疲れ切っていた。

吉良は周囲に合わせ怖がりつつ、内心「アホか」とため息をつく。幽霊などいるわけがない。

家に見知らぬ少女がいて二度見した時にはいなかったり、学校で読書中に誰もいないはずの後ろから女性に声をかけられたこともあるが、所詮科学で根拠づけられる。いや、根拠などなくとも信じない。

「うわあああ!!」

「ヒイイイ!!」

廃墟探索中、突然誰もいないはずの部屋から物音がしたり、ライトを照らした先に一瞬黒い人影が見える都度、メンバーの恐怖が高まっていく。

吉良は一団の後方で右足にしがみつく血まみれの少女を引きずりながら歩いた。

靈感があるらしい気弱そうな先輩の男が、そんな彼を見て蒼白する。

「お、お前、み、みみ、右足平気か……?」

「右足ですか?スキップできるくらいには軽快に歩けますよ」

ほら、と吉良が右足を上げて見せると、呻き声を上げる少女が釣れる。その瞬間先輩の引きつった悲鳴が漏れた。

霊感があるこの先輩からすれば、笑みを浮かべて幽霊を引きずっている後輩は二重の意味で恐怖である。

「…そ、そうか、ならいいんだ……」

そそくさと、男は前方へ早足で去って行った。

吉良は掴まれていない足で少女の頭を踏み抜く動作をし、軽くなった右足でまた歩き出す。

肝試しが終わると、メンバーは近くにある安めの旅館に泊まった。この肝試しはサークル合宿行事の一つとして組み込まれている。

あとは各自好きな文豪について調べるなり、遊ぶなり自由だ。かくいう吉良は帰る気満々だった。

最近両親はそれなりの歳ということもあり、夫婦で国内外問わず旅行に行くことが多い。どうやら父が母を説得して何かと出かけているのだ。

もっぱら吉良が大学生になってからその頻度が増えている。

一人になれる時間は、彼にとって間違いなく幸福のひとつだ。

そして翌日。現地解散の後、吉良はタクシーに乗り我が家に帰った。

残念なことにすでに両親は帰宅していた。

茶の間のテーブルにあった土産の古い品が勝手に動き吉良の腕をかすめたが、特に気にせず解かれていた布で丁寧に巻いて、有田焼の壺の中に入れた。

父の趣味にとやかく言う気はないが、歳をとってからあまりにも骨董品を買ってくることが多い。専用の部屋までできている。

それから腕の傷に絆創膏を貼り長袖のシャツを着て、ラジオをつけ自室で一日中読書に耽った。

時折茶を淹れにくる母を流しつつ、時刻は夜の九時過ぎ。

そろそろ入浴しようと吉良は本を閉じテーブルの上に置いて、少し猫背になっていた身体をほぐすように腕を伸ばした。パキツ、という音が鳴る。そして席を立って視線を横に移した。

「うわっ！」

らしくもなく彼は大声を上げた。

「何だ……猫……猫……？」

振り返ったら、天井から髪の毛の長い女が目前に垂れ下がっていたことはある。その時はそのまますり抜けて無視した。

だが目の前にいるのは猫——否、猫のようなもの。

大きさは人間ほどで、耳や目は猫のようだが毛はない。色はピンクで肌は筋肉質かつ人間のような柔らかさを感じるが、機械的でもある。

冷静を取り戻し観察する視線は、ボンテージの如きスカートのところまで止まった。

「股間に、ドクロ……？」

見れば、肩やグローブを付けた手の甲にも似たマークがある。

趣味が悪い、と吉良は思った。しかし当の本人は親が揃えるといったスーツでブランドの、しかもネクタイにドクロをあしらったものを選んでいる。

「な、何なんだお前……」

猫（仮称）はじつと、彼を感情のない目で見ている。

言い知れぬ悪寒に、無意識のうちに吉良は生唾を飲み込んでいた。額から冷や汗が流れる。

これは、幽霊とは違う。

勘がそう言っていた。ゆえに正体の知れぬこの猫が、無性に気味が悪い。

猫は声を上げず、行動を起こしもしない。ただ彼を見続けるだけ。

「……っ！」

吉良はついに猫の横を通り過ぎて廊下に出た。向かう先は玄関だ。

ちようどその時廊下のドタバタという物音に気づき、父の吉廣が起きてきた。

「どうしたんじや吉影、こんな夜遅くに」

「ね、猫が……」

「猫？捨て猫でも拾ってきたのかい？」

「違う！部屋にバカでかい猫がいたんだ!!うす気味わる……い……」

吉良の目は開けっ放しの自分の部屋で止まった。父親も息子につられて視線を向け、固まる。

猫が横向きに顔を半分だけ出して、吉良を見ていた。じつと、じいーつと。

「吉影、お前もしや矢を……」

吉廣が言い終わる前に、吉良は扉を開けクラウチングスタートをかまそうとし、盛大に転けて顔から派手にいった。父の悲鳴が聞こえたが無視し、出血した鼻を押さえながら駆ける。

猫は吉良の後を追っていく。というより、引つ張られていく。

吉廣は呆然とその様子を見ていた。

話は少し遡る。つい先日、吉廣は妻と海外に出かけていた。元々仕事から英語には堪能だったため、問題なく海外でも過ごせた。

吉廣が旅行を繰り返していたのは訳がある。

彼はもう若くない。十年後：否、五年後には自分も妻も死んでいるかもしれない。さすれば息子を守る者はいなくなる。

ゆえに何か息子が自分を守るだけの策はないかと、探していたのだ。

妻を連れて行ったのは、息子につかの間の平穏を与えるためだった。

ずっと妻を止められなかったがための罪滅ぼしである。

そして吉廣は旅先で、ひとりの若い女と出会った。その時はホテルに残ると言った妻を一人残し、出店を回っていた。

薄暗い路地の奥に、古い師を名乗ったその女はいた。吉廣はまるで何かの因果のように、足がその路地へと吸い込まれた。

女は寶石を散りばめた布で鼻や口元を覆っていたので、顔は目元しか見えなかった。しかし褐色肌に白い長髪を後頭部で一つに括っている様は、とても美しかった。

妖しげな雰囲気をまとう女は、まるで吉廣が来るのをあらかじめ知っていたかのよう
に椅子へ座るよう促した。

『何か、お困りのようですね。私のタロットには……………ふむ、息子さんのことについて、
ですか』

『……………いったいなぜわかったんじゃ?!』

女は続けて吉廣が息子の将来を心配していることを見抜き、その解決策を探していることも当てて見せた。

『驚いた…占いなんぞ、信じたことはなかったが…』

『タロットにはすべての行く末が記されています。個人としてあなたの気持ちもわかりますわ。私にも息子がおりますゆえ』

『なんと…お若いのに、驚いたわい』

占い師は「エンヤ」と名乗った。彼女はタロットを一枚めくる。そこに描かれていたのは四方の隅にある天使や鷲と、その中央にいる裸体の女性。

——「THE WORLD」

『世界は正位置ならば「完成」や「永久不滅」を意味します。私が待ち望むいずれ現れるであろうお方こそ、このカードを引き当てる存在。そして…』

占い師は複数のカードを裏向きのまま卓の上に置いた。真ん中にあつた一枚のみ、表に返す。

カードは「THE STAR」。上部には真ん中の大きな星の周りに七つの星がある。中央には裸体の女性が左右に一つずつ壺を持ち、大地と川に液体を流している。

「世界」の来るべき宿敵なのだと言ヤは語った。

『私とあなたが出会いましたのも、また運命。星を打ち砕く一つの鍵となり得るでしょう』

そう言い、エンヤは古びた布に包まれた一つの矢を取り出した。

曰く、この矢は彼女の家に代々伝わる代物なのだそうだ。これを吉廣に託すと、彼女は言う。

『そんな大切な物もらえんわい！』

『ならば買い取る、という形にいたしましょう』

『じゃが…』

『心配なさらずとも、新たな矢はいずれ「THE DEVIL」の手によってもたらされます。これもまたタロットに記された運命です』

不思議な女だった。まるでこれからの世界の行く末を、わかっているかのような口ぶりで語っていく。

試しに吉廣は伏せたままのカードをめくろうとして止められた。

『なりませぬッ！……まだそのカードは私にもわからないのです』

『そ、そうか。すまんかった…』

『いえ。……それで、ご決断の方はできましたか？』

吉廣は結局、この矢を買うことにした。

エンヤから矢を手渡された際、綻んでいた布から覗いていた矢の切っ先が肌をかすめた。吉廣は小さなうめいたが、手当ては後でいいかと受け取った。

『ああ……やはり運命でしたわね。では、ごきげんよう』

女の姿は霧にかすむように消えていった。

『……ツハ！』

気づけば吉廣以外そこには誰もいなかった。

しかし矢は不可思議な出来事を現実たらしめるように、確かに手の中にある。

吉廣が自分に不思議な能力が備わったことに気付くのはその翌日、妻と観光をしながら写真を撮った時になる。

???????

混乱のまっただ中な吉良は、何度かえづきながらも走り続けた。肝試しや読書にかまけて薬を飲んでいなかったのが仇となった。

飲みたくない精神が働くのは、高校の事件以降あからさまに薬の飲む量が増えたせいだ。

猫はやはり、後ろを向くたびに吉良の数メートル先にいる。

木の後ろや郵便ポストの上に座って、じっと見ている。

ねこです、ねこですよろしくおねがいます。ねこはいました、ねこですよろしくおねがいます、ねこは——、

「……………っ!!」

例のネコSCPに感染した人間のようになりつつある。

猫はやはり、じっと彼を見ている。

「鈴美い……………!鈴美!!」

突如杉本宅に現れた夜の訪問者に、リビングにいた鈴美の父親はいざという時のアーノルドを抱えて玄関に向かった。

だが玄関の前にいたのは錯乱状態の娘の彼氏。吉良の精神的な事情を知っていた父親は家にあげ、鈴美を呼んだ。

反抗期な娘は、父の呼び声にいら立ちを隠さず二階から降りてきた。

「もう、何よ。パパ！……つて、え、吉影くん!!」

「ね、猫が……猫が……」

「猫……?と、取り敢えず落ち着いて」

鈴美は宥めるように、過呼吸を起こしかけている吉良の背を撫でる。

ウロウロしていた父親は妻に「あんたは邪魔よ」と尻を蹴られ、リビングに連行された。残されたアーノルドは、二人の周りを「わふわふ！」と元気よく回る。

「ひとまず私の部屋に行こう、立てる?」

「う、うしろに、ねこが……」

「大丈夫だから、ねっ?ほら」

鈴美が腕を引つ張ると、吉良はおぼつかない足取りだが付いてくる。

彼女には吉良の言う猫が見えない。さてはまた薬を嫌がって飲んでいないのだろう。時折様子のおかしい時は大抵飲んでいない。

部屋に連れて行くと鈴美は吉良をベッドに座らせ、キッチンへ水を取りに行く。

薬の入ったケースをいつもシャツの左ポケットか下の左ポケットに入れているのは知っていたので、戻ってからコップを渡し飲むよう促した。

それから一時間経ち、落ち着いた吉良が言った。

「君の後ろにピンクの猫がいるんだが……?」

鈴美は本格的にこれはアカンやつだと、明日医者に行くと言った。

19話 かげおくり

後日猫は、父が旅行先で謎の女から買った矢が原因で出現したものである、と結論づけた。

父も矢でケガをして以降、不思議な能力に目覚めたらしい。ぼくの猫も同様に矢でケガをしてから間もなく現れたため、矢が原因、ということ収まった。

そんな怪しいものを土産にするなど思ったが、運命だなんだと言われ、結局買ってしまったと聞いた。

いよいよ父が耄碌もろろくし始めた。詐欺に遭わないよう気をつけさせねば。

「いや、その女はまるで未来が見えているかのように、ズバリとわしの悩みを言い当てたんじゃない！」

「占いなんて信じてなかっただろ、今まで。ともかく矢は缶箱に閉まって、軒下にも埋めた方がいい」

「だが吉影も気になるじゃろ？ 本当にこの矢で不思議な力が身につくのか……」

「………もしかしてぼくがケガをした時に布が解けてたのは、誰かに使ってみようと思っていたから——なのか？」

父は小さな身体をさらに縮こませて、目をそらした。

こんな危険物を安易に使うべきではない。仮に死んじまったらどうする気だったのだ。

「ともかく埋める、いいね」

「…わかったよ」

猫はある程度ぼくの意思で動かせることがわかったため、嚴重に布で包んで空き箱に入れ、さらにガムテープでぐるぐる巻きにしたものを運ばせて埋めた。

猫は四六時中出てくることはなくなったが、気が付くと人の膝に顔を乗せてこちらを見ていたり、縁側で爪を切っていたら木の上に座ってじつと見ていたりする。

風呂に入っている時は近寄ってこない。庭に生えていたススキを眼前に近付けると手を出してくる。

こちらを見ていない時は大概天井の上や、電線の上に止まっている鳥を見ていた。

気づけばぼくは、書店で「ねこのきもち」を持ってレジに並ぼうとしていた。

「何考えてんだ、ぼくは…」

普通の人間には見えない猫。靈感のない父が見えるのだから、幽霊でないことは確かだ。

感覚でしかないが、おそらくぼくの分身のような存在だとは思う。

人間から触れることはできないが、猫からなら触れることができる。

物を殴って壊したり、持って運ぶこともできた。また物を持った時などには、その感覚がぼくにもフィードバックする。

鈴美に猫の存在を証明するため、カチューシャを浮かせてみたり肩を触った時には、彼女は顔を青ざめさせていた。

ラジオを聴きながら、朝の日課の新聞を読む。

途中猫がその巨体を丸まらせて新聞の上に乗ったが、どかして再度読み始めた。

ふとその時耳に入ったのは聞き覚えのある曲。

クイーンンの歌だ。

「お前の名前はKiller Queenでいいかい？」

猫は相変わらず無表情だったが、ふいに本物の猫のようにぼくの肩に頬を擦りつけた。

「…猫なのに「ニャー」とは言わないんだな」

キラークイーンは返事をする代わりに、テーブルの小皿に積まれていた夏みかんをひとつ縁側に置いた。

何をする気なのか見つめていれば、右手をグーの形にし、曲げた親指を人差し指にくつつける。その瞬間、夏みかんは爆発した。

「えっ」

呆気にとられたぼくを見て、キラークイーンはどことなくドヤ顔をしているように見えた。

???????

大学二年の秋頃、吉良は同じ学部の人からすれば（本人からすれば）知り合い程度だった男に頼まれ、半ば押し通される形で3対3の合コンに参加することになった。

「その日はバイトがあるんですが…」

「家庭教師のバイトだっけか？そこを頼むよ！非モテ仲間だろ俺たち…!!」

「…ハハ、でも……」

彼女がいるので、とは言い出せなかった。この状況でそれを言うとは火に油を注ぐだけである。向こうがどうやら吉良に仲間意識を持っていることはわかった。

ここで何か理由をつけて断つても面倒にしかならないので、仕方なしと彼は引き受けた。

「おお！ありがとう、心の友よ！！イケメンがいても俺たち二人なら、女の子の一人や二人…いけるはずだぜ！！」

ジャイアンが貴様は。

内心ツツコンで、吉良は教えている生徒の親に「急な予定が入った」と断りの連絡を入れた。

その生徒——鈴美が後日、予定の内容を本人から聞いて平手打ちを決めたのは、合コンが終わってから二日後のことだった。

???????

合コン当日。場所は大学近くにあるカラオケルーム。

吉良は紺の丈の長いジーンズに、広く流通している無印良品の運動靴。

それと白シャツにボタンがないタイプの黒のテックニットカーティガンを着て、開始予定の30分前にカラオケの駐車場に着いた。

男にしては少し長めの前髪が目元をすっぽり隠している。眼鏡は文化部にありがちで、よく言えば普通、悪く言えばオタク気質な陰キヤの見た目だ。

吉良を誘った男が来たため、二人で店の前で談笑しながら待った（というより向こうが一方的に話し、適当に吉良が相槌を打っていただけである）。

その後女子三人が5分前に到着し、店内へと入った。来る予定のイケメン男がどうやら遅れていると知り、吉良の隣に座った男は燃えている。

一方で女性陣はあからさまにテンションが下がっていた。口元は笑ってはいるが、目が死んでいる。

男はこれはまずいと、無言で麦茶を飲む吉良に小声で助けを求めた。

（お前もなんか喋ろうぜ！イケメンの野郎が来るまでにどうにかして、女の子たちのハートをキャッチするんだ！）

（…すみません、ちよつと緊張してまして）

無論緊張などしていない。むしろ早く終わらせて家に帰りたい。

手の綺麗な女がいたら話しかけるぐらいはしたが、どれも吉良のお眼鏡にはかなわなかった。逆に顔に出さないだけで、室内に漂う混ざり合った香水の匂いにいら立ちさえ感じている。

「すみません、遅れました」

その時、カラオケルームの扉が開いた。

現れた男に、女たちの声がワントーン上がる。

「やだあく遅かったですねっ、川尻さん」

「ケガでもされたんですかあ？ 私心配しちゃった！」

「……寝坊しました」

それに女たちは「きゃー！」と黄色い声を上げつつ、内心「ギャップ萌えじゃああ!!」と、雄叫びを上げる。

川尻は寡黙なイメージから、女たちにそこそこ人気がある。顔の造形も華には欠けるが、悪くない。

元は彼も同じ学部の友人に誘われる形で合コンに参加した。しかし友人二人が都合

で行けなくなり、埋め合わせで違う学部の男二人が入った。

川尻が来たことで合コンは3対3ではなく、3対1の構図に変わった。吉良としてはラッキーで、燃えていた男としてはアンラッキーな状況。

「どうせ、俺なんて……」

「……………」

相変わらず吉良は麦茶を飲んでいる。他はすでに二十歳を超えているので彼以外みな酒だ。

合コンも中盤に入り盛り上がっているが、やはり3対1は長続きしない。

一人こぼれてしまった女子が二人に押され、川尻に話しかけることができずにいる。

吉良はその女子のバッグについていたキーホルダーに目を止めた。キーホルダーの中には加工された長方形の写真がある。

「犬、お好きなんですか?」

「え?…え、ええ、そうなの。去年老衰で亡くなった私の愛犬なの」

「そうなんですか?…あつ、そういえば君も犬好きだったよね?」

そう言い吉良は、落ち込んでいた男に会話を投げる。

男は小さく頷いて、チワワを飼っていると話した。

「そうなんですか！私もチワワを飼ってたんです。女の子で、「ちーちゃん」って呼んでました」

「え、あ、あなたも…俺のそこは暴れん坊のオスで、よく自分よりデカイ犬に突つかかるんです。困ったもんですよ」

「あは、元氣な男の子って感じでいいですね」

愛犬トークから盛り上がり始めた二人。吉良はこれでいいかと、手洗いに行くといい、席を立った。

あとは己がいなくともうまく回り、雰囲気よく終わる。

遅刻した、と悪ぶれもなく言った川尻にいささか殺意を覚えたが、終わってしまえば関係ない。戻った後は空気に徹するだけだ。

「ハア…」

トイレに着くと吉良は洗面台に眼鏡を置いて、眉間をほぐした。

その時、ガチャツと扉が開いた。

そこには少し驚いた顔の川尻が突っ立っている。

「…扉は閉めたらどうか？マナーとして」

「……あ、そうですね」

吉良はバッグに入れていた眼鏡拭きでレンズを拭く。川尻は小便器の方には行かず、なぜか吉良の隣に立つ。

「何だい？まさかわたしに用があるわけじゃあないだろうに」

「……いや、逃げて来ただけです。一人席を立ったのでちょうどいいかな、と」

「どう考えてもタイミングが悪いだろ……」

いい雰囲気男女二人はいいが、女子二人が絶対に険悪になっている。

「君、思ったより空気読めないんだね。……いや、寝坊して遅刻してるんだから、性格か」
寡黙と言えば聞こえはいいが、吉良の印象としては川尻は一言で表すと、「つまらない男」である。

言い換えれば彼が求めてやまない、普通の人間。

「……目」

「は？」

「紫なんですわね」

「……ああ、だから驚いていたのか」

目について言われることは久しくなかったので、吉良はふと懐かしい気持ちを抱い

た。

「昔聞いた話だが、目にはその人間の心がよく現れるらしい」

「……はあ」

「君は空虚、かな。ありふれた人間で、ありふれた日常を送る」

「…そうですね。オレは女性たちが思っているより、普通ですから」

「わかってないな、そこがいいんじゃないか」

吉良にはないものをこの男は持っている。

川尻がなぜ遠慮がちに自分のことを語るのか、彼は不思議でならない。

「オレは普通じゃない方が、憧れますから」

パタンと、音がした。吉良は眼鏡拭きを戻したケースをバッグに入れる。

そして眼鏡を手を取ったまま、目の前の鏡を見つめる。

「普通だから普通ではないことに憧れる。それもまた、普通だ」

「馬鹿にしてるんですか？」

「いや、わたしも似たような考え方を持っているからね。シンパシーを抱いただけさ」

サイコパスはよく嘘をつく…とは、いったい誰が言ったのか。

吉良は手に持ったままだった眼鏡をゆっくり付けた。

「時に川尻くん。日常の中でいつ異常なことが起こるかなんて、わからないものだよね」
「…急に何ですか？」

「なに、お喋りぐらいいいだろう。ぼくは結構シャイでね、女性たちの前じゃどもって中々話せないんだ」

例えば明日地震が起きて死ぬかもしれない。

例えばあさって交通事故に遭って死ぬかもしれない。

死など人間の影のようにどこにでもある。しかし人は下を見ないがゆえに、気づかない。
い。

「異常」はその人間たちの死角を縫って過ごしているのだ。時には「普通」の仮面を繕って。

「ぼくは普通が一番だと思うよ」

吉良の浮かべた温度の低い笑顔に、川尻はなぜか目が離せなかった。

20話 生成り

吉良が大学三年の冬ごろ、父の吉廣に癌があることがわかった。

ステージはかなり進行しており、治療しても治らない可能性が高いとされた。もって半年とのこと。

母は父の面倒を見なければならなくなったため、家にいることが減った。

吉良も吉良でアルバイトを増やし、鈴美や彼の家庭事情を知る近所の人間から心配されるが増えた。

朝ゴミ出しをしていると、近所のおばさんが声をかける。女は吉廣の心配をし、彼の心配もした。

「あんまり無理しちやダメよ？もし吉影くんまで倒れたら、お母様が参ってしまうでしょうから」

「わかってます。でも自分の学費くらいは自分で賄いたいんです。家族に負担をかけたくはないので…」

陰った笑みに女はかわいそうだ、と思った。

きつと父のもしもを考えて、母親に手をかけないよう働いているのだ。

“できた息子”という印象は、吉良が子どももの頃から近所で浸透している。挨拶をすれば笑顔で返す。まるで模範解答を体現する子どもだった。

母親の息子自慢は聞いていて呆れもするが、仲の良い家族に起こった不幸に、女は心を痛めた。

??????

吉良がまだ幼かった時のこと。あれは小学一年の頃だった。

ある日帰ってきた少年の腕の中に一匹の子猫がいた。

捨て猫らしく、その猫に引っかけられたのだろう、半袖から覗いた細い腕にはいくつもの生傷があった。

そんな息子に血相を変えた妻の悲鳴に気付き、仕事が休みだった吉廣も慌てて玄関に向かった。

『吉影や、怪我は大丈夫かい？』

『…うん』

吉良は母に視線を向け、少し緊張した様子で話した。

曰く、うちで飼ってもいいか？という内容だった。

なんと我が息子は優しいのだろうか、吉廣は感動した。

一方で母は困ってしまった。彼女は動物が大の苦手だった。それも汚らしい、という理由で。

結局子猫は里親に出そう、という形で収まった。それまでは庭の倉庫に入れ、母親が世話をすることになった。

吉良は自分で面倒を見ようとしたが、母が頑なに断ったのだ。

もし猫に何かのビョーキがあつて息子に感染したらたまったものではない。ゆえに倉庫に近づくのもダメだと、念を押された。

『……………』

汚いものを触るかのような持ち方で首の皮を掴まれた子猫を、幼い目はじつと見ていた。

その、一週間後のこと。

吉廣は子猫のことはすべて妻に任せ、趣味である盆栽の手入れをしていた。

日当たりのいい場所へ盆栽を運んでいたところ、ふと裏庭に立っている息子を見つけた。

裏庭には妻の趣味の小さな花壇がある。

そこから少し離れた場所に、土の色が少し変わっている盛り上がった場所があった。

『……………』

少年の小さな手には一輪のたんぽぽが握られていた。

一部がすでに綿毛に変わった花をそつと、盛り上がった土の上に乗せる。

そこで吉廣は花の意味を悟った。

子猫の墓だ。

おそらく初めから妻は世話をする気などなかったのだろう。里親も探していなかったに違いない。

放っておき倉庫で死んでいたのを、夫である吉廣や息子に言わず埋めたのだ。

妻はかつては美しく、優しい女だった。

しかし長年子どもができず、執拗な姑いびりを受け続けて歪んでしまった。

吉廣は自分の母親を止めることができなかつた負い目から、妻に強く出れずにいる。

そして今は歪んでしまった妻の愛情が一心に息子に向いている現状を、止められずに

いる。

『吉影…大丈夫かい?』

簡素な墓の前で口を押さえ座っている息子の背を、吉廣は優しく撫でる。
なんと優しく、かわいそうな息子なのだろう。

『フフ、フフフ…』

吉良はしかし、悲しむどころか涙ひとつ流してはいなかった。

笑いを抑えきれない、といった風に口を押さえている。そして一頻り笑うとようやく父に気づき、顔を上げた。

『あれ、父さんか。どうかしたの?』

吉廣はその時はじめて、息子の異常性を理解してしまった。

妻のように歪んでしまう前に、どうにかしなければと考えていたが、もう遅かった。
いや、もつと異質に育ってしまった。

『…何でもないよ、吉影』

その時震える声を上手く隠せたか、吉廣にはわからなかった。だが同時に自分がこの息子を守らなければと、強く決意したのである。

そんなかつての夢を見ていた翌日容体が急変し、吉廣は亡くなった。吉良が大学四年になった春頃のことだった。

??????

父親の葬儀も終わり、吉良は母親とともに遺品整理をしていた。

父の死に少しは思うところがあるのか、遺品をひとつ手に取る度に、じつと見つめる。「ぼくにも親の死を悲しむ心はあったみたいだな…」

そう言い、父の秘蔵アダルトビデオやら雑誌を母に隠れ爆破していく。

悲しんでいた面影はどこへやら、軽蔑の色さえ滲ませている。知らなくてもいい父親の若いナースものや、セーラー服ものの性癖を知って吐き気さえした。

【ああ…わ、わしの……わしの秘蔵っ娘たちがあ……!!】

悲鳴に近い声は、壁の写真から聞こえる。

イエスの磔よろしくその四方を画鋏留めにされた写真の中で、一人の老人が涙やら鼻水を垂れ流し、悲しみにくれていた。

何を隠そう、死んだはずの吉廣本人である。

彼は幽霊となつてまで息子のため現世に留まつたのだ。そんな父親に、いら立ちマツクスの息子は冷たく当たる。

「こういうのを息子に処理させる父親の気が知れないね」

【吉影や、わしはここにおるぞい…!!】

「ぼくは幽霊なんて信じちゃいない。幻覚を見るくらい疲れちまつてるみたいだ。誰かさん のせいで」

【よ、よしかげえ……】

息子にガン無視され、父は限界です。

あらかた片付け終え、吉良は磔刑にしていた写真の画鋏を外し手に取った。
一瞬の舌打ちに、父は「反抗期じゃあ!」と喜びながらガチ泣きする。

「それで、何で成仏してないんだ、オヤジ」

【息子が不憫と思つてのお…】

「どうせ不思議な力……みたいなもので死んだ直後写真の中に入るなりしたんだろ。あ

とは母さんかぼくの荷物に紛れ込んで病院から家に来た」

【おお、正解じゃ！流石わしの息子じゃ!!】

「はあ……面倒だから当分しまつておくか」

【えっ】

死んでいれば父親だろうが関係ない。ましてや相手は吉良の信じない幽霊である。

積み重なる息子の冷遇に、缶箱にガムテープを巻かれた上で閉じ込められ、机の中に押し込まれた吉廣は泣いた。

まあ翌日には解放されたが、母にバレると面倒なので部屋から出ないように言われ、それを忠実に守った。

???????

吉廣が死んで一ヶ月。妻が夫の死に塞ぎ込む——ということとはなかった。

むしろ看病をする必要がなくなり、息子へ一心に愛情を注ぐことができる。邪魔者さえいなくなつたという心境だ。

もちろん母親のスキンシップは増える。

余談だが吉良の部屋には先日爆破しまくったアダルトの類が一切ない。生まれてこの方見せられた以外で、自分で買ったこともない。

彼の性の象徴たるモナリザのコピーは一時期飾っていたが、今は画集の一部として本棚にしまつてある。紛れこまずように他の画集を置いている心理は、エロ本を隠す青少年と同じだろう。

一見して綺麗すぎる部屋だとは、誰もが思うに違いない。

そもそも遊びに来た人間こそ少ない。鈴美でさえ一度も彼の部屋に来たことがないのだから。

穢れない部屋。言い換えれば、母に管理されている部屋。

おそらく人生の中で一番、吉良の欲求は高まっていた。

その日も吉良は七時ちょうどに起きた。

いつも隣で寝ている母はいない。吉廣がいた頃は三途の川になっていたが、亡くなつてからは二人だ。部屋は広く感じられるようになったが、布団の距離はより近付いている。

自室で服を着替え、洗面台に立ち洗顔や髭剃り、歯磨きを済まして髪を整える。

次に縁側で爪を切って記録をしてから、母の淹れたコーヒーを飲みつつ新聞を読んだ。聞き流すのはラジオ「杜王町RADIO」。

そして新聞を読み終えると、母と二人で朝食をとった。

「美味しい？」だの、「ここにこだわったのよ」だのと楽しげに言う母に、吉良は笑顔で返す。

おかずを乗せて口に運んだ白米の味は、いつものように味がない。

大学四年にもなれば、取る単位は一年と比べれば圧倒的に少ない。ほとんどは就活に動き、すでに内定をもらっている者もいる。吉良もまた父の葬儀から間もなくカメラユ一の内定が決まった。

「じゃあ行つてくるね、母さん」

子どもの頃から玄関で見送られてきた。頬へされるキスも変わらない。変化があつたとすれば、母のためにしやがまなければいけなくなったことか。その変化が起こった時期に、母の息子を見る目の色も変わった。

胃がよじれたような感覚になる。吐き気は慣れつこで、顔に出さず笑顔をつとめた。

そして扉を開けようとしたところで、背中に軽く衝撃が起こる。

いつもとは違う状況。

「吉影ちゃん…：パパがいなくなつて、ママ、ひとりじゃ寂しいわ…」

吉良は胃から競り上がりそうになつたものを口を押さえて耐えた。

頭の脈打つ感覚が敏感に感じられ、瞳が熱くなる。それでも前を向いたまま普段の声で話す。

「大丈夫だよ母さん。今は辛いけど、きつと乗り越えられるから」

「でもママ、吉影ちゃんまでいなくなつたら悲しいわ」

「…社会人になつても家から通うつもりだから、大丈夫だよ。母さんを一人にはしないから」

「吉影ちゃん…：ああ、やっぱりあなたは優しい子ね。わたしの…わたしの大事な吉影ちゃん…：…」

震えそうになつた声を堪え、「もういいかな？」と吉良は呟く。

背中の感触は離れた。

それに安堵し、彼は玄関の扉を開けて——、

「愛してゐるわ、吉影ちゃん」

手が、止まった。

動かなくなった息子に、不思議そうに母は声をかける。

吉良はゆつくりと後ろを向いた。そう言えば、いつもの挨拶を言っていないかったと、思いついて。

「いつてきます、かあさん」

抑揚のない平坦な声は、薄い唇から発せられた。

顔は恐ろしいほど真顔で、瞳は何の色も宿していない。

そこに母親の求める息子からの「愛」はなかった。

扉が閉まった直後、母は崩れ落ちた。

そしてその一ヶ月後、急速に老け込んだ彼女はまるで夫の跡を追うように亡くなった。

21話 キラクイスイツチ

1987年の夏は長引く梅雨の影響を受け、なんともジメジメしたスタートを迎えた。

しのぶはD学院の文学部に通っている女子大学生だ。

就職を控えた身であるが、本人は気が向かず友人と遊んでばかりの日々を過ごしている。

「ハア…アイツとももう、別れようかなあ…」

彼女の言う「アイツ」とは、別の学部に通う川尻浩作を指す。

周囲の女たちの人気が高く数ヶ月前から付き合い始めたが、うつすらと川尻が「つまらない奴」とわかってきた。

第一対して好意を抱いていなかった相手だ。まだ別れていないのも、他の女たちに羨ましがられて優越感に浸りたいからだ。

駅を出ると、サアアと、本降り的一步手前な雨が降っていた。

通り過ぎるサラリーマンは傘を差し、彼女の横を通り過ぎていく。

時刻は七時を少し過ぎたあたり。遠くで電車の発着を知らせるメロディーが鳴る。

「…早く帰ろう」

数時間前までは友人と楽しく遊んでいた。

だが現実へ戻される瞬間は誰にでも訪れる。さながら魔法が解けたシンデレラのように。

「あらっ」

傘を差ししのぶが雨の中を歩いていた矢先、バス乗り場の白いベンチに一人の男が柱に寄りかかるようにして寝ているのを見つけた。

服装は靴とシャツ以外黒のため、暗闇と同化している。前髪に隠され顔はうかがい知れない。

彼以外にバスを待つ人間はいない。乗る前に寝過ぐすとは、中々の上級者である。

普段の彼女なら起こさずそのままスルーしただろう。

しかしその時は本当に気まぐれに、起こしてやることにしたのだ。近づいてわかったが、男の髪は少し明るめだ。

「酔っぱらってるの、アンタ？バスもう過ぎてるけど」

「……………」

「いくら雨避けがあるからって、風邪引くわよ……………って、ちよ…」

男の身体が突如崩れ、彼女にもたれかかるように倒れた。

しのぶは慌てて男を抱きとめる。

「あれ、アンタどつかで見たことが…あー！」

この男の顔を講義でたまに見たことがある。

いつも後ろの隅で一人、あるいはごく稀にご同類の連中と講義を受けていた。見るからに陰気そうで、カースト上位の彼女とは絶対に相容れない存在。

きつとこんな偶然がなければ関わるものがなかったであろう陰気男は、よくよく間近で見れば、顔が整っていないこともないような。

——いや、めちやくちやイケメンじゃん。

「……………」

彼女が見入っていると、男が呻き声を上げ目を覚ました。

レンズ越しに見えた瞳は、不思議と闇にかき消されずその色をあらわす。

「(ハハ)は……………」

「駅よ……………つて、うわっ!!アンタ熱があるじゃない!!」

「……………わたしは、バイトから帰ろうと、して…?」

今の時間帯、病院の診察も終わっている。立とうとする男をしのぶは腕をつかんで座

らせた。どうやら近くの駐車場に車を止めているらしい。

「そんな状態で運転したら事故るわよ！タクシーで帰りなさい」
「……………」

男の顔がゆっくりと彼女に向いた。観察するように視線を巡らせ、ああ、とつぶやく。
「間違つてなければ、同じ学部なのしるぶさん…だったかな？」

「な、何で私の名前知ってるのよ」

「男の間で美人だつて、話題に上がることがあったから」

「ふーん、美人…ね。そう言うアンタの名前はなんていうの？」

「…ぼくは吉良吉影だよ、吉良でいい」

「そ、わかつたわ。吉良くんね」

苦笑いした吉良は熱もあつて、整った顔立ちの割に幼く見える。まとう雰囲気は川尻のように平凡だが、深紫の奥にあった色はとても冷たい。

アンバランスな魅力に、しのぶの心臓は今までないほど強く脈を打っている。

まるで初恋をした少女の時に戻ったようだ。

「タクシーが来たみたいだから、もう、大じよ……………」

「ちよ、フラフラじゃない!!んもう…………途中まで一緒に行つてあげるから、しつかりしな
さい」

「だが……」

「ハア……タクシーから降りた直後に倒れて、騒ぎにでもなつたら大変でしょ。それにあなた、私が起こしてなかつたら救急車を呼ばれたかもしれないのよ」

「……………」

「あ、運転手さん！人数は二人で」

吉良はそのまましのぶに押し込まれ、後部座席に並んで座った。

運転手に場所を告げてから鈍っている頭で思考を巡らそうとするが、気づけば意識が己の手から落ちていく。

「ってか、住所リゾート地帯の方じゃない!?もしかしてボンボンなの?」

「ちよつと頭に響くから……声量を落としてくれ」

「……あ、ごめんなさい。それで、どうなの?」

「別に……普通だと思うけど」

「ふうん……吉良くんってまあそれなりに顔も良いし、陰気っぽいところは好きじゃないけど、悪くはないわね……」

ぶつぶつ喋り出す女の声から意識を外すべく、吉良は窓に視線を移した。

窓ガラスに水滴がぶつかっては隅の方に寄せられ、滝のように流れていく。

今日は午前中に隣街の家庭教師に行き、午後は買い物をした。朝から気怠さは感じて

いたが咳は出ていなかった。しかし買い物を終えてから一気に体調が悪化し、杜王駅に辿り着いたところでとうとうダウンしたのである。

思えば朝、電車に乗っている時に傘を忘れたことに気づいた時点で本調子ではなかったのだろう。

「まあ熱だけのせいでも、ないんだが…」

ここ二ヶ月近く、原因不明の体調不良が続いている。

症状は頭痛やめまい、不眠に食欲不振や嘔吐など、かなり精神的に参っている。

周囲の目はごまかしている。しかし鈴美にはバレているようで、医者に行くよう念を押されていた。彼は頑なとして行っていないのだが。

どのみち間もなく薬が切れるため経過観察ついでに主治医にバレる。

それまでに解決策を考えていたが、症状は悪化するばかりだ。

母親が亡くなり、自由があるはずだった。

だが蓋を開けてみればどうだ、彼の身体はすでに「異常」になれきっており、「普通」の生活を受け付けなかった。

——馬鹿馬鹿しい。

結局吉良の中では自分の性癖も、殺人衝動も、壊れぎみの精神も、滑稽で、どうすることもできないのだ。

家に着いた吉良はタクシー代を渡してしのぶを帰そうと思つたが、少し悩んで家にあげることにした。一応世話になつたのだから茶は出した方がいい。

虚しくもここで病人は寝てろ、という常識や、風邪をうつしてしまふという考えは出てこなかつた。

「ひ、広ッ……」

しのぶははじめて見た武家屋敷に感動を越して引いた。

吉良は彼女に支えられつつ鍵を開け、暗闇の我が家に入った。

幽霊な父親はさておき家主の彼以外住まうものはおらず、不気味なほど静かだ。
「親はいないの?」

「幽霊の父親だつたらいるかもね」

「え?あ……その、ごめんなさい」

「別に気にしてないからいいよ。お茶を淹れてくるけど、勝手に出歩かないでね」

吉良は居間に彼女を残し、キッチンへと向かった。

途中現れた父に、居間の様子を見ておくように頼む。

葬式だなんだともらっていた菓子が、なまじ彼が食べない分量に残っている。賞味期限が切れていない物を適当に選んだ。

飲み物はスチール缶である。フラつく状態で淹れた茶を運ぶのは危険すぎる。

「うわあ、流石茶菓子もお高そうね…」

しのぶは運ばれてきた茶菓子を一つ口に運ぶ。途端に顔がほころんだ。

その表情を見ながら、吉良は残っている菓子の処理方法を考える。鈴美に貢ごうと思いついたところで、不意に気付く。

女性を見ず知らずの男の家に上がりこませたのは、いささか非常識ではなからうか。

相手は熱のある吉良を心配して、少しためらったが家にながった。

だからといってこの状況で早く帰れ、と言えるわけがない。

時間を消費するため断つてから、吉良は服を着替えに行つた。

流石に風呂に入る気力はなく、シャツと緩めのボトムに着替えた。脱いだ服を畳んだが、いつもより乱れている。

「薬は…ああ、居間だった」

配置薬は居間の棚の上にある。両親が届かず、よく吉良が代わりに取っていた。

「…ツチ」

できれば思い出したくもない母の記憶。

しかし二十年もの歪んだ束縛は、元凶が亡き今も確実に彼の心を蝕んでいる。

「あ、着替えたの……」

テレビを見ていたしのぶの顔が固まる。

現れた吉良は眼鏡を取っており、長い前髪を乱雑に後ろに撫でつけていた。

「えっと……少しどいてもらっていいかな？薬が取れない」

「………は、はい……」

しのぶは口を少し開けたまま、ほうほうで横に移動した。

吉良は「？」を浮かべつつ、棚の上の配置薬に手を伸ばす。しかし身体が大きくフラ

ついた。

「あっ」

手がそのまま薬の入れ物ごと引きずり下ろす。

派手な音とともに入れ物が落ち、入っていた薬が散乱する。

「危ない!!」

しのぶは咄嗟に手を伸ばした。吉良もまた急に横から入ってきた相手に驚き、二人は

もつれ合うように畳の上に倒れる。

「いたっ…」

しのぶが呻き声をあげる。瞳を開けると目前には絆創膏の箱が落ちていた。封がきられていたため、中身が出ている。

そのまま仰向けの体勢で倒れていた身体を起こそうとして、顔を上に向けた。そこで一気に心音上がる。至近距離に凛々しい顔があった。

凶として吉良がしのぶを床ドンしている状況である。

「…ごめん、大丈夫かな？」

「ふあ、はい」

吉良は身体を起こし、ついでのぶの腕を引く。

「…ボオーツとしてるけど、本当に大丈夫？」

「だ、大丈夫…です」

「そう、ならいいんだが…」

時刻は八時半を過ぎようとしている。

吉良はそろそろ頃合いだろうとタクシーを電話で呼び、居間に戻った。

「十分後ぐらいには家の前に着くそうだから」

「う、うん」

「なんとというかその、今日はすまなかったね。家まで付き添ってもらって」

「ぜ、全然大丈夫よ！私も今は一人暮らしだし、少し寂しいから。男の人の家に来るの久しぶりだったけど…」

「そこは…すまなかつたよ。気が利かずにごめん」

その後少し彼女の話を聞き、十分が経った。

しのぶは帰り際ヒールを履きつつ、吉良の方を向く。

「その…吉良くんってさ、付き合ってる人とかいる？」

「わたしかい？」

ふと吉良は鈴美のことを考えた。

彼女が受け入れたことよってできた二人の関係は、恋人なのだろうか。保健医ほど生々しくはなく、緩やかに流れる関係。

結びつく愛がそれぞれ違って、お互いを求め合うなら、それは果たして恋人と言えるのか。

「…」

巡らせていた思考は握られた手の感触によって引き戻される。

少し骨張ってはいるがたわやかな感触を感じさせる手が、吉良の手に触れている。

「私じゃダメ…かな？」

吉良はゆつくりと顔をあげしのぶを見た。頭は重いにも関わらず、不思議と意識は鮮明にある。

脳裏によぎるはかつての記憶。

母の自分を呼ぶ声。強い香水の匂い。触れてくる生温かい手。

自分を見つめるしのぶに、保健医の姿も思い出した。あの手は少しでも力を込めたら折れてしまいそうな、細く繊細な手だった。薄つすらと香る花のような香水はいつの間にか彼にも染みついた。とても美しく、冷たい手で。

逆に鈴美の手は細めだが健康的な手で、触れると肌に吸い付く。温かいその手に触れる度、吉良は自分の冷たさを実感した。

「フフ、そうだなあ…」

吉良がしのぶの右手を握ると、彼女はあからさまに頬を染めた。

彼の右手はゆっくりと彼女の頬へ伸び、かかった髪を耳へとかけさせる。近づくと顔に彼女は瞳を閉じた。

「……？」

しかし待てども、唇への感触は来ない。

疑問に思い彼女が目を開けると、吉良は彼女の手を見ていた。

「……吉良くん？」

「おっと、もう時間だったね」

「え、あ……」

背を押され、しのぶは一步玄関に向かつて歩んだ。押された拍子に前に出た手が扉に当たる。

「じゃあ、気をつけてね」

一瞬吉良の瞳の奥に見えた得体の知れない何かはあらず、普通の彼の姿があった。

しのぶは激しく脈打つ心臓に手を当てながら、少しぎこちなくなつた笑顔を浮かべ、別れを告げる。

タクシーに乗った途端、一気に顔が赤くなつた。

「何で私、こんなにドキドキしてんのよ…!!」

まともに誰かを好きになったことのない彼女はおそらくはじめて、誰かに恋をした。鼓動の音は家に着くまで、激しく脈打っていた。

対し吉良は客人がいなくなつて間もなく、身体力が抜けたように座り込んだ。

そのまま膝を抱え、重くなつていく意識に身を預ける。

頭の熱も脳の中でぐちゃぐちゃになり、感情も欲望も何もかもが溶けていく。

しのぶには見えなかつた存在。吉良が彼女の手を握つた時、その後ろにはキラークイーンがいた。

「……気持ち、わるい」

身体中を巡る殺人欲求と気怠さに、吉良はそのまま気を失つた。

22話 後ろの正面だあれ

玄関で倒れていた息子を発見した父は少し迷った後、鈴美に無言電話をした。

それを不審に思った彼女がぼくを見つけ、急いで救急車を呼んだ。

ただの風邪だったが、とりあえず一日だけ入院することになった。

朝担当医が様子を見に来たので適当に挨拶を交わす。

「おはよう吉良くん、家で倒れていたそうだね。思ったより元気そうでよかったよ」

「ハハツ：若いからって無理はよくないですね。今回の件で学びました」

「そうかい。まあ、少しでもお粥を食べて栄養をつけなさい。君が以前入院している時よりは甘めになったんだよ。これが結構患者に評判がいいのさ」

「へえー、そうなんですか」

食欲はまったくない。

ただ、食べないで点滴を繋がれることになるんだったら、多少無理してでも食べた方がいい。

「あつ、本当だ。けっこう甘いですね」

「うんうん、そうだろう」

担当医は腕を組んで大仰にうなづく。

早く去ってくれないだろうか。内心祈っていると、それじゃあそろそろ、と手を上げる。

「あと君、もうしばらく入院ね」

本当はもう少し味をつけろってクレームが多いんだ——と悪びれなく言った男に、啞然とした。

騙されてたのだと理解が追いついた時にようやく、怒りとともに微妙な気持ちを感じた。

???????

退院できたのは結局二週間後だった。

単位については問題なかった。少し増えた薬もまあ、甘んじて受け入れよう。飲み忘

れないとは言いきれないが。

しかし問題は他にある。

担当医はこちらの精神状態を把握した上で、ストレス改善策として他者と生活をともにした方がよい、とのたまった。

ぼくの現在の症状は適応障害らしい。両親の死に身体がついていけないのだろう、と。実際は「普通」になった生活に身体が拒絶反応を起こしているだけだが、そこまで医者が知る由もない。

「一緒について、例えば誰と?…ああ、じゃあ猫か犬を飼いますよ」

「ペットでもいいが君の場合は人間だね」

「ボツチのぼくにそれを言うなんて、なかなか先生もひどいですね」

「君彼女さんいたよね?その子に頼みなよ」

「ぼく猫派なんで、猫飼いますね」

「会話が噛み合っているようで、噛み合っていないねえ」

というかすでに鈴美に連絡が回っていたようで、逃げ道はなかった。

それから毎日とはいかないが、時折彼女が家に来るようになった。一人でも精神的に参るが、誰かがいても落ち着かない。

「吉影くんは自分や他人が思っている以上に、繊細なんだよ」

朝、二人分のココアを淹れた鈴美が言った。

健康的な色をした左手を捕まえ、頬を擦り寄せる。

手から伝わる柔らかい肌の感触が、体温が、かすかに香る甘い匂いが、気分を落ち着かせる。

「少し落ち着いた?」

「…まだ」

「ふふ……あんまりにぎにぎされると、くすぐりたいよ」

「鈴美」

「何?」

口元に人差し指を当てた。すると彼女は少し目を開き、眉を下げて微笑する。その時いつも彼女の瞳の中には夕焼けの海に映る雲のような感情が、ゆるりと浮かぶ。愛おしげに、切なげに。空気の中に溶けていく。

保健医だったら、ずるい男の子、とでも言いそうだ。

鈴美は何も言わない。こちらの心に寄り添おうとして、その冷たさにケガをする。でも、ぼくから逃げなかったのは君だ。

十分近く経って、彼女の手から離れた。

乗っていた重みで痺れたのか、鈴美は左手をブラブラと動かす。

「悪かったね。朝食を作るからテレビでも見て待っててくれ」

「はい、吉影くんの料理美味しいから楽しみ……本当は、私が作りたいけど」

「万が一手をケガされたら困るからダメだ」

「はいはい、わかりましたー。私は彼氏に全部任せるダメな彼女になってますうー」

「あ、ちよつと待て」

エプロンを付けつつ、棚の上に置いていた小さめの箱を手取る。

片手に乗るサイズのそれに、鈴美はあからさまにテンションを上げた。

「なになに、高級チョコ!?吉影くんってば急にどうしたの。えへへ、やだなあもう、私

太っちゃうじゃん」

「肩を叩くな、脇腹を殴るな。君は本当に甘いものが好きだな……」

「糖分は誰にだって大切なの!それじゃあ遠慮なく私の胃の中に収めさせていただきま

すぜ……」

彼女は悪代官から賄賂を受け取る商人の顔で、白いリボンをほどきベージュの包装を

解いた。

「……………」

彼女の浮かべていた笑みが消えた。商人はどうかやら悪代官もろとも成敗されたい。

仕方ないので鈴美の手から取って箱を開ける。

リングの中央に存在を主張する紅い宝石の色が、光を反射して美しく煌めく。それを彼女の左手を取り薬指にはめると、寸分狂いなくピッタリと収まった。

「うん、やっぱり君の手には紅が映える。血色の良さと肌の白さに馴染むね。ルビーはダイヤと違って蠱惑的な印象を受けるが、むしろ純潔が似合いそうだ」

飾りつけた美しい手に緩む頬を隠せずにいると、不意に滴が落ちた。

視線を上げれば鈴美が泣いている。

「どっ、どうしたんだい、鈴美？」

「……なんでも……ない、よ。すごく高そうだからびっくりしちやっただけ。いくらぐらいいしたの？」

「野暮なことは聞くなよ。ただまあ、社会人の給料三ヶ月分というのには習ったかな。指輪を買う時の定型らしい」

「まさか最近バイトを増やしてたのって……」

「もう一回言うけど、野暮なことは聞くんじゃあないよ」

流石に親の遺産で自分の物を買う気はない。土地代など必要経費は使うが。

「うう……うう……」

鈴美はへたり込むと、ぼくに左手を預けたまま泣き出す。

もしかしてダイヤの方がよかった口か？

「……これって、ただのプレゼントってことよね」

「うん？ 似合うと思ったんだけど、気に入らなかったかな？」

「ちよー嬉しいわよ。人生で一番ぶっ飛んでるくらいには、嬉しいわよ………バカ」
嬉しいは嬉しいらしい。最後にバカ呼ばわりされたが。

「……プロポーズかと、思った」

「あ」と、間拔けな声を漏らしたのはぼく。

確かに状況的にそう見えるか。いや、そういうふうにしは見えないか。

「でも大切にするわ。……ありがとう、吉影くん」

「喜んでもらえたのならよかったよ。もしよければぼくといる時に付けてくれたらありがたいな」

「……うん、わかった」

彼女の紅い色が映えた美しい手にキスをする。

一瞬瞳を閉じた時、脳裏に手首から下だけの彼女の姿が浮かび、背筋にゾクリとしたものが走った。爪が伸びたことには気づかれた。それでも顔には出さないように努めて笑顔を浮かべる。歯がかすかに軋んだ。

再度ぼくが見上げた時、鈴美は涙をこぼし笑っていた。自然と脳裏に浮かんだのは保健医の笑顔で、二つが重なって見えた。

「吉影くん、大好き」

その言葉に、わたしもだよ、と返す。

「知ってる」

涙に濡れた彼女の顔は、とても美しかった。

???????

どんよりとした天気が続いている。

電車で揺られながら移ろいでゆく景色を眺め、杉本鈴美は先日のことを思い出していた。

吉良からもらった指輪。美しく煌めく紅色に、吸い寄せられるような感覚を抱いた。無くしてしまつたらと思うと怖いので、普段は吉良と会う時以外は自分の部屋にしまっている。しかし今日は少し寂しさを感じ、それを紛らわすように薬指につけていた。もちろん大学内では目立つので外す。

「……………」

鈴美はずっと吉良を愛している。

そして吉良もまた彼女を愛している。彼女の手を、愛している。

薄い唇に口づけられるたび、いつも鈴美の心臓は跳ねる。喜びの裏にはしかし、隠しきれない仄暗い感情がある。

手ではなく、自分を愛して欲しいという感情。

「…私も大概、傲慢だなあ」

彼女が高校を卒業して間もなく、二人でホテルに泊まつたことがあつた。保健医の件もあつたためにつきり吉良がエスコートしてくれるのかと思つたが、なぜか妙に緊張しており、それがおかしく笑つたのを覚えている。

だが事は最後まで運ばなかった。

ベッドに押し倒され、繊細さを宿す手が服の下へ伸びた時、鈴美は吉良の胸元を強く押し返してしまった。

過つたのは誘拐された時に触れられた、男の手の感覚。恐怖が身体中を支配し、その後しばらく震えが止まらなかった。

『……めん、鈴美』

吉良はただ謝り、鈴美の背を優しく撫で続けていた。

彼女はまだ純潔である。肉欲を知らぬ清白さが、かえって彼女の手に対する吉良の価値を高めていることを鈴美は知らない。

例えるなら吉良が抱く感情は、穢れなき聖マリアに信仰を捧げる徒に似ている。

「ヤケドしたって、知らないんだから」

あと一步でも踏み外したら、吉良は絶対に人を殺す。彼の本性を間近で見るとなつたからこそ、確証をもって言える。だからこそ余計に離れるわけにはいかない。彼女は謂わば命綱で、吉良が人道を保てるギリギリのラインを引き止めている。

「まあ今は、心の方が問題か……」

最初は吉良も居心地が悪そうだったが、最近は少しずつ慣れてきた様子である。精神的にも以前より落ち着きを取り戻した。

「……………」

鈴美は吉良にあることを言い出せずにいた。

最近感じるようになった視線。通学中の電車内や街を歩いている時など、ふとした時に誰かの視線を感じる。

親や友人にも相談できず、過ぎる不安で眠れない日が多くなっている。

そんな睡眠不足と揺れる電車内は眠気を誘い、鈴美はいつの間にか寝入っていた。

「あの、終点ですよ」

「……………んん？」

彼女は男に肩を揺すられて目を覚ました。

しまった！———と思いつつ、鈴美は男に礼を言い、抱えていたバックバックを背負い立ち上がった。

「なんか恥ずかしいところを見せちゃいましたね」

「いや、まあ……オレも寝過ぎましたんで」

寝過ごした男が同じく寝過ごした女を起こした。

その事実を理解し、鈴美は慌てて口を押さえる。だがすでに漏れた笑い声を相手に聞かれてしまった。

無表情な男の眉間が少し動く。

「…失礼ですな」

「ふふ、いや、ごめんなさい笑って……ふふふ」

男もどうやら彼女と同じ杜王駅に戻るらしく、二人は戻りの電車の中でしばし会話を交わした。

といつても男はあまり喋らず、彼女が話した言葉に少し返す程度だった。

「川尻さんは私より二つ年上なんですな」

川尻という男に鈴美は妙な親近感を抱いた。

なぜかと少し考え、ふと気づく。身長や体格、外ヅラを装っている時の彼の雰囲気のような、吉良とどこか似ているところが多い。

ゆえに見ず知らずの男でも、多少気を緩められたのかもしれない。

「あの、少しいいですか？」

気づけば鈴美は、例の「視線」のことについて話していた。

「…警察に相談するのが一番だと思います」

返ってきたのはもつともな答えだった。

しかし鈴美は誘拐の後受けた事情聴取以来、警察に苦手意識を持っている。正直頼りたくない。

「ただオレもよく同じ時間帯に電車を使ってるんで、もし何かあった時は言ってください。助けになれるかは…その、わかりませんけど」

「…あ、ありがとうございます！」

鈴美は川尻の無表情な裏の優しさに触れ、駅に着いたあと別れた。

23話 クーデレ?ツンデレ?ヤンデレ?

例年より早く梅雨が終わり、本格的な夏の暑さがやってきた。

以前熱を出した時に出会った「しのぶ」という女性とは時折話すようになった。

うわついた連中とは関わらない生活を送っていたというのに、講義が終わった後、突然話しかけられた時は驚いた。

世話になった手前邪険にするのも躊躇われたので、何度かランチを共にしている。

「……え、吉良くんって彼女いたの?」

「いないとは一言も言っただけだと思っただけ」

「ふーん……いたのに他の女を家にあげたんだ。しかも帰り際、手まで握っちゃって」
味噌汁を飲み、サラダを口に入れた途端トマトの酸味が舌に直撃する。

昼飯にしては軽食だが今の胃には助かる。パックの牛乳で弱い痺れを流した。

「熱のせいだね、君が彼女に見えてしまったんだ。すまなかった」

「……つま、別にいいわよ」

「そういう君には彼氏、いないのかい?美人でモテそうなのに」

「……さてはあなた、女の子に平然とお世辞言うタイプね？」

「本音さ。それよりあんまり食べてないみたいだけど、大丈夫かい？ ダイエットは身体に悪いと思うよ。十分細かいじゃないか」

しのぶくんは少し食べただけで半分以上残している。最近あまり体調が良くないらしい。

「アイツはつい先日、フってやったわ」

「それはまた何で……いや、人の色恋沙汰に他人が口を出すべきじゃないか。すまない」
「さっきから謝ってばっかね。……いいわよ、他にイイ男を見つけてやるんだから」

彼女と付き合っていた男ならそこそこイケメンだったのだろう。

手の綺麗な女ならぼく的にウエルカムだが、以前の合コンの時のように平手打ちを食らったらたまったものではない。

自分のフェチが鈴美の「幸福」を奪い、縛っている自覚はある。ゆえにこちらも彼女に譲歩すべきだが、一年に数回の頻度で地雷を踏んで叩かれるか、飛び膝蹴りを食らう。女心はよくわからん。

レタスを齧るぼくを見て、しのぶは「ベジタリアン肉食主義なの？」と尋ねてきたので、適当に答えた。

「……元々ね、別れる気ではいたの。でもこの間駅で女と歩いてたアイツを偶然見つけ

て、カチンときて」

「浮気か、俗だな」

「そうでしょ!…それ見て傷ついた自分にも驚いたの。つまらない男だとは思ってたけど、私も少しはアイツのこと好きだったんだって…:…皮肉にもその時、初めてわかった」

「好き、か」

十代の頃は誰かを好きになれば自分が変われると——普通になれると、思っていた。だが佐藤と関わり己の本質を知るほど、自分は結局変わらないのだとわかり始め、ついには諦めた。

そして今がある。普通を装い、自分の本性を騙して生きる今。

未来のわたしは過去のぼくにとって、果たして「幸福」と言える人生を送っているのだろうか。

「元カレには腹が立ったのかい?例えば夜に人通りのない道で包丁を向けるほど、憎くなったりするのか?」

「…なんだか不思議な質問ね?腹は立ったけど、悲しいって気持ちの方が強かったかしら」

「…:…そうか」

親の抑圧がなくなり欲求を紛らわすため趣味を探したが、続くものは結局なかった。その中で、サークルの連中に相談するついでに渡された大衆——特に少年向けに書かれた本を読んだ。

平凡な主人公の男に様々な属性を持った学園の美女たちが惚れ、次々に関係を持つていくという内容。現実的に非常識だろと思う反面、「いや、自分も大概だった」と思った。「女の方はアイツより年下っほかったのよね。可愛いって感じで……私だってそれなりに、努力してるっていうのに」

「まだ続けるのかい？」

「誰かに話さないと気が済まないの！こんな話、友人にも言えないし」

食べ終わったので、バッグからペットボトルとピルケースを取り出す。

一つずつ胃に流す間にも愚痴は続く。リスニングの相手はほく以外じゃダメなのか？

「ほんと指輪を付けてたあの子、許さない……」

「女って怖………指輪？」

「そう、指輪。紅い色が遠くからでも目についたから、よく覚えてる。絶対男に貢がせてるのよ」

「……………」

「吉良くん?」

まさか、いや、指輪を付けている女なんてそれなりにいるだろ。

しのぶくんの言う「女」が、彼女とは限らない。しかし特徴を聞くほど、カチューシャなどのイメージが鈴美に当てはまっていく。男友だちがいてもおかしくはないじゃないか。例えば大学の友人であるとか。

「…君の元カレは、別の大学の人間かい?」

「いいえ、ここの学生よ。別の学部だけど——」

——川尻浩作。

それが彼女が付き合っていた男の名前だった。一度聞いたことのあるその名は、以前合コンを共にした男の苗字と同じで、彼女が言った「つまらない男」という印象も奴に当てはまる。

「大丈夫?なんか顔が怖いわよ?」

「……何でもないよ。ただ知り合いと君の言った女性の印象があまりに似ていたから、驚いてね」

「ふーん……そう」

川尻と鈴美が一緒に歩いていた?互いが交際している相手(この場合ぼくとしのぶく

んの方)の関係を迎れば行き着きはする。しかし、関わる接点など何もなければずだ。偶然出会ったのか?

鈴美がぼくの前ではなく他の男の前で指輪を付けていた事実には、無性に心が落ち着かない。イラ立ちに似た感情が胸の中で渦巻いている。

「…コレ、何なんだ?」

「何なんだって…何が?主語が抜けてるわよ」

「この感情はいつたい何かと、わたしは聞いている」

席を立ちテーブルに手をつけて前に姿勢を傾けると、正面に座っている彼女は息を飲んだ。

さつきまで平穩に過ごさせていたというのに、爪の伸びと共に黒いものが内側から這い上がってくる。

「…もしかして、その、女の子って…」

「間違いがなければ、わたしの彼女だろうね」

「ウソお…」

ふと指に痛みを感じた。無意識に爪を噛んでいたらしい。

自分の感情にぼく自身がついていけない。得体の知れないこの渦巻きが、自分の平穩を崩していくように感じられる。

「…嫉妬、してるんじゃない?」

「嫉妬?このぼくが?誰に?」

「多分、アイツ…:川尻くんに」

「まさか、ぼくが誰かに嫉妬なんてするわけない。そんなことあり得ない」

今まで普通に生きられる奴らが羨ましくて、嫉妬したことはある。だが特定の誰かに強い嫉妬を抱くことなどなかった。何故ぼくが川尻浩作に嫉妬しなければならないんだ。ただ鈴美の隣を歩いていただけで、何故?」

「吉良くんもやっぱり彼女のこと、好きなんだね」

しのぶくんの一言に、ぼくの思考が止まった。

???????

「また、視線だ…」

夕方杜王駅に着いた時、鈴美はまた視線を感じた。

誰かに見られているという感覚。その気色悪さに鳥肌が立つ。

「あつ」

その時偶然、彼女は川尻と再会した。

向こうは鈴美の声に気づき俯きがちだった視線を上げる。相変わらず何を考えているのかわからない顔だ。

「先日はどうもありがとうございました」

「……いえ」

川尻も鈴美と同じく、向かう先は駐輪場。彼女は高校時代から使っている物だが、向こうはクロスバイクらしい。鈴美は吉良が乗っているところをふと想像してみたが、妙にママチャリの方が似合いそうだと感じた。

「今日は大丈夫でしたか？」

「…えっ？」

突然川尻に話しかけられて驚いた彼女は、前に話した視線の件を言っているのかと思いきや、言葉に濁す。

「一応気をつけてくださいね」

「は、はい。ありがとうございます」

鈴美は川尻に頭を下げ、自転車を漕いだ。ペダルがいつもより重く感じられる。夏の暑さも相まって流れる汗に不快感を覚えた。今日は自宅に帰った後、吉良の家に泊まる予定だ。彼の前で暗い顔はしてられない。気分を変えようと視線を前に向け、大きく自転車を漕いだ。

??????

時刻は夜の八時を回った。鈴美は家でシャワーを浴び所用を済ませた後、吉良宅へと向かった。

「…あれ?」

家の明かりは点いていなかった。違和感を覚え、玄関の戸に手をかける。家主が何か急用で出かけているなら仕方ない。しかし横にスライドするタイプの戸は軽い音を立てて開いた。

「吉影くん?…お邪魔しまーす」

鈴美は恐る恐る家の中に入る。武家屋敷なこの家は夜だと恐ろしさが増す。吉良に

しか見えない化け猫の例も恐怖に拍車をかける。

廊下の電気を点けると、吉良の靴はいつも通り綺麗に揃えてあった。

「吉影くん？」

キッチンや居間を見たが吉良はいない。一通り電気を点けて回り、残るのは吉良の自室。

部屋には入らないよう言われていたため鈴美は入ったことがない。

「……でも、入るしかないか」

単に寝ていただけだったら、起こしたあと「おお勇者よ、死んでしまうとは情けない」
とでも言ってる気で。

襖を開け中に入る。中央のペンダントライトの紐に彼女は手を伸ばし、引っ張った。

視界に入ったのはテーブルと座椅子。授業関連のものだろう、ノートや資料がいくつ
かテーブルの上に置いてある。

「……ん？」

その時背中を何かに触れられた感触がし、鈴美は後ろを見た。

「吉影くん！」

吉良は彼女が入った襖のすぐ左横に膝を抱えて座っていた。顔はうずくまっている
ので窺い知れない。

鈴美は吉良の肩を揺する。するとゆっくりと、瘦け気味の顔が持ち上がった。

「……やあ」

「やあ、じゃないわよ……大丈夫? 具合が悪いの?」

「……………」

額に触れ熱を確認する彼女の腕を掴み、吉良は黙ったまま押し倒す。

「……………吉影、くん?」

細い手首を握る力が少しずつ強くなっていく。

その痛みに鈴美は呻いた。眼鏡をかけていない男の瞳は普段と違いありありと見える。浮かぶのはどこまでも深い、紫がかつた夕暮れの色。不気味であるのに、なぜか目を逸らすことができない。

「昔言ったこと、覚えてるか?」

「?」

「君と付き合えば、わたしも「恋」が何たるかをわかるかもしれないってことだよ」

「……覚えてる。忘れるわけじゃないじゃない」

「そうか」

鈴美の手首を握りしめていた手は今度、柔い頬に移動する。

吉良のいつもとは違う行動に、鈴美は血が凍るような感覚を覚えた。

「今日君、他の男と歩いてたね」

「…あ、駅でのこと？前に寝過ぐして起こしてもらった人と会っただけだけど……見て、たの？」

「見てたよ」

「……ッ！」

—— 視線。

その二文字が鈴美の中に浮かぶ。

最近感じていた視線は吉良のものだった？ずっと自分を観察していた？

まとわりつくような気持ちの悪いあの視線を思い出し、彼女の顔が青ざめていく。

「何で、そんな……こと」

「君を見ていたら、何かまずいことでもあるのか？君はわたしの彼女だろ、何がいけない。それとも何か……やましいことでもあるのか？」

「……離し、て」

鈴美は身体をよじったが、上に乗った体はびくともしない。

かつての恐怖を思い出し、華奢な身体が小さく震えた。ホテルでパニックになった時

のように、優しく背を撫でてくれた彼の姿はない。彼女の瞳から涙が溢れ、目尻を伝って耳のすぐ後ろに流れた。

「普通になれば、幸福になれると思っていた。だがどうだ?自分の感情を理解して知ったのは、どうしようもない感情の渦だ。これで平穩になんて、暮らせるわけないじゃないか」

吉良の両手がゆっくりと、細い首に伸びる。

「君がいなくなれば、わたしは平穩に暮らせる。きつともう自分の欲求には抗えなくなるだろうけどね」

「……ッ、かはっ」

氣道が塞がれ、呼吸が困難になる。鈴美は吉良の腕を掴み抵抗したが引き剥がせない。

「結局わたしは自分の運命に、性に、^{さが}抗えないんだ」

鈴美の頬に何かが落ちた。それが涙なのだと気づき、薄れゆく意識の中で彼女は吉良の顔を見る。

ポツポツと、雨のように降るそれは紫目の中から溢れる。

「……よっ、し……」

声にならない声が酸素を求める口から漏れる。白いたおやかな手が涙で濡れた男の頬をくすぐった。瞬間、吉良の眼が微かな正気を取り戻す。

「——ゴホッ！」

「れ、れい……み……」

吉良は後ろへと尻もちをついて倒れ込んだ。

鈴美はまだぼんやりとする頭で、今し方自分の首を絞めた男の顔を見る。自分よりも大きい身体は震え切っていて、顔が青白い。

その姿はまるで死人のようであり、母親に叱られた時の幼児のようでもあった。

じんわりと母性に似た感情が彼女の内に広がる。

「……吉影くん」

「ごめん、ごめん、ごめん……」

体温の低い手を握り、鈴美はその頭を胸に押し当てようようにして抱きしめる。トクンと、心音は緩やかに脈を打っていた。

生きている。

そんな当たり前の事実が、何故か尊いもののように彼女には感じられた。

24話 先生、ピンクッションの中に入り込んだ針が取れません

誰かを好きになれば自分が変われると思っていた。

人を愛することはきつと幸せなのだろうと、思っていた。

思えば感情の変化はとつくの昔に少しずつ起きていたのだろう。

指輪を買いおうと訪れた時も店員に勧められる前に、紅い煌めきを見て自然と鈴美の瞳の色が浮かんだ。きつと似合うのだろうと思ひ、手に収まるリングを想像した。

そもそも彼女の怒りを買ひ叩かれた時も苦笑するばかりだった。

鈴美の心を考え行動に移していた時点で、ぼくは多分変わっていた。

ぼくに甘い人間、本性を知っている人間。その上で心を許すことができる。自分の弱さを見せることができる。

依存に近いのかもしれない。殺人欲求はもう限界で、明日には殺していてもおかしくない。

まだ早い時間に目を覚ませば、こちらを見ていた鈴美と目が合った。

どうやらあのまま畳の上で寝入ってしまったらしい。相手の瞳も眠たげなので起きたばかりなのだろう。

「……………」

白い首にありありと浮かぶ痕から視線を逸らした。

彼女はそんなぼくに手を伸ばし、頭を撫でる。まるで母親が子どもをあやすかのような手つきだ。

「吉影くんは私より歳上だけど、たまに幼く見える時があつてね。今まで何でだろう？つて思ってた」

「……………」

「きつと吉影くんは知らないんだわ。人が成長する過程で育まれる心を」

なぜ首を絞めた男に柔らかい声で、瞳で、語りかけることができるのだろう。怖いだろ、と聞いた。

怖くないよ、と言われた。

はじめは鈴美が指輪を他の男の前で付けていたから嫉妬したのだろうとも思った。

だが数日駅で彼女の帰りを待ち伏せし、川尻と歩いていた姿を見た時、薬指に指輪はなかった。にも関わらずぼくの胸中は嵐の如きありさまだったのだ。

恋はぼくの平穏をかき乱す。抱かなくていい不安や嫉妬に駆られ、精神を磨耗する。彼女もぼくのように心を乱されていたのだと考えると、そりやあ一発や二発殴りたくなるだろう。

「キスしてもいいかい？」

首を小さく振った彼女に、顔を近づけた。

「きつかけというのは些細なものだ。誰かに言われてようやく自分で気づけるのだから……ね」

「……………」

「ぼくは、君が好きみたいだ」

紅い瞳が溢れんばかりに開く。綺麗な色だ。

「すき焼き……？」

「……………」

OKわかった。かつて図書館で想いを告げてくれた時の君の気持ちだが、よくわかった。こんな貶された気持ちになるんだな。

「何ならもつと恥ずかしい言葉を言ってみようか」

「え、え、えっ」

耳元でしかも英語で、「ぼくを泣かせることができるのは君だけだ」「君にくびっただけ」など呟いた。

普段ならあり得ないキザな言葉を吐くなど、我ながら狂っている。

鈴美は魚のように口を何度か開閉させて固まる。顔は露骨に赤くなった。

「わ、私の手が、でしょ？」

「君が、と言ったが」

「……………」

彼女だけ時間から取り残されたように動かない。

「じゃあ何で、私のこと……」

「君が他の男と歩いていたところを見たって、言ったよね」

「……………怒ってるの？」

「嫉妬だよ……多分」

自分でも己の感情に線引きできていない。川尻への嫉妬や、鈴美に怒りもあった。その上で欲求が重なって最後は勝っていた。つまり殺そうとしたのは事実だ。

どんなに気をつけていても、一度火が点いてしまえば止められない。

保健医が亡くなったあと鈴美と出会った時も、ぼくは「傷つけたくない」と思ってい

た。

…存外答えは、前から出ていたのか。

自分の感情を理解できてくると、佐藤へ抱いた「美しい」という感情もまた、本心なのだとわかる。

「逃げていいよ。君のことは好きだが女の手もぼくは好きだ。殺したい性は収まることを知らないだろうし、君をいつ殺してしまうか分からないから」

「…私に託すような物言いだね」

「ずるい男なんだ、わたしは」

彼女は、ぼくの手を握った。その手を握り返しながら指輪を抜き取り、畳に投げる。雑に扱うなど注意されたが、所詮は物。畳はそのままだと身体を痛めるが構わない。まだ朝は早いのだ。細い身体を抱きしめそのまま瞳を閉じた。

??????

「吉影くんが私のこと見てたのって、いつから？」

朝食を作る吉良を見つめながら鈴美は言った。Tシャツとホットパンツ姿の彼女の首には包帯が巻かれている。朝起きてからくつきり残った痕を見て、また顔を青ざめさせた吉良が巻いたものだ。

「…知人が君と川尻くんが歩いてたのを見たって聞いてね、その後からかな」

「へー、川尻さんと知り合いだったんだ」

「うんまあ、以前少しね」

合コンで会った、とは言わなかった。火に油を注ぐ結果にしかならない。

吉良はできた目玉焼きをフライ返しですくい皿の上に乗せた。

「川尻くんどうして歩いてたか、聞いてもいいかな」

「…ああ、私が以前駅で寝落ちしちゃった時に起こしてくれてね。偶然また会ったの」

「……本当に何もないんだね？」

「誰かさんと違って私は一途なんです。誰かさんと違って」

後半強調した鈴美の物言いに、バツが悪い顔をする吉良。

朝食は昨夜の騒動など匂わせないほど穏やかな時間が流れた。

「……………」

鈴美は彼氏の後ろ姿を見つめながら、例の「視線」について考える。

正体は吉良ではない。彼が鈴美を見始めたのは彼女が川尻と会って以降のこと。

視線はもつと前から感じているのだ。

「ほんと、憎たらしいぐらい料理が上手いんだから…」

食卓に漂う香ばしい匂い。できた料理をテーブルの上に置いていく男を、彼女はジト目で見る。

視線について相談するべきか迷ったが、結局話さなかった。これ以上精神的に相手に負荷を与えたくないという理由で。

「ねえ、今度は私が料理してもいい？」

その問いに吉良は考え込むようにした。

手に傷ついて欲しくない。しかし彼女の料理を食べてみたいという葛藤が起こる。

そんな彼の様子を見ながら、鈴美は自分と女性の手が同じ重さで釣り合っている事実
にむず痒さを覚えた。

首を絞められた件といい、「好き」と言われた件といい、振り回されっぱなしだ。

「ふう」

しかし恐らく今日ほど幸福な日は中々ないだろう。

???????

景色が移ろいで行く。冷房の効いた揺れる電車内に乗っている人間は疎らだ。

少しくたびれたスーツを着た男は新聞を読み、年増の女二人は世間話に花を咲かせている。

その中でも特に若いであろう男は、腕を組み船を漕いでいる。着ているスーツのネクタイは少し曲がっていた。

「居眠りかい?」

「……ん?」

男は突如かけられた声に目を覚ます。

「不用心だな。海外では乗り物の中で居眠りなんぞしたら、すぐに荷物ごと貴重品を盗まれるよ」

そう語る男はネクタイの曲がった男の隣に腰掛けていた。

席は選り取り見取りな空間で、野郎が並んで二人。死んだ目の上にある眉が不快感を隠さず中央に寄る。「何が悲しくてオレはアンタと仲良く座らなきゃいけないんだ？」とでも言いだけに。

話しかけてきた男には、見覚えがある気がした。

白い無地のシャツにスキニージーンズ。シルエットのラインから男にしては細身だ。

ついで後ろに撫で付けられた茶に近い金髪に目が行く。染めているのだろうか。頬は少し痩けており、幻想さを宿す紫の目が男を捉えていた。

「…ああ、吉良さんですか」

「そういう君は川尻くん」

「そうですね、川尻ですが何か？」

「なぜ若干ケンカ口調なんだ」

「ちよつと疲れてるんでつい」…とこれは川尻。

川尻は周囲の内定が決まっていく中、未だ企業から採用を貰えていない学生であった。就職活動に出遅れたわけでもない。ただ中々その平凡さゆえか、採用者の目に止まらないのだ。

「川尻くんはよく電車を使うのかい？わたしは大学に行く際は車を使うからね、乗る機会はそう多くないよ」

「…通学に使いますね」

「そうかい。まあ、居眠りには気をつけてくれよ。終点までうつかり行って戻るのは大変だろうからね」

「…はあ」

川尻は吉良の言葉に曖昧な返事を漏らす。

居眠り常習犯の彼は、今まで数え切れないほど気付けば終点——というのを繰り返している。駅員に「居眠りの王子様」という不名誉なあだ名をつけられていることは知る由もない。

「ところで君、よくこの電車に乗っているカチューシャの女性を知っているかい？」

「…まあ、たまに見かけますけど……」

髪の色が明るく、電車内でも男の目を引く可愛らしい女性。淡白と称される川尻でも、もし目の前に彼女が立っていたら一度は目を向けてしまうだろう。

その女性とは何度か会話を交わしたことがある。「視線」の件についても覚えていた。ストーカーがいてもあの見目ならおかしくない。

その時、ハッ！——と目をわずかに見開いた川尻は、吉良を見る。

「行きましょう、警察に」

「……ん？」

「ストーリーカーはよくないと思います」

電車内が一瞬揺れる音を残して静まり返る。新聞を読んでいた男や談笑していた年の女性たちがいつの間にか、二人の異様な会話に耳をそばだてていた。

「はは…」

露骨に顔を引き攣らせた吉良は、真顔の男を見やる。

ストーリーカーは貴様の方じゃないのか、川尻浩作。もしかなくてもコイツ、天然なんじゃあないか？——。

その心中は穏やかではない。

吉良は鈴美から話を聞いて以降、川尻を怪しんでいた。それもストーリーカーではないのか？という路線で。

彼女は隠していたようだったが、最近何か悩んでいることに気付いていた。

『——吉影くんが私のこと見てたのって、いつから？』

鈴美が言っていた言葉だ。

質問としてはいささか疑問が残る内容である。仮に吉良が彼女を見ていたことを聞くなら、「私を見ていたのって吉影くん？」とでも言うだろう。「いつから」という点が

ひっかつたのだ。

必然的に考えられるのはストーカー。彼女を見ている人間がいる。

そこで何度か鈴美と遭遇していた川尻浩作を吉良は怪しんだのだ。

「蓋を開けてみればただのド天然だったけど……」

「人のことバカにします？」

「ああ。本当に……考えすぎたわたしが愚かだった」

「オレ今、喧嘩売られたんですね」

川尻は曲がったネクタイを緩める。凡庸そうな男だが貶されて「はい、そうですか」と流せるほど素直な性格ではない。

「八月に新しく格ゲーの「ストリートファイター」が出るそうなので、決着はそこで着けましょう」

「……は？」

「よく「アツポー」や「空手道」やってたんですよ、オレ」

死んだ目が、藻が張った水槽を掃除してもらった時の魚ように生き生きしている。

突然の男の代わりように、吉良は無言で一人分席を離れた。隣の男がゲーム好きというだけでもいいことは分かった。ゲームに触れて来なかった吉良にとっては、縁のない代物である。

「話を戻すが、わたしは彼女——鈴美のストーリーカーでも何でもないよ。彼氏だ。ストーリーカーは君の方ではないのか？」

「ストーリーカーに見えますか？」

「君のレイプ目に絶妙な闇を感じてあり得なくはないと思っている」

「ないですよ、彼女いたんで」

「しのぶくんのことか」

「……」

レイプ目とまで謳われた瞳が大きく開く。よくよく見れば黒一色に見える瞳は二色に別れ、外側に中央の黒に限りなく近い色のダークグレーがあることが窺える。

「……しのぶが「他に好きになった人ができた」と言っていたんですが」

「多分ぼくのことだ」

「……………」

膝の上に置かれた川尻の手が強く握られる。

男の様子を見た吉良はどこか浮世離れた気持ちになった。

一見して情愛などなさそうに見えるこの男も、人を愛する心がある。その事実が感情の水面に落ち静かに沈む。

“次は杜王駅、杜王駅”

ハリを感じさせる運転士の男の声が車内に響く。機械のトラブルかハウリングした音は耳に後味の悪さを残した。

「……………」

黙って降りた金髪の男に続き、黒髪の先の折れた針のむしろの如き頭の男も後に続く。

平穏だった車内に唐突に舞い込んだ昼ドラに、新聞の男は苦い顔をし、おばさま方は格好の話の種にした。

軽快な音が鳴り、ドアが閉まる。残されたのは男二人。

「彼女は「つまらない男」は嫌いだよ、川尻くん」

「…オレは凡庸ですから」

「実を言えばね、わたしの彼女と君が駅前まで歩いていたという情報をくれたのがしくんなんだ。君と別れたのはその後…だったはずだ」

捻れた恋愛模様。

それはしのぶが吉良を介抱し、そして川尻が鈴美を起こしたことから始まった。

偶然というには出来過ぎではないだろうか。だがしかし恋が関わりと波乱に巻き込まれてきた吉良にとって、「あり得ない」とは言い切れない。

「…しのぶはあなたを好きになったからオレと別れたんですか？」

「さあね、女心は今一わたしも分からない。ただしのぶくんが君を「つまらない」と評価する反面、確かに愛情はあったと思うよ」

「……じゃあ、オレが吉良さんの彼女と歩いてたから…」

「本人に聞けばいいだろう」

結局は痴情のもつれはお互いを理解し合うことでしか解決できない。

「それとわたしの意見に過ぎないが、彼女はもしかしたら妊娠しているかもしれない」

「……！」

あからさまな食事量の減少、時折本人が訴えていた頭痛やだるさ。肌も少し荒れていた。た。

そして顕著に窺えた情緒の不安定さにもしや——と、考えた。

果たしてそれが性欲が本当にあるのか微妙なこの男との子なのかは、分からないが。

「まあ彼女は何だかんだで他の男を好きになっても、彼氏以外と寝るタイプではないだろう」

「…ちよ、ちよつとオレしのぶの元に行ってみます」

改札に思いきりぶつかり、腹を強打した川尻は苦悶の声を上げた。横の窓口にいた駅員と吉良の冷たい視線が刺さる。その後改札を抜けエスカレーターを二段飛ばしし、地

に舞い降りた男は自身のトップチューブに紅いラインの入った愛車「ヘルダイバー（クロスバイク）」に跨る。名前はアレだが川尻は決してパーフェクトサイボーグではない。本人の趣味である。

「あ、そうだ」

少年の心を持つ男は去り際、駅のすぐ隣にある駐車場に向かう男に声をかける。

「何だい？」という不満気な声を聞き口を開く。

「彼女のこと、守ってあげてくださいね」

川尻の残した言葉は、一種の宣告でもあった。

ヘルダイバーに乗った男の背はみるみる小さくなっていく。吉良は険しい表情を浮かべた。

鈴美の隠す視線の正体。

吉良でもなければ、川尻でもない。ならばいったい誰なのか。

——「異常」は案外近くにあるのかもね、吉良くん。

かつての保健医の声が、すぐ耳元で聞こえた気がした。じつとりとした暑さを受け、瘦けた頬を伝い汗が地面に落ちた。

【地毛】

彼女の初手料理をダメ出ししつつ箸は止めない男に、鈴美は言った。

「吉影くん、髪染めるのやめたら？」

「ぼくの平穏が崩れるから嫌だよ」

「私吉影くんの金髪、綺麗で好きだよ」

上目遣いでねだるような仕草を取った鈴美。

それに今は黒髪の男は眉を寄せつつ、自身の平穏と彼女の好意を天秤にかけた。

して一ヶ月経たないという頃、吉良の髪は周囲の目を引く髪色へと変化したのである。

「吉影くん、眼鏡かけるのやめたら？」

彼女の「おねがい」に、彼の皮は少しずつ剥がされていくことになる。

25話 ひよっこり

卒論。大学生なら誰もが苦勞するであろう道である。

ぼくは無難な文豪辺りをテーマに絡めて執筆を進めている。鈴美もまた大学の講義やバイトで忙しく、お互い会う機会は減っていた。

久しぶりに会えたのは夏休みに入る手前。両者休みで、どこかに出かけるか?という流れになった。

杉本家の前で車に乗り待っていると、彼女が家から出てくる。

歩きながらスニーカーの爪先を地面に押し当てる様は忙しい。

「というか、ちよつと待て」

開けっ放しの玄関からもうひとり出てきた。

彼女の腰より少し上ほどの身長の子どもが、サイズの大きいスケッチブックを抱きしめて歩いてくる。

「あ、ごめんね吉影くん。露伴ちゃんも今日は一緒に……」

「よし乗ったな。行くぞ」

「え?……ちよ、大人気ないなあ!」

ハンドルを握る手を後ろから鈴美に掴まれた。君の家は岸边家の託児所代わりとして使われているんじゃないのか？というか鈴美もなぜ後部座席に座るんだ。一応デートのつもりでこちらは来たんだが。

「女子どもが乗ってるんだ、せいぜい運転には気をつけるよ」

露伴少年は助手席の後ろに座る。シートベルトを閉めながら不遜な態度を取るクソガキのさらに後ろには、キラークイーンがいた。貴様何ぞいつでも爆破できるんだ。

「わたしとしたことが…ガキが乗るとわかってたら、チャイルドシートくらい用意しておいたのに」

「なっ……！誰がガキだ！」

「ん？自分でさつき「女子ども」と言ったじゃあないか。「子ども」は「ガキ」だろ、少年」

目に見えて飛ぶ火花に鈴美は気付かず、車窓を眺めながら本日の目的地である水族館に思いを巡らせている。

…いや、あれは花より団子だな。「タコ焼き食いたい」だそうだ。

目的地には高速を乗り継いで二時間後に着いた。途中パーキングエリアにあった店で、彼女はタコ焼きを買っていた。

午前中は魚を一通り見て、一旦昼休憩を挟んでショーを見ることがになった。

鈴木も楽しんでいようので、少年も（スケッチをして）楽しんでいる。後者は楽しみ方が独特だった。

「ふふふ、何を頼もうかなあ…」

「また食べるの？」

「まだ食べるのか」

「あのタコ焼きは朝食の延長線上にあるからいいの！」

彼女は魚介がてんこ盛りな丼を選び、少年はお子様セットを選んだ。やっぱりガキだな。

ぼくも軽めのものを頼んだ後、先に会計を済ませた。

「何で吉影くんはサラダなの？前世は草食動物だったとか？」

しのぶくんにも以前似たことを言われた。オムライスにブツ刺された日本国旗を凝視している少年を横目で見つつ、レタスを口に運ぶ。

不意に眼前に箸に摘まれた赤身が差し出された。思ったが、水族館で調理された魚を出すのはどうなんだ。

「…何してるんだ」

「えっ、遠回しな「あーん」の催促じゃないの？」

「結構だよ」

赤身は結局彼女の胃に収まった。食べ終わった後、少年がお手洗いに立ちぼくも向かった。

「ガキ扱いするな！付いて来なくても一人で行ける！」

「知ってるさ、薬を飲むだけだ」

「……………」

コイツの性格は難しくないが、地が賢いので心配はしていない。

「別にトイレで飲む必要はないだろ、変な奴」

「絶対に、貴様にだけは言われたくない。人目が多い場所で薬を飲んでいる人間なんぞ

目立つだろ」

「ふーん……やっぱ変な奴」

この小僧はぼくの信条を知らないし、教える気もない。

トイレは女の方は混んでいたが、男の方は空いていた。

洗面前に立って間もなく用を済ませた少年が隣に立つ。少し背伸びをして蛇口を捻り手を洗った。

「あれ、ハンカチがない……………まあいいか」

着ていた短パンで手を拭こうとした小僧の腕を掴み、小さい身体を持ち上げてハンド

ドライヤーを使わせる。

子どもを考慮してもう少し下に設置すべきだな。

「……………」

少年の形相が親の仇、と言わんばかりだ。ぼくはこいつの親を殺した覚えはない。そもそも誰かを殺したことがない。殺しかけたことはあるが。

「君としては鈴美に抱っこされたかったか」

「……………べ、別に、鈴美おねえちゃんは関係ないだろ!!」

「どうでもいいがさっさと終わらせろ、重い」

「お前から聞いてきたんだろぅが!!」

少年を下ろすと、一瞬こちらを睨んで外に向かおうとする。

お礼ぐらいきちんと言ったらどうなのか。

「ツハ、この岸边露伴がお前に」どうも、ありがとうございます」なんて言うと思うか？」
「君が桃太郎侍にハマってた頃から知っているからあり得ないね」

地面から数十センチの高さを手で示す。あの頃からクソガキで、今はよりクソガキに磨きがかかった。将来逆に大物になりそうである。

手を乾かした少年を下ろし、ぼくも荷物を持って外に出る。

先に行っただと思っていた子どもは、なぜかトイレを出たすぐ横の壁に腕を組んで立っていた。

「鈴木お姉ちゃんを傷つけたら、ぼくが絶対に許さないからな」

「…急に何だい」

「何でもだ、約束しろよ」

「君は自分を中心に世界が回っていると思ってるだろう？」

「いいから、約束」

長めの小指をズイズイ向ける小僧に、仕方なく自分の小指を差し出す。

絡みついた指は小さくて、少しでも力を込めれば簡単に折れてしまいそうだ。

エメラルドの瞳は真剣そのもので、段々可笑しさが込み上げてくる。

「何かあるんだろうとは思ったが、子どもの事情なら…親が転勤する、とかか？」

「…！」

「当たりのようだな。だからって、カップルのデートに遊びに来るのは非常識だと思うが」

「……うるさい」

「まあわたしは大人だからね。君の事情を慮ってやらないこともない」

鈴木が露伴少年を断らなかつたのも、彼の親の転勤の件を知っていたからだろう。ぼ

くに一言ぐらい断りを入れて欲しかったが、まあいい。
午後は二人でシヨールに行かせることにした。

水族館は三階建てで、外のすぐ側には広場がある。中央には半円を少し崩した左右対称のイルカを象った鐘がある。その広場を抜けた先には海がある。

ぼくは建物脇のベンチにハコフグの帽子（鈴美が買った）をかぶり腰かけていた。時間にして二十分。あともう少しでシヨールが終わる。

「守る……か」

彼女に付きまとう視線の正体はまだ暴けていない。可能性のある人物に心当たりはあるが、ならばもつと早くに動いているはずだ。

……いや、単純にこの四年間刑務所にいただけか。確実にぼくらを狙いに来ている。

姉の仇——。

だったら対象はぼくだけだろうに。鈴美も狙うのはぼくの恋人だからだろう。

相手を見つけ出しこの世から消し去ってしまえば、安穩とした生活を送れる。しかし人殺しはしないと決めている以上、殺人の手段は使えない。

取り敢えず今は狙われている彼女に目を光らせておくべきだろう。ぼくに近付かないのは、恐らく警戒しているためと思われる。

鈴美の異変に気づくまでわからなかったのだから、徹底している。そこに一種の「絶対にやり遂げる」という意志と、執念深さを感じた。

守るためには彼女の側にいることが肝心となる。いつそのこと同棲するか。

「吉影くん！」

ショーが終わったのだろう、鈴美の声が聞こえた。

休日のお昼ということもあり人通りが多い。小学生は夏休みに入っているため、カッブルも多いが家族連れも多い。

人の波を縫うようにし歩いてしたが、途中男とぶつかった。

鈴美は露伴少年の手を握って駆けて来る。

「聞いてよ、前の方にいたんだけど結構水浴びちゃったの。でもイルカさんは可愛かったよね、露伴ちゃん」

「フン、生臭かったけどね」

「それはまあしょうがないよ、ふふ……吉影くん？」

腹を抱え蹲るぶくを不思議そうに見る彼女。脂汗が額を伝い地面に落ちる。

恋にでも落ちちまったらみたいに、心臓が早鐘を打つ。遠くでイルカの鐘の音が聞こえ

た。

「吉…影、くん？」

「トイレなら赤つ恥のコキツ恥をかく前に早く行けよ」

「……………っ」

えづいたと同時に、ゴポツ、という排水管が詰まったような音が出た。

地面には己の吐いた黄緑がかつた色ではない、赤黒い色が広がる。口の中は鉄の味一色で、口を押さえれども止まらない。

血相を変えた鈴美の悲鳴が伝播して、周囲の人間たちの悲鳴が広がっていく。妙にクリアな聴覚の中でその騒音は地響きに等しかった。

口元を押さえる手とは反対の手で腹を探ると、生ぬるい感触に行き当たる。視線を向けて見えたのは、己の腹から突き出ている包丁の柄。

そこであろうやく自分が刺されたのだと思に至った。

次の瞬間には意識がブラックアウトする。

「いやあ!!吉影くん!!」

まったく、なんて災難な一日なのだろう。

26話 僕はタヒにましえん

——コン、コン。

『……ん?』

吉良はノツクの音で目を覚ました。部屋を照らす蛍光灯がチカチカと点滅している。ベッドの上で横になっていた彼は周囲を探る。

サイドには棚があり、正面には砂嵐のテレビがあつた。窓越しの世界は一面暗闇である。

『病院……か?』

地面に足を付けるとヒヤリとした感触が伝わる。

そこで吉良は自分が病院服を着ていることに気づいた。

——コン、コン。

尚もノツクが聞こえる。

『……』

部屋の中に凶器になりそうな物はない。いざという時に心許ないが、スライド式の扉に手を伸ばした。

——ガチャ。

中とは対照的に外は暗い。目が慣れてくると薄っすらと輪郭が分かった。廊下だ。

『……………？』

地面に点々とビビットな赤い跡が続いている。

眉を顰めた吉良はその跡を辿っていく。

100メートルほど歩き、曲がり角に行き着いた。赤い跡はその先にも続いている。一度止まった足はさらに前へ進んだ。

『……………』

道の先には赤い水溜りが一つある。

その中で一人の女がうつ伏せに倒れていた。背中には頸から腰にかけて一直線に引かれた深い傷があり、そこから血がしとどに流れている。

青白い女の顔はちょうど吉良の方を向いていて、瞳は白く濁っていた。

『鈴美…』

死体の女は杉本鈴美だった。

気づけば吉良の手には血濡れた包丁が握られていた。生々しいビビットの赤は刃だけでなく、彼の手や腕、顔にも付着している。

『……………』

愛する女が死んでいるのを前にして、吉良は冷静だった。

所詮は夢だ。自分の脳が作り出した意味のない幻想に過ぎない。

ゆえにに手首を切り落としても構わないと、包丁を振るった。

肉体をバラバラにする際はそれなりの力を要する。仮に人間を殺して死体処理に困っているなら、ノコギリやチェーンソーなどを使うのがいい。だがそれらの道具がないのであれば包丁でもいい。男より力の弱い女でも体重を乗せるように何度か力を込めれば、時間は掛かるがバラバラにできる。

吉良も何回か包丁を振るい、手首を切り落とした。

『夢の中だがやはり君の手は素敵だよ、鈴美』

手のひらに頬擦りをしながら恍惚とした表情で、彼は死体を見る。

“生”のない手は冷たく、死後硬直で関節が上手く曲がらない。やはり温もりを感じさせる鈴美の手がいい。しかし手だけの彼女もまた、美しい。

厄介な性癖を持った変態である。

『どの君もきつと、綺麗なんだろうね』

手を愛でていた吉良はふと、ノックのことを思い出した。

鈴美を殺したのは包丁を手持っていた自分だと思っていたが、おかしい。包丁を持っていただけで、刺した記憶はない。

『……………！』

紫目が大きく見開かれる。同時にカランと音を立てて、血に濡れた包丁が落ちた。

吉良の腹に薄い線が浮かび、パツクリと口を開けて鮮血がそこから零れ落ちた。

そうだ、彼は刺されたのだ。そして意識を失い、こんな悪趣味な夢を見ている。

鈴美を殺したのは吉良ではない。きっと奴だ。今も吉良が腹を押さえ呻いている様

子を、暗闇から見ながら楽しんでるに違いない。

『……………っ』

彼女を守らねばと思う反面確かな痛みが、彼の思考を沈めていった。

???????

「……………ぐっ」

鈍い痛みと倦怠感に支配されつつ吉良は目を覚ました。身体中脂汗でぐっしよりと濡れていて、服が張り付いている。

視界に何度か見たことのある白い天井が広がっている中、重い身体を無理やり起こし

た。

身体には点滴や酸素マスクが付けられている。ベッド傍には人工呼吸器が一定のリズムで音を出していた。

「……………」

吉良は呼吸器を取ると、次に点滴をむしり取った。地面に落ちたチューブの針先から透明な液が溢れ、フローリングに広がっていく。

「病院服だとまずいか…どこかで服を調達しないと」

意識のない間に開腹手術を受けた腹は痛むが、それで休む時間はない。何日かは眠っていたはずだ。

その間鈴美が奴の手にかかっている可能性がある。

一刻も早く向かわねば——と考えるこの男もまた、正気ではないのだろう。

「……………は三階か」

窓を開けると冷房の効いた部屋に蒸し暑さが流れ込んでくる。

ちょうど病院の裏に位置する部屋のように、下には木や植え込みがあり、建物の周囲を囲むようにフェンスがある。その先は道路だ。

吉良は窓の片方を全開にし、置いてあったスリッパの片方を窓際に置き、もう片方を外に投げベッドの下に身を潜めた。

その後間もなく扉が開き、慌ただしい看護婦の声や医者の声が室内に響く。

「患者はどこだ!？」

「せ、先生、窓の外にスリッパが……!」

急いで探すんだ、という医者らしき声の後、バタバタと足音が遠ざかって行った。ひとまずこれで人の目が分散された。

「早く行かないと……」

「どこに行くの?」

吉良がスライド式の扉に手をかけ脱走した束の間、後ろから声がかけられた。

ゆつくりと彼が振り向くと、『315 吉良吉影 様』と書かれたプレート横で腕を組んだ女が立っていた。薄桃の目は普段より澱んでいる。

「鈴美! 無事だっ……」

「ねえ、どこに行くの?」

吉良の会話を遮るように話しかける鈴美。

よく見れば目元には隈ができ、肌は荒れて、髪も少し乱れていた。

「……どこにも、行かないで」

「?あ、ああ、だから君の元に行こうと思って…」

「……………」

「鈴美…?」

唇をきつく結び涙を流す鈴美の様子を見て、吉良は瞠目した。

縋るように伸ばされた鈴美の手が、病院服を着た背に強く巻きつく。「ぐっ」と潰れたカエルの声を漏らしつつ、吉良も細い身体を抱きしめた。

心配されているのだとはわかった。もう少し怪我に気を使って欲しいものではあるが。

「…うん、やっぱり温かい方がいいな」

「……………」

「心配かけたかい? 気を病むほど気にかけてもらったって思ったら、中々気分がいいな……………うぐっ……………!!」

無理に動いたツケだ。腹の部分がジワジワと赤くなる。

吉良は青白くなった手で鈴美の手を強く握った。片膝をつき女の両手を握る姿は皮肉にも、プロポーズを迫る男のようであった。

???????

吉良を刺したのは、どうやら鈴美と同じ大学に通う男だった。

「君のストーカーだったというわけか」

「……うん」

あの後逃走男は看護婦に見つかり、部屋へと戻された。

場合によっては精神病棟に連行される可能性が出てきたので、さすがに吉良も大人しくなった。

現在は個室で入院しており、両親が他界しているため身元保証人として杉本家（鈴美）がなっている。

犯人は現場に設置されていた防犯カメラなどから判明し、逮捕に至った。

ストーカーの件もだが、自分が丸三日も昏睡状態だったことに吉良は驚いた。

医者にその間鈴美が毎日病院に介抱しに来ていたと聞かされ、不甲斐ないと感じる反面、いよいよ危うい単位に頭が痛くなった。

「少なくともあと一週間は入院させられるだろうな……」

「大人しくしようね吉影くん？」

まるで出来の悪い子供に教え諭すように、鈴美は点滴の繋がれた手を握り語りかける。

効果はあつたようで、渋々といった様子で吉良はベッドに重心を預けた。

「…ごめんね、私のせいで」

「そうだな。君が可愛すぎたせいでぼくはこんな目に遭つたわけだ」

「……………ごめん」

「冗談を言つたつもりだったんだけどな…君が気に病むことはない。心配してくれるのは嬉しいが、学業や私生活に支障をきたさないよう気をつけてくれよ」

「……………うん」

鈴美は椅子に座つたままベッドに顔を乗せ、吉良に擦り寄るように瞼を閉じた。繋がれた手を通じて体温が伝播する。

「生きてて、よかつた」

「…そうだね」

平穏な日々は物語でいう「ハッピーエンド」そのものだ。そんな毎日が延々と続く。学校に通い就職し、結婚する。子供を育て退職し年金暮らし、そして余生を細々と過ぐ

す。

普通の中でも理想的な一生。

異常である男にとって普通は水と油なのだろう。平穏な日々は望みこそすれ、代わり映えない毎日の繰り返しなのだ。

それでも彼が「吉良吉影」である限り、植物のような平穏とした普通の日常を望む。

「奇妙な人生だ」

自重気味に吉良は笑った。

27話 ランランルー

結局ぼくが退院できたのは二週間後のことだった。

安静にしていた我が身に待ち受けるのは単位。

各担当に温情をいただき救済措置を望まねばならないし、「刺されて入院してました」という内容に好奇の目を向けられるのだろう。

退院当日、担当医と複数の看護婦に見送られ病院を後にした。

鈴美は忙しいため来れないとあらかじめ連絡があった。

入院期間中に服など彼女に預けていたので、他にもやらなければならぬことはあるが、一旦帰宅し父に顔を見せてから杉本家に向かう。ここ数ヶ月は特に世話になりっぱなしだ。

外に出ると昨日まで降り続いていた雨の影響で、アスファルトに水溜まりがいくつもできていた。

タクシーに乗り運転手に目的地を伝え、今は快晴の空を眺めた。

「予想は外れたな……」

予想と言っても天気の方ではなく、ストーカーの件の方だ。

入院中警察に事情を聞かれた際見せられたのは、まったく面識のない男の写真だった。

一目見ただけではストーカーをする人間だとは思えない、ありふれた顔つきだった。鈴美にはいつ男と会ったかなど聞けていなかったので、あとで聞いておく必要がある。

男の犯行理由は、ぼくといた鈴美の幸せそうな様子を見て、彼氏に嫉妬したから。感情的になって刺されたこちらは堪ったものではない。

「しかしな……」

まさか人通りの多い場所でぶつかって男に刺されるとは思いもしなかった。

警戒はしていたが、避けられなかったことに悔いが残る。

気づけたら人目のない場所に誘導し、物を爆弾に変え手を爆破させただろう。調整はある程度練習してあるので問題ない。

片桐の線は外れた。そもそも奴が姉に本当に情を持っていたのかもわからない。

情報元が息をするように嘘を吐くあの女だったので尚更だ。

神経質になり過ぎていたのだ。もう少し肩の力を抜くべきなのだろう。

「ひとまず留年だけは勘弁だ……」

1987年はぼくにとって濃い一年になりそうだ。

???????

正午に帰宅し用事を済ませている内に、辺りはすっかり暗くなり始めていた。

「鈴美の家にお礼を言いに行くから、親父は取り敢えず家で待っていてくれ。間違っても付いてくるなよ」

【親子の感動の再会だというのに辛辣じゃの…】

「死んでる存在に再会も何もないだろ」

せめて実体を手に入れてから言ってくれ。

いつものように泣く父を無視し家を出ようとしたが、待ったがかかる。

「何？」

【いや、一応言っておきたいことがあってな】

「言っておきたいこと？」

【ああ、実はな…】

どうやらばくが留守の間、朝方に泥棒らしき人間が敷地に侵入したそうだ。

親父が異変に気付いて追いつく前に向こうが人（写真の中の父）の気配に気付いたよ
うで、外を確認した時にはすでにいなかったらしい。

「室内を荒らされたわけでもないし、警察に言う必要はないだろ」

【まあそうだが、一応な】

「まあ、ありがとね」

我が家は隅に位置するが、リゾート地帯のここら辺じや泥棒なんてザラである。

子供の頃夜中にトイレに向かい廊下の電気を点けたら見知らぬ男がいたし、他にも両親がいないうちに帰宅したら庭に侵入していたり、畳の上で青白い顔の女がブリッジしていたり、とにかく経験は多い。

裕福な家庭に生まれた代償だ、一々気にしていられない。

その点今は親父セコムがいるため比較的安心である。

そして杉本宅に車で着いたのは夜の八時過ぎ。

住宅が多いこの近辺はサラリーマンの帰宅時間を過ぎてしまえば、人通りがほとんどなくなる。

車を降りた少し先で蛾の群がった街灯が点滅していた。

二階は暗いがリビングの明かりは点いているので鈴美は下にいるようだ。

私事だがぼくは杉本家の犬が苦手だ。デカイ図体をして尻尾を振り突進してくるのがはた迷惑だ。

「すみません」

チャイムを鳴らし待つこと一分。扉は開かない。

「すみませーん」

もう一度鳴らし待ったが、やはり玄関に人が来る様子がない。放置プレイなんて全く好みじゃないんだが。

扉を引けば、キイと音を立てて開いた。

「お邪魔します」

「デデンデン、デデン」 という効果音と共に、未来から主人公を殺しにやって来た人間抹殺アンドロイドのように突っ込んでくるアーノルドが来ない。仕方なく靴は脱がないで廊下を通った。

「鈴美？」

リビングにいると思った彼女はいない。寝ているのか？しかし今日来ることは伝えておいたはずだ。

「……ん？」

その時、テーブルの上にあるケーキが目に入った。

二つの皿の上に置いてある生クリームケーキの一つが手付かずで、もう一つは半分食べかけだ。最後の一つは完食されてシンクにあった。このがめつさは鈴美だ。

「とうか今日は彼女の誕生日だったか。しくじったな……」

用事とはつまり、誕生日関連でいろいろとあったのだ。

まあ仕方ないだろう。ぼくも刺されて入院したりと忙しかったのだ。プレゼントは後ででいいだろう。

それからリビングを出て、二階に向かった。

犬は彼女の部屋の少し手前で寝ていた。一応揺すってみたが起きない。

玄関で寝ていた彼女の母親と、椅子にもたれかかり天井を仰ぐようにして寝ていた父親も起きなかった。

「鈴美、いるかい？」

声をかけたが反応はない。彼女には悪いが失礼を承知で入った。

部屋は全体的に彼女の好きな色のピンクで統一されており、小物一つ一つにあざとさを感じる。

「鈴美？」

明かりを点けたが鈴美はいなかった。

あるのはピンクを上書きする紅色と鉄臭いにおい。ここはまだマシだが、玄関やリビングは特にひどかった。フローリングどころか壁や天井まで血飛沫の跡があった。

動物を血抜きするときは静脈で行うが、動脈を切ると勢いよく血が噴出する。

人間で試したことはないが実物は動物の比ではなさそうだ。

「……………」

壁には紅い文字。

——空がよく見える

ベッドの上には真っ赤な血溜まりの中心に、薬指にぼくのプレゼントした指輪がつけられた手が落ちていた。

切断面は刃物で何度か切ったのだろう、ギザギザとしている。

触れると少し固いがまだ柔らかく動く。死後硬直は約二時間後から現れ始めるので、切り落とされてから時間はさほど経っていない。落ちていたのは左手のみ。

「……………綺麗だ、ほんとに……」

生唾を飲んだ。頬に血の跡がつくのはまずい。しかし耐え切れず頬擦りしてしまつた。

初めて触れた「生」から切り離された女の手は、正しく理想的で美しかった。関節の固さもぼくを焦らしているようでいじらしい。

「でも冷たいのは少し……残念だな」

彼女の熱く焼けるような手に触れたかつた。

これは鈴美の手だつたもの。ぼくの理想的な、沈黙を持つ美しい女の手だ。

手から頬を離した後、白い手に握られていた紙に目を通した。

筆跡は彼女のものではない。ボールペンで書かれた乱雑な文字。

「『警察に言つたら殺す』……………か」

それ以外は何も書かれていなかった。身代金の要求などもなかった。

ただヒントはある、「空がよく見える」だ。

今は夜だから彼女は潮風を浴びながら、満点の星空を眺めているのだろうか。眺めていて欲しいな。

「……………フフ、フフフ、ハハハ」

子供の頃から例えば親戚が死んだ時、葬式に出ると笑いが込み上げる時があった。

動物も同様で、食育を学ぼうという体で小学生の頃クラスで飼っていた鶏が亡くなった時も、みなが黙祷する中一人口元を押さえていた。

普通には暮らしたい。しかし時折どうしようもなく刺激が欲しくなる。

殺人衝動に気づく前のぼくはそんな子供だった。

時に母がガーデニングに使っていた農薬を子猫に使い、時に事故を装わせて飼育係の子供が鶏を殺してしまう様子を裏で眺めていた。

良心や罪悪感といった感情が欠如している。

そのため冷静に社会に紛れ込めるように上手く取り繕ってきた。それでも時折現れる衝動をコントロールできない。

「ハハ、フフフ…」

まあそれは以前のことだ。

今は前よりもマシになっている。欲求も鈴木の手があったから大分楽になった。

何より恋愛感情が一番大きな変化か。普通の人間と違いぼくの恋は少し歪だが、それでも女の子以外で興奮を覚えられたのだから、かなりの進歩だ。

「殺す」

絶対に殺す。この惨状の犯人を殺す。絶対に、確実に、わたしのキラークイーンで殺す。この世に肉片一つ残してやるものか。

たとえそれで、自分が人を殺す鬼に成り果てたとしても構わない。

浮かんだ笑みは消えていた。

あるのはただただ、純粹な殺意のみだ。

28話 あつ

天井に広がる満天の星空。昨日まで降り続いていた雨が嘘のようだ。

「うっ…」

意識が少しずつハッキリしていく。目を覚ました鈴美は辺りを見渡した。

彼女の身体はスーツケースに入れられていたようで、地面に飛び出している下半身は泥で汚れている。スーツケースの横には宅配用のトラックがあった。

微かに香るのは潮風。すぐ近くには崖があり、黒い海がまるで鈴美を覗き見るようにそこに存在する。月が闇の中にポツンと浮かんでいて、その光を受けた波が変幻自在に青白く光っていた。

「…やむく」

四肢の先端から心臓へかけて這い上がるような寒さ。ガチガチと唇は音を立てて震える。

頭の中のモヤは消えてくれず、ドクドクと脈打ったびに左腕が痺れるように痛んだ。半袖のTシャツから覗く腕の先は途中から欠けていて、赤黒く染まっている。

鈴美は手首に巻き付けられたネクタイを視界に入れて固まった。

「これって……」

それは彼女が父の日に父親にプレゼントしたネクタイだった。元のストライプ柄だったそれは鈴美の血で真っ赤に濡れている。

「あ、あ……」

頭が真っ白になる。彼女の脳裏に血生臭い映像がフラッシュバックした。

誕生日ということもあり、その日鈴美は友人知人から祝われ忙しい一日を過ごした。そして夜は両親とケーキを食べていた。

吉良の退院に付き添えなかったのが心残りだったが、当の本人から自分の生活を優先するよう言われていたので、彼の意思を尊重した。

そんな家族団らん中の時間にチャイムが鳴った。

ケーキを頬張っていた鈴美は、「吉影くんかな？」と立ち上がった。だが母親に口元を指摘され、シンクに映る歪んだ自分の顔を見てみると、なんとまあ口元にクリームが付いているではないか。

ははは、と笑いが怒って、顔を真っ赤にした鈴美は父親の肩を殴り、残ったケーキをパクパク食べて皿を流しに置いた。母親はその間玄関に向かった。

そこで彼女はふと愛犬が自分の寢床から玄関を凝視していることに気づいた。

そう言えば、と思いつく。吉良だったらアーノルドは尻尾をちぎれんばかりに振って、いつも突撃しに行く。

『アーノルド……?』

一瞬寒気を感じた鈴美は父を見た。父親はケーキを食べながらテレビを見ていて、ガハハと品のない笑い声を漏らしている。

その時、玄関から何か物音が聞こえた。

父親は「母さん？」と反応したが、すぐに意識が番組に戻ってしまった。

『ねえ、お父さ——』

父に視線を向けた鈴美は床の軋む音を聞き固まる。アーノルドもうなり声を上げていた。生活を共にしていれば、必然と親兄弟の歩き方は分かるものだ。

その足音を、彼女は知らない。

杉本家は廊下とリビングに扉がないタイプで——だから、そこを通れば、その姿が露わになる。

きつと吉良くんだと、鈴美は思った。縋るように祈った。目に見えない恐怖が沈澱していく。

そして現れたのは、知らない男だった。

配達作業員の服に、目深のキャップ。それと黒い手袋。

顔は窺い知ることはできなかった。全身は真っ赤で、その手にはナイフがある。

『あつ……あ』

恐怖で声が出ない。父親はようやくそこで空気の変化を感じ、娘へ視線を向けた。性格には向けようとした。

リビングに入ってきた男はテーブルを挟んだ父親のすぐ目の前に立ち、ナイフを振りかざした。

一瞬の内である。

あつ、と声にならない悲鳴が漏れて、天井に勢いよく噴き出た血がかかった。食べかけのケーキや天井、鈴美にも付着する。

白目を剥いた父親は椅子にもたれかかり、数秒痙攣して、それから動かなくなった。『あつ……ああ、あ』

腰が抜けた鈴美と、今しがた父を手にかけた男の視線が合う。無機質なその三白眼には何の感情も宿されていない。ただ、殺したくなつたから殺した。そう言わんばかりの無表情さ。

『ワンッ!!』

その時間こえたのは鶴の一声ならぬ犬の一声。

我に返った鈴美は側にあつた椅子を投げつけ廊下へ走った。

玄関へ向けた足はしかし、母親の姿を見て止まる。

母親は仰向けの形で倒れていた。口は半開きになり、かち合つた瞳にはすでに生気が

なかつた。辺りは正しく血の海。

『いやああああっ!!』

戻った正気は一瞬で崩され、鈴美は玄関とは反対方向へ走った。無我夢中で階段を駆け上つて、自分の部屋に逃げ込む。

逃げなければ逃げなければ逃げなければ逃げなければ逃げなければ。

だが窓の鍵を開けようとする手は露骨に震え、思い通りに手を動かせない。

『キャンッ!!!』

アーノルドの声が彼女の部屋の前で聞こえた。

後ろにはすでに人の気配があつた。

『……ごめんね、アーノルド』

鈴美は震える自分の身体を抱きしめ、ゆっくりと後ろを振り向いた。

恐怖を理性で抑えつけ、最後に相手に向きやってやろうと覚悟を決めた。

『あなたは誰? どうして……こんな、こと……』

『どうして、ね』

男は鼻で笑い、血まみれのナイフを一回転させる。低音の響く声だった。

鈴美は必死に記憶を探ったが、やはりこの男とは初対面だ。

だんだん距離が縮まり、彼女の背後にある窓から差し込む月明かりを受けて、男の帽子からはみ出たハネ気味の髪が覗く。

淡い色の髪色にどこか既知感があった。

『よく、一人の命は地球より重い、とか言うよなア。だが現実じゃあ人の命なんぞ、人知れず踏み潰されてくアリののように軽い。偽善を並べ連ねて善人ぶってるやつほど可笑しいものはねえ』

『だから……殺すっていうの?』

『人殺しに理由が必要か? だったら一人には用がある。お前はその餌だ』

『……ツ、じゃあ私のパパとママは……!!』

『おっと、あんまり大きい声を出すなよ』

恐ろしいのは男が家に入ってきてまだほんの数分しか経っていないことだ。

男は鈴美の顔面を掴み、口角を上げた。

『絵に描いたような幸せな家庭だよなあ。誕生日に三人でケーキか。さぞ幸せだったんだらうなあ』

『……………ッ』

『俺に壊されて可哀想に。憎いか？悲しいか？まあ、どう思つてようが構わねえ。どうせお前は殺すし奴も殺す』

———
奴。

鈴美はまさかと、息を呑む。彼女を餌にするということとはつまり、彼女を大事に想う人間に男は殺意を抱いている。

もしかしなくとも、その奴とは吉良だ。

この男は何かしら吉良に憎しみに似た感情を抱いているのだ。

彼女の知らぬ裏で彼が何をしでかしてもおかしくはないため、あり得なくはない。しかし鈴美に被害が及ぶほど人間関係を悪化させることはないはずだ。

『平穩つてのは一瞬のうちに崩してもいいが、じわじわと崩していくのもいい。これは俺らしくない復讐なんだよ。だから衝動的に殺さず、少しずつ毒を撒いたのさ』

『……………!!』

平和な日常に突如起こった殺人未遂の事件。

狙われたのは鈴美の彼氏。犯人は彼女のストーカーで、動機は彼氏への嫉妬によるもの。

字面だけ見ればなんてことはないニュースの一つだ。

鈴美が心底ゾツとしたのは、犯人の男と面識が一切なかったことである。

なぜ彼女を好きになったのかわからぬまま、犯人の男は精神異常とみなされ精神病院送りになった。そのため裁判も先送りにされるとのこと。

間違いなくストーカーの件はこの男が仕組んだものだ。

彼女の直感が告げる。

吉影くんに、何の恨みが——、

男は彼女の思考を遮るようにナイフを振るい、左手を切り落とした。

彼女の悲鳴は口元を覆う無骨な手によって阻まれる。その間も男はずっと真顔だった。

そして鈴美の手がフローリングに落ちると、華奢な鳩尾に蹴りが入った。

『かつ、は……』

彼女の意識はそこで強制的に落とされた。

???????

「吉影、くん……」

意識が落ちるまでの記憶を思い出した鈴美は涙を流した。

父親を、母親を、アーノルドを殺された悲しみや憎しみより今脳裏によぎるのは、吉良のこと。

助けに来てほしい。しかし、来てほしくない。

吉良がもし来た先で待ち受けるのは殺されるか、相手を殺すかの二択の未来だ。犯人が手を切ったというトリガーもある。

自分のせいで吉良が人を殺めてしまうのは鈴美の望むところではない。

だがこのまま会えずに死ぬのも嫌だった。

「吉影くん、吉影くん……」

うわ言のように呟く彼女の様子を、片桐は運転席に座りながらサイドミラー越しに見た。暑さに耐えかね開けられた窓からか細い声が入る。

片桐にとってその声は、さながら終曲を知らせる音色であった。

かつて……と言っても四年前のことだが、ここで一人の女が入水自殺した。

自殺の動機は誘拐が失敗したことによるもの。世間では大きなニュースにされることはなかった。

というのも、その事件が起こるさらに昔は誘拐事件に関して報道規制がなく、各紙で警察の捜査状況など逐一報道された。それを受け追い詰められた犯人は誘拐した子供を殺した——という悲惨な前例があり、特に誘拐事件に関しては捜査側と報道側の取り決めで情報が伏せられるようになったのである。

片桐が姉の死を知ったのは刑務所を出てからのことで、今から半年ほど前のことになる。

それから姉が誘拐を起こし自殺をしたことに疑問を抱き調べ、被害者となった当時7歳の少年にまでたどり着いた。

人を操ることに姉ほど……とまでは言わないが、それなりに心得があったため、用意した手駒を利用しつつ復讐の計画を進めて行った。

片桐も計画は最終段階だが、懸念もある。

調べる中で吉良吉影という男が、自身と同属であると感じ取った。

今思い返せばこの崖からダイビングした女は恋をすると同時に、「天使」を見つけたのだ。

最悪逆に殺される可能性があるが、真つ当を取り繕ってキレイに生きてきた男と、初っ端からゴミの中で悪事を平然としてきた男とでは経験が違う。

「ツハ、やつぱりヒーローってのは、遅れて登場するもんなのかねエ」

今にも落ちてきそうな星空の下、闇夜に明かりが差す。

崖は入水事件以降、立ち入り禁止の看板と縄がつけられた。

不思議と人が死ぬ場所は自殺者が増える。ここではすでに幾人もの女たちが身を投げた。

人を拒絶する縄はしかし、片桐の手によって取り去られている。

それにより車はスムーズに道を進み止まった。

ボタンと扉が閉まると同時に、月夜に映える金髪が煌めく。

警察に言うなど言っただけだが、実際片桐としてはどちらでもいい。

その姿勢からは警察であろうが、「自分に敵はない」という傲慢さが見え隠れしている。

「鈴美はどこだい、片桐安十郎」

吉良はそう言い笑った。

【少年K】

『嘘つきは泥棒の始まり』なんて言葉がある。

平気で嘘をつくようになると、盗みも平気で行うようになる。転じて嘘をつくことは悪の道へ入る第一歩、という意味で用いられる。

確かにもっともな言葉ではある。

しかしこの言葉はまるで嘘つきは悪人である、または悪人になると言っているようなものではなからうか。

少年の腹違いの姉もまた、病的な嘘つきであつた。

「今日のご飯はカレーよ」と言いながら、焼きそばを作っているようにみせかけ、焼きサバを作っているような人間だつた。

少年の中の女のあだ名は「与太郎」。

東京落語で間抜けな者の名として登場する人名である。おろか者の代名詞だ。

よく散らかし、よく嘘をつく。

欠点が多いが不思議と男を惑わす「匂い」のようなものはあった。

それと、料理も美味かった。

普通なら両親の愛情を受け健やかに育つであろう時期に、少年は常に暴力とゴミの中にいた。

父親である男とよく変わる女に低俗さを感じてはいたが、逃げられない。皮肉にも少年の思考や言動から、その知能の高さを見出したのは姉である。

『色々知って知見を深めるべきだよ。アンジェロくんは頭がいいもの』

女は図書館で仕入れてきた哲学の本や専門書など、様々な物を少年に見せた。中には絶対に少年が読まないであろう少女漫画もあった。

向こうは少年に「くん」をつけて名前と呼ぶこともあれば、イタリア語やポルトガル語で「天使」を意味する *Angelo* というあだ名で呼ぶこともあった。

幼少期から父親に似て目つきの悪かった少年に「天使」とは、皮肉もいいところだ。

だが女にとって少年は間違いなく天使だった。腹違いの母を持つことから察せるように、彼女もまた複雑な家庭環境で育っている。

容姿は髪の色をのぞき似ても似つかないが、似た闇を抱える者同士、お互いの居場所を見出しあう。

さもなければ息苦しい世の中で生きていくこともままならない。

それはたとえ少年が賢くとも子供である限り、逃れられない現実だった。

『この世界は生きづらいいけど、私には天使がいる。そう考えればまだ幸せかな』

父親の暴力から精神的に逃げる子供と、寂しさを埋めようとする少女。

少年は人間として備わっているべき倫理の一部が欠けていて。

少女は道化師のように自分の皮を繕い生きていた。

その傷を舐め合う関係は数年続き、少年の父親が死んだ後に終わりを迎える。

事故死と片付けられたが、少年は真相を導き出していた。それも男が死ぬ前からきつと起こるだろうとわかっていた。

ならなぜ事故に見せかけた事件が起こると知っていて止めなかったのか。

理由は単純に、止める理由が無かったからだ。

男が死んだところで少年は何の感情も抱かない。憎みはしていたが、かと言って殺す価値さえ抱いていない。

殺す側を止める理由もなかった。罪悪感がないゆえに、殺した後の人間がどんな気持ちを抱くか理解できなかったのだ。

果たして少年は姉と別れ、何も変わらなかった。

幼少期の環境で歪んだ内側が是正されることなく成長していった。

『天使は神の遣いよ』

人の魂を導く存在。その真の意図には女の望む死への希求があった。

人を殺しても何も思わない人間が彼で、だから女は少年に「私の天使になって」と求めた。

しかし少年は首を縦に振らなかった。バカバカしい、と一蹴するだけだった。

そして星の流れに従い、さらに時は流れる。

勾留中の男に届いた電話は焦がれを越して焦げたような声だった。いつ火災を起こしてもおかしくはないガサツさなので、物理的に燃えていても驚くまい。

『私、恋しちゃった』

それが最期の会話になるとはまさか思いもしないだろう。
だが男はその時うつすらと、女から死の匂いを感じていたのである。

29話

静まり返った夜の世界に、波の音が緩やかに音を立てている。

車から降りた吉良は崖の側に止められた配達トラックを一瞥し、片桐へ視線を移した。彼からでは見えにくいトラックの後ろに鈴美が倒れている。

「ツハ、俺の名前を知ってるのか。あの女にでも聞かされたか？」

「わたしは「鈴美はどこか」と聞いたんだ。質問を質問で返すな……学校で習わなかったのか、片桐」

「生憎俺には縁のない話だなア」

「…ああ、そうだったね。学校どころか親にも恵まれなかった貴様に礼儀作法を説くとは、わたしも中々冷静な判断ができなくなっているみたいだ」

笑みを浮かべる吉良はしかし、目だけ獰猛な獣のようにギラついている。

瘦せぎすの頬を伝う汗は殺意の狭間で男の焦りを表した。出血量から考えても、悠長にしている時間はない。

「まあそう焦るなよ、吉良吉影。俺もお優しい人間なんでね、お前の大事な彼女に止血ぐらいしてやってるさ」

「平然と鈴美の両親を殺しておいて、何が優しいんだい？」

「そういうオメーはどうなんだ。その死体を見ながらここまで来たにしちゃあ随分と落ち着いてるじゃねえか」

「もちろん怖いさ。わたしもあんな風に殺されたらと思うと恐怖で身が竦むよ。ただそれ以上に彼女が大切だから、勇気を出してここまで来たんだ」

「お前も大概嘘つきだなあ、あの女みてえに」

「…さつきから言っている「女」とはやはり、佐藤安希恵のことか」

「さてな。嘘つきの戯言なんぞ、信じる方がバカつてもんだぜ？」

懐から折りたたみ式のナイフを取り出した片桐は刃先を吉良に向ける。

拭われていないナイフの先には血がこびりついていていた。小型のナイフで致命傷を与えたとするならば、扱う側の人間は相当な腕を持っていることになる。

相手の間合いに入っては確実に急所を狙われ殺される。

しかし爆殺しようにも、【射程距離—D】の性能から察せるようにキラークイーンは近距離パワー型である上、能力の発動にはキラークイーンが爆破させる物に触れる必要がある。

片桐に近づくことが憚られる今取れる策は相手を爆弾がある位置へ誘導するか、または石でも爆弾に変え投げつけて爆破させる方法だ。

吉良は眉間にシワを寄せた。

下手な行動は避けたいところである。相手の近くに鈴美がいることは確実であり、動いて片桐を殺したところで先に彼女を殺されかねない。

ひとまず人質にはされているのだ。すでに殺しているとは考えにくい。

「望みはなんだ。金で済めばいいんだが、違うんだらう？」

「話が早くていい。俺の目的は粗方わかってんだろ」

——
復讐。

返された言葉に、片桐は口角を上げた。

果たしてその表情がどういった感情から来るのか、吉良にはわからない。

そもそも二人の過去は佐藤から聞いた情報しか持ち合わせておらず、その内容すら信じるに足りるのか判断がつかない。

だが片桐の行動からするに、二人に接点があったのは間違いないだろう。

「佐藤保健医は加害者側の人間だ。わたしたちを狙う理由などないだろう」

「あの女は根っからの嘘つきだったがよオ、日曜に毎回礼拝に行くぐらいには信心深い

女だったんだ。救いのない神に救いを求める、これほど愚かなことはねえよなあ？」
それに、と片桐は続ける。

「適当な性格をしていたがな。自分で死ぬ女だけじゃなかった」

父親を殺し罪悪感に生きることさえままならず、それでも自殺の方法だけは選ばなかった。

佐藤は生きることさえ自分の「罪」としていた。

当時少年だった片桐は佐藤の心中がわかることも、殺して救ってやろうと思うこともなかった。

殺せないぐらいには腹違いの姉に依存し、依存されていた。

「自殺じゃないならいったい何だっというんだい？まさかわたしが殺したとでも？証拠もないのに被害者が加害者呼ばわりされるのは遺憾だな」

「ツハ、あの女はどうやら少年趣味らしくてなあ……」

腰を下ろした片桐はナイフを右手に持ち直すと、トラックの陰になっている部分に振り下ろした。

直後、悲鳴が響く。

「あ、あつ！……うう」

「鈴美ツ!!」

吉良の紫目が猫のように細まった。

「俺は自分が血も涙もない人間だとわかってるがよ、人の温もりを一切知らないわけじゃないんだぜ？ テメーも俺と同じ異常者だろうが、この女は例外みたいだなア」

「……………」

「あの女はテメーを好きになつて死んだ。そんで俺は奪われた側になつたわけだ。こちらとやらられたらやり返す主義でね、俺から奪つたテメーが奪われる側になつても、何も文句は言えねえよな？」

「……………要は、逆恨みか」

「アア?」

強く握り締められた吉良の手から血が流れる。爪はギチギチと音を立てて伸び、手のひらに食い込んでいく。

「貴様の姉は弟のお前ではなくわたしを選んだ。それに嫉妬してるんだろ、バカバカしい」

嘲るように笑つた吉良に、片桐のこめかみに青筋が浮かぶ。

片桐は一步、ぬかるんだ土を踏みしめた。

「言いてえことはそれだけか？」

「その薄っぺらいナイフでこちらを狙う気かい？……殺れるものなら殺ってみろよ」

片桐が歩く分だけ二人の距離が縮まっていた。

吉良の背後にキラークイーンが浮かび眼光を鋭くさせた。中間まで来たところで片桐が怒声を上げ走り出す。

「テメエをぶつ殺して、魚の餌にしてやる!!!」

——とでも、俺が言うと思ったのか？」

その瞬間ズキリと、吉良の右腕に痛みが走った。

「……………!？」

見れば何か無数の目を持つ液体のようなものが地面の水溜りから伸びて、彼の腕に嘯み付いていた。

その液体は傷口から体内に侵入していく。

「何だコイツ!!クソツ、身体が……………!？」

体が動かなくなった吉良を片桐は愉快そうに見る。

その三白眼の目は普通の人間なら見えないはずのピンクの猫を、しかと捉えていた。

「まさかテメーもコレが使えるとはな」

「……！キラークイーンと同じ存在というわけか……だが、いったいどこで……」

「あんな立派な自宅ならよお、さぞ盗人が来るんだろうなあ？」

「……………ハハ、ああ、なるほど……わたしが入院している間に家に入ろうとしたのが、貴様というわけか」

「(一)名答」

吉廣が留守番中に感じた気配が片桐だったのだ。

片桐は吉良の周囲を調べる中で、もっとも難しかったのが吉良邸への侵入だった。

向こうが佐藤伝いに自分を知っている可能性があることを踏まえ、なるべく行動を慎重にしていた。少しでもボロを出せば、真っ先に自分が疑われることを分かっていたのだ。

そのため吉良の意識が逸れるようダミーとなるストーリーカーを用意した。

両親はいなかったはずだが、侵入は予想外の気配で失敗した。

片桐は急きよ身を潜めた軒下で、地面から飛び出していた古い矢に傷つき特殊な能力を得たのだ。

「お宅も随分日く付きのものを持つてたよなあ。俺の能力を試すついでにいろんな人間で試してみたが、当たるとすぐに死んじまった」

「…………ぐ、ううっ…」

「諦める。俺のアクア・ネックレスが一度体内に入ったらどうすることもできない。お前はテメエの手で愛する女を殺すのさ」

投げ捨てられたナイフを吉良が拾い上げる。体のコントロールは今吉良ではなく、アクア・ネックレスを操る片桐にある。

「わたしは、彼女を殺さないッ!!」

「ツハ、言ってる。俺と同類だからこそわかるぜ。テメエはよお、血に飢えてんだ。肉食獣のようにな。それも即物的な俺よりタチが悪い。何せ「異常」でありながら、「普通」に暮らしてるんだからよお」

「…………っ」

一步一步と、吉良の足が鈴美の元へ進んでいく。

その様子を見ていた片桐は、イイ気味だと思つた。

杉本鈴美を殺せば吉良吉影は深く絶望し、そしてこれまで耐えてきたトリガーが外されるだろう。

血の味を覚えれば、片桐以上に最悪な犯罪者になることは想像に難くない。人を殺す

の一種の才能なのだ。

吉良吉影という男は人殺しの性の反面、「目立たず平穩サガに生きたい」という願いがある。

相容れない両者が存在するからこそ、日本史上類を見ない連続殺人鬼シリアルキラーになり得る。

吉良の人生をぶち壊す。それこそが片桐安十郎の目的である。

「……よ、し……かげく……」

「……鈴木」

吉良の表情は今にも泣きそうで、鈴木は安心させるように小さく微笑んだ。

「鈴木、ぼくは……」

ナイフの先が細い喉元に食い込む。微かに切れた傷口から一滴、血が流れた。

「鈴木、ごめん、ごめん……」

「……なかないで、吉影くん」

涙が伝う頬に白いたおやかな手が触れる。

「だいすきだよ」

鈴美は微笑んだ。その表情を見た吉良の顔から次第に感情の色が消えていく。真顔になった男に視線を向けていた片桐が眉を寄せたと同時に、「キュルキュル」と、まるでオモチャの車が鳴らすような音が鳴った。その音の出所は片桐の背後。

「ごめんね鈴美、わたしは人を殺すよ」

次の瞬間派手な爆発音が鳴り、片桐の絶叫が響いた。

煙が少しずつ晴れていく。片桐は右足を押しさえ倒れ込み、辺りには肉片や血が散乱している。その右足は膝から下が欠けていて、傷口には骨や肉、皮の断片が見える。

「何……何なんだよオオオ!!!」

叫んだ片桐のすぐ側に、爆発を起こした犯人がいた。煙が完全に晴れた中。そこにいる、子供のオモチャにしては悪趣味なドクロの顔が付いた青い小型の戦車。

それは時折不気味な声で喋る。

『コツチヲ見ロオ〜』

吉良は自由の戻った身体で片桐に近づいた。

導火線に火はすでについている。

「クソツ、何で……現に今テメエの後ろに獣人型の奴がいるってのに……」

「その戦車はわたしのキラークイーンの左手の爆弾さ。『シアーハートアタック』と呼んでるんだが、遠隔自動操縦型の爆弾でね。熱に反応して爆発するんだ。鈴美は出血の多さで体温が低くなっているし、わたしは元々重度の低体温だ。その上で発射位置にさえ気をつければ、目標のターゲットは貴様になる……というわけだ。身体の自由はきかなかったが、キラークイーンまではそのアクア・ネックレスとやらで操れないようだね」

「爆……弾……!?!」

とんでもねえ悪質な能力じゃねえか、と脂汗をかきつつ片桐は思った。

元は吉良が自宅に現れた「黒くて速い奴」に絶望した際に現れた。今までは母という「黒い奴」に最強なハンターがいたのだが、他界していたので自分で討伐せざるを得なくなったのだ（吉廣は戦力外である）。

キラークイーンもまさかGのせい黒い奴で、自分の能力を使うことになるとは思ってもみなかっただろう。

「つまり、俺と女を離させるための方法だったってわけか……してやられたぜ」

「それだけじゃあない」

「ア?」

「まずタイミングが良すぎるんだよ」

吉良が初め違和感を感じたのは病院からタクシーに乗る前。妙な視線を感じたが、該当しそうな人間はいなかった。

次に父親から聞いた泥棒の件。

ただの金品目的の輩とも思ったが、自分が入院しているタイミングというのが妙に引つかかった。

鈴美のストーカーもあり得たが、その人物は捕まっていた。そこで泥棒が片桐であり家に侵入しようとしたならば、ストーカーがダミーであるかもしれないと考えついた。

そして調べた庭先で、洗濯物を干す時にカゴ置きに使っている脚立が微妙に移動していることに気づいた。その場所は軒下の真横にある。

胸騒ぎを覚えキラークイーンで探れば、何か掘ったような跡があり、その場所から中からぶち破られたような缶箱が出てきた。

思い返せば吉良が能力に目覚めた時も矢は一人でに動いた。

考えを巡らせた結果、矢を盗んだ人物も勝手に矢が動き、能力を手に入れた可能性が高いと思いついたのだ。

「わたしのキラークイーンは近距離タイプだが、長距離で活動することができない個体もいるかもしれないと思ったんだ。わたしを見張らせていたがゆえに、ここまでタイミングよく事を起こせたのだろうとね。まあその考えが確信に変わったのは、杉本家の玄関を開けた直後だが」

血まみれの玄関に死体。

靴下じゃ足が汚れるな、とその時思った吉良はやはり、おかしいのだろう。

「……だがあの女の出血量じゃ、適切な処置をして病院に向かわない限り最悪死ぬぜ」

「ハハ、危ないところにまさか一人で行くと思うかい？」

やはり片桐が関わっている可能性があると思いついた時点で、吉良は父に同行を頼んだ。

さつきまで「絶対来るな」と言っていたにもかかわらず、「来てくれ」とお願いしたことの恥ずかしさよ。

杉本家に行き息子と別れた時点で、吉廣が警察に通報している。崖の場所についても伝え済みだ。

「鈴美を助けにきたわたしに人質を奪われ、追い詰められたお前は姉の後を追う自殺。だが死体は上がないんだ。どうしてかわかるかい？」

—— 貴様の血も肉も骨も一つ残らず、爆破して殺すからだよ」

それを聞いた片桐はほくそ笑んだ。

「生憎死ぬのはテメエだぜ、吉良吉影」

「は？」

吉良の治ったばかりの腹の傷口から、中からぶち破るように氷柱の形状をしたものが出てきた。

「あ、がっ………ゴフッ！」

大量の血が腹と口からこぼれ落ちる。

その腹から現れたのはアクア・ネックレス。

片桐が負傷し吉良が解けたと思っていた能力は消えておらず、ずっと彼の体内にいたのだ。

「絶対に俺はテメエを殺すぜ。絶対に、絶対にだ。この屈辱も全部足してぶつ殺してやる！ 少しずつアクア・ネックレスで体内をぶち破って、じわじわ殺してやるぜ……」

「……ッ、……」

シアーハートアタックが左手に戻され、キラークイーンの姿が消えた。

「次は右足だ、その次は左足。そして最後に心臓を食い潰してやる」

ブチブチと肉を貫くひどい音がする。吉良は悲鳴を嘯み殺し、現状を打破する方法を探る。「追い詰められた時」にこそ冷静に物事に対処し、「チャンス」をものにしなればならない。

だが血を失い、這い上がってくる寒さに思考すらままなくなっていく。自分の呼吸音が他人のように感じられてきた。

「ハア………づつ、ぐ」

残すは右腕だけ。視界が霞む中で吉良は愉快そうに笑う片桐を見た時、とうとう何か切れた。

理性の糸がはらはらと散る。腹の奥底で黒い濁流が渦を巻く。

「殺す、殺す殺す殺す」

鈴美がいる中で抑えていたタガが外れ、殺人欲求が暴走する。爪は地面を抉るようにして伸び、上半身だけ現れたキラークイーンが片桐に触れようとした。

だが爆破する前に、片桐の口から血が溢れる。

「…………ア？」

倒れた男の後ろに鈴美がいる。身体はひどく震えていて、彼女はナイフを落としそのまま地面に崩れ落ちた。

「鈴美!!」

吉良は痛みを堪えて立ちあがった。

片桐は背後から心臓を一突きされる形で刺されており、倒れた四肢がビクビクと動いている。

吉良が鈴美を抱きすくめた時、その身体はひどく冷たかった。

「だめだよ……」

「何がダメなんだ!!何で君が……わたしが殺そうと……」

「ころしちゃだめ。おねがい……人を、ころさないで」

「……………!」

呆然と口を開き固まった男を、鈴美は弱々しく抱きしめた。

熱を分け合うほどの体温も彼らにはない。それでも不思議と吉良の頭は熱で溶かされていく。

「鈴美、ごめん……」

「……………」

「ぼくのせいで、君も、君の手も汚してしまった……ごめん……」

「……いいの、いいのよしかげくん……これで」

「鈴美……」

結局吉良は鈴美の想いを無視して人を殺そうとしてしまった。

薄暗くも微かな幸せを、彼の手で壊しかけてしまった。

鈴美の左腕が治るかはわからない、それでも彼女が生きてさえいてくれるならよかった。

「愛してるよ」

閉じかけていた鈴美の瞳が少し開き、幸せそうに笑む。

痛む傷に吉良もだんだんと意識が遠のいていった。

「私も、あいっつ」

薄い唇が紅を塗ったように赤く染まった。

ゆつくりと倒れていく鈴美の左胸に無数の目玉がある液体が突き刺さっていて、それは蒸発するように消えた。

「れいみ……」

地面に倒れるより前にかき抱かれた華奢な体。その瞳にあるのは濁った色で。

吉良は鈴美の首元に額を押しつける。息が吸えない。

ゆつくりと、瞳孔の開いた目が動いた。

片桐は笑みを浮かべ、吉良に視線を向けたまま——死んでいた。

ザザアと、静寂の世界に波の音が鳴った。

30話 進む針

八月も過ぎ、子供たちが校庭で体操着を汚す季節がやってきた。

この時代は女子の体操着といえはブルマだ。世間では性的な問題になるからと、ブルマは廃止すべきか、という問題が関心の的となっている。

バブルということもあるが、何とも平和ボケした話題だ。

その裏で人々の戦慄した事件が、謎多き『S一家殺人事件』である。被害者の名前は遺族の意向により報道されなかった。

唯一生き残ったのは殺された女子大学生の彼氏。

犯人は警察側の調べによって明らかになってきているが、事件の不可解さから「その彼氏が犯人なのでは？」など、世間はあることないこと噂していた。

??????

重傷を負った吉良が手術を受け目を覚ましたのは事件から一週間後のこと。

精神と肉体面を考え医者から警察へ事情聴取の許可が出されたのは、さらにその一週間後のことである。

「これから話を聞いていくことになるから、よろしく頼むよ」

これもまた偶然か。吉良の事情聴取に当たったのは見覚えのある警官二人。恰幅のいい中年の男と眼鏡をかけた細身の男。

ベッドから上半身を起こす青年の様子を見た二人の印象は、まるで死人だ、というものの。

元々細身な体は度重なる入院の影響でやせ細り、病院服からのぞく腕は骨が浮き出ている。頬が痩け、隈もひどい。

精神的な疲労が見てとれた。それでも事件の早急な解決のために警官らは聞き取りを進めていく。

「警察側は片桐安十郎を犯人とみて捜査を進めている」

「……つきりテレビのように、ぼくが犯人と疑われていると思いましたがよ」

「……こちら側としては、君の線を完全に捨て切ったわけではないよ。何せ調べても謎があまりにも多く残っている」

初期は現場で唯一生き残っていた吉良が容疑者としても考えられた。

しかし配達トラックや杉本家にあった紙の筆跡から片桐が浮かび上がった。

少し前に配達トラックが一台、乗っていた配達員の男含め行方がわからなくなっていた。後日、その人間の首吊り死体が公園で発見され騒ぎになっている。

男の関係者を調べても自殺する動機が見当たらず、事件性があると考えられた。

それから警察がトラックの行方を探し聞き込み調査をはじめた。車が通ったと思われる道を辿っていく中、たまたま交差点近くの自宅につけられた防犯カメラが見つかった。

家主曰く、カメラは杉本家の一家殺人事件が起こった三日前に取り付けたばかりだったらしい。

その映像を調べた結果、片桐が捜査線上に浮かび上がった。

そして紙の筆跡鑑定が行われ、一部が片桐のものとして一致した。

文字は意図的に崩されていたが、完全に自分の筆跡の特徴を消せずに失敗したとみられる。

片桐の傲慢さが油断を招いたのでろう。

同時に悪運が吉良に味方していることの象徴たる出来事だった。

「君のものとも比べたが、こちらはさっぱり当てはまらなかったよ」

「……ぼくの家に入ったんですか」

「捜査だから仕方ないさ。私も調べてみて思ったが、何とか小綺麗な……しかしまるで何もないような部屋だったね」

「……そう、ですか」

吉良邸も調べられたが犯罪に関わっているような痕跡は見当たらず、ピンに収集している爪の方は話題にも出なかった。

父親が手を回したのだろう。吉廣は写真の中に物を入れることもできる。

警察の手が回る前に息子が疑われそうになるものは隠したのだ。

「君が犯人でないのはわかった。しかしだ、君は一度杉本家に行っているね？」

「……それが、なんですか」

「遺体を発見しておきながら、君は警察に連絡しなかった。それだけでも「軽犯罪法」に引つかかる場合があるんだよ」

「そうですか」

「……そうですか、じゃない。脅しの紙があつたにせよ、通報くらいはできたはずだ!!」
「警察を信用しろと? かつて誘拐されたわたしを見つけられなかった警察を? ……笑わせる。それにどこに耳があるかわからないでしょう」

外の景色を眺めていた吉良の顔が警官に向いた。

青年の瞳にある、どこまでも深い闇と交わる至極色。二人は思わず息を飲んだ。背筋にゾゾッと寒気が走る。明確な殺気が警官の彼らに向けられている。

「わたしの代わりに貴方たちが行っていたら、彼女が助かったっていうのか？死なずにすんだのか？」

吉良はまだ不自由さが残る四肢を動かし、右手で中年の警官の襟元をつかむ。

もう一人の警官に後ろからはがいじめにされても眼光は鋭いまま。

「そもそも片桐と佐藤保健医の関係を知っていたのなら、彼女の被害に遭ったわたしたちが片桐の標的になるかもしれないことくらい、想像できたはずだ」

「…佐藤容疑者は君に片桐のことを教えていたのか」

「ああ、腹違いの弟がいるとね。せめて片桐が出所した時点で、わたしに伝えておいてくれればここまで悲惨なことにはならなかった!!…：…：鈴美が死ぬことも、なかった」

「こちらに伝える義務は…」

「そうですね。ない、ですよ。公務員の中でも特に警察はさぞお忙しいでしょうから」
トゲのある言葉に流石に眼鏡の警官も口を開こうとした。

しかし中年の警官がそれを制し、深く頭を下げた。

「…本当に、申し訳なかった」

「謝られても、死者は帰らない」

「……………そうだな」

ふと中年の警官の脳裏によぎったのは、階級は違えど親しくしていた同年代の警官の姿だった。

最近殉職したその男は杜王町を守るためなら、自分の命さえ捧げられる人物だった。もしその男が彼の立場なら、違反してでも被害者に連絡したかもそれない。まあその勢のせいで出世できない男だったのだけだ。

しかし「正義」は誰よりも持っていた。

「あなた方に謝られても、どうしようもない。…早く終わらせてくれ」

「……………わかった」

???????

どこまでも澄み切った空が一望できる屋上には、風を受けて干されたタオルやシーツがうねっている。

目覚めてから十日後、松葉杖を使つてではあるがどうか歩けるようになった。医者曰くあと一、二週間ほどすれば退院も可能だろうと。

ただ弱火になつたとはいえマスコミの目がまだあるので、警察にはもう暫く養生すべきだと言われた。

すでに今年度の卒業は不可能で先日休学届けを出した。同様にカメユウの内定も取り消しとなつた。まあ、こればかりは仕方あるまい。

捜査の状況だが、片桐は行方知れずになつている。警察側はパトカーが現場に来たのを聞きつけ、海に飛び込んだ——という風に考えている。

遺体は見つかっていないので、逃げのびている可能性も考えているらしい。

実際はというと、死体をキラークイーンで崖へ向かわせてから凶器もろとも爆破した。散らばつていた肉片もまとめだ。この世にあの男の肉を残す気はなかった。

ぼくは鈴美を助けに行つたと伝えてある。隙について彼女を助けようとしたが、血まみれの姿を見てぼくは錯乱。片桐に殴りかかろうとして反撃に遭い重傷を負つた。そしてその様子を見ていた彼女が片桐を止めようとしたところで、奴は来た警察に気づき逃げた。——とまあ、そんな感じに話した。

足跡から見ても筋は通る。ただ血痕はぬかるみや水たまりのせいでわからなくなっている。

そもそも精神疾患持ちの証言なので、余計に捜査が難しいのだろう。

「謎多き事件、か……」

犯人である片桐安十郎はいつたいどこへ消えたのか。

また警察に連絡した人間は誰なのか。

第三者から見れば不明な点が多い。一つはぼくで、もう一つは親父が該当するが。

そもそも矢はどこへ行ったのか、片桐を消し終えぶつ倒れた後のことはわからない。仮にトラックにあつて警察に押収されていたら面倒だな。親父を警察署に忍ばせて盗むしかないか。

片桐の証言からするとぼくのように能力が出現する人間が稀有で、それ以外の人間は当たっただけで死ぬというならば、他所にあるのは勘弁願いたい。

また中年の刑事から聞かれたのもう一つある。

ぼくや彼女にあつた貫いたような傷跡についてだ。

この傷のある遺体がここ最近で数多く出ているらしい。

被害者の中には、同業者であるパトロール中だった警官が同じように亡くなっている

と聞く。

『長年刑事をしているが……他の場所と違いこの杜王町には昔から奇妙な事件が多い。曰く付きの場所は全国を探せばいくつも見つかるだろうが、この町もそうなんだ。……君は片桐以外に何も見ていないんだな?』

その言葉を聞いて思いついたのは片桐の能力や、わたしのキラークイーンの存在だろう。

もし警官の言葉が本当なら、この町にはわたし以外にもかつてから不思議な能力を持った人間がいるということになる。……いや、引き寄せられるのかもしれない。

人が死ぬ場所は自殺者が集まる。同じように奇妙なこの町には、奇怪な人間が吸い寄せられるのだろう。

片桐を鈴美の意思を無視して殺していればよかったのか。矢さえなければよかったのか。彼女を好きにならず、付き合っていなければよかったのか。

それともあの時——彼女と公園で初めて出会った時、人生に折り合いをつけてさっさと家に帰っていればよかったのか。

傷跡について「わからない」と語った時は、そんな後悔ばかりが渦巻いていた。しかしどう悔いたところで、時間は戻らない。

世界は平等に、残酷に、進むことを強いる。

「本当に、憎いぐらい青い空だ」

屋上から一望できる雲一つない空。死んだら魂は空に行くというが、彼女の魂もそこにあるのだろうか。

不自由さが残る体で鉄柵を乗り越え手を伸ばせども、その距離はまだ遠く感じる。

「鈴木……」

風が強く吹き病院服をさらう。下着の上にこれだけだと寒さが一層増すな。

松葉杖を離し後ろに転がった音を聞きながら、鉄柵に座り込んだ。

人間はいつも「死」の隣人であることを忘れてはならない。でなければいつの間にかその隣人に殺されてしまう。

今はバブルだなんだと浮き立った奴が多い。好景気が終われば不幸に叩きつけられたソイツらが、自らその隣人にノックしに行くのだろう。

しかし自死は愚かというが、本当にそうだろうか？

生きている方が地獄な人間もいる。代わり映えのない日々嫌気がさし、人生に区切りをつける人間もいる。

「……佐藤先生、あなたはどんな気持ちだったんだ」

わからない。

ただ今ぼくの心が「平穩」とかけ離れていることは確かだ。それも今までにないほどに。

男児を誑かす悪魔リリースもぼくの心を解かそうとした太陽も、もういない。

こんなただ狂ったような殺人欲求を持って、女の手には焦がれ続けて、それでも「普通」に生きたいぼくはいつたいどうやって生きればいいんだ。わからない。

どうしようもない、本当に。

一步、足が前に進んだ。

こんな時でも杜王町の景色は美しかった。

「なにしてんだよオーー!!オメーーッ!!」

不意に左腕を何かに強く引つ張られ、浮遊感を感じた体は鉄柵へとぶち当たった。ちょうど掴まれた部分が傷口であつたことと叩きつけられた衝撃が相まって、呼吸が詰まる。

「ぐっ……」

ぼくの腕を掴んでいたのは透けた小さい腕。青とピンクの二色で構成されており、明らかに人間ではないが人型ではある。所々ハートがあしらわれ肩から数本パイプのようなものが見られる。本能的にキラークイーンと似たものであると感じ取った。

「しんだら、かあちゃんやじいちゃんがなくのに……う、うう……」

心臓が早鐘を打つ中、まだ小学生にもなっていないであろう子供がこちらを見ながら、段々目尻に涙を溜めていく。

黒髪の少し長めの髪は日本人らしいが、吸い込まれそうな蒼い瞳に目が離せなかった。

「うわああああ……ん!!!」

ついには泣き出した小僧の名は、東方仗助。

その苗字にかつての警官の姿を思い出した。

31話 星は眩く天に浮かぶ

東方仗助は東方朋子とアメリカの不動産王、ジョセフ・ジョースターの不倫がきっかけで生まれた子供である。いわゆる妾の子だ。

「わしは生涯妻しか愛さない」と宣っていたジョセフにはスージーQという妻がおり、彼女との間にホリーという一人娘、さらには孫の空条承太郎までいる。

複雑な家庭事情から仗助は母と母方の祖父、良平と三人で暮らしていた。平穏に暮らしていた家族にしかし、突如悲劇が訪れる。

その日朋子は仕事が忙しく、良平が勤務のパトロールがてら保育園へ迎えに来る予定だった。

すでに他の子供は帰ってしまつた。

仗助は時折窓から顔を覗かせて、オモチャを持ったまま教室をうろうろと歩き回つた。保母がそんな仗助を宥める中、園に連絡が入つた。時刻は午後六時を回ろうという頃。

「仗助くんのおじいさんが…!？」

電話を取った保母の顔色が変わる。

内容は良平が道端で胸から血を流し倒れていた所を発見され、病院に搬送されたというものだった。

続けに朋子から急いで迎えに行く、という旨の連絡が来た。

「仗助くん、お母さんが迎えに来るって——」

保母が振り返ると同時に聞こえた「ドサツ」という音。

なんと先ほどまで元気だった仗助が倒れており、剩し高熱を出していたのである。

その場には散らかったおもちゃの他に「矢」が転がっていた。

しかし保母の女はその存在に気づかず、彼女が別の保母を呼びに行った時にはすでに

矢は消えていた。

また、不自然に切れた仗助の制服の袖に気づかれることもなかった。

仗助が目覚めたのは、それから一ヶ月後のこと。

その間高熱でうなされ、仕事合間に毎日息子の看病に付き添っていた朋子は疲労しきっていた。

「仗助……本当によかった…!!」

「うわ、なんだよかあちゃん！」

意識がなかったのが嘘のように、仗助はケロっとしており、看護婦や医者の開いた口が塞がらなかつたほどだ。

ただ念のため、もう少し様子を見ることになった。

「やだッ!!おれじいちゃんとううえんちにくくってやくそくしてんだ!」

「ワガママ言うんじゃないの!……それに、お父さんは……」

「?」

仗助は良平の訃報を聞いた。

遺体には胸から心臓をえぐり背中へ貫通した痕があり、警察に恨みを持つ暴力団関係による他殺ではないかと考えられた。

理由としては使われた凶器が銃と考えられたことが大きい。その点暴力団関係なら、取り扱っている可能性が高い。

「じいちゃん……もういないの?」

「…:そうよ」

「なんで?じいちゃんいつもげんきだったのに……」

仕事終わりの一杯だと、おつまみと一緒に缶ビールを飲んでいた良平。

いない。豪快に笑い仗助を肩車してくれた祖父がいない?

「うそだッ!!」

幼い少年にとって人の死はまだあまりにも重すぎた。

「じいちゃん……じいちゃん……」

「仗助……」

シーツを握りしめ涙を溢す息子を朋子は強く抱きしめた。

???????

「君はやっぱり、あの警官と血の繋がりがあったのか……」

「うん」

屋上のベンチに座り話す青年と幼児。

仗助の手には飛行機のオモチャが握られている。小さい足は地面につかず、バタバタと動いている。

「なあなあ、じいちゃんとあったことあるんだろ？おれのじいちゃんはやさしくてカツ

コよかっただろ？」

「ま、まあ……優しくはあったかな」

祖父に甘やかされたのだろう、仗助はかなりのおじいちゃん子だった。

吉良は中学生だった当時良平に本人の名前を聞いていたので、スムーズに仗助に確認を取ることができた。

息子ではなく孫だとは思いつきもなかったが。

「なんであんたはおつこちそうになつてたの？」

「町の景色がよく見たかったからかな。この杜王町は海があり森があり、美しい町だから」

「そりゃあそーよーだつてじいちゃんがまもろうとしたまちだもん！」

良平は自分がこの町の平和を守るために働いているのだと、よく仗助に言い聞かせていた。

将来はおれも警察官になりたい……。そんな正義に満ちた感情が、まだ幼い少年の中で熱く燃えたぎっている。

その、仗助のまつすぐな表情は吉良にとってはあまりにも眩しすぎた。

「じいちゃんはどうもない。だからおれがこのまちを……この「もりおうちょう」をまもるつてきめたんだ!!」

不思議な少年だ。

空の瞳を持つ反面、まるで星のような輝きを持つ。

少なくとも血の川を溺れかけながら進んでいる男とは正反対だ。

「君は大切な人が亡くなって辛くはないのか？」

東方良平は片桐に殺されたのだろう、と吉良は判断した。

片桐の逮捕に関わったことのある良平は恨みを持たれていてもおかしくない。

幸いにも娘の朋子や孫の仗助は殺されなかった。

実際に片桐の獲物はあくまで吉良であり、良平はついでで殺されたようなものだった。

だから朋子や仗助の存在までは知らなかったし、矢を使った子供がまさか良平の孫だとも知らなかった。

「…すげえつらいし、かなしいよ」

吉良の問いにしばし俯いていた仗助が顔を上げる。

「でもかあちゃんかお空に行くの」って、いってたんだ。じいちゃんもおそらにいつちやった。だつたらいまもうえからじいちゃんはおれのことみてる。……ずっとないたら、カッコわるいだろ」

この町を守るなら強い男で在らなくてはならない。

そんな少年の眩しさを感じていた吉良の口からは、いつの間にかするりと言葉が出ていた。

「…わたしにも、大切な人がいたんだ」

「うん」

「でも君のおじいさんのようにもういない。命とは存外儂いものだ」

殺人欲求を持つ吉良は奪う側である。だが失って初めて奪われる側の気持ちを体験した。

それでもなお殺人鬼としての性が消えることがないのだから、人間として破綻している。

「ぼくは…どうしたらいいんだろう」

迷子の子供のように紫目がゆらゆらと揺らぐ。

仗助は空を見つめるその視線に例えようのない不安を抱いた。まだ子供の仗助が自殺の意味を正確に理解しているわけではない。

何か言葉をかけなければならぬ気がして、仗助は「うーん」と必死に考えた。人が元気になるもの。そこでハツと思いつく。

「じゃあ『たいいん』したら、おれのかあちゃんのメシくいにこいよ！」

「……え？」

思いもよらぬ言葉に吉良は素っ頓狂な声を上げた。

「何でそうなるんだ……？」

何故飯と一緒に食べる流れになったのか全くわからない。

当時四歳のランドセル奪取ダツシユな少女や、着ぐるみブレイカーな少年のように、この頃の子供は思考回路がぶっ飛んでいるのだろうか。

「だってよ、おなかいっぱいになったらしあわせになるだろ？あといーっぱいたべて、いーっぱいねて、いーっぱいあそぶ！」

「……どうかな、わたしは子供じゃないから」

「でもはらへったままじゃげんきになれないよ。かあちゃんのメシうまいしこいよ！」
「……退院したらね」

「うん……あ、かあちゃんくどくのはナシだぞ」

おこるとこえーのよ、と大袈裟に体を震わせる仗助。

東方朋子は年齢こそ吉良に近いが今なおジョセフにゾッコンであり、吉良もまたメンヘラ女の「もうマジ無理……飛び降りよ」ぐらいには鈴美への思いを引きずっている。

しかし子供相手に亡くなった彼女の話を出すのも重すぎる。ゆえに吉良は苦笑するに留めた。

「そういえばわたしが落ちそうになった時腕を掴まれた気がしたんだが、君は何か知らないか？」

「ん？……ああ、おれの「あいぼう」がやったんだ！」

「矢」と東方仗助は関わりがある。そう踏んだ吉良は仗助の分身が見えていたことは隠し話を切り出した。仗助はどうやら分身の存在を相棒兼、友だちとして認識しているようだ。

自分以外の人間に分身が見えないことも自覚していた。

「なんでかあちゃんやかんごしさんにはみえないんだろうなあ……」

「仗助の背後に青とピンクの二色で構成された、一見するとサイボーグのような出立ちを持つ「相棒」が現れる。サイズはキラークイーンと比べると大人と子供の差がある。能力の持ち主である仗助がまだ幼いからだろう。その能力についてはまだ自覚していないときた。」

「かあちゃんがいはいはしんじてくれなかつたけど、おじさんはしんじてくれるの?」

「おじさ……ああ、信じるよ。人の理解外のことはよく起こるものだからね」

「そっか! よかつたな、あいぼう!!」

すると相棒は「ドラー!」と伝説の承太郎のニツコリ笑顔のように笑う。輝くスマイルだ、推せる。

キラークイーンは喋らずじつと吉良を見つめるだけだというのに、何だろうかこの差は。

「ところで君の相棒は生まれた時から一緒にいるのかい?」

「ううん、ちがうよ。あんまおぼえてねーけど、ねつでたおれるまえはいなかつた」

「…そうか」

仗助が能力に目覚めたのは矢で傷付いた影響とみていい。

片桐は能力を試すついでに、吉廣が一度検証しようと考えていたことを行った。それで多くの犠牲者が出たはずだが、吉良としてはその過程で死んだ人間についてはどうで

もしい。

問題は彼や仗助のように能力に目覚めてしまった者たちだ。

人数は不確定だが、この杜王町に能力を持つてしまった奴らがいるはずだ。吉良も植物のように平穏な人生を邪魔してこない限りは関わるつもりはないが、影響が出た時は殺さない程度で五体満足にしてやる気である。

殺しは——「殺人鬼」にはならない。

杉本鈴美が自分の手を汚してまで願った思いであり、吉良の人生の根幹にある「普通」を生きる上で犯してはならない禁忌^{タブー}。

ひとまずは休学中に「矢」を探すべきだ——。

そこでふと吉良は自分の思考がこれからの算段、つまり「生」に向いていることに気付く。

「フフ……ハハハ！」

「うわつ、なんだよきゆうにわらって」

「いやあ……ハハッ、なんだか自分がおかしくてね」

先ほどまでは死のうとしていた。

行き先は鈴美とは違うだろう、とそんなことまで考えて。

いや、天国や地獄があるわけがないと思つた。死ねばそれで終わりだ。

幽霊の父もいるが、あれは例えるならゲームのバグの産物。「息子がもう大丈夫」と思えば、成仏するだろう（まあ吉良が割と本気で念仏を唱えても消えないので、息子が死ぬまでは居座り続けそうだが）。

しかしそれが、それがどうだ。

今は鈴美への想いを引きずりながらそれでも吉良は生きようとしている。人生の平穩を求め、この世に這いつくばって生きている。

吉良の「死」を止めたのは仗助である。子供の強い「生」の気配や、その夢や輝きに影響されたのも大きいだろう。

しかし恐るべきは吉良の「普通」への執着だ。絶望の中で異常に働いていた頭が仗助との回顧が衝撃となり、正常を取り戻させた。

そして正常に戻った頭は、普通の人生を求めて回り出す。

これがおかしいと言わずして何と言うのか。余りにも滑稽で、笑わずにはいられない。

自分のぶつ壊れ具合など幼少期から理解していたが、改めて感じた自身の歪みに吉良は涙さえ溢す。

これだったら佐藤と一緒に死んだ方がまだ、幸せだったかもしれない——。

吉良は自分が疫病神に近い存在であると皮肉げに思う。

異常な彼は意図的に、或いは本人の知らず知らずのうちに相手に厄を与え、不幸に落としていくのだろう。

そんな中で彼は一人、「普通」を繕って生きているのだ。

「ご飯……そうだね、退院したら行ってもいいが、君やお母さんが危ない目に遭うかもしれないよ。それでもいいかい？」

「あぶないめ？ンなもんよー、あつたらおれとあいぼうでやつつけるからだいじょうぶだぜ！」

『ドラーア！』

腕を上に掲げる仗助とその相棒の姿を見た吉良はじつと観察する。

不思議とこの二人は毒されない何かがある、直感が告げていた。

【仗助くんのアイデンティティ】

「ちよつと、嘘でしょ!？」

高熱を出した仗助を車に乗せ、朋子が運転していた最中に車がパンクした。途方に暮れていた彼女の前に偶然通りかかったのは、バイクに乗った学ラン姿のヘルメットを被った男。

青年は朋子から事情を聞くと、仗助に自分のつけていたヘルメットを被せ後ろに乗せた。

「かあ、ちゃん…?」

臆げな意識の中、仗助は広い背中と特徴的な髪型を見た。それが俗に言う「リーゼント」だと知ったのは、目覚めた後のことになる。

男の顔はわからず、また明子が探しても見つかることはなかったが、それでも仗助の中には青年のあの日の後ろ姿が脳裏に焼き付いていた。

「にしてもいったいどうやってリーゼントをヘルメットの中に収めてたのか、今でも謎なんだよなあ」

そして時は流れ、東方仗助、16歳。

朝からテーブルの上にバイクのカタログを広げながら朝食をとる息子に、朋子はため息をついた。

「食べるなら食べる。読むなら読む。チンタラしてつと遅刻するわよ」

「へーい」

「へーいじゃない、「はい」でしょ!!」

「イテツ!!殴ることはねーだろ、殴ることはよお!!」

騒がしい東方家の朝の日常。仏壇に供えられた線香の灰が落ちる。

その後ろに覗く警官服を着た写真の男は豪快に笑っていた。

ぼくは。

色付いた紅葉の葉が風に舞う季節。

道沿いをガタンガタン走るは電車。

通勤時間を過ぎた車内は人が疎らだった。

読書に耽る老人やこれからどこかへ出かけるのか、車窓を眺めながら落ち着かない様子で母の手を握る子供。どれも日常の一ページの出来事だ。

平穩そのものの中で喪服を着た男が一人、ぼんやりと広告を眺めている。
そんな男に視線を向ける者がいた。

「…何だい？」

喪服の男は眉間に皺を寄せつつ答える。

ちようど一つ分空いた右隣にスーツを着た男がいた。ハイライトが仕事を放棄した真つ黒な目である。

「…いえ、喪服を着てたもんで気になって」

「これから少し墓参りに行くからね。そういう川尻くんはまさかまだ就活中かい？」
「一応決まりましたよ」

川尻曰く、どうやら一身上の都合で内定が取り消しになった者がおり、その空きが回ってきたらしい。

妊娠しているしのぶのこともあり、川尻は家族のためにこれから頑張ろうと考えている。

「しのぶから聞いたんですが、休学されてるんですよね？」

「色々あったんだ。色々：ね」

世間の話題にほとんど出なくなった『S一家殺人事件』であるが、吉良の通う大学で「彼が犯人である」——と噂されることはなかった。そもそも彼女がいることすら知らないだろう。

理由としては警察側の捜査で早期に容疑者が片桐の線で決まったことが大きい。もし証拠が見つからず吉良の近辺が調べられれば大学にも手が回る。さすれば『S一家殺人事件』に関わった生徒として、大学内で普通の生活を送ることは難しくなる。

対し鈴美の通う大学では彼女の死が学生の間で大きな衝撃となった。

今は犯人の名前も公表され、指名手配を受けている。この世にいない人間を指名手配するほど愚かなことはない、吉良の心中だ。

「そういえば、川尻くん」

「何ですか？ 好みの特撮の話ですか？」

「違う。こけしみたいにな気味な顔をして急に変化球を投げるな。しかもテッドボール狙いだろ」

「傷付きました、慰謝料を請求します」

「一万紙幣が描かれたメモ帳でいいかい？」

「もらいます、早く買ってきてください」

「……………」

ああこれは絶対終わらない流れだ、と諦念の目を浮かべた吉良。普通の人間だったらテッドボールの流れでツツコミを入れるというのに、天然なのかボケなのか知らないが川尻は延々にボールを返してくる。

若干楽しそうな気もしなくはないがアレか、友人がいらないがゆえに学生同士のふざけたノリに憧れている。パターンか？ 不気味だぞ、川尻浩作。

「それで何ですか、吉良さん」

「…いや、君と前に話していたことについて、少し聞きたくてね」

川尻という男は感情の読みにくい表情や天然の気はあるが、平凡な男である。

普通でありたい異常な吉良にとって、羨ましきさえ感じるのだ。そんな男は普通ではないことに憧れている。

「君、少年ものが好きだろうか？」

「好きですね、仮面ライダーとか。しのぶには引かれてますけど」

「そこなんだ」

「しのぶに引かれてるってどこですか？まさか人の妻を奪う気ですか？」

「…違う。寝取る気もない、絶対。「好き」のところがだ」

「………すみません、オレにはしのぶがいるので…」

「殴るぞ貴様」

ふざけるのも大概にして欲しい。向こうに悪気がなさげなのがさらに憎たらしい。

吉良の胃が次第に痛んでくる。彼は出現させたキラークイーンをストレス軽減のために自分と川尻の間に座らせた。

川尻は一瞬首を傾げ、キラークイーンがいる場所を見る。

「君は『正義』に憧れている」

まるで川尻の内心を見透かしたような、断定した物言いだ。

「子供だったら、誰しも一度は抱く感情じゃないんですか？」

「子供だったらね。しかし君は成人を迎えた大人だ」

「…別に、いいじゃないですか。それに吉良さんには関係ない話でしょう」

川尻は幼少期、特撮を見ながら手作りのベルトで正義ごっこをするような子供だった。

その頃からすでに目は死んでいたが。

「しかし、君もまあ飽きないね。成長すればこの世の汚さが見えてくる。それでも純心な気持ち無くさないのだから、素晴らしいよ」

「…それでもいいですよ」

「そうかい？わたしは正義のヒーローなど憧れたことがないから、君の気持ちはわからないが」

吉良も川尻が少年ものが好きというのは以前電車で話した時に感じており、時折のぶから彼氏の趣味について愚痴を言われることもあった。

またしのぶは「私を差し置いて人助けすることもあるのよ？」とも語っていた。

平凡な男でありながら、人の視線を気にすることなく動くことができる川尻の内情。

「吉良はそんな男の「正義心」に興味を引かれている。自分が持たない感情だからこそ気になるのだろう。」

「普通の人間が度を越した行動を起こすとしたら、何か然るべきトリガーがあるはずだ。」

後天的に獲得する異常性。

吉良が思い浮かべられるその最たる例が佐藤である。片桐もまたIQの高さの割に衝動的な行動が多かったため、ソシオパスの類なのかもしれないが、奴について今の吉良はあまり思考を巡らせたくない。

川尻はしばらく黙っていたが、おもむろに口を開いた。

「オレ、昔気になる子がいたんですよ」

???????

中学時代の淡い恋。

隣の席になった少女は、川尻と同じくクラスであまり目立たない生徒だった。

大学でこそ偶然女たちの目につき黄色い声を上げられていたが、小中時代の川尻はクラスの真ん中の立ち位置だった。

運動が得意なほどモテる風潮で、勉強も運動も平凡だった少年はありふれた存在だった。

かといつて、いじめられていたわけでもない。周囲の空気を読み、ただ空虚な時間を過ごしていた。

隣の席のあの子へ特別な感情を抱いたのは、いつ頃だっただろう。

『……………』

『えっ……ああ、ありがとう』

川尻が落としそのまま忘れ去られていた消しゴムを少女が拾い、机の上に置いた。

それまで喋ることもなく、隣の席の女子に全く意識を向けていなかった川尻はその時初めて、彼女の顔を間近で見た。

黒く長い髪はボサついていて、目元は長い前髪で隠れていた。

真つ黒な光を宿さぬ瞳は自分とそっくりで、どこか陰鬱さを感じさせる。

少年の心はその時、その底知れぬ闇に吸い込まれたのだ。

それから川尻は時折彼女を目で追うようになった。

向こうは彼に………というより他人に興味がないのか、いつも一人で移動していた。

夏でも長袖で、体育も休みがち。ふとした時に袖から覗く細い手首を見て、その下がどうなっているのか気になった。腕や腰も細いのだろうか。胸はあまり期待できなさそうだった。

その感情は思春期の悩ましい感情。性に惑わされ、己の欲望をかき抱く。

自分の手を汚して初めて川尻は、自分が彼女に恋をしているのだと理解した。

そして月日は一日一日と過ぎていく。

席替えがあり、川尻は次に彼女を盗み見ることができる後ろの席になった。授業を受けながら偶に長い髪の隙間から見える頸に視線を奪われる。

川尻はしかし、彼女のあることに目を逸らしていた。

油性ペンで罵詈雑言を書かれた机にも、教科書やノートが破られ散乱していたことも、休み時間にクラスの上位グループの女たちが彼女がトイレに行っている間に大声で

悪口を言っていたことも、全て見なかったことにした。

口を出せばきつと川尻がいじめの対象になる。

彼女を好きであっても、それは勘弁願いたかった。

そうしてまた、席替えが来た。

隣の席に選ばれたのは密かに想いを寄せる少女。

正しく運命とも感じられる位置取りに、川尻は人目を避け話しかけてみようかと考えた。

チャンスが来たのはある日の放課後。

顧問の都合で部活がいつもより早く終わった川尻は、忘れ物をしていたことに気づき教室へと向かった。

ちなみに運動部であったため、教室へ行くには昇降口を通る。

『…あ』

川尻の想い人が靴箱の場所で立っていた。

いや、立っていたというより、立ち尽くしていたと言うべきか。

前よりさらに伸びた前髪のせいで、瞳の隠れた横顔は表情が窺い知れない。彼女の靴

箱には靴がなかった。

さらに彼女はバッグを持っておらず、ブレザーも着ていない。

シャツは血で汚れていないがまるで誰かに切られたような跡があり、いつも隠されている腕が露わになっている。

その幾重にも重ねられた白い線の痕は、手首の少し下から肘にまで続いている。

滑らかな肌であるはずがギザギザと、或いはボコボコとした見た目である。

凹凸の無いところがない傷痕に、川尻は言葉を失った。

『……………』

二人の瞳がかち合う。目を丸くした少女は下を向き、上履きのまま川尻の横を通り去った。

『あのっ！』

とつさに伸ばした川尻の手が彼女の異様な腕に触れた。

『その、大丈夫ですか？先生に、言ったりとか……………』

『……………』

少女は無言のまま川尻の腕を振り払う。傷だらけの左腕を胸に押し当てるように隠し、伏せていた顔を上げた。

相変わらず少年と同じ真つ黒な瞳が前髪の隙間から覗く。

とはいっても彼女の瞳は、その途方もない心の闇から来るのだろう。

『…ははっ』

彼女の右手がゆっくりと上がり、少年を指差す。

「偽善者」と呟いた口は恐ろしいほどに冷え切っていた。

『あんたが私のこと見てたの、知ってるんだから』

『え…』

『あれだけ見られたら、気付くに決まってるでしょ』

彼女も初めて川尻が隣の席になった時は気付かなかったが、前の席になって突き刺さる視線に気付くようになった。

その無機質に感じる視線は気味悪くもあつたが、「もしかしたら」という期待もあつた。

そして隣の席になり、彼女もまた「運命」を感じた。

——この人なら私を、救ってくれるのではないか。

彼女の人生がどういったものであるか語るまでに至らないが、自分の腕を自分で傷物にする程度には、悲惨なものであつた。

一縷の希望もない世界に差した光。

少年の視線が感じ慣れた周囲のものとは違うからこそ、希望を抱いた。

そして帰ろうと思つた矢先、トイレで散々にいじめられた彼女の前に川尻が現れた。

いつか、いつかこの少年が光をもたらししてくれる。それが今に違いない。

だが川尻は彼女を助けてくれなかった。

“せんせいにたすけをもとめる”

そんなことはもう何度もした。学校の体裁を気にした担任は「なんとかする」の一点張りで動いてくれた試しなど一度もない。

彼女の地雷は、見事に踏み抜かれた。

嘲笑といった視線を受け続けてきた彼女はついに川尻の好意を理解できぬまま、狂つたように笑い走つていった。

階段を駆け上がつていく音を聞きながら、川尻は呆然と立ち尽くす。

永遠とも取れるような数分を残して、次に聞こえたのは校庭に響くような声。音の出どころは屋上である。

部活動に励んでいた者も職員室にいた者も中で楽器を鳴らしていた者も、地の底から響くような大声が不思議と耳に入った。

『みんな、みーんなッ!!死んでねッッッ!!
!!!!』

少しの間をおき聞こえたのは「グシャッ」という音。ちょうど川尻のすぐ後ろからだった。

校庭から男女問わず悲鳴が上がる。

ゆつくりと振り向いた川尻の背後には、頭から落ちた影響で首があらぬ方向に曲がり、割れた頭蓋骨から新鮮なピンクの脳味噌を覗かせた彼女の姿があった。

視線は偶然にも川尻の方を向いており、逆さまになった顔の瞳が一瞬だけ瞬いたのち、目を開いたまま動かなくなつた。

その事件を学校側は揉み消そうとしたが消せるはずもなく、〃いじめによる女子生徒の自殺〃という形で非を問われ、世間の冷ややかな視線を浴びせられることとなつた。

川尻はその数ヶ月後、親の転勤で引越した。

少年の心に残された少女の言葉は、ふとした時に頭の中で再生された。

オレが選択を間違えたから、彼女は飛び降りてしまった——。

周囲の視線など気にせず助けてあげていれば、彼女は死ななかつた——。

蝕まれた川尻の心は好きだった特撮からヒントを得て、「正義のヒーローに自分がない」という形で、罪悪感を無理やり上書きしていった。

そうでもしなければ心が耐えられなかった。

脳が早期に防衛反応を起こした結果、川尻は早くに立ち直り、高校生活を送ることができた。

——みんな、みーんなッ!!!死んでねッッッ
!!!!!!

しかし呪いの言葉はどれだけの時が過ぎようと、川尻の頭から消えることはなかったのである。

???????

「あんまり、面白くない話でしょう?」

川尻はいつもの何を考えているかわからない顔で、吉良に自分の過去を話した。

吉良は少し口角をあげながら、「へえ」と呟く。

こうして川尻が話したことさえ、重苦しい過去を何でもないことのように話す、一種の「逃げ」なのだろう。

佐藤の件然り、罪悪感とは人間の心を容易く壊す。

恋心とは違い絶対にわかることのない感情。それに行き着いた吉良は、結果を得られて満足そうである。

「そう言えば吉良さん」

「何だい川尻くん」

「オレってやつぱり、「普通」な人間にしかねないんですかね？」

「随分と面白いことを聞くね」

川尻は普通な男だ。天然の気があり、学生でありながら彼女を孕ませてしまったという「おおい、息子元気すぎだろ」というところもあるが、普通の、なんの取り柄もない男である。しかし――、

「君は結構、わたしに似ているのかもね」

「異常」に片足を突っ込んでいる川尻は、歪み方次第で「普通」を脱することができる。その生き方は吉良からしてみれば、愚かとしか思えない。

「君は今のままで十分だよ。どうぞ未長くしのぶくと幸せになって子供を儲けてリア充爆死しろ」

「すみません、なんか先に幸せになっちゃって」

「……ああ、そうだね」

黙った吉良に川尻が横で首を傾げる中、駅に止まるアナウンスが鳴る。

「あ、吉良さん」

乗り換えのため立ち上がった吉良に慌てて声をかける川尻。

「その…吉良さんも鈴木さんとお幸せになってくださいね」

まさか鈴木が『S一家殺人事件』の被害者になっているとは知らない川尻は柔らかい表情を浮かべた。

吉良は少し微笑み——しかしゾツとするほど冷たい色を紫目の奥に残して、閉まった扉の先に消えていった。

???????

訪れたのはM県から少し離れたA県。時刻はお昼時である。

免許があるので車を使えばいいのだが、眠気が伴う薬を飲んでいるため移動に時間がかかる場合は専ら電車を使っている。

警察から伺っていた彼女の父方の祖父母を一度訪ねてから、一家の墓がある場所へと向かった。

目的の家に着き、書かれていたのは「杉本」の標識。自分から来ておいてなんだが、追いつ返されると思っていた。

何せ生き残ったのはぼくだけで、犯人は未だ行方不明。剩えぼくが犯人かもしれないと噂されていたほどだ。

だが心配は杞憂に終わった。

流石彼女の縁者と言うべきか、おおらかで優しい人たちであった。

元々鈴美の両親が駆け落ち同然で家を出て以来繋がりがなかったそうだが、彼女が生まれたのを機に関係が回復したそうだ。

時折鈴美が恥ずかしげに語っていた両親の若い頃の武勇伝が懐かしく感じられる。

「ふふ…れいちゃんにも、こんなに格好いい彼氏がいたなんてねえ」

「俺はまだ認めたくわけじゃないぞ…」

祖父は彼女の父と似ているのか、孫の彼氏を認めていないらしい。

「お墓は海沿いの方にあるの。口で説明してもいいけど一緒に行きましょうか？」

「いえ、一人で行かせてください…すみません」

「いいのよ、ゆっくり顔を見せに行つてあげてちょうだい。それと、あとね…」

祖母から渡されたのは小さな箱。それが自分が彼女にあげた物であるとわかり、顔を上げる。

「私たちが持つていても仕方ないでしょうから」

鈴美の遺品…ということになる。それと紙袋に入った日記や写真などいくつつかいだいた。

彼女と付き合っていたとはいえ、彼らにとつてぼくは赤の他人に過ぎない。

向こうの思考がわからず紙袋を持ったまま、段々地面が揺れて身体が浮遊するような感覚を覚えつつ、祖母の言葉に耳を傾ける。後ろに傾いた体を革靴を一步後ろに出して

食い止めた。

心配の色が彼らに浮かぶ。手を前に出し、「心配しなくていい」と告げた。

「…思い出はね、いつも心にあるのよ」

祖母は続ける。

「そしてね、地面と心をしつかりと結びつけてくれるの。…あまり無理をなさらないでね」

「……はい」

ああ、やはり皺はあれど、笑った時の柔らかさが鈴美に似ている。

祖母は話を終えると、小さく泣き出した。息子とその嫁、そして孫を亡くしているのだから当然の反応か。

むしろわたしが来ていたからこそ平然とした態度を崩さなかった。こちらの気持ち慮って、感情を抑えていたのだ。

優しくて、甘い人間たちだ。

どうにもわたしには、彼らの感情を理解することができない。

その後公共機関と徒歩を使って、海に近い霊園に辿り着いた。

かなり広めで少々迷ったが、無事に彼女の名前がある「杉本家之墓」と書かれた墓石

を見つけた。

入院していた都合上葬式などに関わる事が出来なかつたため、正直本当に鈴美が死んだのか信じられないこともあつた。何せ遺体を見ていないのだ。

だがこうして彼女の眠る墓を前にすると、本当に死んだのだと理解させられる。買つておいた花を生けようと思つたが、すでに新しい花があつたため横に置いた。

そして線香を置き、手を合わせて黙祷する。

そういえば我が家の墓も暫く行けていないせいで草が生えてるだろうな。時間のあつた時に手入れをしに行かなければ。

「そろそろ戻るか……」

今はまだ昼だが、帰宅する頃にはかなり遅くなつてゐるだろう。

立ち上がった時、不意にキラークイーンが現れる。時折人の意思に反して出てくるのは、気まぐれな猫の特徴とでもいうのか……。時と場は弁えているようだが。

「キラークイーン、どうした」

『……………』

墓をじつと見つめても彼女はいない。あるのは骨壺に収められた骨だけだ。

「それは鈴美じゃない。ただの骨だよ」

『……………?』

ぼくの言っていることがわからないのか、こちらを見て首を傾げる。

時間のこともあり歩き出せば、引っ張られるようにしてキラークイーンも付いてきた。

美しい手も腐ればそれはただの肉塊で、彼女の遺体が燃やされ残った骨は鈴美ではない。

自分の歪さはわかっている。しかしどうしようもないのだ。

「帰ろう」

ぼくの言葉に相棒は『ニャー』と鳴いた。

帰ってきたのはちょうど帰宅ラッシュな時間帯。

電車でリーマンたちに押され死にかけながら着いた。別に今に始まったことじゃないが、入院のせいでもかなり体力がない。元々スタミナが人より少ないんだ。

その後車で自宅に帰り、留守番をしていた父を無視し夕食、風呂、その他日頃の日課を済ませる。

休学期間中の矢の行方の搜索など、今後の予定を軽く考えながら自室に入る。ちなみに休学は春まで取る気でいる。一応搜索はその期間のみだ。

警察で押収されたならすぐに見つけられるが、最悪人伝に渡って捜索の難易度がハネ上がっている可能性もある。あくまで自分の生活に支障をきたさない程度だ。

しかしそうなる可就活との両立が難しい……というより、休学した理由が理由だ。事件に巻き込まれ、さらに犯人かもしれないと噂された人間を採用するとは思えない。

まあ職のアプローチの仕方は多様にある。追々考えていこう。

「……」

ふと視線を机に向けた時、置きっぱなしにしていた紙袋を思い出した。

写真は彼女の姿がはつきり残っており見る気にはなれず、かといって日記もその人物の感情を強く残しているためやはり見れない。

唯一手に取れたのは指輪だ。血で汚れていたが綺麗になっており、紅い色が彼女の瞳の色を思い出させる。

「……う？」

不意に指輪を持っていた右の甲に何か落ちた。

頬を拭えば濡れた感触があり、自分が泣いているのだとわかった。

まさか、両親が亡くなった時も涙一つ出なかったというのに。

「……本当に、いないんだね、本当に……」

残されたのは形見ばかり。

君がいない日常が始まり、ぼくはいつか埋めてもらった分を欠けさせて、この感情に折り合いをつけてしまうのだろうか。

「普通」を求めて、自身の欲望に狂おしい感情を抱きながらも。

ただ今は、ひとりでこの感情に溺れていたかった。

三章

33話 サタデーヌーンファイバー

広瀬康一はぶどうヶ丘高校に通う一年生である。

友人には東方仗助や虹村億泰がいる。

そんな彼は、虹村兄弟が起こした矢の事件でスタンド使いとなった。ヤンデレ気質の女、山岸由花子との一件で能力はさらに進化している。

「何で僕は変な人に好かれやすいのかなあ……」

見事な快晴日和の休日。

康一は母に頼まれ買い物に来ていた。

メモを見て頼まれた品物をカゴに入れながら、ふと思い出したのは岸边露伴という漫画家について。

彼の能力、「エコーズ」が発現して以来、康一は様々なスタンド使いと遭遇してきた。

仗助の甥である空条承太郎曰く、「スタンド使いとは引かれ合う」ものらしい。

とにかく散々な目にあつてきた康一としては、丁重にお断りしたい性質だった。

しかしそれでも仲間が窮地に陥つた時身を挺して駆けつけるのは、流石主人公の素質を兼ね備えた男である。

「まあ、露伴先生の描く漫画が面白いことは本当だしなあ……。仗助くんがプツンしたせいで、今は休載してるけど」

作者のヘンジン具合はともかく、康一が『ピンクダークの少年』のファンであることに変わりはない。

一読者として先生の休載は悲しいものだ。見舞いには行かないが。

康一は自宅に帰ると、次に愛犬の散歩を始めた。普段の散歩コースを通り線路に臨した道へ出ると、Uターンして家へと戻る。

その時、異変は起こった。康一の腹に緊張が走る。

「……………めんポリス、僕ちよつとお腹痛くなつてきた…」

「アウ?…」

途中にある公園に立ち寄った彼は犬の手綱をフェンスに繋ぐと、駆け足気味で奥にある公衆トイレへ向かう。

飼い主の後ろ姿を見つめていたポリスは欠伸を一つ零すと、のっそりとした動作で地

面に伏せて眠り出した。

「……んん？こんなところに大つきな犬がいるぞ！」

そこに偶然通りかかったのは、やんぐうしげきよ矢安宮重清——通称「重ちー」と呼ばれる少年だった。彼はぶどうヶ丘高校附属の中学に通う2年生である。

「フムフム……見たところ周りに飼い主はいない。……つまりこれは、捨てられたんだぞ！」

誰もいない公園に一匹寂しく(?)いる犬。

顔を伏せて目を閉じている様に、きつと腹が減っているのだらうと、重ちーの中で勘違いが加速していく。

彼は少々ケチな一面を持つが、根は純粋で平穩な少年である。

ポリスの頭がひと撫でされた時、公園の茂みや道路の排水溝から虫のよななものが出てきた。六本足で行動するそれは黄金色で、何より圧倒するのはその数である。

「ママに怒られちゃうから飼つてやれないけど、そのかわりオラの『ハーヴェスト』で逃してやるから安心するぞ！」

二、三匹のハーヴェストがポリスの繋がれたロープに噛みつくくと、容易くちぎった。

ポリスは不思議そうに首を傾げていたが、自由に動けることがわかると草むらの臭いを嗅ぎ出した。

「ししっ！ やっぱりイイことをした後は気分がいいんだと〜」

重機関車とまで謳われたジヨナサンよりもウエイトがある重ちーは、軽やかな足取りで公園を去って行った。

対し呑気にマーキングをしていたポリスは、猛スピードで走ってきた車に驚き走り出した。

虚しくも公園に残されたのは腹痛と戦う主人のみ。

「はあ、死ぬかと思っ……あれ、ポリス!？」

康一がスッキリとした面持ちでトイレから出てきた時には、既に愛犬の姿はなかった。

???????

場所は変わり、杜王駅の東口駅前広場にあるカフェ・ドウ・マゴ。

このチョコレートパフェはカップルたちに人気であるが、学校帰りの学生たちの憩いの場所でもある。

オープンカフェも併設されていて、洒落た雰囲気から若者が多い。しかし仕事の帰りのサラリーマンや奥様方など客層はかなり広く、時間帯によって変わる。

そして今は休日の、夕方にはまだ早い時間帯。

世間話に花を咲かせる女性や静かにコーヒーを飲む老人など、客は少なめである。

「……………」

そこに一人、冷めたココアを口に運びつつ、一番隅の席で読書にふける影の薄い男がいた。

この男は一時間ほど前からここにいる。

肩にかかる黒髪と、サイズの大きめな丸刈眼鏡。前髪は「それで読めてるのか?」と思わず疑いたくなるほど長い。

六月の暑さゆえか、サスペンダーの下の白いワイシャツは肘まで捲られている。本紫のスラックスから覗く革靴は、コツコツと一定のリズムを刻む。男は腕時計を見て、眉間に皺を寄せた。

「待ち人来ず…か。いい度胸をしている」

あと数分は待つてやるが、来ないなら帰つてやろう（ついでにカフェ代も領収書で向こうにつける気である）と意思を固め、残り少ないココアに口をつけた。

時折女店員が視線を寄越してくるが、恐らく内心は「アイツただけココア一杯で

粘ってるのよ……」と思っっているに違いない。

彼としても実際はコーヒー派なのだが、今日はココアの気分だったのだ。

甘ったるい飲料は苦手でも量も飲めない。それでも胃に収めるのは、かつての余韻を思い出したいからだ。彼女が入っていたココアはもう少し、甘かった気がするが。

「……帰るか」

神経質の気がある男としてはよく保った方だ。領収書を受け取り勘定を済ませると、先程男を見ていた女性の熱っぽいスマイルを無視し店を出る。

今日はツイていない日だ。一度歯車が狂うと、不幸スパイラルは立て続けに起こる。

——彼の経験則だ。

「ワンツッ！」

だが導火線はすでに着火していた。見知らぬ大型犬が彼の横腹へと勢いよく突っ込んでくる。動物は基本的に「畜生」としか思っていない男だが、妙に大型犬にモテる。

内心キレつつ彼が睨め付けたところで、不意に犬の首輪に目が行った。

『『ポリス』……貴様の名前か』

「アフウツ」

「随分とマヌケな返事をする犬だな……」

首輪には迷子になった時用だろう、飼い主の自宅と思われる住所が書かれている。ここからそう遠くない場所にあるようだ。

また切れているリードを見るに、何かアクシデントがあり散歩中に脱走してきたと考えられる。

となると飼い主の監督不行き届きか。大型犬なら尚更気をつけなければいけないだろうに。

「この苛立ちの腹いせをしたいところだが……わたしも優しいのでね、普通に送り届けてやろう」

「アオン」

肉の塊にしてもいいのだが、彼も鬼ではない。ただ問題はどうかやってこの犬を連れて行くかだ。

現在地から彼の自宅までは15分ほどあり、飼い主の自宅まではそれより早く着く。

だが駅近くのパーキングに停めている車に畜生を乗せたくはない。かといって歩けば30分ほどは掛かりそうだ。着く前に彼の体力が尽きる。

「犬に聞くことでもないが、「忠犬ハチ公」って知ってるかい？」

「ワフン？」

「ハチ」って名前の犬が渋谷駅まで飼い主を出迎えに行き、主人の死後も10年にわ

たつてそれが続けたという話だ」

「ワフワフツ」

「まあ話の方は前置きだ。そのハチ公をモデルとして作られた忠犬ハチ公像がある。稀代の忠犬も今では待ち合わせ場所として使われるのだから、皮肉なものだ。ついでお前の名前は「ポリス」ときた。ここから交番は近くてね」

要するに、交番に預けてしまおう、ということである。警官なら住所から家電も直ぐにわかる。男が送り届けるよりもよっぽどマシだ。

だがマイペースな犬は首を振り、街路樹の横に座り込む。切れたリードの端を掴んでいる男もまた、犬に視線を合わせた。

犬に喋りかける姿は不気味であるが、人通りは少なく、ただの散歩と思い男と犬に視線を向ける者はいない。

「きつと飼い主も心配していると思うよ。だからほら、立て」

「アウン…」

「まさか名前が「ポリス」だからって、英語で躡けられてるわけじゃあないだろ？」

というかそもそも何故ポリスなんだ？もつとマシな名前はなかったのか。

「仕方ない…」

多少無理やりではあるが、リードを強く引つ張り犬を立たせた男。氣道が狭まったポ

リスは苦しげな声を上げる。

そうしてどうにか裏路地へと来たはいいが、ポリスは地面に伏せてしまった。

「あんた……僕の犬に何してんの？」

「？」

男が振り返った先にいたのは、銀髪とも金髪とも取れる色素の薄い髪を持った少年。

男に向くその眼光は鋭い。

もしかしなくとも、これは何か勘違いされていないだろうか——。

「公園の近くにいた男の子から、大きな犬が駅の方に行っただって聞いたんだ。それに、男に連れて行かれたともね」

「公園の近くにいた男の子」とは、お察しのとおり重ちーのことである。

重ちーは康一の話聞いて、自分がやらかしたことを察した。

謝ればそれで済んだ。しかし小銭を集めていい気分になっていた彼は、その気分を壊されたくないあまり嘘をついてしまった。

そもそも飼い主が犬を放って行かなければオラは勘違いしなかったんだど！——と、内心逆上した。

そしてこつそりハーヴェストで犬を探させたところ、駅前近くにいた男とポリスを発

見した。

重ちーはここで「逆に考えるんだ、罪をなすりつけちゃえばいいさと」と画策したのである。

少し挙動不審な少年に康一は怪しさを覚えたが、それでも愛犬のため駆けつけた。距離が駅まで遠くなかったのは幸いだった。

逆に犬の首輪を強めに引っ張っていたところを見られた男としては、不運そのものだ。

その様子は側から見れば、無理やり犬を連れて行こうとしているようにしか見えぬ。奇しくも重ちーの嘘は、康一の中で「真実」として確立されてしまったのである。

「…何か勘違いしているようですが、ぼくはただ迷子の犬を交番に届けようとしていただけですよ」

「その話を信じろって？現にポリスが嫌がってたじゃないか」

「人の親切を無碍にする気かい？全く、今の小学生ってやつは…」

高一ながら157cm（何故かそれ以上小さく見えるが）しかない背丈の康一は、男には小学生に見えた。

これには流石に少年の気分も良くない。

「男は身長だけが全てじゃない」

少年の背後に一見して蟬に似た、羽と長い尾を持つ小型のスタンドが現れる。これこそ以前の由花子との一件で進化した広瀬康一のスタンド、「エコーズACT2」である。スタンドとは、基本同じスタンド使いにしか見れないという性質を持つ。

「！」
表情にこそ出ないが、前髪と眼鏡に隠された男の瞳が一瞬驚愕に染まった。

ACT2から放たれた「バチイ」という効果音は、空中を飛び男が握っているリードに張り付く。

「……ッ！」

瞬間、まるで効果音のとおり、男の左手に針で刺されたような衝撃が走った。痺れは肘より上にまで至り、手に力が入らなくなる。

対しポリスの方はというと、首輪がゴム製だったので無事だった。それを計算した上で、の康一の攻撃である。

「人を傷つけたわけじゃないし、これくらいにしとくけど……。次悪さしてるのを見つけたら、もつと痛い目を見るからね」

「ぼくは何もしてないん、だが……。痛ッ」

やはり不運な日はとことん不運な目に遭う。

だが自分と同じ能力を持つ存在に出会えたことは、男にとって大きな収穫だ。

随分前に追跡を諦めた「矢」について、少年が何か知っている可能性もある。…が、概ねスタンド使いが引かれ合う性質を心得ている男は、深入りすることをやめた。今更掘り返す気もない上、巻き込まれれば絶対に面倒事になる。彼は「普通」に生きていだけなのだ。そう、普通に。

「ワフツ!!」

「え、ちょ……ポリス?!」

リードを取り返した康一だったが、ポリスは主人の意思を無視して走り出す。向かう先は左手を押さえ蹲っている男の元だ。

そして二度目の「わん! ダフルアタック(推定:35kg)」が、男の背中に直撃した。「う、ぐふっ……!」

——いいハンターってやつは、動物に好かれちゃうんだ。

少年の脳裏にそんな言葉が過った。

「いや、そんなこと考えてる場合じゃないか!」

恐らく男は本当にポリスを警察署へ連れて行くこうとしていたのだろう。ただの悪人

ならば、愛犬がここまで懐くわけがない。

ならば必然的に嘘を言っていたのが誰か、見当がついてくる。犯人は恐らくドラえもん体型だったあの少年だ。

自分の軽率な行動を恥じつつ、康一は全身を使ってポリスを引き剥がす。救い出された男はフラつきながら立ち上がると、肩から落ちたサスペンダーを直した。

「あ、あのっ……本当にすみませんでした!!」

「いや、いいんだよ。怒ってないから……怒ってないから」

「二回も言ったってことはやっぱり怒ってますよね!？」

「これで怒らなかつたらぼくは相当な仏だろうね」

「うっ……ごめんなさい」

再度深く頭を下げた少年に少しは溜飲が下がった男は、「もういいよ」と告げ、先程の攻撃で落ちたバッグを拾い直す。

「一応ぼくにここまで非道をなした君の名前を聞いておきたいんだが、いいかな？」

「非道をなしたって……あ、僕は広瀬康一です。言っておきますけど、これでも高一ですからー!」

「……?」

「そんな「嘘だろ…!」みたいな顔しないでください。本当ですから」

「康一だけに高一つてね」

「……………ヒエ」

「おや、六月なのに随分と寒いようだ」

「…は、ははっ……………」

康一の背中にじつとりとした汗が流れる。

もしかして、この男も由花子や岸辺露伴とご同類の人間なのだろうか。

大寒波も裸足で逃げる親父ギャグをかまし、笑みを浮かべているのが恐ろしい。なぜ高校生にウケると思ったのか、その思考回路も恐ろしい。

吸引力の変わらない、ただ一つの対変人奇人用掃除機コウイチ——とは彼のことだ。

「ぼ、僕っ、これで失礼しますね…!!」

「え? あ、君……………」

たとえスタンド使いでなくても変人に関わったら最後、今度はどんな目に遭うかわからない。

ゆえに康一は愛犬にスタンドでバフをかけながら、脱兎の勢いで逃げて行った。

「……………少しキャラを作り過ぎたか?」

少年との関わりを避けるためあえて引くような行動を取った男は、ため息をこぼす。ちなみに親父ギャグは、父親が彼の子供時代に笑わそうとして言ってきたものである。その時の少年の目は限りなく濁っていた。

「…まあいいか」

一先ず作戦は成功したのだ。

もう帰ろうと裏路地から表通りに出たところでは、今度は別の人物に捕まる。

「あつ、先生どこ行ってたんですか!!」

カフェのテーブルに座っていた女が、彼を見るなり駆けてくる。

明るめの茶髪のボブヘアは内側に緩く巻いており、女性にしては濃ゆめの眉が中央に寄っている。

服装は上が白シャツに紺のジャケットで、下はタイトなデニムにヒールだ。そんな状態であれば、次の展開の想像がつく。

「あつ」

見事に女は地面の小さな段差につまずき、転んだ。男はとっさに手を伸ばす。

見つめ合う両者。それをガン見するのは男に熱視線を送っていた若い女店員。

先に口を開いたのは女の方だ。

「先生、あの——、」

——原稿ください」

男は微笑むと、カバンから取り出した封筒を丸めて思いきり女の頭をしばく。

そして悲鳴を上げ地面に転がった女に、冷ややかな視線を向けた。

「一時間以上遅刻したのはどこの誰でしたっけ？」

「えっ？もお……何言ってるんですか！予定は二時って言ってたじゃないですか。ほら、私の時計見てくださいよ」

「遅れてますよ、この時計。店の時刻を確認して来たらどうですか」

「ええ……先生ったら遅刻したの誤魔化すからって……………三時ですええ!!」

「……………」

「てへっ……………痛ア!!」

再度「スパアン」と、気持ちの良い音が鳴る。

頭を押さえた女——

泉飛鳥いずみあすかは、涙目になりながら男を睨め付けた。

彼女はK O談社に勤める編集者で、入社三年目ながらその腕を買われ、K O談社お抱えの人気作家の担当をつい最近充てがわれたのである。

彼女としても一ファンであったため光栄なのだが、どうも彼女とこの作家の気が合わないようで、相手を一方的にイラつかせることが多い。

間違えてシャツのボタンをかけ間違え来た時は、舌打ちをされたこともある。

「女性に手を出すなんてサイテーですよ！」

「どうぞぼくとの契約を切りたいのであればご自由に」

「……そんなことになったら私のクビが飛びますって……はは……」

この作家のやり口は純文学の美しい言葉遊びを残しつつ、今風に上手くアレンジした文体である。

幅広い層で人気なのは「純愛」ものだが、時折出す谷崎や乱歩を想起させる痴情にまみれ、人間の奥深い「愛」の薄気味悪さをヨイショしてくる作品も、一部の層でカルト的な人気を誇る。10年以上前に出されたデビュー作は、後者の狭い層向けの内容だ。

「これくらい分量だったらすぐに読めるので、待つててくださいね！」

「帰ります」

「さあ先生、どうぞどうぞ。腰掛けておくつろぎください」

「帰ります」

「わあ、一行目から面白いですねー!!」

「タイトルだけで作品の是非がわかるなんて流石優秀ですね帰ります」

「ちよ、ちよつ、本当に帰らないでくださいよ!!」

無情にも男は駐車場の方角へ足を運んでしまう。

「なら打ち合わせの場所をここじゃなくて、先生のお宅にすればよかつたじゃないですか。そうすれば私の遅刻も少しは目を瞑ってもらえたでしょうし……あ、もしかして神経質そうに見えて、意外に部屋が汚くて見せたくないとか?」

「社会人として、遅刻どうこうの話はどうかと思うが……部屋が荒れてそうなのは君の方だと思っけどね」

「失礼な! 妹が綺麗にしてくれてますよ! ん……でも、先生のお宅行ってみたかったなあ」

「まあぼくも人気作家ゆえに色々ありますし、まだ完全に貴女を信用できてませんので」
原稿に目を向けながら、紅茶を口に運んでいた泉の手が止まる。

視線を移した先で見えたのは、二重に秘された男の瞳。

口角を上げ笑んでいる様は柔らかく見えるが、奥の妖しく覗く紫目を目にした瞬間、
心臓を掴まれる。

美しい彼女に男が釘付けなのを梅雨知らず、彼女の体温は底冷えたものから少しずつ上がつていく。

「泉さんはお綺麗ですね」

「…そ、そうですか？」

「ええ、とても」

34話 ガッツだぜ!オラア!!

岸辺露伴は弱冠16歳という若さでデビューした天才漫画家である。代表作はジャンプで連載中の『ピンクダークの少年』であり、週刊連載をアシスタントなしで描き上げるという驚異の執筆速度を誇る。

そんな彼はワガママでエゴイストな人格から、他者に一步引かれがちである。

また、ネタ集めのためならばどんな手段も選ばない一面も持つ。友人である広瀬康一は彼に散々な目に遭わされた。

そしてその康一との一件に介入した仗助によってフルボッコにされ、つい最近まで病院にお世話になっていた。

入院期間中も医者への制止を無視し、体験した出来事を漫画のネタに生かそうとしていたのだから、もはや敬意すら感じる。

二週間ほどして退院した彼は現在、途中で出会った自転車乗りの康一を「ゲットだぜ!」し、カフェ・ドウ・マゴへと向かっていた。

「ハハ…その、退院おめでとうございます」

「君の気持ちはありがたく受け取っておくよ、康くん。見舞いに来てくれてもよかったんだがね」

「いやあ……僕も学校とかで忙しかったので……」

「おっと、今の時期は中間テストに近かったかな。学生の本分を心得ていて感心するよ、流石僕の友人だ」

「ハハ……友人……そういえば、露伴先生はどこに行くんですか？僕は商店街に向かう予定なんですけど……」

「カフェ・ドウ・マゴへ向かうつもりさ。今日は休日で君も空いてるだろう？一緒に向かうんじゃないか」

「あ、いや、だから僕は商店街の方に用事が……」

「安心したまえ。誘っておきながら、奢らないなんてケチくさいマネはしないからね」
「……………」

康一に拒否権はなかった。

まあ予定が押しているわけでもない。少年は仕方なしと、ゆっくり自転車を押しながら漫画家の後に続いた。

???????

かくしてカフェ・ドウ・マゴへに着いた漫画家と少年。

露伴はコーヒーを頼み、康一は新作メニューのバナラ&抹茶ラテを頼んだ。

春の名残を感じさせつつ暑すぎない天気だ。外の席はそれなりに人が多く、二人は空いていた席の奥側に腰掛けている。

店内に置かれた時計が示す時間は一時半。

「先生もこういった場所に来るんですね。ちよつと意外だったな」

「打ち合わせやネタをまとめる時に利用しているよ」

「へえー、僕は学校帰りに仗助くんや億泰くんによく来ますよ」

「…今の僕に東方仗助の話をするな」

「一応根に持つてるんですね」

殴られた経験はいいネタになったが、怪我のせいで一ヶ月ほど休載せざるを得なくなったのは露伴としても痛いらしい。

自業自得だ、と康一は思わずにいられないが。

「それに康くん、ここはちやうど駅の近くだろう?」

「え? ああ、確かに」

「つまり人通りが多いってことだ。人間を観察するにはうってつけの場所だと思わないかい?」

「あー…なるほど。漫画に活かせるってことですか」

「そういうことだ」

「えつと…じゃあ先生は打ち合わせか、ネタ作りか、人間観察が目的でここに来たんですね」

「いや、違う」

「え、違うんですか?」

「ああ、僕が今日ここに、この時間帯に来たのには訳がある。話は少し変わるが康くん、君は「星ノ桜花」という人物を知っているかい?」

「星ノ桜花?…うーん、どこかで聞いたことがあるよーな気もするけど…歌手の名前でですか?」

「オイオイ、まさか君、星ノ桜花のことを知らないのか?」

「ちよ、食い気味に來ないでください」

身を乗り出してくる漫画家に、康一は露骨に嫌な顔をする。

周囲にカップルが多いことも踏まえて、せめて一緒に来るなら可愛い彼女がよかった。まあいいないので、ないものねだりなのだが。

「今「彼女と来れたら…」とでも考えたね」

「えっ、いや、考えてませんよ!？」

「安心しろよ。君に彼女ができた時は二人の時間を邪魔しようなんて考えないからサ(ネタにはさせてもらうが)」

「そうですか…? (勝手にネタにされるんだろうな)」

本人たちの知らず知らずのうちに、心の会話が成立された。

まあそれはさておき、露伴の目的は今日このカフェ・ドウ・マゴに来るであろう「星ノ桜花」という人物に会うことである。

「星ノ桜花は結構有名な作家だぜ。知らないってことは康くん、君あんまり本を読まないだろ」

「漫画はよく読むんですけどね…」

「星ノ桜花は今日、二時からここで編集と打ち合わせがあるんだ。裏も取れてる。人が多いせいで判断しにくいが……ここで君の能力が役に立つ」

「僕のACT2で盗聴まがいのことをしろ……ってことですか？」

「ガッツリ聞けつてわけじゃあないさ。少し会話を聞いて、星ノ桜花に該当しうる人物を割り出してくれればいいんだ」

エコーズACT2は些細な音を聞き分けることができる。

当然その音は本体の康一にもフィードバックされる。

この漫画家としてはまだ穏健な手段かと、康一は思った。

最悪その星ノなんたらを探すために、片っ端からへブンズ・ドアーを使いかねない。

「まあ……見つけるくらいならいいですよ」

「さすがだ康一くん！君ならそう言ってくれと信じていたよ!!」

「ハア………つと、その前に一ついいですか？」

「なんだい？」

「露伴先生はどうやってその星ノ先生がここに来るって情報を得たんですか？」

「うん？実に簡単なことだよ、僕のへブンズ・ドアーを使って——」

「ダウト」

やはり薄々……薄々わかっていたことだが、露伴は自分のスタンドを使い星ノ桜花の情

報を得ていた。

曰く、退院した後取材の都合でK O談社と関わるものがあつたらしい。

「星ノ桜花」という作家はメディアに顔を出したことがなく、本名や性別、出身地さえ不明の謎多き人物である。

だが文章の雰囲気や名前から、女性と考えられることが多い。

K O談社お抱えの人気作家であることは間違いない、様々な媒体で星ノについて尋ねられてもK O談社側は「それについてはお答えできません」と情報を秘匿してきた。

K O談社に訪れた露伴は隙をつき、彼を個室に案内した編集者を本にした。

そして調べたのだが、星ノについてのめぼしい情報は得られなかった。

同様にトイレだなどと部屋を抜け出し複数の編集者を読んだが、これも不発。

どうやら社でも厳しく情報を規制しているらしいことが、そこでわかった。

ならば、と個室で挨拶を交わした編集長をヘブズ・ドアして、ようやく情報が手に入ったのである。

性別が女ではなく男であることや、担当の名前などはわかった。しかし本名や素性についてはわからなかった。

先に言っておくと、ここの編集長は数年前に代わっている。

些か信じられないが、前の編集長が今の編集長に星ノの情報を意図的に伝えなかった
としか考えられない。

はたしてそんなことがあり得るだろうか。

——いや、それこそ作家本人が契約で伏せるよう命じなければあり得ない。

人気なのは確かであり、その無茶振りを通すことぐらいは可能であると、露伴は判断
した。

作家とのやり取りで直接会うのは担当だけだ。現編集長でさえその容貌を知らない
ときた。

都合悪くその日星ノを担当する女性はおらず、スタンドを使って聞き出すことは叶わ
なかった……が、担当の女性が次の打ち合わせについて編集に告げていたため、場所
はわかった。

まさか自身の住む杜王町と聞いて、驚かないはずがない。

星ノ桜花は杜王町にいる。打ち合わせ場所をここにするくらいならば、住まいもこの
町の可能性が高い。

正しく奇妙な巡り合わせだ。

「僕は絶対に星ノ桜花に会ってみせるんだ…絶対に、ね」

「そ、そうですか……………」

謎多き作家。その正体を暴くべく露伴は燃えているのだろうと思いつつ、康一は抹茶のみになったラテを啜る。

この漫画家はネタのためなら何でもする。何でもネタにしてしまう。

「あ、もう二時ですね」

カフェの中に設置された時計が洒落たジャズを流しながら二時を伝える。

「どうだい康一くん、星ノ桜花はいるかい？」

「ちよつと待つてくださいいね…」

エコーズを飛ばしながら、周囲の音を聞き分けていく康一。

この時間帯は割と空いてくるのだが、今日に限って人が多い。

談笑するカップルや、一緒に頼んだパフェを頼張るカップル、それに来たばかりの彼氏に手を振る彼女——。

「カップルばかりだな!!」

「そういうのは今いいから」

「……………すみません」

何が悲しゆうてこんな変人漫画家と一緒にカップル御用達のカフェにいるのか、彼女のいない少年は涙ぐんだ。

——あつ、先生！

その時ACT2を通し、康一は「先生」と呼ぶ女性の声を捉えた。場所は彼らとは正反対の場所の、人目がつきにくい席だ。

「露伴先生、見つけました！」

「ナイスだ康一くん！向かうぞ!!」

何気に康一も「素性の知れない作家」の正体を暴くという行為に、楽しさを感じ始めている。

彼が漫画家の方に目をやると、露伴は少し頬を赤くし笑っていた。

「あのっ!!」

昼下がりのカフェにて。

それなりに客がいる中、岸边露伴は編集の女の前に座る男の横に立った。

手にはいつの間にかバッグから取り出された、少し紙の色が変わった本が握られてい
る。

「ろ、露伴先生ツ…!?!」

後ろから追いついた康一がツチノコでも見つけたような、驚愕の表情に変わる。

あの漫画家が、神様が色々と配合を間違えて生まれてしまったような我が道を行くあの
の岸辺露伴が、見ず知らずの男を前に本を突き出し、頭を下げている。

スタンド使いの仕業か? でなければ自分は夢を見ているのだ。

康一は頬をつねった。しかし痛い。

「サインください!!!」

時が、止まった。

止まったと言っても、承太郎がスタープラチナを使って時を止めたわけではない。

厳密にいうと編集の女とココアを飲もうとしていた星ノらしき男と、康一の時間が止
まった。

それぞれが突然の奇行を起こした漫画家に「?!」状態の中、顔を上げた露伴と眼鏡の
奥で目を丸くしている男の瞳がかちあう。

「岸边、露伴……」

「僕を……存知で？ 実は漫画を描いておりまし……」

眼鏡の奥の紫目を見た途端、露伴の浮かべていた笑みが消えていく。

突如雰囲気の変わった漫画家に康一が精神状態を疑う中、「東方仗助」の名を語る時の比にならないような、底冷えた声が響いた。

「吉良、吉影エ……ッ!!!」

振りかぶった露伴の拳は男の左頬にぶち当たり、見事に丸眼鏡を吹っ飛ばした。

35話 立ち入り禁止

漫画は仕事が絡まなければ基本的に読まないが、「岸辺露伴」の名前を聞いたことはあった。

有名な漫画誌で連載する売れっ子漫画家。作品名は『ピンクダークの少年』。かつてネズミの着ぐるみを剥ぎようとした少年は、絵を描くのが好きな子供であった。好きになったきっかけは、鈴美に褒められたため、というのは彼女から聞いた話である。

生意気な小僧が、果たして成長してどうなったかと思えばやはり――、

「さっきの一発は彼女の分だ……そして次の一発は僕の分だ!!」

小僧は今、以前わたしが会った少年に腹に腕を回される形で止められている。

「ちよ、急に何ですかあなた!! 厄介ファンですか!」

泉くんが仲裁に入る。

まさか小僧が杜王町に戻って来ているとは思わなかった。鈴美の事件もあるが、職業

上ここよりよっぽど都市部に住んでいた方が便利だろうに。

かく言うわたしも生まれ育ったこの町を気に入っているため、出て行く気はない。

「どけ、貴様に用はないんだ女。僕はその腑抜けを演じる男にあともう一発殴らなければならぬのだ」

「露伴先生どうしたんですか!! 仗助くんに殴られて頭のネジ吹っ飛んだんですか!」

「ええい、康くんも止めるな!!」

先ほどまで平穩に話し合いを進めていたというのに、突如現れたこの青年によって見事に崩された。

作家に身を置いたのは自分の判断だが、これだったらあの精神科の言葉を間に受けない方がよかったかもしれない。

—— 職に悩んでるならせつかく文学部なんだし、何か書いてみたら？

まさか気を紛らわすついでに書いた代物がデビュー作になるとは、当時の自分は夢にも思わなかっただろう。

そもそもどこの誰かさんが息子の机にあった原稿を見て、変な気を利かさなければこうはなっていないかった。

だが人と最低限関わる必要がなく、素性がバレないように予防線をいくつか張って過ごす現状は、中々過ごしやすいのも事実である。

「ここで話しても悪目立ちするだろう。話があるなら別の場所にしようじゃないか、岸辺露伴」

「…ツハ、いいだろう。だがわざわざ貴様の家に行くのも癪だ。僕の家を案内してやる」
わたしの家に案内する気など微塵もなかったんだが。
ちやつかり付いて来ようとした泉くんはこの場にステイさせた。

???????

康一少年も途中で別れ、訪れた岸辺邸。

流石売れっ子なだけある。成人して間もない男が持つ家のレベルではない。

「座れよ」

「乱暴な言葉遣いだね」

「ツハ！僕だって目上の人間には、ちゃんとした言葉を使うさ」

つまり、わたしは敬語を使うべき相手とは思われていないわけだ。

案内されたソファアに座ると、向こうは作業用の椅子に腰掛ける。

「大方分かつているが、鈴美の件だろう」

「……分かつていて来たのなら、殴られる覚悟はできてるんだろうな？」

「どうぞ。ただ手はよしてくれ、書くのに使うんでね」

「……ッ!!」

こちらの平然とした態度が気に食わないのか、小僧は睨んでくる。

手には普段の癖で持ったのかGペンが握られており、こちらに向けられている。殴る

といったが刺すのは無しだぞ。

「……気に食わん。貴様のその態度全てが気に食わん……!」

「昔から大人びていたが、彼女のこととなると君は本当……子供っぽくなるね」

「黙れ!!」

立ち上がった男に一発、今度は逆の頬を殴られる。

人の襟首を掴み浮かべる形相は、どこか泣きそうにも見える。

「約束したッ、はずだろ……鈴美お姉ちゃんを傷つけるなって……!!」

「わたしが傷付けたわけじゃない。殺したのは片桐だ」

「そんなのわかってるさ!!だが貴様は彼女の側にいて、守れなかった。傷つけていなくとも、貴様が守れなかったことで傷付いたのなら、同じようなものだろ!!」

「確かに、そうだね」

肩を竦ませた瞬間、もう一発拳が飛んでくる。

横に避け前につんのめった奴の後ろに回り、今度は逆にわたしが振り返った男の襟首を掴んだ。息苦しさに歪む顔を、正面から見据える。

「貴様が「あと一発」と言っただ。もう一発殴られる覚えはない」

「……ッ、クソ……」

「幼き頃の君が彼女を好きだったのは、側から見ても分かっていた。彼女は気づいていないようだったがね」

「……………」

作業場を一見して感じたただだが、この男の漫画への熱意は本物だ。

あくまで仕事として書いているわたしとは比べ物になるまい。

そんな男が熱意を引き下げて彼女の想いを全面に出してくるのだから、この青年にとってそれだけ鈴美の存在は大きいのだろう。

「わたしを恨んでいるなら憎めばいい。「僕の一発」を訂正して増やすなら、それでもいい。だが彼女はもう十年以上前に死んでいる。過去に区切りをつけられないのが若

さなんだろうが、わたしに当たったところで彼女は戻ってこないぞ」

「……分かつてる、そんなことは……!!」

顔を伏せた小僧の襟首から手を離し、近くにあつたティッシュで口元を拭つた。

鉄の味が口内に広がって気持ち悪い。

「商売道具の手を使つてよかつたのかい？痛めてもわたしは知らないぞ」

「……一発目は感情的になり過ぎて利き手で殴つてしまつたが、二発目はきちんと、左手で殴つてやつたさ」

当時はわたしの腰ほどしかなかつたというのに、今や自分と同じくらいの身長なのだから、人の成長つてのは恐ろしい。

中身はまだ少し、ガキの部分が残つているようだが。

「ハア……まあ、ずつと殴りたかつた分は殴れたんだ。少しはスッキリした」

「そうかい。じゃあわたしは帰るよ」

「オイオイ、オイオイオイオイ、ちよつと待てよ星ノ先生」

は？何だコイツ急に……。用件が済んだのなら帰して欲しいんだが。

泉くんをカフエで待たせているのだし、これ以上サンドバッグになる気もない。

「まさか僕が貴様に会つた時に言ったことを覚えていないのか？三歩歩いたら忘れる脳なんて、流石約束を守れなかつた男なだけあるな」

「……わたしは帰るぞ」

「客として来たのならもてなしぐらい受けてけよ。常識だろ、常識」

「貴様にだけは常識を語られたくない」

ネズミの件やその他諸々の所業をなかつたことにはさせんぞ。

本当にネズミの首を奪っていたら、最悪出禁もあり得たんだからな。

「おつと、ここに偶然「星ノ桜花」と書かれた本がある」

何で人のデビュー作を持つてるんだ、コイツ？ 妙に色褪せていると思つたら初版だった。怖…。

「おつと、さらにまたまた偶然、ここにペンがあるじゃあないか」

「……………」

無言で去ろうとしたが、飛来したGペンの先が頬を掠めて壁にぶち当たった。わたしはどうやら岸边邸ではなく、幽霊屋敷に来てしまったらしい。

「……嘘だろ。自分以外は雑草としか思つてなさそうな君が…嘘だろ？」

「勘違いするなよ。僕は星ノ桜花の書く薄っぺらい、いかにも大衆ウケを狙つたのが丸わかりな「純愛」ものは嫌いだが、人の狂気が覗く実にリアリティのある一部の作品が好きなんだからなそこら辺勘違いしてくれるなよ先生サインください」

「わ、わかつた。わかつたから……」

自分の書いたものを好きと言われようが嫌いと言われようが別に構わないが、ここま
で迫られると書かざるを得ない。

「間違つて本名を書いたらお前に明日はない」

「そうなる作品が書けなくなるがいいのかい？」

「やっぱりホワイトホール白い明日が待つてるぜ」

「……君、薬物とかはやつてないよな？」

医者なら紹介できるので、と言おうと思つたが、裏のページの空白に書いた文字をガ
ン見している男には聞こえていないようだった。

渡すと少年のように無邪気に笑う。こちらとしてもあまりの温度差に反応に困る。

「よし、じゃあ帰れ」

蹴られる勢いで追い出された。

枷がなかったら、わたしは真つ先にコイツを殺しただろう。

【ヘブンズ・ドアー】

カフェ・ドウ・マゴで一悶着あつた翌日、登校中に露伴に会つた康一は尋ねた。

「露伴先生、やっぱり星ノ先生にヘブンス・ドアを使つたんですか？」

「いや、使つてないよ」

「え!? 意外だなあ……」

「ネタバレは嫌だからね。編集者を読む時も、細心の注意を払つたさ」

「……本当に好きなんですネ」

「一部の作品が、だよ。あの男自体は実に嫌いだ。本能的に合わない」

「うーん……なんか、複雑なファン心ですね」

まあ、あの岸辺露伴のお気に入りなのだから、相当面白いに違いない。

基本小説を読まない康一であるが、今度星ノの作品を読んでみようと思つて密かに心に決めた。

しかし気になるのは、露伴が星ノの作品を好きになつた理由である。

「露伴先生はどうして星ノ先生の一部の作品を好きになつたんですか？」

「……康一くんは興味があるのかい？」

「あ、いえ……気に障る内容なら、大丈夫です」

康一に視線を一瞬向けた露伴は、少し考える素振りをみせた。

そして、君だつたらいいかもしれないと、への字になつていた口を開く。

「詳細は省くが、幼い頃に落ち込んでいた時期があつてね。ちよつどその頃本屋に立ち

寄つて目にしたのが、星ノ桜花のデビュー作だったんだ」

露伴は小学生だった当時、母親から杉本鈴美が亡くなったことを知らされた。ついでニュースで『S一家殺人事件』について知ったのである。

大好きだった「お姉ちゃん」は、家族ぐるみで仲のいい姉のような存在であり、母親に少し近い存在でもあり、幼心で抱いた初恋だった。

だが彼女の隣には気に食わない男がいつもいた。

その男の隣で彼女は露伴に浮かべるものとは違う、或いは可憐な少女のように、或いは艶めいた女性のように微笑んでいた。

少年では勝ち取れなかった恋人の座である。

鈴美も露伴を弟のように思っていたから、余計に無理な話だった。

だからこそ初恋を諦めて、吉良に彼女のことを任せたはずだった。

しかし蓋を開ければ杉本鈴美は死に、二度とひまわりのような笑みを見ることが叶わなくなつた。

どれだけ、吉良を憎く思つただろうか。

——そしてどれだけ、男に託すのみで、何も出来なかつた自分を恨んだらうか。

ただいくら後悔したところで全ては過去の出来事で、正しく久し振りに会ったいけ好かない男の言うとおりで、どれだけ望んでも、死人は返って来ない。

これが現実で、漫画を描く上で岸辺露伴が何より重要視するものの答えだ。

「僕は「現実感」を求めている。何故ならリアリティこそ作品に命を吹き込むエネルギーであるからだ。妄想のみで描かれた作品とは違う。現実の姿を作品に活かしてこそ中身が生まれ、厚みができる」

さながら人間が魚や肉、野菜を食べて己が血肉にするように。

彼もまた体験したネタやヘブンズ・ドアで読み取った他者の中身を喰らい、己の作品へと昇華する。

「それを踏まえて星ノの一部の作品は、この岸辺露伴が一定の敬意を抱くに値するものだと言えるよ」

星ノ桜花のデビュー作は、まだ小学生だった彼には毒々しいほど人間の「欲」や「愛」を暴いていた。

ある女と出会った「わたし」が、少しずつ墮ちていく——という内容には、性癖倒錯、近親姦、殺人、自殺など、様々なタブーを煮詰められ描かれていた。

また、主人公の性別が最後まで明かされないことや「わたし」という一人称から、主人公が男か女か、女であれば同性愛についても暗示されているのではないかと、世間で話題になった。

元々ニュースにも取り沙汰されるような有名どころの受賞作であったが、淡々と、しかしどこか「熱」を帯びた文章に潜む人間の禁忌や狂気に、賛否が分かれた。

露伴としては、主人公の性別を明らかにしないことで生まれる作品のぼかし（例えば制服を着る時の描写など）について否定的な意見を持ったが、「マイノリティ」の言葉が社会に浸透したのを体験して、これが作者のねらいであったのだと思いついた時舌を巻いた。ちなみに吉良にそんな意図は微塵もなかった。

「『中身』のある内容は僕の描く作品には劣るだろうが、実に面白かった。同時に闇のある作品は同種の人間を引きつけやすい。落ち込んでいた僕も多少なりとも、魅了されてしまったんだろうさ」

きつとあの男が書いたものと知っていれば、ハマりはしなかったのだろうが。…いや、知っていても沼に落ちてしまったかもしれない。

「中身」——即ち「リアリティ」のあり、且つ露伴が一定の評価をおく作品ならば、自己の経験や見聞きした内容が含まれていると考えていい。

そうなるも必然的に星ノ桜花は作品に見合う人間の「闇」を体験したか、見聞きした

ことになる。

吉良が過去に何度か事件に遭ったのは露伴も知っている。その経験が作品に反映されているならば、一応の納得はいく。

しかし言い知れぬ、読む中で感じる心臓の裏を撫でられるようなゾワゾワとした例えのような感覚が、露伴は気になって仕方ない。

吉良を家に招いた時、何度その内側を読みたいと思ったことか。

吉良吉影の人間性やかつて体験した事件の出来事。ことに杉本鈴美と、その家族が亡くなった事件の内容について知りたかった。

何せ犯人とされる片桐安十郎はまだ行方不明。……否、既に死んでいる可能性が高いと考えられている。

しかし結局、露伴は読まなかった。

ネタバレをしたくないという気持ちもあったが、知ったら最後吉良の何かが、内側から溢れて外へ漏れ出してしまうのではないかと思った。

作品で薄々感じていた得体の知れないものを、露伴は感じたのだ。

これ即ち「触らぬ神に祟りなし」、といったところだろうか。

「康くん、「毒を以て毒を制す」ということわざがあるだろ？」

「僕もね、似たようなものだよ。抱えた闇を、同じ闇で打ち消す…とまでに至らなかつたが、紛らわせたのさ」

「先生…」

「オイオイ、そんな暗い顔をしてくれるなよ。まだ朝なんだぜ？それに僕が人に同情されて「ありがとう」と思うタイプじゃないのは、君もわかっているだろ」

「……すみません」

会話の中で浮かべた漫画家の普段とは違う憂いを交えた表情に、康一は露伴の言う「過去」が、思い出すには重いものであると悟った。

暫しの沈黙が続き、分かれ道がきた。僕はここで、と露伴が言う。

「ああ、康くん。置き土産ってわけじゃないけど、一応言っておくよ」
「何ですか？」

「読むなら「純愛」ものだけにしとくといい」

その言葉に康一の喉からはヒュツと、か細い息が漏れ出た。

36話 シンバルウツキイー

作家という職種ではあるが、社会人になってから平穩に過ごしている。ただ女の手への執着と殺人欲求は相変わらずだ。

サラリーマンではなく作家を選んだのも、人との関わりを避けるのに最適だと思ったからだ。

人と関わりが少なければ余計な対人トラブルは生まれない。つまり、ストレスを感じずに済む。

だが殺人欲求はどうにもならない。そしてそれを我慢するにも限度がある。この欲求を紛らわすのに有効だったのは別の欲で上書きする方法だ。

その欲とは、肉欲である。

あの悪魔リリスに刷り込まれてしまった結果だ。

一概に言えるのは人に褒められた女性関係を持っていないことだろう。

この時点で平穩から数歩遠かっているが、人を殺していないだけマシだ。

「先生のドロ沼な作品って、なんていうんですかね。……淡白なはずなのに、こう、生々しいんですよ。「熱」を感じるっていうか」

そう語るのは、最近わたしの担当になった泉飛鳥編集。

先日の一件で目立ってしまったためあのカフェは利用できなくなつた。

泉くんには打ち合わせ中にわたしの本名を言ったり、「星ノ桜花」を連想させることは言わないよう口すっぱく言っていたのに、岸辺露伴のせいですべて台無しになつた。

元々駅付近を打ち合わせに使っていたのは、編集と待ち合わせがしやすかつたからだ。

出版社側も人選はしっかりしているので、編集者伝いで身元がバレたことはない。保身を考えるなら、話し合いの度に場所を変えるべきなんだろう。

だが土地勘のない向こうにそれをしろ、というのは酷な話だ。

それにわたしも精神面と体力面に問題があるので、遠出はできない。

ならば自宅はどうだろうか？

——却下である。自分のテリトリーに他人を招くなどごめんだ。

しかも相手はプライベートではなくビジネスの付き合い。殊更に家に入れたくはない。

そもそもの話、「自分の保身」を考えなければなくなるほど自分の作品が売れると、誰が想像できただろうか。

売れなくなったらライター関連の仕事を細々とやっていこう、などと考えていた自分を殴りたい。

最初の数年は転職を真剣に考えていた。

しかし中途採用の条件（勤め先は杜王町がいい）や、自分の生活リズムに精神問題……諸々を踏まえて、結局作家を続けることにした。

「先生、何か上の空ですけど、大丈夫ですか？」

「……ん？」

今日編集とのやり取りで使っているのは、『トラサルデー』というイタリア料理店。こちらがカフェを渡った末、泉くんが見つけてきた。

ちやつかり会社の経費だからと高そうな店を選ぶ賢さに、呆れを越して感心させます。

「えつと、ムサシが綾波レイと同じ声って話でしたね」

「全然違います」

「ああでは、まごころを君に、でしたね。八匹の鳥たちがエサを食べて空を舞うシーンは感動的でした」

「気持ち悪い……性癖が。みんなのトラウマを呼び起こさないでください」

「じゃあ経費で食う料理は美味しい、ですかね」

「それも違いますってば！というか、まだ料理出てきてませんからね」

この店はメニューがなく、シェフの判断で料理を出すらしい。

まだ開店してからいくばくも経っていないようで、客もわたしたち二人以外はいない。食事時とズレた時間のせいもあるだろう。

「目立たない店」を頼んで彼女はここを見つけてきたのだから、有能なのかポンコツなのかイマイチわからん。

「覚えてますよ。「熱」の話でしたね」

「そうですよ……やつぱりここまでのものを書くんだから、先生って裏で女性関係も奔放なんでしょう?」

「女性のあなたがそれを、男のぼくに聞くんですか？」

「確認ですよ。作品のネタに繋がる手がかりはこちらも把握しておきたいので」
「プライベートのことを話す気はないですね」

今までの編集も個人差はあれ、一定の距離を置いてきた。

今回もそのスタンスを変える気はない。

「人の情報を聞こうとしている行為が他者ヘリークするため、というのも無きにしも非
ずですし」

「私はそんなことしませんよ。仕事にはいつも全力投球です！」

「婚期逃しそうですね」

「先生…てめ^{あなた}はおれ^私を怒らせた…」

「食事、まだですかねえ」

一人で経営していることもあり、単純に作業量が多いのだろう。

無視した泉くんを横目で見ると頬を膨らませている。

妙齢の女が子供のような反応をする様に、不意に鈴木を思い出した。

こうして観察してみると、肩にかからない長さの髪やその色もよく似ている。

「んもう笑わないでください！」

「ハハ………ええ？」

「そもそも私は24ですし、まだまだ若いので大丈夫です!!」

思わず口元を押さえた。知らず知らずのうちに口角が上がっていたらしい。らしくない、らしくないぞ。

少し疲れているのかもしれない。岸辺露伴に会ってからというものの、過去の記憶に引きずられやすくなっている。

どうにか気を逸すべく、泉くんの話を掘り下げた。

「君はとても仕事熱心だよ。ぼくでさえ見習うところがあるくらいだ」

「褒めたって白紙の原稿用紙しか出ませんから」

「ぼくにどんだけ書かせたいんだ」

「これも仕事なので。先生の担当になったのは、私にとってある意味チャンスですから」
売れっ子作家の編集を担当し成功すれば、彼女はさらにステップアップする。

それは高みを目指す者の意志なのだろうか——と思っただ、違うらしい。彼女は手で丸を作る。

「クツクツク……この世は金こねがすべてですよ」

「生々しい回答だな……」

「もちろん仕事に一定の熱意と誇りは持っています。編集者を選んだのも本が好きだったからです。でもそれ以上にお金が必要なんです」

「必要……か。気分を害したら申し訳ないが、ご家族に借金があったりするのかい？」

「いや、借金じゃないですけど……うーん」

泉くんは言葉を濁した。チラ、とこちらを見て、また考え込む。

「もし話したら先生のネタになりますか？」

「内容によると思いますが……まあなるべく活かせるようにしますよ」

「……うん、じゃあいいですよ」

言い出す前に彼女はコップの水を飲む。

細い手首だ。触れたら吸いつきそうな肌である。手入れは相応にきちんとされていて、爪も綺麗に切り揃えられている。

爪磨き……まではしていないか。愛らしい手だ。わたしがしてあげたい。

「妹のためです。両親がいないので、私が妹を支えてあげるんです」

その言葉が耳に入った時にはすでに遅く、ジリジリと燃えていた頭のままカノジヨに触れてしまった。柔らかく滑らかな感触が一気に迫り討ちをかける。

ギリギリで踏みとどまった理性が「口づけるのはやめろ」と赤信号を出した。

「大丈夫ですか？な、何かその、えつと…………… えつちい…」

「すみません、セクハラしてます」

「堂々と言うことですか!？」

顔を赤くし歯切れの悪い彼女から察するに、男に耐性がないのだろう。

手に触れたままのわたしに泉くんは戸惑った表情を浮かべ、ついで意を決したように真つ直ぐ視線を向ける。

「その…先生」

「何でしょう?」

「…編集長から聞いたんですけど、私を外して欲しいと頼んだって、本当ですか？」

「言いましたけど、それが何か?」

鈴美と似ている要素が多く、またガサツな点で保健医と少し似通うところもある。何より女の美しい手は、目に毒なんだ。

今も内側では殺してやりたいと、この手を自分のものになりたいと、欲望が渦巻いている。

だから担当から外してもらえないか頼んだ。向こうとしては泉編集に相談してから、

との返答が来た。

仮に短期間で外され、しかも作家本人の意向で変えられたのだと社内では知れたら、彼女の体裁が悪くなる。

そして泉くんは編集長の相談に、「何か自分に非があるのならば直します」と告げ、外されることを渋った。

何か訳があるのだと編集長の電話が来た時に確信したが、家庭の事情があつたのならば納得もいく。

しかしそれがいったい何だというのか？

他所の事情などわたしにとっては対岸の火事同然で、彼女の人生が今後崩れようが構わない。もし恨まれわたしの人生の邪魔になるのなら、廃人になりすればいい。方法は幾らでもある。

鈴美や保健医と似通った点がある。それだけだ。

ただ、それだけで、わたしの心はぐらつく。

救いの手が欲しい。

鈴美のようにわたしを「人」たらしめてくれる存在が、熱を与えてくれる存在が欲しい。

きつとこの先彼女の代わりになる人間が現れないのは薄々感じている。

長い時間を共有して、わたしの全てを知った上で理解しようとし、イエスのように無償の愛を捧げてくれたからこそ、ぼくは鈴美に心を預けられた。依存していた。

「愛」と語るにはぼくのそれは、ドロドロと毒のように禍々しい。

そして失ってなお、過去の感情を振り切りのうのうと生きているこの身体が、気色悪い。

「…先生、お願いです。私に先生の編集を続けさせてください」

「嫌ですよ。体裁については悪くならないようこちらから言っておきますから。「ぼくが彼女を好きになってしまったので」でも言えば、向こうも笑い飛ばしてくれますよ」

「…でも、先ほど言ったようにこれは「チャンス」なんです。私はみすみす目の前にある好機を逃したくはない」

真つ直ぐにわたしを見つめてくるその目は、やはり直視していると様々な感情を呼び起こさせる。

「…愚かだな」

自分の口から漏れた言葉は、随分と冷えていた。

わたしと関わってしまった時点で、不幸なのだろう。彼女だけじゃあない。歴代の編集も様々な不幸に遭い代わってきた。中には事故に遭って死んだ者もいる。

これがわたしが意図的に関わらないで起こるのだから、未恐ろしい。

「君はつまり、ぼくに要求しているのだね。ならこちらは相応の代価をもらうが、構わないだろうか?」

「…代価、ですか?」

「ああ、続けさせてやる。君が今後、どんな目に遭っても知らないからな。その上でぼくは君に要求させてもらうよ」

唾を飲む音が聞こえた。女の額には汗が滲んでいる。

「わたしに抱かれろ、泉飛鳥」

彼女の顔から一気に血の気が引いた。

きっと他の女のように彼女がわたしを満たすことはないのだろう。けれど「もしも」があつたらと、期待してしまふ自分も愚かなのだ。毎回期待しては外れ、途方もない殺人欲求に自己が崩れそうになる。それでもぼくは「熱」を求め。救いの手を求める。まあ、彼女が救いにならずともよいのだ。

美しい手が、そこにあるのだから。

37話 今、あなたの家の前にいるの

吉良の朝は7時から始まる。昼食を挟んだ9時から18時までが仕事の時間だ。

サラリーマンであれば拘束されるはずだった通勤時間は専ら読書の時間に使っていた。

10年以上そんな生活を送っているためか、元来の体力のなさに拍車がかかっている。

先日露伴の家に徒歩で向かった時も虫の息だった。

漫画家の「マジかコイツ…」という表情が脳裏によぎるたびに、吉良は目尻がひくつく思いになる。

最近はどうケ丘高の近くにできるスポーツジムの会員になるか、かなり真剣に悩んでいた。

「だがああいう所はむさ苦しい男どもが汗をかいて、剩えその身体で器具に触れてるってことだろ?…無理だ、絶対に無理。それならまだ犬畜生を触った方がマシだ」

吉良は朝食を作りながら遠い目を浮かべた。

ならジョギングをした方がいい。となると、必要になるのは運動着だ。

休みにスポーツ用品店に向かおうと彼は密かに心に決めた。

「…まあ、あの小僧と関わることももうあるまい。向こうもわたしに関わりたくないだろうからな」

それにしても広瀬康一といい岸辺露伴といい、今まで遭遇しなかった同種人間や古い知り合いと出会うていることに、吉良は胸騒ぎを覚えている。

例えるなら、Xデーをもじって「1987年」の再来とでもいうのか。なるべく奴らに関わるべきでないと、彼の本能が告げていた。

自分は平穩に生きてみせる、そう心に誓って。

そして時刻も9時を回ろうという頃。

家事を一通り終えた男は、仕事に取り掛かろうとした。

今書いているのは出版社側から頼まれている「純愛」もののシリーズである。

教師と生徒の禁断の愛を描いた人気のシリーズで、ドラマ化もされている。本人は興味がないので見ていないが。

「仕事のためとはいえ、今時の女の趣味・嗜好を研究している自分も大概だな…」

『ニャー』

仕事中勝手に現れたキラークイーンが、揺れ動く万年筆にじやれ付く。

——ピンポーン。

その時、玄関のチャイムが鳴った。

ちようどキラークイーンが卓から吹っ飛ばした万年筆のキャップを、吉良が拾っている最中だった。

「…誰だ？」

何か頼んだ覚えもないので宅配便というわけはないし、郵便も今の時間帯ではない。なればセールス販売の類だろうか。再度鳴ったチャイムに眉を顰めつつ、分身を引込め男は玄関に向かった。

居留守をしよう、という選択肢は彼にはない。これが露伴だったら居留守を使う。

二人の性格の差が見て取れる例である。

「はい、何用でしょ…」

苛立ちの滲んだ声色を隠さず玄関の戸を開けた吉良。

その表情は目の前の人間を見た瞬間に固まり、狐につままれたような呆けた面を晒し

た。

「突然すまない。吉良吉影の家で間違いないだろうか」

彼の前に立っていたのは、そのまま家に入ろうとすれば間違はなく額をぶつけるであろうほどの、身長の高い男だ。恐らく吉良より二回り近くガタイも合わせてデカイ。

それだけじゃあない。夏の気配を間近に感じてきた季節だというのにこの男、白い学帽と学ランを着ている。

その下はベストと黒いタートルネック。黒色が熱を吸収しやすいと知つての狼藉だろうか。追い討ちに二重ベルトだ。

見ているだけで暑そうな服と男の圧迫感に、吉良は濁つた目で「ええ、そうですが」と返した。

先ほど「学ラン」と言つたが、この大漢はまず間違はなく学生ではない。

精悍なその顔付きは、自分が整つた顔立ちだと自覚している吉良でさえ美形だと思わざるを得ない。

総合すると学ラン・学帽を身に纏つたとんでもないイケメンの馬鹿でかい身長青年が、彼の前にいる。

嫌な予感しかない。そしてその予感は、案の定当たってしまった。

「俺は空条承太郎。海洋学者をやっている。ここに住んでいる男に用があつて来たんだが……アンタで合ってるか？」

吉良は無意識に、服の上から胃を押さえた。

??????

空条承太郎は仗助の「甥」に当たる人物である。

ジョセフの遺産相続の調査で隠し子が発覚してから、その事情を仗助本人に伝えるため日本に訪れた。

それから高校生の叔父に会って間もなく、虹村兄弟の「矢」の事件が発生した。

承太郎はー海洋学者である傍ら、90年代から仲間のポルナレフという男と共に、矢

の追跡調査を行つてゐる。

その過程で二人は矢を盗掘したという「青年」の話を知った。

矢が複数あることについては、D I Oの手下だった者たちを調べた際に判明している。

効率を考え、ポルナレフはアフリカやヨーロッパ。対し承太郎はアメリカやアジアを中心に搜索することになった。

矢は10年以上前ジョースター家の宿敵であるD I Oを倒した後、二本はスピードワゴン財団によつて回収された。

残りはいずれも行方不明である。

またエンヤ婆を詳しく調べたところ、既存の六本プラス、もう一本矢があることが判明している。

エンヤの行動にはいくつか不審な点があつた。

D I Oにスタンドを教えたことだけではない。青年から入手したという六本のうち、五本の「矢」を得たことも偶然にしては出来過ぎていた。

この老婆がまるで未来を見たかのように先取りした行動を取れたのは、主に二つ理由

がある。

一つ目は彼女が「占い」という特殊な力を持っていたこと。

そしてもう一つは、彼女の先祖から伝わっていた一本の「矢」の存在にあった。

矢とともにスタンドという特殊な力についての情報も先祖から受け継がれており、これがエンヤの占いの力も相まって、想像を絶する悪——すなわちD I Oに“スタンド力”を与えることになってしまった。

ちなみにその一本の矢については見つかっていない。他の矢と同様に、他の人間に渡っていることは確かだろう。

そして、現在。

中々矢の発見に至らなかった折、承太郎は虹村兄弟の事件によって一本の矢を見つけることができた。

だが面倒なことに兄の虹村形兆は、矢を使いスタンド使いを増やしていた。

彼にも理由があつたのだが、過程で人を殺めてしまった罪は重い。

その後、形兆は自分でスタンド使いにした音石明という男に殺害された。

弟の億泰はというと、仗助の言葉もあり自分の行いを改心している。まあそもそも主導で動いていたのは兄であり、弟は従う他なかつたとも言える。

そして音石明も仗助たちに成敗され、御用となった。

この一カ月の間で承太郎が関わったのは、スタンド使いのネズミの駆除くらいだ。

形兆がスタンド使いを増やした余波は主に仗助たちが受けている。特に康一の被害が多い。

まだスタンド使いがいるかもしれない状況と、祖父のジョセフが仗助に会いに来てしまったこともあり、もう暫くは彼も帰国できないだろう。

ついでに承太郎本人も杜王町に広がる海底の地質に興味を抱き、研究熱を駆り立てられている。

後日新種のヒトデを発見してしまうぐらいの入れ込みようだ。

ここまで話した限りでは、承太郎が吉良の家に来る理由がない。吉廣がエンヤから矢を手に入れたことは知らないのだ。

ならばいったいなぜ彼が吉良邸に訪れたのか。

きつかけは仗助が露伴を入院させ、少し経った時期にまで遡る。

その日、赤ん坊を抱えたまま迷子になっていたジョセフを、仗助がホテルに送り届けに来た。

承太郎もまた同じホテルに滞在していたため、礼を言った。

「すまないな、ジジイが。気付いたら勝手に抜け出してこれだ……もつとすっかり俺が見ておくべきだった」

「いや、承太郎さんが謝らないでくださいつすよ。ジョースターさんも赤ん坊も無事だったんですし」

一つ、二つと他愛ない会話が続き、承太郎はふと仗助の視線がある場所に釘付けになつていてことに気づいた。

そこにはロビーのソファアに座り、赤ん坊を抱くジョセフの姿がある。

赤子はキヤツキヤと笑いながら加減を知らぬ小さな手で、白い髭を引っ張る。

老人はその、柔い手をやさしげに見つめていた。

承太郎の娘を抱いていた時も、ジョセフは似たような微笑みを浮かべていた。

当時の娘と祖父の姿を思い出した承太郎は、浮かべた笑みを隠すように帽子を深くかぶり直した。

そして会話を戻そうと、仗助の顔を、見て。

「……あつたかいっすね」

ああ、とため息ともつかぬ小さな声が承太郎の口から溢れた。

この少年は、承太郎が子供の頃から当たり前のように両親から受けていたその優しさを、そのやわらかさを、人より受けてこなかった。何せ父親がいなかったのだから。

「ハア……やれやれだぜ」

「………んえ？お、俺、なんか承太郎さんの氣に障るようなことしちゃいました…？」

「いや、お前は悪くねえよ」

「そ、そっすか……」

ジョセフがあと10歳は若かったら、今この場で赤ん坊を避難させてから承太郎の拳が飛んだだろう。

思い返せば、仗助は幼くして母方の祖父を亡くしている。

母親と二人での生活だが、それでも真っ直ぐに育った。

父親や祖父がいなかったらといって朋子は息子を甘やかさず、時に厳しく、時に優しく見守つて来たのがよくわかる。

「母親を大事にしろよ、仗助」

「え？……大丈夫ですよ、お袋は俺が守りますから」

「……ツフ、そうか」

普段は崩れない男の笑みに仗助の目が丸くなる。

そして、自分の発言に少し恥ずかしそうに頬をかきながら顔を逸らした。16歳とは言ってもまだ子供である。

「まあ、お袋にはその……じいちゃんやんが亡くなったと同時に俺が熱でぶつ倒れたりとか、迷惑かけましたし。だからその……笑わないでもらえますかア!!!」

「いいじゃねえか、母親思いで」

「絶対お袋にはこのこと言わないでくださいよ!!会うことがあつても、絶対ツ、絶対ツスからね!!」

「ああ（多分）」

あたふたとする高校生の叔父は、承太郎には微笑ましく映った。

——と、同時に彼の中で一瞬、引っ掛かりができたのである。

承太郎は東方朋子がない間、仗助の家を訪れた時に仏壇の位牌を見たことがある。東方良平の命日は1987年の夏ごろだ。

仗助が能力に目覚めたのは本人によれば、4歳頃。

また、承太郎がDIOとの因縁でスタンドに目覚めたのは同年の11月の時期で、ジョセフや彼の母のホリイも同時期に目覚めている。

スタンドは「矢」により目覚めることが殆どである。

しかし中には承太郎のように血縁者のスタンドの覚醒（この場合、DIOの肉体であるジョナサンの身体）を受けて目覚める者もいる。

ただしホリイのように「器」が不十分な場合はスタンドが暴走し、「本体」を害してしまいう可能性がある。

承太郎はてっきり仗助もホリイのように、血縁者のスタンドの覚醒を受けてクレイジー・ダイヤモンドが目覚めたのだと思い込んでいた。

だが仗助の覚醒時期は夏ごろ。対し承太郎たちは11月ごろ。時期が噛み合わない。

何か、何か俺は重要なことを見落としている——。

10年前より少し肉の落ちた頬に汗が伝った。

「…仗助、一応聞いておきたいが、お前がスタンドに目覚めた時の状況を覚えているか？」

正確には熱を出してぶっ倒れる前のことだが」

「俺がスタンドに目覚めた時ってーと、4歳の時っすから……あんまし覚えてないですよ」

「何でもいい。そのあ……脳みそで思い出せ」

うっかり「その頭で」と言おうとした承太郎はすぐさま言い直した。

「4歳の頃……4歳の頃オ……？」

仗助としては4歳の時期は印象深い出来事が多かったとはいえ、まだ保育園生だった頃のことだ。記憶の糸を辿れども、あやふやなことしか思い出せない。

「あーでも、じいちゃんのこと待ってたのは覚えてるっすよ。それで気付いたら熱出して……」

「それだけか？」

「それだけっ言われても……あー！」

「何だ？」

そう言えば、開いた窓越しに仗助は何かを見た。

遠くの茂みから一瞬光った物体。それに仗助は気を取られていて、その時部屋の電話が鳴った。でんわだ、と意識がそちらに向く。

それから一瞬のことで、腕に微かな痛みが走った直後、丈助は倒れたのである。

意識が朦朧とする中間こえたのは、先生の声と部屋から飛び出していく大人の足音。

そして丈助は———そうだ。今にも気を失いそうな状況で外に視線を向けた時に、外の水溜りから伸びた液体のような何かを目にした。

それは部屋の中に侵入し、ズルズルと、何か棒のようなものを引きずっていった。

丈助は思い出した棒状のものに既視感を覚えた。つい最近見たものと似ている。

音石明から回収した……………、

「あれは「矢」だった!!」

承太郎は新たに厄介な件が浮上したことに眉間の皺をほぐした。

虹村兄弟の持っていたものとは考えにくい。億泰からも彼らが持っていた「矢」は、最近使用するまで家に保管されていたと聞く。

D I Oの手下だった父に「矢」が渡って以降、誰かに盗まれていたということもない。「恐らく「矢」はもう一本あると考えていいだろう」

「ど、どうするんすか!?!悪用されてパンパンスタンド使いが生まれてたらヤベエよオウ!!」

「それに関しては何問題ないだろう。俺たちが出会ったスタンド使いはみな虹村形兆か、音石明に矢で射られた者だけだった。仮にもう一本の矢でスタンド使いになつていたのだとしたら、「スタンド使いとスタンド使いは引かれ合う」という性質上、その矢で目覚めたスタンド使いに出会っていなければおかしい」

「……つまり、使われてはないってことですね」

「ああ、今はな。いつ誰かの手に渡り悪用されるかも分からない。その「矢」が過去に前に使われたとして、今もこの町にあるとも言い切れない」

「……」

いつになく仗助の表情が真剣なものになる。

「もう一本の矢については俺が調べる。お前は引き続き、スタンド使いが現れた場合上手く対処してくれ」

「でも……」

「大人と子供じゃ出来ることの大きさが違う。お前はお前なりに、最大限のことをすればいい」

「……っス」

仗助はそれでも納得がいけないようだった。

彼の能力は近距離パワー型であれ、能力は「な・お・す」ことなのだ。応用力の幅や地の

ステータスも申し分ない。それでもいざという時のもう一手に欠けることが多い。ならば承太郎のように完全な攻撃特化であれば良かったのだろうか？

否、それも違う。スタンドは使い手の深層心理や本性を反映されたものである。

「治す」、或いは「直す」ことを主軸としたクレイジー・ダイヤモンドは、強さと優しさを兼ね備えている。

それを早々に理解した承太郎は、だからこそ仗助に一定の信頼を置き、前日のラット退治にも同行させた。能力を間近で観察するという意図もあつたが。

そして能力の強さを含め、スタンド使いの対処を任せられると判断した。自分が帰国した時の懸念を払拭するためでもある。

欠点についても億泰や康一といった仲間が補うだろう。

あの承太郎から及第点以上の点数をもらっている仗助だが、気付いていないのは本人の性格ゆえか。

それともこの学者の顔が滅多に感情を出すことがないせいか。

「まあ、任せてください！このグレート仗助くんが頑張りますから、大船に乗ったつもりでいてくださいよオー！」

「泥でできた舟か？」

「……今仗助くんのガラスのハートにヒビが入りました」

承太郎が冗談のつもりで言った言葉を間に受けた仗助は、暫し落ち込んだ。

38話 ライターは持ったか？

もう一本の「矢」があることを知った空条承太郎は、スピードワゴン財団の手を借りその行方を探した。

調べればかつてから杜王町には行方不明者や未解決事件が多く、こと近年ではその発件数がさらに増加していることがわかった。

一つ一つ吟味するのは困難なため、仗助がスタンドに目覚めた近辺の事件に絞って調べた。

この承太郎の読みは当たり、いくつかの不審死体の事件を見つけた。

それは死に至るほどの外傷がなく倒れていた遺体や、心臓を穿たれ亡くなった遺体など。

前者の多くは脳溢血等の病気として判断され、後者は他殺、もしくは犯人が不明の未解決事件として処理されていた。

恐らく前者が「矢」によって亡くなった遺体だ。ポイントはこの「死に至る外傷がなく」のところ。矢で受けた傷は、たとえそれがかすり傷でもスタンドに目覚めなければ死にいたる。だから前者は矢が使われたと判断できる。

ならば後者は「矢」で目覚めたスタンド使いの仕業と考えていい。

仗助の祖父も似た殺され方をしており、同一犯の可能性があると承太郎は睨んだ。

東方仗助が見たのは液体型のスタンドだ。水を伝って移動を可能としていたのだから、事件のほとんどは雨が降った翌日に起きていた。

その液体型のスタンドであれば形状も容易く変えられるはずだ。それこそ心臓を一突きして殺すことも可能に違いない。

仗助など複数の人間に「矢」を使っていた人物と、人を殺し回っていたスタンドの本体は同一人物である可能性が高い。

形兆や音石がスタンド使いにした人物でも、ここまで人を物でも壊すように殺す人物はいなかった。それこそ凶悪犯でなければ、ありえないだろう。

一人、該当し得る人物はいた。

それは良平が殺され、仗助が高熱で倒れた少し後に杜王町で起きた事件。

世間でも一時期騒然となった事件で、承太郎の記憶にもかすかに残っていた。

『S一家殺害事件』

犯人は片桐安十郎とされ、現在でも全国指名手配を受けている。

SPW財団伝いに警察から取り寄せ、承太郎は片桐の犯罪歴を見た。

この男は仗助の祖父に初犯時捕まった経歴がある。良平を恨んでいてもおかしくない。

しかし、その娘と孫を殺さずにいたのは少し疑問がある。

片桐のねちっこい性格を考えると、良平を絶望させるために娘と孫を目の前で殺して——くらいしそうだ。

——まだ何かあるのか？

——そもそも片桐はどうやって「矢」を手に入れた？

第一殺すならば、スタンドを使って殺した方が早かつたはずだ。

S一家は刺殺によって殺された。生存者は確か……と考え、承太郎は取り寄せていた『S一家殺人事件』の詳細を見た。

事件の内容は「奇妙」の一言に尽きる。

ニュースや新聞では、S家の自宅で両親を先に殺し、娘を攫った片桐が彼氏に身代金を要求したとある。

その後彼氏は警察に通報。そして身代金を要求された場所に持って行つたが、犯人の内通者に警察に通報したことがバレており、交渉は失敗した。

彼氏が現場についた時にはすでに彼女は殺されていて、彼氏も殺されそうになつたところで近くに身を潜めていた警察官が片桐を止めようと発砲した。

そして片桐は海へ身を投げ、逃亡した——とあつた。

だが捜査内容は全くの別物だつた。

片桐が両親を殺し、娘を攫つたまでは合っているが、まず彼氏の証言が違う。

彼は警察へ連絡せず、現場のメッセージを読み解き独断で助けに向かつた。この間老人と思しき通報者が警察へ通報している。

また面倒なことに彼氏には精神疾患があつた。その証言の信憑性が問われている。

一応続きには、彼氏は負傷していた彼女を見て錯乱し、犯人につかみかかつたところで逆に重傷を負わされた。そして彼女は彼氏を助けようとしたのち犯人に殺された、とあつた。

警察側はこの事件を片桐の一方的な怨恨事件として片付けている。

というのも、片桐には腹違いの姉がいた。その女が金に困り誘拐した時に巻き込まれ

たのが、その彼氏と彼女だったというわけだ。

女は捕まる前に海に身を投げて自殺している。こちらは片桐と違い、遺体が発見されている。

「……………」

一応と、承太郎はその姉の起こした事件も見たが、こちらも違和感があった。

彼氏側は裕福な家庭で攫ったのも理解できる。しかし彼女の方はごく普通の一般家庭である。

しかも最初に誘拐されたのが彼女で、次に誘拐されたのが彼氏だ。

捜査内容に記されている誘拐された二人の証言を合わせてみると、メインの誘拐は彼氏で、彼女はその彼氏を誘き寄せるための餌だった——とある。

しかしそんなことをわざわざせずとも、彼氏だけ誘拐すればよかつたはずだ。

しかも犯人の女は被害者の二人（十幼児）と出かけ、帰って来たところを狙っている。他に最適な日にはなかったのだろうか？

さらに言えば二つの事件の現場と、それぞれの犯人の顛末も気にかかる。

一方は自殺し、一方は行方不明。

現場は犯人の女の自殺以降、自殺の名所として何人もの人間が身を投じている。

死体のほとんどは同じ浜に上がっている。現場の下は高さ数十メートルもの切り

立った崖になっていて、横の長さもある。

また海流の流れが激しく、子供では飛び込むと近くの浜辺にたどり着く前に確実に死ぬ。体力のある男でも無理があるだろう。

片桐ならば可能だろうか。

——いや、難しいだろう。行方不明にされているが、警察は死んだと考えている。

仮に承太郎の「片桐はスタンド使いであった」という考えが正しければ、警察が現場に来た時海に逃げずとも、スタンドを使えば逃げられたはずだ。

だが現場の証拠では、片桐が海に身を投げたのは間違いない。

そもそも何故ナイフを使って片桐は『S一家』を殺害したのか？

彼女の致命傷となった心臓の傷や彼氏が四肢に負っていた傷は、良平などの人間が負っていた傷と類似点が多い。

ゆえに「片桐Ⅱスタンド使い」はほぼ確定する。

能力は仗助の証言を踏まえると、水、あるいは液体類全般に同化できる物質同化型であろう。

ならばやはり、なぜ犯人はスタンドを使わなかった、という疑問に行き着く。

また彼氏も簡単に殺せたはずだ。痛ぶられたような傷。ここにも何か訳があったの
だろう。

とすると、怨恨の線は確実か。片桐は彼氏に強い恨みを持っていた——。

片桐の姉が彼氏を攫つたのも、もしかしたら別の理由があったのかもしれない。片桐の恨みを買うような何か、二人の間にあったのだろうか。やはり調書だけでは情報が足りない。

不明な点が多すぎる。調べれば調べるほど、深みにハマっていく。

だが確かなのは、この二つの事件の中心にいる人物が今もこの杜王町で生きているということだ。

承太郎はついでに警察側の捜査内容を確認するため、二つの事件に当たった刑事と対面した。

相手は50代後半ほどの恰幅のよい男だった。

『S一家殺人事件』に関しては不可解な点の多さから、警察側としても「仕方のない対応だった」と言われた。

杜王町で起こる不可解な事件に関しても、昔から同様の対処が取られてきたのだという。

ならば、佐藤の誘拐事件の方だ。

犯人が彼氏だけでなく彼女まで誘拐したことや、誘拐時期の不自然さに承太郎が尋ねている間、中老の男は静かに話を聞いていた。

しばらく沈黙していた刑事は煙草を取り出し、彼に吸っていいか聞く。

「別に構わない。俺も昔吸っていたのでな」

「今は吸っておられないの？」

「……………ああ、娘がタバコ臭いのは嫌いだと」

「ハハッ、なるほど。…いい父親ですな」

「……………そうでもないさ」

承太郎にとつては耳の痛い話だ。アメリカに妻と娘を置いて日本に來ている状況では、妻子想いとは言えない。いくら懐に家族の写真をしまい、時折それを眺めるとはいえ。

吐かれた紫煙が空中を漂い、換気のなされていない窓に当たってかき消える。

細い目ではかなき雲の行く末を見た恰幅のよい男は、ポツリと呟いた。

「……………言われたんですよ、あの少女にね。真っ直ぐで、綺麗な目を持つ子供だった」

男は佐藤の誘拐事件に当たった際、犯人の仲間に危うくレイプされた少女にズケ

ズケと聞いてしまい、過呼吸にさせてしまったことがあった。

それでも少女は呼吸が落ち着いたのち、話を続けた。

その中で彼氏と佐藤の肉体関係のもつれの結果、少女が巻き込まれたと考えていた男は、彼女に尋ねた。

——佐藤容疑者と吉良少年には肉体関係があつたのだろうか？

しかし少女は首を振った。一瞬泳いだ目を、その時男は確と捉えていた。

その後も事情聴取は続き、終わり際に彼女は過呼吸を起こしてから視線を合わせなかつた男の目を、真つ直ぐに見据えた。若干の震えを残し青ざめた顔で、それでも美しい瞳で。

『彼はただ「普通」に、平穩に、生きたいだけです。だから、彼の幸せを奪うようなことはしないでください。……どうか、お願いします』

深く頭を下げた少女に、男は強く心を揺さぶられたのである。

「片桐の件は仕方ありませんが、佐藤容疑者の事件は私が意図的に手を加えましたよ」「捜査内容の詐称はご法度ではないのか？」

「バレたら、私のクビが飛ぶでしようね。私が自身の正義を曲げたのもその一回きりですよ。上に密告するならお好きにどうぞ」

「……いや、やめておこう。だが何故、自身の信念を曲げてまで行つた？」

「……亡き友に、影響されたせいかな。はたまたあの少女の瞳に、俺の心が動かさちまつたせいかな……まあ、どっちもですな。少女のトラウマを呼び起こさせてしまったことに對する、罪滅ぼしもあつたでしょうが」

そう言う男は苦笑いし、灰皿に煙草を擦り付けた。

「分かるぜ、空条さん。あんたは今「わからない」って顔をしている。俺の行つたことは違法だ。あの少女のようにあんたもどここまでも真つ直ぐな一つの信念を持っている。あんたのそれは「正義」って奴だろう？」

「……………」

「悪いことをすれば罰せられる、当たり前のことだ。だが長年刑事をして善人も悪人も見ていると、人間が結局は同じように見えてくるんだよ。愚かで、哀れで、救いようのない生き物だ。それでも良い奴には良い奴なりの、悪い奴には悪い奴なりの人生がある。「悪」だからってそれを全て悪いで済ますのは、軽率な答えだ」

不意に承太郎の思考によぎつたのは、かつての旅で対峙した男の言葉。

「悪には悪の救世主が必要なんだよ」

それはつまり、悪人には元々救いが無いということだ。

彼らはだからこそ、D I Oのような圧倒的な悪の力リスマを求めた。

そんな悪役たちには、本当に救いがなかったのだろうか？

あるいは承太郎や仗助、ジョセフのような人間であれば救うことが出来たのだろうか？

空条承太郎はその時、 “その答え” を出すことができなかった。

「SPW財団のバックがある貴方ほどの人間が、どうして過去の事件を蒸し返しているのかは知らんがね。あの少年——いや、もう壮年になつてるのかな？ともかくあの男にはあまり、関わるべきではない」

「…それは何故だ？」

恰幅の良い男は、片桐の事件を聴取した際、感じた青年の鋭く異質な圧を思い出す。

40年近くなつた刑事歴だが、その間様々な悪人に出くわして来た。中には吐き気のあるような凶悪犯罪に当たったこともある。

そんな男でさえ、当時青年だった男ほどの禍々しい威圧感を感じたことはない。もはやあれは殺気と呼ぶに等しいオーラだった。

「彼はきつと今も平穩に暮らしているだろう。だからこそ、あまり余計な真似はしてく
れるなよ、空条さん」

導火線に火をつけてはならない。

付いたら最後、爆発するのは目に見えているのだから。

39話 星にとつての「正義」、鬼にとつての「聖母」

「名前は『吉良吉影』、1966年1月30日杜王町生まれ。身長は175cm、体重は56kg、血液型はA型。

両親が年をとってから生まれた子供で父親の吉良吉廣は息子が21歳の時にガンで死亡。その一ヶ月後に母親も夫の後を追うように亡くなっている。両親の死因に不審な点はない。

家族関係は一見良好だったそうだが、息子を溺愛する母親の行動が時折暴走することがあった。

小学時代は良くも悪くも目立つ生徒だった。だが中高時代は書道部で、あまり目立たない生徒だった。

高三の夏に佐藤容疑者の誘拐事件に巻き込まれている。

大学はD学院文学部で、文科系のサークルに所属。当初は1988年卒業予定でカメラユーデパートの内定も決まっていたが、彼女のストーカーに刺されたのち入退院した。

同年8月に片桐安十郎が起こした『S一家殺人事件』に巻き込まれ、重傷を負い入院した。

その後大学を休学し、復帰。無事に卒業している。

職業は自由業の「作家」とあったが、「星ノ桜花」という名前で活動しており、KO談社お抱えの作家である。

前科はなし、結婚歴もなし。

友人は必要最低限作っていた。恋人は……今はいない。

女関係は裏で調べたが、作家になってからあまり褒められたものではないらしいな。手術経験は過去に数回。精神疾患持ちで、月に一回ほど通院している。

目立たないように生きているが、厄介ごとに巻き込まれ目立ってしまうことが多い。学生時代は賞を取ったことが何度もある。基本は「3〜5位」を取り、入賞程度に収めることもあった。

「1、2位」は頑なとして取っていないが、唯一小学生作文コンクールの一回のみ、「1位」を取っている。この場合取ってしまったが正しいのかもしれない。

幼い頃は全般的に運動音痴であったが、成長に連れて大きく改善している。特技はわからない。

地味な生徒で人一倍努力して成績は優秀の部類に入っていた。

不安定さを多少感じるが、一貫して感じるのは「普通」に生きたいという感情だ。

トラブルに行くわさないうよう、なるべく静かに、平穩に生きようとしている。

しかし事件に巻き込まれた経歴を見ても、常に不幸が傍らに潜んでいる。

随分と奇妙な人生を送っている——といったところか。他にも調べ切れていない情報があるだろうが………何をしている？」

「もしもしポリスマン？」

突如家に来た空条承太郎という海洋学者を仕方なく客間に案内し、茶を出したところまではよかった。話を聞こうと思つたらまさかの個人情報マシンガンだ。

自分の生年月日やら身長体重を聞いた時点で家電の子機に手が伸びていた。

「ストーリーカード、殺される。殺られる前に殺らねば……」と思つたが、人殺しは禁止なので慌てて思考回路を止めた。

なぜ人の情報を事細かにコイツは知ってるんだ。

作家名はまだしもわたししが保健医や片桐の事件に巻き込まれたことまで知つていとなると、警察に圧をかけられる人間ということになる。一般の海洋学者にそんなことができるのか？

——否、できるわけがない。すると、この男のバックには相当デカイ組織が絡んでいる。

下手な真似はできない。こちとら殺人衝動があるだけの、しがない一般人だぞ。子機を戻してきたわたしを、テール越しの男は奇妙なものを見る目で見てくる。

「学者つてのは口下手なイメージがあるんですが、貴方の先ほどの話を聞いた後だとイメージが変わりますね。実に不愉快だ」

「……いや、情報確認のつもりだったんだが」

「ぼくの情報？何の面白みもない情報を？そもそも何故空条さんがぼくのことを調べているんだ？ただの一般人を調べ尽くして、目的は何でしょうか？やはりストーリーかなんだなそうだな」

「落ちつけ。葉を飲んでいないのか？」

「飲んでるさ。飲んでるがその上で混乱して、この上なく不快な思いになっているんですよ」

個人情報は大体バレているが、殺人欲求や手フエチついて知られていないはずだ。幼少期に動物で少々遊んでしまったこともあるが、人目につかないよう気を付けていた。

そもそもなぜわたしの情報を調べたんだ？理由はまあ、恐らく事件関連だとは思わが。

その場合なぜ海洋学者のこの男が調べているのか。

わたしが犯人と疑われているか……。どの道、真相を知る人物として訪ねて来たのは確かだろう。

仕事に消費するはずだった糖分が、急速に思考に奪われていくこの感覚。冷静になれば、落ち着いて活路を見出すのだ。

「ハア……」

空条は茶を飲むこちらの様子を見て、自分に出された茶を見た。毒なんぞ入れるわけではないだろ。だったら爆殺してやる。

「いやあ……少々仕事の疲れもありましてね。お見苦しいところをお見せしてすみませ
ん」

「それが素の喋り方か？」

「……………ああ、なるほど。さっきの校長の式辞のような長つたるしい話は、わたしの反応を窺うための罠というわけか。趣味が悪いな」

「罠？俺は情報確認のつもり、と言ったはずだが」

「情報確認………ね。じゃあ確認が取れたんだ、満足して帰ってくれるかい？仕事が忙しいのは本当なのでね」

「いや、話はむしろここからが本題だ」

やはりストーリーカーとしてポリスメンを呼んでやろうと、子機を取ろうとした。その直

後、わたしの背後から現れた屈強な肉体を持つソレが本体のコードを手刀で切り、子機を握りつぶした。

「……!?!」

「やれやれ……面倒なことは勘弁だぜ」

あくまで見えない体だけは崩さず、壊れた子機に視線を向ける。

驚愕の表情を浮かべるこちらに、空条は観察の姿勢を崩さない。

駄目だ。恐らくわたしが能力持ちである可能性を考え、剩えその可能性を捨てていない。というか弁償してくれるよな？

「『東方仗助』という少年をあんたは知っているな」

「……ああ、知っているよ。彼が小学校低学年くらいまでは、時折遊んであげたからね」

「俺は奴の『甥』だ」

「………お宅は随分と複雑な家庭環境なんだね?」

「クソジジイのせいだな。俺は奴の尻拭いでこの町に来ている」

確かにややグリーン色の瞳や顔立ちに似通った部分がある。

「奴からあんたが見えない存在を信じていると聞いてな。まずその理由を聞きたい」

「単純な話だ。わたしには所謂『靈感』があるらしくてね。見えなくてもいいものまで見

えてしまう。だから仗助の“相棒”についても信じているんだ」
「……………そうか」

嘘は言っていない。見えなくてもいい父はいつもものように見ている。^{存在}

幽霊は信じちゃいないが、キラークイーンのようなその人間の分身たる存在は信じている。

「俺も仗助と同じように特殊な能力が使える。超能力という概念に像を与えたような存在であり、背後霊と考えてくれていい。俺たちはそれを「スタンド」と呼んでいる」

「スタンド……………それってどんな姿をしてるんだい？人によつて違うのか？」

「人型のものもいれば、無機物に姿を与えたようなものもある」

その他説明を受けたが、概ねわたしが今まで推測していた内容と同じだった。スタンドはスタンド使いにしか見えない、など。

ただスタンドはスタンドの攻撃しか受け付けず、スタンドが負傷した場合本体にもフィードバックされるといふのは初めて知った。

「それでここからが重要な話なんだが……………お前は「矢」を見たことがあるか？」

「矢？」

「普通の人間をスタンド使いにすることが出来る代物だ」

「ホオー…それを使えば、わたしもスタンド使いになれるのか」

「いや、そういう単純な話じゃない。一部の人間しかスタンド使いにはなれない。目覚めなかった人間は少し傷付いただけでも即死する」

「…ハハツ、そりゃあ…物騒な物だな」

「ああ、だから俺はその行方を探しているんだ。本当に知らないか？」

「知らないよ。父が骨董好きだったから或いはあつた可能性もあるが、亡くなった後に売りに出されてしまつてね。力にはなれないと思うよ」

「そうか…残念だ」

そう、売りに出されたのだ。出したのはわたしだが。

スペースを取るだけのゴミを残しておく意味なんぞないだろう。今、親父の泣き面が浮かんできて実に不愉快になった。

空条は緑茶の水面を見つめ、少し息を吹きかけてから飲んだ。刺さる視線がうつとおいしいのか、眉を寄せてこちらを見る。

「…何だ」

「いや…飲むんだと、思つてね」

「少し猫舌なだけだ」

「猫…舌…」

一気にどつと、疲れが出た。毒を警戒して飲むうとしなかったわけじゃあないのか。まさか「情報確認」と言ったがわたしの反応を見るためではなく、本当にただ確認しただけだったのか……？ だったらわたしの考え過ぎというわ……

「痛ッ……！」

「どうした？ 腹がイテエなら遠慮せずに行けよ」

「違う……少し胃が、痛いだけだ…………」

「……作家つてのも大変だな」

馬鹿を言うな、貴様のせいで急速に胃にダメージが入ったんだ。

この男、頭が切れそうだが思った以上にマイペースか？ というか何でその頭は帽子と髪が融合してるんだ？

医者行けよ、と呑気に言う目の前の男に猛烈な殺意を抱きつつ、襖に寄りかかりながら立ち上がった。

「すまない、忙しい中邪魔したな」

ようやく帰ってくれるらしい。二度と来るな。そしてとつとこの杜王町から出て行け。

主にわたしの平穏な人生のために。願わくばこの死神体質のわたしに関わった延長戦上で死んでくれ。

「ああ、最後に一ついいか？」

「何だ……」

振り向いた先にあつたのは、拳。

それが人間の拳ではなく奴のスタンドのものだと思ふ間もなく、わたしの身を庇うようにキラークイーンが出現し、仲良く揃って吹っ飛ばされた。

「ぐうっ……!!」

バアン、と派手な音を立てて襖をぶち破り、隣の部屋に転がった。キラークイーンがとっさに防御した腕と同じ場所が痛む。幸い折れてはいない。

「調べた時点から怪しくは思っていた。だが実際に「吉良吉影」という男と会話して感じたぜ。貴様は高い知能と能力を隠しながら、普通に暮らしている。だが恐らく隠しているのはそれだけじゃない、一瞬感じた圧は、DIOあの野郎に通ずるものがあつた」

一瞬見たただけだが、奴のスタンドの速さにキラークイーンでは勝てそうにない。

爆弾で殺す隙は——クソッ！だから殺すのはダメなんだ。

「人を人とも思つてねエ、クソみてえな眼をする奴を知っている。正しくテメーの目は

それだ。だが何故だ？血の気配がない。人を殺したことはないのか？そんな人を殺したがっている、ギラついた目で？」

「…人を殺人犯呼ばわりか、急に殴ったことも含めて非常識な人間だな、貴様は」

「いや、殺人犯じゃない、殺人鬼だ。それにスタンドを持つてゐることを黙つてたテメーに言われる筋合いはない。さつきも終始言葉巧みに人の思考を誘導しようとしていた。一発軽めで済んだことに感謝して欲しいくらいだ」

「…ッハ！あれで軽めか、そうかそうか……で、最後の一つが済んだんだ。帰つてくれるよな、勿論？わたしの態度が気に食わなかつたのなら悪かつたが、そちらも似たようなものだろ。最初の話といい、茶の件といい。化かし合ひは終わりだ」

「何言つてるんだ、最後の一つは終わつてないぜ。あの一発は気に食わないテメーへの礼だ」

「ハハ…君、昔は絶対不良だつたらう」

空条の要求としては誤魔化すような真似はするなということ、その上で改めて話を聞かせろとのことだった。

奴のバックがあの世界有数のSPW財団とも知れば、下手な真似を起こす気も失せる。なぜ一介の学者と繋がりがあるか疑問だが、男の祖父の名を聞き納得した。

「ジョセフ・ジョースター」と言えば、あのアメリカの不動産王だ。財団と繋がりがあ

のだろう。

つまり東方仗助はかの有名な不動産王の妾の子ということか…。

「ハァー……」

どの道、これ以上隠すのはわたしの不利にしかならない。だが全部素直に語ってやる気もない。

「わかった、いいだろう。とりあえず「矢」の件だが、これについては知っていると言っておこう」

「スタンドを持った経緯は何だ？」

「それについてだが、父の骨董集めの話はしただろうか？ わたしが大学生の頃、親父は母をよく旅行に連れて行ってね。その中で二人がエジプト旅行に行った時、偶然見つけて買ってきたのが「矢」だったんだ。その後土産を見ていたらうっかり怪我をして、それでコイツ…：スタンドを手に入れた」

キラークイーンを出現させると、距離を置いて物影から空条に鋭い眼光を向ける。おい、万が一の時その距離じゃわたしを守れんだろうが。

空条はこちらが「スタンド」について知らなかったことを含め、一応は信じた。

「矢の詳しい入手場所はわからないか？ 知っていれば聞いておきたい」

「詳しくは知らない。わたしは行っていないからね。知りたいならどうぞ、親父に聞いてくれ」

仏壇の遺影を指すと、空条の眉間が少し寄った。表情の読めない男だ。

「矢は今どこにある？俺の推測では、矢は片桐が持つていたと考えているが……」

「……恐ろしいな、そこまで見抜いているのか。ならば奴がわたしと杉本鈴美を恨んでいたことまで、予測済みだろう？矢はわたしが彼女のストーリーカーに刺されて入院していた時、片桐に侵入されて盗まれたよ。大方こちらの情報を得る算段だったんだろうがね」

「警察に連絡をしなかったのか？」

「目立ちたくなかったからね、していないよ」

「一応聞くが、矢を使ったのはお前ではないな？」

「わたしじゃない、それは確かだ。あんな曰く付きの物持つていたくなかったが、他の手に渡った方が恐ろしかったから、捨てるに捨てられなかった。盗まれて以降は知らない、これは本当だぞ」

「……わかった」

わたしが休学期間中、頻繁に出かけていたことを照らし合わせれば、矢を探していたことはバレる。

しかし悪用していないのは、この家で保管していた時期と照合すればわかる。ゆえに探していたことに関してはそこまで問題にならないはずだ。

仮に親父やわたしが使っていれば、我が家で保管していた時期にスタンド使いになった人間の起こした事件が発生している。

「矢については振り出しか……」

小さく呟いた男は、ふいに学ランの裏ポケットから何かを取り出す。

カチツという音が鳴った瞬間、側にあつた棚の本を取りそのおキレイな顔に投げつけた。が、奴のスタンドが取る。

「…テメエ、何しやがる」

「わたしの前で煙草を吸うんじゃない」

「……………ああ、すまない。わざとじゃないんだ」

喫煙者つてのはどうして場所や人に構わず吸うんだ。

どうやら、以前嗅いだ煙草の匂いが若い時に吸っていた銘柄と同じで懐かしさを覚え、久し振りに吸ったら癖になつたらしい。

やめていた理由を聞いたら、「娘がな」と一言。

「杜王町に来ているということは、妻子は別の場所に残しているのか。帰ってきた時に娘に嫌われても知らんぞ」

「口寂しさはどうにも紛らわせなくてな」

「だったら早くこの家からもこの町からも出て帰るといい」

「だが「矢」の搜索の方が今は重要なんだ」

「家族よりも仕事かい？ いずれ痛い目を見るよ、君」

「家族を想う時の空条の表情には幸福があった。それを捨ててまで矢を探す理由があるのか？」

なぜ自分の幸福をこの男は犠牲にできるのか。

……単純な話だ。この男も仗助のように、「正義」があるからだ。

「吉良吉影」

耳に届いたのはタバコを懐にしまった男の声。

暗闇へ進みかけていた思考が止まり、意識が奴に向く。

「これは「矢」の件についてある程度信憑性を持たた俺の憶測に過ぎない」

「何だい？」

「貴様が片桐安十郎を殺したのか？」

ゆつくりと、顔を上げた。射抜くような視線がこちらに向かう。

人を「殺人鬼」と謳いながら、しかし奴の言う（恐らく勘に基づくものだろう）血の匂い〃をわたしから感じていない。

人を殺した人間であるか否か、決めかねている。

判断材料になるスタンドの能力について聞いてこないのは、わたしが絶対に話さないと分かっているからだ。

「スタンド同士の戦闘があつたことは確實であり、能力を使えば、自分から飛び降りたように見せかけることも可能だ。だが人殺しの目をする割に、殺さない貴様に違和感を感じる。殺せないわけじゃあない、だが、殺さない。何かストッパーになるようなものがあるのか？」

「……知らないよ、奴は飛び降りたんだ、わたしは知らない」

「露骨に表情に変化が出た、か。……いや、そもそもなぜ現場に凶器のナイフがなかった？片桐の指紋が残っていたならば消す必要もなかったはずだ。ということは、貴様の指紋が……となると——」

やはり学者の性質か、空条の思考はさらに深まっていく。

もうこれ以上事件のことについては触れて欲しくない。

ただ頭の切れる男は現場の状況を再度脳内で洗っていく。そして彼女の足跡に行き着き、目を少し大きく開けた。

「空条承太郎」

お前の口が何かを言う前に、黙らせなくちやあいけなくなる。

「それ以上思考を巡らしてみろ、殺す」

ぼくの本性に行き着いたならまだ許してやる。だが彼女を穢す行為は誰であろうと許さない。

片桐安十郎は警察から逃げるため海へ身を投げた、それが真実だ。

爪が急速に伸びていく感覚。背後のキラークイーンが人の首に両腕を絡めた。

「貴様にも大事な者がいるならわかるだろう。熱の冷えたわたしでも、心の在処と存在はいるのだよ。——もう一度言う。それ以上思考を巡らせるな。事件に深入りするな。ぼくと……彼女のために」

もう、帰ってくれ。そう呟いた言葉は酷く掠れていた。

空条は帽子の鍔を片手で下げ、小さく謝罪の言葉を口にし帰っていった。
ようやく静寂と共に訪れた平穏はしかし、身を貫くトゲとして心臓に刺さった。

40話 番町爪屋敷

泉飛鳥には歳の離れた妹がいる。

妹がまだ幼かった頃に両親が他界し、二人は遠縁の老夫婦に引き取られることになった。

両親の死を受け入れられない飛鳥とは違って、妹は夫妻が親身になってくれたこともあり、次第に明るさを取り戻していった。

彼女が夫妻に心を開くには、自我が確立され過ぎていた。それに、昨日まで顔も見たことがなかったような彼らを「家族」と呼ぶには強い抵抗があった。

なぜなら飛鳥の「家族」は父と母と妹と、そして自分の四人だったから。

時が経って妹はすっかり老夫婦に懐いた。夫妻も姉に気を遣ってはいたけれど、次第に妹ばかり甘やかすようになった。

飛鳥の中で少しずつ黒いモヤモヤとした感情が生まれ、腹の底に沈澱していく。

その心はやがて夫妻への嫉妬や憎悪に変わる。

二人は何せ、彼女から妹を奪った存在だ。

飛鳥はそして、二人から妹を取り返す方法を考えた。

彼女はダメダメな、妹がいなければ私生活もままならない姉になった。

自分が元々そういう性格だったのだと思い込んで、それを「本物」として認識した。思惑どおり妹はだらしなない姉の世話を焼くようになった。「もお、お姉ちゃんたら」と小言を言いつつも、家事をやってくれる。そんな妹に、姉の執着はさらに加速した。

それから妹も大学生になり、二人で暮らすようになった。

妹は私大で奨学金を受けている。飛鳥もまた私大出身で奨学金を返済中だ。

彼女は妹が何を言おうと、絶対に二人分の奨学金を返済する気にいる。だから今が肝心なのだ。働いて金を稼がなければならぬ。

多忙な毎日であるが、夜遅くに帰って妹の「おかえりい、お姉ちゃん」と聞くたびに、飛鳥は思うのだ。

今日も京香ちゃんのために頑張ってよかったなあ、と。

ただ、そんな毎日も永遠に続くわけではない。妹として社会人になって、いつかは結婚

し家庭を設けるだろう。その中に姉の彼女が居座るのはまず難しい。

妹の幸せを思えば、巢立つて行くことも飛鳥は許容できる。

ただ、ただ——。それでも長く一緒にいたい。

そのまま身も心も溶け合うぐらい一緒になれたらいいけれど、その思考がヤバイものだど彼女自身理解している。その重い感情を妹に押しつけて壊すのは本意ではない。

そんな中、彼女は編集長に腕を買われ「星ノ桜花」の担当になった。

編集長が代わってから数えて三代目で、初代の男性は諸事情で会社を辞め、二代目の女性は鬱になり辞めている。

男性の方は面識がほとんどないので知らないが、鬱になった女性に関しては新人時代にお世話になっていた。三十路ほどの、黒い髪が綺麗な女性だった。

うわさでは夫に浮気がバレて離婚し、鬱になったらしい。

飛鳥の記憶では決して他の男にうつつを抜かさな女性だったと覚えている。

だが今ならその女性が誰に憂き身を窶やつしていたのか分かる。肉体関係があったかはわからないもの。

妹を愛し、男という生き物に目もくれなかつた彼女でさえ、経験したことのない感覚を覚えた。

瘦身の身体は「貧弱」といった感じで、文学部に一人はいる目立ちそうにない根暗な外見だ。

だが陰のある容姿と反して隠された眼鏡の奥にある紫の瞳に、ギラつくものを感じた。

そして先日セクハラされた時だ。

熱っぽいあの目が、自分に向かつている事実ゾクゾクとしたものを感じた。向こうはまあ、手しか見ていなかったのだが。

吐息一つに色気が漂っていて、飛鳥の心臓は爆発した。これが「えっち」なのか——
——!!と、ちよつと感動もした。

「セクハラ」発言が無ければ、彼女はそのまま深みに落ちてしまったに違いない。

「でも結局いつかは、ハマってしまふんだろうな……」

昼食時に突然「星ノの使用人」を名乗るしわがれた声の男から連絡があつた彼女は、新幹線とタクシーを乗り継いで指定の場所に向かつていた。

次の仕事の話はまだ少し先である。つまり用件はそういうことだろう。

仕事のために覚悟していたことだが、いざその時が来たとなると内心嵐になるものだ。

「ああ、どうしようどうしよう……！ やっぱり帰って……いや、でももうここまで来ちゃったし……」

タクシーの後部座席で一人ブツブツとつぶやく女を、運転手の男は困惑しながら見た。

指定された場所は杜王町の別荘地帯。もしかしたら星ノの別荘なのだろう。

そして飛鳥が言われた場所に着いたのは夕方ごろ。辺りは暗闇に包まれ始めている。売れっ子作家の担当をできるのはありがたいが、やはり長時間の移動が苦痛に感じざるを得ない。

恐らく今夜は自宅へ帰れないか、深夜もいいたころな帰宅時間になるだろう。

「わあ、武家屋敷」

闇が近づいてきた時間の現在、佇む厳かな雰囲気建物に彼女はたじろいだ。

てつきり新築の豪邸をイメージしていた。まああの文豪を想起させる静かな雰囲気には合っているとも思う。

とりあえずチャイムを鳴らすが、返事はない。

何度か鳴らしたところで、中から微かに「入れ」と声がした。電話で聞こえた老人の声と似ている。

「えつと、失礼します…?」

戸を開けた部屋の中は、陽が沈んできたこともあつて一層暗い。

後ろから差し込む薄い光を頼りに飛鳥が電気を点ければ、奥には誰もいなかった。

使用人の男がどこへ行ったのか疑問に思いつつ、ミシミシと音を立てながら、廊下を歩く。

「ぎゃあっ!!」

前触れもなく開いた襖。暗闇に目を凝らしペンダントライトを引っ張れば、そこが客間らしいことがわかった。中には——誰もいない。

ぞわぞわとした、言いようのない不安が彼女の内に広がる。武家屋敷に怪奇現象。

「ネタだおもしろい」の思考回路の中に、「YUREI」の五文字が何故か英語で浮かんできた。妹に誘われ休日『ゴーストバスターズ』を見ていたせいだ。ついでにその後見たのは『リング』。

「バスターしといてよ先生エ…」

玄関には見たことのある皮靴があつたので、家主がいないということはない。

そこでふと、飛鳥は感じていた別の疑問に行き当たった。

いくら完全に陽が暮れきっていないとはいえ、一切家の電気が点いていないのはおかしくなからうか？

まあ中には集中目的でスタンドライトのみで書くような作家もいる。男も眼鏡をかけていたのでそのタイプなのかもしれない。

「先生？」

隣の部屋から微かに物音がする。何か引つ掻くような音と、液体の「グチャ」という音が混じっているような。

先ほどのYUREI案件から人がいることに安堵を覚えた彼女は、躊躇なく障子を開けた。

「先生、使用人に呼ばれて来たんです……け……………」

飛鳥は暗闇の中、照らされた光に浮かび上がった人影の姿を見て固まった。

人影の正体は星ノに間違いない。中は仕事部屋なのか、座卓や書棚などがあり、古紙の独特な匂いが鼻腔を掠める。

同時に耳にはその音がより生々しく聞こえる。

男は部屋の隅で膝を抱えながら自分の爪を噛んでいた。シャツや下、畳など血の滴つ

た跡がある。

彼女は慌てて電気を点けた。今男が嘔んでいる左手は中指で、親指と人差し指は爪の部分がなくなくなり、肉が少し露わになっている。

「先生!? 大じよ……ヒツ!」

飛鳥は相手に触れようとした時、男の右手を見てしまった。

左手より痛ましい惨状のそれは、見るに耐えない。

「…れいみ?」

普段と違い隠すものがない紫目が、逆光になった暗い飛鳥の姿を捉える。

言葉に詰まった彼女に男の手が伸び、首に両腕を回して抱きついた。

まるで成人した男が、幼い子供のように見える。男が瞳の奥で見せた妖しい色とは正反対だ。

人は「押すな」「見るな」など、禁止されるほどその行為をしたくなる。

これを「カリギュラ効果」という。

男の——吉良吉影の闇の部分は、本来触れてはならないものだ。しかし普段隠されているそれが今、飛鳥の前に現れている。

この男の闇の部分に、彼女はハマろうとしている。

「先生……大丈夫ですよ」

「れいみ、れいみれいみ、れいみ」

「私は……」

泉飛鳥です、と言おうとした。

しかし吉良の焦点がうまく定まらない瞳を見て、咄嗟に口を噤む。

「れいみ」という存在が誰なのか、彼女にはわからない。しかし触れてはならないものと、本能的に感じた。

そして星ノ桜花の闇深い作品の所以を、この時垣間見た気がした。

もろく、夢い。

人はその作品を見た時、きつと心の奥深くに潜む自分自身を見つめているのだろう。

41話 キラニヤン

鳥のさえずりが聞こえる。吉良がひどく重い脳と身体に呻きながら起きようとした瞬間、手に走った激痛に一気に意識が覚醒した。

見れば両指に包帯が巻かれており、紅く滲んでいる。

彼自身は座布団を数枚敷いた上に横になっていて、隣には泉編集がいた。

「は？」

場所は仕事部屋である。側には泉が使ったと思われる救急箱の中身が散らばっていた。当の女はよだれを垂らしてぐっすり寝ている。

「何で泉くんが？昨日、わたしは……」

あの海洋学者が去ったのち、彼は仕事を再開した。

しかしまったく集中できず、途中で爪を噛み始めた。

止まらなくなった悪癖は意識がトリップしてからさらに悪化し、爪の伸びを超えて肉を噛むまでに至った。

過去に数回薬の飲み忘れや殺人衝動が重なり、この状態になるまで噛み続けたことがあった。

その後吉廣に発見され、仗助に治してもらっていた。能力については本人から聞かされたので知っている。

吉良が最初仗助に傷を見せた時は泣かせてしまった。精神の問題だと説明すると、また泣かせた。

当時はまだ鈴美が亡くなってからさほど経っていない時期だった。

指の怪我については仗助に二人だけの秘密にさせた。事情を知らない朋子は吉良の精神病と彼女を亡くした話を聞き、新しい恋を勧めたのである。

愛する人を亡くした人間にかける言葉としては、非常識な言葉かもしれない。

しかし吉良が人の「熱」がなければ生きていけない人間だと、朋子は理解していたのだ。忍ぶ恋を続ける女として、他人の感情には目敏かった。

事実そこから女と肉体関係を持ち始めた彼が指を傷物にすることはほぼなくなった。

「ハア、クソツ……涙が出るほど痛い」

吉良は起きた泉に精神疾患の話をし、医者に行くと言った。

「本当に大丈夫ですか？私も一緒にいきますよ」

「大丈夫です。心配しなくとも綺麗に治りますから」

「綺麗にはって、少し無理があるんじゃない？あの手も心配してませんが、それ以上に先生の

方が心配で……」

「とにかく大丈夫です。精神も寝て落ち着いたので。今は帰ってく——あつ、そういえば何で君がわたしの家にいるんだ……?」

聞けばこの家の使用人に電話で呼ばれて来た、とのこと。ついでに怪奇現象にもあつたらしい。

泉はそれで吉良宅に来て、錯乱状態の男を見つけた。そしていくらか落ち着いた彼を見て、救急車を呼ぼうと電話を手を取った。

しかし子機含めた本体も壊れており、彼女はいよいよ幽霊の存在を疑った。何せ使用人が全く現れないのだ。

震えていれば近くの部屋で何かが落ちる音がし、恐る恐る電気をつけて部屋の様子をうかがえば、救急箱が落ちていた。

彼女はその中身を引っ張り出して吉良の指の治療したらしい。その後は抱きつき念仏を唱えたながら眠った。

「本ツツ当に怖いし大変だったんですよ?!絶対ぜつつたい、お祓いしてくださいね!!」

「ああ、わかった。すまなかつたね……昨日のことは忘れて帰ってくれ。その代わり前の話の件は反故でいい。担当はそのまま続けてくれて構わないよ」

「えっ」

「悪いね、疲れてるんだ」

泉を呼んだ犯人は誰か。まあ、この家の幽霊と考えたら一人しかいない。

息子が大事にするのを嫌うため、救急車を呼ぶのは避けたのだろう。

泉を呼んだのは吉廣なりの理由があったのだ。その本意は息子の吉良が知るところではない。

だからといって、わざわざ外に出てまで編集に電話をかけたのはどうかと思うが。

クレイジー・ダイヤモンドを持つ仗助を呼ばなかったのは、吉良を追い込んだのが彼の「甥」の承太郎だったからだろう。仗助を承太郎と同じ括りで囲って、猜疑心を抱いたのだ。

——吉廣なりの息子へ懐く後悔の数々。

吉良が杉本一家が殺害され入院していた頃、吉廣は病院に潜み息子の様子をこっそり見守っていた。

杉本鈴美が亡くなったばかりだったのだ。「イヤな予感」がずっと吉廣の中にあつた。願わくばそれだけはやめて欲しいと思いつつ、ここまで来ても傍観するしかなかった。

妻が息子を虐待するのをついぞ止められなかったように。

そして、彼は見てしまった。

一步、屋上から冥界へ歩み出そうとした息子の姿を。

——
すまんの、すまんの吉影。

吉廣はその時、ただ謝ることしかできなかつた。

不甲斐ない父親だ。泣いて見つめることしかできない。彼は星の意志を持つ少年の声を聞くまで、涙を流し続けた。

だからこそ今の吉廣は一層、息子の幸せを願っている。もし本人が殺せぬというのなら、女を殺して手だけ持つてくることも厭わない。

吉良が望んでいないので、行動にはしないが。

そんな父親の気など知らない息子は、お祓い業者を呼ぶ気満々になっていた。

「ひとまず風呂に入るか……」

立ちあがろうとした男は視界の隅で座布団にちよこんと座る編集をとらえて、眉間に皺を寄せる。

「帰れ、と言ったはずだが？」

「……………」

「露骨に顔を真つ赤にされてもな…」

伏し目がちに小指同士を合わせるあざとい女の姿は、普通の男ならコロツと行ってしまうに違いない。

吉良は目を細め白い手を見ると、喉を上下させた。

「…うん、やっぱりよそう。君がいいと言ってくれるなら関係を築きたい。それだけの価値がある。とても…綺麗だからね」

「あ、あんまり露骨に「綺麗、綺麗」って言わないでください!!前だって言っていました…」

「事実じゃないか、君はとても美人だ。わたしは特に手の綺麗な女性が好きでね。君ももう少し気を遣ってくれたら嬉しいかな」

吉良は泉の手を握ろうとしたが、その肝心の手を怪我している。そのため顔を近づけて、手のひらが頬に触れるようにすり寄った。

「……………ツ~~~~!!?」

泉の顔は噴火寸前の活火山みたいな、とにかくもう真っ赤になった。

リップ音がすると、熟練されたもぐら叩きのエモノのように手が引つ込む。

「な、ななっ……………なななあ……………!!!」

「何の鳴き声だい、それ？」

「ななあ……………ん!!」

吉良の口元は柔らかい笑みを浮かべていた。しかし『目は口ほどに物を言う』——
——とは言うが、その瞳には空虚な空間が広がっている。

泉は思わず息を飲んだ。

「……………私は泉飛鳥ですが、それでも先生のお役に立てるよう精一杯頑張らせていただきます」

「……………わたしはどうやら昨日、余計なことを言ってしまったみたいだな」

「いえ、何も聞いてないです。だから先生はどうぞ、私を見てください」

「……………ああ、わかった」

この女が壊れるまでは、その美しい彼女を見つめていよう。

上り始めた太陽の陽が閉まったカーテンの隙間から入り、薄闇の世界を形作っていた。

???????

泉くんが帰り父親のお節介を問いただし、時刻は七時頃。

痛みを耐えながら車を運転して訪れた東方宅は、数年前の記憶と変わっていないかった。インターフォンを数度鳴らすと、不機嫌な声色を隠さずに朋子婦人が出てくる。その顔もわたしを見るなり「あら？」という表情に変わった。

連絡も寄越さず来たのは不躰だったが、包帯の巻かれた手を見せ「料理ができなくて……」と告げると、中に入れてもらえた。

「仗助エー!!私もう仕事行くけど、お客さん来てるから対応お願いね!」

「ハア!?!俺まだ髪セット中だっつーの!!」

洗面台がある奥から低めの声が聞こえてきた。

なるほどもう声変わりを……いや、最後に会ってからかなりの時が経っているのだ。仗助も成長していて当然か。

息子の髪の設定には暫く時間がかかる、と言った朋子婦人は足早に家を出た。案内されたソファでテーブルにあった新聞を読みながら20分ほど待っていると、ようや

く仗助が出——、

「すみません、遅れちまって。髪ビシツと決まってない状態で人様の前に出んの恥ずかしく……あつ、吉良さん!?へエー、髪黒に染めたんスね」

「誰だ貴様」

「…え?いや、ほらほら、仗助くんっスよ!」

「わたしの知ってる東方仗助はもつと小さかった」

誰だこの身長のデカイ男は。わたしより数センチは高いぞ。巨大化キノコなんてこの世にあつたのか?

なら何度も連れ去られるガバガバ警備のお姫様や、赤と緑の兄弟がいるってことになるが正気か?

髪については小学校では難しいため、中学になったらレーザーデビューをすると、意気揚々と語っていたのでそこまで驚かないが。

「人は成長するんですよ」

「まだ10代の君に言われてもな…」

「ひどい……。それで何用で……って思ったんスけど、多分その指の包帯の件で来たんですよね」

「ああ、少し料理で怪我をしてみましたね」

「…まあ、そういうことにしときますよ。そんじや指出してください」

包帯を解き傷口を見せると、少年の顔が微かに歪んだ。

治してもらった後、ついでに持ってきた紙袋も渡した。

「美味しいもんスカ!？」と瞳を輝かせる育ち盛りの君には悪いが、中身は昨日貴様の甥に壊された物である。

「俺は修理屋じゃないんですけど…」

「おっと、こんなところにわたしの財布が」

「この仗助さんに任せてくださいよオー！」

現金なヤツだ。諭吉を渡すと拜んでから受け取る。彼が幼い時は婦人から「最高でも夏目」と言われていたが、もう高校生だ。家庭事情も考えて、このくらいはいいだろう。「じゃあわたしは失礼するよ。朝から悪かったね」

「そうっスか？朝飯がまだなら……言っても急に來たし、無理か」

「家に帰ってから食べるよ。学生の本分は勉強だ、モテるからって現を抜かしすぎないようにね」

「俺は結構純情なんで、大丈夫です」

「ツフ、そうかい」

婦人も性格はキツイが美人の部類である。それだけでなくあの海洋学者の顔立ちや

体つきを察するに、『ジョースター』の家系も体型や顔に恵まれているのだろう。

しかしあの男とは二度と会いたくないものだ。

「…えっと、やつばなんかあったんすか？」

靴を履くわたしの後ろで、頬をかきながら仗助が尋ねる。

「承太郎さんが吉良さんのこと聞いてきたんで、なんかあるのかな？とは思ってたんですけど…」

「何もなかった——とは言えないが、この指はあの男がやったものじゃない。電話は奴の仕業だが」

「そ、そうすか…。あと、それでですね」

「何だい？」

「吉良さんも…スタンド使い、なんですか？」

「困惑の混じった声色だった。空条からわたしのことを聞かれた際、勘づいたのだろう。」

「その、俺が病院で知り合ってたって知ったら、いくつか聞かれたんですよ。「スタンド」は見えていたかとか、どういう人間だったか、とか。俺の中じゃ近所の兄ちゃんみたいなの

存在で、よく昔は遊んだ——つて、答えましたけど」

「…そうかい」

「承太郎さん妙にピリついてて、気にはなつてたけどよオ…お袋が帰ってきてきてそれどころじゃなくなつたんスよね。吉良さんの所に行ったほいし、止めとけばよかつたんですけど…うーん」

「きつと仕事が忙しかつたんだろう、何せ学者だからね」

「そうですかね？…つと、それで、答えの方はもらえますか？」

「ああ、そうだったね」

やはりごまかしは利かないか。

——さて、どう答えるべきか。

空条が言っていた「矢」の件を踏まえると、この町で何か異変が起きていることは間違いない。

その事件の起因たる矢がわたしの父が持っていた物なのか。

それとも親父がかつて出会つた「エンヤ」が語っていた複数のうちの一本が、この杜王町に辿り着いたのか。

詳しくは預かり知らぬ所だが、このわたしがその渦中に巻き込まれているのはわかる。

「それについては「YES」と言っておこう。詳細はあの海洋学者に聞くといい。ただ、悪いことはしていないよ」

『ニャー』

わたしの背後に現れたキラークイーンが、人の両肩に手を置き仗助を見つめる。

対し仗助は虚をつかれたように目を丸くしていた。

「ニャーって、猫じゃないんすから…」

「コイツは結構どころの話じゃない猫だよ」

庭にいたスズメを手で捕まえてきた時は鳥肌が立ったものだ。ゴク——いや、この話はよしておこう。

『ニャッ』

キラークイーンは少年の学ランに頬を擦りつけ（やめろ）、彼の揺れる頭に視線を止めた。

おい待て、何か嫌な予感しかしな——『バシッ!!』

ポマードできつちり決められたリーゼントが崩れた。仗助の浮かべていた苦笑いも

崩れ、わたしの表情も崩れた。

感じる圧はあの空条承太郎の比ではない。幻覚か、少年の後ろで燃え盛る炎が見え、ゆらりと現れたのは彼のスタンド、クレイジー・ダイヤモンド。

「あんた今、俺のこの頭のこと殴ったよなあ…？」

「落ち着け仗助、殴ったのはわたしじゃなくてわたしのスタンドだ」

「このヘアースタイルを、サザエさんみてエーだと思っただろ……」

「思っでない、話を聞……」

「覚悟はできてんだろうなア——ツ!!？」

その後は地獄を見た、としか言いようがない。

あの帽子と髪を融合召喚した男を怒らせるのも厄介だと思っただが、踏んではならない地雷はもつと近くにあった。

正気に戻った奴に治してもらった方がいいが、わたしの平穏を邪魔するランキング上位に入ったのは間違いない。

「マジすんません!!俺髪のこと言われるとキレちまうんすよ……」

「……………」

「えっと、あの…吉良さん？」

「…眼鏡は直さなくていい」

この体験を教訓にするための物としようじゃあないか。別に一方的にランチ同然を受けて、シヨックを受けているわけじゃない。

痛みは相応に体験したことがあるから慣れてるさ。ただ昨日の今日で、随分と泣きつ面に蜂だと思っただけである。

「メチャクチャ怒ってますよね…？」

「ハハッ、怒ってないさ。わたしはいい大人だからね。子供の行いには寛容でなければいけない。そもそもわたしの意思ではないとはいえ、こちらのスタンドが原因で起きたことだからね。ただ君に相応の不運が訪れることを切実に願って毎夜寝るよ」

「そうっすか…っつて、やっぱり怒ってますよね？」

「怒ってない」

ただ、殺してやりたいとは思った。

42話 必勝

「太陽拳」！受けてみよッ！

杜王町の霊園は、以前仕事の打ち合わせで使ったイタリア料理店のすぐ近くにある。毎年両親の亡くなった時期には墓に訪れるようにしている。

だが今年は仕事が重なり六月になってしまった。

それから掃除や花を供えてちようど一時間ほど。

喉が渇き飲み物を持つてくるべきだったと後悔しつつ、まとめたゴミを袋に入れて立ち上がった。

「……ん？」

少し歩いたところで、動物の呻き声のような音が聞こえた。

墓の供えものを荒らしに来た類か。視線をさまよわせると墓石の奥に緑色の物体が見えた。

隙間と隙間に隠れてよく見えなかったため、表側に移動する。そこにいたのは随分と奇妙な生き物である。

肌には無数のイボがあり、時折「おおお」と気味の悪い声を上げる。

身体は肥満体型でサイズは子供ほどで、上下服を着ていた。

人間……? いや、アレが人間とは思えんな…。

「兄貴…」

怪物の隣にはぶどうヶ丘高の制服（しかし改造学ランである）を着た少年が、墓石の前で手を合わせていた。

今時は私服に学ランを着るのが流行っているのだろうか？

一瞬学生が今の時間帯にいることに驚いたが、そういえば今日は休日だった。

サイドを刈り上げ、上にパンチパーマを当てたあの髪型は独特だ。いわゆるヤンキー座りであることを察するまでもなく不良である。

奇妙な一人と一匹の光景に眉を寄せていれば、少年と目が合った。

三白眼の瞳は格好と相まって妙なスゴ味を感じさせる。

「アア、何見てんだテメエーよオ〜?」

「いや、少しソレに驚いてね」

「…ああ、これはその…ちよつとよ」

言い淀んだ強面の少年。墓石に彫られた『形兆』の上を見るに、この少年の苗字は「虹村」。

兄の没年月日は今から約一ヶ月ほど前。随分若くして亡くなっている。他の名前はないうため、先祖代々の墓ではない。

「一人でお兄さんの墓参りかい？ エライね」

「別に一人じゃねえよ。オヤジと来てっからな」

「親父？ ソレ……その人がかい？」

「…あ、えつと……病気なんすよ、ビョーキ！ 「フジサンの病」 ってやつだよ」

「それを言うなら「不治の病」だね」

「おお！ それだそれ!!」

コイツ…バカか？ いや、決めつけるのはよくないと思うがバカだな。

それにしても不治の病か。全身にイボができた上に緑色の肌になる病なんて聞いたことがない。

「1987年の再来」^{ヤイ}を迎えている今の杜王町を考えると、スタンド使いの作業なのかもしれない。

「アンタも墓参りか？」

「ああ、両親の墓参りに来たんだ。中々仕事が忙しくて来れていなくてね」

「随分青白い顔してっけど大丈夫かよ？ そこら辺でくたばるんじゃないぞ」

「大丈夫だよ。そこまで貧弱じゃない」

最近ジョギングを始めたから前よりは体力がついたはずだ。開始10分で虫の息になっっているが大丈夫だ、絶対。

「父親が病気でお兄さんも亡くなっているなんて、大変だろうね」

「まあな。お袋もオレが小さい時に病気で死んでるし、今はオヤジと二人暮らしだ。でもダチもいるし、結構楽しいぜ」

「そうかい」

浮かべる笑顔に嘘偽りは無い。しかし側から見れば辛い人生に見えるだろう。

にも関わらず、前向きに生きているのはこの少年の性格ゆえか。それとも悩むだけの脳がないのか。

どちらにせよ、わたしが持たない思考である。だから、少し気になった。

「君はどうして辛い現状でも、普通に生きられるんだ？」

わたしの口から出た言葉は、自分でも予想外なほど抑揚がなかった。

失って尚生きられるのは、父親コがいるからか？それとも彼の言う友人がいるからか？
「何でって、そりゃあ…生きるのは当たり前のことだからだろ？」

「当たり前なのかい、生きることって？」

「…？アンタの言ってることがよくわからねえけど、今生きてんだから、生きてるのは当たり前のことなんじゃねえのオ？」

「……？」

生きるのが当たり前って、つまり……どういうことだ？この世には死にたい奴なんて

ごまんという。何なら今この時、自ら命を手放す奴もいる。

「じゃあ死にたい人間は、どうすればいいと思う？」

「エツ、この世に死にてえ人間なんていんのかよ？」

「いるよ、例えば異形になった君の父親も、内心死にたがっているかもしれないじゃないか」

当の異形はというと、いつの間にか墓石に縋り付いて、まるで人のようにわんわんと泣いている。

「……………」

少年は少し考え込むようにして、泣いている異形に視線を送った。

「…なあ、オヤジはよオ、死にてエか？ 矢を使って殺そうとした兄貴が死んじまったけど

……………オヤジはどう思ってた？」

「おお、おおお」

「何言ってるかわかんねえよ、親父イ」

言葉は通じているのか、動きを止めた異形は涙と鼻水で汚れた面を晒しながら、少年を見つめる。

だが、ちよつと待て。今聞き逃してはならないことがあった。

この少年は今「矢」と言ったのか？ 兄がそれを使い父親を殺そうとした、と。

「矢を使ってお父さんを殺そうとしたって、どういふことだい?」

「……あ、やべッ!ほら…その、「不^レ治」じゃなくて、「不^レ死」だった…みてえな?」

「つまりお父さんは『死なない化け物』ってことかい?」

「えつとよオ……だアーツ!面倒クセエ!!つまりはなあ」

曰く彼——虹村億泰の兄である虹村形兆は、矢を使い父親を殺すためのスタンド使いを探していた。

父親の異形はD I O (吸血鬼?)という男に起因するものらしい。

その男の死後、父親に植え付けられていたD I Oの肉の芽が暴走した。

吸血鬼の不死性を受け継いだ父親は、死なぬ化け物へと変貌したようだ。

恐らくこの件で岸辺露伴や広瀬康一がスタンド使いになったと思われる。億泰少年と兄の形兆も特別な力——スタンド能力のことだろう——があるらしい。兄の場合はあつた、が正しいが。

またその一件で、虹村形兆は命を落としている。父親を殺すため動いていたというのは先に死んでしまうとは、中々滑稽だ。

「その矢は、誰かにもらったものなのか?」

「ああ、オヤジが…えつとオレが四つぐらいになる頃だから……十年ぐれえ前にそのD

IOの手下の奴からもらったみてえなんだ」

「…そうか」

親父が買ってきたものとは別の矢だ。行方知れずの矢の手がかりが掴めるかと思つたが、期待が外れた。

まああの海洋学者が探しているのだ。身を粉にしてその内見つけてくれるだろう。

「君のお兄さんはソレを殺したかつたようだが、君はどうなんだ？殺したいのか？」

「……オレは、殺したくなかつたぜ。でも兄貴の気持ちもスゲエわかつてたんだ」

妻が亡くなり、社会に負け、暴力ばかりだった父親。

そんな男は「DIO」という悪の手下になることで、莫大な金を手に入れた。信用ならない部下に植えられる「肉の芽」と共に。

不運と強欲の果てに、男は畜生同然の醜い化け物へと変わり果てた。

暴力を振るつた挙句に、異形になった父を世話しながら暮らしたであろう虹村兄弟の人生は、壮絶なものだつただろう。

そして虹村形兆は長い年月をかけて真相を知り、矢を利用して父を殺すべく行動した。

憎かつたに違いない、異形になる前に、「自分が殺してやる」と思ったこともあつたはずだ。

だかもっとも深くにある真理は、哀れみに違いない。

醜い姿の父親に同情し、絶望し、人間のクズだが家族としての情を持った上で、殺すことを望んだ。

泣ける話じゃないか。小説にしたら面白そうである。不躰ゆえ、書くことはないが。「オレのワガママってのはわかっているけどよ、オヤジに生きてて欲しいぜ。きつとオレが死んでもずっと生きることになっちまうけど、オヤジまで死んだら…オレは本当に一人ぼっちだからよ」

「——例えばもしもの話だ、君の父親を殺せる人間が現れたとしたらどうする?」
「あら…われたら?」

吸血鬼の治癒能力を受け継ぐ異形の回復力がどれほどのものかはわからない。流石に切ったり燃やしたりでは死なないだろう。兄が相応に試したはずだ。

殺すならばきつと念には念を入れて、完璧に殺すべきだ。それこそ細胞一つ残らないよう消し炭にする。

わたしの能力ならば確実にこの世から消せるだろう。

スタンドの力ということもあり、キラークイーンは完全に物体を消すことができる。無論調整して一部を残すことも可能だ。

「オレは「治す」ためのスタンド使いを探してるけどよオ…。そうだよな、現れない可能

性だつて、十分にあんだよなあ……」

「治す……のは難しいんじゃないか？どんな物事だつて「壊す」よりも「直す」方が遥かに
労力があるんだ。仮に目当ての能力者が見つからないまま君が死んだら、ソイツは永久
に孤独を味わうだろうね」

「……………」

億泰少年はじつと、父親の瞳を見つめた。異形は無言でその視線を受け止めている。

「アンタすげえ聞いてくるけどよ、もしかしてアテがあんのか？」

「言つておいて悪いが、当てはないよ。ただ君や父親の気持ちを考えてね、辛いんだ。
協力してあげたいと思つてはいけないことかい？」

「いや、ありがてえけどよ……何か……何だろうな。すげえゾワゾワするっ言ーか、言葉に
できねえんだけど」

「そうかな？墓場だし幽霊が見てるんじゃないのかい？」

「ちよ、テメツ、そういうまやかしはやめろよなア!!」

「……………」

「冷やかし」ね

今時の子供はそんなに幽霊が怖いのか？というか信じてるのか？

この手で幼き頃の仗助をからかったが、相当ビビっていたのを覚えている。

「オヤジを殺す、か……」

億泰少年が墓を見つめた時、ソレがグイッと、制服の裾を引つ張った。

「おおお、おお」

言葉にならない声を上げる異形。少年はその声を聞き、瞳を丸くする。

三白眼の目尻には次第に涙が溜まり、顔も歪んでいった。

「そうだよ…そうだよなあ! オレの意思で決めちまうことじゃねえんだよなあ…ッ」

「おおお」

「オレって本当バカだよなあ、兄貴イ…」

億泰少年は墓石に額を擦り付け、そのまま声を噛み殺して泣く。そして異形もまた彼のジャケツットの裾を掴んで、さめざめと泣く。

「…わからないな」

少年の悲惨な顔が「?」を浮かべる。

失言してしまったことに後悔はあるが、やはり疑問を残しては今日の眠りが悪くなる。

「君にとつてはソレが父親で、人には「幸福」と思えない人生の上で、普通に生きている。

生きることが出来る。何故だ？それに殺した方が君のためにも、お兄さんのためにも、父親のためにもなるだろう？」

ソレはもう人ではない。人の形をしていないのだから。だからわたしが処分することもできる。

だがもしこの少年が仗助やあの海洋学者の知り合いだった場合、話が面倒なことになる。

——いや、スタンド使いが引かれ合うものだと考えると、知り合いでなければ逆におかしいくらいか。

全く、らしくないな。共感しているわけじゃないが、同情くらいはしている。わたしも両親、特に母親に恵まれなかった人生だ。

「アンタ……いや、テメエが何を言ってるかやっぱりわからねえし、そもそも理解することが難しいってのが、このオレでもわかってきたけどよオ。見た目はアレでも、コイツはオレの大事な父親だ」

「……気分を害す気はなかったんだが、悪くさせてしまったのなら謝るよ」

「別に構わねエよ。ここで謝られるのも何かちげえ気がするし。ただ帰るアンタに一つ

言っておくぜ」

「何だい、億泰くん」

異形の手を握って、少年は射抜くような視線を向ける。

「人の命はテメエが思ってる以上に、重いものだぜ」

その目は、わたしの苦手な瞳だった。

43話 (例の世にも奇妙なBGM)

「杜王町七不思議？」

自宅で原稿をしていた吉良の元へ訪れたのは、担当の泉飛鳥。

以前の爪噛み事件以降、打ち合わせなどは男の自宅で行うようになった。

相変わらず吉良は他人が家に入ることに拒否反応を抱いている。しかし段々と泉のことは慣れてきた。

彼女の体温に何度か触れたことも警戒心が緩まる一つの理由となっていることに、彼本人は気づいていない。

「そうです。夏に刊行される雑誌で、「ホラー」をテーマにK O談社の作家陣が集まって書くお話はしたじゃないですか」

「ぼくは一言も受けると言っただけはなかつたはずだが？」

「まあまあ、そこは先生お得意の恋愛ものを取り入れつつ書いていただければいいんですよ」

「君はどうして勝手に話を進めていくんだ？ わたしが最近忙しいのも君のせいだぞ……」

？」

歴代編集は星ノが売れっ子作家ということもあり、いつも仰々しい態度で意見してくることもなかった。

吉良としては編集は仕事の間での関係で、作家と対等なものと考えている。

「しかし君の場合はもう少し距離感をだね…」

「はい？」

「…いや、何でもない。言っても無駄そうだな。まあ引き受けてあげるよ。それでその七不思議ってやつ続きをしてくれ」

「わかりました」

泉曰く、小中学生の間で最近『杜王町七不思議』の話が話題になっていっているらしい。と、いつても全てがこの杜王町で起こっているのではなく、一部例外はあるようだ。

そもそも現在世間は「ノストラダムスの大予言」の話で持ちきりである。

内容は1999年7月(約一ヶ月後)に、人類が滅ぶ——というものだ。吉良からしてみれば馬鹿馬鹿しい、の一言で終わる。

その大予言が大きく取り上げられるようになったのが1990年代後半。その前の

1990年代初頭には人面犬やミステリーサークルが話題になっていた。

この期間が一般に「第二次オカルトブーム」と言われ、その前の「第一次オカルトブーム」は1970年代に起こっている。

代表的なものはネットシーやツチノコ、コックリさんや口裂け女だ。

幼き頃の吉良は小学生時代、休み時間に友人と一緒にやろうと誘われ、雰囲気を壊さぬよう仕方なくコックリさんに参加した。

結果、彼以外の教室にいた生徒全員が泡を吹き倒れる事件が起こっている。それでも彼は幽霊の存在を信じない。

「あらかじめいくつかは私の目で確かめて来たものや理由付けできるものなので、そこについては先に私の解釈も踏まえて説明しますね。資料もあるのでどうぞ」

「あ、ああ……いただくよ」

準備が良すぎる。仮に吉良が話を断っていたらどうする気だったのだろうか。

まあ、彼は押されれば押されるほどこういつた場面で弱い一面がある。泉もそれを織り込み済みなのかもしれない。

一つ目は、杜王町定禅寺通りバス停下車3番バスの徒歩一分の場所にある、通称『人

面岩』。

「文字通り人の顔に見える大きな岩です。昔からあの場所にあるそうで、待ち合わせ場所にもよく使われています。奇妙な声が岩から聞こえるってもっぱらの噂ですけど、本当にただの岩でした。成分分析してもらったので間違いないですよ」

「ガチすぎないか」

「仕事にはいつも真摯ですから、私。蹴つても殴つても呻き声一つ上げませんでしたし。その大きさと不気味な顔の形が影響して、七不思議の一つに入ったんでしよう」

美人な女が懸命に殴る蹴るを行う光景はさぞかし珍妙であろう。吉良は一人分、泉から距離を置いた。

二つ目は、『人呼び海岸』。

この海岸は杜王町には存在しない「例外」の中に入る場所である。杜王町の別荘近くにある岬から北に暫く行ったところにあり、現場は高さ数十メートルの切り立った崖になっている。

ここに行つた人間は海に誘われるようにし、その身を投げると言われている。

「崖に行くまでに立ち入り禁止の看板がいくつもあつて、途中高い柵と有刺鉄線が行手を阻みました。それでも隅の柵の下が人為的に壊された跡があり、そこから入って行き

ました。落ちたら死にますね、あの高さじゃ。崖の側に立って眼下にある海を眺めていると、不思議ともう一步足を踏み出したくなる魅惑……みたいなものがありました」

「……そこはかつて女性が飛び降りた場所だね」

「あれ、ご存知だったんですか？」

「作品の題材にしたことがあるだけだよ」

「ああ、なるほど。そうですね、今から15年近く前に誘拐事件に関わった女性が飛び降りた場所で、それ以来多くの人間が後を続ぐように亡くなっています。所謂あそこは「自殺スポット」というわけですよ」

あの崖では他にも「S一家殺人事件」に関わる出来事が起こっている。

そういつたある種の忌み地という場所として、杜王町の人々は子供たちに近寄らないよう伝えた。そこから発展した結果、子供たちの間で七不思議の一つとして数えられることになったのだろう——というのが泉の見解だった。

三つ目は『呪いの洋館』。北西部の山奥に入った場所にひっそりと存在している。

向かうには舗装もされていない山道を通ることになるが、今はその道さえ草が生い茂り、車で通るのは困難となっている。

「まさか君、歩いて行ったんじゃないだろうね」

「行きましたけど何か？」

泉がかなりの時間をかけて調べた洋館の資料。その外観や内装は吉良が一度見たことのあるものだった。

かつて保健医が彼と鈴美を誘拐した時に使った場所だ。

写真で見た中は床が抜け落ちており、長年主人が不在の末、蜘蛛の巣やホコリが累積していた。潔癖な吉良は思わず顔を顰める。

泉はそこで何かしら事件があつたことまでは突き止めていた。

詳細はわからずとも「事件があつた」という事実と正しく幽霊が出そうな見た目から、七不思議の一つにランクインしたのだと考えられた。

「以上の三つは何かしらの理由がある七不思議です」

「君さ、幽霊が苦手なんだと騒いでいたクセに、よく調査しに行けたね」

「仕事なら別ですよ先生。これが私情で「行こうぜ！」ってなったら私が泡吹きますよ」
「バブルこうせんか。みずタイプだったんだね泉くんは」

「そうそう、「なみのり」と「しおふき」も覚えて——って、さりげないセクハラやめてくれませんか？」

「それで残りの四つは何だい？」

「はい出ました無視。……えっと、残りはですね」

四つ目は『ぶどうヶ丘小の悪魔』。

それを聞いた瞬間吉良が思いきり咽せた。泉が訝しげに見つめる中、話を続けるよう促す。

「これはぶどうヶ丘小学校で随分前から語り継がれてる独自の話みたいですね。ぶどうヶ丘小の土地に古くから住む悪魔が、プールで泳いでいる子供をあの世に連れて行くとうとするとか、飼育している動物を呪い殺すとか、運動会の日には現れるとか」

「……………やめてくれ」

「え？」

「何でもない……………」

現在進行形で黒歴史をエグられている吉良。穴があつたら入って、外にいる残りの奴らを皆殺しにしてやりたい。

四つ目の七不思議はそれこそ子供たちが集う場所だ。

どこの男が過去にやらかした話がリレー形式で伝わっていき、今の形になったのだろう。

これについて何か手がかりはないか泉は小学校に連絡を入れたが、「子供の教育として不適切な内容」として取り合ってもらえなかった。

OBやOGを探ろうにも当てがなく、道ゆく人間に手当たり次第に聞いてやろうかとも思った。

しかし『人面岩』の件で一回不審者として警察にお世話になったことと、他の七不思議の調査もあつたため、途中で断念した。

ちなみにこの女は「コイツ、キメてんじやねえか？」ボブは訝しんだ——な警察に、薬物と飲酒検査まで受けている。

シラフと知つた時の警察の人怖精神は計り知れなかつたに違いない。

器物破損でお縄の可能性もあつたが、今回は見逃されることになつた。つまり次はない。

「落ち込んでる君に、悪魔はいるとだけ言っておくよ」

「えっ、本当ですか!?!先生は見たことあるんですか!?!」

「それ以上深掘りすると殺されるぞ。はい、次」

「えく…まあいいですけど」

五つ目は『見えないナニカ』。

これは別荘地帯の北東側にある森のすぐ側の道路沿いで確認されている。発生した時期は春ごろから。

どうやらその道を通った者が、見えないナニカに触れてしまうと怪我を負う——
というものらしい。

その時に毎回森の奥から、反響した不気味な——しかし楽しげ声が聞こえるそうだ。「大怪我……とまではいかずとも、体験者は身体の一部に浅くない傷を負っていました。みなそろって「何かが身体に触れた瞬間、激しい痛みが襲った」と言っています。時間帯は陽が出ているうちに、夜に被害があつたことはありません」

「警察は取り合っていないのかい？」

「何せ被害もそこまで多いわけじゃないですし、傷も自転車で勢いよく転んだくらいのもので。警察も真面目に取り合っていないみたいです」

「フン、所詮は公僕の犬さ」

とは言いつつ、吉良の中で「は見えない」という点と、「春頃から起きている」という点に、妙な引つ掛かりを抱く。

つい先日あつた虹村億泰は、虹村形兆が「矢」でスタンド使いを増やしていたと聞いた。彼らが杜王町に来たのがちょうど春からだ。

そのためこの一件はスタンド使い犯行の可能性が高いと、吉良は判断した。

六つ目は『影犬』。

これについては特に情報がなく、十年以上前からその存在が確認されている。

噂では影の中から犬が現れ、消えて行った———というもの。

『影』の中に潜む「犬」だから、『影犬』と名付けられた。

「この犬がどういった存在であるかは不明ですが、「出会うと願いが叶う」とか、逆に「出会うと不幸が起こる」とか、噂の内容も不確かなものが多いです。これもぶどうヶ丘小の悪魔同様……いや、先生は何かご存知だったようなので違いますね。この話は調べようのない七不思議の一つになります」

そして、最後の七つ目は『決して後ろを振り返ってはいけない小道』。

杜王町勾当台2のコンビニ「オーソン」の隣にあるらしい。

もしこの道に迷い込んでしまったら最後、後ろを振り返ってはならないとされる。振り返った場合二度とこの世には戻れなくなる。

「1980年代から噂が広まったみたいですね。体験者が見つからなかったので詳細はわかりませんが、最近まではその噂さえ聞かなくなっていたみたいですよ。今更広まったのもオカルトブームのおかげといえますか……恐らく『人呼び海岸』の件と同じで、親伝いで噂を知った子供たちが広めたんでしょう」

「……………」

「一応私も行ってみましたけど、何もなかったですし……って、先生？」

「………何だ」

「大丈夫ですか？急に怖い顔して……」

「何でもない」

「……？」

小道の場所は、杉本一家が住んでいた場所の近くだ。

つい、ついだ。吉良は過去の事件を思い出してしまった。どこもかしこも血濡れたあの日の記憶を。

だからその激情を鎮めるように、深く息を吐く。

「………それで、泉くんは七不思議を持って来たわけだが、これを題材に書けつてことか？」

「いえ、参考に持って来ただけですよ。気になるものがあるならさらに深掘りして来ますし」

「そうか……まあ、わたしも『見えないナニカ』の件は気になったかな」

「そうですか！では早速行って来ま……」

「待て待て、君が関わっていい案件じゃない」

スタンド使いの仕業ならば、万が一の時の泉ではなす術がない。

仮に彼女がソイツに「自分の正体を探っている存在」だと認識されたら、泉と関わりのある吉良にまで面倒事が舞い込んでくるかもしれない。そんなものお断りだった。

「行かないという選択肢はないのか」

「先生が興味があると言った以上行きますよ。仕事ですから」

「…お願いだ、行かないでくれ泉くん」

彼女のジャケットの裾を引っ張り吉良は声色を甘いものにまで変えたが、泉の表情は変わらない。むしろ薪が増やされてより燃えている。クレイジーガールか？

「泉、行っきまーす!!」

その言葉が「逝^いっきまーす!!」にしか聞こえない吉良は渋々、重い腰を上げた。

きつと面倒ごとになる。それをわかった上で行動に移したのは、段々と彼の心が泉に惹かれ始めているからだろうか。それとも――、

「じゃあ先生、行きましょう!」

彼女の咲きほこるような笑顔はあまりにも、彼の想い人に似ていた。

44話 ソーニャンス

彼が珍妙な姿になってから、もう数ヶ月が経とうとしている。

植物に大きな目が付いたような奇怪な外見は猫^{仲間}たちに恐れられ、かといって植物と会話をすることもできない。奴らに知性はないのだ。

果たして自分は何者なのか、彼は思考を巡らす。

『ニヤニヤツ』

紹介が遅れた。ここは千円札にもなっている偉大な夏目漱石（間違えても野口さんではない）の処女作をなぞらえて、「吾輩は猫でもなく植物でもない」——と言いたるところだが、猫の時よりも珍妙な姿になり「自我」が強まった彼は、自身を「オレ」と称している。

ゆえにここは、「オレは猫でもなく植物でもない」と表現しておこう。

一応飼猫時代の「タマ」という名前もあるが、捨てられてから数年経ち、彼はその名前をすっかり忘れてしまっている。

元はブリティッシュ・ブルー種の猫であり、「オレ」から察して、オスである。

捨て猫時代の彼は、モットー「本能と欲望のなすがままに生きる」を掲げ逞しく生き抜いた。

本能と欲望に忠実に生きていた彼はしかし、そのモットーが仇となり命を落とす。

猫とは季節によつて発情期を迎える季節繁殖動物であり、日本では1〜8月が該当する。

特に春の2〜4月、夏の6〜8月がピークを迎え、年に数回発情期を迎える。

春の季語にもされている「猫の恋」は、過激で中々に熱いものだ。

して、彼は猫の春真っ盛りな中、メス猫を追いかけて回していたところを車に轢かれ、道路の隅にボロ雑巾のように転がった。

運が良いのか悪いのか、怪我は即死するものではなかった。

じわじわと命の灯火が削られる中で彼は願った。生きたい、と。

そして、「かわいいメス猫^{あの子}追っかけて、孕ませるのだ！」——と。

だが願ひ叶わず、彼の意識は暗闇へと落ちていった。

ただ、彼の中には虹村形兆に射られた矢のトリガーが残っていた。

メス猫を追っかけていた時に偶然被弾したのである。

そのあと射抜かれた彼はすぐに立ち上がり逃げ出したので、形兆に捕まることはなかった。

『ニヤ…』

猫時代より知性を持った彼からしてみれば、メス猫を追っかけて轢かれた件は黒歴史である。

自分を轢いた奴をスタンドで殺してやりたいとも思うが、それもできなかった。

何せ彼がいるのは森の奥。

彼の体は下が根っこで地面に固定されている。できることと言ったら過ぎ去る雲を眺めたり、飛び回る鳥を殺して食べるくらいしかない。とつても暇なのだ。

彼は肉も食えるが、同時に光合成も行っている。夜になると夜行性のサガを忘れて眠ることになる。

そんな彼が編み出したのは空気を操れる能力を使い、森の先にある道路に向かって小さな玉を発射することだ。

空気のできたソレは視認できず、ゆらゆらと宙を漂う。

道路の先で二足歩行をする動物が歩いているのを彼は知っている。

空気弾が当たった時にソイツらの「うひい！」だとか、「キヤアツ!!」だとか、そんなマヌケな声を聞いてやるのがうれしいのだ。

だが、遊びもすぐに飽きが来る。

『ニャアン…』

彼は猫時代のぼんやりとした記憶を辿る。

メス猫を追いかけたり、ボスの座を争ったり、メス猫を追いかけたり——動けぬ身の今よりもよっぽど楽しい日々であった。

『ニャア』

そして彼は、自身の最期の記憶を手繰り寄せた。

何人もの二足歩行する奴らが、道路脇で転がっていた自分を見て悲鳴を上げている記憶。薄目で見た奴らに強い「怒り」と「殺意」を抱いたのを覚えている。

その中にいた一人の奴が彼に近づき、その肢体を抱き上げた。

ソイツは彼を抱いたまま森の奥に入り、持っていた銀色の——末端がくっ付きそこから先端が二つに伸びたものを器用に使い、穴を掘り始めた。

彼はその間地面の冷たい温度に晒されながら、ソイツの隣にいるピンクの奴を見ていた。

ソイツはしきりに『ニヤーニヤー』鳴いて、彼に語りかけていた。ソイツはおしやべり好きらしかった。

そして彼の意識が遠くへ行くこうとした時、また抱き上げられた。冷たい温度だった。しかし彼には不思議とその温度が心地よかった。

霞んだ思考の中で思い出したのは、甘ったるい香りのする奴が自分を抱き上げ、「タマちゃん」と呼んでいた記憶。

彼は、ひどく掠れた声で鳴いた。

それは、泣いた、でもあった。

ソイツは無表情で彼を見ていた。ピンクの奴もソイツの後ろでじつと見ていた。

手が伸びてくる。その手は彼の額を通り耳の形を崩して、背骨あたりまで向かった。撫でられたのだ。

——おやすみ。

その言葉の意味を彼が理解することはなかった。

閉じていく瞼の先で見えた瞳は、彼の死を前にしても全く動かないソイツの表情。もとい感情。

まあ、彼も殺してきた獲物たちに抱く感情などないので、別にソイツが哀れんでなくてもよかった。

ただ、その冷たい温度と撫でられた事実が、彼の猫生の最期の中で言いようのない感情として刻まれた。

それはきつと、幸せ、というものだったのだろう。

対しソイツ——その時町内会のゴミ拾いに参加する羽目になっていた吉良は、泉と共に『見えないナニカ』が確認されていた場所へ車で訪れていた。

徒歩で30分もかからない場所にあるそこは、道路に沿うように陰鬱とした森が広がっている。

車がよく通ることもあり、森から飛び出た動物が轢かれることが多い。

そこで吉良はふと、以前このコースを通りゴミ拾いをした記憶を思い出した。

時期はちょうど春くらいだったか。

別荘地帯に「町内会」があるというのも、中々面白い話である。参加する必要はなかつ

だが、近所付き合いは大切だ。

それこそ近所にいる独身のナイスミドル（この場合30代から50代半ばを差す）というのには、奥様方にとって格好の的だった。中には自身の娘と——と、考える強者も後を立たない。

ゆえに朝ゴミ出しをしていた吉良を狙い、「今月に町内会でゴミ拾いがね——」という体裁で、誘った。

華があれば、面倒ごとにも意欲が湧くというものである。

吉良は近所の人間には子供時代から続く爽やかな印象を繕っていて、職については「フリーライター」を名乗っている。

本当は「作家」だが、言えば否が応にも目立つ。

書く仕事というのは間違っていないので、問題ないだろう。

ただ名乗っている職が職のため周囲の評判も気になるところだが、そこは別荘地帯にずっと住み続けていることもあり、それなりの稼ぎがあることは少し考えれば分かることである。

『ニヤツ、ニヤン！』

そして吉良は猫と植物の混合物のような生き物を見て、すべてを悟った。

まさか自分が埋めた猫がスタンド使いとなり、しかも奇妙な姿で蘇って人を襲っているとは思えないだろう。

「……ん？」

だがその考えも、珍妙な生物が何か発射したことで止まる。

発射された何かは透明で普通だと見えないが、日の光を反射すると球体状に見えた。

それが空中を飛んでいた鳥に当たると、吉良の足元に落ちた。

隣にいた泉は「ほえー」と啞然としている。

その速さと殺傷性の高さを見て、彼は本来の能力の精度を理解した。

もしこのレベルの威力を人間が受ければ、最悪死んでもおかしくない。

つまり人間に当たっていた球体状のものは、威力がかなり落とされていたということになる。

それも珍妙な奴の意思によって。

考えられるのは、この奇妙な生き物の「遊び」だ。

『ニヤ、ニヤニヤ』

鳴き声を上げ、そいつは葉っぱの手で鳥を指し、次に吉良を指す。

「…わ、わたしにくれるってことか？」

『ニャー！』

どうやら珍妙な生き物は、彼をいたく気に入ったらしい。

吉良としてはなぜ懐かれたのか、皆目検討がつかない。

鳥の死体に驚いていた泉もだんだん猫のようなもの？に愛着が出てきたのか、側に落ちていた枝を拾い、遊ばせている。

「結構可愛いですねえ、先生」

「恐らくコイツが七不思議の正体なのに正気か、君…？」

「ええー、でもこんな可愛いなら許せちゃいますよ。ねっ、猫草ちゃん！」

『ソオーニャンス！』

「勝手に名前をつけるな」

「猫っぽい草だから「猫草」！うーん、私のネーミングセンスが冴えますね」

「人の話聞いているかい、君？」

泉は木の枝で慎重に猫草の周囲を掘り進め、ついに取り出して懐に抱える。

飼うつもりなのか尋ねた男に、彼女は「自分のマンションはペット不可なので」と返した。

「つまりわたしに飼えと……？言ってる意味がわからない……」

「先生の自宅はお日さまがよく照らす庭もあるし、こんな暗いところにいなくてももう大丈夫ですよ、猫草ちゃん」

『ソニヤツ！』

「わたしにも人権があるぞ、おい」

結局吉良は泉と猫草と、おまけにキラークイーンの無言の圧力を受け、「わかったよ……」と珍妙な生き物を家に連れて帰った。

「？猫草が 仲間になった！」

45話　じつちちゃんの名にかけて。

猫草が吉良邸に来てから一週間。

『ニヤツニヤー!』

『ニヤー!』

もし雨が降った場合可哀想だ、と泉が用意した植木鉢に植えられた猫草は、日当たりのいい縁側でキラークイーン（勝手に出てきている）とボールをふっ飛ばし合いながら遊んでいた。

「……………」

その二者の様子を吉良は死んだ目で見える。

言わずもがな、「スタンド」とは精神エネルギーからなる能力だ。

しよつちゆう本体の意思と関係なく出現するキラークイーンに、今の彼はかなり精神力を吸い取られている。

最近のキラークイーンは猫草を真似て毛づくろいまでし出し、猫化が進行している。感覚がフィードバックされる本体としては堪ったものではない。

『ニヤー!』

猫草の声だ。餌皿を葉っぱの手で叩いている。

餌は——と吉良がキャットフードを見て、中が空になっていることに気づいた。泉が明日来るため持ってきそうではあるが、それを待つ間に空腹に耐えかねた猫草に鳴かれ続けては仕事の邪魔になる。最悪空気弾地獄だ。

「…買いに行くか。ついでに他の猫用品も」

なぜ自分がこんなことをする羽目になっているのか。

吉良は重い腰を上げ、車を走らせた。

???????

吉良が餌や、こつそりとキラークイーンが忍ばせた猫用のオモチャを買い終え、時刻は昼過ぎ。

トイレについては必要ない。植物の光合成を行いながら同時に肉食でもある猫草は、排泄を根っこから行っている。必要とするのは替え用の土くらいだ。

車通りのほとんどない道はすすいと進むが、だからといってこの男はいつ何時で

も法定速度を破らない。免許はもちろんゴールドである。

前の信号は青。仮に吉良が事故を起こすのだとしたら、ボールを追っかけた子供がいきなり飛び出して——ぐらいのことが起きた時だ。

サイドの歩道は街路樹があり見通しが悪いが、子供は現在学校。帰宅までの道筋は磐石である。

しかし世間ではこれを、「フラグ」という。

「っー」

フロントガラス越しに彼が一瞬見たのは進行方向が青信号であるにも関わらず、杖を突き道路を横断し始めた老人の姿。

咄嗟にブレーキをかけ事なきを得たものの、反応が遅ければ確実に轢いていた。

老人は突如手前で止まった車に対し首を傾げている。

「どっくを見てんだ、このクソカスがッ……!!」

背中には冷や汗が伝い、心臓は激しい音を立てる。

吉良は背後に車がないのを確認してから車をバックし路肩に止め、ハザードランプを出して外に降りた。

老人は信号が赤から青に変わっても突っ立ったままだ。

「大丈夫ですか、ご老人」

「んー、なんじゃあ?」

「だいじょうぶですか、ごろうじん!!」

「オーオー、大丈夫じゃよ」

耳元ではつきりと大きく声を上げた吉良に、老人は何を言われたのかようやく理解した様子である。

彼は横断の手伝いをする間、そのよろつく足取りに気が気ではなかった。

「わたしはもう行きますけど、大丈夫ですよね?」

「心配せんでも大丈夫じゃよ、助かったわい」

「……いえ」

老人の浮かべる笑みの中にある深い碧色。空条承太郎や東方仗助に似た瞳に、吉良の心臓のつけ根がキュツと、しまるような感覚がした。呼吸が少しし辛くなる。

その色はどこまでも天上に広がり、人の心を吸い込んでしまう空を想起させる。

「大丈夫かい? なんだか顔色が悪いようじゃが」

「……大丈夫ですよ」

地震が起きたわけではない。ただ、彼の地面だけ左右に大きく揺れ、上に下に重力が

不安定にかかっているだけだ。

どうにか踏ん張り転倒を避けたが、本格的になつてきた夏の暑さもその身に猛威を振るう。

気持ち悪さを隠しながら、吉良は老人に別れを告げ車内に戻った。

幾度の変化を終えた信号は現在赤である。

長めの指が自然とハンドルを叩き、コツコツと一定のリズムを刻む。

「……はあ？」

先ほど彼が横断を手伝った老人が、轆かれかけた位置へと戻るように歩き出し、横断歩道を渡りきった。

ボケているのは赤信号を渡っている時点でわかることだが、まさか自分の目的地まで覚えていないのだろうか。

いや、無視して帰るべきだ。ただでさえ体調が本調子ではないのに。

だが常識的に考えて、ボケかけの老人を放っておくのはいかなものか。非常識に捉えられる行動を取ってよいものか。

数秒の内に回った男の思考は、アンサーを導く。

助手席側の窓を開け、彼は老人に声をかけた。

「ご老人、仕方ないから乗ってってください。とてもじゃないが見てもらえない」

「そうかい？すまんのう、この町の地理には疎くてなあ」

「それで、どこへ向かう気なんでしょうか？」

助手席に腰掛けた老人は首を捻らせた。まさかの——まさかだ。

「はて、わしはどこへ行く気じやったんかの……？」

「……ではご自宅は？そこまで送り届けますから」

「おお、そうか！親切な方じやわい。家はアメリカの……」

「ちよ、ちよつと待て」

アメリカ？確かに日本人ではないと思つたが、旅行に来ているのか？

「この町の地理には疎い」と言つていたため、その可能性は高いだろう。

このボケた老人一人で来れるはずはないので、恐らく家族も町に滞在しているはずだ。

「滞在しているホテルはわかりますか？」

「ホテル？うーんと、なんじやつたか……」

老人から情報を聞き出すのは難しそうだ。ホテルを探すにしても、杜王町には近年観光客の増加を受けて宿泊施設が増えている。ましてや別の町に泊まっていた場合は、余計に搜索が困難だ。

ならば、警察に行くのが手っ取り早いだろう。

「では警察にお連れするので、それでよろしいですね？ ホテルを探すのも個人じゃあ難しいですから」

「すまんのう、日本人は親切な人が多くて助かるわい」

「そうですか。……それにしても、貴方は随分と日本語がお上手なようですが、日本の觀光は初めてですか？」

「いや、何度か来たことがあるよ。一人娘が随分昔にこの国に嫁いでのオ。それで覚えたんじゃ」

「……なるほど」

フラグが立ってしまった今、吉良の中で老人の碧い瞳や住まいがアメリカという点、そして老人にも関わらず感じる隠れた気迫のようなものに、嫌な汗が頬を伝う。

やはり乗せるべきではなかったが、今更断るわけにもいくまい。

それに初めは気付けなかったが、こちらを見ている複数の存在も感じる。彼の予想が正しければ、老人の警護に当たっている人間だろう。

静かな車内に、空調の音が響く。

ついで聞こえたのは腹の虫の音。食欲が一切ない吉良のものではない。

引きつった笑みの男に老人は柔らかい笑みを浮かべた。その表情は皺の違いはあれど、何度も見たことのある少年の面影と似ている。

さながら、親子のような。

「出会いというものは「運命」じゃ。ここは一つこの腹を空かせた老いぼれに、何かもてなしをしてもらえんかの？」

「…厚かましいですね。日本人の良心につけ込む気ですか？そもそもこの出会いは、貴方が仕組んだものでは？」

「仕組んでなんぞおらんよ。ただちよくと散歩をしておっただけじゃ」

「…………ハア、わかりました。ちようどいいレストランがある。そこで昼食を取ったら問答無用で警察に預けますよ」

「おお、レストランか。楽しみじやのう」

老人が町を散歩していたのは本当だ。

いつも連れ歩く赤子は今日は外に出たがらなかったの、ホテルで仕事をしている孫に預けて外に出た。

老人一人の町の散歩に孫も多少心配ではあるが、そこはSPが付いている。

今車で移動している最中も、しっかり後を追っているだろう。

だが今日は孫にも伝えていない別の意図があった。少し前から機会を窺い、都合の良

い日を見つけたのだ。

しかし、いったい何故老人が吉良に会おうと思つたのか。

それは単に好奇心もあるが、孫が要注意人物として探つていた男の内を、この目で確かめるためでもある。

「薄つすらとわかっちゃいるが、貴方のお名前を聞いてもいいかい？」

吉良は疲れた顔で老人を見た。

夕暮れと夜の狭間にいる瞳は、燻つた色をしている。

「わしはジョセフ・ジョースターじゃ」

ジョセフは皺をさらに深め、少しいじわるく笑つた。

【車の中】

運転中、吉良はジョセフに尋ねた。

「わたしが本当に轢いていたらどうする気だつたんだ」

「ホホッ、そうなれば大変なことになつてたかのう。まあ君は見えておつたんじゃろ？」

「……………」

そう。轆く直前で止まるまでは気付かなかつたが、ジョセフの裾辺りから茨のようなものが出ていたのを、吉良はその目で確認している。茨は老人から伸び、歩道の電柱に巻きついていた。

もし轆かれかけてもその茨を操れば、無事に歩道へ降り立つことができただろう。

「…食えない爺さんだ」

そのズル賢さは、不思議とリーゼントを決めた少年を彷彿とさせた。

46話 星の運命

ジョセフ・ジョースターはアメリカの不動産王である。顔は知らずとも、その名を一度くらいは聞いたことがある人は多いだろう。

彼は隠し子騒動から間もなくして、仗助や朋子の顔を見にアメリカからやって来た。朋子と会うのは息子に拒否されできなかつたが、仗助とは会うことができた。出会つた当初は親子ともども気まずかつたものの、透明になる赤ん坊をジョセフが拾つた一件以来、二人の仲は多少改善した。

仗助が彼を「父さん」と呼ぶことはないが、「ジョースターさん」呼びから「じじい」呼びに変わった中には、確かな情が込められている。

またジョセフは多少のポケを見せていたが、赤ん坊と接しているうちに往年のジョセフを取り戻し始めた。

承太郎が心配しつつ散歩を許すのも、祖父の頭と身体の健康につながると察してのことである。

「足元に気をつけてくださいよ、ジョースターさん」

「ああ、助かるよ」

そしてジョセフは現在、一人の壮年の男と共にいる。

30代と言え、80近いジョセフからすればまだまだひよっこである。しかしそれを考えても感じる妙な幼さに、何とも言えない感情を抱いた。

レストランに入り料理を待つ間、他愛もない世間話をする二人。

ジョセフの対面に座った吉良は食欲がないため、シエフに「自分の分はいらない」と予め断りを入れた。

「食べんのか？ わしから見ても随分細いと思うんじやが」

「昔からあまり食べられないだけです。お気になさらず」

「そうかい？ 途中で食べたくなくても、わしの分はあげんぞ？」

「……だから、大丈夫です」

眉を寄せた男は一度ジョセフに顔を向けたが、すぐに逸らして明後日の方向を向いてしまった。まるで猫のように繊細な気質である。

「わしの目は苦手かな？」

「苦手ではないです」

「ホホ、では好きというわけか。そりやあ嬉しいのう、祖父さん譲りの瞳じゃから」

「……じゃあ苦手ということでもいいですよ。それより、何故わざわざ貴方のような方が

わたしに会いにいらっしやったのか、お聞きしても？」

ジョセフは会話の中で吉良の性格を推し図る。経験則と生来の観察眼から、大まかなタイプを推測した。

おそらくこの男は中身を隠して、表面を取り繕う傾向にある。

「いや、孫の承太郎が君に迷惑をかけてしまったようだな。その詫びも兼ねて来たんじゃない」

「別にいいですよ、過ぎたことですし。それにしても祖父に謝罪させに来るとは、あの海洋学者はさぞお忙しいようで」

「謝罪はわしの意味じゃよ、そう冷たく当たらないでやっておくれ。彼奴もかなり反省しておったし」

「…貴方の前で悪いとは思いますが、わたしはあの男が嫌いだ。それこそ細胞レベルで合わない」

「見ておればわかるよ。承太郎はセコい人間が嫌いなんじゃない」

「このわたしが姑息な人間だと？」

「自分の内を隠してばかりでは、そう思われても仕方ないじやろう」

「……瞳もだが、観察眼もあの男に似てるな」

ますます吉良の眉間に皺が寄っていく。

實際承太郎はジョセフ譲りの觀察眼やガタイ——後者ついてはジョースターの遺伝であるが——その他様々に似通つているところがある。

だが精神面は大きく異なる。

良くも悪くも彼の孫はジョースターの「星」の精神を強く受け継いでおり、ジョセフでさえ過剰に不安を抱いてしまう時があつた。

ジョースターの血は短命だ。ジョセフの血を遡ると曾祖父のジョージや祖父のジョナサン、そして父のジョージーJII世も若くに亡くなつてゐる。

考えたくはないが、孫も同様に早世してしまふ可能性が高い。

この部分だけは流れる血潮を憎く思わずにはいられない。

その点ジョセフは、ジョースター家きつての異端である。

年も還暦をとうに過ぎ、ついでに、妻一人しか愛さない——を破つて不倫している。

育て親の祖母が今の彼を見たら「エリナは激怒した」になるに違いない。若き頃のオーキドではなく銀時声の「逃げるんだよオ！」は今の彼では不可能だ。

まあその前に、妻スージーQの愛の鉄拳を食らつたのだが。

「わしはそれほど似とらんと思ふよ」

苦笑したジョセフに、吉良の瞳が少し丸くなる。

「承太郎は隠しておるが、かなり精神的に参っておつての」

「精神的？ だつたらむしろ、わたしの方が参らされたんだが」

個人情報細かに知っていたのは疑わしき存在を調べるためだ、まだいい。

しかし客間に灰皿がないのにも関わらず煙草を吸い、そして吉良の誰にも踏み込んで欲しくない地雷まで踏み抜いた。

彼の精神が今どれほど不安定な上で成り立っているか、空条承太郎は知らない。それは吉良が承太郎の「正義」を理解できないのと同じで。

最悪殺人欲求に自己が負け、人を殺していてもおかしくなかった。

鈴美の言葉がなければ——今頃は、きっと。

「娘が、危篤なんじゃ」

その瞬間吉良の険しい表情が崩れ、驚きを隠さずジョセフを見つめた。

「正確には危篤だつたんじゃがな。孫が君に会っている頃のは。山は抜けたが、今もまだ意識は戻っておらん」

「……病気、か？」

「ああ、もう倒れてから一ヶ月近い。わしは拾った赤子の母親を探さなければならんから、もう暫くはこの町に残っておるが……彼奴に「帰れ」と言つても聞かんのじゃ」

「……………」

自分の血が繋がった娘だ。すぐにでも駆けつけその手を握りたいはずだ。

だが承太郎は今もこの町に留まり、矢の捜索を続けているに違いない。それはいつた
い、何故？

「元々承太郎は妻子と離れて暮らしておるんじやよ。魔の手が及ばぬようにな」

「それは、「DIO」という男が関わっているのか？」

「厳密に言えば手下じゃな。今もこの世界に奴の残した禍根がいくつも残っておる。矢はその一つと言つていいだろう。それだけでなく承太郎のスタンド、スタープラチナは「最強」を冠しておる。狙う輩が多いのは、必然なんじやよ」

「……はは、最強ね。恐ろしいな……」

仮に最強のスタンドが本気で拳を繰り出していたら、吉良は今どうなっていたのか。腕が軽く粉碎骨折していたのは想像に難くない。

「君は、失う痛みを知っておるんじやな」

吉良は小さく舌打ちした。同情などされたくはない。

「わたしの何がわかるというんだ。あの男同様人の心にズカズカと入って来るな」

「失う痛みはわしもある程度わかつておるつもりじゃよ。長く生きていると、必然多くの人間の「死」を見る」

SPW財団の創始者であるスピードワゴンや、祖母のエリナ。短くも長い旅を共にしたアブドウルや花京院に、イギー。

80年近い人生の中で、多くの者がジョセフより先にあの世へと旅立った。

そして彼の内で今なお鮮烈に思い出せる過去。亡き相棒————シーザー・A^{アントニオ}・ツエペリ。

ジョセフの人生の厚さによる重みに、吉良は視線を逸らす。

老いぼれた老人など簡単に殺せる。しかし「勝てない」と思わされる。

同時に沸々と億泰の時に抱いた疑問が喉元を通ってくる。この老人ならば、その答え“を持つていてるのではないかと、淡い希望を抱く。

「君はわしに何か、聞きたいようだね」

「…貴方にとって、生きることとは何だ？」

「生きるってか?」

ジョセフは吉良の深い夕闇に染まる瞳を見て、感じていた幼さの正体を理解した。人とは生きていく中で様々な体験をし、自分の中身を充実させていく。時に悲しみに暮れることも一つの経験なのだ。

だが自己の薄い子供にとって、世界とは未知なものばかりだ。生と死も同様に。

二つの重さを知らぬ子供は残酷な行動を取れる。その行動に伴う責任感や罪悪感も十分に確立されていない。

正しく吉良吉影という男は、その子供の無邪気さを残酷なまでに引きずっている。

内に大人としての倫理や経験が伴っているにも関わらず捨てきれないその残酷性は、もはや「異常」だった。

——不安定だ、とても。

「君の求める答えになるかはわからんよ。だが今の君は後ろばかりを振り返り、前に進めていない印象を受ける」

別に過去を振り返ること自体は悪いことではない。日本のお盆など、世界には亡き家族や友人に想いを馳せる行事があるくらいだ。

ジョセフとて、かつての思い出に浸る時がある。歳を経てからは特に。

しかし生きる者の前には、先に続く「道」がある。或いはその道は、亡き者たちが託した未来への道筋だ。

だからこそ後ろばかり見続けていてはならない。進まぬことは、彼らへの侮辱にもなってしまう。

「君にとつて生きることは恐ろしいことかね？ 老い先短いわしじゃが、楽しいことも辛いことも単にあるよ」

「…わたしは普通に、平穩に生きたいんだ。怖いわけがない」

「ならば何故君は、前に進まない？」

「……ぼく、は……」

紫目がうろろと宙を彷徨う。迷子の子供のように。

単純な話、吉良はわかっていないのだ。鈴美がいないこの世界で、どう歩んで行くのかを。

ただ彼は縋るものがなければ生きていけまい。そして縋る先はもうない。生き方がわからない上に、生きる糧もない。

「…辛いかな？」

「……それをぼくが、言葉にするとでも？」

生きていれば絶対に幸福なことがある——とは、すべてを絶望した人間にかける

言葉としては、これ以上ない皮肉だろう。

ジョセフはそれを理解している。だから口にすることはない。

しかしそれでも、と続ける。

「もしも君が心の安らぎを得られる人間がいたならば、縊つてもいいんじゃないよ」

星の如く人々を優しく照らす微笑みを、吉良はじつと見つめた。

誰かに縊つてもいいのだろうか。心を移してしまえば、それは鈴美への裏切りになるのではないだろうか。そもそも吉良にとって誰かを愛することはとても難しく、愛せたとしてもその人間を壊しかねない。

それでもいいのなら——吉良吉影は、救われるのだろうか。

「……青い鳥は、いるんですかね」

老人の視線を避けるように窓を向いた男の瞳から、一滴の水滴が溢れた。

きつと雨だ、もう梅雨の季節だから。

冷たい殺人鬼の性を持っておれど、彼もまた「熱」を知る一人の人間だ。

過去に囚われ進むことを躊躇している。その根幹には杉本鈴美のいない未来を未だ信じられない自分がある。

目が覚めればすべては夢の中の出来事で、ココアを淹れた彼女が先に起きていて、彼に「おはよう」と言う。喉元を通る熱は甘ったるいが、それが一つの「幸福」の形になる。

——それは、あり得たかもしれない未来の話。

そんな普通の人間の心も持つ彼を、果たしてあの海洋学者は垣間見た。

「理解」することは難しい、しかし歩み寄ることはできる。吉良がまだ人間を殺していないからこそ。

「……かつてわたしの父が旅行先で、『エンヤ』という占い師に出会った。その時エンヤは「運命」を口にし、矢を親父に託している。曰くその矢は、「星を打ち砕く鍵となり得る」——らしい。わたしはいわゆる超常現象や幽霊の類を信じちゃいないが、恐らく何かがあるのだらうとは思っていた」

吉良は今まで……厳密に言えば、仗助と会うまではエンヤの言葉を信じていなかった。

しかし市内のプールに遊びに行きたいと仗助にねだられ、朋子の許可を得て二人で行った時、彼は少年のうなじにある「星」のあざを見た。

そのためエンヤの指した存在が東方仗助だと考えていた。

ただ砕けないダイヤモンドのような意志を少年から感じていたので、気のせいだろうとも思った。

だが空条承太郎と、仗助の父であるジョセフと出会い彼は確信した。

正義を持ち、何より彼らは運命に翻弄される「ジョースター^星」を抱えている。

仗助ではない、目の前の老人も違うだろう。その輝きは既に燦^{きら}つてきている。

ならばあの海洋学者はどうだ。ジョセフが口にした男のスタンドにあったのは、
「^{スター}星」。

「『ダイヤモンド』は硬い。しかしね、指輪において通常合金加工される『プラチナ』は純度が高いほど、変形しやすいんですよ」

「…エンヤが指したのは仗助くんではなく、承太郎ということかね？」

「恐らくは。所詮、わたしの憶測でしかないが」

「君は先程わしの前でわざわざ孫を嫌っておると抜かしたのに、随分と優しいんじゃないか」
「単なる気まぐれですよ。老人に心労ばかりかける奴への意趣返しだ。まあ本音を言え
ば、とつとこの町から出て行って欲しい」

「正義」のために自己を犠牲にするのは、勝手にしろ、という気持ちだ。しかし失つてからでは遅いのだ。

全くもって、普段の吉良らしくない。上手のジョセフに上手く丸め込まれている感が

否めない。

「ツハ！貴様は太宰をなぞらえたつもりか？『父親失格』とは随分滑稽だな、空条承太郎——」
「——」
「それでも、帰ったらあの男に伝えておいてくれ」

「オーオー、随分いい度胸しとるのお。わしが伝えるからって、オブラートに包みもせんのじゃな」

「再三言うが嫌いなんだ、あの男は」

誰もが恐れる孫に対し好戦的な男が珍しいのか、ジョセフはニコニコと笑っている。

そして何かを思い出したようで、懐からあるものを取り出した。吉良はそれを見た瞬間、今日一番の苦い顔を見せる。

「最近孫が本を読んでおつての。若い女性が好きそうなものを読んでいたから驚いたんじゃない。また、わしが今日君に会うこともわかつておつたんじやろうな、「暇になったら読め」と言われたよ。それでのう……」

しわがれた手が、新品の紙をめくって行く。

間には二つ折りにされた小さな紙が挟まっていた。

「……ハハッ」

思わず、といった風に漏れた吉良の笑い声。

紙には一言、思ったよりも綺麗な文字で書かれていた。

——
会うならサインを頼む。

祖父が本人に見せないと思いき書かれた文字はしかし、ジヨセフの手によつて暴か
いた。

いじわるく笑う老人に、吉良はのちの承太郎の心中を考え、深いため息を吐いた。

【その頃のトニオさん】

「オウ、またカオスな雰囲気デース……」

料理を持つて行けず、厨房で困り果てている。

47話 歩こう×2 わたしは元気

作家と編集の関係である二人の行為は、いつもホテルで行われる。

さすが「星ノ桜花」と言うべきか。初経験だった泉を容易に陥落させた。

上手いのも去ることながら、瞳に凜猛さを宿している割におそろしいほど優しく抱くのだ。

なるほど。抱かれた側が惚れてしまうのも仕方ないと思った。

泉も認めよう。吉良のことが好きになっている。

ただ、男の心はいつも別の誰かに囚われていた。

その相手が「れいみ」という女性なんだろうとも、彼女は察している。

しかしある時から吉良の態度が変わった。

遠いどこかを見つめていたその目が、泉自身を映すようになった。

これに彼女は困惑した。なぜ、と思った。

おそらく吉良の中で何かが変わったのだろう。それをきっかけとして、泉をきちんと

見るようになった。

向こうが彼女を愛し始めたわけではないようだが、愛そうとしているように感じる。だが、泉はその変化をヨシとできない。

愛されるのは嬉しい。しかしその愛を受け入れたら、泉は「れいみ」から彼を略奪したことになる。

彼女は妹を通して奪われる痛みを知っている。「れいみ」が今どうなっているかは関係ない。

絶対に「奪う」という行為をしたくないのだ。

だから泉は最近とても困っていた。

そんな中でも姉の異変に気づいて「お姉ちゃんどうしたの?.....まさか恋の悩み?」と言ってくる妹は、誘拐したくなるほど可愛かった。

「どうしよっかなあ〜.....」

もうすぐサマーシーズンが始まる頃。

泉は新幹線に揺られながら杜王町に向かっていた。

今日は昼に打ち合わせがある。向こうから「夜、時間あるかい？」と誘われているので、外泊の用意もしてきた。

「早めに着いちゃいそうだし、偶には町を散策するのもいいかな」

泉は普段仕事ばかりで、観光地として雑誌で紹介されるくらいには人気のある杜王町を堪能して来なかった。

短時間で回れる場所は限られているが、カフェでのんびりとコーヒーの一杯を楽しむ時間はある。

「……京香ちゃあん……」

泉はおもむろに手帳に挟んである一枚の写真を見る。妹が映ったそれを色んな角度で眺めて、ギユウと抱きしめた。

「京香ちゃん是世界イチかわいいもんねえ、お姉ちゃん知ってるんだゾ」

写真に、頬ずりをする。

「でも最近外との付き合ひが多くなっちゃったよねえ。男かあ、男なのかあ……!？」

スリスリ、スリスリ。

偶然その様子を見た客が何も見なかったように去っていく。

「やだよやだよお、一生お姉ちゃんといてくれ〜！一緒に骨壺に収まってくれ〜〜
〜い!!」

泉は家でも大体こんなテンションだが、妹はスルースキルと鈍感がカンストしているのか、いつも「もお、お姉ちゃんたら（笑）」で済ましている。只者ではない。

「グスン……」

妹と長く一緒にいるためにはどうすべきか。これは以前から考えていたものだ。

どうしようか、と悩んでいた泉はそこで思いついた。

「私が傷ついて帰ってきて、もう京香ちゃんがいないと生きられないくらいダメになっちゃえばいいのでは？」

女が傷つくと言ったらやっぱり色恋沙汰だろう。色恋沙汰といたら、泉が今関係を保持している男がいる。

「そっだよそっだよ、先生のことを本気で好きになっちゃうんだ。でも先生には「れいみ」さんっていう好きな人がいて、自分がどうあがいても先生に愛されないと知った私は深く傷つく。そして京香ちゃんに縋りついて「もう恋なんてしない!!京香ちゃんだけいればいい!!」って言いながらヨシヨシされるわけだ」

そうと決まれば、泉はもつと吉良のことを好きになる必要がある。

そして彼女に向こうとしている矢印を「れいみ」に固定する必要がある。

「れいみ」が吉良の地雷なのは爪噛みの件で泉も把握している。

ならそこにあえて踏み込んでいけばいい。

そうすれば二人の肉体関係は終わるだろう。

最悪担当まで外されそうだが、妹とくつつけるのなら安い犠牲だ。仕事も後から見つけばいい。

「すると、私をもつとれいみさんに似ればいいのか」

吉良は「手の綺麗な女性が好き」と言っていた。

おそらく「れいみ」が、手の綺麗な女性だったのだろう。

なら、泉が次にすることは決まった。

彼女は駅に着いた後、ネイルサロンかエステを探してみようと、計画を立てるのだった。

??????

来月から学生は夏休みが始まる頃合いだが、大人には仕事がある。

娘や息子がいないわたしが言うのもなんだが、子供がいる家庭は普段学校に行っている分、光熱費や水道代がかかるだろう。

ジョースター氏と出会ってからしばらく経った。

過去に縛られて生きていたが、もうそろそろ進まなければならぬ。

鈴美の存在が相変わらず胸の大半を占めているものの、愛する努力を始めた。

その第一歩が泉くんではないのかは微妙だが。だってビジネスパートナーでもあるからな。

まあ当然だが、突然のわたしの変わりように泉くんは驚いていた。

「目当ての本は…」

平日の午後、少々調べ物があり図書館に来たが人は少ない。

時折耳を掠めるのは、設置されたソファに座る人間の本を捲る音。古紙の独特な匂いを嫌う人間もいるが、わたしは好きだ。

自分の著作のコーナーがあり響めつ面になったが、目当てのものを探して行く。

そう言えば自分の本で思い出したが、少し前に忌々しき空条承太郎がアメリカへと戻ったらしい。

仕事中に我が家に勝手に茶を飲みに来た老人（with赤ん坊）が言っていた。

ジョースター氏の滞在するホテルは「杜王町グランドホテル」で、別荘地帯から近い。

だからって我が家を散歩コースに入れるのはどうなんだ？

ちなみに昨日は宛先人不明の人物から、数冊の海洋学にまつわる本が届いた。誰から、とは言うまい。

大方奴がわたしの書いた純愛ものを手に取ったのも、理解を深めるための行動だったのだ。

逆にわたしに奴への理解を深めさせるために寄越すのが海洋学というのは、どういう思考回路をしているのだろう。

ついでに間に挟まるように相撲の本もあった。

やはり奴を理解するのは無理だ。本は意外にも興味深いものが多かったが。

「……んなものか」

数冊選び終え、カウンターに向かう。

その途中学校帰りと思しきランドセルを背負った少年が、高い位置にある本を取ろうとしているのを見つけた。

手には厚めの本が数冊抱えられており、近くに脚立はない。

「大丈夫かい？」

本を取ってタイトルを見たが、ミステリーものらしい。

一度読んだことのある本だ。

「どうぞで」

「……………」

少年に手渡したが無言だったため、身長之差を活かして本を高く上げた。

黄色い通学帽を被った少年の表情は見づらかったが、顔を上げた瞬間に見えた。

長めの前髪も影響して、影のある不気味な顔。髪色は普通の子供にしてはやや明るめで、無表情さから感情をよく読み取れない。

何を考えているのかさっぱりわからない——といった風だ。

「取ってもらったんだ、お礼ぐらい言いなさい」

「……………ばく別に、あなたに「取って」って言ってない」

「そうかい、わかったよ」

本人が望んでいないならしょうがない、大人のお節介に付き合わせてしまったよう

だ。

本を元にあつた場所に戻すと、少年の表情が困惑に変わった。無視して素通りすると何か言いたそうに口を開ける。

「君が望まないというのなら、悪かつたよ。どうぞ別の大人が通つた時に取つてもらふなり、他の場所から足場を見つけてくるといい。その量の本を抱えていちやあ大変そうだが」

「うっ……アンタ、絶対性格悪いでしょ」

「親切にしてもらつた人間に対し「性格が悪い」だつて？……ツハ、今の子供ときたら本当に寝つてものがなつてないな。親の顔が見てみたいよ」

「……っ」

わたしが「親」と口にした瞬間、少年の顔が一瞬歪んだ。

少し気にはなつていたが、今は午後と言えどもすでに6時を過ぎている。

わたしは仕事を少し早く切り上げて来たから、閉館まではあとわずかだ。

またランドセルと学帽から学校帰りだと例えたが、今の時間帯中高生でもなければとつくに家に帰っているはずである。

恐らくは下校途中にここに寄り、ずっと本を読んでいたのだろう。

自分と似たものを感じる。

親に対し、屈折した感情を抱いている。

「ハア……まったく、今回は特別だからな。いくらまだ明るいとは言えども、すぐに暗くなるから気をつけて帰り給えよ、少年。誘拐されちやあとんだお笑い草だからね」

そう言い去ろうとすると、待ったがかかる。

「いったい何だ。わたしはこの後スーパーにも寄らなければならんのだ。」

「え……えっ？取ってくれないと見せかけて、本当は取ってくれる流れじゃなかった、今……!?!」

「特別つてのは、このわたしが「気をつけて帰れ」という助言をしてやる前置きとして言った発言なんだが？何だい、言いたいことがあるならハッキリ口にしろ」

「……と、取って……ください」

「フン……まあいいだろう。人様に何かしてもらったら礼を、あと挨拶もしつかりするんだよ」

「……」

「返事」

「は、はい」

ついでに帽子の紐を顎につけていかなかったため、直してやろうとした。

だがわたしの伸ばした手に驚き動いた少年の顔と軽くぶつかり、帽子が床に落ちた。

「しよ、シヨタコン…!!」

「おい勘違いするな。防犯ブザーを水戸黄門の印籠よろしく前に突き出すな。帽子の顎紐を直そうとしただけだから頼むから冷静になろうお願いだ」

こんな場所で騒音がなったら速攻で人が来てわたしが捕まる。

子供と大人の言い分じゃ、どうあがいても子供に軍配が上がるだろう。クソツ、いつもの癖が裏目に出た。

取り敢えず落ちた帽子を拾った。

帽子の鏝の裏に書かれていたのは、『川尻……………』。

「……………君、川尻くんの子供か」

「そんな手には乗らないよ。帽子を見たから苗字を知ったんだろうけど」

「ハア……………父親が『川尻浩作』で、母親が『川尻しのぶ』だろう?」

「……………パパとママの知り合いなの?」

「大学時代の知り合いなだけさ」

「ふーん……………」

ちようど閉館まで「15分」の館内放送が鳴った。

「ね、ねえ……………ちよつと待ってよ!あなた名前なんて言うの?」

本を先に借り終えたわたしの後を、少年が慌てて追いかけてきた。ここで別に本名を名乗ってもいいが、少しイタズラ心が湧いた。

「わたしは「星ノ桜花」だよ、川尻早人くん」

その言葉に、少年は呆けた面をさらした。

天邪鬼さと人間に対し強い不信感を抱いている子供なら、むしろこのくらいでちょうどいいだろう。

「星ノ桜花って、あの星ノ桜花？よくドラマとか映画にされてる？……ぼくが子供だからって、からかってるでしょ」

「からかってないよ、本当の本当さ。疑心暗鬼過ぎると生きづらいよ、早人少年」

「……もういい、聞いたほうが馬鹿だった。帰る」

「ああ、気をつけてね」

何故あの二人の間に生まれたのが、あそこまでひねくれたガキなのか。

家庭環境が上手くいっていないのかもしれない。まあわたしには関係のない話だ。

「子供……か。いや、ないな」

仮にもし結婚していたとしても、子供はいらないな。ただ彼女が望んだなら、受け入

れたと思う。その前に行為自体難しかったが。

そこまできて、また過去に縋っている自分にほとんど頭が痛くなった。

だがぼくは一步、踏み出し始めた。

道がどれほど続いているかはわからない。ただ足を踏み出せ続けられる限りは歩いてみようと思う。

図書館から出て見上げた空は上が紫がかり、下が薄い青色がかった。中央は混ざり合い青藤の如き色を醸している。

「…明日泉くんが来たら餌付けしてみるか」

誰かを愛する感覚はあまりに遠いもので忘れかけてしまったが、もし彼女が食べて「美味しい」とでも言ってくれば、少しは救われるかもしれない。

空の中にはひっそりと、影の薄い月がその存在を強くし始めていた。

もうすぐ、夜が来る。

翌日

——
鈴美が、
帰ってきた。

???????

48話 鏡よ鏡、この世で一番美しいのはこの我だな

手のケアをしようと思泉が訪れたのは、エステ「シンデレラ」。

探して偶然見つけたのがこの店だった。

ネイルサロンでも良かったが、〃手そのもの〃をケアするならエステの方がいいだろう。

入店すると、彼女は低血圧の喋り方が特徴的な辻彩つじあやという女エステティシャンに促され、店内の鏡面台の前に腰かけた。

辻彩曰く、ここは普通のエステとは少し違うらしい。客に「幸福」をもたらす顔を作るのだという。

「えっと、手のマッサージとかはないんですか？」

「ないわ、ごめんなさいね。フー…でもせっかく来店されたのだし、モノは試しとも言います。ご利用なさってみたら？もし効果がないようでしたら、お代は後で全額お返ししますよ」

「そ、そうですか…」

渡されたメニューに記されているのは「恋」に関わるメイク。

値段は働いている彼女からすれば手頃な値段である。

妹を我が物にできるメイクがあれば——とも泉は考えたが、妹に抱く感情は家族愛であつて恋ではない。

では、どんなメイクにすべきだろうか。

顔の条件があるので、手は論外だ。顔を吉良好みにすることができれば手取り早い。

「あの、自分を彼好みにすることつてできるでしょうか？」

「彼つて…彼氏好み、つてことかしら？ やつたことはないけど、可能だとは思うわ。でもメニュー表にはないから、料金は少しお高くつくわよ？ それに絶対に顔が良くなるとは言い切れないわ。それでもいいのかしら？」

「構いません。彼にもっと好きになつてもらいたいので。それにダメだつたらメイクを落とせばいいですし」

「フフ、あなたは情熱的な人なのね。愛される相手も大変そうだわ」

「そ、そうですか？ ちよつと恥ずかしいなあ…」

彩は通常「幸運を呼び寄せる顔」を機械で測定してから、自身のスタンド『シンデレラ』を操り客の外見を変える。

だが客の「自分が成りたい像」への強いイメージがあれば、シンデレラがその念を読み取りパーツを作り出すことも可能である。

ただこの場合成りたいイメージが曖昧であればある程、どのような顔ができるのか、辻彩本人にもわからない。

彼氏の好みの女優を知っているならその女優の顔になるかもしれないし、「清楚系が好き」など抽象的なイメージしか知らないなら、客が思う「清楚系」のイメージが反映されたものになる。

金銭が生じる以上、不確定要素の多い注文を受けるわけにはいかない。

しかし彩のモットーは客に「幸福」を提供することだ。

彩は悩み、一度試してみることにした。ダメだったら元に戻せばいいし、もちろん代金を取る気もない。

「ああ、あらかじめ言っておきますけれど、メイクの効果が続くのは、施術後から30分間です」

「30分……って、それじゃあ相手に会う前に終わっちゃうかも……」

「それならリップも特別におつけします。効果が切れそうになった時に唇に塗ってください」

さい。ただし睡眠中を除いて、30分毎に一回は必ずつけてくださいね。一回でも怠ると、大変なことになりますから」

「大変なこと?…はあ、わかりました」

「フウ…:それでは始めましょう、目を閉じて…:リラックスなさつてね」

瞳を閉じた泉の背後に彩が立つ。現れたスタンド『シンデレラ』の力が発動した。

それから無事、メイクは終わった。

しかし一向に彩から声がかからない。不思議に思った泉がそろつと片目だけ開けると、鏡に映るエステティシャンが驚きを浮かべていた。

「何も…変わってない!」

想定外のことが起こった。客の顔に変化がない。

しかし辻彩には確かに能力を使った手応えがあった。

「あんまり変わってないような気もするけど…ちゃんとメイクされたんですよね?じゃあ大丈夫ですよ。…:あつ、お代はいくらですか?」

「あ、いえ、待つ…」

「…:あつ」

そこで泉は店の時刻を見て固まった。遅刻である。時間にシビアな男の静かな怒りを思い出し、彼女はムンク顔になった。

「値段っ!!値段はナンボなん!!?」

「あの、ですから…」

「早うしてや!!またせんに怒られる!!」

幼少期生まれ育ったところの方言を全面に出す泉。

その庄の強さと、修羅の如き表情に押し負けた辻彩は料金を見せる。泉は財布にちようどあった紙幣を取り出しリップを受け取ると、魚雷を思わせるスピードで退店した。

「い、行つてしまつたわ……」

辻彩は気づかなかつた。今回起こつたメイクの原因が客の願つた条件にあることに。

泉は「吉良^彼にもつと好きになつてもらいたい」と願つた。

つまりこれは、吉良好みの顔になりたい——ということになる。

彼女の想像するその顔は吉良が愛しているであろう相手、「れいみ」だ。

しかし泉は杉本鈴美の顔を知らない。そして知らない以上、シンデレラが顔を作る際に元とするデータがない事態が発生する。

だからこそ顔に変化がなかった。ただ、スタンドを使ったという事実は残っている。

所謂今回起きたことは、ゲームでいう「バグ」に近い。

他人から見れば泉の容姿は変わっていない。それは鏡や写真といった物体を通して見る像も同様。

ただし、泉の願う対象にはその力が発揮されることになる。

つまるところ何が言いたいのかといえ、吉良にだけ泉が「れいみ」に見えるようになったということである。

この場合変化して見えるのは顔のみで、その他の声や手などのパーツは泉のままとなる。

また触れて見れば、視覚や触覚の情報に差異が出る。

その事態に気づかず泉は吉良邸に向かい、固まった男の顔を拝むことになった。いつもの紫目の奥にある感情はドロリと溶け、その色を深くした。

深い、深い——深すぎる深淵の底にある感情を、彼女は掬い上げてしまったのだ。

「せ、先生？大丈夫ですか……？」

吉良は口角を柔らかいものにし、微笑んだ。

泉が今まで見たことがないほど優しく、そして悍ましいその表情。

「おかえり、鈴美」

吉良のネジが数本、地平線へと吹き飛ばされた。

???????

「昨日はごめんね、鈴美。朝ごはんにしよう」

昨日吉良邸にきた泉は、物理的に数時間抱きつかれたまま動けなかった。その胸は恐怖いっぱい、ようやく彼女はそこで自分がやらかしたことを察した。

おそらくあのエステティシヤンのメイク(?)によつて、今の泉は吉良の想い人に見

えている。

果たしてそんな不思議なことがあるのかと思われるかもしれない。

だが彼女は肉が見えていた男の指が綺麗に治っていたり、奇妙な生き物である猫草を見ている。

そういった、自分の理解に及ばぬものがこの世にはあるのだと理解していた。

「あの…先生、私会社があるのでそろそろ……」

「ぼくは「吉影くん」と呼んで欲しいと昨日言っただろう、鈴美？会社の方には都合をつけて、休む旨を伝えておくから安心しておくれ」

「……は、はい。よ、吉影……さん」

「まあ、「さん」付けでもいいよ。まるで新婚のようだしね。フフ……ああ、かわいいね」
吉良はたおやかな手を見つめ、頬ずりをする。そしてじつと泉の顔を見つめ、見てるこちらが惚けるような微笑を浮かべる。場違いに顔が熱くなる泉だが、勘違いしてはならない。

この男は今普通じゃあない。

彼女が借りてきた猫な状態の傍ら、室内に香ばしい匂いが広がる。それだけで思わず

口内に唾液が溜まるが、フライパンの熱の音がさらに食欲を刺激する。

出された料理に口を付けた泉は感嘆の息を溢す。

「おつ、美味しいですね！この卵のトロトロ感とハムの食感も、普通に朝ごはんで見かける食材だというのに……何ッ、この美味しさは……!?!」

「喜んでくれたのなら、よかつたよ」

ヘヴン状態の女をよそに、吉良はコーヒーに口をつける。

彼の目では泉が鈴美に見えることは確かだ。しかしそれはあくまで顔のみの話で、声や身長など、多少の違いはある。

特に手に関しては、鈴美の方がもう少し健康的でふつくらとしているし、それこそ細かな点を挙げればキリがない。

それにしても、泉がなぜ杉本鈴美の姿をしているのか。まあ、恐らくはスタンドの影響だろう。

泉はキラークイーンを視認できないことから、スタンド使いではない。

よつて導かれる答えは、別のスタンド使いによる仕業である。

ただ彼女は自分の姿が変わっていることを自覚している様子だった。頼んで変えてもらったのかはわからないが、両者の同意はあったと推測できる。

何か泉にもそのようなことをする理由があるのだろう。全部、今の彼にはどうでもよいのだが。

ここに鈴美がいるのだから、何を他に考える必要があるのだろう。

それに泉は自分から、吉良の依存するオモチヤになつてくれた。コレは鈴美ホンモではない以上、もし壊してしまつても問題ない。

ある程度は思考能力を残しておいて、この女の依存先を妹ではなく自分に変えてしまえばいいのだ。

吹っ飛んだネジを回収できぬまま、吉良の思考は進む。

泉はふと彼がココアしか飲んでいないことに気づき、首を傾げた。料理もそう言えば彼女の分しかない。

「せ……吉影さんは、朝食を食べないんですか？」

「ぼくかい？朝食はあまり食べない方なんだ」

「そ、そうなんですか……？」

「うん。君が美味しく食べている姿を見ればそれでいいよ」

今食べたら、間違いなくすべて吐く。

歪んだ思考回路とは別に、正常に働こうとする頭がある。その部分が鈴美への感情や殺人欲求、泉の状態の分析や現状の吉良自身の歪さを処理しきれず、ごちゃ混ぜになっている。

その上でなお、普通な人生を望んでいる。

糖分補給のココアを飲めてるだけ、まだ幸いだった。

「……やはり背格好はまだいいが、声が気に食わないな」

「え？」

「フム……この場合毒がいいんだっか？けど喉を潰すだけ、というのは中々難しいな。致死率が圧倒的に高いし、他の生物で実験するのも手間がかかる。効率的ではないな」

……

「……せ、せん………せんせ、え？」

搾り出すような泉の声は、冷蔵庫を視界に入れながらブツブツ呟く男には聞こえていなかった。

少し遅れて“鈴美”が顔を真っ青にしていることに気づいた吉良は、無表情だった顔を柔らかにする。

「ごめんね、怖がらせてしまったか。でも安心してくれ。泉くんが鈴美のまままでいってくれたら、こんなこと考えないで済むから」

泉を恐怖の底に突き落としたのはこの男だというのに、甘い声で囁き抱きしめる。そして赤子をあやすように彼女の頭を撫で、背中をさすった。

泉はだんだん、呼吸まで上手くできなくなっていく。

「ああ、御髪が少し乱れてしまったね。手で梳かしてあげるからおいで」

「先せ」

「……………」

「よ……………吉影さん」

「何だい、鈴美？そんな可愛い顔をしないでおくれ、おかしくなってしまうそうだ」

恐怖と、しかし引きずりさ出された快樂も混ざった鈴美の表情は、彼の歪みを加速させる。

鏡面台の前に泉を座らせた男は、問いかける。

「君はいつたい誰だい？」

初めは難しいであろうが、少しずつ彼女の「泉飛鳥」としての土台を崩していけばいい。そして新たに築き上げるのだ。

鏡に映った男の瞳には、月が隠された世界の不気味な空模様が浮かんでいた。

49話 「いいか絶対に押すなよ!」は全力で押せ

『君はいつたい誰だい?』

毎日行われる、その行為。

次第に泉が自分の存在をあやふやに感じ始めた中、事件は起きた。

「よ、吉影さんッ……!?!」

吉良に家にいることを強要されていた泉は、どうしても外せない仕事の都合で数日家を空けた。

その間逃げる手もあった。しかし帰らなかつた場合に後で何をされるかわからない恐怖と、壊れた状態の男を放っておけないという罪悪感や擁護感から、彼女は吉良邸に戻った。

この時点ですでに洗脳が進んでいたのは言うまでもない。

そして戻って来た時に泉が見たのは、執筆部屋で倒れていた吉良の姿だった。

彼女の脳内で、ミステリーもののドラマによく流れる『テレテテッ、テレテテッ、テ-

テー』な音楽が流れた。

大方原因がわかっていた彼女は、慌てて救急車を呼んだ。

これを耳にした担当医が「またか…」と頭を押さええのは余談である。

??????

——ピチヨ、ピチヨン。

「うっ……」

水滴の音で意識が覚醒した。頭痛のする頭を起こそうとしたが、体が異様に重い。

瞳を開ければ、視界に広がったのは白い天井。横には無地のカーテンが開いていて、

差し込む日の光が目には刺さる。

「ああ……」

鈍く動く頭がようやく、病院か、と結論を出した。

それにしても、どうしてぼくはここにいるんだったか。

確か仕事の途中で立ち上がった瞬間、意識が急に暗転したことは覚えている。

病室のサイドテーブルにある日付機能付きの時計は7月を示している。時刻はちょうどお昼過ぎだ。

腕に付けられている点滴の管を手で乱雑に抜き、ふらつく体に鞭打って立とうとする。

だが吐き気が襲って、慌てて床に蹲った。

「わたしは……ああ、そうだ。倒れたんだ」

鈴美が……じゃない、泉くんが鈴美に見え出してから約一週間。

食事がマトモに取れなくなり、身体に限界が来た。

そして午前中、喉が渴き台所に向かおうとしたところでぶっ倒れた。

彼女が救急車を呼んだか、親父が呼んだのだろう。

ジョースター氏ではないと願いたい。

「ハア……今度会った時何か言われるだろうな……」

数日前にジョースター氏と会った時は体調不良を見抜かれ、医者に行くよう強く勧められた。

微笑みながら相手に圧をかける様は、流石不動産王の地位を築いた男だと思わせる。

そうこう考えていれば、病室の扉が開いた。

「あつ、吉影さん起きたんですね!!」

その顔を見て収まってきた気持ち悪さが一気にぶり返し、盛大にえづいた。

失態を避けるため、慌てて室内にある個室トイレに駆け込む。

「だつ、大丈夫ですか!」

よく見ろ、現在進行形で吐いているのに大丈夫もクソもないだろ。

心配してくれるのはありがたいが、背中をさするその手の感触も、熱も、声も、やはり彼女ではない。

しかし視界に入るのはやはり鈴美で、自分の中にある矛盾とそれに伴う様々な感情がごちゃ混ぜになる。

「れいみ……っ?」

縫るようにその手を握った。鈴美のものじゃない、美しい女の手。この手は誰の手だ?
?

彼女の姿をした誰かの顔が、泣きそうに歪んでいる。何故泣きそうなのだろう。

一週間前から彼女はほぼ毎日家にいさせている。それに伴う用品は粗方購入した。

出版社側はこちらの要求に応えざるを得ない。ご機嫌取りは大切だと理解しているのだ。

だが仕事の都合上、会社に行かなければならない時もある。

鈴美を送り出して、殺されては大変だからと後をつけようとした。

しかしちよいどいいタイミングで散歩しに来たジョースター氏と出くわし、追えなくなった。

鈴美がいる生活は幸福だった。

だが、どこまでも満たされなかった。

殺してしまおうと何度も思ったが、キラークイーンはわたしに無機質な目を向けるばかりで、動いてはくれなかった。

ならばと、眠る彼女を包丁で手だけ切り取って殺そうとした。

けれど眠るその顔は泉くんじゃなくて鈴美で、鈴美、鈴美だったから、その後はずっとトイレで吐いていた。

我ながら、よく栄養失調で死ななかつたと思う。

一日で異常に伸びる爪を切るわたしを、彼女は不思議そうに眺めていた。

そりやあ毎日爪を切る人間など、まずいないだろう。

「吉影、さん……」

「……………」

人格を壊す方法はやり方を知っていればさほど難しいことではない。

洗脳の方法については前に読んだ本の知識で知っていた。

もちろん人によつて洗脳されやすい・されにくいとの差異はある。

それで言うところ泉くんはかかりやす過ぎるタイプだった。だからこそ、初心者のわたしでも成功したんだ。

まあ、完全に洗脳できたわけじゃないだろうが。

何ともまあ、思考回路が吹っ飛んだものだ。

彼女が数日いなくなってくれたからこそ、いくらか頭が直ってくれた。

その分混乱を起こした脳が最悪の状態で身体に出ているが。

どうすべきだ。このままだと確実に彼女を殺すぞ。

本当に面倒ごとしか持ち込まない女だ。絶対に殺——担当を変えてやる。

綺麗な手が去るのに惜しい気持ちはあるものの、仕方ない。

死にかけの虫みたいな息をしながら、彼女を視界に入れないよう気をつけつつ名を呼

ぶ。

「泉飛鳥」

「泉?……………あつ、はい!」

「…大声で返すな、うるさい」

「ご、ごめんなさい…」

一瞬自分が呼ばれたことに気づかなかつたが、まあ大丈夫だろう。

「君、ドラえもんに頼んだのかは知らないが、何かやっただろ」

「何か?……………私は何もしてませんけど」

「そうだね、君はね。となると、やはり他の人間にやらせたのか」

「……………あの、吉影さん」

「やめろ、本気で頭がおかしくなってるんだ。「先生」と呼べ」

離そうとした手を、彼女は握り返してくる。

とっさに顔を見ようとして、寸前で止めた。目前には平たい胸がある。

舗装された道のように———と思ったところで、容赦なく腕をつねられた。

夢も希望もない貧相なそれに、彼女自身はコンプレックスなようである。どうでもい

い話だが。

「犯行動機はなんだい?」

「私……先生にもっと好かれたくて、それで…」

「なるほどね、それでやってしまったと」

「……あの、私が誰か殺したみたいな流れにするのやめてもらっていいですか？」

「第一発見者が犯人つてのはよくある話だろ」

「つまり先生は私に殺されたんですか……？」

「ダイニング・メッセージに書いてあつたら、『いずみあs……』つて」

「いや、生き返つてるんですからその時点でミステリーじゃあなく、ファンタジーとかになりませんよね？あとダイニング・メッセージが、完全に血文字じゃない変換のされ方してますよね??」

「作中死んだはずのキャラが実は生きてました……なんて展開ほど、興奮めするものはないよね」

いつもの調子を取り戻してきたところで、泉くんの内面に切り込んでいく。

こちらの雰囲気を変えて問いただせば、彼女は重い口を開いた。

「……なるほど。妹を手放したくないから、わたしを利用してしようとしたわけだね」

「……（めんなさい）」

「謝るなよ泉くん。謝ったら許されると思っっているなんて、君の脳は小学生か何かか？」

わたしはこれでも人の気持ちを踏み躪られてとても怒っていてね。殺そうと、殺してやりたいと思っている」

歯を噛み締めながら彼女に殺気を向ければ、それだけで膝から崩れ落ち震える。

かわいそうに鈴木、どうしてそんなに怖がっているんだ。

「まあ、犯罪になるから殺さないけれどね。誰だって人を殺したいと思うことはある。それは君だって、わたしだって。もつと賢く生きた方がいいよ。地雷原は人間の足元にいくつもある。死ななかつたことを「幸福」に思つて生きるといい。そしてそんな君は、勿論人の「幸福」を考えて生きろよ。失敗を教訓に出来ないなんて愚かな人間がすることだからね。これにはわたしの普通に生きたいという「幸福」も当てはまるし、君の妹の「幸福」も当てはまる。それが出来ないのなら、道路に転がる畜生の死体のように邪魔な存在であるのなら――、

――死ね」

冷静に考えたら、この女のためにわたしが手を汚す必要なんてないだろ。汚す価値すらないだろ？

あの保険医にだつてくれてやらなかった処刑人の役だ。

本当に、本当に嫌になる。他人の思考に振り回されて、わたしの平穩が遠のいたんだ。「まあ、君が死んだら泣いてあげるくらいはしてやるさ。だつて君はわたしの編集だからね」

「……………つ、せんせ」

「何だい？」

「ごめん、なさい……………」

謝るなど言つたんだが、どうして謝るんだ？人の話を聞いていなかったのか？人が話している時はきちんと聞くようになって教わらなかったのか？

ああ、そうだったよね。君の両親は死んでいるんだつたよね。

「ごめんね、せんせ」

少し訛つた声で話し、わたしの頬に触れてくる女の手。その体温が異様に熱く感じられて、気持ち悪かった。

人の顔を見て、泣きそうになる彼女。意味がわからない。

「せんせのこと、傷つけて」

——それは同情と、憐れみと、悲哀が混ざった瞳だった。

今更人を利用したことを悔いて、挙句に壊したことに罪悪感を抱いているのだろうか？

利用するなら最後まで上手く立ち回ればいいものを。その技量は恐らくあつたはずだ。なのに中途半端に絆されているから、ボロを溢した。

愚かな女だ。今までの女たちと何も変わらない。

この渴きは満たされない、満たしてくる人間もない。

そして彼女に歩み寄ろうとしたわたしも、愚かだった。

人はそう簡単に変わることはできない。いや、わたしの場合変わることができない。

だがそれでも殺人欲求と美しい手への執着を抱え、「普通」に生きていこうじゃないか。

「せんせ、せんせツ……しっかりしてや……!」

「……ハア? 急に何言ってるんだ、君」

伏せているわたしの顔に、芯を持つ白い手が目尻に触れてくる。

ひどく熱い手に、視界が歪んで何も見えなくなつた。

「…………あれ、ぼく泣いてるのか？」

直後、強く抱きしめられた。

まるで崖から落とそうとした我が子の愛らしさに気づき、慌てて掴んで引き戻す獅子のような。

まあ奴らは四足歩行だから人間のるように器用に手を使えないので、この例えはいささか不正解である。

でも誰かに掴んでもらわなければ、今にも自分の中の何かが崖へと真つ逆さまに落ちていきそうだった。

落ちないように必死に掴み返すことしかできない。

遠慮のない力で肩を掴まれた泉くんは、小さく呻いていた。

君が救いの「手」になったら、ぼくは救われたのに。

???????

サマーシーズンに入ってから少し経った頃、辻彩の店に二人の客が来た。

一人は黒髪的眼鏡をかけた痩身の男と、以前来店した顔の変わらなかつたイレギュラーな女性客である。

女の方は帽子とサングラスに、マスクという顔全体を隠す格好をしており、彩はリッポの「30分」を破つたのかと思つた。

しかし装飾を外した彼女の顔は崩れておらず、綺麗なままだ。

一方男の方はそんな彼女から視線を外している先で、何故か彩の手をガン見していた。

「あの、突然で申し訳ないんですけど、顔の方を戻すことってできますか?」

「……できるけど、それは何故? 「幸福」を手に入れられなかつたわけじゃないでしょう?」

仮にもしルールを破り顔が崩れた場合は、彩は客の自業自得と考え、相当なことがなければ元の顔に戻すことはない。

だが今回の場合、ルールをしつかり守つた上での客の願いだ。

何か理由があるのなら、聞いた上で戻すか判断する。

ただメイクの条件が特殊であったため、彩が理解し損ねた不具合が起きていた可能性もある。

「幸福にはなれました、何せ愛されましたから。でも私の幸福はもつと別にあつて……。その幸せを掴むためにメイクを利用してしようと、申し訳ありませんでした」
「フウ……なるほど、だから要求も少し特殊だったわけね」

「……すみません」

「気分は良くないけれど、まあいいわ。人は幸せを求める生き物ですからね。一つ聞きたいのだけど、あなたは私のメイクを利用して、その本当の幸せを手に入れることにはきたのかしら？」

女はそれに愚直なほど真つ直ぐに「いいえ」と言った。

これには彩もポカンとし、ついに堪えきれなくなるように笑い出す。

「フフ、フフフツ……!!せつかく私が顔を戻す理由を探しているのに、よくもまあ簡単に台無しにしてくれるわね。そこは普通嘘でも「はい」というものじゃない?でも気に入ったわ、あなた。バカ正直な女ほど、かわいいものはないのよ」

「それって……オツケーてことですか?」

「あら、「いいえ」って言って欲しい?」

「え、ええ……? いや、お願いします」

「わかったわ。じゃあ鏡の前に座ってちようだい。あ、でもお代はちゃんといただくわよ?」

それに頷いた女を見て、彩は瞳を閉じるよう促す。次に店内にいる男の方を向いた。相変わらず刺さるような視線は、彼女の手に向いている。じつとりとした気味の悪さを感じ、彩は背を震わせた。

「あの……お連れの方で悪いのだけれど、外で待つていてくださる?メイク術は企業秘密なの」

「……………」

「聞いてらっしやる?」

「……ん? ああ、すまない。貴女がとても綺麗だったから、つい」

地味な雰囲気と陰のある顔とは別に、微笑む男の姿は何とも様になっている。うっかり彼女でも心を掴まれかけたが、先ほどの視線もありすぐに意識を改めた。

男が綺麗、と称したのは彩自身ではない。彼女の「手」に向けて言ったものだ。

例えようのない恐怖感を内心隠す辻彩を見て、男は軽く頭を下げ外に出た。

彼女は恐る恐る瞳を閉じている女に尋ねる。あの彼氏はいったい何なのか——

と。

それに女は瞳を開け、少し視線を彷徨わせたのち口を開いた。

「医者に一週間入院させられて、挙げ句に精神病院送りになりかけた人です」

彼女の一言に、彩はまたポカンとした。

【入院中】

もう長年の付き合いになる担当医を前にして、吉良の目は死んでいた。

なに、会話の中で彼の精神異常を見抜かれ、ちよつと入院が長引くことになっただけである。

「今回は本気で精神病院に紹介状を書くからね。わかってるよね、君？」

「……空が青いなあ」

「そこには白い天井しかないけどね。日本は外国と違って入院日数が長い傾向にあるから、覚悟してよ」

「……………」

現実逃避を行う吉良は数秒後、SPW財団と関わりのある『ジヨセえもん』の存在を思い出し、ホテル経由で彼に繋いで地獄を見ずに済んだそうなの。

50話 「おかえり」と言つて

川尻早人は父に川尻浩作、母に川尻しのぶを持つ11歳の少年である。

何を考えているかわからない根暗な印象から、友人はいなかった。

少年の性格が歪んだきっかけは、幼い頃からの家庭環境にある。

初めに言つておくと貧乏というわけではない。むしろゆとりがあるくらいだ。

浩作は息子以上に無表情で、早人も父が何を考えているのか正確に読み取れたことはない。

母曰く昔は違かつたらしいが、今では「めし」「フロ」「ネル」など端的にしか発さない。まるでゲームの画面に表示される選択肢である。

それに対ししのぶはロボットの如き夫と、父親譲りの不気味さを持つ息子を疎んでいた。

なまじ金銭面に多少のゆとりがあり、夫が妻に無関心なだけだからこそ、文句を言うことができない。

長年溜まったフラストレーションを抱え、彼女は無味乾燥な生活を送っていた。

「ぼくは本当に、パパとママの子供なんだろうか……」

夜。早人は椅子に腰かけ、スタンドライトの明かりをぼんやりと見つめながら思考に耽る。

別に虐待を受けているわけではない。

ご飯はしっかり作られているし、授業参観などの行事にもしのぶが来る。

父は早人に無関心なだけで、母は疎んでいるだけだ。どちらも子を持つ親としては失格判定も吝かでないが、それでも出生届もろくに出不せ親からメシを貰えないで、家に繋がれるだけの子供よりは何億倍もマシである。

そんな風に回る少年の思考も、きつと捻くれているのだろう。

早人はただ、知りたいのだ。本当に自分が両親が愛し合った末に、生まれた子供なのかを。

両親に愛してもらいたいわけではない。

どうせ求めても無駄なことはわかりきっているから。

ただ、少年は一つの「真実」が欲しいだけだ。

自分が両親に愛があり生まれたならば、彼の存在に意味ができる。

どうして自分が生まれたのか。自分はいったい何なのか。どうして己はこんな疑問を抱くのか。

天邪鬼な少年は気づかない。その考えの中にある無意識の本心を。

——両親から愛されたい。

子供ならば享受されて然るべき愛情を、少年は本当は求めているのだ。

「……………」

早人はライトに照らされる机の上に一枚の写真を置く。

撮られた日付は1987年の夏頃。

少し色褪せたその中には、大学の講義室でホワイトボードをバックに、数十人の生徒が教壇の前に立つ花束を持った女性を中心に並んでいた。

花束を持った女の腹は膨れていて、どうやら産休祝いとして撮られたのだろうと推測できる。

しのぶの母は前列にいて、華がある友人らと一緒に並んでいた。

母がカースト上位組だった事実を知った早人の心境は、微妙なものだった。

なんとなくだが、夫のトランクスを無言で見つめた直後、床に思いきり叩きつけてい

た母の心境が少しわかった気がした。

この写真はしのぶの私物である。

彼がたまたま早めに帰ってきた時に、彼女がソファでこの写真を眺めていた。

その顔は早人でも見たことがないほど、憂いを帯びたものだった。

帰ってきた息子に気づいたしのぶはその後、慌てて写真を隠していた。

彼はその写真が気にかかり、母が買い物に出かけている隙にしのぶの私室（夫とは別室である）に侵入して盗んだ。

後日母から「ねえあんた、写真見なかった？」と聞かれたが、知らぬ存ぜぬで通した。

その件から数日、母は見るからに落ち込んでいた。

「……………」

早人は無言でその写真を裏返す。そこには男性の名前に『くん』がついたものと、どこかの住所名が書かれている。

字はしのぶのもので、住所の場所は杜王町の別荘地帯のものだ。

「…行ってみよう」

母親が浮かべていた、早人が見たことのない女の顔。

その表情が恋する乙女のものであると、愛をよくは知らない少年でもわかつた。くだらない小学生同士の恋愛で騒いでいる奴らが、浮かべているものとそっくりだったからだ。

彼は一つの考えを抱いている。

自分に無関心な父親。

夫や息子を疎ましく思い、写真に淡い想いを馳せていた母親。

——自分もしかしたら、二人の間に生まれた子供ではないのだろうか。

母親は容姿の類似点を考えてもしのはずだ。

早人が考えるのは父親が違う、ということである。

それならば父親が自分に無関心なことにも納得がいく。

デキ婚した二人であるが、薄々早人が自分の子供ではないと察して浩作は妻にも息子にも冷やかな態度を取っているのではないのだろうか。

ただ真面目な性格上、一応は面倒を見ているのだろうか。

対ししのぶの場合、おそらく早人が浩作との子供だと信じて疑っていない。

例えばここに、カッコウの雛の例を持ち出すとしよう。

親のカッコウはまず別の鳥の巣に托卵——自分の卵の世話を他の鳥に任せる——する。

その後孵化したカッコウの雛は他の卵、あるいはすでに孵化していた雛を蹴落として殺し、餌をもらってすくすく育つ。

このような事例が人間の場合でも過去に起こっている。

病院側が産まれた新生児を取り違え、親は本当の子ではない赤ん坊を自分の子供として育てていた、というものだ。

取り違えが判明したのは赤ん坊の血液検査が行われてからだだった。

——というように、赤ん坊の両親が実際異なっても、気づかないケースはある。

しのぶもおそらくは「浩作との子供である」という先入観により疑うことがない。

『杜王町浄禅寺1——128』——きつとそこに、真実はある」

かくして早人は夏休みが間近に迫った休日に麦わら帽子を被り、膨らんだりユツクを

背負つて自転車を漕いだ。

向かう先にいる人間は果たして、どんな人物なのだろうか。

緊張した面持ちで目的地に着いた。

いなければ家主が帰つて来るまで張り込むつもりだったが、車のシャッターは閉じられていたので、外出しているということはないはずだ。

「フウ……落ち着けぼく」

震える手でインターフォンを何度か鳴らし、待つこと少し。

「はい」と低めの男の声がし、左右にスライドするタイプの扉が開いた。

「ハア……全く、今度は誰です——ん？」

「……………あっ!!」

早人が思わず男の顔を指さしてしまったのは仕方ない。

なぜなら目の前にいたのは、一度図書館で会ったことのある男だったからだ。

「あなたがぼくの……パパ？」

その言葉に、吉良の目が完全に死んだ。

???????

退院してから数日経ち、吉良の精神もかなり回復してきた頃。

これはちょうど川尻早人が吉良邸に訪れる、数時間前の出来事である。

先日彼のところに、赤子を連れたジョセフが遊びに来て退院祝いの言葉を受け取つた。

その後、笑顔を浮かべたままの老人にお説教も受けた。

曰く、「無茶をするでない」等。

それから日が経ち、また赤子を連れた老人と——白い悪魔が再臨した。

そして驚くべきことに、白い悪魔の後ろに隠れるようにして、二つのお団子ヘアが特徴的な小さい天使がいたのである。

その天使の名は、空条徐倫^{ジョリー}。

「空条」からお察しのとおり、空条承太郎の一人娘である。

娘は父が帰国して間もなく驚異的なスピードで快方に向かい、目覚めてから数日も経

たず退院できるまでに至った。

医者からすれば「奇跡」としか形容できない出来事だった。

病室で父の「すまなかつた」という短い謝罪とともに、大きく温かい手が彼女の小さな手を握った時、徐倫は愛情を感じた。その愛情は深海のように深く、とても分かりにくいものだとも知った。

以来承太郎は毎日とはいかないが、定期的に家に帰ってくるようになった。

いつも涙を流して、帰って来ない父の帰りを待つばかりだった少女には、この上ない幸せな時間だ。

だが承太郎は学者という立場で、さらに矢の搜索やD I Oの残した禍根の後始末などに追われている。

杜王町でまだ為すべきこと（発見した新種らしきヒトデのより詳しい調査や矢の搜索など）が残っている彼は、足にしがみつき泣きじやくる娘に、らしくもなく動揺を表に出した。

そんな男に妻は呆れたようにため息をつき、そして言ったのだ。

——徐倫も一緒に連れて行ったらどうです？

空条承太郎はスタンド使いとしては最強の名を冠している。

しかし「父親」としては決して褒められた男ではない。

そこには家族を危険に巻き込まないように——という彼なりの思いがある。

ただそれを決して口にしない男なので、事情を知らない妻からしたら「あなたそれでも父親なの!？」と怒り心頭ものである。

不器用な男だとはわかつていても、耐えられる限度がある。

そして、「仕事で：」「でも滞在する場所にはおじいさんがいるんでしよう?」「だが：」「父親とこんな離れたくない娘を置いて行くの?」「……………」「私にもその覚悟があるってことを教えてあげますわ」——という流れになり、承太郎はスツと離婚届の紙を差し出された。あと踏んだくれるだけ慰謝料を踏んだくつてやる、という妻の漆黒の意思（夫の自業自得である）も感じた。

これに加えて娘のおさまる心配のない大噴火^{大泣き}を受け、彼は徐倫を日本に連れて行くことになった。

そして来日してから初日で、仗助とその仲間たち——仗助と共にいた億泰、デートしていた康一&由花子、ついでに変人漫画家——に遭遇した。

いくら何でもスタンド使いは引かれ合い過ぎである。

予め言っておくと、承太郎は家庭や職場でも基本的に英語を使っていたため、徐倫は少ししか日本語を話せない。

そんな少女はまず何を話しているのかわからぬ珍妙リーゼントな頭の男を指差し、『なにそのあたま?』と平然と言つてのけた。次にその男の隣にいた強面男には見た瞬間涙を浮かべ、安全地帯(父のコートの中)に避難した。

カップルコンビはいいが、しかしまだバランスを付けたラスボスが残っている。

漫画家は徐倫が承太郎の娘と知るや否や、好奇心を隠さずいつもの高圧的な態度で少女を怯えさせた。

彼女からすると、「ヘンな頭(二人目)の奴が、なんかもの凄い早さで喋つて近づいてきた」といった感覚である。

承太郎もまさか娘に「ダディとおでかけしたい!」とお願ひされ、心労が最高潮になるとは思わなかった。

怒髪天の仗助を全力で止め、億泰の顔を見てぐずった娘をあやすのに手こずり、康一&由花子カップルを見た娘の「ジョリーンもダンナさんほしい」に大ダメージを受け、娘を大泣きさせた漫画家にはスタンドを使い本気で殴り飛ばした。

その後徐倫はブチ切れた仗助や億泰、岸辺露伴（ヘンナ人）を見てすっかり他人が怖くなってしまう。

都合で出かける父に付いては回るものの、ベツタリとコートにしがみついて離れない。

承太郎は仕事の間、仗助たちに預けることもできず困っていた。祖父の散歩に同行させるのも、安全面で少し心許ない。

そんな時に祖父から散歩の誘いを受け、手をつけていた仕事がある程度終わっていた彼はその話を飲んだ。

流石に室内で遊びっぱなしというのも、子供の成長に悪影響だ。彼の気分転換としてもちようど良い機会だった。

「…何笑ってんだ、ジジイ」

「いやあ、今日もイイ天気じゃと思つてのお〜」

が、随分と楽しそうな祖父を見て、承太郎は嫌な予感を覚えた。ジョセフの散歩コースは承太郎も概ねだが知っている。

吉良邸に立ち寄っている、というのも聞いていた。

？
しかしまさか孫があの男と相性が最悪だと知った上で、行こうとしているのだろうか

まさかな？いや、まさかだよな。

そんな感じのやり取りが最強のスタンド使いの中で行われる。

結局着いたのは、一度訪れたことのある日本家屋。

孫にいじわるく笑う老人は余生を謳歌しているというより、子供がイタズラをして
いるかのようだった。

して、話は初めにまで戻る。

望まぬ来客に吉良の顔は嫌悪を丸出しにし、承太郎も学帽の鍔を手で掴みため息を吐
いた。

そんな中ニコニコ笑うジョセフが前に連れ出したのは、孫の背中に隠れている少女。

「わしのひ孫で、承太郎の娘じゃよ。キャワゆいじやろう」

「ひ孫……ああ、病気が治ったんですか」

「おいジジイ、何人の家の事情ペラペラ話してんだ」

「ノー？最近耳が遠くてのオ、承太郎が何と言ったか聞こえんかったわい」

大人の会話を他所に、徐倫はジョセフにしがみつかながらメガネをかけている男の髪を見る。

日本人は黒髪が多い。徐倫もまた父の遺伝を受け継いだため黒髪である。

アジア人の血を引くからと、彼女は周囲の子供たちにいじめられたこともある。

だがやる時はやる性格なので、男だろうが女だろうが物理的に黙らせてきた。

ただ母親と髪の色が違う、といじられた時はかなり傷ついた。

それが父のいない寂しさと相まって、髪色を変えたいとも考えたのだ。

然して今は、自分の髪は好きである。

だからこそ彼女は吉良の髪色に目を引かれた。

その色は本人に染める余裕がなかったため、金髪に近い。完全な金色でないことを踏まえ、少女は黒から金に変えたんだ——という思考回路に至る。

「Why is your hair golden? Hate it?」

(どうしておじさんのかみのいろはきんいろなの? きらいなの?)

吉良は突然出た英語に驚いたのか少し目を丸くした。

ジョセフが言っていた承太郎がアメリカ在住ということ思い出すと、ああ、と呟く。

男の口から出たのは、作家らしい一言だ。

「I like my hair because it's the same star color as you」

(好きさ、だって君と同じ「星」の色だからね)

「……!」

少女の瞳が輝いた。徐倫にとって「星」と言われると、自分の肩にある星のあざを連想させる。

その奇妙なあざは、好奇の目で他人に見られることが多い。目立つ位置にあるそれは、少女にとって中々コンプレックスなのだ。

しかし、星を「好き」と言ってくれる人もいる。少女にはこの上なく、その事実が嬉しかった。

「I also like stars! I'm Jolyne. Tell me your name!」

(ジヨリーンもおほしさますき! あたしジヨリーンっていうの。おじさんのなまえおし

えてよ！)

きつと普通の男なら、一直線にロリ道に突っ走りそうな可愛さである。

しかし吉良はすでに手フェチ道の達人であるため見向きもしない。むしろその、将来有望なカノジヨに意識が向いている。

「……………オイ」

スタープラチナ構えた承太郎の底冷えた声が、辺りに響く。

吉良は極めて冷静に彼の方を向いた。

「少女趣味とは、いい度胸じゃねエか……………」

「その寡黙さとは裏腹に、貴様はわたしが思った以上に娘にデレデレのようだな、空条承太郎」

「冷静ぶつてられるのも今の内だぜ」

「何だい？娘がいる前で暴りよ——」

瞬間スタープラチナの拳が、吉良の横に立て付けられていた郵便受けにブチ当たり、吹っ飛んだ。

「……………後で直せよな」

「ああ、直すき（仗助が）」

やはり相容れないのが、この二人である。

その後川尻早人の襲来を受けた吉良のS A N値は、完全に無くなった。

51話 追憶のソナタ

この暑さの中子供を立たせているのもいかなものかと考えた吉良は、早人を客間に上げた。

家に訪れる老人のために買っておいた茶菓子とコップに注いだ二人分の麦茶を盆で運び、少年に差し出す。

「あなたが『吉影くん♡』って人で合ってる？」

「……語尾に何か見えてはいけないものが見えた気がしたんだが」

「ああ、それはママの持ってた写真にね——」

少年がリュックから出した写真は、吉良が留年する前の大学四年時に撮影したものの。

講義を終えた後、出産休暇に入る教員を祝うついでに授業を受けていたメンバーで撮ったのだ。

撮影時期は吉良がしのぶに彼女がいたことを告げる前で、裏に書かれた『♡』から察して、甘い妄想を抱きながら書いたものであるとわかる。

これをもし他人に見られたら公開処刑ものだろう。

すでに息子が見てしまい、さらには吉良本人にも見られてしまったが。

そこらの空気の読めなさが、川尻浩作の息子であるということをひしひしと感じさせる。

「タクシーに乗った時運転手に住所を言ったが、彼女覚えていたのか？」

露骨に引いた男を尻目に、早人は菓子を黙々と頬張る。その様子は年相応の子どもに見えるが、侮つてはならない。

自分の父親が別にいると考え、あまつさえ突撃して来る子供である。

行動力や考察力は同い年の子供と比べるまでもない。

ただしその家庭環境と性格の歪みからか、考え方は歪んでいる。

「それで、『星ノ桜花』先生は、ぼくの本当のパパなの？」

「君まだ前のこと根に持つてるのか。嘘を吐いて悪かったよ、家の表札は見ただろう？」

「じゃあ吉良さんは、ぼくのパパ？」

「うん、違うよ。さあそれを食べたら帰ってくれ」

「証拠を見せてもらうまで、ぼく帰らないから」

真顔になった吉良は、少年のリュックに手を伸ばした。

しかし寸前で早人が取り、自分の膝の上に抱え片手で押さえながら、もう片方の手で菓子を食べる。

「やたら膨れていると思ったが……外泊道具一式を入れてるのか」

「証明してくれたらちやんと帰るよ」

「ハア…わかったよ」

物的な証拠になるとしたら、やはり血液型だろうか。自分の父親が本物かどうか疑う少年ならば、既に調べている筈だ。

それが無理なら別のアプローチを考えるしかない。

「両親含め、君の血液型を教えてください。それで判断がつくかもしれない」

「血液型はママがO型で、パパがB型だよ。ぼくはパパと同じB型。でもあなたがBかA B型だったらパパの可能性がある。【O×B】【O×A B】の組み合わせであれば、B型の子供が生まれる可能性があるから」

「前提としてわたしが父親かもしれないという考えは揺るがないんだね…」

「…ぼくはただ、確認したいだけだから」

頬をがめついリスにさせたまま、早人は真っ直ぐ吉良を見つめる。

瞳も容姿も、やはりしのぶに似ている。だが無機質の裏に隠れる人間臭さのようなものは、川尻と似ていた。

「少し待っていてくれ」

吉良は自分の健康結果が載っている書類を探した。毎年人間ドックを個人で受ける

ほどには健康に気を遣っている。

そのため大病を患ったことはない（精神除く）。

本人がどの場所に何があるか正確に把握しているため、見つけるのにそう時間はかからない。

家の中を調べようとしていた早人は戻ってきた男に捕まり、客間に連行された。

「油断も隙もないクソガキだな」

「違うよお……？ ぼくちよつと、おトイレに行こうとしてただけだもん……」

「どこぞの身体は子供、頭脳は大人な名探偵が不審な行動をして、大人に言い訳する時のような言葉を吐くな。第一トイレを使うならわたしの許可を取ってからしろ」

「……はあい」

「人に返事する時はそれでいいんだっただかな？」

「はいッ！」

やけっぱちの如く、首根っこを掴まれている少年は大声で返事した。

それに嘆息した吉良は持っていた健康診断の紙を見せる。そこに書かれていたのはA型。

「これでわたしが君の父親でないという明確な証明になった。もういいね？ 帰ってくれ」

「……………」

早人の表情が曇った。薄々本人も自分の父親が浩作であることをわかつていたはずなのだ。それでも疑ってしまう心理には、相応の理由がある。

——「愛」がわからない。

その様子はかつて人を愛する感情がわからなかった吉良に似ていた。

なぜ面倒事ばかり起こるのだろうか。

担当の件——彼も泉に思うところがあつたのか、担当こそ変えたが仕事をつつがなく続けられるよう配慮した——や、主人公格×3の襲来を乗り越えたばかりだということに。

だが迷っている子供を見捨てるほど、常識のない男ではない。

「君は自分が両親から愛されているか……いや、これだと少し違うか。愛されて生まれた子供であるか、知りたいのか」

「……ッ！」

「ハア……本当にしのぶくんと川尻くんは何をやっているんだか」

吉良は十年以上、川尻やしのぶと会っていない。

大学の同窓会で会える機会はあるかもしれない。

しかし陰キャで通っていた彼に話がかかったことは、「やめとけ！やめとけ！」が口癖だった男からくらいだ。

まあ、それも仕事を理由に行かなかった。

スパーでならしのぶと会いそうだが、これもまた彼が奥様ラツシユな時間を避けているので会ったことはない。

一度会って見るべきか――。

少年が自分のような異常者になることはあるまい。

ただ、正しい愛情を受けぬまま成長していくのは、彼としても忍びない。

吉良吉影という男が一人の少年に肩入れしようと、自ら面倒ごとに足を突っ込もうとしている。

必然と彼の頭に浮かんだのは、「星」を宿す者たちの姿である。

絆されたわけではない。ただ偶にはらしくないことをしてみてもいいかと、彼に思わせた。

ジョースターの血統は侮れない。

それが×4ともなれば、流星に殺人鬼のサガを抱えている男でも、多少は影響を受け

るようである。

単純に早人が二度と家に訪れないように、布石を積んでいるだけなのかもしれないが。

「そう暗い顔をするな、少年」

「…別に、ぼくいつもこんな顔だよ。ママも内心「気味が悪いヤツ…」って思ってるのも知ってるんだ」

「本当に捻くれてるね。せつかくだから君が生まれる前の話をしてやろうとも思ったんだが、その様子じゃ必要ないかな？」

「……え、ぼくが生まれる前の話って…!？」

「具体的にはしのぶくんにフラれた川尻浩作が、彼女の妊娠を知って復縁をすつ飛ばして指輪も無しにプロポーズした話かな」

それはストーカー事件の前、吉良がしのぶに会った際に聞いた話だ。

しのぶはプロポーズの件について爆笑しながら話していた。その表情は完全に、嬉しくて仕方ないという顔だった。

「お、教えてください！そのっ…パパとママのこと!!…ぼく、二人の馴れ初めとか、全然知らないから」

「いいよ。ただし長くなりそうだから、その前に扇風機をつけてからね」

さつさと帰らすためにあえて使っていなかったが、流石に無しの状況では吉良も辛くなってきた。

若干顔色の悪い男は自分の麦茶を一口胃に流し、過去へと想いを馳せた。

まだ彼女がこの世界にいた、あの頃のことを。

52話 みみみみみ

平日の午後、川尻しのぶは鼻歌混じりに花壇の花に水をやっていた。

ちようど今は艶やかな薄紫が美しいラベンダーが咲いている。

その花に吸い寄せられるように辿り着いたチヨウが、蜜を吸いフラフラと飛び去っていく。

「ハア…羨ましいわ」

今の彼女には「自由」がない。毎日家事をして、気づけばあつという間に一日が終わる。

偶にはシヨッピングの一つくらい行きたいものだが、気軽に行ける友人もおらず、夫も休日は部屋に籠りつきりで動こうとしない。

だからといって息子を誘えるはずもない。これが娘だったらまた違ったのだろうか。「刺激が欲しいのよねえ。もっと、こう…」

彼女の心理は今まさしく、夫がいない昼間に若い男を家に連れ込むような女のソレだった。

「あらっ？」

その時庭の手前、扉と扉の間に取り付けられた門扉に、やたら目につく髪色が見えた。見覚えのあるその色に、慌てて彼女はジョウロを落とし駆け寄る。

まさか、そんな都合のいい話があるわけない。

過去の日々に戻る中で彼女が抱いた幻想。

浩作ではなく彼と付き合うことができているならば、もつと刺激的な日々を送れたかもしれない、と。

「き、吉良くん…!?!」

彼女に声をかけられた男は、その声に反応し振り返った。

金髪に丸眼鏡という出立ちが昔の面影を残している。

髪の長さは相変わらずだが、普段は目にかかるように伸びていた前髪がワックスで綺麗に整えられていた。それでも数本落ちて緩くうねっている。

あと変わったことといえば、痩け具合が増しているところか。

「おや、誰かと思っただらしのぶくんか」

「そ、そうよ。えつと…こんな時間にどうしたの？仕事は…」

「ああ、今はフリーライターをやっているね。取材帰りなんだ」

ここを通りかかったのは吉良が意図的に仕組んだものであるが、しのぶが知る由もない。

住所については早人が荷物を置いたまま家を見回ろうとした隙に、キラークイーンでリュックの中身を調べた。

その中であつたマーク付きの地図を見て、自宅の住所を把握したのである。

「へえ、花を育ててるのかい。綺麗だね」

一歩庭に入った男に、露骨にしのぶの顔が朱に染まる。

話が花から過去へと移り変わっていき、彼女は上目遣いで視線を送る。

「そ、その…よければお茶でも飲んでく? 前にいただいたお菓子があるんだけど…まだ結構残つてて」

「いいのかい? 川尻くんが怒ると思うけれど」

「旦那は怒りやしないわよ。それより、吉良くんは大丈夫なの? 相手の方とか……」

吉良には彼女がいたはずだ。今も同じ人物かはわからないものの。

薬指に指輪を付けていないので、結婚はまだしていないのだろうか。

吉良は人差し指を口元に当てて微笑む。

「ナイショだよ」

ラベンダーに交わるような妖しい色がその瞳に浮かんだ瞬間、しのぶの心臓が早鐘を打った。

正しくコレだ、彼女の求めているスリリングな刺激は。

???????

それから小一時間程度、吉良はしのぶの会話に付き合った。

途中彼が紅茶のお代わりを頼み彼女がキッチンに向かい、戻ってきたところで話は進む。

「そう言えば息子は今年で小学六年生だったよね？早いものだな」

「え？ええ、そうだけど……早人^{アイツ}って容姿は私に似てるけど、性格とかどこか不気味なところは旦那に似てて……ちよつと怖いというか、近寄り難いのよね」

「昔は復縁してから甘い雰囲気だったけれど、やはり結婚生活ってのは難しいものなんだな」

「…まあね。正直昔に戻りたいわよ。あの頃は毎日が楽しかったもの」
時間はあつという間に流れていく。

吉良との再会でそれを痛感したしのぶはそこで、ふと思った。

「ああ、でも……そうか。アイツも来年で中学になるのね…」

今まで考えもしなかった事実を目の当たりにし、彼女の中で不思議な感情が生まれる。

いつも家の中の仕事で忙殺され忘れていた、息子の成長に対する感慨深さ。

いつから自分は息子の背を注視しなくなったのか。いや、顔さえまともに見たのはいつ以来だろう。

飲んでいたティーカップを持ったまま、しのぶはぼんやりと色づく水面を眺める。

彼女の変わった様子に気付いた吉良は視線を向けた。

「そう言えば前に仕事の都合で図書館で調べ物をしていたんだが、君の息子に会ってね」「え?」

「一人で随分と遅くまでいるから、少し心配していたんだ。親について聞いたら苦い顔をしていたよ」

「……アイツが帰って来るの遅いと思つてたけど、図書館にいたんだ」

「自分の息子のことなのに、君は何も知らないんだな」

トゲのある言葉に、しのぶの表情が強張る。吉良の冷えた雰囲気を感じ取つてしまつた。

子供とは親の愛情を享受する生き物で、親もまた子の成長を享受する生き物だ。

この相互関係が成り立たないならば、果たしてそれは親子と言つてよいのだろうか。

「私もあまり親には恵まれなかつたからね。早人くんの気持ちも少しわかるんだよ。あの子供は君の言うとおり、不気味でとても天邪鬼だ。だが、親の愛情を求めていることに気づけない姿を見ていると、哀れに見えて仕方ない」

「アイツが？親の愛情を？そんなわけ……」

「ないって、君は絶対に言い切れるのかい？」

「………それ、は」

昔は早人も幼稚園で描いた両親らしき絵を見せ、屈託のない笑顔を浮かべていた。

しかしいつからだだったか。夫が彼女や息子に無関心になつていき、彼女もまたそれに

呼応するように夫を嫌っていった。

その時はまだ、息子は笑っていた。でもあの笑顔はもしかして、辛さを隠してわざと明るく振る舞っていたのだろうか？

次第にしのぶは家事や夫のストレスで、甘える息子を適当にあしらうようになった。

ズキ、と彼女の胸が痛んだ。

ズキズキと、その痛みは増していく。

「あれ、私……早人の笑った顔なんて、いつから見えないんだろう」

しのぶの頬から一滴、涙が溢れる。

紅茶を胃に流し終えた吉良は、テーブルにカップを置いた。

「しのぶくん、これ」

男が懐から取り出したのは一枚の写真である。それは両親の話聞き終えた少年が帰る時、彼に渡したものだ。

曰く、自分が持っていないでも仕方ないし、父親にバレたら面倒だから——と。

吉良として自分の名前に『♡』が付いたものなど渡されても困る。

「え、そ、それ何で…!？」

「早人くんがリビングに落ちていたのを見つけたらしくてね。普段の両親の様子を見て何を思ったのか、川尻浩作が本当の父親ではないと考えわたしの家まで来たんだ」

はい、と彼がわざとらしく裏面を向けて渡すと、しのぶは顔を真っ赤から真っ青にさせ慌てて引つたかった。

そして吉良の生温かい目を見るなり、ソファアの背もたれにズルズルと下がり、顔を覆う。

死ねる。これは普通に死ねる。

「あんつのバカ!!なんてモノを吉良くんに見せてんのよ…!!」

「君、何で息子がそれを持って私の元へやって来たのか、わかってるよね?」

「……知りたかったのね。本当の親が私たちかどうか」

「自分が愛されて生まれた子供なのかどうか、知りたかったそうだよ」

「そう…なの」

「ニヤーン」

しのぶの言葉を遮るように猫の声が聞こえた。川尻宅で飼われているトラ柄の猫である。

あくびをこぼしたしのぶ^{主人}を他所に、客の膝の上を陣取った。

すかさずキラークイーンが勝手に現れ猫を凝視する。トラ猫はスタンドが見えない

ため呑気に毛繕いし出した。

「……………」

吉良は無言で相棒を引っ込めようとして拒否を食らい、仕方なくしのぶに視線を向けた。

「本当バカみたい！勝手に吉良くん家に行つて、写真見せるだなんて……………」

「しのぶくん？」

「…でも、今日はアイツの好きな料理にしてやつて…も、いいか……………」

「大丈夫かい？少し眠そうみたいだが」

そして、とうとうしのぶはソファーに身体を預けて眠り始めた。

吉良は膝にいる猫を撫でつつその様子を見て、シャツの左ポケットに入れていたピルケースを取り出した。

眠れないことを理由に、医者から処方された睡眠薬である。彼が薬が効きにくい体質ということもあって、かなり強めのものだ。

しのぶがキッチンに向かった間に、予め粉状にしておいたものを彼女のカップに混入させた。

「しのぶくんが紅茶のお代わりを淹れてからさほど経っていないが、中々効き目があるな」

『ニヤール』

「せめて遊ぶなら猫草とにしろ、キラークイーン」

再度無理やり引つ込めれば、今度こそ相棒は出て来なかった。

それから吉良は目的の場所に向かう。

川尻早人の話を聞いてから彼が感じていた疑問。それはしのぶの話を聞き、さらに深まった。

川尻浩作という男は一見して何を考えているかわからない男ではあるし、中身も少しズレているが、普通の人間の感性を持っている。

陰鬱な過去と、それに伴い生じた正義感を除いては。

彼は家族に対しては、人一倍強い愛情を抱いていたはずだ。

それが何があつたのかは知らないが、息子と妻から「家族に無関心」という認識を抱かれている。

ただ家族に対して、無関心なだけなのか？——と吉良は考えていたが、それも手袋をして川尻の自室に入った時点で変わる。

ちなみに髪をワックスで整えていたのも、念のため髪の毛を落とさないためである。

色についてはしのぶに気づかれやすくするためにあえて染色しなかった。

「…おいおい、奴はヒーロー物が好きじゃあなかったのか？」

部屋の中は書棚やベッド、テーブルなど必要最低限の物はある。ただあまりにも無機質過ぎるといった印象だ。

吉良はてつきりコレクション棚があり、そこに川尻の好きそうな少年向けのものが収められていると考えていたのだが、違った。

「わたしの推測が正しければ…だが」

彼が思い出すのは、鈴美の墓参りに向かう電車で川尻浩作と出会った当時の出来事である。

それこそ最近過去を思い出すことが多くならなければ、気づかなかったことだ。

川尻の独特な会話の間合いに胃をやられた吉良は、精神緩衝材に一つ分空いていた席にキラークイーンを座らせた。

その時川尻は首を傾げ、ほんの一瞬キラークイーンがいる場所を見た。

単にキラークイーンが座った風圧を疑問に思い、その場所を見ただけなのかもしれない。

しかし連日スタンド使いに遭遇している吉良の脳は、その出来事さえ今この時——自分の平穩を乱す「伏線」のようなものを感じられて、おちおち安眠もできやしないのだ。

それ以外にも、白い悪魔や高校生連中や変人漫画家や元担当のせいで、割と本気で睡眠薬を処方してもらっている。

「……………ん？」

彼が目をつけたのは、クローゼットの奥にしまつてあつた数冊の卒業アルバム。小学校から大学のものまでである。

大抵この類のものは実家に置いてきそうだが、川尻は持つていくタイプだったらしい。

ふとに気になつたのは中学時代のもの。

吉良はそれを手早く見ていき、川尻がいたクラス写真を見つけた。例の自殺した少女が誰か探してみたが、人数が多いため判断がつかない。

いや、そもそも転校していたので調べても意味がないことに、ページを捲りながら気付いた。

「ん、屋根裏…？」

視線を上げた時、屋根裏に繋がる場所を見つけた。

階段が出る部分に普段使われないような荷物が置いてあるため、長らく人の出入りがな

いと思われる。

スタンド飛ばし上の様子をうかがうと、使われなくなった家具や段ボールが置いてあり、埃も随分積もっていた。

無闇に開けなくて正解だっただろう。

「……………」

キラークイーンが見つけたのは、テーブルの上にあった十冊を超えるノート。

こちらも埃がかなり被さり、長いこと放置されていたようだ。そこにはタイトルも何もない。

しかし中身を見ると、どうやらそれが川尻の手記による日記だとわかった。

大学に入ってから始めたらしく、一番古いものは十年以上前の日付だ。数冊辿った後には喪服を着た吉良と出会ったことも書かれていた。

それから仕事や家族のことが書かれ、順風満帆な様子であった。ここら辺は完全にハラ見である。

「……………」

しかし途中で川尻の同僚——吉良の大学時代の友人らしい——と二人で飲みに行つた話に目が止まる。

大学が同じこと、さらに合コンを共にしたらしい（川尻は吉良以外の参加者を覚えて

いなかった)こと、また共有の知人がおり所帯を持つ者同士、自然とその知人が結婚しているのか?という話になった。

きつと吉良は杉本鈴美と結婚しているに違いない。

そう答えた川尻に、同僚は難しい顔をして言った。かつて杜王町で起きた『S一家殺人事件』も挙げて。

——アイツの彼女は、亡くなってるよ。

意外にも交友関係が広い同僚だからこそ知っていた情報だった。

その事実を知った川尻は、また、選択を誤ったと考えた。

幸福の中にいる自分は、不幸の元にいる男に何を宣ってしまったのか。

深い、深過ぎる罪悪感が川尻を襲ったのは言うまでもない。

元々彼は強い人間ではないのだ。弱いからこそ自分を歪めて、上手く生きる術を身につけているだけなのである。

そんな彼は罪悪感に縛られ、かつての想い人への罪悪感も吹き出した。

その頃の日記はひどくネガティブなものが多い。文字もまるで己の感情をぶつけているように歪んでいる。

そして日記には、こう続く。

【今日オレの前に、犬が現れた】

吉良はこの一文を目にした瞬間、後悔した。

突っ込まなくていいものに己は足を踏み入れてしまったと、自覚したからだ。

四章

53話 わんだフルデイズ

中高も夏休みに入ろうという手前、学校帰りにカフェ・ドウ・マゴへと寄った仗助と億泰は少し暗い表情を浮かべていた。

その理由は、二日も行方知れずとなっている重ちーの存在にある。

「スタンドの「矢」の件は粗方片づいたはずなのによオ、アイツどうしちまったんだか……」
「まあ、大丈夫じゃねエの。アイツのスタンドがヤベエのは、オレたちが一番知ってるしよ」

二人は宝くじの一件で、重ちーと戦闘になったことがある。

彼のスタンドは群体型で、鋭い歯や爪の攻撃は脅威そのものだった。

また、スタンド一体一体に備えられた針で忍ばせたアルコールや毒などを、人間の体内に注入することもできる。

総合的に重ちーの意外な地頭の良さもあり、かなり凶悪な能力となっている。

ただし本人は小銭集めくらいにしかスタンドを使う気はないので、危険性はない。

宝くじの件も元はと言えば、億泰と仗助が彼に悪知恵を吹き込んだのだ。その結果、金をめぐるって戦闘が起こった。

これが康一だったら「拾った物は、きちんと交番に届けなくちゃあダメだろ！」と助言するだろう。さす康（さすが僕らの康一くん！）。

以上から、心配とは言いつつも、重ちーならば大丈夫だという楽観的な考えが二人にはある。

さらにスタンド使いとの遭遇が無くなってきたことも、一つの気を緩ませる要因だろう。

「でも本当に、無事だといいいんだけだよ……」

ティーカップを傾ける仗助の姿は端正な顔立ちも受けて、周囲の女子生徒の目を引きつける。

熱烈な視線に気づかない男を見た億泰は半目になった。

「んだよ億泰、何だその面」

「いやあく別にイー？ 由花子と付き合ってから付き合いの悪くなった康一もだがよ、テメエまで抜け駆けしたらマジにオレは許さねエからな。本……当ッ、顔の良いヤツは羨ましいよなア〜!!」

「安心しろつて、この仗助くんは恋愛より友情を重きにしてっからよ」

「うっせエー!! テメエは自分に向いてる視線に気づいてから言えやコラア!」

鈍感系純情イケメンリーゼント改造学ラン男。キャラ設定の大渋滞だ。

騒ぐ億泰をよそに、ちょうど二人がいる隣のテーブルにカップルが腰かける。

チラツとそちらを見た億泰は今度、「目がアアア」と叫び出した。

「…あれ、仗助くんと億泰くん!」

「康一くん、あのバカ共じゃなくてこつちを見てちようだい。はい、あーん」

「んもおく由花子さん、一口サイズが大きいよお!」

大きなカフェをシェアして食べ進めていく由花子と康一。

一方でお隣の恋人いない組は、完全なるお通夜ムードだった。

そしてさらにその場所に空条親子と、赤ん坊を抱いたジヨセフも現れた。

美丈夫の子連れ男（中には老人にハートキャッチPUIキュアぶいした猛者もいる）に周

囲の女たちがざわめいたが、「うっとおし（娘チラ見）……いから静かにしろ!!」を食らい、瞳をハートにさせて去って行った。

カフェに残ったのは彼らと、新聞を読む客など一部となった。

承太郎が来たことにより、必然と重ちーの行方不明の話になる。

「仗助に頼まれ調べたが、目ぼしい情報はなかった。スタンド使いの仕業かはわからないが、虹村形兆の「矢」が原因で起こった事件を抜きにしても、この町は以前から行方不明や怪奇事件が多い」

「その…承太郎さん、もう一つの「矢」ってまだ見つかってないんすよね？」

「それについてはまだ手がかりもない状態だ」

「そうすか…」

矢がもう一つあったことに関しては、仗助を通して仲間内に伝えられている。

唯一仲間と言っているのか微妙な——皆が海で遊んでいる中、一人岸边にいるような露伴にも、康一から情報が渡っている。

本人は「康一くんには悪いが、僕には関係ないねッ！」というスタンスだったが。

「ただし一つ、気になる噂を聞いた。最近小学生の間で話題になっているらしいが——」

承太郎が出したのは『杜王町七不思議』という噂話だ。

「お前たちは何か聞いたことがあるか？」

「俺はないかなあ…億泰は？」

「オレもねエーゼ」

「そうか……」

承太郎も噂については知ったばかりで、まだ詳しい全貌は掴めていない。そのため学生である仗助たちなら何か知っているかもしれないと考えたが、情報は得られなかった。

その間、彼の娘はジョセフに甘えていちごパフェを頼んでいた。

「あ、あの……承太郎さん！それなら僕、その噂についてちよつと知ってますよ」

手を挙げた康一はどうやら、漫画家経由に噂話について聞いていたらしい。

曰く、実に興味深い話がある——云々と。

ちよつと、とは言いつつ、承太郎の知りかった大まかな『杜王町七不思議』の情報は得られた。

漫画のネタになりそうな話には耳が早い露伴に、仗助は「まああのヘンジンらしいっすね」と嫌味たつぷりに言う。

その時どこからか、咳が聞こえた。

しかしその音は、パフェを頬張る少女の「おいしーっ!!」という声にかき消される。場は微笑ましい雰囲気包まれた。

「誰だこの少女は？」「きつと天使よ」

通りすがりのモブたちは呟いた。

それから重ちーの行方不明が『杜王町七不思議』と関わっているかもしれないと考え、一同は七不思議の搜索へと打ち出た。

その裏に、もう一本の「矢」が隠されている可能性もある。

ただあくまで子供の間で流行っている噂話であるため、情報の正確性は不透明だ。

そこについては、調べる必要性のあるものを承太郎が選り分けた。

除外となったのは『人面岩』『人呼び海岸』『呪いの洋館』の三つ。

残りの四つの中で、承太郎の耳にも入っていた『見えないナニカ』に関しては、スタンド使いが関わっている可能性が高い。

万が一戦闘になった場合を考え、『見えないナニカ』には仗助と億泰が割り振られた。対して、康一と由花子（由花子の方は康一が傷つくことを恐れ、あまり乗り気ではなかった）は『決して後ろを振り返ってはいけない小道』に当てられた。

そして残り二つを承太郎が調べると決まったあたりで、解散となった。明日がちょうど休日のため、調査は翌日から行う。

重ちーのことを考えれば急ぐべきだが、準備を怠ってはかえって危険を招くかもしれない。

こういう時こそ、冷静さが必要だった。

承太郎は祖父と娘がいるテーブルに戻り、声をワントーン落とした。さながら密談でもするかのように。

「ジジイはどう思う」

「どう、とは?」

「やんぐうしげきよ矢安宮重清の失踪の裏に、あの男が関わっていると思うか?」

承太郎の差す「あの男」とは、「吉良吉影」のことだ。

相手が黒い精神を持ちながら真つ当に生きようとしていると理解した上で、敢えて彼は祖父に尋ねる。

承太郎は吉良に対し、未だ警戒心を捨て切っていない。

アレは例えるなら爆弾だ。一歩間違えればDIOに匹敵するとは言わずとも、この杜王町の平穏を脅かす「悪」となり得る。

「承太郎は彼を恐れているのか?」

「奴自身を恐れてはいない…が、この町の平穏を脅かす可能性があると考えれば、恐ろしくはある」

「まあ、確かに彼奴の根っこはDIOと同じ真つ黒じやろうな」

ただ、ジョセフにとつてはそれまでなのだ。

根っこが黒いだけで、生えている幹や葉は普通の人間と変わらない。そこがまた歪で、恐ろしくはある。

「彼は放っておいた方が何もせず、静かに暮らすと思うがのう」

「いや、目は置いた方がいいだろう。いっどこで、何をきっかけに暴走するかわからない」

「…フム、やはり監視をつけておつたのは承太郎じゃったか」

「ああ。外させたのがジジイだってことも知っている」

「お前は本当オ……に、正義感が強すぎて危なっかしいのう。下手に深入りすれば、逆に危ないのは自覚しておるだろうに」

「それでも、引けない一線ってのはある」

仮に吉良が人を殺してしまつてからでは遅い。それはジョセフもわかっているはずだ。

「まあ、わしらが関わつてしまつた時点で、放つておくもクソも無くなつたんじゃがな」

奇妙な運命によつて引き寄せられた者たち。

その中で殺人鬼のサガを背負った男は、平穩からさらに程遠くなった生活をしている。

特にここ最近はひどい有様だ。ジョセフも久し振りに顔を見て、強い危機感を抱いた。

恐らくあと一歩落ちれば、人間を殺す。

今まで隠していた手への執着——承太郎は少女趣味と認識したようだが——は、吉良が徐倫を見ていた時に感じた。

正直手以外を付属品としか見ていないあの視線は、ジョセフでさえ悪寒がする。

あれをただの「手フェチ」で済ましてはならない。

「あと一歩じゃ、彼奴が魔道へ落ちるのはな。追い込んだ責任を取るのも大事じゃろう」
「……………」

「そう己を責めるな、承太郎。わしや仗助含め、彼奴とは相性が悪い。この結果も仕方な
かろう」

だからこそジョセフはひ孫まで連れ出して、日陰で死んでいる男を日向へ引き戻している。

そんな日陰の男としては、オレわたしの側に近寄るな案件だ。

「お前も何か頼むといい。休息は誰しも必要じゃ」

「…………ハア、コーヒーを頼む」

「Hey, Daddy! I'll give Daddy Jolene's parfait too!」

(はいダディ!ダディにもジョリーンのパフェあげる!)

徐倫は最後に取りつておいたいちごを生クリームの上に乗せ、スプーンで父の口に運ぶ。どうやら由花子が康一にしていたのを真似ているらしい。

これにはお父さんの口も緩んだ。しかしニヤける祖父に気づき、一瞬で無表情に戻った。

「おお、そう言えば『ナナフシギ』の件…じゃったかの? 『悪魔』についてはわし、分かったかもしれないぞ」

「…何?」

娘が手を滑らしたせいで生クリームが口の横についたまま、承太郎は眉を顰める。

ジョセフは以前、吉良邸に訪れた時に聞いた世間話を思い出した。

そもそも定期的に吉良の家に行っているのは、セラピーもどき兼、男の情報を得るためである。

落ちた場合を考え、弱点は多く握っておいた方がいい。落ちないことを切に願っているのだが、何があるのかわからないのが人生というものだ。

「彼は小学生の頃、運動が苦手だったそうでの。プールで溺れかけたり、運動会で少々オイタをしてしまったらしい」

「…なるほどな。動物の呪い云々は、奴の人殺しの性質を考えれば妥当か。…………胸糞悪イが」

「人を殺めておらんだけ、まだマシと考えねばならんじやろ」

一先ず調べるべきは、残り一つの『影犬』となった。

「ところで承太郎」

「ああ、わかっている」

ジョセフに指摘され、口元をナプキンで拭ってから立ち上がった承太郎は、彼らから少し離れた席にいる人物に近づく。その男は顔を新聞で隠していた。

元はもつと遠くにいたはずだが、二人が小声になってから近づいて来た。新感覚ホラーだろうか。

「よお、先生」

先生——と言っても、漫画家の方の先生は、承太郎に新聞を取られて苦い顔をし

た。

青年の額は包帯で覆われ、右頬にもガーゼが貼られている。幸い仕事に使う利き手は無事だ。これは彼が徐倫を大泣きさせ、さらに「うるさいなあ…」などとのたまった結果、父親にボコされてできたケガだ。

それでも全治一週間のケガは、仗助のプツンと比べれば軽いものだ。しかし一応と、二週間の休載をもらっている。

「……」の間はすみませんでしたね、娘さんを怖がらせて」

「いや、俺もすまなかった。ジジイがあんたの作品の休載を知って落ち込んでな。悪かったと思っっている」

「それはジョースターさんに、ですか？それとも僕に？」

「両方だな。——で、本題なんだが」

岸辺露伴はネタ作りをしていた際、偶然この会合に遭遇した。

気に食わない仗助の発言について咳をしてみました。承太郎とジョセフ以外にはバレていなかった。

「康一くん、『杜王町七不思議』の話を持ち出したのはあんただそうだが、調べているのか？または、調べるつもりなのか？」

「ハハッ、勘弁してくださいよ、承太郎さん。僕は漫画のネタになりそうだから調べたが、話のほとんどは調べればすぐに偽物だとわかる。子供の創作話に、この岸辺露伴がわざわざ時間をかけるとでも？あくまで話についても、外でスケッチしている時にガキ共が話しているのを聞いたのが気になって、ちよつと調べただけだ」

「…まあ、そういうことにしておこう。仗助たちの邪魔はしてくれるなよ」

「ハン、誰がすき好んであのクソツタレ仗助に関わるかッ！安心してくださいよ、貴方たちに関わる気はないのでね。じゃあ僕はこれで」

立ち去った漫画家の背を見て、承太郎は溜息を吐いた。

「やれやれだぜ…とんでもなく気難しい先生だ」

???????

皆大方、岸辺露伴という漫画家が、”ある属性知らない場合は四部の最後、杉本鈴美との別れのシーンを参照。”を持っているのはご存知のことだろう。

それは俗に言うつんでれなるものだが、この男の行動全てにそれが当てはまるわけでもない。

承太郎の「気難しい」というのは、言い得て妙だった。

「ああ、そうさ。奴らには関わらないし、「調べるとでも？」——と言った。しかし七不思議に関わらないとは言っていないし、調べないとも僕は言っていない。第一先に予定を立てていたのはこちらだ。文句を言われる筋合いはないね」

仗助たちと出会った翌日、露伴が訪れたのは九州に位置する種子島。

『杜王町七不思議』の中で彼が最も興味を抱いたのが、『影犬』の件である。

どれも理由がつけられる話の中で、『小道』と『影犬』は明確な理由づけをすることができず、実際に調べる価値があると考えた。

だが『小道』については、露伴の中でセンチティブな部分があった。

あそこは当時杉本鈴美の家があった場所だ。調べていれば、必然と当時の記憶に引きずられる。

ゆえに調べるのは『影犬』にすると決めた。

康一と由花子が『小道』を調べると聞き気になりはしたが、友人の康くんなら大丈夫

夫だろう、という確信がある。

ただ『影犬』を調べるにしても、うわさ自体不確定なものが多い。

——影に潜む犬。人の願いを叶える、或いは不幸へと導く。

その少ないキーワードを元に露伴が調べて可能性を見出したのは、犬にまつわるという怪異の伝承。

人はそれを『犬神』と呼ぶ。

犬神は人間に憑く狐などと共に、西日本で多く語られる話だ。

内容は諸説あるが、一例を挙げるとすれば、まず犬の頭部だけ地中から出して生き埋めにしておく。その犬の前に食物を置いて餓死する直前に首を刎ねると、その頭部が飛んで食物に食いつくのだ。そして地面に落ちた首は焼いて骨にし、器に入れて祀る。すると永久にその人間に憑き、願望を成就させる——というものだ。

人の願いを叶えるとはつまり、人の願望を成熟させるということである。

『犬神』が何か関連していると踏み、露伴は伝承の多い西日本へと訪れた。

調査する候補はいくつか上っており、初めはその中の一つである犬神の伝承（現地では「イリガミ」と言うらしい）を辿る。

「まあ、怪異だか何だかを信じろと言われても、難しい話ではあるがな」

しかし己の好奇心を満たさぬ行為こそ、露伴の中で愚かなものはない。

空港から出た彼は眩しい光と暑さに苦い顔をしつつ、一步踏み出す。

さすが種子島。杜王町とはレベルの違う観光スポットということと、休日ということもあり、客が多い。

立ち止まっている漫画家の横を、複数の人間が通り過ぎて行く。

喉の渇きに、露伴は自販機で買ったミネラルウォーターを鞆から取り出す。

「おっ……と」

だがスケッチブックを傍に抱えていたこともあり、つい落としてしまった。

転がったそれは、男のスニーカーに当たり止まる。

「落としましたよ」

「……ああ、すまない」

拾われたペットボトルは男の手から露伴に渡されたが、双方お互いの顔を見た瞬間に固まる。

男はバランスの形をしたヘアァーバンドを見つめ、対し漫画家は眼鏡の奥の瞳を穴が開くほどガン見する。

「岸边、露伴……」

「吉良吉影……!!」

どうやら奇妙なしがらみは、杜王町から出たとしても付いて回るらしい。

54話 犬も歩けばバランに当たる

しのぶくんを眠らせた後、わたしは十冊以上にもおよぶ川尻浩作の日記を入手した。ノートは鞆に入れ、屋根裏から落ちたホコリは綺麗に掃除した。

そして証拠を隠滅したらリビングに戻り、ソファで本を読みながら一時間ほど待つ。

「げっ」

帰宅したら早人少年は、こちらを見るなり苦い顔をした。

あらかじめ奴が我が家に来た時、適当な理由をつけてしのぶくんと会おうと考えていることを匂わせておいた。

早人少年は自分でも気付いていないようだが、マザコンだ。

言動に母の愛情を求める心理がひしひしと伝わっていたからわかる。

ゆえにどこぞの男が母親に近づこうとしていると知ったら、危機感を抱くと考えた。

以前の少年ではきつと、そのような思考になることはなかっただろう。

わたしが川尻夫婦の過去を伝えたことで、多少なりとも自分が「二人の愛」の中で生まれたことを自覚できたのだ。

以前は川尻浩作のように死んだ目だったが、今は一転して意志のある瞳をしている。
「やっぱり来てたのか、あんた……」

「客人に随分な態度だな」

「ママは………えっ」

少年はそこで、奥のソファで眠る母親に気づいた。

「ま、ママに何したんだお前?!この時間帯ならドラマを見ているか、買い物に出かけてるのに……!!」

「何もしていないよ。というかやたら詳しいな。彼女も家事ばかりで疲れているんだろ
う。紅茶を飲んで話していたら、段々うたた寝し始めてね。何も言わず帰るのも悪いか
と思つて、起きるのを待つていたんだ」

「……………」

「おいおい、人妻に手を出すほど非常識な人間じゃないよ、わたしは」

早人少年はしのぶくんが飲んでいたカップ（残っていた中身はすでに捨てた）を手に
取り、ぐつすり眠る母親を見つめる。

着衣の乱れなどないかひとしきり吟味して、一先ず何もなかったと判断したようだ。
「本当に何もしてないんだよね?」

と思つたが、まだ疑われていた。

確かにこの状況じゃあ怪しまれても仕方ないし、実際真つ黒である。

川尻早人にはわたしが両親の知人であると告げ、こちらの情報は『地味な文系の学生』程度しか出さなかった。

だがしのぶくんと一定の交流があったことは知れている。

「安心し給えよ、わたしには愛する人がいるからね」

これは嘘偽りないわたしの感情だ。

少し気まずげに視線を逸らした少年は、そう、と小さく呟く。それ以上追求してくることはなかった。

「偶にはゆつくり休ませてあげるといい。しのぶくんが起きるまで、家事でも手伝ってあげたらどうだ」

「え、で……でもぼく、料理とか作ったことないし……」

「これを母親と交流を深めるきっかけにしたらいじやないか」

「……なる、ほど」

「君が帰って来たし、そろそろお暇させてもらうよ。彼女には後で事情を伝えておいてくれ」

睡眠薬の効果は人にもよるが、そのまま朝まで安眠コースだっただろう。

その後、自宅に帰ってから日記を読み込んだ。

そして数日かけ、川尻浩作の歪む鍵となった自殺少女について調べた。

該当する中学校は、奴が持っていた卒業アルバムと同じではない。何せ川尻は中学の途中で引越している。

まあ小学校の方を調べ、その学区内と重なる中学校を割り出せばすぐに見つかった。この中学名と、当時の自殺した少女の記事を探せばドンピシャだ。

こんな面倒な真似をせずとも川尻が転校した中学に電話し、元いた学校の名前を聞けばよいのだが、一個人に在籍していた学生の個人情報をも簡単に教えるわけがない。

しかし逆に言えば、何らかの事件があった人物（自殺した少女など）には、メディアの人間を装い情報を得ることもできよう。

この方法で少女については聞き出した。

KO談社側にこの事件を次作に活かしたい旨を話し、協力を取り付けたのである。

わたしが作家「星ノ桜花」の担当となり、事件を探る。

編集を証明する名刺も作ってもらったが、向こうの仕事が思った以上に早く少々引

いた。

だがこれでこちらから電話し、後日本当に出版社にいる人間なのか確認されても、「いますよ（嘘）」と返せる。

教育機関はガードが固くて面倒だ。

もちろん学校側のセンチティブな問題に、すぐによい返事をもらえるはずもなかった。

そのため何度か電話し、下手に回りながらこちらの存在を印象づかせ、アポ無しで向かった。星ノ桜花先生を連れて。

ただ、わたしは星ノ桜花ではない。その編集の「泉飛鳥」である。

編集長に清楚な服を着るよう言われ、羽田空港に寄越された女は、スーツを着たこちらを見るなり唾然とした。

それこそまるで死んだ人間が生きていた、と言わんばかりに。

そりゃあ詳しい話を聞かされぬまま空港に着いたと思えば、以前担当していた作家がいるのだ。意味がわからないだろう。

意図して彼女に情報を伏せるよう頼んだのはわたしなのだが。

散々人の心を乱した腹いせは、その表情を見て少しできたように思う。

「星ノ先生、今日はよろしくお願ひします」

「え?.....え?」

「星ノ先生、よろしく、お願ひします」

「は、えっ.....??」

この女は演技が上手い。いや、演技というより、一度「そうだ」と思い込んだものを、自分の中で本当に「そうなのだ」と認識してしまう。セルフ洗脳だ。だからわたしの洗脳もかかりやすかったのだろう。

このわたしが一杯食わされたのだ。連れて行くには適任である。

そのまま状況を説明しつつ、飛行機で約二時間かかる目的地に向かう。

その間無言でいるのもどうかと思い、軽い世間話をした。

彼女から事情を聞き、エステ「シンデレラ」に行った際もろくに話せなかったため、かなり久し振りだ。

泉くんはどうやら妹離れのため、別で暮らし始めたようである。仕事も滞りなく行えているらしい。

「そうですか。彼氏もできてよかったですね、先生」

「いや、できてないんですけど」

「拳式はいつなんですか？へえ、来月ですか」

「あの、せん……じゃなかった。泉くん、ふぎけるのはよしてちょうだい」

「ふぎけるのは君のむ、ごう」

人が話している最中だというのに、肩を容赦なく叩かれた。

緩めの白いワンピースを着たところで、誤魔化しは利かないことを学んだ方がいい。

「何で、私なんですか……」

確かに。この女が適任であるとは言っても、他の女を見繕うことはできただろう。

しかし都合上、こちらの顔を知っているという利点が何より大きかった。

向こうの中学に一人で行って編集を名乗ったところで、門前払いされる。

だが「星ノ桜花」本人を連れて行けば話は別だ。ネームバリューの大きさから、適当

にあしらうことはできないだろう。

そもそも性別や年齢の不詳な本人がわざわざ出向くほどに、興味のある事件なのだ。

答えざるを得ない状況を作る。それが重要だ。

それに出版関係だからと、向こうが「社会的制裁を加えられるかもしれない……」な

どと、勝手に裏を勘繰ってくるので助かる。

まあ、その最たる理由の他に、個人的な理由もある。

自分から手放しておいてなんだが、それを差し引いての問題が生じている。

「眠れないんだ」

「…ええ？」

入院期間を含めて二週間弱、睡眠薬なしでは眠れない状況が続いている。

元々薬や麻酔が効きにくい体質なため、かなり死活問題となっている。

どうも、人の体温がないと駄目なんだ。熱が欲しい。わたしを満たしてくれる熱が。誰にでも流れている熱が人間にはあるだろう？

生温かいそれを浴びさえすれば、己の「生」を自覚できる。

即ちそれは、殺人欲求に他ならない。自分でもわかる。もう本当に、限界だ。

観光客の女を引つ掛けようとも思ったが、美しい彼女しか見えない。

女を抱いて眠る前に、殺して奪った冷たい彼女に微笑んで寝ることになる。

想像しただけで何とも幸福になれるが、今はあの空条承太郎やジョースター氏がいる。殺したら秒でバレて終わりだ。

「君の体温なら、眠れると思うんだ。偶にでいいからさ」

「それって…どういう、意味で…」

「わからないが、眠れる。着くまで頼むよ」

「え、ええ…?!?ちよ、せんせつ…!?!」

あの時だ。病室に彼女が入って来た後。

自分でも意味がわからず、涙を流していたわたしを引つ張ってくれた感触。それが心地よくて、ふとした時に思い出す。

常闇に落ちぬようわたしの手を引いてくれた彼女の——鈴美の、あの白くたおやかな手が脳裏に過るのだ。

この手があるから、まだ落ちずにいられる。

手の主が鈴美でないことは分かっているはずなのに、おかしい話だ。何故自分は泉くんの手で、亡き彼女のことを考えるのか。

顔が同じだったからか？だが元に戻った今も、妙な心地良さを感じている。

「約束は……破れないよなあ…」

動物が進化して環境に適応する生き物なら、人間は環境を変えて自分に合わせる生き物なんだったか。

ジョースター氏が言っていたように、過去に囚われたままではいけないのだ。

彼女がいなくても、鈴美が残してくれた熱が今もこうして、わたしの中で生きている。変わらなくちゃあいけない。わたしも、「人間」を名乗るなら。

でない、人間失格だ。

わたしの救いの「手」は杉本鈴美しかない。

でもその手を心で握り続けられ、大丈夫。だから、

「大丈夫だと……言ってくれ」

「……おん、大丈夫やで、泉くん」

「あ……君、そう言えば、関西しゅ……し」

彼女の膝に横になると、強烈な睡魔にほぼ一瞬で意識を持っていかれた。

その後、件の少女について情報を得られた。

学校側からは、作品を読んでも事件そのものが特定できないようぼかすならば、と条

件を受けた。

また、執筆したものを学校側の査定を通してから発表する代わりに、向こうは「星ノ桜花」の情報について一切明かさないことも契約に含めた。

問題が発生した場合は、問題を起こした側が責任を取ることによって双方意見を交わした。

少女の顔は、日本人形のような和のテイストの愛らしい顔つきだった。

名前は、「中村 唯^{ゆい}」。

その両親の情報についても入手した。父親の方はすでに病気で他界していた。

母親の方はスナツクのママをしており、泉くんを一旦残して店に訪れた。

歳は還暦間近。タバコと香水のダブルパンチが中々に強烈だった。

女を誑かすのには慣れている。

そうして酒を飲みつつ他愛ない言葉をかわし、娘の情報を聞き出した。

最初は「独り身なのかい？」と持ち出して。

向こうにわたしの奢りで酒を飲ませれば、女は暴力を振るう旦那がいたことや、娘がいたことを話した。

ほろ酔いになり饒舌になった女は一瞬、憂げな顔になる。

——まああの娘は、私の本当の子じやなかったんだけどね。

曰く、30年以上前、夜中にコインランドリーで布に包まれて置かれていた子供を拾ったそうだ。

誰の子かもわからない。普通なら警察に届けなければいけないところを、彼女は自分の子にした。

「当時結構大きくなつてた子を、流産しちまつてき」

だから、子供が欲しかった。

それは赤子が作れない体になつてから、余計に深まつた感情だった。夫の暴力も元を辿れば、子が流れてしまったことによる。

赤子の出生届には、医師か助産師の書いた出生証明書が必要となる。それについては知人に頼み込み、書いてもらったそうだ。

犯罪である行為をなぜ語つたのか、わたしは尋ねた。

「どうしてだろうね。……ああ、そうよ。あの子が生きてたら……お兄さんぐらいだったから……」

褒められた母親ではなかったことを、女は自覚していた。

夫が娘に暴力を振るう時は自分に向くことを恐れて止めず、金遣いの荒い男のために

水商売に明け暮れ、ろくに娘の世話ができなかつた。むしろ、ストレスで怒鳴り散らしてしまふこともあつた。

それでも、愛情はあつた。

でなければ酒を飲みながら、泣くことなどできまい。

泥酔した女に、本当の両親の手がかりになるものがないかも聞いた。

調べるにも、情報がまだ足りていなかったからだ。

すると、女は思い出したように呟く。

捨てられていた子供と共にあつた紙の存在。

彼女はその名前から、娘に名前をつけた。そこには親の名前らしき苗字もあつたのである。

『入神 唯』

それが、自殺少女の本当の名前だつた。

これを調べれば珍しい苗字であり、全国に数えられる程度しかいないことが判明した。

その名のルーツが種子島にあることもわかり、同時にその地域に伝わる『犬神』伝承についても知ったのである。現地での呼ばれ方は「イリガミ」だそうだ。

日記でわかった川尻浩作の犬の件は、『影犬』の件で間違いない。

詳細は長くなるので今のところ伏せるが、その犬が自殺した少女に何らか関係していると考えるのは、事前に日記を読まずとも必然のことだろう。

何せあまりにも偶然の一致が過ぎている。

それで、なぜだろう。なぜバラン小僧と出会ってしまったのだろう。

まさかただの観光目的ではあるまい。『杜王町七不思議』の取材の延長だと話せば、向こうは高圧的な態度のまま、ホテルに向かうわたしに付いてくる。

「正体不明の、あの星ノ桜花自ら取材だって？些か信じられないね」

「元からわたしは気になった事柄については、自分で調べているさ。犯罪ストレスを仕出かしていきそうな君とは違うがね」

チェックインを済ませたが、どうやら泊まるホテルまで同じらしい。

わたしが『七不思議』の話をした際に小僧の表情が一瞬変わったため、目的は向こうも同じと見える。

だが同じだからといって、共に行動する気はない。ないというのに何故付いてくる。

「僕だって貴様となんぞ嫌だが、ここで同じ理由を持って出会ってしまつた以上、「運命」ってヤツなんだろ。調べるなら一人より、協力した方が早そうだしな」

「君は他人と協力できるようになったのか……？あの『協調性』という言葉が掠りもしなかつた、着ぐるみブレイカーの貴様が……？」

「……着ぐるみブレイカー？いったい何の話をしているんだ。ともかくどうする。この僕が有効的な方法を提案してやつたんだぜ、決めるよ」

提案、か。そう言えば一度もコイツは「僕に協力しろ」とは言っていない。

勝手に人に付いて行き、出会つたのが運命などと言って、協力した方が早そうだと述べているだけだ。

つまるところ、わたしから言わせようとしている。

この面倒臭い青年の性質上、「じゃあ協力して探そう」などと言つたが最後、「だが断る」と一蹴されて終わりの気しかない。

ならば答えは、無視して情報集めに専念することだ。

減つた荷物を持ち歩き出せば、後ろから肩を掴まれた。見れば齒を噛みしめた青年が怒りを露わにしている。

「今すぐ屈辱的な気分だ……この岸辺露伴が誘つたというのに、それを断る気か……」

「……普通に、「僕も一緒に探すよ」って言えないのか、君」

なんて——なんて気難しいんだ、この男。

よく鈴美は幼少期のコイツの面倒を見れたもんだな。いや、逆に彼女が面倒を見ていたせいで性格が歪……んだわけではないか。

コイツのは元からであり、空条承太郎とは別のベクトルで付き合いたくない人間だ。

「…わかった、わかったよ。じゃあ協力しようじゃないか、岸辺露伴」

「フン、それでいい。初めからそう言っていればよかつたのさ」

関わり合いたくないため断って欲しかったが、無理なようだ。

しかし別のことは聞かれた。

「ところで次作は何について書かれているんですか、先生」

奴が付いて回る狙いは、恐らくこれだったのだろう。

初っ端から憂鬱な気分追いやられた、『犬神』調査の幕開けである。

55話 犬も朋輩鷹も朋輩

初日。吉良と露伴は『犬神』について聞き込みをした。得られたのは『馬立の岩屋
(犬城海岸の北端に位置する)』の情報だった。島の観光スポットの一つとして知られて
いる。

場所は種子島の東海岸、中種子町なかたねと西之表市にしのおもてとの境に近い場所にあり、本島屈指の景勝地である。

そこに赴けば自然の洞窟や、奇岩巨岩の美しい海岸を拝むことができるだろう。

名前の由来は、第10代島主——種子島幡時はたときが修験道の犬神使いであり、その修行の場があつたことにちなむと言われている。

二人はその場に向かったが特に収穫はなく、浜辺に座って夕陽の沈む海を眺めた。

それから二、三日と調査は進む。途中で露伴は「そろそろこの場所の調査を切り上げるべきだ」と話した。

彼は週刊連載があるため長居はできない。

残りの休載期間と描き溜めておいた分を含めて、露伴の猶予は二週間程だ。

しかし、この場に留まる旨を話した吉良に何かあると察し、そのまま種子島での情報収集を続けた。

島の住人は「ああ、犬神イリガミけ？」と、その名を知っている者は多かった。

ただ伝承について深く知る者や、実際に見たことがあるという人物は中々見つからない。

また、調べる中で悩みの種となったのが方言の薩摩弁だ。

古い伝承を知っていそうな老人たちに聞き込みを絞っていたため、殊更訛りが強かった。

例文を挙げるとすると、

【薩摩弁】へえ、あによたち大学関係んしなんけ。わざわざこげん田舎まで来て大変やなあえ。

(訳) へえ、お兄さんたち大学関係の人なんかい。わざわざこんな田舎まで来て大変だねえ。

——と、このようになる。

二人ともリスニングした単語を拾い、聞いた内容を既存の知識に翻訳するだけでかなり労力を使った。

閑話休題。

進展があつたのは四日目の昼のこと。

滞在中に何度か足を運んでいた定食屋で、エクボがチャージミングな年増の女店主から情報があつた。

ちなみに聞き込む際に二人は身分を偽っている。

吉良が民俗学を調べている学者で、露伴がその付き添いの大学生という体だ。

漫画家の方は設定上目立つスケッチブックを持ち歩くわけにもいかず、かなり機嫌が悪い。

「あら、色男のお兄さんたちじゃない。また来てくれたのかい」

女店主は観光客の対応に慣れており、二人は最初驚いた。

店主が年寄りとまではいかないが、そこそこの年齢に見えるにも関わらず、聞こえたのが綺麗な標準語だったからだ。

「お兄さんたち、まだ『イリガミ様』の件を調べてんのかい？」

「ええ、目ぼしい情報が得られておりませんのでね」

「……………草食動物かよ」

毎食のようにサラダを食べる吉良に、漫画家の胡乱な視線が向く。

一応露伴は学者と大学生という設定は守って行動しているので、これでもかなり譲歩している。

「そうねえ、どうしようかしら……………」

エセ学者の体調が良さそうには見えない顔と、苛つきが透けて見えるエセ大学生に、女は言葉を濁した。

その女の様子を見て、吉良は行動に移す。コップの水を取ろうとして、あたかも誤って箸を落とした風を装う。

客の落とした箸を取ろうと伸ばした女店主の手と、吉良の手が触れる。

「あつ、すみません…」

彼がはにかんだ瞬間、店主のハートが掴まれた。

一部始終を見ていた漫画家の青年は、啞然とした表情を晒す。

明らかに常習犯のやり口だった。

その後、渋りつつも女が話したのは、この島から船で約二時間かかる孤島の存在だ。

その島の人口は百人にも満たないらしく、古くから独自の文化が栄えているらしい。今でこそ交通の利便化で行き来しやすくなったものの、今でも一昔遅れた暮らしをしているようだ。

「とは言っても、あつちは電気が通っていないし、この島からの物資の運搬もそう多くないのよ。船を扱う人間が限られているから。時代が遅れてるのは避けられないことさね」

島では『イリガミ様』が崇められ、崇拝されている。

種子島の住人が犬神を「イリガミ」と言うようになったのも、その島の影響ではないか、と店主は語る。

そもそも話。二人が聞いた人間の中で、孤島の件を知っている者は少しはいたはずだ。

それでも敢えて彼らが教えなかったのには、理由があるという。

「それこそ今では人の出入りが自由になったけどね。私が子供の頃なんかは、他所の人間が島に入ることさえ拒んだのさ」

大昔、それこそ江戸時代にまで遡れば、侵入者を殺していた——なんて噂もある。

その時代から向こうの島に人がいたのかはわからないし、所詮ただの噂でしかないが。

だがこの島の人々は今も不気味がりで、口を閉ざしている。

それでも偶然島の話を知って、船で向かう観光客はいるらしい。

考え込むように海鮮丼を食べていた露伴が箸を止め、人差し指を店主に向ける。

「随分あんたらは怖がつてるようだが、まさか島に行つた人間が帰つて来なかつた——
なんて訳じゃあないだろ？ 少なくとも島に物資を運ぶ船があるくらいだし、人も乗せる
ことを許容している」

「そりゃあ人が帰つて来なかつたら大事件ですよ。あくまで私たちはババ様やカカ様
ちから聞いた話を受けて、怖がつてるだけに過ぎないよ」

ただ総合して、人は滅多に立ち入らない場所。

女は言う。その、島の名前を。

「あの島は『入神島』^{イリガミ} って呼ばれてるよ」

???????

女店主から『入神島』の話聞いた後、二人は漁港に訪れ、島へ物資を運搬している船——もといその人物を探した。

初めは連れて行ってもらえるかも頼んだが、漁港の男たちの返事は皆「No」。やはり親世代から伝えられた話により、関わりを持つことを避けている。

つい先ほどまでは気さくに笑っていた男たちが、島の話聞いた途端じーっと、真顔で二人を見つめる様は異様だった。

「あんたら、あの島に行きたいのかい？」

そして日も暮れ始めてきた頃。

二人が数力所めの漁港で聞き込んでいた際、船の手入れをしていた老人がちょうど他の漁師から話を聞き終えたタイミングでやってきた。

見た目は70代ほどの腰の曲がった男だ。

曰く、その人物が普段島への物資を運んでいるらしい。

村は自給自足だが、灯油や調味料など必要な物資があるため、依頼を受けた物を週に何度か送っているようだ。

その際に必要となる金は、向こうで収穫した野菜や魚を交換することで賄っていると

のこと。

またあちらの島とも連絡が付くらしいと聞き、露伴は眉を寄せた。

「向こうは送電されてなかったんじやないのか？」

「ああ、されておらんよ。だが今じや発電機や電気を作る機械がある。安定した供給とはいかんが、完全に電気がないというわけじやない」

「なるほどね…。それもあんたが持ち込んだのか」

「向こうに頼まれたのさ。それで、あんたらは島に行きたいんだろ？なら明日の朝6時ごろにまたここに来な、乗せて行ってやるよ」

「もちろん！——と言いたいところだが、どうするんだよ、先生」

露伴は吉良に視線を送る。

『入神島』の件を聞いた島民の反応は、そのほとんどが奇妙な反応を返した。

黙り込んだり、あるいは二人を無視して作業に戻る。

異常、としか言いようがない。そしてその原因となるのが、『入神島』の存在である。

「…まあ、行くしかないだろうね」

こうして二人は入神島に向かうこととなった。

翌日。指定された時間に訪れた二人は、小型の船に乗り込んだ。

荷物の少ない露伴とは対照的に、吉良の荷物は多い。

向こうの食べ物口口に合わなかった時のために食量を持参したようだ。

「気持ち悪い……家に帰りたい……」

「オイオイ、こんなところで吐くなよ」

蒼白した吉良は単純に船酔いらしい。車や電車、飛行機などは平気だが、上下左右に激しく揺れるタイプの乗り物が苦手だそう。

すでに市販の酔い止めを飲んだが、効果は薄い。

露伴は離れた場所で老人を観察する。彼の隣ではグロッキーな男がうめき声をあげていた。

潮風を受けて、横風に髪がさらわれる。

「貴様気付いたか、あの男の左指」

「……一本ないんだろ。昨日はポケットに入れていてわからなかったが」

「薬指がないんだ。小指じゃないってことはつまり、ヤクザみたいに指を詰めたわけじゃない。傷痕もないから生まれつきのもってことだ」

「人の中には指を多く持って生まれる「多指症」の反対に、少なく生まれる「欠指症」の

人間もいる」

「スケッチブックさえあれば描けるんだが……」

「あつてもやめろよ。人によつてはセンシティブな問題だから」

二時間の道中、時折露伴が老人の世間話に答えながら島の情報を集めつつ、目的地に着いた。

迎えについては、二日後の朝に来る予定である。

どうやら島は現在、五年に一度の大きな祭りの最中らしい。期間は約一ヶ月。

祭りでは『イリガミ様』を讃え、最終日には獲れた魚や酒などを祠に供え、村全員で盛大に祝う。

二人を出迎えたのは小柄な、可愛い——というより、美人な顔つきの女だ。

年齢は露伴と同じか、それより少し下くらいだろう。

服は着物を着ているものの、腰にまでくる長い黒髪は結われていないため、どうもチグハグ感が否めない。

「ようこそ、いらつしやいませ。吉良様と岸边様ですね。お二人がいらつしやることは事前に伺つております」

「お、おお……！ つつきり向こうの老人より訛りがひどいのかと思つたが、普通に標準語

を喋れるのか……あれ？」

吉良が悪い。見れば、船着場で海に顔を向けて吐いていた。

それにスン……とした露伴は、さっさと案内の女に連れられ村奥に入っていく。

入神島は周囲に森があり、その中央に村がある。

通された内部には数えられる程度の家が建っていた。どれも平成の世からすれば、タイムスリップしたと思わせる古さと造りである。

建物自体の大きさはそれなりで、旅館に似た造りをしているが、微妙に異なる。

上手い表現を露伴は見つけることができなかつた。

木々については潤沢にあるため、外から持ち込まずとも作れる。

建築知識は当時、外部と繋がりがあった者が持ち込んだのだろう。

閉ざされているというよりは、やはり向こうの島の人間が過剰に怖がっているだけな印象を受ける。

「……ん？」

「岸辺様、どうかされたのですか？」

「いや……何か少し、変じやあないか？」

家の構造から考えて玄関があるはずの場所に、玄関がない。疑問に思った彼が裏に回ると、裏口がある部分に玄関があつた。

それに女は着物の裾で口元を隠しつつ、小さく笑う。

「この村の習わしなのですよ、岸边様。入り口には玄関を作ってはならぬのです」

「ああ、慣習ってヤツか」

「はい。何せ入口は『イリガミ様』の通り道ですから。ゆえに人間である私たちは、裏から出入りするのです」

「へえ…中々興味深いねえ。周囲に女しかいないのも、理由があるのか？」

露伴が道中で見かけたのは畑仕事をしている老女や、赤子を背負った若めの女ばかりだ。

数名の子供は走り回って遊んでいた。誰もやはり着物である。

「この村は男女が分かれて暮らしております。女性はこちらで、それ以外は奥に住んでいるのですよ」

「じゃあ男の僕は向こうに行くのか」

「と、とんでもない！お客様にそんな失礼なことは出来ませんので、どうぞこちら側で過ごしてください。泊まれる場所をご案内致しますよ」

「やたら建物が旅館っぽいと思ったが、ここはもしかして昔は宿泊施設として栄えてたのか？」

「ふふ…よくお分かりになりましたね。かつては貿易のルートでいらした御方たちが、

滞在されることもございました。村に一つしかありませんが、温泉もありますよ」

「最低限の生活環境は整ってるんだな。しかしこうも女ばかりだと、少し居た堪れなさがあるな……」

「岸边様は女性にお不慣れで？」

「そういうわけじゃあないよ。まあ、取り敢えず先に泊まる場所に案内してくれ」

その後いくつか「手間」を受けてから、露伴は広めの客室に通された。

そんな彼を残し、女は吉良の元へと戻って行つた。

「フム、色々と考察のしがいがある。……面白くなってきたじゃないか。まるで探偵にでもなった気分だ。ヘブンズ・ドアーを使えば直ぐにでも『犬神』についての情報が得られるだろうが………推理するのもまた、一興か」

ほくそ笑む名探偵口ハンの顔は、実に生き生きしていた。

56話

尾を振る犬は叩かれず

「思ったより広いな……」

吐き気が収まり持参したミネラルウォーターで口を濯いだ後、吉良は島の周りを回っていた。

島の大きさは1?に満たない面積であり、一辺「1km×4」と計算すれば、歩くのに1時間もかからない計算となる。

砂浜には漂流物が多く、島は奥側に行くほど急斜面かつ深い山となる。

途中で一周するのは諦め、吉良は元来た道を引き返した。

「山の一番奥側に鳥居があつたな……」

スタート位置ではわからなかったが、少し歩いた木々の隙間から祠のある場所が見えた。

妙な違和感が彼の内にある。

二人を出迎えた女はウエルカムな様子だったが、家は島の中央に作られている。

そしてその周囲にあるのが森だ。

これは単純に潮風を防ぐためのものとも考えられる。

ただ、女店主が言っていた「人を拒んでいた」という話もある。

それが現在も続いているのか。はたまた単純に昔の名残を残しているだけなのか。

この矛盾を感じさせる裏には、確実に何かがある。

それは村の人間が使う標準語や建物の建築、服装なども相まって、さらに深まってくることになる。

「…あつ、見つけたよお！」

船着場に戻ってきた男に、露伴を案内した女や数名の若い娘たちが駆けてくる。

女たちは平均身長を考えてもかなり低い。150cmあるかないかだ。

似た雰囲気のため姉妹なのだろうか——と吉良が考えた矢先、両腕を娘たちに絡み取られた。

一瞬、可愛らしいその手を見た紫目が鋭くなる。

「もう…どこ行ってたの、吉良様！」

「びっくり仰天しちゃったんだから！」

「お手洗いを借りたくて民家を探していたら、迷子になってしまつてね」

「村はこちらでございます。厠もそちらにございますよ」

「いやはや、申し訳ない……」

「いえ」

厠については水洗ではなく汲み取り式で、トイレットペーパーはあるらしい。吉良はこの村に滞在する上での説明を色々と受けた。

適当な理由を言ったただけだが、潔癖な男としては有用な情報を得られた。

「着物を着ているのは理由があるのかい？言葉も訛りがなくて綺麗だ」

「吉良様が着てるのは洋服よね？着物を着るのはこの村の慣習なの。私たちが着ているのはね、ご先祖様のお下がりなんだ！それに私たちは教えられて普通に話せるけど、ババ様やカカ様たちの中には何を喋ってるかわからない人もいるのよ」

「そうそう、今時可哀想だからって、教えてもらったのよね」

教育については、言語を除いて教えられていないのだろう。彼が「9×9は？」と尋ねると、少女たちは首を傾げた。

また言葉を教えているのは、船を操縦していたあの老人らしい。

「君たちは村の外に出ようとは思わないのかい？」

「私たちはいいの、だってこの村に生まれたんだもの」

「そうそう、イリガミ様の元に生まれたんだもの。出ないのよ」

「興味深いね。そういう文化なのか」

「そうなの、文化なの」

「そうなのよ、文化なの」

女たちの目が一瞬、無機質なものに変わった。

何の感情も宿さないその瞳は、まるで日本人形のようにだ。

しかしすぐに愛らしい笑みに戻った娘たちに、吉良も表情を変えることなく質問を続けた。

ここにはテレビやラジオなどの娯楽がない。

だが木で作れるコマやお手玉、石で代用しているおはじき遊びはある。

安定した電気供給がないため情報を得る手段がないのはわかるが、意図的に外部の情報遮断している感じが否めない。

オセロやトランプなど、電気を使わずとも得られる娯楽はあるだろうに。

「村に持つてくる物は、みんな決めてるのかな？化粧とか、興味はないのかい？」

「ううん、上のお方たちが決めてる。だってそう沢山村に持つて来れるわけじゃないも

の

「それに私たちってお化粧しなくても可愛いでしょ、吉良様？」

確かに、綺麗な顔立ちの者が多い。村に入れば老婆や少女を含め、ほとんどの者が美人だった。

地域によっては当時の時代の事情で、見目の良い者が多い傾向がある。

ここも何かしら昔の理由があつたのだろうと吉良は思い至つたが、あえてこの疑問は置いておいた。

この村人はあまり詳しく村の情報を聞かれることを良しとしていない。

一定まで公開できる範囲があるのだろう。そしてそれを超えると、先程彼が見たような無表情に変わる。

ハツキリ言つて気味が悪い。それを物ともしない二人組がここへ来てしまったのだが。

「ではどうぞ、ゆっくりとお過ごしください」

宿泊場所に着いた吉良はメモ帳に何かを書いている露伴を無視し、渡された着物に着

替え——ようとして、フリーズした。

漫画家が「康くん!」と食いつきそうだが、違う『ACT3』じゃない。

「女物……?」

気づかなかつたが、露伴もまた女物の着物を着ている。

吉良が彼に事情を聞くと、一応理由はあるらしい。

祭り期間中は外から持ち込まれる気を「不浄」とし、身体を清めたりお神酒を飲まされるなど、少々面倒がある。

露伴が部屋に着いた際に「手間」があつたと称したが、これが上記の内容に当たる。

よく神聖な祭りでは女を不浄とする場合があるが、ここでは逆に、男が不浄となる変わったルールがある。

元より分かれて暮らしている男衆は、一ヶ月間は一箇所に集まり閉じこもって暮らすらしい。

それを流石に客人に強いるわけにもいかない。そのため例外的な手段としての、女物の着物だった。

吉良はそこまで漫画家から聞いて、考えることをやめた。

「……まあいいや。そう言えば君、着物が右前じゃなく左前になってるけど、それじゃあ死

装束だよ」

「マーライオンになってた奴が、僕にとやかく言うな」

「……あれれえー？死体が喋ってるぞー」

森川の声帯を持つ男が裏声になった瞬間、「シュツ」と音を立てて、鉛筆が投擲される。威力のおかしなそれは吉良の頬を掠め、壁にめり込む。

「気色の悪い声を出すな、僕が吐きそうになる。ふざけるにしても大概な服を寄越したんだ、意趣返しだよ」

「君の腕力はどうなってるんだ…？取り敢えず相手への嫌味はいいから直せ、腹が立つ」
年上の圧を受け、澁々露伴は着物を直した。

それから間もなく廊下から声がかかり、襖が開く。

礼儀正しく座っていたのは、二人をここへ連れてきた女だ。

どうやら祭りの詳細を含め、村を案内するらしい。

恐らく裏の部分までは見せないだろうと考えながら、吉良は女に続いた。露伴も荷物を置き、それに続く。

新旧の文化が入り混じってはいるが、村の様子は至って普通である。

祭りの際は食べてはいけない物があつたり、立ち入ってはならない場所があつたり、

毎日家にある小さな祭壇で『イリガミ様』を拜んだりするらしい。

最後は村の奥にある階段を登った先の、神社の手前に来た。

石ではなく木製の鳥居は、かなり劣化している。

「申し訳ございませんが、男性の方はここから先へは入れませんので悪しからず」

中は祠があるなど、特に通常の神社と変わらない。ただ祠の左右に置かれた木製の犬の像に、二人の目が向く。

「…犬だな」

「犬だね」

小声で会話する二人。女はここに『イリガミ様』が祀られていると語った。

その後、村に戻った二人は自由行動になったものの、外部の人間に好奇心があるのか、少女や若い女に絡まれろくに調べることができなかつた。

気づけば時刻はすでに夜である。

晩飯を食べた後は温泉だ。周囲は柵で囲われている。

男二人は疲労の色が強く、特に少女にあつちこつちと振り回され、体力を全部持つて行かれた吉良は死んでいた。

なまじ露伴が毛嫌いを隠さずあしらっていたのに対し、押されると断りづらい性格が

余計に追い打ちをかけた。

「ハア、疲れた…願ってもないのにキャバクラに来た気分だ……」

「……………」

「おい、第一被害者になる前に意見交換といきたいんだが」

「……………明日」

「…ツチ、貧弱だな。もつと鍛えた方がいいぞ」

露伴はこの時点で、村の奥にいる男たちなら何か知っているかもしれないと、当たりを付けている。

祠についても、その裏に何か小道があるのが見えた。恐らくその奥にいるのだろう。

なぜなら森を歩いた際、男共が住んでいそうな家屋がなかったからだ。

理由を付けて二人を立ち入らせなかったのは、彼らと会わせないために違いはない。

まるで良作のサスペンス小説に出会ったかのような。

そんな推理する楽しみをこの時、岸辺露伴は感じていた。

——この村は、例外的に治外法権となっている。

それは船で入神島へ向かう時、老人が語っていた言葉だ。

この村に何が隠され、そして『イリガミ様』とは何なのか。完全に『影犬』が、忘れ去られている。

「フフフ………フハハハハ！ 実に最高のネタになりそうだッ!!」

「……………」

不気味に笑う漫画家を、吉良はジト目で見る。

願わくば何も起こらないで欲しい。しかし何かは必ず起こる。

今まで事件に巻き込まれてきた勘と奇妙な運命の巡り合わせから、彼はそう感じざるを得なかった。

そして、時刻は流れる。

夜、吉良が外の厠から戻ろうとした折、彼の前に一人の少女が現れた。

高校生ほどの少女は、彼が引つ張り回されている時に目にした少女の一人。

特に綺麗な彼女に、ついと見入ってしまったのを覚えている。最近隠すこともままならない欲求だ。

少女は吉良の視線に気付いて目を丸くし、恥ずかしそうに顔を逸らす。

「あ、あの……」

「……………うん？何かな」

「吉良様、でしたよね？厠に行かれていたのですか？」

「ああ、君も……………と言いたいが、女性に聞くのは失礼だね」

「いえ、平気でございますよ。私は少し眠れなくて、歩いていましたものだから」

「そう……………」

吉良の言葉は、絡みついた手に意識を奪われたせいで続かなかつた。

しなやかな頬が熟れた瓜の如く染まる。少女の黒い瞳は男の顔に向かつた。

しかし眼鏡の奥のその色を、少女は窺い知ることではできなかつた。吉良の口角は、艶を帯びてゆつくりと上がる。

妖しい香りに、少女の心音はどんと上がって行つた。

「ちようどいい。わたしも眠れなかつたんだ」

「しょ…つ、そうですか……………その、よければ私の部屋で少しお話しされませんか？」

「いいのかい？」

「は、はい」

少女は嬉しそうに微笑んだ。人形のような顔立ちが表情を変える様はどこか不気味で、しかし愛らしい。

ただ彼女が丸眼鏡の奥を見ずに済んだのは、これ幸いか。
その目は完全に獲物を食い殺す前の、肉食獣の如き瞳だったのだから。

57話 煩惱の犬は追えども去らず

翌朝、漫画家の青年は魚や野菜の料理が並んだ膳を見つめた。

数は一人分だけ。同室の男の分はない……というか、その本人もいない。敷かれた布団もそのまま、忽然と消えた。

ちようど睡魔が襲ってきた頃、吉良が厠に立った音は聞こえた。

しかしまだ戻って来ていないのは明らかにおかしい。

「連れがいないみたいなんだが、何か知ってるか？」

前日二人を案内した女は、じつと露伴を見ると口を開く。

「吉良様は少々体調が悪いとのことで、別の場所ですんで休んでおられます」

「ふーん……まあかなり疲労が溜まっていたようだし、仕方ないか」

——と、口では言いつつ、内心彼は舌打ちした。

正直怪しきしかない村で突然ツレが「病気になるました」と言われても、信じられるわけがない。

だが「目」を避けるのは難しそうだ。部屋以外の移動には基本女がついて回る。

トイレに向かうだけでも、誰かに見られている気がしてならない。

「そう言えば……」

相手が去つたのを確認してから、露伴は懐に入れていたメモ帳を取り出す。

誰かが見ることはないよう、四六時中隠し持っている物だ。

『入神』島≠犬神（イリガミ）

【独自の文化】

・裏に作られた玄関↓入口は犬神の通り道であり、村の人間は裏から出入りする。

・服装↓着物、村の習慣。祭事中は男を含め、みな女物の着物を着用。理由は男Ⅱ「不浄」扱いとなるため。

・言語↓若い女たちは遜色ない標準語を使うが、やや古めかしい言葉を使うこともある。言葉を教えた人間は船の老人。教育はされておらず、常識が欠けている。

・村↓周囲が森で中側に民家や畑が点在する。食料は魚や野菜、またはその物資と交換で得られた食物など。ヤギやニワトリなどの家畜もいる。家の外装は旅館に近く比較的大きい（少し違う気もする）。人が暮らせる最低限の条件は揃っている。

・娯楽↓古臭い。今時の娯楽の知識はなし。また物資の取り決めは上の人間たちで行

なっている。その「上の人間」たちが誰なのかは不明。

・住人↓女たちの身長は低い。島外に出ることを嫌う節が見受けられる。容姿が似通っているのは、恐らく前記の理由で同族交配が多かったからかもしれない。やたらと美形が多い。男は村の奥側に住んでいるが会えていない。

これを踏まえつつ、露伴は本島の人間がなぜ入神島を避けるのか考える。

「治外法権」という言葉を踏まえて、人が行方不明になっているならば、事件にされないだろうか。

いや、人が消えればいくら何でも事件にせざるを得ないだろう。恐らくはこの島が治外法権になった理由が、この村の闇と繋がっている。

老人の言葉が嘘の可能性もあるが、それをするとキリがないのでひとまずは信じよう。

そう考えると、露伴たちの食事に何か盛られた、ということはないはずだ。

狙うなら二人まとめて狙うはずだからだ。

片方を狙っても、残った片方に怪しまれるのは目に見えている。次狙おうにも、過剰に警戒されてしまう。

露伴の眠りが深かったのも、単純に疲れていたのが原因だ。

「もしかしたら廁に向かった時に何か見たか。あるいは村の核心に近付きすぎた…か」

村の中央はまるで隠された作りをしている。

建物の年季は大正や明治ほど。立派な旅館の如き造りから、外からの出入りがなければ建てるのは難しいだろう。造るにしても、建築の「知識」は必要になる。

それをわざわざ隠すのは、当時の密事に使用されていたからか。

「どこかで見た造りなんだが…」

しばらく唸っていた青年は、何か思い出したように「あ」と呟く。

美しい女たち。旅館。男。

そう言えば露伴が東京に住んでいた頃、京都の取材で訪れたことがある。

そこで観光がてら大阪に立ち寄った彼は、似た様式の建物を見た。『百番』と書かれた看板に、ついと目が行ったのだ。

「そうだ、遊郭に似ているんだ…！」

後から看板の意味を調べたが、『百番』というのは屋号で、遊廓でも最上級の格を表す。この造りからして、かつて男が集まる場所であったのは確かだろう。

見目のよい女が多いのは、かつて遊郭として栄えていたからだ。

しかし遊郭が廃れていった結果、女たちはこの島に取り残された。

去らなかつた理由は不明だが、身を売る女たちに行き場がなかつたのは想像に難くない。

逆に孤島であり、最低限自分たちが暮らしていける環境があつたからこそ、残つたのかもかもしれない。

実際1872年（明治5年）には、日本の近代化が進む中明治政府によつて「芸娼妓解放令」が発令されている。

実態はほとんど変わらなかつたが、都市化が進み遊廓の存在が問題になり、遊郭が郊外へ移転させられる事例もあつた。

根津遊廓が深川の洲崎に移転したのがその一例である。

この辺鄙な場所にあるのも、当時別の場所にあつた遊郭が移転されたと考えるのが妥当だろう。

「ならば『イリガミ』とやらは、どこから来たんだ？」

そうだ。最も気になる問題がまだ解けていない。

男が不浄とされる所以や、治外法権になった理由などもわからない。

「……やはり、調べないことには始まらないか」

露伴が到達した考えに、既にあの男は到達していたのだろうか。

そう考えると、無性に腹が立つ。

そもそも露伴がヘブンズ・ドアを使っていないのも、推理気分を味わう他の、吉良の存在があるからだ。

露伴はスタンドを使えば簡単にこの島の秘密を暴ける。

しかし向こうは違う。少ない情報から推測し、答えを導き出さなければならぬ。

最初は土俵が違うというのに、到達する場所が同じというのは屈辱的である。

それは「おねえちゃん」を奪われた過去も相まって、余計に闘争心を抱かせるのだ。

普段の彼であれば、さっさと真相を暴いているだろう。

らしくない。実に、「岸边露伴」らしくない。

「だが、ガキみたいに意地張ってる今の僕も、「岸边露伴」だ」

とりあえず陽の出ているうちはどこに「目」があるかわからない。
行動に出るなら夜かと、露伴は思考を巡らせるのだった。

???????

「目を覚まされましたか？」

やけに響く女の声が聞こえ、目を覚ました。

同時に聞こえたのは、「ジャラリ」という音。

見れば手と足に枷が付いている。床に身を投げ出す形でわたしは倒れていたようだ。
後頭部がひどく痛む。

座ったり歩いたりはできそうだが、激しく動くのは無理そうだ。

お世辞にも体調の良くないこちらを木の柵越しに見つめるのは、この村を案内していた女だ。

中はひんやりとしていて、触るとゴツゴツとした感触がする。

大きな岩を掘り、その中に作られた牢……だろうか。

位置的に山の急勾配に作られた場所か。それも恐らく祠の近くだ。

女の額に付いたヘッドライトが、着物とミスマツチでなかなか面白い。

「自分が何をされたのか、お忘れのようですね」

「すまないが、精神疾患持ちでね。薬を飲み忘れると、時折自分でも何をやったのか忘れてしまうんだ」

無表情な顔は人形のように愛らしい。写真で見た「入神唯」と非常に似ている。

それは目の前の女には劣るが、この村の女全体に当てはまるのだから、異常である。

「……首を、絞めていたのですよ。夜伽中のあの子の首を、絞めて……」

「頭を殴って気絶させただけじゃ飽き足らず、人の行為中に耳を側立てていたのかい？
趣味が悪いね、入神さん」

「……………」

露骨に女の表情が変わった。治外法権と言われていたこの村の住人に、戸籍があるか

はわからない。

だが少なくとも「入神」という苗字は存在する。

種子島がルーツとされているが、本当はこの島だろう。島の名前にもなっているくらいだ。

似ているにしてはあまりにそっくりなこの女に鎌をかけたが、やはり入神唯の血縁者か。

「…何故私が「入神」という苗字だとおわかりになったのですか？」

「君と似た少女を写真で見たことがある。理由は知らないが、捨て子だったそうだよ」

「……………」

「わたしをこの状態にしたってことは、生かして帰す気はないんだろ？ 教え給えよ、そちらの事情って奴を」

「……………まあ、いいでしょう。あなたは知り過ぎた上に、私たちの家族を傷つけた。特に後者は許されざる蛮行でありんす。『イリガミ様』の供物に致しましょう」

そうして語られ始めたのは、『イリガミ様』の話。

もとい、かつて絢爛の裏で暗い闇を抱えた遊女の、悲しき末路である。

???????

昔——とは言つても、今からおよそ100年以上前のこと。

近代化に伴つて移転させられた、一つの遊郭があつた。

美しい遊女たちが多いその遊郭は、同じ九州ではあれど、人が全くない辺鄙な島へと移された。これには女たちも戸惑つたが、そこには大きな裏があつたのである。

まず島に人が住める程度には、最低限の要素があつたこと。

そして遊郭のトップに当たる楼主が、政治に関わる人間と縁が深かつたことにある。ちなみに「楼主」とは、現代で言う経営者のことを指す。

例えば「明治維新」の成立に多大な功績を残した西郷隆盛、大久保利通は、薩摩藩の下級武士の出身だつた。

さらに、政治に携わる人間の中でも当時は九州、あるいはそこに近い地域の出が多かつた。

ゆえに楼主は、移転させた遊郭を政治関係者の密事を行いやすい場所に変えた。

露伴が気づかなかつたのも、造りが通常の遊郭とは違い、旅館に似せていたことに理由がある。中を隠されるように作られた島の構造も、その名残だ。

また、それに伴い遊郭で働く若い衆（男の従業員）たちは、外から持ち込んだ野菜の栽培や家畜の世話、漁などを行った。

然して遊女たちは、知らずともよい国の裏の部分を知ることになってしまった。

そして時が流れ遊郭が廃止の流れになる中、知りすぎた女たちもまた、上に「不用」と見做されたのだ。

その中には数人、腹の膨れた女もいた。

青い海と澄み渡る空のすぐ側で、女たちを温かい血潮が包む。

それは隣で斬られていった、他の遊女たちの鮮血であつたのかもしれない。

次々と殺されていく中、一人の腹の膨れた女もまた、殺されようとした。

——腹の子供衆^すだけは、殺さねえでおくんなまし！

だが、現実是非情だった。

男の一太刀は女の首を刎ね、次の一太刀は女の腹の子もろとも切り裂いた。

女は宙を舞った首のまま、その顔を手へと必死に伸ばした。

そして、尾の繋がった子に噛みついた。

そのままでは子に当たって首が跳ね返ってしまうがゆえの、女の行動だった。離れてしまわぬように、歯を柔肌に食い込ませた。

最期に我が子に寄り添った女の顔は、憎しみと愛情をごちゃ混ぜにした、壮絶な形相だったという。

そして——それが、生まれた。

畳に転がった女の死体の影が蠢き、その姿を変貌させる。

影はうなり声を上げ、次々と男どもの首に噛みつき、引きちぎり、殺していった。

それは本体の死後に発動したスタンド、『ノトーリアス・B・I・G』と似ている。

恨みを糧に発動したこの能力は強力なものであったが、それも非常に強力な力を有していた。

スタンドでは間違いないのだろう。

しかし伝承の「犬神」と似た末路を辿り生まれた能力が、果たして絶対的なスタンドであるかと問われれば、疑問も残る。

これは後に岸辺露伴が遭遇することになる、調べてはならない「
」にも似ている。

スタンドであり、スタンドではない。

出会ってはいけない。知ってはならない。人が、踏み込んではならない領域にある不可思議なもの。

それは己に害をなした人間を殺し終えたのち、腹の膨れた一人の女の中に消えていった。

この事件から暫くして、他の者たちが女たちの暗殺に乗り出た。

その度に生まれていた赤子の影から“ソレ”が現れ、その者たちを殺していった。

以降その島は「神がおはす（入る）^い」ことから、『入神島』と呼ばれることになる。ただし地図に表記されることはなく、治外法権となった。

これは当時、その場にいた官僚が多数殺されてしまった影響が大きい。

だが社会で暮らす上で必要となる戸籍については、一部の人間限定で苗字と共に与えられた。

村の人間が言う「上の人」が、この人間たちに当たる。

そしてこの事件があつたこともあり、本島の人間たちは入神島を「忌地」とし、その存在そのものを認識しないよう、また、させないように努めた。

何故ならあの島には、「イリガミ」がいるから。

イリガミは人の願いを叶える。しかし願いの裏には代償が必要となる。

願った分の代価を、イリガミが憑く人間は己の命で払うことになる。

またイリガミは女にしか憑かず、最初に取り憑いた赤子と血縁関係のある者にしか憑かない。

もし憑かれた人物が死んだ場合は、血の濃い者に優先して影の中に入る。

幾度と女たちの命を食らいながらも、それでもイリガミは存在し続け、そして女たちもそれに寄り添って生きてきたのだ。

???????

「この村は、そうして生まれたのです」

「……なるほどね」

川尻浩作の日記から、「犬」の存在が人に憑るスタンドではないかと考えていたが、概ね当たりだったようだ。

しかし能力については多少異なる部分もある。恐らくは最後に憑いていた人物——入神唯の死が起因して、変質したのかもしれない。

この無闇と思われる根拠も、やはり日記によるものである。

「君、『入神唯』を知らないかい？」

「……それは、カカ様のネネ様の娘。でも、死んだはずよ」

「死んだ？」

曰くそのネネ様は、この村で禁じられている客への恋に、身を落としてしまったらしい。

だが当時イリガミ様が憑いていた彼女は村から出ることを許されず、腹に子を抱えたまま精神を病んでいった。

そしてある日、生まれたばかりの赤子を抱いて、村一番の高台から飛び降りた。

「…そうか。ネネ様は赤子の命が惜しくなつて救つたのね。だから、ネネ様が死んだ後イリガミ様は……」

「この村からいなくなつた、かな」

「……お前は、唯の居場所を知っているんですね」

「知っているさ、ほら」

不自由な手を使い、頭上を指差す。すると女はキョトンとした顔をし、入神唯が死んでいることを理解した瞬間、手を伸ばしてわたしの肩を掴んだ。柵の隙間に入るほど細くて、かわいらしい……………じゃなくて。

ようやく起こした身体が、激しく揺さぶられる。

「い、イリガミ様ツ!!イリガミ様は、イリガミ様はどこ!!?」

「イリガミはもういないよ」

イリガミではない。いるのはさらに変質した「影犬」だけだ。

息を荒くしていた女は、徐に手を離す。真つ黒な目が、ドロドロと溶けるように深い闇を覗かせる。やはりコミュニケーションは大事だと思ふんだ。ずっと島に引きこもつていては、人間の感性が歪んで育ってしまうだろ。

女は鍵を開けると、出るよう命令する。

大人しく出ればこちらの後ろに立ち、壁に立てかけておいたららしい薙刀を向けた。

「歩きなさい。お前を捧げてやる」

「…おやおや、おやおやおや」

道の左右には自分が入っていたものと同じ牢がいくつもあり、その中では子供や大人など、大小様々な男たちが鎖付きで入れられている。

連中は何も身に纏っていない。なるほどなあ…女物しかないから、着させられたのか。

ついでに汲み取り式の意味も理解したが、わたしは何も見えていない。

薬を飲んでいないせいとか、頭が少しハッピーになっている。

「さながら犬というわけだ。目が空だけど、あれ精神が死んでないかい？」

「あれはただの供物です」

「いや、聞いてることが違うんだが」

村人が男という存在を嫌う以前に無関心であるのは、話している間にわかった。

人によるが、どうにも村の男を自分たちと同じ人間として見ていない。言葉にするなら、「男はね——」といった感じだ。

まあ、イリガミが生まれた話を聞けば納得もいく。

彼女たちは男をタネ馬としか見ていない。

そう考えると、わたしたちは別のものと認識されていそうだ。

でなければもつと嫌悪か、無視されるぐらいのリアクションをされていなければおかしい。

また、外の人間に友好的な態度を取っていたことも理由があるともみていい。

内側の支配だけでは疾患が多くなる。だから外の人間が必要だった。

やたらバタバタしていたのは、夜に誘いややすくするためだ。

その点あの小僧は避けていたので、女連中も上手い口実を作れなかったに違いない。

言葉についても話ができなければ、誘うことができない。

それに加えてまともな教育をさせず、外部の情報を取り入れさせないのも、女たちを

村に依存させやすくするためだ。

それ以前に戸籍がないのだから、外で暮らすのは難しい。

まあ、そうなると、あの老人もグルということになる。

「行方不明者が二名。事件にならないはずがないと思わないかい？すでにイリガミの加護がないとわかつているのなら、尚更」

「イリガミ様はいます。供物を捧げればいらつしやいます。きつと、今度こそ」

……話にならないか。

後ろのかすかな明かりを頼りに時折転びそうになりながら、地上に繋がる不揃いな石段を上がること少し。

見えてきた外の景色はすでに暗い。星が綺麗だ。

「そう言えば男と言つても、あの老人は信用しているのだね。娘たちに言葉を教えているって言うじゃないか」

「……あの方は違いますよ」

女の雰囲気が変わった。その表情を言葉にするには難しい。

愛おしさか？あるいは……虚しさ、だろうか。

「この女連中の意識が変わるほどのことを、あの老人は為したのだ。

「お前に言う義理はない。少なくとも、イリガミ様の供物になるお前には。イリガミ様ではなく、私たちに捧げた、あの人のことを」

その言葉が耳を掠めた直後、わたしは一步、洞窟の外へ出た。

「ヘブンズ・ドアー」

瞬間、女の身体が本になる。

横に息を潜めていたらしい男の隣には、包帯を首に巻いた少女がいた。

青年が何を言いたいか、聞かれずともわかる。

「色々と話を聞かせてもらおうじゃあないか、吉良吉影」

ああ早く、我が家に帰りたい。

58話 犬骨折つて鷹の餌食

最終日の夜。

翌朝には船に乗り、本島に戻ることになる。

露伴が吉良の居場所を探ろうにも、相変わらず付きまとう視線に行動できず就寝時間となつてしまつた。

むしろ初日より二日目の方がその数が増えた。警戒されているのだろう。

その理由は恐らく、いなくなった男の仕業だ。

しかして片方がいなくなったことで一極集中した女に、「うつとおしいぞこのアマツ！」と叫んだ彼はまるでどこぞの海洋学者であつた。

女たちから得た情報によると、明日が島の祭りの最終日らしい。

世話役の女に吉良について聞けども、「病気がうつつては大変ですから」の一点張りだつた。

露伴は改めて村の情報を整理することにした。

幸いにも部屋には灯油製のランプがある。

——かまわず特攻するか？

いや、夜は月明かりしか頼りにならない村で、一人で森に入るのはまずい。いくらスタンドがあっても、隠れた複数人に襲われれば堪ったものではない。

向こうはしかも彼と違って土地の理解がある。

流石にこの部屋にはないが、一度外に出ると監視される。なおさら下手に動けない。

吉良の荷物があれば何か手がかりを得られたかもしれない。

しかし女が今朝持って行ってしまったため、見る事ができなかった。

「……待て、ヤツが本当に何も残していないのか？」

露伴は再度、メモ帳に書いた情報を眺めた。

似た顔に、年齢の若い女たち。

それは『入神島』の慣習が影響していると考えていた。

—— // 神が入ってくる //

そのため女たちは島から出ることを望まない。

実際に「北センチネル島」のように、外部との接触を拒絶する部族もいる。

ただ「入神島」の人間は、外部の人間に友好的である。

その理由は何故か。

「……そうか。同族交配が多いからこそ本能的に、あるいは外の「知識」を得て、外部の男と交配するようになったのか」

確かにそう考えれば、やたら女たちがベタバタしていた理由も納得がいく。

ここに来た男が美しい女たちにまるで気があるように触られ、その後……例えば夜に厠に行った時に偶々出会ったとしよう。

女の方が本当に気があると知りベッドに誘われたら、EDとか、余程のことがない限りは話に乗るだろう。

それこそ今部屋に女が来て、「もう少し岸边様とお話ししたくて……」と愛らしく言われたとしたら、いくら露伴でも——、

否、彼は全く興味を示さないだろう。

もちろん童貞ではないし、女にウブだからというわけでもない。

彼の思考回路は常にネタと康一くんである。いや、流石に康一くんは脳内の5分の1くらいかもしれない。

対し吉良の場合はどうだろうか。——正直言つて半々だ。

鈴美のことを今でも好いているとは思ふ。それこそ同じ女を好きだった者同士、直感で。

だがその上で吉良吉影は他の女を抱いているだろう。あのドラッグな作品を書く男が、綺麗なまま生きているわけがない。

欲に乱れ、欲に溺れる。

その上に理性で作ったレールを強いるような内容が、星ノ桜花のダークサイドな作品だ。

人間の皮を全て丁寧に剥がし、その裏を眺めているような気色悪さが常につきまとう。そんな中で、時折繊細な感情と、人間の美しさが覗く。

『あなたは綺麗なままでいられるか?』

ある作品にも、帯のキャッチコピーにこの言葉があった。

この作品は主人公がとことん人間の尊厳を奪われるド鬼畜生な内容で、先生は鬼だよ、とファンでさえ思った。

「吉良あの男ならば、女たちが馴れ馴れしかった理由もわかつたはずだ。その上で厠に立ち接触を図ったのか?…だが単純に寝ただけの可能性もある」

女を引っかけ慣れているのは、ここ数日行動を共にしてよくわかつた。

ならば避妊具は常に持ち歩いているか。

まあ万が一があつても、露伴には関係ない。

「仮に村の裏事情を探るために向かつたなら、何かヒントを残してそんなものだが……」
露伴はもう一度、なるべく音を立てないように部屋を探る。

途中でスタンドを使った方が早いと気づいてからは、ヘブンス・ドアーを使った。

押し入れや棚、布団など隅々を探らせたものの、何も見つからない。

はて、と彼は考え、まだ一つ探していないものに思い至った。

「もしかして……」

露伴は己の荷物を探った。

昨日部屋に戻った後、荷物の中身の配置が少し変わっていた。

露伴がいい間、女の誰かが探ったのだろう。怪しいものはないだろうか。

そして今、露伴の荷物の中に、見慣れない物があった。

女たちも流石に二回も調べることはない。そう考えた上で、吉良がこつそりと忍ばせたのだ。

して、その物とは。

「ピル、ケース……?」

吉良が普段持ち歩いている薬入れが、何故か露伴の鞆にある。

意図して向こうが入れたのは間違いないが、その理由がわからない。

吉良に精神疾患があることは露伴も知っている。当時鈴美が少年だった彼と遊んでいる際、彼氏の奇行について語っていた。

彼としては耳に入れたくない内容で、ほぼ聞いていなかったが。

——吉影くんにはね、ピンクの猫が見えるんだって。

「……ハハッ！」

そうだ、ピンクの猫。それが追いかけてくるからと、吉良は過呼吸になりながら彼女の家に来た。

時期は今から10年以上前。そして康一から耳に挟んだもう一つの「矢」についても、10年以上前に杜王町にあったらしいと聞いている。

ここまで揃っては、「吉良Ⅱスタンド使い」と考えるのは当然だろう。

露伴もまた康一や仗助、億泰などスタンド使いに出会ってきた身だ。

そして、ネタが尽きない素晴らしい杜王町であるからこそ、確信を持って言える。

吉良がスタンドを手に入れた時期はわからないが、もしそれが鈴美との事件以前に手に入れたものだとしたら、岸边露伴の逆鱗に触れるだろう。

それは「杉本鈴美を救えたかもしれない」可能性が強まったことへの怒りでもあり。

そして、自分がスタンド使いであることを黙った上で、あの時吉良が露伴と話に臨んだことによる怒りでもある。

この場合露伴もスタンド使いであることを黙っていたわけだが、向こうが「普通の人間」と考えて言わなかったに過ぎない。

仮に知っていたならば、自分がスタンド使いだと話しただろう。

何せ露伴はあの時、対等に会話に臨みたかったからだ。

「杉本鈴美」とは、心の扉を開く『天国への扉』^{ヘブンス・ドア}を持った彼が、心の奥底に鍵をかけた存在なのだ。

露伴は吉良のことが嫌いだった。 “お姉ちゃん” に向こうも好意を抱いていたからだ。

しかし同時に、一定の敬意を持っていた。杉本鈴美の幸せを誰よりも願っていたのが、あの男だったから。

だからこそ奇妙な出会いを果たした時、露伴は対等な立場になった上で、己の感情をさらけ出した。

受け身にしか回らない男は、非常に不愉快だったが。

それでも長らく燻っていた心のわだかまりは、多少は解れたように感じたのだ。

「それを、あの男は黙っていたのだ……許せん……僕の決意が貶されたんだ」

吉良が露伴をスタンド使いだと知らなかった、というのは考えにくい。

なぜならスタンド使いは引かれ合うもので。

露伴が康一と運命的な出会いをしたように、吉良が仗助や空条承太郎に出会っていてもおかしくない。

それならば、そこから露伴の情報が漏れたと考えるもいいだろう。

実際は露伴と再会した時点では、吉良はヘブンズ・ドアの存在を知らなかったのだが、それを知る術は彼にはない。

むしろあの時、吉良吉影という男が取るにしては塩らしすぎた態度が、勘違いを加速させる。

だが知らなかったという可能性も考え、再度真つ向から話す必要がある、という結論に至った。

露伴がスタンド使いであることを知った上で対面し、向こうが話し合っていた場合。

彼は吉良に使うだろう、ヘブンズ・ドアを。

そして触れてはならない、最後のトリガーを引く。

「だがひとまずは、この村の秘密からだ」

しかしそこは岸辺露伴。

私情より目先のネタを優先させる男である。

そこからまた彼が思考に耽り始めたところで、廊下に人の気配がした。

薬入れとメモ帳を咄嗟に隠し、修学旅行の夜見回りに来た先生に気づいて一瞬で布団に潜る男子生徒の如く、華麗なフォーメーションでおやすみ世界の体勢になった。

「あの、岸辺様。少しよろしいでしょうか…」

「……ん、なんだい？もうぼかあ眠いんだが」

見事な演技で、今まさに寝そうだったのに、感を出す男。

許可を出すと、入ってきたのは初日に見かけた少女だ。吉良にばかり視線を送っていたのを覚えている。

今日は姿を見かけなかったが、その首を見れば納得もいく。

「その首、どうしたんだ？」

「こ、これは少し……そのつ……」

少女は包帯が巻かれた自分の首元に触れ、視線を右往左往させる。

それでも真つ直ぐに露伴を見て、口を開いた。

「き……吉良様を、助けてほしいんです」

聞けば昨晚、この少女は情事中に吉良に首を絞められたらしい。

そこを偶々通つた女に助けられた、と。

女はちようど翌日の祭事に準備していた酒瓶を持っていて、それで殴つて気絶させたそうだ。その後吉良は祠の裏にある地下牢に連れて行かれた。

何故首を絞めた男を助けたいのか、露伴は問うた。

「……い、言われたのです」

「言われた？ 助けないと本当に殺すとも言われたのか？」

「い、いえ！……その」

——かわいいね。

少女の耳には、そのドロドロと溶けた甘い言葉が残り続けている。

男はその言葉を口にした時、紫根染めを何度も繰り返された、濃色こきいろのごとき瞳を浮かべていた。

59話 犬

入神島の女たちは村ができた経緯もあり、人々の繋がりが強い。

しかしそれは女のみに限られる。

生まれた子がもし男だった場合、その赤子は「災いをもたらす存在」として、牢に送られる。

たとえ我が子であれど、女たちは躊躇いなく差し出した。

彼女らの心中を例えるなら、可愛い子が生まれると思つたら、宇宙人が生まれてきた——といった感覚であろうか。

狭い空間の中で歪に育つた彼女らに、人としての真つ当な倫理観を求めたところで無駄なのだ。

そんな家畜同然の扱いを受ける男は、一部の女たちに交代で管理される。

ソレはイリガミ様の供物。女たちの認識はその程度である。

だが、「外の間人」は少し違う。

男オンに似ている。

なのに彼女たちと同じように会話し、動いている。

彼女たちは心底不思議に思ったが、「お上」から外の人間は供物と違う生き物なのだ、と教えられた。

そして「ヨル」と呼ばれる少女もまた、村を訪れた人間に近寄った。

ヨルは年配の女から性行為のハウツーを教わるため、手解きを受けたことはある。しかし異性との行為はまだ経験したことがなかった。

彼女が見てきた中で、大抵の男は鼻の下を伸ばしてベタベタと女たちに触っていた。

ただ奇妙なことに、今回来た男二人の反応は露骨に違った。

一人は彼女たちを本気で毛嫌いし、もう一人は拒まぬものの飢えた目で見るこ
い。

ヘンな生き物だね——。

男二人がいない中、一人の女がそう言った。今回はダメかなあ、と呟く女もいた。でもヨルは違った。

学者を名乗る男は彼女にだけ、その妖しげな瞳を向けていた。

ゆえに、ヨルは行動に移した。

ちなみにこの村は他の女が抱かれていた最中に監視する慣わしがある。それは女たちが暴力を受けた時、すぐに動けるようにするためだ。

彼女も何度か情事を見たことがある。

荒い息遣いや、水音。そんな生々しい一部始終を「こうやって赤ん坊をこさえるのかあ」と、興味津々に観察した。狂ったように見目の良い女に腰を振る男は、面白くもあつた。

後でまぐわつた女に感想を聞くと、大概不満が多い。ヨルはだから、行為に快樂を求めなかつた。子供さえできればそれでいいと。子供を作るのがこの村の女たちの夢であり、幸せなのだ。

しかし、しかしだ。想定外もいとところだった。学者の男はこそばゆい程に優しく、彼女を抱いた。しかも気持ちがいい。ふわふわと脳が溶けて、心臓がバクバクとフルエンジンがかかる。何だこれ何だこれと、ヨルは大パニックである。相手は乱れに乱れた女遍歴のある男だ。分が悪かつた。

そうしてぼんやりとしながら触れた男の体温は、やけに冷たくて。

その事実が彼女にひどく、焦燥感を抱かせた。

そのまま体温を失い、亡骸のようになってしまっただったから。

男は彼女のか細い手を握り、頬を擦り寄せた。蠱惑的な色の瞳はドロドロに溶けきり、少女の手にキスを落としていく。

自分の、快楽とは別の感情を理解したヨルは、この村では禁じられている行為をした。

「わっちの名は、「ヨル」でありんす」

親につけてもらった、名前。星が降って来そうな闇世の中で生まれたから、「夜^{ヨル}」。

言葉もあえて遊女の「廓^{くわく}詞^{ことば}」を使った。

年寄りたちが平素で使う廓詞は、女の品格を感じさせる。

外の客が来た場合、老婆らはこの廓詞を意図的に崩し、言葉を意味不明にさせる。この村の過去をバレないようにし、また若い女へ男を逃げさせるためである。

「夜……う」

「今のお空じゃございませんよ。……どうか、わっちをヨルと呼んでください」

外の人間に名を明かしてはならない。

何故言つてはならないのか、その理由を女たちは知らない。

名を知つてしまえば、より強く相手への「愛」が生まれてしまう。

だからこそ、名を言つてはならないのだ。

彼女遊女たちにとって「愛」とは、空に上るシャボンのように儂く、手の届かないものであるから。

「ヨル……」

闇と混じつた紫色が、ヨルを捉える。焦点の少し合わない目は隈を伴い、より危うさを滲ませる。

骨ばつた手がゆつくりと少女の顔に伸びた。頬に触れて、唇をかすめて、そして白い首元をつかむ。そのままギリギリと力が込められた。

「あ、えっ?」

少なからず快樂に沈んでいたはずの男の顔は、無機質になつていた。

でも瞳だけは相変わらず溶けている。欲望をたつぷりと含んでいる。

息を求めて喘ぐ少女に、うつそりと吉良は笑つた。

「かわいいね」

直後、彼は押し入ってきた女に殴られ、気絶した。

その拍子に勢いよくぶつけた鼻から血が流れる。

畳に広がる赤い色はヨルの中に流れるものと同じで、それが妙に、彼女は愛しいと感じた。

??????

ヨルの事情を聞いた露伴はピルケースを見て、苦い顔をする。

薬を飲み忘れたという話は、鈴美から聞いたことがあった。彼の鞆に薬入れが入っていることを含め、おそらく意図的に飲まなかったのだろう。

それは何故か。

異常行動を誘発させ、わざと捕まるためだ。

なぜ捕まる必要があつたのか、それはヨルの話を聞きわかった。

「吉良様は、供物がある牢に捕らえられています。儀式は明日で……このままだと、きつとイリガミ様の贄にされてしまいます…!!」

「待て、供物つて何だ？もしかしてそれつて……奥に住んでる男のことか？昔ならまだしも現代で人身御供つて……ハハ！実は僕はタイムスリップしてましたっか」

「あ、あの、吉良様を助けては……」

「僕が奴を助けるだつて？何でそんなことしなくちやいけないんだ、面倒臭い。君はどうやら奴にフォーリンラブしちまったみたいだが、僕には関係ないね」

「そ、そんな……」

あの男が女をたらし込んだのも、露伴に助けるよう頼むことを織り込んだの行動だろう。

薬を飲み忘れた結果が首絞めとは、サドもいいところだ。

そもそもスタンド使いであれば、逃れることは簡単なはずだ。

「首絞め野郎ならば、その攻撃性を踏まえてパワー型が妥当だろうしな」

まるで露伴が今回の話の主演であり、巻き込まれた仲間を助けに行く過程で謎も解く——というような、展開が想像できてしまい、ひどく吐き気がする。

利用するならともかく、利用されるのは心底納得がいかない。

吉良がスタンドを使えない演技を今も続けているのかと思うと、もうこのまま帰つてやろうとさえ露伴は考えている。

「だが行こう」

結局第一目標は、『イリガミ』の存在究明——否、本当は『犬神』の調査であつた。しかしここまで深入りした以上、『イリガミ』の件を暴くまで、岸边露伴は止まらないだろう。

岸边露伴は動かない？ いや、現に動かされている。忌々しき男によつて。

それでもその口車に乗つてやろうと、ヨルに場所を案内してもらい、露伴は吉良の捕まっている場所へと向かつた。

そして無事に首絞め男を助けた彼は、本にした女に『岸边露伴、吉良吉影はこの村に害のない人間であり、船を予定通り来させる。首絞めについてはそういうプレイだった』と書き加えた。

露伴は戻る前に、気になった地下へ足を踏み入れようとする。

「どこに行くんだい？ もうイリガミの情報については、君が本にした女自ら語ってくれたよ」

「……驚いてないところを見るに、やはり僕がスタンド使いであることは知っていたのか」

「仗助くんから聞いてね。…あ、でも君とカフェで会った後の話だからな」
「クソツタレ仗助が貴様に……………」

「古い知り合いなんだよ。詳細についてはおいおい話す。イリガミの件もね。今は少し休ませてくれ……………」

吉良の顔色は救急車を呼んでいいレベルには悪い。

殴られた頭はそこまで問題は無さそうだが、一応後で検査をしてもらった方がいいだろう。

フラついた男を慌てて支えに入ったヨルは、倒れている女の懐から拝借したカギを使い、手枷を外した。

「早く寝……………の前に、風呂だ……………」

吉良はヨルに助けられながら山を降り始める。

もう一人の女については、完全に漫画家任せだ。

「フン、戻るなら勝手に先に戻ってる」

しかし露伴は構わず、奪ったヘッドライトを持って地下に入っていった。後ろから聞こえた「やめた方がいいよ」の制止を無視して。

牢屋に閉じ込められている男の状態というのも気になる。

本当は一生であるのだが、彼はそれを知らないため、祭りの一ヶ月のみと考えていた。「本当にあの幼稚園児並みの突貫力はどうかならんのか……?」

好奇心旺盛岸辺露伴くん（20歳）に仕方なし、と吉良もついていき、ヨルもその後に続いた。

露伴は入って奥に進むうちに、漂ってきた異臭に眉を寄せた。そして、その男たちの姿を見た。

その瞬間、口を押さえて全力ダツシユで外に出る。

「ほら、言わんこつちやない」

階段を降り終えた手前で露伴とすれ違った吉良が、呆れた顔で言う。

ヨルは吐いている青年を見て、不思議そうに首を傾げた。

「ゲホツ……お、お前え、正気かア……ツ!!」

「何がだい?……ああ、異臭がしてたのか。鼻が折れてて助かったな」

「わっちも家畜のようなあの臭いは苦手です」

「違う、違う違う、そつちじゃない!!!いや、そつちもだが、僕が言いたいのは……」

露伴の反応の意味を理解した吉良は「ああ」と呟き、空中に指で「入」の文字を書く。

「この村の慣習で、家の裏口に玄関があるだろ？」

「…それが、なんだと言うんだ」

吉良がその慣習を知った時、緑の非常出口の看板を思い出した。

そして仮に「入り口」が表にあつたらと考え、それを指で「入」と書いた時に気づいた。

イリガミが「入」ってくる場所。それを出口にいる逆側の人間からしたらどう見えるか。

答えは、「人」に見える。

吉良の手前にいた露伴がその文字を見て、顔を青ざめさせた。

中々面白い言葉遊びであると、作家の男は思ったものだ。

「イリガミに捧げる物は「人」であり、「犬」神の供物として相応しいものでなければならぬ。単純に女たちに危害を加えられないように、という意図もあるんだろがね」

「う、ぐっ……」

再度先程の光景を思い出した露伴は茂みに座り込み、嘔吐した。

彼の視線の先では、落ちたライトに群がる羽虫が見える。

「これは倒れている女にも言ったがね、アレは『犬』なんだよ」

しかし実際に「わん」と犬の鳴き声がするはずもなく、洞窟の奥からは「うー」と人間の声_{こゑ}が聞こえる。

それが今の露伴にとつては、強烈な姿をリフレインさせるものにはかならない。まだ生まれつきアレを普通のものとして認識している女たちはともかく、人間の倫理を持ちながら平然としていられるこの男が、気色悪くて仕方なかった。

どいつもこいつも、イかれてやがる——。

眩こうとした言葉は、また訪れた強烈な吐き気によつて遮られた。

60話 犬は人に憑き、猫は家に着く

後日談というか、今回のオチ——と言うには、まだ早いだろう。

まず体力的に限界が来ていたわたしは、衛生面の限界で風呂に向かった。

普通なら不特定多数が入る露天風呂などごめんだが、今回ばかりは割り切っている。

そして、そのまま浴場で第一被害者になっているところを漫画家に発見され、回収された。

この時点で時刻は明け方である。

わたしもだが小僧も部屋で仮眠を取っていたらしい。

ヨルという少女も、一応危害は加えられないように書き込まれた上で、わたしが使っていた布団で寝ていた。

入神の女については何事もなかったように戻っていったそうだ。

他の女たちと違いこの女は俗な知識があるようで、「首絞めⅡ過激なプレイ」と認識した。

また男二人、女一人の構図に何か察した顔つきで去つたと聞く。完全にあの小僧が余計なことを書いた弊害だ。

「まず『イリガミ』の件を教えろ。無論僕を利用するマネをした意図含めて全部な」

「わざわざ聞かなくとも君の能力なら、いくらでもあの女から読めただろ」

「確かに僕のヘブンス・ドアーなら朝メシ前だが、使えば貴様に負けたことになる。あくまで使用用途は「書き込む」までだ」

こちらとしては、その能力でさっさと謎を解いて欲しかったのだがな。何を意固地になつているのか。

そのせいで少し面倒であつたが、奴が動かざるを得ない状況を作らなければならなくなつたというのに。

ちなみにわたしの起こした行動で寝ていた奴も捕まるか、それとも様子見されるかは半々だつた。

どの結果でも、奴ならば問題ないと判断しての行動だつたが。

奴を動かす上で重要だつたのは、わたしがスタンド使いではないと思わせることだ。

だからヘブンス・ドアーの力を見た時は、「仗助のような不思議な力だ」と反応する気だつた。

しかし洞窟のところで小僧の顔を見た瞬間、すでに色々とバレていることを悟つた。

怒り方が尋常じゃなかったからだ。

その怒りの最たる理由が、以前岸辺邸で話した時のことだともすぐに気づいた。先に言っておくが、あの時はまだ、岸辺露伴がスタンド使いだと知らなかった。だが泉さんの騒動で入院した時、ちょうど東方仗助に見舞いに訪れた。

その時スタンド使いの情報について聞いたのだ。

まさかそこで「億泰」「広瀬康二」の名前を聞くことになるとは思わなかったが。

その中で「漫画家」「変人」「エゴイスト野郎」と出れば、流石に誰かわかる。というかこの世に一人しかいないで欲しい。

そこでふと疑問に思ったのが、岸辺露伴がわたしに能力を使わなかった理由だ。

「他人の記憶を読む」ことが可能なら、わたしが持つ『S一家殺人事件』の内容を読みたいと考えるはずだ。

ただ記憶は読まれていない。

その理由を考えた時、これまたカフェでサインをせがまれたことを思い出した。

わたしを本にした場合、奴は作家『星ノ桜花』の思考回路を覗くことになる。

幼き日の露伴少年は、まだ奴が読んでいない推理小説のネタバレをわたしがしようとした時、「言うなよ!!絶対に言うなよ!!」と叫ぶような子供だった。

あの時のわたしは構うことはなくネタバレをし、小僧に泣かれ、鈴美に正座を要求された。

本当に、懐かしいものだ。

過去に浸るのは、あまり良くないな。

まあ以上の理由から、岸辺露伴が『星ノ桜花』が書こうとしている作品のネタバレを恐れ、わたしに能力を使わなかったと思いついた。

この思考に至った時は作家になったことと、人の原稿を勝手に投稿した父親に感謝した。

何よりわたしが恐れるのは、自分の中身を他人に知られることだ。

殺人鬼の性や手フエチ……。特に鈴美が関わるものには触れて欲しくない。

「…なるほどな。大体の村の事情はわかった。ただ一つ気になるのは、貴様が何故『入神唯』という少女について調べていたかだ」

小僧には川尻浩作のノートの件は伏せ、大方の情報を話した。

「次作……というか、今書いているのがホラーものだと話したろう?」

「ああ。あまり興味はないがな」

「わたしだつて仕事でやつてるんだ、とやかく言うな」

このホラーの「ネタ」探しが『杜王町七不思議』、もとい『影犬』の搜索につながる。だがこれとは別に練っている案があることを話すと、ロハンくんは食い気味に迫ってきた。

「じ、次作ツ！ですかツ!？」

「落ちつけ近寄るな。詳細は教えないが、とある少女の自殺事件について調べていてね。その最中に『入神唯』の存在を入手したんだ」

「少女の自殺事件が関わるテーマ……？近年日本の自殺件数は増えてるらしいが、それについての示唆か？バブル崩壊のツケで昨年は自殺者が一気に三万台になったとも聞かし——」

「おい、聞け」

「聞いているさ。そのネタの出版予定はいつですか？」

「今は、入神唯の、話だツ」

枕で奴の顔叩き、無理やり話を戻した。

ともかく、わたしが同時期に調べていたものが、今回の『イリガミ』の件に繋がって

いたということにする。

偶然にしては出来すぎに感じられるだろう。

しかしこれを「運命」の言葉で片付けられるほどには、わたしも小僧も、それなりに大変な目に遭ってきた。

「…まあ僕と貴様が偶然出会ってしまっただけだからな。一先ず納得はした」
だが、と小僧は続ける。

「入神唯の死後、『イリガミ』が変質したとする根拠は何だ？彼女がはじめられていたからか？今まで長らく変化しなかった存在が、それだけで変わるものなのか？」

「スタンドにも【成長性】ってのがあるんだろ？それに『イリガミ』は人の願いを叶える。少女が何かを願った影響で、変わった可能性も大いにある」

そもそも『イリガミ』がスタンドであるのか分からない。

人が関わってはならないもの、というのがわたしの印象ではある。

「おそらく今のアレは——『影犬』は、縛りから外れ、不特定多数の人間の願いを叶える願望器になっていると、わたしは推測している」

「…それが流れに流れて、杜王町にやって来たというわけか」

「ああ、本当に…平穩に暮らさせて欲しいものだね」

実際は少し違うが、概ねは合っている。

「ならば、船の老人が上の人間……「入神家」だったか。その人間に認められた理由は何だ？ 確か、何かを捧げたんだったよな？」

「それは本人に聞けばいいだろ」

「それはまあ、そうだが……」

「君が能力を使わないと意地を張ってるなら、脅して聞くから別に構わないよ。人を散々な目に遭わせたんだ。指の一本や二本消えても文句は言わせないさ」

「……………」

「おやおや、まさかわたしに引いてるのか？ 村の男をあんな状態にしていた女たちとグルの男に、同情なんて必要ないだろ」

あの男に同情するくらいなら、家なき子に同情した方がマシだ。

こちらを見る小僧の顔は苦々しい。

わたしの暴力性がバレてしまった以上、隠すだけ無駄だ。

むしろこれで関わり合いを避けてくれた方が助かる。

「……貴様が心底気持ち悪い、と思ったただけだ」

そう、吐き捨てるように言われた。

本当なら腕の一本や二本といきたいところだが、流石にそこまですると警察沙汰にな

るかもしれない。あの老人の出方次第だな。

「まあ、デカイネタは得られたんだ。僕もさつきと帰らせてもらいたいね」

「あ、それについてだけど」

「……なんだよ」

「漫画のネタにしない方がいいよ」

疑問には思っていた。この村に人間が訪れるのは老人が手引きしているからだ、これだけでは観光客が村の情報を得る手段がない。

何せ本島の人間は、意図的に情報を広めないようにしていた。

だが一部、例外がいたことを思い出そう。

「定食屋の女を覚えているだろ」

「は？それが何だというんだ」

「この村の女たちは特徴的な言葉を使っていた。母や祖母を「カカ様」「ババ様」——つてね」

「……………!!」

詰まるところ、あの女店主もグル。

他にもこの村を出て、本島に潜んでいる者たちがいるのだろう。恐らくそれも「お上

“の血族が。

ルーツが本島にあったのも、あながち間違いはなかった。

商いをするにも、身分証など色々必要になるからだ。

そして、この村を案内した入神家の女が若い人間であったのも、彼女しか残っていないから、と考察できる。

そうして彼らはこの村の情報を観光客にそれとなく伝え、入神島に誘き寄せせる。

「だがそれならば、『イリガミ』を調べていた僕たちを村に誘うマネはしないんじゃないか？」

「イリガミはイリガミでも、わたしたちは「犬神」を調べていると伝えてただろう？それに女店主が島の情報を出すのに、数日かかった。その間わたしたちが村の害になる人間かどうか、判断してたんだろ」

「ああ、そうか……いや、それが僕が漫画に描いてはいけない理由とどう繋がる」

何故だと？よく考えてみる、一般人な「吉良吉影」はともかく、「岸边露伴」は有名な漫画家だ。

仮にコイツが入神島を連想させる情報を出して、それが本島にいる女たちの目に留まってみる。

「そうなった結果どうなるか、よくよく考えておくんだな」

「……ッ、だが、僕はこのネタを……!!」

「君が失踪した暁には、それを題材に書いてもいいかもね。タイトルは「犬」でいいかい？」

「……………」

「というわけだ、大人しくしろ」

「こちらが行動を起こさなければ、向こうも勘づくことはないだろう。」

「仮に漫画家「岸辺露伴」の名前を知っても、まさか本名だとは思わないだろうし。」

「逆に普通なら、有名どころの名前を勝手に使っていただけだと考えるだろう。」

「最悪調べに来て、コイツにはヘブンズ・ドアがある。「気のせいだった」と書き込んで帰せば終わりだ。」

「いいか、この吉良吉影が、小生意気なガキの心配をしてやってるんだ」

「鈴美の忘れ形見たる存在を、そう簡単に死なせてなるものか。」

「コイツを死なせてしまったら、それこそ自分が死んだ後彼女になんと言われるか。」

「僕は……僕は、クソツタレ仗助やアホの億泰と違う。もう酒も飲めるしタバコも吸える」

「ガキじゃないって？わたしからすれば君もガキだよ」

「……………それ以上言ってみろ、後悔することになるぞ」

「わたしに能力を使うか気かね？ああ、いいさ、やってみろよ。貴様の好きな作品を書く

「星ノ桜花」の脳みそだ」

ああ、きつとジョースター氏が見れば、「両方子供じやのう」と言うに違いない。

本当にこの小僧とは相容れない。あの頃から、変わらない。

そう。変わらないものがまだ、ぼくには残されている。

「ハア……」

ため息を吐き、両手で顔を覆う。向こうは訝しげにこちらを見た。

らしくない。さつさと『影犬』の一件を終わらせたら、平穩に過ごしてやる。

「ぼくは今神龍だ」
シエンロン

「ハ？……………」

すつと、懐に入れていたわたしのピルケースを差し出す漫画家。

確かに情緒は不安定だが、違うそうじゃない。

「何か一つ、願いを叶えてやるから言え」

鈴美の事件について、ずっと知りたがっていることはわかっていた。

恐らく人生の最初で最後の気まぐれだ。今までも今後とも、自分から望んで言うことはない。

これは殺人鬼としてのわたしの、トリガーでもあるからこそ。

しかし、今だけは安全装置付きだ。

青年は瞳を丸くし、そして眩く。

「貴様は今でも……杉本鈴美を、愛しているか？」

その言葉を聞いて、思わず笑ってしまった。

せっかくのチャンスを棒に振る気か、コイツ。人がせっかく、用意した厚意を。

だがこの時奴がした質問は、漫画家としてのものではない。

一人の人間としての、素の岸边露伴が、今日の前にいた。

「愛しているよ、ずっと」

薄闇の世界。閉ざした世界に窓から溢れた光が、お互いの顔に当たる。

——朝だ。

??????

今度こそ、今回のオチに入っていこう。

その前にもう少しだけ、残された謎について紐解いていくが。

船が到着したのち、わたしと漫画家は元の服に着替えて船着場へ向かった。

祭りの最終日である今日。村では『イリガミ様』に贄を捧げるのだろうが、去るわたしたちには関係がない。

小僧の方もそこは割り切ったようで、先に船に乗り込んだ。

この村にイリガミがないといっても、治外法権の場所であることに変わりはない。

「あ、あの……吉良様……！」

見送る入神家の女の隣に立ったのは、わたしが利用した少女だ。

他の女たちは村で見送っていた。

わたしを酒瓶で殴った入神の女については、ヘブンス・ドアーの影響でわたしがSMプレイをしていたと認識している。

向こうから翌朝、不祥を起こしたことに對し詫びを受けた。女は気まずげに小僧とわたしから視線を逸らしていたが。

改めて岸辺露伴のスタンドの恐ろしさを垣間見た。

「何かな？ああ……ごめんね、首については。少し気が………上がりすぎてしまって」

「いえ、いいのです。私はか、構いませんから。それで、その……」

小さくて細い手が、わたしの手を握る。このまま彼女だけ持ち帰ってしまいたい。どうせ事件にはされぬのだし、頼めば自分から斬ってくれそうだな。

「わ、わっちは貴方様のことが……す……す……」

「ヨル」

入神の女が、冷えた一言を発した。

少女は肩をビクつかせ、縋るように見つめてくる。

かつて遊女は恋をしてはならなかった。だが中には花魁から性技の手解きを受ける振袖新造が、女色に堕ちるといふこともあつたらしい。

「どうか、健やかで」

そう言い、烏羽の如き黒髪を掬い口付けた。

頬を染める少女は、わたしよりもよつほど純粹で、綺麗だろう。

「このクズめッ」

して、船が出航したのち、かけられた最初の言葉がこれである。

行きとは違う種類の酔い止め薬を飲むわたしに、嫌悪感丸出しで睨みつけられてもどうしようもない。

向こうが勝手に好意を持ってきただけだ。

「利用するだけしてポイかア？流石星ノ先生だなあ……？」

「そうカツカするなよ。水分が足りてないんじゃないのか？飲むといいよ」

多めに持つてきたペットボトルを開封する動作をして渡すと、舌打ちした青年は奪い取り、飲み出す。

それから少し和らいだ吐き気と共に、ぼんやりと海を眺めた。

そして少し経ち、横から寢息が聞こえ始めた。

眠りの漫画家の誕生である。どうやらかなり疲れているらしい。

回収したペットボトルは中身を海に捨てて空にし、同じ量の分だけ減らした別のペットボトルを奴の場所に戻した。

「さて、ご老人。少し話をしたいんだが、構わないね？」

「…なんだ」

老人はこちらが村の情報を手に入れたことを察しているのか、表情が険しい。

あの島の因習をバラされては困る以上、言い逃れはしないだろう。

まず初めに、この男と村と関係を聞いた。

彼は昔——50年以上前、漁の作業中に事故に遭い、海を彷徨った。

その結果、『入神島』に行き着いてしまったそうだ。

当時村は完全に外部との接触を遮断しており、言葉も古めかしい遊女の廓詞だった。

男は祖父母から入神島の顛末を聞かされ知っており、元々女たちを哀れに思っていた

らしい。

同族交配が多いということは、その分疾患も多く、寿命も短い。

皮肉にも、常識に疎い彼女たちは遊女としての知識から、短命を当たり前のこととして捉えていた。

村はみな若い女ばかりで。

流れ着いた彼を見た女たちは「これは生贄おとこ？」と大騒ぎになったのだと言う。

対し女たちを管理する入神家の人間は、この村の存続のため男を殺そうとした。

『お、お命だけは勘弁したもんせ！』

それに当時のイリガミ憑きは、一つ条件を出した。

——なればわつちたちに、御主の「誠意」を見せてくんまし。

男はゆえに、誠意を示した。

渡された小刀で、己の逸物を切り取って。

自分が彼女たちを害することはないと、女たちの前で証明して見せた。

そうして彼はイリガミ憑きに認められた。

それ以後男は彼女たちに受け入れられ、そして男もまた、哀れな彼女たちに尽くすようになったのである。

「それからは女たちが長く生きられるよう知恵を与え、今の体制になったのさ」

「哀れと思いつつも、随分酷な生き方を強いるじゃないか。本当に可哀想と思うなら、外の世界を知らそうとは思わないのかい？」

「……あの子らは外じゃ生きられねえよ。俺もまた、あの子らから離れるには遅過ぎた」
歴史の果てに歪に出来上がった女たちが、外で生きるには足りなさすぎる。

彼一人で補うにも限度があるが、その他の男を女たちが心から信用することはない。

わたしは場合は彼女たちの遊女としての気質と、叶わぬ「恋」という性質を利用した
だけだ。

本当の意味で信頼を得るのは、難しいと判断したからこそその方法だった。

「飛べないあの子らが外の世界を知つちまつたら、きつとその命を捨てるだろうよ。だからこそ知らないままでいい。哀れなままでいい」

「……そうか」

他人が入る隙間もない、泥ついた狭い世界で生きる彼ら。きつとその行く末は近くな

い未来崩れるのだろう。それも恐らく、陰鬱とした終わり方で。イリガミはもういない。この男もまた、長くないうちに歳で死ぬ。

「ああ……そう言えば、少しいいですか？」

「あ？何……」

老人に一枚の写真を差し出す。

それは物心つかない頃の入神唯が、一人の女に抱かれている写真。

この女は前に出会った彼女の母親である。場所は公園で、撮影者は父親だ。

微かであれど幸せな時間もあったのだと、母親は語っていた。

「この少女の左手を見てもらえますか」

「…俺は何も知らん」

「見ると、わたしは言っている」

声を低くすれば、男は渋々見た。そこに映っているのは、左手の薬指が欠けた幼児の姿。

「あなたは基本的に船の操縦時以外は、左手を隠すようにしている。この少女は島にいた入神家の女のいとこに当たるそうだな。そしてその娘の母親は外の男に恋をし、最終的に赤子もろとも身投げしている」

「……………」

「だが、少女は生きていた。コインランドリーの上に『入神唯』という紙と共に捨てられていた。時系列的に考えても、あなたの子ではない。だがもしこの村に来る前に息子がいたのだとすれば、あり得なくはない」

身体的疾患は、親から子へ遺伝する可能性がある。

同じ薬指がない。あまりにも偶然にしてはでき過ぎている。

母親がイリガミに祈り助けたにしても、手間がかかりすぎだ。誰かが意図的にコインランドリーに置いてきたとしか考えられない。

それに船を扱うこの男なら、女が落ちた後に救うことも可能だろう。

「…確かに、俺には息子がいた」

「やはりか」

「だがまだ赤子だった。指も俺とは違い全部あつて、小さな手だったよ。嫁は息子を産んですぐに亡くなり、俺も遭難して何年も帰れなかった。俺の父も母も既に死んでいたし、他に身寄りもなかったろうな。それに生きていたとしても、俺の子じゃない。それは他の両親のもとで温かく育てられた、その両親の子さ」

俺はあの子らだけでいいのさ。そう男は語った。

「島に向かつている最中、崖から女が落ちる瞬間を見てな。急いで助けたが女の方はダメだった。でも赤ん坊の方はひどく冷たくなっておったが、生きとったんだ」

或いは女が死ぬ間にイリガミに祈り、その子だけ助けたのかもしれない。

単純に赤ん坊の生命力が強かっただけなのかもしれない。

それでも、生きていた。

男はその赤子の指を見て、そして遠い記憶の我が子の顔を思い出し、全てを悟った。

「アカくなつた息子を息子と認識できなかつた時点で、俺は父親失格だ」

居場所を調べ、息子の元へ届けようとも思ったが、運命の巡り合わせか。

息子は島から戻つた直後、事故で死んでいたことが発覚した。

かといって自分が育てることもできない。父親失格の自分では。

ゆえに誰かに拾ってもらえるよう祈り、置いていくしかなかった。

この子だけは、血の繋がる孫だけは外の世界で生きてほしい。そんなエゴを踏まえ、

赤子は——入神唯は、空へ羽ばたく存在となつた。

それが犬神事件の、最後の謎解きである。

この事實は後で岸辺露伴に言うとして、このままわたしは帰るとしよう。
潮風が頬を柔く撫でる。

天上には誰にも縛られることのない蒼い空が、どこまでも広がっていた。

——と、ここでわたしが終わらせるわけがない。

この男は知るべきだ。捨て子の少女の結末を。

その結果、出来上がった『影犬』を。

そして壊されることになった川尻浩作という男の末路を。

偽善はいらない。

いるのはこの男が起こした行動の結果を、本人に知らしめることである。

自分の取った行動の責任は、きちんと償わなければならない。捨てて終わり？笑わせる。

助けたつもりだろうがその結果が回りに回り、わたしの平穩が崩される一端を担った。

大人ならきちんと責任を取る。当たり前前の常識だろうか？

「いい話だ。あなたは入神唯を救ったというわけだ」

「…救ったわけじゃねえさ」

「この写真、とても幸せそうだろ？撮ったのは父親なんだ」

「あんたは…あの子の今を、知ってるのか？」

「ああ、知っているよ。よければ話そうかい？」

暫し悩んだのち頷いた老人に、「では」と語る。

「まず入神唯が自殺するまでの経緯を、お話ししよう」

ハッピーエンドが、物語の当たり前だと思ふなよ。

61話 主人公「同僚」(偽)

川尻浩作は、妻と息子を持つごく普通のサラリーマンである。

勤め先はカメユーデパートで、業務態度も取り立てて悪いところはない。

妻子持ちではあるが、その寡黙な印象から女子社員からのウケがよく、昼食に誘われることも多かった。

彼の同僚が目によれば「やめとけやめとけ！」という言葉と共に、仔細なプロフィールを教えてくれるだろう。

そして今日も今日とて川尻に断られた新入社員の女たちが、残念そうに呟く。

「妻子持ちじゃ仕方ないけど、ご飯くらいはいいと思うのに、ねえ？」

「クールっていうか、ミステリアスっていうか……一度くらいご一緒したいわあ」

「まあいいじゃないか。せつかくだし俺と行こうぜ？」

「えー、「同僚」さんじゃイヤよお。華がないわ」

「これってセクハラですよお、セ・ク・ハ・ラ」

「おいおい、川尻はいいのに俺じゃダメなのかよ」

川尻によく付いて回る男は、川尻の同僚ということで、いつの間にか「同僚」と呼ばれるようになった。

男の名前が何だったか、思い出そうとしても中々出て来なくなるほどには、同僚の印象が強く広まっている。

所謂愛称で、本人も何故かまんざらではない。何故だ。

「川尻さんって、入社当時からあんな感じだったんですか？」

「いや、最初の頃は違かったさ。何があったのかはわからんが、一時期落ち込んで以来、今みたいにあまり人と関わらなくなつたんだよ。元から人付き合いが苦手そうなヤツではあつたけどな」

「へー……もしかして、不倫がバレて奥さんに家出されたとか？」

「さあな。まあアイツにも色々あるんだろうよ」

そのあと同僚は女社員とさらに盛り上がり、共に食事に行った。

しかしこの話が嫁にバレ、後日嫁さん仕込みの愛犬による尻噛み攻撃を受けた。

それから同僚は他の女にちよつかいをかけなくなつたとか、やつぱりかけたとか。

終盤の人数の減ったババ抜きのごとくジョーカーを引きやすいこの杜王町で、彼は平穩な日々を過ごしている数少ない人間の一人である。

??????

閑話休題。

川尻浩作の前に犬が現れたのは、同僚と飲みに行ってからさほど日が経っていない頃だった。

彼は飲みの席で同僚から“ある事実”を知らされた。お互い世帯持ちで吉良は結婚しているのか、という流れからその話になった。周囲を確認し、同僚は声を潜める。

『アイツの彼女は亡くなってよ。ほら……例の“S一家殺人事件”ってあつただろ……』

『……………』

『…仕方ねえよ、お前は知らなかったんだから』

川尻は電車で吉良と偶然会った時のことを思い出した。

あの時すでに吉良は彼女を失っていたのだ。

ということとは、川尻は喪中の男に「幸せになつてくださいね」と言ったことになる。幸せの絶頂だった彼とは違い、向こうはドン底の中だったのだ。

そこまで考え、川尻は激しく自分を責めた。

精神的に追い込まれて行つた川尻浩作は、「入神唯」の件も思い出し、日に日に病んでいった。

そうして彼は、無意識に救いの手を求めたのだ。

日本の神仏——神社でいうと、「願」とは等価交換である。

人は賽銭を入れ、神に祈る。

特に新年は煩惱を捨てたと思つた瞬間、すぐに人間の欲がフィーバータイムに入る。

「マジ人間って強欲じゃね？」と、DSが金棒を持って閻魔大王の補佐をしている世界線の神たちなら言いそうである。

等価交換の話に戻して、もし本当に「願」を叶えたいのであれば、5円や10円では到底足りない。

例として、宝くじに当たりたい人間を挙げよう。

——宝くじが当たったら半分の金額を神社にお布施いたします。なのでどうか当たらせてください。

このくらいは当たり前だ。

もっと言えば後に投資するなりして金を増やし、宝くじと当たった分の金額を神（この場合神社になるが）に返す気概がないとダメだ。

まあ、あくまでこれは例え話だ。

神などいまいと言ってしまうはそこまでである。

しかし幸か不幸か、川尻浩作の「願」に対し神が現れた。

それも厄介な神である。ソレを神と呼ぶべきか、スタンドと呼ぶべきかは曖昧だが。黒い犬のようなものは、影から現れた。

川尻浩作の、影の中から。

『……犬?』

ここで留意すべきは、川尻浩作が吉良のスタンドであるキラークイーンを見ることができたことだ。

彼は片桐安十郎が放った「矢」に射抜かれてはいない。

スタンドが見えたのも、墓参り中の吉良と出会った時が初めてだった。

その時は「あ、見ちやいけないヤツだ」と、すぐに思考の外へ追いやったが。

イリガミ——即ち『影犬』に憑かれた場合、人は自動的にスタンド使いとなる。

これはジョナサンの身体を奪ったD I Oがスタンドに目覚めた後、能力を得ることになった承太郎やジョセフが参考になる。

彼らは先祖ジョナサンのの繋がりによって、スタンド能力を開花させた。

スタンド使いである一方が、もう一方の精神や肉体に影響をもたらす。

影犬もこれと同じ原理だ。

強制的にリンクが繋がれたことで、川尻はスタンドを知覚できるようになった。

ただ「入神島」の人間じゃない彼では、影犬は取り憑けないはずだった。

しかし川尻浩作が「中村唯」に好意を抱いていたのが影響したのか、移植された他人の臓器のように、拒絶反応が起こることはなかった。

それにしてもいったい、『イリガミ』はどこから来たのだろうか。

それについては、川尻に取り憑いた犬自身が語った。

犬は彼の夢の中に現れ、かつての話をした。最初は黒い大型犬の姿だったが、都合がいいのか、途中から中村唯の姿に変わった。

『ツ……!!』

川尻をはじめ混乱したが、少女の口角が上がった瞬間、コレは違うと理解できた。

中村唯という少女はどこまでも無表情で、静寂な水面のごとき人物だった。

誰かに笑いかけると、決してなかった。

『ボク ナカムラユイのなかにいた ナカムラユイは ボクのママだった ほかにもた
くさん ママがいた』

『ママ？中村さんの……？』

『ボクは、ねがいをかなえる にんげんのねがいを』

『…中村さんは、何か願ったのか？だからオレにお前は取り憑いたのか？』

『ナカムラユイ、ねがった、ボクに、しぬときねがった』

——みんな、死ね。

そう願われたイリガミだったが、まさか一人の命を代償にして叶えられる願いではない。

1980年代初頭の世界人口である約40億人と、一人の命が釣り合うわけではない。元々イリガミは嵐が来た際に女たちを守るなど、「願い」で誰かを殺したことはなかった。

遊女たちが始末されようとしたあの時は、イリガミ自身がママ女たちを守るために殺したのだ。それに女たちもまた、神聖な存在を穢すような願いをしなかった。

イリガミにとってのバグはそれだけではない。

中村唯に憑く前の人間、即ち唯の母親に憑いていた時だ。

女は海に落ちながら、イリガミに願った。

—— わつちたちと御主の繋がりを、切つてくんなまし。

それは女の命を奪うことを代償とし、果たされた。

その願いは「愛」する心を奪われた女の、村に対する復讐だったのかもしれない。

母の母胎から切り離す時、へその緒を切るがごとく。イリガミは自由を手に入れた。

この時点で入神島の女たちと関係のなくなつたイリガミは、不特定多数の人間に憑る存在へと変化した。

憑く対象は老若男女問わない。その代わり憑いた人間が心から願うことがなければ、姿を認識されない事態が起こつた。

それも中村唯のように、心の底から絶叫するレベルでなければならぬ。

人間の業は尽きることがないゆえに組み込まれた、選別方法なのだろう。

同時にイリガミは人の「願」を叶えその代償を得なければ、存在することができなくなつてしまった。

しかもだ。中村唯はイリガミに叶えられない願いを残して死んでいった。

この時点で弱体化もいいところないリガミ——否、『影犬』は、仕方なく近くにいた川尻浩作の影へと逃げた。

そして宿主を変える力もなく、長らく存在を認識されなかつた影犬に、ようやくチャンスが回ってきた。

『たすけてほしいんだね　カワジリコウサク』

『……』

そう、川尻は祈つたのだ。助けて欲しい——と。

深すぎる罪悪感に耐えられなくなった。中村唯が死んだ時は、祈る前に川尻の心が壊れてしまった。

でも今の彼は壊れることができない。なぜなら愛する妻と子がいるからだ。だから、祈るしかなかった。

『助けて、くれるのか？ 本当に……？』

『ボクは「かげいぬ」ひとのねがい　かなえるそんざい　さあ　いのつて　ボクにい

のつて ねがいをかなえる カワジリコウサクのねがい』

『ツ……頼む、オレを……助けてくれ……!!』

それに影犬は、中村唯の姿で優しく笑った。

過去の罪悪感だとか、しのぶへの想いだとか。そんな全てを吹き飛ばしてしまう妖しい何かが、そこにはあった。

深淵を宿す瞳の奥には果てがない。

それに吸い込まれるような感覚がした直後、川尻は目を覚ました。

以後、川尻の中で罪悪感を見る影もなくなった。

単にそれは影犬がその感情を引き受けたというのが、夢で聞いた説明である。だが忘れてはならない。神とは、代価なしに願いを叶えないということ。

影犬はいつたい彼の願いに対して、何を代価としてもらったのか。それは、川尻の付けていた日記を見ればわかる。

初めは些細な変化だ。朝起きて歯を磨いていたはずが、いつの間にかキッチンにい

て、嫌いなはずの権茸を食べていた。しのぶが「皿を間違えているわ」と慌てて変えたのが始まりである。

それから気づけば、一瞬のうちに周囲の状況が変化していることが増えた。

影犬にこの異変を伝えれども、中村唯の姿をした存在は不思議そうな顔をして、「わからない」と言う。

そう、わからないのだ。影犬からしてみれば。

もちろん川尻の異変はこの犬の仕業だった。仕業とはいっても、影犬は自分の行いが「悪い」と認識していない。

「願」の代価として起こっていることになぜ人間が焦るのか、わからなかった。

時間が経つほど、川尻に空白の時間が増えていく。

その間の彼は「川尻浩作」でありながら川尻浩作ではない存在になっていて、妻には冷たい態度を取られることが多くなった。

同僚には、「最近大丈夫か？」と心配されることが増えた。

最終的には一日の、ほんの少ししか意識を保っていられなくなった。

何故だ、何が起こっている。相談しようにも妻や息子を巻き込むわけにはいかない。

川尻はそして意識のある僅かな時間を使い、己の異変を日記に書き留めた。

一日の空白の時間をこと細かに書く。これを持って精神科にも訪れたが、検査結果は異常なし。

それはそうだ。影犬が彼のストレスを背負ってくれているのだから。

それだけでなく、川尻の全てを、背負ってくれているのだから。

川尻浩作の代価として、影犬は彼の存在そのものをいただいた。少しずつ、少しずつ。そして最終的に、影犬が「川尻浩作」になる。

肉体さえ手に入れば、影犬という存在はより強固なものになる。曖昧な存在ではなくなるからだ。さらに人の願いも叶えやすくなる。

ここにきて、影犬はさらなる変化を遂げた。

身体が手に入り、願望器へと変わったのである。

これにより複数の人間の願いを、等価交換ありきで行えるようになった。

要はワンコ版キュウベエの誕生である。

そしてその願いの代価に、影犬は人間の生命エネルギーを得ることとなった。

川尻浩作に成り代わったソレは、元の人間の情報を本体から得て、それに基づき行動する。まるで、プログラミングされた機械のように。

この時点で「川尻浩作」の人格は消えていた。

しかし彼は「日記」だけは守り通した。影犬の意識がある時に見つからないよう、細心の注意を払って。最後の方は、マトモに書くことさえできなかつたのだが。

川尻はどうすれば助かったのだろうか。

犬に取り憑かれたのだと騒げば、きっと異常者扱いされて終わりだった。

まあもう、すべてが遅い。

すでに川尻浩作はいないのだから。

あるのは彼の最後の「願い」が残された、日記だけ。

——オレを、ころしてくれ

この最後のミミズ文字を見た時、殺人鬼の性を持つ男はいったい何を思い、そして感じたのだろうか。

答えは簡単だ。

吉良吉影は平穩に、普通に暮らしたい。

しかし禍根がある以上、平穩に暮らすことはできない。

「では、殺そうじゃないか」

吉良は自分の手で人間は殺さない。

逆に言えば、自分が殺さないなら他人を利用して殺してもいいと考えている。

川尻浩作の姿をしたソレは人間の姿をしているが、中身たる精神がない以上、人間ではない。

だが川尻浩作の精神がまだ残っている可能性もある。

それらの考察を深める上で日記を見た吉良は、『イリガミ』の件を調べた。

つまるところ吉良の犬神探しは、大義名分を得る旅だった。

「川尻浩作を殺してもいい」という、大義名分。

川尻浩作の精神は既になくなつたのか。

犬神とはその人間の精神を乗っ取ってしまうほどの脅威があるのか。

そして犬に乗っ取られた今の川尻浩作は、自分の平穩を害する存在であるのか——

それらを含めいつときの平穩を犠牲にし、らしくもないことをしてまで調べた。

そして杜王町へ戻ってきた吉良吉影は、最後の答えを出す。

6 2 話 しあわせはく歩いて来ない。だから歩いて行くしかない。

長い乗り物旅を経て、吉良は杜王駅に戻ってきた。

睡眠薬でぐっすり朝まで熟睡さ、な男はホテルの部屋に捨てて行つた。そして自分だけさつさとフェリーや新幹線、電車を乗り継いで帰つた。

漫画家が寝てからのことは後で教えればいいだろう、という考えである。

そもそもあちらは飛行機での帰りなので、残りの日数は向こうで過ごさなければならぬ。

とにかく吉良は一分一秒でも早く家に帰りたいかつた。

さらに台風が近づいていたので、ことさら船が運休する前に乗りたかつた。

帰りの道中では仕事の件で出版社に立ち寄つた。それから一旦ビジネスホテルに泊まつて、杜王町に着いたのは翌日の夕方頃だ。

ホテルには泉を呼んだので、多少は眠れている。

「ちよつと老けました？」と彼女に言われ、地味に傷ついていたが。

「…ん？」

サラリーマンの帰宅ラッシュを眺めていた吉良はふと、人だかりの中心に目を留めた。

ある人物はその光景に気づくと足を止め、またある人物はチラリと見ただけで足早に去っていく。

人の視線を集める正体は、血まみれの男だった。

髪は染めているのか否か、白黒混交した髪をオールバックにしている。その一部は乱れていた。

満身創痍な様子だが、男の表情だけは変わらない。無表情で、何を考えているのか読み取れない顔だ。

「おやおや…昔会った時と髪型が変わっているが、川尻くんかな？」

「……………」

今まさにタクシーを呼び止めた吉良の目と、無機質な瞳がかち合う。

川尻はそのまま彼に近づくと、相手を押し込み自身も中に入った。

「病院に行った方がいいんじゃないかい、それ」

「オレ今、知らない人間に追われていて…助けてくれませんか？」

「そうなのかい？ だったら病院に……」

「病院は、ちよつと苦手で。匿つてもらえると、助かるんですが……」

「別に構わないが……何故わたしの家なんだい？」

川尻の中に入っている影犬と吉良は、今回初めて対面した。

その時不意にスンと、鼻を鳴らす音が聞こえた。吉良が音の出所を探れば、川尻の影から真つ黒な犬の鼻が突き出ている。それが匂いを嗅ぐたびに、鼻先の部分が動く。

なるほど、と吉良は納得した。

以前川尻の部屋に入った時、彼の匂いが残っていたのだ。その匂いと、今の自分の匂いが同じことに気づかれた。

川尻ではなく影の方が匂いを嗅いでいるということは、本体の方に関しては普通の人間と機能は変わらないのだろう。

しかし吉良が川尻の周囲を調べていることに、この犬はすでに勘づいている。

つまり、この状況は吉良にとって危険な状況だ。向こうは自分の秘密を探る存在を邪魔に思い、消そうとするに違いない。

「オレと、同じ匂いがするからですかね」

「同じ匂い？」

「ケモノの匂いがするんです。あなたのは猫畜生に似ている。それに人間の命を奪って
も、何とも思わない瞳をしている」

「おやおや、猫が嫌いなのか？ 私は世間一般で言う『イヌ派かネコ派か』問題に対して、
「どちらかと言えばネコ派」と答える人間だからね。猫嫌いな君は犬派かな？ これでは
旧知の中であれど、道を分つしかないな。犬猿の仲になるしかない——いや、この場合
なら「犬猫けんびょうな仲」かな。残念だよ川尻くん」

「どうでもいいので、さっさと行ってもらっていいですか？」

「だが断る………と言いたいが、生憎これはわたしのセリフじゃないな。断ったらその
犬が怖そうだし……運転手、わたしの家まで頼む。住所は……」

恐らくスタンド使いであることはバレている。影犬は人間ではない。スタンドその
ものたる存在だ。

ゆえに、感覚的に誰がスタンド使いなのかがわかる。

吉良が影から出た犬を見た時も、影犬の警戒心は変わらなかった。

普通スタンドが見えた時点で、「スタンド使いはスタンド使いにしか見えない」という

性質を知っているなら、警戒するだろう。

知っている場合は途中から警戒しなかった理由がつかず、知らない場合でも最初から警戒されていたことに説明がつかない。

そもそも吉良も後から気づいたが、『影犬』は一般人にも見えるらしい。

ルームミラーに映った運転手の顔が青ざめていた。男の視線はちょうど川尻の足元に固定されていて、影から出た犬を見ていた。

ス・タ・ン・ド・で・あ・り、ス・タ・ン・ド・で・は・な・い。

その確証が強まった瞬間である。

「……」

タクシーが発車した際、吉良は路地裏から大通りに出てきた凸凹コンビの姿を見つけた。空条承太郎と広瀬康一である。

承太郎の姿に、彼の表情は苦虫を噛み潰したようなものに変わった。

二人は周囲を見渡し、何かを——いや、誰かを探している。

どうやら彼らは影犬の正体にたどり着いていたようだ。

やはり「運命」というものなのだろう。

そしてその運命は今川尻浩作と出会ってしまったことで、吉良にも降りかかっている。

——大人しくしていればよかつたか。

いや、承太郎たちも詳しい『影犬』の情報は知らないはずだ。

「人に憑る」という性質を知らなければ、犬を取り逃してしまう可能性が高い。それは吉良の望むところではない。

確かに「殺した」という事実が欲しい。スタンド使いが集いやすい奇妙なこの町の性質上、影犬がこの町から出て行かない可能性があるので、自分の手で始末し、ぐつぐつと眠りたい。

普通に、植物のように平穩に暮らしたい。それが今の吉良の原動力であり、逆に言えばそれしか生きる理由がない。

けれど、それでも生きていく。

それが「吉良吉影」という男。

死神に愛され、他人に不幸を振りまきながら自分も闇の中で生きている、滑稽な男である。

「笑ってるんですか？」

「ああ、笑っているよ。偶にどうも、無性におかしくなってしまうことがあってね。自分でもどうしようもないんだ」

「おかしくなる理由があるんですか？」

「あるよ。自分がおかしいのさ。普通に生きたいにも関わらず、中々平穩を得られない自分が愉快でね」

「そうなんですか」

「……………」

非日常に巻き込まれた運転手が完全に沈黙する中、タクシーはアスファルトの道を一定の速度で進む。

その時ふいに、川尻が口を開いた。

「平穩に暮らすことが、吉良さんの願いなんですか？」

「わたしの願い？まあそうだね。ただ自分で叶えるから、別に誰かの手を借りることは

ないかな」

「そうですか」

「ああでも、あるにはあるよ……おっと、愛しの我が家に着いたようだ」

タクシーの中で影犬には、家に連れて行かなければ殺す——という、暗たる黒い意思があつた。

それを読み取り、吉良は家に招くことを選んだ。

「先に怪我の治療をした方がいいね。にしても本当に血まみれだな」

玄関を閉じ、吉良は靴を脱いで上がった川尻を見る。

犬が吉良の願いを聞いてきたということとはつまり、次の宿主を探しているのだろう。

標的は無論、今影犬の後ろにいる彼だ。

しかしなぜ吉良を選んだのか。

承太郎たちに正体がバレた時点で川尻の肉体を捨て、逃げることもできたはずだ。そして他の人間に憑いてしまえばいい。

だが今の影犬はそれをしていない。

考えられるのは川尻浩作の肉体から逃れられなくなった可能性だ。

元々犬は人の願いの末、何度も変質してきた。

そうしてまた変化した結果、出られなくなつたのかもしれない。

あるいはもっと単純に、影犬の波長に合う・合わないということなのか。

その点、吉良は川尻浩作に妙なシンパシーを抱いている。

殺人鬼のサガとかそういったものを抜きにして、「コイツは自分に似ているな」と感じた。

これは男女の一目惚する感覚に近い。相手の波長が自分の波長に合う。

だからこそ、犬は吉良を選んだのかもしれない。

「それで「願い」ってなんですか、吉良さん」

吉良は玄関に向いていた身体を川尻に向ける。

何でも願いが叶う。それは果たして、死者を蘇らせることも可能なのだろうか。

少し乾いた、薄い唇が開く。その姿は逆光を受け、闇に包まれた。

「それはね——、」

ただほの暗いシルエットの中で、その妖しい紫目だけは光っている。

まるで、猫のように。

63話 本当にあった○○な話

吉良が川尻浩作と遭遇した一方その頃、『影犬』を探していた仗助たちにフォーカスを当てよう。

その前にまずは彼らが「川尻浩作Ⅱ影犬」だと知った経緯を話すために、時を遡る必要がある。

吉良と露伴のコンビが組まれていた時、杜王町では康一と由花子が『決して振り返ってはいけない小道』を調べていた。

二人はそこで、一人の女と出会った。

綺麗な、と一概に片付けられない女の美しさは、辻綾に「こんな美しい人がこの杜王町にいるなんて……」と言われた由花子でさえ、思わず息を呑んでしまうほどだった。

対し康一はカノジョがいるにも関わらず、一瞬でもその女に見惚れてしまった。それに気づいた由花子は女にキレ、相手と一切話さなかった。

『私、幽霊なの』

女にはしかし足があつて、普通の人間と変わらない。

そんなまさか——と思つた康一に、女はイタズラっぽい笑みを浮かべた。

『死ぬ前の姿は見られたものじゃないから、いつもこの姿でいるの。人と話すのなんて久しぶりだなあ……』

幽霊の女は、小道に縛られてしまつた存在だという。

曰くこの道は、あの世とこの世の狭間。

行方不明者が多い杜王町では、亡くなつた者の魂がこの道の頭上をよく飛ぶのだという。

「……あの、ちよつといいですか?」

康一は重ちーの話を切り出した。

この小道は正規のルートを通らなければ抜け出せない、と幽霊から教えられたため、もしや……と考えた。

もちろん彼は重ちーの特徴も事細かに伝えた。

果たして出た返答は、「YES」。

暗い表情を浮かべた女に、二人に緊張が走る。

『その重ちーくんって子は…犬に食べられたの』

聞けば、三日前の日も更けてきた頃のこと。

ひどい形相をした少年が、この小道に迷い込んだのだという。少年は暗闇から迫る何かから逃げていて、表情は恐怖に引き攣っていた。逃げる最中で転んだのか、体には所々に傷があったという。片腕にいたっては肉の一部がごっそりと、まるで獣に食われたように欠けていた。

重ちーは錯乱気味に、大声で言った。

——犬ツ……犬だどオ…!!

重ちーは学校帰り、例の如くスタンドを使って小銭を集めていた。

それだけ見れば、普段と変わらない日常だった。

ただ彼は欲を出し、いつも帰る時間を過ぎて小銭集めをした。

夏休みも間近で、欲しいゲームを前にして欲を出してしまったのだ。

その欲深さに少年は自ら、溺れる結果になる。

重ちーのスタンドの一体が公園の自販機に落ちていた小銭を拾っていた時、ソレは現れた。

ソレは影と影を移動するように、赤いランドセルを背負った一人の少女を追っていた。

影の移動は一定以上距離があるときできないらしく、時に遠回りをする。

必死に走る少女に、ソレは影から顔を出した。

真つ黒な犬の口から発せられたのは、少女の声である。

走っていた少女は驚き、誰かの名前を呟いた。その声は、少女の友だちと同じ声だったのだ。

【死ね死ね!!○○なんか死んじゃえ!私の好きな男の子を取った罰だ!!死ね!!】

その「○○」とは逃げている子供の名前だった。何で、どうして、と少女は混乱する。その拍子に足をもつれさせて転んだ。

とうとう少女に追いついた黒い犬は、がパツと、口を大きく開ける。

【死ね死ね!!○○なんか死んじゃえ!私の好きな男の子を取った罰だ!!死ね!!】

また同じ声が流れて、少女の顔は絶望に染まったまま、頭からすっぽりと喰われた。ゴリゴリ、ガリガリ、あるいはグチャグチャ。

無常に聞こえる咀嚼音が、静寂な世界に響く。

その様子をハーヴェストは自販機の下から見ていた。

しかして群体型のハーヴェストは、一体一体の感覚を本体の重ちーにフィードバックしているわけではない。

ハーヴェストの行動原理は、「本体が命令したとおりに行動する」ことである。

悍ましい惨状をその一体は見たが、そのことを重ちーは知らない。10円玉を抱えたハーヴェストはそして、本体の元に戻った。カサツと、茂みの音を鳴らしながら。

その音に、犬は気づいてしまった。

それから重ちーが金を回収している中、追ってきた犬が現れた。

見られたと認識している犬は、目撃者を始末すべく少年に襲いかかる。

だが、すぐに重ちーは犬がスタンドだと判断し、ハーヴェストで応戦した。

——キャンツ!!

鋭い歯で噛まれた犬は影へと沈んだ。

それでも影と影を移動しながら隙を見て、重ちーの腕へと食らいついたのである。

そこから分が悪いと判断した少年は逃げた。仲間に助けを求めて。

きつと仗助たちならば犬を倒してくれる、と。

だが犬の執念は恐ろしかった。

どうにかハーヴェストを使って逃げきった重ちーは、気づけば『小道』の中にいた。安堵のしたのも束の間、犬は追ってきた。

——く、来るなど……来るなどオ——!!

こうして、彼は捕まってしまったのだ。

『これ…その子が落とした物よ』

あの犬に襲われれば、幽霊でもひとたまりもない。

ゆえにゴーストの女は身を隠した後、あるものを拾った。

それは小銭が入った小袋だ。赤い血が、べったりと付着している。

それを受け取った康一の目が変わる。

「だ、大丈夫…康一くん？」

「……許さない」

康一は重ちーととりわけ関係が深かったわけではない。

でも仗助や億泰から話を聞くことはあった。守銭奴などころはあるが、悪い奴ではないと。

「…聞いてたんだ、仗助くんたちから。重ちーくんは、両親想いの子だったって」
憎いようで、憎めない後輩。

宝くじの一件で痛い目に遭った仗助と億泰だが、それなりに重ちーを可愛がっていた。

それこそ、昼食を共にするくらいには。

「僕が、その犬を見つけて出す」

影から現れた犬。だから、『影犬』。

幽霊の女は力になれないことを詫びた後、二人を出口まで導いた。

『ここから先は振り返っちゃダメよ。振り返つてはいけない小道。それがこの場所』

女は手本を見せるように先に歩いてみせた。

そして二人が無事に出了られた後、彼女は消えていった。一つの、「お願い」を残して。

『君たちに頼みがあるの。もし「吉良吉影」という男に会ったら、私がここにいることを伝えて』

「吉良……吉影？それって……」

康一は一度、その名を聞いたことがある。カフェで激情した露伴が、「吉良、吉影……!!」と言っていた。

星ノ桜花の本名であるそれは、作家本人に迷惑をかけてはならないからと、ひっそりと心の奥にしまったものだ。

先生の純愛ものを読んだ康一はその後ファンになり、サインを得なかったことをかなり後悔した。ちなみに由花子も星ノのファンだと判明し、最近は休日に二人で映画やド

ラマを鑑賞している。

『おねがいね』

微笑し、女は消えていった。

女の名前を聞き逃した——と思うと同時に、そこで康一は本当に彼女が幽霊だったのだと自覚し、阿鼻叫喚とした。

これは本当にあった、小道の話。

???????

康一と由佳子が小道で幽霊の女と会った翌日。『影犬』の情報が仲間内で共有された。この場にはジョセフもあり、離れた隅の方で徐倫や赤ん坊と遊んでいる。話し合いの中では影犬の能力について意見が飛び交い、考察がなされる。

また、昨日得た重ちーの目撃情報についても、承太郎の口から伝えられた。

目撃情報の入手が遅かったのは、ハーヴェストを使って逃げた重ちーが壁や屋根など、人目のつきにくい場所を移動していたからだ。

そのため目撃者を探すのに手間取った。

「やんぐうしげきよ矢安宮重清を襲ったスタンドの外見は影から生える犬だ。外観は非人型で、おそらくタイプは「遠隔操作型」だと考えられる」

能力については噂を元に、「人の願いを叶える」ものだと考えられた。

もしその力が本当の場合、影犬はどうやって人の願いを受けているのだろうか。

スタンドを飛ばし人の、例えば「金が欲しい」という話を聞き、叶えているのだろうか。

ただ噂の中には、『人を不幸にする』という部分がある。

この点に「願いを叶える代わりに、何か頼んだヤツからもらってんじゃねエのかア？金とかよお」と億泰が呟く。

承太郎はこれに一理ある、と判断した。

代価として何かを受け取っている可能性は大いにある。等価交換というやつだ。

でなければ、「人の願いを叶える」というのはあまりにも都合が良すぎるし、能力が強すぎる。

また、叶えられる願いの「限度」も存在するはずだ。

重ちーが襲われたことにもきつと理由がある。

今までその尻尾さえ掴めなかったことから、目撃者を殺害してきた可能性が高い。

「願い」の中には、誰かを殺害することを頼んだ者もいたはずだ。

重ちーは見てはならぬものを見て、殺された。

億泰の『ザ・ハンド』に削り取られた物体のように、影犬に食われた矢安宮重清はど

こへ行ったのだろう。

どこへ彼は、消えてしまったのだろう。

恐ろしいわと、由花子が顔を青くした。

そして重要な、影犬の捜索に関してだ。

幽霊の女の証言から、犬は影と影を移動するらしい。

しかしなぜスタンド使いではない幽霊の女が、スタンドである『影犬』を見たのだろうか。これは由花子の髪と同じ、「物質同化型」の一面があるからかもしれない。

「物質同化型」は対象の物体を本体が操っているだけで、普通の人間でも視認することができる。

影犬も影と同化しているからこそ、人に見えるのだろう。

影の中に入られては攻撃ができない。しかし、向こうも攻撃する時は影から出てこないといけない。

今回の戦いは接近戦となり得る。

ただ、数の多い仗助側が有利か——と思われそうだが、そう簡単な話でもない。

何せスタンドを影犬に食われてしまうと、深刻なダメージを受ける。

スタープラチナやクレイジー・ダイヤモンドが有する「スピード—A」並がなければ、いざという時反撃も難しいかもしれない。

とまあ、遠距離型で戦えば有利であるが、間合いに入られてしまうと防御手段がなく殺られる。

逆に近距離でも、相手よりスピードがなければ殺られる。

戦闘には、細心の注意が要求されるだろう。

その時真剣な表情で「オレのこのザ・ハンドで…」と呟いた億泰を、皆揃って見た。本人は「エツ？」と、マヌケな声を漏らす。

意気込みは十分で結構だ。ただそれに反して、ひとしおに心配を抱かせる男である。

一先ず影犬は、制圧可能だと判断された。

相手は人の「願い」が発生すれば驚異的な存在となる。

だが逆に言えば、「願い」ありきでしか、その恐ろしい力を発揮することができない。

「各自搜索する場合は、複数人で行動するように。見つけたらなるべく俺か仗助を呼べ。また幽霊の女の情報から、敵のスタンドがハーヴェストによって負ったとされる傷が

あつたと聞く。身体の複数の部分に怪我をしている人間や、影がない人物を見た場合は本体の可能性があると考えて欲しい」

その承太郎の一言を最後に、場は解散となった。

それぞれ決意、あるいは暗い面持ちで去っていく中、仗助は小銭袋を握りしめた。父親譲りの蒼い瞳の奥に潜む、黄金の精神。震える仗助の肩に、彼より大きな手が触れる。

怒りに震えているのか？——と、承太郎は少年の表情を窺った。

「…俺、守るって……じいちゃんと約束したのに……」

仗助の心に重くのしかかるのは、かつて承太郎やジョセフが通った道だ。大切な仲間を失う。

しかし皮肉にも、その喪失を経て彼らは精神的に大きく成長した。

「許せねエ……」

呟かれたその言葉は敵に向けたものであり、彼自身に向けられたものでもあった。仗助は視線を上げ、自分より上背のある男を見つめる。

「俺が絶対に犯人を見つけます。この杜王町を、守るためにも」

承太郎はその時初めて、ジョセフが口うるさく言っていた言葉の意味を理解した。強い正義心は人々の心を星明かりのように照らし、彼らの影を地に刻ませる。

だがその美しさは同時に、危うくもある。黒い海に映る月の影法師のごとく、水面が揺れる度にその姿が崩れてしまう。

「お前には仲間がいる。くれぐれも無理するんじゃないぜ」

そう言った承太郎に、赤ん坊をあやしていたジョセフから「お前もじやがの」と冷静なツツコミが入る。

しかししてこの三人が三人、それなりに無茶をしてしまう人間の集まりだった。

そして、仗助が去った後。

残ったのは学者と老人、それと赤ん坊に、遊び疲れて寝落ちした少女だ。

「それにしても康一くんが言っていた女性の幽霊とは、誰だったんじやろうな。聞き逃してしまっただが…」

「それは後でいいだろ、ジジイ。今は犬の方を探すことが優先だ」

「まあ、それもそうじやな」

承太郎は「ムニヤムニヤ……ダデイ…」と呟く娘を抱っこしながら、一つの可能性を考えた。

『小道』が存在するその場所。

そして——「吉良吉影」に、自分がその場にいることを伝えて欲しいと、幽霊の女が頼んだこと。

名前については康一が聞き損ねたため、不明のままだ。

容姿についても承太郎は聞き忘れていたが、その女の幽霊が誰なのか、吉良吉影を調べていた彼ならば想像がつく。

今あの男がこの杜王町にいない情報は入っている。

何か、調べている。それはこの場にはいない（康一から旅行に行ったらしいと聞いた）
岸辺露伴も同様だろう。

白学ランの下にベストと黒のタートルネックという夏にケンカを売る男の頬から、汗
が伝う。

地面に落ちた水滴は、アスファルトへと吸い込まれていった。

64話 ぼくのパパはパパじゃない

「あなたどうしたの、その怪我ッ…!？」

その日は、川尻家にとって代わり映えのない一日で終わるはずだった。

一混乱が起きたのは、夕方ごろ。川尻浩作が帰宅してから始まる。

夫を心配するしのぶの声に、二階の自室で宿題をしていた早人は気づいた。

「玄関からママの大声が聞こえたけど…どうしたんだろ？」

早人は部屋を出て、階段の上から顔を覗かせた。

しのぶは革靴を脱ぐ夫の後ろに立ち、顔を青ざめさせている。

「…!」

浩作の白スーツに所々血が滲んでいる。

腕や足など怪我は複数に及んでいて、いつも無表情な男の顔も血の気が失せていた。

つまり、それだけ血を流しているということだ。

ただ、思ったよりもしつかりとした足取りで川尻はリビングに向かった。

「…パパ、どうしたんだろ？」

川尻は病院には行かず、しのぶに手当てしてもらっていた。

夫に愛想を尽かしていた女も、流石にちよつとどころではないケガを見れば心配もするようだ。

早人は嫁の視線も気にせずロボットのよう夕食を食べ始めた父親に、例えようのない不気味さを感じた。

今日起きたこの出来事が、少年に「何かがおかしい」と思わせるきっかけになったのだ。

思い返せば早人の物心が付き始めた頃から、父親は家族に関心を持たなくなった。

彼がまだピカピカの新生生だった当時、学校の授業で描いた家族の絵を見せたこともある。

だが浩作は一瞬視線を向けただけで、何の反応もしなかった。

それからは少年は父親に愛情を求めなくなった。

夫の冷たさを受けて同様に家族に関心を持たなくなった母親にも、愛を求めなくなった。

愛情を求める分だけ、自分が辛くなってしまうから。

だが、両親の大学の同級生である「吉良」という男から二人の学生時代の話を聞き、少年は自分が「両親に愛されて生まれた子供なのだ」と、知ることができた。

それは吉良が川尻宅に襲来した後、不器用ながら早人が作った料理をしのぶが食べたことで、より強固となる。

—— あんたへタね、みてくれも悪いし。まあでも…初めてにしては、頑張った方なんじゃない？

そう言い微笑んだ彼女の顔は確かに、「母親」だった。

少年がずっと希求し、諦め、遠ざけていた理想。それが叶った時、早人は自分が「愛されている」のだと自覚することができた。

彼はその時、一人の子供になれたのだ。

だからこそ川尻早人は幸福な日々のためならば、自分が危険になることを惜しまない。

それは両親の過去を知った上で、在りし日の姿と一変してしまった今の父親の姿も相まって、より強く決意させる。

父は何か隠している。それも世間にバレればかなりまずいことだ。でなければ病院を拒まないだろう。

しかし隠し事がどういった類なのか、それが犯罪に関わるものなのかはまだわからない。

ママは、ぼくを守る——。

川尻早人の精神はこの時、黄金に輝いた。

食事が終わった後風呂に向かった父の背を見つめ、彼は早速行動に移した。

その前にまず皿洗いを手伝って、洗濯物を畳むしのぶを確認してから下着を持ち、浴室に向かう。

最初は父親の行動を探り、その秘密を探っていくべきだろう。

その一步として臨んだのが親子風呂である。

「あつ」

服を脱いだ早人は意を決して、曇りガラスの扉を開こうとした。

しかし「父親と一緒に風呂」という初めての体験（少なくとも自分が覚えている限りでは）を前にして、緊張からちよつとだけしか扉が開かなかった。

「……………」

浴室に浸かっている浩作が、ジツと早人を見ている。

サラリーマンになってから十年以上。しかしその体は筋肉で引き締まっている。

低身長シヨタボデイ、さらに顔も声も中世的な息子とはえらい違いだ。

だが見逃してはならない。

浩作の体にある、何か歯のようなものでつけられた傷を。

「……………」

両者無言。今の少年は絵面だけ見たら覗き魔だ。

それか、『早人はミタ』だろうか。

この場合早人は小学生ではなく、家政婦でなければならぬ。いや、「家政夫」でもいいかもしれない。こちらの場合『早人はミタゾノ』になる。語呂が悪い。

そもそも「家政夫」自体造語であるので、やはり「家政婦」か。そこを問題にするならもはや『早人はお手伝いさん』でいいだろう。

閑話休題。

早人は深く息を吐き、扉を押しやった。

漫画で女子の入浴シーンにアニキたちの邪魔をするケムリが、翌日の中をモワモワと漂っている。

「お、お風呂いつしよに……入っても……」

……いいかなあ〜っつ？ 『パパ』!? 偶には親子水入らずで……」

カコオンと聞こえた、ししおどしの幻聴。

無言で湯から上ろうとした父に、少年は慌てて背中を流すことを提案する。

「ほ、ほら、座つてよ。パパ！ぼくが洗つてあげるから!!」

「大じよ——」

「いやあお客さん、いい体してますねエ〜ッ!!」

結局浩作はなすがまま、背中を洗われた。早人は父の身体にある傷に気をつけながら、記憶に焼き付けるように広い背を見つめた。

???????

それから数日間、早人は父親の部屋に監視カメラを仕掛けたり、日頃のちよつとした行動——革靴の履き方や食事を取るとき先にナイフを取るのか、フォークを取るのかなど——に至るまで、細かに観察した。

時折感じる視線に浩作が首を傾げることもあつたが、そこは「パパともつと仲良くなりたくて」と誤魔化した。

また父の体にあつた傷についても調べた。平日の午後、訪れたのは図書館である。

小学校は夏休みに入っていて、人も多かった。

「動物の本は……」

浩作の傷は人間に負わされたものではなく、動物に噛まれたみたいなきずだった。

傷口は小さい割に鋭くエグられていて、犯人はかなり小さな生き物だと考えられる。それもおそらく硬貨より少し大きいくらいのサイズだ。

「いないよなあ……そんな動物」

分厚い本を閉じ、早人は新たな本を取りに行くが、読んでいた本を戻しに向かった。

少年の腕に積み重なるブックタワーは不安定に揺れる。そしてちょうど曲がり角に差ししかかった時。

「あっ」

宙に本が舞う。

尻餅をついた少年は思わず、投げ出された本から身を守るように体を縮こまらせた。しかし痛みは襲って来ず、気づけば床に積み重なるようにして本が置かれている。

早人が呆然としてしていると、ぶつかつた人物から声がかけられた。

「えつと、大丈夫？」

「…あ、う、うん。ごめんなさい」

高校生に手を引かれ、早人は立ち上がる。

目の前の高校生の身長は彼よりは大きいのが、平均からすればかなり低い。

髪の色は銀か、クリーム色に近い。逆立つた髪は紛うことなきスーパーなS人。

まさかブリーザによつて滅ぼされたS人の生き残りがいたのは、よもやよもやだ。この男もまた、ズルズルボールを集める旅をしているのだろう。

「あの、怪我は大丈夫ですか？」

「えっ？ ああ、僕は大丈夫だよ。夏休みの自由研究かな？ 本を運ぶ時は気をつけてね」

そう言い、高校生は去つていった。

不思議な雰囲気の中だった。そこで早人は本来の目的を思い出すと、本を戻しに向かつた。

その後調べたが結局該当しそうな動物は見つからず、日が過ぎた。

そして、父親が怪我をしてから一週間以上経った、ある日の夕方。

友人と遊んでくる——と母に告げ、早人は駅の方向へ向かった。その近くには浩作の勤めるカメユーがある。

ここ最近はずっとこうして父の動向を探っている。

今のところ変わった様子はない。だが早人が監視するようになってから、浩作の帰りが早くなった。

他人との付き合いがないような川尻だが、大人の付き合いがあるのだと少年はこれまで考えていた。

だが、違う。

川尻浩作は帰宅するまでの間、何かをしていたがゆえに、帰りが遅かったのだ。

だからこそ早人は敢えて、その日は途中で帰ることにした。

しかし本当に帰るわけではない。あくまで“フリ”だ。カメラ片手にカメユーのすぐ近くにあるカフェで身を潜め、父親が出てくるのを待つ。

「あー！」

仕事が終わった浩作が同僚らしき男と共に出てきた。

同僚の方は何か声をかけているが、首を振って川尻は歩いて行く。

このまま家に帰るのだろうか？少年がそう考えた矢先だ。

「え……」

川尻は何故か、駅の方に向かう。まさか電車でどこかへ行く気だろうか。

父親の視界に入りそうになり、咄嗟にテーブルの下に隠れた少年の心臓が、不規則に脈打つ。それに伴い「ヒュウ」と、細い息が漏れる。

やはり川尻浩作は、何か隠している。

早人は急ぐ気持ちを抑え、会計を済まして駅に向かう。しかし学生が先に並んでいたため会計に時間がかかってしまい、店を出た時にはすでに父の姿はなかった。

駅に着いたものの、浩作らしき人物は見当たらない。

もう電車に乗ってしまったのか。

行き先を知らない以上、どこへ向かったかはわからない。今日は諦めるしかないだろ

う。

「仕方、ないか…」

重い足取りで、早人は駅を後にしようとした。

だがその前に紅茶を二杯も飲んだせいで膀胱に限界がきた。緊張の糸が解けたこともあり、余計に尿意が襲う。

「と、トイレッ！」

彼は慌てて男子トイレに駆け込んだ。

そして開放感の余韻に浸りながらズボンのチャックを上げ後ろを向いた時、ふいに洋式の扉に視線が向かった。

トイレの造りの中には中に入って少し進み、右に曲がったところに広めの空間がある。

手前には洗面台と鏡が複数あり、その奥の左手側に四つの小便器。右手側に個室が二つある。

尿意で気づかなかったが、個室に誰か入っている。

下の数センチの隙間からは、男の靴と白いスラックスの裾が見えた。

「……!!」

革靴だけでは人物の特定には至るまい。しかしそのスーツは普段見ているため、覚えがある。

浩作だ。早人は小さく息を呑み、汚れを気にせず緩慢な動きで両手と頭を地面につけ、おそるおそる覗いた。

見れば見るほどやはり、父のものとしか思えない。

何故、こんなところにいるのか。スラックスが下げられているわけではないので、用を足しているわけでもない。

そもそもトイレに行くならデパートではダメなのだろうか。

ぐるぐると脳内で疑問が回り、少年は突如血相を変える。

「……!?!」

思わず出そうになる悲鳴を堪える。何故、何故、何故と、大声で叫びたい気持ちだ。なるべく音を立てないよう、早人はゆっくりとその場から離れた。

そして外へ出た瞬間、一気に駆け出す。

川尻早人はいったい、トイレの下を覗いた時、何を見たのだろうか。いや——何に、気付いてしまったのだろうか。

「ない、ない、ないッ——!!。パパの影がないッッ!!」

少年が駆けていく一方、トイレの中で白目を剥いていた男の焦点が戻る。

同時に電光灯の光を浴びても存在しなかった影が個室の中へと入り、男の足元にくつついた。

『……………?』

スンと、影から現れた犬が鼻を鳴らす。

そして左右に口元を伸ばし、不気味に笑った。

最近ついて回っていた早人の匂いがなくなり、今宵の願いを叶える獲物を探すべく動いていた犬。

今日はどうやらエモノの方から、こちらへやって来たらしかった。

『じゃまもの いらない』

それから浩作が追ってきたことに気づいた早人は、駅を出て階段を駆け降りたところで派手に転び、十段以上残したまま地面へと投げ出された。

「う……わああああ……!!」

だが、衝撃が来ない。

何かに身体を支えられる感触と共に、そのまま宙を一回転する。

少年はさながらオリンピックピックの選手よろしく着地した。

「えっ……?」

混乱した彼に影が差す。

早人が顔を上げると、そこには二メートル近いバカでかい男がいた。

大丈夫か、と声をかけた大男の隣には、以前見た小柄な高校生と美人な少女もいる。

「何か慌てていた様子だったが……大丈夫か?」

「あ、いや、えつと……パパが……」

「……パパ? 君の父親がどうかしたのか?」

父親の影がなかったから発狂した——などと言えるはずもなく、少年は口を閉ざしてしまふ。

それに何かあると勘づいた承太郎が少年を落ち着かせようとしたところで、こちらに向かつてきた一人の男に気づいた。

その男はスタンド使いである彼らを見るなり、人通りのない場所へ走り出した。

とつさに後を追いついた承太郎に、康一も続く。

「由花子さん、その子供のことはお願い！僕と承太郎さんはあの人を追うよ!!」

「わかったわ、康一くん……気を付けてね!!」

「ありがとう!」

嵐のようなひとときに、目を丸くさせる早人。そんな少年を立たせた由花子は、近くのカフェへ避難させることにした。

「ぼくのパパは……パパじゃない?」

少年の口から出たのは、そんな言葉だった。

65話 覚悟の準備をしておいてください

——人を殺してはならない。

何故、人を殺してはならないのだろうか。

人を殺したら罪になるからだろうか？

それとも被害者やその遺族が苦しむからだろうか？

それはいわゆる、人間が人間として育つ中で育まれる「道徳心」から来るのだろうか。ならば「殺す」以外の選択肢がない場合で、人を殺害したらどうなるのだろうか。

例えば目の前で妻や子供たちを無惨に殺され、復讐に駆られた男がいたとして。

それでも、人は人を殺してはいけないのだろうか？

そもそも人は社会の中で生きていて、その中には「殺人」を罰する法がある。

殺人を罰する考えは今に始まったことではない。

現代は秩序を乱すために殺人を禁じているが、かつては「道徳」と「法」は同居して

いた。

宗教を基盤とした独自の法が一般的だった時代では、殺人は人倫や神の秩序を乱す行為として厳しく罰せられた。

近代はその二者は分離して存在する。

法があり、その上を人の道徳が飛び交う。

また、何故「人を殺してはならないのか？」という疑問が生まれるかについても考えてみよう。

「殺人」という行動を抑圧させているのは「法」だ。

人を殺したら捕まる、だから殺さない。

その抑圧を越えてしまった時こそ、人は人を殺す。

しかし不思議なことに、現代ではテレビや小説で人殺しのシーンが多く見られる。

これはきつと、人が感じる死の重みが昔と違うからだろう。

戦時中ならともかく衛生環境もよくなり医療も発達して、人の寿命が伸びた。

時代は平和で、死が遠い存在になった。

だからこそ一種のスリルを求める気持ちが生まれ、それがテレビや小説などの人殺しのシーンと結びついたのかもしれない。

さらに今は個人の「自由」な社会化が進んでいる。

タブー視される「殺人」という行為も、枷自由なのない人間たちからしてみれば、手を伸ばせば触れる存在だ。

そうして実際に人殺しが起こった時のためにも、法とはやはり必要不可欠だ。

人は「道徳」や「法」、「社会的存在」などに板挟みにされ、抑圧されている。

この世には、「誰かを殺したい」と思わない人間がいるだろうか？ いや、いないだろう。ゆえに人は欲望を抑圧するための道徳意識を刷り込んで、法制度を敷いて、己の理性を保っている。

自制心は高い知能を持つ人間の特権だ。

これらを踏まえて考えると、人は徐々に「人間」という生き物になるのかもしれない。そうなると子供はまだ完全な「人間」とは言えない。

何せまだ、十分な倫理観が育っていないのだ。

果たしてダンゴムシを足で潰し、アリの巣に水を入れ、無邪気に笑っているような子供を、「天使」と呼べるのか。

否、確実に「悪魔」である。

大人はそんな子供の行動を残酷だと思っても、虫に同情などしない。大抵は親からすれば虫は気色悪く感じるだろうし、好き好んで触りたくもないだろう。

ならば何故嫌ってしまうのか。理由はおそらく虫が人間ではない、異形の存在だからだ。

人間の体は肌色で、四肢がある。対して虫は足が六本あつたり色も黒かつたりと、人間とは非なる存在だ。

あくまで「殺し」の倫理は、人間や、彼らと関わりのある家畜やペットであるからこそ働くものだ。

たとえ自分と関係のない存在が殺されたと知って嘆くことがあつても、その感情は少しすれば別のことに意識を取られ、あつという間に消えてしまうだろう。

ならば、ならばだ。

人を殺す行為に何の躊躇いもなく、罪悪感さえ抱かない「吉良吉影」という男は、「人間」なのだろうか。

真つ当な倫理観を持ちながら、人殺しには何の感慨も抱かない。そんな矛盾した男を「人間」と呼んでいいのだろうか。

彼は虐待同然の過去があり、さらに歪むべき人生を送ってしまっただけで、中身は「人間」である？

否、否、否——。

それこそ、その考えこそ「倫理観」が問われる問題だ。

ユダヤ人虐殺を行ったかの男を、本当に「人間」と言っているのだろうか？

ホラー映画のモデルにもなったピエロのシリアルキラーを、「人間」と言っているのだろうか？

他にも洞窟に隠れながら長年にわたり人間を襲っていた食人鬼の集団や、神経ガスの一種が地下鉄にまかれた事件の首謀者たる人物を、「人間」と言っているのだろうか？ 本

当に？

彼らのなした非道を詳しく知れば知るほど、「彼らは人間ではない」と思うはずだ。彼らの悲惨な過去を踏まえても、お釣りがあまりすぎるくらいには「悪の所業」がかわいそうな過去を上回る。

では正史の——48人の美しい手を持つ女を手にかけた男と同性質の、殺人鬼のサガを持つ男について、もう一度考えよう。

彼は、本当に「人間」であるのか？

違う生き物だと否定したいなら、それでも構わない。

所詮彼は血に飢えた「鬼」だ。人を殺し、そしてその快樂でしか生きることができない。

だがそんな男を杉本鈴美は「人間」として愛した。

そして彼もまた彼女の「愛」によって、まだ人の皮を崩さずにいる。

なればその「愛」に敬意を称して、呼ぼうではないか。

——吉良吉影は、「人間」であると。

そしてそんな男を「人間」として見ているのは、彼が愛した女だけではない。
無数の星の光が暗い世界にいる彼の姿を映し出し、その影を地面に浮かばせている。

ならばさらに今、犬に取り憑かれた川尻浩作を手にかけてようとする男に、伝えなければならぬだろう。

貴様は、人間であると。

そして人間とは、一人では生きられない、弱い生き物であるのだと。

???????

「それはね——

——貴様を殺すことだよ、犬畜生」

そう吉良が呟きキラークイーンが出現したのと、犬が影から出現したのは同時だった。

彼は既に、川尻浩作に触れている。後は川尻の腕だけ残し、殺すだけである。

脅された風を装って山中まで運転する。この時キラークイーンで川尻の手をそれほどよく動かし、指紋をつけることを忘れない。

服についてはフード付きの服を自身のスタンドに着せる。ついでに包丁を持たし、俯いた感じで助手席に乗せれば人間のように見える。暗くさもあるから余計にわかりづらくなるだろう。

これで駅での一件や運転手の目撃情報があっても、脅されて——と、理由がつく。

話は大体こうだ。吉良は川尻に脅されて車を運転する。しかし山中でヘッドライトが運悪く切れ（無論爆破させて壊す）、横道の急斜面に車が横転するのだ。

車はそのまま落ちて行き、炎上（こちらも爆破する）。

命からがら爆発前に逃げた吉良は、そこで逃げて行く川尻を目撃したのを最後に倒れる。

重傷を負うだろうが、今後の平穏と引き換えなら安い。

観察眼のある承太郎たちがいるが、川尻浩作と戦っていた以上、敵だと認識しているはずだ。

最初は絶対に怪しまれるだろう。だからあえて最初は自分が完全に「白」だと主張する。

それから途中で「逃げるチャンスを作るために、車をわざと斜面に落とす」とでも言えばいい。

そうして自分が多少悪かったことを印象付けることで、相手に納得させる。

特に承太郎は吉良を「性質悪」ととらえているからこそ、有用な手段になる。少しのボロも出せない作戦だ。

だがやるのだ。絶対的な安心を得るために、影犬を殺す。

「キラークイーン！」

吉良がスタンドを使い殴るモーションを取った瞬間。

川尻浩作の身体が、後ろへと引つ張られた。

「えっ?」

頓狂な声を出した吉良。川尻もまた驚きの表情をみせた。

いや、引つ張られたというより、一瞬にして移動したという方が正しい。長い廊下の奥に、誰かいる。薄暗いせいでその人物が誰かはわからない。

この間、川尻が動かされてからほぼ一瞬の出来事である。

「まさかこんなところで出くわすとはなあ……犬ツコロ……!!」

その声に、吉良は聞き覚えがあった。

何故、我が家に——と彼が思ったのも束の間、激しいラツシュの音が響く。

犬は逃げる間もなく殴られ、玄関をブチ破り吹っ飛ばされた。

「玄関の戸が……」と呆然とする家主の横に、学生服を着た男二人が現れる。

「……不法侵入だろ、貴様ら……」

二人はそれにキョトンとし、慌てて吉廣に許可を取ったことを話す。

それにさらに何故幽霊の父の存在を知っているのか、吉良の眉間に皺が寄っていく。

「それはジジイがなんか知り合い？ だつたみたいで……つて、それより早く犬ツコロを倒さねえと！」

「ジョースター氏が？——ああ、そうだ」

キラークイーンの親指がスイッチを押そうとする。

影犬が殴られた時、川尻にもそのダメージがフィードバックしていた。そのことから、川尻を消せば犬も始末できると判断できる。

ここに「人を殺してはダメだ」と、認識している二人がいることを吉良も理解している。

だがその上で今ここで殺さなければ、さらなる被害者が出る——と、建前上の理由を考えた。

彼は知っていた。承太郎やジョセフと違い、仗助たちは誰かを殺したことがないというところを。目を見ればわかる。

吉良自ら動いたのは自分の平穩のためもあったが、仗助たちが「殺せない」とわかっていたこともある。

仗助や康一は「人の命を奪う」行為をできないだろう。

対しジョセフは歳も考えて無理がある。承太郎は娘や仲間がいる中で、「殺し」の選択肢を取らないと判断した。

そしてもう少しで始末できるという時、声が聞こえた。

「ボク うまれ たい しにた く ない ママ ママ」

それはまるで、幼い子供のような声だった。

ゆっくりと起き上がった犬は、一瞬のうちに影に沈む。日が沈んできた中で、闇に混ざったその姿がわからなくなった。

「……あ」

吉良の意識が、強制的にブラックアウトする。

彼が倒れる最中、自身の影が水面のように揺らぐのが見えた。

男二人の声がどんどん遠ざかって行く。

そしてついには、何も聞こえなくなった。

??????

いつの間にか吉良の視界に広がっていたのは、途方もない暗闇。

周囲を探るように手を伸ばせば、壁と思わしき冷たい感触があった。

「……………」

道には点々と、赤い跡が続いている。

吉良は一步、足を踏み出した。

真っ黒な、一筋の血が指し示す世界へ。

66話 異界入り

黒い世界に、点々と続く血の跡。

わたしは転ばないように気をつけながら、一歩ずつ進んだ。

長い廊下を歩き階段を上がっていくと、途中で血痕が途絶えた。

一寸先は闇の状況でおもむろに手を伸ばすと、キイと音を立てて扉が開く。どうやら血痕は屋上に続いていたようだ。

吹き込んだ風に異様なまでの血生臭さを感じた。

空には無数の星が輝いている。

手を伸ばせば届いてしまいそうだ。

「……………」

何か足にぶつかったと思ったたら、骸骨が転がっていた。いや、それだけだったたらそこまで驚かないが、骸骨には胴体が繋がっていて、その体がどう見てもキラークイーン

だった。

「というか、この頭はシアーハートアタックの骸骨部分ドックロの顔じゃないか？」

違うのはピノキオのような長い鼻がなく、白骨化した人間と同じ逆V字型の穴があることか。

「……………」

無言で通り過ぎると、仰向けで寝転がっていたキラーク……本当にキラークイーンだよな？……が腕を伸ばして、人の足をパンチしてきた。

「お前は猫じゃない」という気持ちを含めて睨むと、奴は渋々立ち上がり人の首に腕を絡ませる。

仗助やその他のスタンドを見たからこそその感想だが、コイツらには距離感がない。

確実に猫としての自我を得つつあるコイツに、いったいわたしはどうすればいいというのか。

「というか、何故わたしの夢の中にお前が出てくるんだ？夢だからか……？」

そもそもわたしは何故夢の中にいるのだろうか。

確か川尻くんに取り憑いている犬を家に連れて行き、殺そうとして――、

『ニャー』

キラークイーンの腕がスルリと伸び、前方を指す。

血溜まりの中に転がっていたのは一人の幼児だ。歳は3、4歳であろうか。髪は黒く着物を着ていて、顔は人形のようだ。

入神島の女たちと容姿が酷似している。だが彼女らよりもさらに見目がいい。中性的でわかりにくいが、性別はおそらく男だ。

『ぎゃあ がつ あ ヤダッ い だあ イダイ』

幼児は必死に地面に爪を立て、もがきながら前へ前へと逃げていた。

包丁で何度も刺される体からは血が面白いように噴き出ている。

対して子供を蹂躪している存在も、おどろおどろしい姿をしている。

顔には赤黒いタオルがこびりついていて、激しく動いても取れる様子がない。

身体は特に腹の部分がミンチのようにグチャグチャになっている。

あきらかに刺し傷によるものだ。

紛うことなきソレは、わたしだった。

あの傷は、わたしがかつて夢の中で刺してつけたものだ。

奴はまるで食肉加工する精密機械のように、淡々と子供を刺し続ける。

人肉は人口増加で食糧困難が起こり、あまつさえ戦争が勃発して荒廃した世界になつたとしても、絶対に食べたくないな。

「食人」はタブーだ。当たり前のことである。

『ニャー』

相変わらず同じ三文字しか話さぬキラークイーンは、もう一方のわたしに近づくと、頭に触れて爆破させた。

首なしになったソイツは包丁を落とし、地面に倒れる。アレがわたしと理解しているはずなのに、躊躇いなく殺したんだが？ 正気かお前。

『ニャー』

こつちに來いとのことなので、仕方なく犬の方へ近づいた。途中、邪魔になった首なしの方は蹴り飛ばした。

「コイツは…」

ああ、ようやく思い出してきた。自分が倒れた時の状況を。

東方仗助と虹村億泰は理由が何であれ不法侵入で訴えてやるとして、問題はその後。犬がわたしの影に侵入したんだ。

そして取り憑くために願いを言わせようとしたが、もう一方のわたしによつて反撃を受けた——と。

正直言つて、あのわたしとは自分でも対話できない。

この夢は所詮夢でしかないが、わたしの精神ともリンクしている。殺すことに取り憑かれたあの自分は、だからこそ「吉良吉影」自身だと言えるのだ。

猫化が見るに耐えないキラークイーンもまた、わたしの精神が具現化されたものだからここにいるのだろう（だからって自分が猫っぽいとは認めない、絶対に）。

「影犬……いや、あえて「イリガミ」と言った方がいいのか？」

『いたい いたいよ いたい…』

「あの首なしに願いを聞こうとしたのか？ 残念だがアレと対話を望むのは不可能だよ。

アレはわたしの人生に永劫まとわりつく「枷」なのだから」

『おねがい いのつて…ボクに いのつて…』

「そう言えば君、何で子供の格好をしているんだ？犬じゃなかったのか？まあ犬神伝承と混じったのか、それとは全く違う何かなのか、貴様の正体自体雲を掴むように曖昧だからな」

結局この存在について、正解を見出すのは難しいのだろう。

しかしそれでもこれが男児の姿であるのと、自分が意識を失う前に聞いた「うまれたい」の言葉の裏には、確かな意味がある。

てつきりイリガミとは腹の膨れた遊女が殺され、その女の恨みから生まれたものなのかと思っていたが、違った。

これは、女の腹の中にいた赤子だ。

生まれることなく殺され、外の世界を知ることができなかつた子供。

そう考えれば入神島の「玄関が家の裏にある」という風習の見方が少し変わる。

イリガミは前から入り、女たちは後ろから入る。

解釈の仕方では「母親女の元へ、イリガミが入る（還る）」と考えられる。

また、イリガミが村の女にしか取り憑かなかった理由も分かった。

「生まれたかった」から、女へと取り憑くようになったのだ。

はじめは別の女の腹の赤ん坊に憑いたというが、結局生まれても、イリガミ自身が生まれることはない。

すでに、その本体は死んでいるのだから。

この事実を、村の女は知っているのだろうか。

いや、知らないだろう。

そもそも村の女たちはイリガミを「神」として認識している。伝承を伝え聞く入神家の人間も、イリガミの元の正体は「殺された遊女」と考えている。

ある意味村から出ることのできなかつたイリガミが解放されたのは、皮肉だったのかもしれない。

生まれたいが、すでに死んでいる。犬は生きる喜びも、死ぬ虚しさも知ることができない。

結局、死んだ存在が生まれることなどできないんだ。

その矛盾を抱え、ずっと他人の願いを叶え続ける。自分の願いは永久に叶うことがないというのにな。

哀れだ、と思う心はない。残念ながら。

「自分の願いを叶えようとは思わないのか、君?」

『……そんなことしたら　ボクは　ボクじゃなくなる　ボクは「ねがいをかなえる」そんなぞい　それがいいにはなれない』

「おやおや、長いこと存在しているのに、消滅を恐れて試したこともないのかい?」

『ボク　しにたく　ない』

「……………ツハ!笑わせる」

生まれてもいない奴が、死にたくないだと?

人間の命を奪ったこともある奴が、「死にたくない」とほざく矛盾を理解していないのか?

「この畜生がツ……生きる苦しみを知らない貴様が、「生きたい」だの「死にたくない」だの、偉そうな口を利くなよ!!」

途端に犬の目から涙がこぼれて、わんわん泣き出した。ついでに頭から黒い耳が生え、着物を押し上げるようにして尻尾も生えた。さっさと殺そう。

『うわああん……!! ひどい ひどいよお……!!』

「キラークイーン、殺れ」

すると相棒は「正気かコイツ……？」と言いたげな視線を送ってきた。いや、骸骨なので目玉はないんだが。

そもそもお前だって、もう一人のわたしの首をふっ飛ばしていただろうが。

『……ボク いのる』

そう呟いた、犬畜生。

まずい———と思つたのも束の間、奴はヤケにすつきりとした表情を浮かべた。

『ヒトは よく わからない でもいきればきつと ボクもわかる きえちやつたらこわい でも ボク いのるよ』

「キラークイーン！始末しろ!!」

本体の命令を無視し、いよいよ絶対零度の視線を送る我がスタンドに諦め、転がつて

いた包丁で犬畜生の首を刎ねた。

予想以上に簡単に切れた首はそのまま吹っ飛び、建物の外へ落ちる。

慌てて下を覗けば、首は赤い海の中に沈んでいく。覗いた瞬間に漂った匂いに、血生臭さの元凶はこれかと、思い至った。

「……………気色の悪い奴め」

犬畜生は首だけでありながら、最後に笑っていた。

自分の冒した現状が、犬神の作り方と類似していることに気づき冷や汗が流れたが、もうどうにもならない。

川尻浩作に憑いた状態で始末できなかつた時点で、詰みだつたのだ。

振り返つた時には、犬の首から下の部分も消えていた。

胸の内につつかえていた奇妙な感覚も消えたので、わたしから離れたのだろう。

現実で影犬を爆破すれば、取り憑かれた自分に傷がフィードバックされる可能性が高かつたため、精神世界で消せたのは幸いだったか。

「本当に……疲れた」

しかし奴が願いを叶える存在なら、そうだな。

「願わくば二度とわたしの前に現れるな。わたしの——平穩のために」
相棒はこの時も『ニャー』と鳴き、毛づくろいを始めた。やめろ。

67話 讃歌が聞こえたか？

もう何度目か数えるのも億劫な白い天井。

繋がれた点滴の管を引きぬき起き上がった吉良は、周囲を見渡す。

場所は病院で、陽も高い時間だった。

「いったいわたしが倒れてから何日経ってるんだ…？」

吉良はフラつきながら立ち上がり、廊下に向かう。

ちようどその時、病室の扉が開いた。

花を持った女と、学ランリーゼントの少年が瞳を丸くする。リアクションがソツクリだ。

ちなみにこの男が脱走の常習犯であることは二人とも知っている。

吉良の見舞いにきた東方親子は見事に固まった。

そして、脱獄を知らずサイレンが鳴る。

「脱走犯だ（よ）!!」

哀れ男はベッドに戻された。仗助は母親に理由をつけ退室させた後、吉良が気を失っていた間の出来事を話した。

??????

話は数日前に戻る。

『影犬』は吉良の影に潜った後、承太郎と康一が吉良邸に駆けつけた時に彼の影から首だけ出した。そしてそのまな声にならない声をあげ、消滅したのだと言う。

これに関して仗助は「何があつたんすか？」と尋ねた。吉良は隠す必要がなくなつた川尻浩作の日記について、影犬の正体や「人に取り憑く」という詳細を含めて語つた。

影犬が消えた理由に関しては、「自身の夢の中で始末した」と付け加えて。

犬に取り憑かれた彼の精神に異常がないか、詳しく検査する必要がある。そのためしばらくは退院できない。

検査はSPW財団が手厚く行ってくれるそうだ。吉良の目が死んだ。

「何故オヤジはジョースター氏と知り合いだったんだ？吉良吉廣は戦時中に徴兵され、英語が堪能なこともあつて翻訳をしていたが、それで出会っていたとも考えにくい。第一ジョースター氏は左手を10代の頃に切断したと聞いた。ならば兵役を免れているはずだ」

「ああ、それについてなんすけど、吉良さんがこの間入院していた時に立ち寄つて、その時偶然会つたらしいんですよ」

吉良が栄養失調でぶつ倒れた時、家の戸締りは救急車を呼んだ泉がカギを貸りて行つた。

しかし吉良が入院したことを知らなかったジョセフは、いつものように吉良邸を訪れた。しかもタイミングがいいのか悪いのか、ちょうど一騒動が終わった夕方ごろに。

この時忙しかった泉は、あることを忘れていた。

『ニャー！ニャーンツ！！アニャニャー！』

そう、猫草である。

縁側に放置されていた猫草は、空腹から叫んでいた。

そのまま放置されていたれば、確実に事件が起きていただろう。

これに気づいたジョセフは不法侵入し、庭に足を踏み入れた。

その途中で聞こえたのは「カラカラ」という音。

「んん？」

「ばぶう？」

それは猫なのか、草なのか——。珍妙な生き物が老人からキャットフードをもらい、アニヤニヤ、と上機嫌に食べている。

ただ、老人の体は上半身しかなく、下半身は宙に浮く写真の中に吸い込まれていた。

【!!】

わずかに透けた老人の体などから、ジョセフは目の前の存在がスタンド使いであること、そしてゴーストの類であると見抜いた。

流石にここまでガッツリと物を掴み、動かす幽霊は見たことがなかったが。

「オーオー、ゴーストなんて久しぶりに見たわい。この家の家主に会いに来たんじゃが、今はいないようじゃの」

「吉影は病院に運ばれた……貴様のことは影から見ておつたぞ、ジヨセフ・ジョースター！トボケタ顔をして、息子の弱みを探っていた狸ジジイめッ!!」

「フム……似ていると思つたが、やはり10年以上前に亡くなつたと聞く彼の父親か。そして次にお主は、「し、しまった……口が滑つてしまつたわい……!!」と言うー!」

「し、しまった……口が滑つてしまつたわい……!!——ツハ——」

これがジヨセフと吉廣の出会いである。

年齢的にはジヨセフが上だが、*“死亡年齢＋幽霊期間”*を含めると吉廣の方が歳上だ。

ただそこはお互い歳をとつた者同士。数歳の差は些細なものだった。

当初は空条承太郎の祖父ということもあって、吉廣はジヨセフに気を許すことはなかつた。

しかし二人の性格がイイ意味でも悪い意味でも違ふと感じ始め、茶は出さないもの

の、軽い会話はするようになった。

それから息子や娘、孫自慢を通し、それなりに関係が深まった。

これ即ち敵同士が戦いを通じて、最終的に仲間になる理論だろうか。

まあ、ジョセフが吉良に対して、「放置」の態度をみせていたのが最も大きい理由だろう。

普通に暮らしたいという息子の意志を尊重しているのだ。吉廣にとっては概ね好意的な意見だった。

しかし今後もしも吉良が人を手にかけることがあれば、ジョセフや承太郎は動かなければならない。

「彼の今のサガを含め、過去に様々なことがあつたんじやろう」

「……………わしは、あの子に何もしてやれんかった」

「……まあ、深入りはせんよ。ワシも似たようなものじや。だがそれでも息子の本当の幸せを望むなら、あまやかすばかりではならない。時に厳しく戒めることも重要じや」

母親というものが、吉良少年にとっておそらく一番歪む原因となった存在だ。

皮肉なことに、その母親の潔癖が今の吉良にもある。

その事実が、吉廣には悲しく感じられるのだ。

「お主がこの世に留まっている理由も含め、もつときちんと考えるといいじやろう。子供は女の子なら過保護なくらいがちようどいいが、男なら少し放っておくくらいでいい」

流石に高校生になるまで一度も会うことなく放っておけ、とは言わない。これを言ったら絶対に侮蔑の目を向けられる。

かくあれ、こうして二人の接点は生まれた。

仗助から話を聞いた吉良は、一番気になっていたことを尋ねる。

それは仗助と億泰が彼の家にいた理由だ。

「えっと、それはっスねえ……」

「空条承太郎と広瀬康一が駅付近にいたのは見た。『影犬』を追いかけていたのだろうと思っていたが、貴様ら二人がわたしの家にいたことで違和感を覚えた。あまりにもタイ

ミングが良すぎるとね。誰か手引きした奴がいたと考えると当然だ」

「おお…マジに作家っぽいつスね」

「……………貴様、人の家にあがり込んだ挙句、室内まで調べたのか」

キラークイーンが殺意をまじえて吉良の背後に現れた。

夢の時とは違い、顔は元に戻っている。

「ち、違うんですよ！億泰が勝手に中に入っちゃまうから…！それで、何か本がいつぱいある部屋を見つけて、机の上の原稿用紙を発見しちゃった？みたいな……………ほんとツ、中身は読んでないんで!!」

「オヤジは止めなかったのか？…いや、単細胞で筋肉にしか栄養の行き届いていないような貴様らの力に敵わなかっただけか。……………わたしの部屋には入ってないだろうな」

返答次第では殺すこともやむなし。そんなレベルで吉良の表情は歪んでいる。

仗助も流石にプライバシーがあると、「ニジムラバクシンオークヤス（☆1）」を止めた。ちなみにオークヤスの育成はとても簡単である。

「っていうか、メチャクチャ言葉が辛辣…」

「それで、理由について早く話せ」

「わ、わかりました…」

仗助はポツリポツリと話し出した。

といつても彼も康一から伝え聞いた内容なので、多少の正確性には欠けるかもしれない——と、先に述べられた。

「岸辺露伴が——」

「…わかった。大体話はわかったからもういい」

「えっ?」

岸辺露伴…岸辺露伴……。

吉良がその存在の面倒臭さに、種子島に置き去りにした男である。

入神島のまだ解けていなかった部分を話すと言いながら、吉良が勝手に帰ったことに怒るだろうとは思っていた。

案の定、ホテルで起きた露伴はバチクソキレた。そして自分が一服盛られたことにも気づき、さらにキレた。

鈴木美への想いを聞いた件で、吉良に多少の信頼を抱いた直後に睡眠薬だ。築いた信頼

を一瞬にしてブチ壊された。

こうなることを察しながら意図的に露伴を眠らせたのだから、吉良も相当なワルだ。本人には罪悪感などこれっぽっちもなく、「帰りがかったから」という気持ちしかなかったが。

置いていかれた漫画家は怒りを越して、冷静になった。

寝不足と精神的な疲労で疲れきっていた頭は、ぐっすりと眠ったことでよく回った。

そうしてこれまでの入神島の件に思考を巡らせ、ある違和感にたどり着いた。

露伴の尊敬するに値する「星ノ桜花」という作家で、「吉良吉影」という男であるから

こそ、先手を取られていたのだと思っていた。

しかしあまりにも、先回りされ過ぎている。

これは他人の記憶を読める露伴だからこそ、できてしまった罠だ。

他者は「人の記憶を読む」ことができないため、彼より後手に回らざるを得ない。

つまりだ。他人が自分より先に知ることはできない——という潜在意識が生まれてくる。

吉良は露伴が同行していた時にこれに気づき、逆手に取ったのだ。

岸辺露伴は完全に出し抜かれたと言えよう。

無得点のまま試合を終えた選手の気分だ。屈辱的である。

その屈辱と怒りを糧にし、彼は相手の意表を突いてやろうと考えた。

吉良はおそらく事前情報があつた上で調べていたのだろう。

睡眠薬で露伴を眠らせたのも、何か知られたくないことが向こうにあつたからだ。

吉良が帰つた以上、すでに何らかの結論は得られたのだというのも分かつた。

吉良吉影の異常性を間近で見ってしまったからこそ、露伴は嫌な予感が拭えなかつた。

こういう時の彼の勘はよく当たる。

だがこの時点で、台風によりフライトや船が次々と休航になつていた。

露伴はその場で立ち往生するしかなかったわけだ。

ならば、と彼は康一に連絡し、杜王町に向かつているであろう男を捕まえるように頼んだ。

理由は「奴が影犬についての情報を知っている」で十分だつた。

露伴と違い吉良は飛行機の予約をしていなかったもので、地上を乗り継いで帰ると予測できた。期間としては早くとも丸一日かかる。

また向こうの体力から考えて、杜王町に着くのは翌日と推測した。

それから情報を得た康一は承太郎に相談し、彼ら二人が駅で待ち伏せ、逃した時のために仗助と億泰が吉良邸に配置されたというわけである。

「ツハ、わたしはあの小僧に一杯食わされたわけか…」

「まあ、どんまいっスよ。あの性格の悪いヤローに捕まっちゃまったんですから」
言っておくと、仗助は吉良と露伴が顔見知りだったことを知らない。

「あ、俺そろそろ行くっスね。ちゃんと安静にしててくださいよ」

「わかってるよ、多分」

「多分じゃねえよ!!…ったくよオ、本当に………そんじゃ失礼しました」

吉良は誰もいなくなった部屋で、深く息を吐く。

「しかし影犬がいなくなったことで、川尻浩作の身体だけが残されたか…」

川尻は今、植物状態ということで入院しているらしい。入院先はSPW財団である。夫が原因不明で倒れたことで、しのぶはショックを受けただろう。仮にも妻であるのだ。

そこは早人が母親を上手く支えるだろう。

支援についても財団から送られるはずなので、問題はない。

「まあ、正義のヒーローは遅れてやってくるというしな」

川尻浩作の人格はなくなった。

だが正義を求めた男ならば、戻ってくるくらい造作ないはずだ。

それができないければ、「正義」ツラしていただけの男だったということだ。

ジャンプで言う『努力・友情・勝利』を、吉良は信じていない。

それでももし川尻が意識を取り戻すことがあれば、人間の運命というものを鼻で笑ってやる気になるだろう。

吉良では変えられなかった運命。

その本流に逆らえないまま流されてきた彼は、襲ってきた睡魔に意識を預けた。

日の明るい中で見たのは、朧げな夢。

しかし途中で白い悪魔の声や老人、赤ん坊の泣き声に澁刺とした少女の声で、意識が浮上した。

すでに人はいなかったが、先ほどまで誰かがいた気配はある。ちようど外から微かに声が聞こえる。

「寝とつたの。仗助くんから起きたと聞いてたんじゃが…」

「I know. At times like this, kissing will wake him up!」

(あたししってるよ。こういうときはね、キスをするとおきるの！)

「……………」

「承太郎、気持ちはわかるが拳を押しさえなさい」

「ばぶばぶうー！」

賑やかな声だ。だが吉良は睡魔には勝てず、また意識を手放そうとする。

惰眠を貪るタイプではないが、今はそれ以上に体が疲れている。

『『小道』の女性の件、伝えられなくて残念じゃったのう』

「…ああ、そうだ。すっかり康一くんから聞き忘れていた」

「What what? The story of the ghost you were talking about the other day? Jolly ne also wants to see it!」

(なにになに? このあいだはなしてたユーレイのはなし? ジョリーンもゴーストみてみたいな〜!)

それから、一時間後。

友人に「おねがい」され、渋谷——本当に渋谷、康一と共に病院を訪れた岸辺露伴。

その時既に、吉良の姿はなかった。

68話 一億年と二千年前からスタンバってました

吉良は走った。

かの邪智暴虐の王に激怒し、友人のため走ったメロスのごとく。

しかしこの男にメロスのような正義に満ちた心は、全くと言っていいほどない。

彼はまず人目を盗み、病室を抜け出した。

そしてトイレにいた中年の男をキラークイーンで気絶させ、個室に引きずり込みスーツと現金を奪った。

病院服は消し炭にして、内側からスタンドでカギをかければ完璧である。いずればれるが、病院を出る時間さえ稼げればいい。

髪は撫で付けてオールバックにした。

染める暇がなかったその髪はすっかり地毛の色に戻っている。

鏡に映った顔はブラック企業に勤めているサラリーマンのような。

お世辞にもいいとは言えない。

スーツは背丈こそ合っているが丈が短く、かなりぶかっついていた。

それから病院を出た吉良はタクシーに乗り込んだ。

病院の中は堂々と歩いていけばバレることはなかった。

こういうのは大抵、こそこそとするから怪しまれるのだ。

それと、髪を上げると大きく印象が変わるのもバレなかった理由だろう。

そして「オーソン」で下ろしてもらった男は、コンビニと薬屋の間にあるその場所を見つめた。

普通はこの場所に道などない。

しかし時折、ここに小道が現れる。

入ったら最後、二度と出て来るとは叶わない——というのが、この『振り返ってはいけない小道』の噂話である。

「……………」

彼の視界にある、一つの小道。

吉良はその場所へ一歩足を踏み入れ、駆け出した。

??????

「ゲホツ、ゴホツ!!」

走り続けたせいで呼吸がまともにできない。

それだけでなく、走りに適していない服で探し回った結果靴ズレを起こした。

オマケに脱水症状が重なって、身体を起こすのも難しい。

現状のわたしは、電柱に背を預けて座り込んでいる。

この小道は走れども走れども、気付けば同じ場所に戻ってしまう。

「ここに來ていたのは確か広瀬康一と……そのカノジョだったか?」

伏助は説明の中で「幽霊の女がいた」とは言わなかった。

わたしが病院を抜け出し、ここに來てしまうと分かつていたから伏せていたんだろ
う。

広瀬康一とその彼女がこの場へ來た時も、わたしと同じように迷ったはずだ。

その上で抜け出せたのは、抜け出し方を知っている者がいたからだ。

そもそも噂にあるとおり出られないのなら、『小道』の噂が広まるわけがない。

「一時間以上、迷っているんだが……」

わたしが探しているから出てきてくれないのか? 母親とはぐれて泣きわめく子供の
ようにしていればいいのか?

生憎泣こうと思つて泣けるタイプじゃない。両親の葬儀の時も、こつそり目薬を使つ
たというのに。

「鈴美、鈴美、れいみ……」

お願いだ、出てきてくれ。ここにいるのなら……。ぼくは、君に会わなきや。

頭の中が支離滅裂とし出した。それでも立ち上がる。

もし今犬畜生がいたなら、彼女に会わせてくれ、と喜んで願っただろう。

性悪な部分があったといえど、彼氏が精神的にも肉体的にも疲労困憊になるまで出てこないのはおかしい。

わたしの何かが悪いのか？ 霊感があるから見えないのか？ 生きているから見えないのか？

だったら、死ねばいいのか？

「……!!」

不意に背後から伸びた両手が、わたしの視界を覆った。

幽霊に感触があるのかは知らない。だが冷たい感触がする。正しく死人、とでもいうのか。

一瞬目に入ったか細い手首に完全に目が奪われた。頭がクラクラする。

『ふふ、だーれだ』

「……わたし、子供の頃、レオナルド・ダ・ヴィンチの「モナリザ」ってありますよね」
『えっ?』

後ろから「急に何を言ってるんだコイツ?」というニュアンスを含んだ声が上がると、わたしの理想は女の美しい、手の部分“だけ”を切り取ったもの。

冷たい彼女がこの上なく愛らしく、こちらを享受するしかできない様に劣情を感じざるを得ない。

我ながら自分の性癖がやばいと感じるが、広い目で見ればそういう人間は意外といえる。

例えば性欲は人をダメにする——と言っていた宮沢賢治は、春画コレクターだったらしい。

“神童”と謳われたモーツァルトも恋人への手紙に下ネタを書くような男だったそうだし、かのナポレオンも匂いフェチだったとか。

あの偉大なるレオナルド・ダ・ヴィンチも同性愛の容疑をかけられたどころか、生涯にわたって女の気配が少なく、割と本気で同性愛者の可能性があったのだ。

歴史の、それも偉人たちが突出した性癖エピソードを持っているんだ。

わたしの手フエチもかわいいものだろう。多分。

「小学生の頃、図書館で画集を見たんですがね。膝に置かれたあのふつくらとした手が、とても綺麗で。手の部分だけ置いておきたかったんですけど、母の目が怖かったから、買ってもらった画集をこっそり眺めてました」

『う、うん？それは……初めて聞いたけど……』

「ええ、話したことがないから当然ですよ。むしろこんなことを他の人間に話したら正気を疑われる」

それで、と付け加える。

「初めて見た時、その……フフ、下品なんですけど——「勃起」しちゃいましたね」

『……ぼ、ぼ、簿記……？』

「書く方じゃあない。わざわざわたしがこれを話した意味、わかりますよね？」

『へえっ!?!じや、今……』

視界を覆っていた手が、ゆっくり離れた。

後ろを向けば、顔を真っ赤にし女が視線を彷徨させた後、人のスラックスを凝視する。「なんだ嘘か……」と、少しガツカリした声が聞こえた。

幽霊の女が動く度に、その亜麻色の髪が揺れ動く。

「それで、何故あなたがここにいるんだ、保健医」

佐藤は気まずげに視線を逸らした。本当に何故コイツがいるんだ。成仏したんじゃないのか？

実績のある強制成仏（爆破）の手段があるから、さつさと消すことはできる。

しかしこの世に残っているからには、何か未練があるのだろう。消すのはそれを知つてからでも遅くない。

『あ、あはは。本当に吉良くんだあ…』

「おいおい、逃げるなよ。あなたの大好きなわたしだぞ？」

素手では触れないので、キラークイーン——精神エネルギーである「スタンド」は人間の魂、即ち精神の塊である幽霊にも触れることができるのは実践済み——で、奴を引き寄せた。

こういう時は普通に動く我がスタンドだ。気まぐれすぎる。

当の保健医は見えない存在に手を引っ張られ、首を傾げていた。

「貴様、人がずっと探し回っていたというのに、高みの見物をしていたわけか？ カノジ。ヨだったらかわいいイタズラだと許せたが、貴様なら別だ」

『だ、だって』

「だってクソもない、この変態が」

『吉良くんがそれを言うの……さっきの自分の発言を思い出してみてよ』

すでにキラークイーンで爆弾化させた。あとは爆破して成仏させるだけだ。
不穏な空気を察知した女が、慌てて声をあげる。

『わ、私より、歳上になってたから!!』

「それで……姿を見せなかったのか？ 貴様が死んでから15年以上経ってるんだ、当たり前だろ」

『当たり前のことでも、実際に目にするのとじゃ違うわよ……』

「ああ、そうか。少年趣味のあなたでは今のわたしだと物足りないか。きっとあの世には少年がたくさんいるだろうね。さようなら」

『ま、待つて待つて！ 伝えたいことがあったから呼んだの!!』

どうやら広瀬康一が現れる前から、彼女は人が来るのを待つていたそうだ。

だが、迷い込む人間は数年に一人のレベルで滅多に現れなかった。

『どうか、基本的に怖がられちゃってね。だから隠れて脱出の仕方を教えるしかなくて……随分と時間がかかっちゃったのよ』

保健医がこの小道に縛られる前は浮遊霊だったらしい。

その姿は水死体だったそうで、自我もなかったと。

ちなみに水死——ドザエモンとも呼ばれる遺体は、腐敗過程がグロテスクそのものであり、たとえどんな美男美女であろうがバケモノへに成り果てる。

かつては入水がロマンチックに取り扱われ、男女で海や川に身を投げる者たちが多かった。

しかし結末は不気味な変身にしかない。カフカのようにな。

「あなたのことだ、どうせ広瀬康一たちに会った時も猫を被ってたんだろ」
『うん。せつかくのチャンスだったんだもの』

「そうかい。で、いい加減用件を言え」

当時の記憶が喉から迫り上がってきて、吐き気がする。

『その前に、少しいい?』

「ダメだ」

『大人気ないな、君。ここは年下に譲りなさいよ』

「ツハ、生きてたらアラフィフも寸前だったあなたが何を言っている」

しかし結局、この女が三十路前で死んだのは事実だ。

10年以上この世に留まっている父の姿を見ているからこそ、死者が年月の感覚に鈍くなることを知っている。

『アンジエロくんは、どうなったの?』

「どうなったということは、「死んだ」と考えているのか?」

『復讐:したのよね?そこまで愛されていたなんて、知らなかったけど……。君が殺していないのは、目を見ればわかる。まだ堕ちてないのが正直驚きだったわ。生死については、まだ確証がないから半々ってところ』

ああ、鈴美を失った元の元凶は結局、この女の死で片桐のトリガーが引かれたからだ。渦巻く黒い感情が爪に直結する。聞こえる話し声が段々と、耳から遠ざかっていった。

「佐藤安希恵」

『…は、はい』

「黙れ」

死んでも尚、この女はわたしの地雷を踏み抜く気か。やはりさつさと消すべきだった。

『……そっか、やっぱり……ごめんね』

「……………」

無言で、キラークイーンのスイッチに手を伸ばす。

帰れぬ場合はここにくたばっていれば、いずれ行方不明になったわたしに気づき、誰かが来るだろう。

というか影犬が重清少年を追いここに迷い込んだと聞いたが、殺された少年はともかく犬自身は出る方法がなかったはずだ。……となると、この女が脱出を手引きしたのか？

『あの場所で、待ってる』

寸前のところで、手が止まった。視界が異様に明滅する。

何も考えるな。嘘つきの女の言葉など、聞く耳を持つ方が愚かだろ。

『海で漂っている時に見たの。いつも崖にいる女の子がいてね。寂しそうに海を眺めていたの』

「……………」

『だから、行って。今も待っているあの子の元へ』

「…………ツ、誰が、そんなことを信じると…」

『じゃあ、あの場所であの子が待っていないから、行かないで』

もしその言葉が本当だとしても、この女が言う義理はないだろ。姉弟揃って人の人生をかき乱したクセに、何を、何を今更。

どうしてぼくの心をかき乱すんだ。どうして…………、

『ここにいとね、死んだ者の魂がたくさん通るのよ。幸せそうな者からこの世に悔いを残して去っていく者。本当に…たくさんね。そんな場所にずっといると、不思議とこんな私でも思ってくるのよ。「幸せ」って、なんだろうなって。死んだ人間の表情を見るとどうしても考えてしまう』

彼女は自身の死に方に悔いはないらしい。

わたしに殺されて死ぬのが一番良かったが、海に身を投げた死に方も悪くなかったと

いう。

『結局死んでしまえばみな同じなもの。だからこそ——「死」を享受する存在だからこそ、「生」きていた頃の価値について考えてしまう。人の人生に差ができるのは結局、その人が「幸福」だったか否かなの』

「だからあなたの行動は、わたしの「幸福」に繋がると思ってたのか?…笑わせる、人の人生を乱しておいて」

『私が乱さずとも乱れたわよ、君は。そして君といたあの子もまた、別の形で命を亡くしていたに違いないわ』

「……………」

『そこは否定……しなくちゃダメよ』

「……………知ってるさ。結局わたしという存在と関わっていなければ、鈴美も……あなたも、平穩に暮らせていただろう」

初めからわたしが、「吉良吉影」という存在がいなければ、この物語はハッピーエンドだったに違いない。

とことん上手く生きられないのだ。そんな自分を哀れとも思えず、ただただ、滑稽だと感じる。

「いいですよ、貴様の妄言に付き合おうじゃないか。いなかったら、足が滑ったことにしますよ」

『……本当よ。自殺なんてしないでね』

「さてね。それはあなたの言葉の信憑性次第ですよ」

彼女はわたしの手を引き、歩き出した。ここからの抜け方を教えるらしい。

「振り返ったらダメ」と言われた言葉に、この小道の名前の理由を理解した。

『後はここから、自分で行って。もう一度言うけど、抜けるまでは決して振り返らないでね』

「そうやってあなたは、犬も案内したのか」

『……仕方ないわよ。私はここを案内する存在だから』

“存在”の否定は魂の形でしかない彼らにとって、重大な問題を引き起こすのだという。

「ああそう言えば、最後に言い忘れたことがある」

『何?』

後ろの声を聞きながら、郵便ポストまで歩いていく。彼女は小道に縛り続けられるの

だろう、今後も。

死を希求した女が幽霊として——「死」に続いている存在として、この世に残っているのは僥倖じゃないか。どうでもいいが……もう、あの女のことなど。

「ぼくの初恋はあなたでしたよ、佐藤先生」

指定の場所を過ぎ振り返った時にはすでに道は閉ざされ、保健医の姿はなかった。一生そこで死んだことを悔やんでろ、バカな女め。

69話 「吉良吉影」は平穩に暮らしたい

『Good morning! おはようございます、杜王町radio。お相手は私わたくし

——あなたの隣人、カイ原田。清々しい朝ですねえ。そんな一日の始まりに相應しい曲です。今朝の一曲はこちらから、1980年代にリリースされた「queen」の曲で

——』

日付は8月13日。高校生や大学生も休みに入り、夏を満喫している時期。

吉良は朝の静かなひと時を過ごしていた。

財団に精密な検査を受けたが特に異常はなく、病院で男を昏倒させた件も見逃された。

入院生活は相変わらず苦痛のひとつと言だったが。

ちなみに承太郎やジョセフも8月頭にアメリカへと帰国している。

結局赤ん坊の母親は見つからず、ジョセフの養子になったらしい。名は「静しずか」にしたそうだ。「静か＝平穩」を連想でき、実にいい名前をつけてもらったと吉良は感じている。

しかし、傘寿（80歳）間近であるにも関わらず義理でも娘を取るとは、流石はジョースタアの血統である。彼らが帰ると知った後、彼が思わず拳を握ったのは仕方ないだろう。二度とこの杜王町に来てほしくない。

丈助はなんだかんだ言いつつ、親戚の子供のように思っているので大目に見ている。

【吉影や、どこかに行くのかい？】

「ああ、鈴美の命日だからね。本当にギリギリ退院できてよかったよ」

【…そうかい。猫草の面倒はわしが見ておくから、ゆっくりして来るといい】

「元からそのつもりさ」

吉良は朝食を口に運び、左手で弄んでいた小さな物体を見た。リングに紅い宝石がついたそれが、ぼんやりと視界に映る。

時が経った今でも不思議と、その煌めきは衰えない。

燦ることのない——言い換えればそれは、「変わらない」ということ。

まるで、死者のように。

小道から脱出できた後、吉良は広瀬康一と岸辺露伴に捕まり大変だった。

漫画家とは種子島以来なので、カツアゲしてくるヤンキーのように絡まれた。

タクシーの車内でも露伴はわざわざ吉良の隣に座り、延々とグチを続けていた。

疲弊していた吉良は「へえ」とか「ふうん」とか、適当に相槌を打っていた。その態度がさらに漫画家に火をつけ、あわやスタンドバトルになりかけた。

これを止めた康一は流石だ。ダテに巻き込まれ体質ではない。

「……オヤジはどうしてこの世に残れたんだ？ 現世に留まる魂とそうでないものの魂の違いは、いったいなんなんだ？」

「それはわしにもよくはわからんよ。お前が心配で心配で、気づけば幽霊の姿となりこの世に残っておった。残れたのは「執念」もあるが、きつとスタンドの力もあつたと思うんじゃ」

「……そうか」

「急にそんなことを聞いてどうしたんじゃ？ 無形のもの信じぬお前らしくもない。……何かあつたのかい？」

「いや、単純な疑問だよ。確かにわたしは幽霊だのなんだの、信じちやいない。存在の定義が難しい『影犬』も、アレが幽霊だとは思っちゃいけないからね」

だが、と彼は続ける。

「場合によってはオヤジの存在を……幽霊の存在を、認めようと思っただけだ」

吉良は佐藤の話を信じたわけではない。むしろあの崖に残っているのは、杉本鈴美ではなく片桐の可能性もある。

佐藤安希恵という女の本質は嘘つきなのだ。彼女と関係のあった吉良は、それを重々に知っている。

だが、それでも信じてみようと思った。

彼は自らが思う「愚か」な行を取ることにした。

吉良^{自分}吉影らしくないと、理解した上で。

「そうだ。わたしが家を出ている間、机の上に置いてある封筒を投函しておいてくれな
いか」

【最後の作品じゃったな】

「ああ、入院中に書き終わってね。といっても原稿じゃああからさま過ぎるから、病院
じゃノートに書いていたが……。オヤジが勝手に出したのが原因なんだ。終わりのケジ
メはあんたがつけてくれ」

【もったいないのう……】

「世間の評価なんてどうでもいいんだよ。普通に、平穩に暮らすんだ、今度こそね。一つ

の区切りみたいなものさ」

「だが30代で職はないと思うぞ、吉影？じゃから作家をな…」

「すでに出版社のコネを使って市内で働くツテは得ている。サラリーマン、実にいい響きだ」

【吉影エ！せっかくの天職を……!!】

「じゃあ出かけるから。帰ってくるまでに投函されてなかつたら、悲しいがあんたともお別れだ」

【よ、吉影エ——!!】

号泣する父を無視し、吉良はさつきと革靴を履いて家を出た。もし帰って投函されていない場合は自分で郵便受けに入れに行くし、父親を爆破させる気もない。

やめる機会は元より考えていた。それが泉の件を一つのきっかけとして、仕事の調整をし始めた。

イリガミ調査のため種子島に訪れる前に、出版側とも話を進めていたのだ。

露伴を置き去りにした後一度出版社を訪れたのも、最終原稿などの予定を話し合うためだった。

作家引退については、出版される本の後書きで出される。

これを読んだ読者は、いったいどうなることやら。特に漫画家については、「星ノ桜花

「吉良」であることを知っているのです、自宅に押し入りそうである。しかしすでに決めたことであり、吉良の中では「終わった」ことだ。

「行つてきます、父さん」

「……ああ、いつてらっしやい」

一歩、踏み出すことを決めた男の顔は、吉廣が今まで見たことがないほどに穏やかだった。

ストン、と吉廣の胸に落ちたのは、「きつともう大丈夫だ」という感情。

奇妙な安心感に老人の瞳から、涙が一滴零れた。

もちろん、今後息子に付き添う（嫁ができて孫ができれば、あの世に行つてもいいかもしれない）気であるが、それでもこの安心感に気を抜けば、今にも成仏しそうだった。

いつの間にか小さかった子の背は伸び、父を追い越した。

広い背中を、吉廣は名残惜しげに眺める。

人は成長するのだ。それは子供でも、大人でも。

???????

そのまま崖に向かいたかったが、手ぶらなのもどうかと思い、花屋に寄った。車を道路脇に止め、店内へと入る。美しい彼女を持つ女店員に思考が奪われてしまつたが、気を取り直し花を見繕ってもらつた。

途中誰へ贈るものか、何か伝えたい思いがあるのかなど親切に聞かれ、適当に答えた。白い手が花を紡ぐ様は可憐で、とてもかわいらしい。

「…ピンクだな」

「コチヨウラン」っていう花ですよ。今は温室栽培が一般的ですので、どの花も基本的に揃えることができるんです」

「そうか…ああ、会計を済ませよう」

花を渡された後、店を出た。

しかし自転車に乗つた子供が突如通りすがり、ぶつかりそうになつた。

とつくにサマーシーズンに入っているのだ。ガキ共だけでなく各地からキャンプやら海水浴やらで、観光客の数も増えている。

煩わしいことこの上ないが、美しい自然や海、それがこの杜王町の魅力でもある。魔境でもあるが。

「……………」

ふと、視界の先に見覚えのある公園が目に入った。

ガキ共が向かったそこは、周囲の建物こそ大きく変わってしまったが、そこだけかつてと変わらない。

鈴美と出会った場所だ。

急ぐこともないゆえ——というより、自分の気持ちの整理をもう少しつけるためにも、足を踏み入れた。

公園には先ほどのガキ共しかいない。

真顔のこちらを見るなり、奴らは蜘蛛の子を散らすように逃げて行った。少々殺気が漏れていたらしい。

「……………」

花束を持ったまま、端のブランコに座る。

そのままぼんやりと空を眺め、時間を過ごし、気づけば小一時間ほど過ぎていた。思考が上手くまとまらず、過るのは過去の記憶ばかりだ。

——彼女と出会った時のこと。

——かつて自身で関係を終わらせようとし、彼女がわたしの手を握ったこと。

その他にも、色々あった。

古い記憶であるにも関わらず、鮮明にその時の情景を思い出せる。

大事な記憶だからこそ、色褪せないように頭が保存してるんだろう。

結局わたしの存在は、人生は、「杉本鈴美」という存在なしでは成り立たなかった。

鈴美に依存し、どこまでも重いぼくを支えてくれた彼女。

保健医が悪魔リリスであったのなら、彼女はわたしの聖母マリアだった。

どちらも今のわたしを形成する存在だ。

既に死んでいようと、心に彼女たちから受けたものが息づいている。

不思議だな。本人たちはもういないのに。

よく二度目の死は、他者に忘れられた時という。

それを考えれば、魂の形でしかないオヤジや保健医も、誰かに完全に忘れられた場合は強制的に消えるのかもしれない。

「そろそろ行くか…」

立ち上がり、公園を出る。

その時ふいに親子連れが目に入った。

少女はチヨウを追いかけて一目散に駆けていて、父親はそんな娘を苦笑いしながら後方で見つめている。

父親の方は眠る赤ん坊が入ったベビーカーも押していた。

「鈴美…」

肩まである桃色がかつた茶髪やカチューシャをつけた姿が、彼女とよく似ている。

わたしが持つ花と同じ色のワンピースが、少女が走る度に揺れた。

既視感のある光景に、思わず頬が緩む。

前方から来たチヨウは花束に止まり、後方へと飛び出す。

そのまま少女から視線を移し、通り過ぎた。

「——ッ!!」

瞬間、声にならない音が聞こえた。

声の主は前方にいる男のようで、顔を蒼白させている。

何が、と振り返った矢先に見たのは、カゲロウの中を飛ぶ白いチョウと、それを追いかける少女の姿。

アスファルトの色が、こうも生々しく感じることもあるとは思わなかった。

花を投げ捨て、両手を伸ばす。

触れた手は少女の背を突き飛ばし、直後襲ったのは今までに感じたことない衝撃だった。

「
」

悲鳴にならない声が漏れ、気づけば背中に感じたのは焼けるような熱さ。

ああ、なんて馬鹿なことをしてしまったんだろう。キラークイーンを使えばよかったのに。

本当に、こういう時にいつも失敗する自分が憎い。

「……あ、ああっ……!!」

視界の先で地面に座り込んだ少女が、歪んだ顔でこちらを見ていた。

やはり似てるなど、ぼんやりと思う。

背中他に、全身の節々が痛い。内臓の焼けるような熱さに、今まで体験したものよりよっぽど重傷であることを思い知らされる。

ついで耳に聞こえたのは、事態に気づいた周囲の悲鳴。

それと何か自分の頭が向いてる方から、大きな音が聞こえる。

「あ……ガハッ！」

口から漏れたのは大量の血で、ゴポツと、聞こえてはならない音が一瞬間こえた。

彼女に、会いにいかなければならないのに。

だが、思考が鈍るところか遠くへ引つ張られていく感覚に、これはもう無理だと残った頭が結論を出す。

—— 本当に、平穩に暮らせないものだな、わたしは。

地響きのような音が地面を通して頭に伝わったのが、最期の感覚だった。

わたしは。

作家「星ノ桜花」の死は、世間に大きな衝撃を与えた。

この作家は若い女性を中心に、純愛ものに人気があった。

しかし星ノ桜花の真骨頂は、やはり人間のドロドロとした部分を浮き彫りにするダイナミックな作品にある。

無機質ながらもどこか熱が垣間見えるそこには、作家の精神性が現れている。

星ノの訃報はニュースでも大々的に取り上げられた。

死因については出版社側から明らかにされていかない。しかし『平成の太宰』とまで謳われた人物であったため、真つ先に考えられたのは自殺だ。

死因の考察がなされたり、これまで映像化された作品が追悼の形で放映された。

そして9月に「K.O 談社」から出版された星ノ桜花の遺作は、純愛ものでないにも関わらず、その年のベストセラーになった。

さらに単行本で発表された作品は、後日『N賞』を受賞している。

また、滅多に後書きを書かないことで知られる作者が、遺作ではコメントを残している。^{わたくし}

『私、星ノ桜花の「生」は尽きたのでございます』の続きには、作家を辞める旨が書かれていた。それもあり、さらに自殺の線が噂されることになった。

そんな中、星ノ桜花の一部の作品のファンである男——岸辺露伴もまた、難しい表情を浮かべていた。

「……………」

ここ最近モヤモヤとした感情が晴れず、漫画を描く手が鈍っている。

星ノが「自殺した」と騒ぐ世間が鬱陶しく、テレビも見えていない。

うっかりテレビをつけ、作品をろくに読んだこともなさそうな芸能人が星ノについて語っているのを見たら最後、はらわたが煮えくり返ってしまうだろう。

——あの作品の中に詰まった、人間のドロドロとした本性を暴き出すグロテスク

さが。

——触れただけで壊れてしまいそうな、繊細な感情を浮かび上がらせる美しい表

現が。

理解する頭の足りぬ連中の目に留まり、あることないこと噂されている。これで不機嫌になるなど言われる方が無理だ。

何を知ったかぶったことを。星ノ桜花の真の良さを理解できない連中が——！

「星ノ桜花は自分で死ぬような人間じゃあない。そんなの読めばわかることだろ？ だのに、「うつ暗い作者らしい終わり方」だの、「死に方はどのようなものだったのか」だの……その考えこそ、作家本人を侮辱する行為に他ならない」

星ノは『平成の太宰』と呼ばれることもあり、影ではいつ死んでもおかしくないと思われていた。

かの太宰もまた何度も自殺未遂を図り、最期は女性と心中を遂げている。

その思考に至るのはやはり純愛ものしか読まないような輩で、露伴のような狂気度マックスな作品の愛読者たちならばこそって別の印象を抱く。

「生」ききょうとしている、と。

星ノのダークサイドな作品は、作者の闇が注ぎ込まれているのだ。

人が社会を生きる上で、ストレスは切っても切り離せぬものだ。

そうなるとよりよく生きるために、自分のストレスを発散させる方法を見つける必要がある。

星ノ桜花のダークな作品も、本人にとって生きるために有効な発散場所だったのだ。主にそれは「殺人欲求」を紛らわせるためだったり、精神の毒を抜くためだったり。

その時々々の社会風刺が出ることもあるが、一番には作者の私欲がくる。純愛ものと違って、読者側の気持ちなどこれっぽっちも慮っちゃいない。

例えば星ノの作品を見て感化された者が自殺したとしても、「自分には全く関係ない」というスタンスだ。

その、投げるだけ投げて読者をデッドボールにさせる姿勢がいい。さすがホシノ！そこにシビれる！あこがれるウ！——とは、狂気愛読者たちの考えだ。

そんな私欲にまみれた小説でも人の気持ちを掴むことができる。

露伴にとつての「漫画家」のように、吉良にとつての「作家」とは本当に天職だったのだろう。

「ハア……」

露伴は作業机から立ち上がり、ソファーに寝転がる。その隅に置いてあった一冊の本を手にとると、睨むように表紙を見つめた。

そのタイトルは『。』

発売日まで非公開にされていた本の題名だ。

露伴がこれを本屋で買った時、ふと思い出したのは星ノのデビュー作。例の「わたし」から始まる作品だ。

ドロドロとした愛の中でティーン時代を過ごした主人公。そして「わたし」が出会った女は最後、自殺する——というのが大まかな内容である。

その後は異常だった生活が一転して、取り留めもない普通な日常に戻るのだ。

作品の最後の一文は何故か「。」が書かれていなかったが、それが今作の『。』のタイトルで伏線が回収された。

当時は誤字だと考えられていて、出版社へ読者側からクレームがあつたにも関わらず訂正されることがなかった。そのため何か意味があるのではないかと推測されていた。

そして、『』の内容は露伴の思ったとおり、「わたし」の続きだった。

——大人になった「わたし」は、平穏な日常を過ごしていた。しかしとある殺人事件をきっかけに、「わたし」はまた非日常に誘われていく。

今回はミステリー要素が含まれていて、「殺人事件の犯人は誰なのか？」という謎が一つの魅力になっている。

しかしあくまでメインはミステリーではなく、「わたし」が墮落していく様子だ。

主人公は事件に関わっているものの、巻き込まれているわけではない。「わたし」と事件の関係者たちとの関わり合いが話の中心となっている。

主人公が人の形を失うがごとく少しずつ闇へ墮ちる様子は、思わず直視できぬほど壮絶なものである。

だが、やはりどこか人間の壊れる過程の中にある美しさ。それが繊細な文を伴い、より読者の胸の奥底に沈み込む。

欠けたものに対する美しさというのは、美術に通ずるところがある。

「トルソー（頭や手足のない胴体だけの彫像）」である『ミロのヴィーナス』や『サモトラケのニケ』が、いい例だろう。

この欠損した、即ち壊れたものに対しエクスタシーを見出すところが、手フエチである作者の内面を表している。

つまり一言で言ってしまうと、星ノ桜花は「変態」だ。

物語は終盤まで犯人がわからない。

しかし最後に犯人を知る「わたし」からその名が告げられて終わる。

よく言えばありきたりなネタであるが、作者の手腕により最後まで「わからない」と思わせられる。

だが犯人を知りもう一度読み返すと、確かに辻褄が合う。

露伴は本を購入してから、もう何回も読み返している。

これが最後であると信じたくはなかった。原稿の時期から考えても、種子島で共にした時点で辞めることは決めていたはずだ。

「星ノ桜花先生……いや、吉良吉影」

露伴は吉良が車に轢かれて死んだことを、事故があつた数日後に仗助から連絡を受けて知つた。

最初は向こうの声を聞いて「ハ？何であのクソツタレ仗助が？」と思つたが、電話の内容を聞いた瞬間に思わず持っていたGペンを落とした。

彼に連絡が来たのは、康一に吉良が古い知り合いだ——と話していたことがきっかけだ。その情報を知つた仗助が電話を回したのである。

吉良が車に轢かれた理由については、道路に飛び出した少女を助けようとしたかららしい。少女の方は軽傷で済んだ。

その後、反対車線に吹っ飛ばされたところまでは吉良に意識があつた。しかし今度は前方から来たトラックに轢かれて亡くなつた。即死だつた。

タイヤに巻き込まれる形で頭部を破損しており、遺体は凄惨なものだつたという。遺体をエンバーミング（修復・保存）する業者側でもお手上げだつたそうだ。

トラックが吉良に気づかなかつた理由は、彼よりも前方にいた少女に気を取られていて、気づいた時にはもう避けられなかつたらしい。

葬儀は親戚でひっそりと行われ、仗助も参加した。火葬する前、仗助はこっそりとスタンドで吉良の肉体だけ治している。

これに露伴は参加しなかった。

彼には週刊連載があるし、友人でも家族でもない、ただの知り合いの葬式に出る理由がない。

たとえば星ノ桜花先生であっても、中身が吉良吉影であれば譲れない複雑な心がある。第一まだ、その死に対して心の整理がっていない。

「あの男が少女を救って死ぬだと？——ツハ！それこそ……それこそ、あり得ないだろ………!!」

自分の平穩のためならば他者を罪悪感もなく使い捨てにできるような男が、まさか他人のために死ぬなどあり得ない。

露伴がヒーロー視する広瀬康一のような「主人公」タイプならまだしも、吉良吉影という男は「悪」だ。

ダークサイド（露伴のエゴから生じる部分）を持つ彼がそう言うのだから、よっぽどのことだ。

そもそもスタンドを使えば、無傷で救うことなど簡単だったはずだ。

「……………あるいは…」

吉良の亡くなった8月13日は、杉本鈴美が亡くなった日付と同じである。

現場に花束が散乱していたことから、墓参りに向かっていたのだろう。場所は恐らく鈴美が殺された崖の場所だ。

スタンドを使わなかったことや、杉本鈴美の命日という偶然性は正しく自殺したようにしか見えない。

露伴も信じられないと思いつつ、心のどこかでは疑わざるを得なかった。

しかし仗助はそれに、電話越しで「否」と答えたのである。

——あの人は、自殺するような人じゃないっすよ。

どんな根拠があつて言えるのか。露伴は甚だ疑問だった。

東方仗助は臆げな記憶ながら、吉良が病院の屋上から落ちそうになつていたので目撃している。

幼い頃はわからずとも成長するにつれて、あれは「自分で死のうとしていたのだ」と

理解できるようになった。

だからこそ、死ぬことはない。

何故、断言できるのだろうか。

『「生」きようとしている人間が、自分から死ぬなんて矛盾してるだろ』

仗助は露伴と違い、星ノの小説を読んでいるわけではない。むしろ漫画を含め滅多に本など読まず、日頃見るのはバイク雑誌くらいだ。

ただクレイジーダイヤモンドの使い手であるからこそ、人とは違う見方がある。

より間近で多くの人のケガを見て治してきた仗助は、自分でも直せないものがあることを理解している。

それは病気だったり、死んだものの魂であったり、壊れた精神だったり。

ある意味で彼は「生」と「死」に近い場所にいる。幼少期からそんな状態であったからこそ培われた感性とも言えよう。

かような仗助が、吉良の自殺の可能性を「否」というのだ。ならば、やはり違うのだろうか。

「——「運命」か」

彼女が亡くなった同じ日に、死んだ男。

スタンドを使わなかったことを含め、全てが「運命」によって操作されているとしか
思えない。

ならばいつたいたいその運命を決めているのは誰なのか。

まさか神がいるわけないだろう。

しかし、人間の理解の範囲外にある「運命」というものは確実に存在する。

背筋に走った寒気に露伴は唇を噛む。運命とは他人に左右されるものであってはな
らない。自身で切り開き、進む道こそ「運命」だ。

「まあ、墓参りくらいは…してやらんこともない」

杜王町には変わらず、奇妙ではあれ、平穏とした日々が過ぎていった。

???????

これは、一人の男の「罪」の話だ。

愛する息子が死に、それでも待ち続けることを決めた、一人の幽霊の話である。

アメリカの不動産王のコネを使つて誰もいなくなつた屋敷を残すことに成功した後
も、吉廣はずっと待ち続けている。

息子の、「ただいま」を聞くために。

全ては片桐安十郎が起こした『S一家殺人事件』にまで遡る。

吉廣は警察に連絡した後、現場に残された『空がよく見える』という言葉や片桐の復讐を踏まえ、鈴美が攫われた場所を導き出した。

息子から残っているように言われていたが、どうも嫌な予感が拭えなかつた。

敵が自分たちと同じ能力者の可能性があつたため、殊更に心配だったのである。

吉影がやられるとは思えない。しかし詰めめ甘さというか、肝心な時にやらかすこと
があるのを吉廣は知っていた。

ゆえに彼は崖へ向かおうとした。

ただ彼は幽体で、魂が写真の中に縛りつけられている。これは現世にその魂を “固定する” 役割を持つ。

例えば家の中であれば慣れもあり、小さな空気の流れに乗って思うままに移動できる。だが外となると話は別で、吹き込む風の強さが違う。自然の流れに身を任せたとして、果たして崖まで行けるかはわからない。

そんな吉廣に残されたのは写真から出て幽体で移動する方法だけだった。そうすれば崖にたどり着くだろう。しかし同時に危険も伴う。写真に魂が固定されている彼は、その固定から外れると強制的に成仏する。

これは戦いだった。成仏の力が勝るのか、息子への思いが勝るのか。

結果勝ったのは吉廣の愛情だった。

彼はそして、目にする。

血溜まりの中、冷たくなった杉本鈴美を抱きしめ地面に倒れていた、吉影の姿を。

月明かりに照らされ臃げではあるが、遠くからでもすでに彼女が死んでいることが窺えた。覗いた瞳に生気がなかったのだ。

吉廣は片桐の遺体がないことに疑問を抱いたが、キラークイーン的能力を知っていたので息子が爆破させたのだとすぐに思い至った。

【吉影……？】

体は特に四肢からの出血がひどく、顔は青白かった。

恐る恐る触れた時に感じたのは冷えた感触。

吉影は幼い頃から低体温だった。それを踏まえても冷たすぎる。

明らかにその冷たさは「死人」に近い。

吉廣は慌てて脈をみたがその音は今にも消えそうで、彼はそこで、もう息子が助からないことを悟った。

【よし……かげっ……】

普通に暮らすことを望み、どこまでも平穏から程遠い場所にいた息子。

彼が愛した女も死に、残された彼はその後を追いかけとしている。

仮にこの状況から奇跡的に助かったとしても、その後の吉影の将来を思うと、吉廣はただただ憐れでしかなかった。

ようやく「人」としての生を歩めそうになったと思つた仕打ちがこれだ。

吉影がいつたい何をしたというのか。

神を信じてはいない。しかしもしいるのだとしたら、何故神は息子にだけ過酷な試練をお与えになるのだろうか。

【……………】

吉廣は静かに息子を見つめる。

瞳からは止めどなく涙が溢れていた。幽霊なのに何故泣けるのか、彼にもわからなかった。

吉廣は息子の「幸福」を願い、死後もこの世に留まり続けてきた。

きつと杉本鈴美が死んでも、吉影は時間が経てば「普通」に生きていくのだろう。そんな自分がどれほど「異常」で滑稽であるかを理解し、さらに殺人欲求に苦しみながら

生きていくしかない。

ならばここで杉本鈴美と共に死ねた方が、幸せではないだろうか――。

頭によぎった考えは、その時の吉廣にとつては最も相応しい回答だった。

これ以上、息子が苦しむ姿を見たくなかつた。

その感情は息子の「幸福」を願うというより、吉廣自身のエゴが働いた結果である。

息子を苦しめ続けた一番の原因は結局何もしてこなかつた自分なのだ、彼は思った。

【ごめんよ……ごめんよ、吉影……】

吉廣はトラックに向かつた。

片桐が使用していた車なら他に凶器があるだろう、と考へて。

しかし見つけたのはタオルに包まれた一本の矢だけだった。

それは吉良邸から盗まれたものである。

他にはペットボトルなどしかなく、凶器になりそうなものは吉廣が手に取つた物くら

いしかない。

それでも心臓を狙えば命を奪えるだろう。

【う、うう……ぶう、う——!!】

やはり、ムリだ。愛する息子を殺せるわけがない。だがこのままでも死んでしまう。

地面に置かれた矢はその間、皺の目立つ手を離れゆつくりと動いていった。

その場は潮風が吹いていたとはいえ、矢を動かすほどの強風ではなかった。

しかしまるで引力が働いているように、ズルズルと、地面を這ったのだ。

【……………!!】

吉廣が気づいた時には遅く、矢が吉影の腕に侵入した。それは内側から皮膚を押し上げるようにしているため、傍目でもよくわかる。矢は吉良の体内を移動していき、やがて心臓にたどり着いた。

そして一瞬吉良の彼が痙攣した瞬間、キラークイーンが現れた。

筋肉質でありながら、どこかゴムつぽさを感じさせる身体に、人工的なピンクの肌。しかしてその顔だけは普段と違った。

ガイコツのような顔は、以前の『G爆殺事件』で発現したシアーハートアタックのごとく。

不気味な頭はむき出しの歯を開け、一言喋った。

『ニャー』

直後キラークイーンは消え、何故か吉良の脈も回復をみせた。

あり得ないことばかりであるが、吉廣は「矢」によつて息子やその分身であるキラークイーンに何か変化があつたのだろう、と推測した。

その後は訪れた警察により吉良が保護され、ついでにパトカーに侵入した吉廣も警察署にあつたカメラを使い、ギリギリ成仏せずに済んだ。

あの時以来、キラークイーンに自我が芽生え始めた。

吉廣はそのことを息子には言わなかつた。

「矢」が吉影の体内に取り込まれてしまったという事実が、恐ろしかったからである。

この事実を、彼はジョセフにも伝えていない。

息子を一瞬でも手にかけてしようとした罪の意識と共に、その秘密を隠し続けている。

吉廣が息子の帰りを待ち続ける限り、その罪の意識が消えることはないだろう。

吉廣は結局、知らないのだ。

「矢」が起こした、吉良吉影——否、キラークイーンの変化を。

その能力は吉良でも知らない。

キラークイーン自身が「本能」により知り得ている情報なのだ。

第三の爆弾「負けて死ね」^{バイツァーダスト}は、キラークイーン自身を爆弾とする能力。

これを本体が意図的にセットすることはできず、解除することもできない。ただしキラークイーンが爆弾化されている間も、第一の爆弾やシアードアタックを使うことは可能である。そもそも自分のスタンドが新しい力を得たことさえ吉良本人は知らない。

ならばそのトリガーはどうやって引かれ、どのような効果をもたらすのだろうか。

時はさらに流れ、2012年。

正史とは異なり親子関係が改善されていたものの、奇妙な「運命」によるものか、亡きDIOの意志を引き継ぎ「天国」を目指すエンリコ・プッチにより倒されてしまった徐倫たち。

彼らの意志を受け継いだのが、エンポリオ少年であった。しかしここでイレギュラーが起こる。

本来ならば徐倫の仲間であるウエザーのスタンドを宿すディスクを使い、エンポリオがプッチを倒すはずだった。

しかし、少年はプッチにより倒されてしまったのだ。

これにて、プッチの『全ての人間がこれから起こる事を全て知っている』世界が作られようとした。

時の加速が進み、そして世界が一巡する最果て^{特異点}へと至った時、エンリコ・プッチの前にソレは現れた。

まるであるべき姿へと、世界を修正するように。

いや、この場合エンポリオ少年が倒されてしまったゆえに働いた、「運命」への導きと
言えようか。

「……………!？」

今、この時、存在する者は、プッチのみのはずだった。

しかし彼の前に、ガイコツの顔をした——獣人型の物体が佇んでいる。ソレはスタンドだった。

プッチは殺したはずの徐倫たちのスタンドを思い出したが、やはりコイツとは出会ったことはない。

そもそも本体がない状態で動いていることが疑問である。

本体が死んでも、存在し続けるスタンドはいる。

だがそれを考えても、現在世界の頂点に君臨する（「神」と言ってもいいかもしれない）プッチの影響を免れているなど、あり得ない。あり得るはずがない。

彼がその存在を倒す前に、ソイツは二つの窪みんだ奥底で怪しげな光を浮かばせ、ニタリ——と笑った。

この時、プッチは理解した。

目の前にいる存在は、確かにスタンドである。

しかし、それを超越した存在であると、理解させられた。

「バイツァ・ダスト」は、本体の「完全なる死」により発動する能力。

そして本体が真の「幸福」を得ることを目的として、吉良自身ではない、キラークイーン自身が生み出した能力である。

頭が潰れたことで記憶をなくし彷徨っていた幽霊たる本体が、プッチの能力により強制的に一巡させられたことで「完全なる死」が今ここに完了した。よって既に、スイッチは起動している。

『ヨシカゲ マイ フレンド』

直後キラークイーンが爆発し、世界は巻き戻る。

正しく言い換えると、世界もろとも爆破させ、再構築していく——といった感じだ。しかし爆発の影響によりプッチは倒されたものの、残っていたプッチのスタンド「メ

イド・イン・ヘブン」の残骸も乗せて巻き戻っていく。

正史でも本体が死んでも、頑固に残っていた厄介でしかないスタン্ডである。

そのためかキラークイーン的能力だけでなく、粉々になった「メイド・イン・ヘブン」の能力が合わさった力が世界に影響をもたらすことになる。

これにより人類は、「自身の運命を知っている」ということはないものの、メイド・イン・ヘブンの特性が僅かながら残された。

人々は一度一巡した世界の自分の記憶を受けて、生まれながらにし、些細な違和感を抱く場合がある。

ある者は出会ったことがない人間に既視感を覚えたり、ある者は災害が起こる前のタイミングで予知のように「地震が起きる」と察知する。

一応個人差はあり、この力が作用するものはごく少数とわかっていい。

極端に小さな変化はそれでも、元の人間たちの「運命」を変えるには大きな力となる。

この引力はキラークイーンが本体を「幸福」に導くため発動させたからか、「不幸」へとは繋がらない。

ゆえにデイオやカーズを筆頭とした悪側の人間たちは、さらなる苦戦を強いられるこ

とになる。

ならば、いつも正義が勝つ？

いや、それでもなお凶太く悪役は頭を働かせ、己が「幸福」へとより強い渴望を抱き生きるのだ。

この時点で悪役彼らの話をする必要はないので、省略させていただきます。しかし人間たちに未だ強く影響をもたらす「運命」の修正力に、ジョースターの一族もまた苦しめられることになる——とは、言っておくことにしよう。

それぞれ、人々は進むのだ。

For better happiness
——より良い幸福のために。

世界は、変化する。

???????

“わたし”には幼い頃から不思議な感覚がある。

それは漠然としたもので、出会わなければいけない人がいる、というものだ。

母親に話しても「気のせいじゃないの？」と言われるだけで、悶々とした感情が胸の内でもだかまっっている。

本当に小さい時は自分の感情に折り合いがつけられなくて、無闇に泣いてしまうことも多かった。

いやはや、泣き虫だったあの頃は黒歴史だ。

そんな、何かと手のかかったわたしも春から高校生になった。

元々違う場所に住んでいたんだけど、父親の転勤の都合でM県のS市にある『ぶどうヶ丘高校』に通っている。

正直言って、最初は小中と仲の良かった友だちと離れてしまったことに気分が重かつ

た。

父の仕事の関係上、仕方のないことだとはわかってるんだけどさ。

地元には実家があるから、そこから通えば行けなくはない。

でもそれより両親と離れるのが嫌だったから、どの道わたしに残る選択肢はなかった。

こんなに甘い心で大丈夫なのかな。都会の大学に入ったとして、一人で生きていける気がしない。

まあ、色々不安はあるけど、慣れてしまえばどうってことはないと思う。今日もまた鏡の前に立ち、真新しい制服に袖を通した。

それにしても緑の制服に紫のスカートっていうのは、少し派手すぎじゃないかな。

前の中学校だと男女制服は紺色だったから、妙に落ち着かない。

「かわいい……かなあ？」

クルクルと回って見せる。色は可もなく不可もなく感じた。

「ふふっ……」

「ねえ、アンタいつまで着替え——」

「ぎゃああああっ!!」

自分の姿を眺めていたら母親が入ってきて、今の状態を見られてしまった。

——どうしてッ! いつもノックをせず!! わたくしの部屋をお開けになるのでしようか!!!

内心で激怒した。

訝しげに眉を顰め、「一人白雪姫でもやってたの?」と呟く母。どうして追い討ちをか
けようとするんです?

「遅れるから早く支度しなさいよ」

「はあーい……」

それから台所へ行き、先に会社に向かった父に手を振る。

そしてわたしもご飯を食べて、自転車で学校に向かう。

「じゃあ行ってきます!」

「はい、いつてらっしゃい。もう高校生なんだから、いい恋の一つでも見つけてきなさい

よ」

「そんなひどいこと言っていると反抗期になるからねっ!!」

「どうせパパ限定でしょ」

「パパには一生反抗期〜!!」

そんなやり取りを終えて、自転車を漕ぎ出す。

わたしはまあ、それなりにモテる方だとは思う。でも容姿目当てで告白されてばかりだったから、いつの間にか「恋」なんてバカバカしいと思うようになってしまった。

結局男の人は女の顔しか見ないのよ。内側なんて見ないんだ。

もういつそのこと、わたしが男だったらよかったのだろうか。

母にもよく「あなたが男の子だったらまだ…」と言われる始末だし。

実際に母親のお腹の中にいた時男の子だと思われていたわたしは、生まれてから「アレ違う?」となったらしい。

性別を間違えることは滅多にないらしいけど、その珍しい中に自分が入った。

「イイ天気だなあ……」

春の穏やかな日差しを受け、桜吹雪に吞まれる。

そして学校に着けば、変わり映えのない一日が始まる。

まだ入学したばかりで授業も少ない。

身体を動かすことは結構好きなので、部活動勧誘期間に入ったらスポーツ系を中心に回ってみようと思う。

その前により良い学校生活を送るために、友人を作らなくちゃね。

ここは中高一貫課程の者と、高校から入ってくる者の二つのパターンがある。

両者のクラスは別となっていて、わたしは後者の人間だ。

それとなくクラス内で話をする女子はできたけど、今後部活動や学校行事で別のクラスの人たちとも関わる機会が出てくるだろう。

行く行くは、一貫課程の女子たちとも関係を持たたらベストだ。

「ハア……」

長い一日も終わり、ようやく放課後。

上級生や中学から続けて部活動に入っている一年生などを除く、他の生徒は家路に就く。

ちなみにわたしは【趣味：読書】を頑なとしてプロフィールに連ねてきた女子だ。そんな自分が向かう場所は……もちろん図書室である。

ぶどうヶ丘高校の図書室は、市内の図書館と比肩するほどの大きさを誇る。いずれは市内の図書館にも行きたいけど、当分はここで事足りるだろう。

最近のわたしの流行りは海外ミステリーものだ。
本をじっくりと見ながら、何を読もうか考える。「アガサ・クリステイ」など有名どころもいいけど、マイナーな作品も捨てがたい。

「あっ」

高い位置にある本を背伸びして取ろうとしたところ、フラついて隣にいた男子とぶつかってしまった。

向こうは立ち読みしていたらしく、顔はこちらに向けられないものの露骨に嫌悪感を露わにした。

その雰囲気になんか少しビビってしまい、謝れぬまま後方でたじろいでいると、男子生徒は左手に持った本から視線を逸らさぬまま右手でわたしが取ろうとしていた本を取った。

「はい」

「え?…あ、ありがとう」

相変わらずこちらに視線を向けない。いったい何を読んでいるというのか。

「ねえ、何読んでるの?」

「……………ん?」

男子生徒はようやくわたしを見た。

「……………ッ!」

パサツ、と相手の手から落ちた本。

向こうはわたしの顔をじっと見つめて固まった。どうしたのだろう。

その時ふと、長い黒髪と丸眼鏡に隠されている瞳の奥が気になった。

手を伸ばせば相手は一步、後ろへと下がった。

それが気に食わずそのままわたしも一步踏み出し、壁際に追い込む。

自分よりもかなり背の高い男子生徒は、今更ながら上級生ということに気づいた。目立たなく少しおどついた雰囲気だったから同級生かと思つたけど、学年別の首元に
ある校章の色が違う。三年生だ。

つまりわたしは今、三年生を壁際に追い込んでいるということになる。

わたしもヤンチャデビュウってわけか？ いや、言つてる場合じゃないよ。

「……………」

抵抗もしない相手の顔に手を伸ばして、その眼鏡を取る。

何故こんな行動を取っているのか、自分にもわからない。しかし見たいと思つたのだから、止める理由なんてない。

「……………あ」

眼鏡の奥にあった瞳は、綺麗な紫色の瞳だった。確か何かの本で読んだけれど、紫目って珍しいんだっけ。

いや、そうじゃなくて、違う。もっと他に考えることがある。いや、それも違う。

——わたしはこの人に、言わなければならないことがある。

「れい、み……」

震えた声が聞こえた。ガラス玉のような瞳から一滴、雫が溢れた。

そんなことを考えている自分の視界も、やけに熱くなっていく。

胸が、苦しい。心臓を手で握り締められているみたいだ。

どうしてわたしの名前をこの人が知っているかなんて、わからない。

でもわたしも彼の名前が喉から何の違和感もなく出たんだから、きつとおかしなことじゃあないんだ。寧ろもつと、喜ばしいこと。

「吉影、くんツ……!!」

ずっと、わたしが探していた人。

出会わなければならぬと、いつかわたしの元へ来てくれると信じ、待ち続けていた存在。

彼に抱きつき、背中に手を回す。

触れることができる、懐かしい匂いだ——どうしてわたしはこの感覚を知っているんだろう。

痛いほど抱きしめ返してくれた彼の体温が冷たくて、その温度がひどく心地よかつた。

「あつたかいね」と、言われる。

そう。わたしの体温は高いんだよ、吉影くん。

「君が、いない世界だと思っていた……いてもぼくが、出会ってはいけないのだと思っていた……」

「何、言ってるか……よくわからないよ。わたしはずつといたよ？ずつと、ずつと待ってた——あなたを」

「……ぼくは、君をきつとまた、不幸に……」

彼が話しているのはもしかしたら、「前世」の話なのかもしれない。

わたしもずつと自分のこの感情が、あり得ない前の人生での“杉本鈴美”が抱いていた想いなのではないのかと、考えていた。

でも今は全てがどうでもいい。

彼が今ここにいるのだから、それが全てで。

それ以上望むことなんて、何もないでしょ？

「愛してる、吉影くん……吉影くん……ッ!!」

わたしはもう、どこにも行かないよ。目の前の瞳を見ながら呟く。

彼は優しくわたしの涙を拭い、微笑む。

「ぼくも、愛してる」と言っつて。

今、この時——わたしの止まっていた世界が、再び動き出した。

他ならない、二人への「幸福」に向かって。

—
E
N
D
—

番外編

7 1 話 しもしも〜?ボックスー!①

時期は夏も過ぎ秋。

落ち葉が色づき始め、世界——と言っても日本の中の話だが——は鮮やかに彩られている。

吉良もまた一部例外を除き、「静かなる人生」を送っていた。サラリーマンとして働き始めてから二ヶ月ほど経ったが、持ち前の要領の良さで順調に過ごせている。人間関係はこれといった友人を作らず、幼少期から培った地味キャラを生かしていた。

ちなみにスーツは「ヴァレンチノ」——と行きたいところだが、中途採用を受けた新人がブランドスーツなど絶対に目立つため、市内の紳士服で買った安めのものを着用している。

唯一ネクタイだけ相棒が選んだものをつけている。豚をやたらといぢめることでお馴染みな猫が描かれたものだ。

これ——または、猫のモチーフのネクタイを付けないと犠牲が出る。完成原稿を爆破

された経験がある男としては、相棒の要求を飲まざるを得ないのだ。

そして、時刻は流れ夕方。

満員電車に揺られた後、自宅まで歩く。

作家の頃に運動していた分の時間を、この徒歩通勤で健康維持に使っている。

最初はゼエハア言っていたが、続けていけば流石に体力もつく。

——ピリリリリ。

電柱の脇にある街灯がポツポツと夜に染まった世界を照らす中、吉良がいる200m先にある公衆電話が鳴った。辺りには彼以外、誰もいない。

「……………」

さながらホラー映画のワンシーンだ。

一応公衆電話にも固定電話や近年普及してきた携帯電話と同様に、電話番号が割り振られている。

ゆえに誰かが誤って番号を打ち、公衆電話に繋がってしまった——というケースはある。

ただし一般公開されていないものが多いため、意図的にかけるのは難しい。

「幽霊などいない」精神に磨きがかかった男としては、ビクつく要素などない。

だが連日家に来る電話（暫く無言ののち、「なぜだ……なぜ引退したんだ、星ノ先生……」という不気味な青年の声が聞こえる）の件があったため、「まさかな……？」と顔が引きつった。

電話をかけてくる主がどこのバランを付けた人間なのかはわからないが、ヤツならば吉良が通ったタイミングで公衆電話にかけることも不可能ではなさそうだと、冷静な頭が導き出す。

ちなみに静かなる人生の、一部の例外に入るのがこいつである。

「まあ、間違い電話だろう」

そう吉良が通り過ぎた瞬間、また電話が鳴った。

静寂な世界に、その音が異様に響き渡る。

「……………」

面倒だ。内心舌打ちをし、公衆電話に入った彼は受話器を取る。

『——ザッ——ザザッ——』

時折ノイズ音が聞こえるものの、人の声はしない。

何かの機械トラブルだと判断した男は、受話器を戻そうとした。そのタイミングで「バタン」と大きな音が鳴る。音の発生源は電話からではない、外からだ。

見れば、開けっぱなしだったボックスの扉が閉まっている。

風は吹いておらず、誰かが故意に押しでもしなければ扉は閉まらないはずだ。

「…開かないな」

内側から押せども、扉はびくともしない。キラークイーンで爆破させようにも、距離の問題で本体にまで被害が出てしまう。

それ以上に奇怪であるのは、先程まで街灯や月明かりにより薄らぼんやりではあるが「光」のあつた周囲が、ガラス越しに真っ黒く染め上げられていることだ。

まるで公衆ボックスの周囲だけ、墨で覆われているかのような。

にも関わらず中の状況が視認できるのは、内側の明かりが生きているため。「クソッ…!!8時までには帰りたいというのに…」

常人ならばパニックになってもおかしくない状況で、しかしこの男は別のことに動じていた。

——ピリリリリ。

再度、電話が鳴る。受話器が宙にぶら下がったまま鳴る異質さを無視し、吉良は電話を取る。

『ウシ——ア——レ』

「は？」

今度はノイズ音ではなく、抑揚のない人間の声が聞こえた。

聞き取りにくい言葉に吉良が耳を澄ます中、今度こそその声を読み取れた。

『後口ノ正面ダアレ?』

コンコンと、後ろの扉からノックが響く。

冷や汗を流し、ゆっくりと振り返る——ことはなく、普通に振り向いた吉良の先にいたのは一人の男。

白スーツは血で汚れており、シャツは彼が好みそうなストライプのものを着ている。ドクロ柄のネクタイも然り。

身長もそっくりで、唯一違うのは白髪にワカメを添えたような髪であろうか。

「わたし……なのか？」

完全に「自分である」と断言できないのは、その容姿が原因だ。

顔は上から圧力をかけられたように、見事に潰れている。吉良の脳裏に浮かんだのは車に轢死された動物の死体だ。中身のはみ出し方が似ている。

割れた頭蓋骨からは脳みそが漏れていて、肩や首元にこびりついていた。顔面で無事なのは口元だけだ。

「当分肉は食いたくないな……」

相変わらず真つ黒な中で、その男だけ浮かび上がって見える。

『才前ハ誰ダ』

「……？わたしは、吉良吉影——」

その直後、吉良の意識は暗闇へと引つ張られるようにして落ちて行った。

???????

目が覚めれば、わたしがいたのは病院——ではなく、公衆ボックスの中だった。異常な暗闇はなく、ガラス越しに街灯の明かりと窓から光の漏れる民家が広がっている。

よくよく考えれば電話が鳴る前、周囲の家に明かりは一切なかった。夜といっても言ではない時間帯に、どの家も電気を点けていないというのはおかしいだろう。

「本当に、奇妙な体験はこりこりだ……」

一応ガラスにうつすら映る自分を見たが、特に変わりはない。さらに念のため出した我がスタンドも、変わりな『ニヤー』——い様子であ『ニヤー』……る。

「ちよつと黙つてろ」

『ニヤー……』

時計を見れば時刻は7時半。少し仕事の終わりが長引いたため今日は遅めの帰宅となったが、8時までには帰れるだろう。

して、家に着いたまではよかった。

家の門を開け、庭を見てまず違和感を抱く。週末にきちんと手入れしているはずの地面に草が生い茂っている。

まさか——と思ひ玄関を開け中に入つてまず、電気がつかない。仕方なく探したライトで光源を確保する。そしてそこで、埃の溜まった床の上を歩いていた事実には鳥肌がたつた。妙に埃臭いと思つていたが……。わたしが掃除をしていなかった？いや、そんなはずはない。

そもそも、自分のもの以外で埃の上を歩いた形跡がない。

さらに障子は長らく風通しがないように立て付けが悪いし、どの場所も埃が尋常じゃない。スリッパが命綱だ。

「オヤジも猫草もないのか…?」

キラークイーンが（本人にとっては友猫ゆうじんらしい）猫草を求め室内を探し回っているが、見つからないようだ。

わたしも父を探したがいなかった。

仏壇が閉じられているのも奇妙で、冷蔵庫の中身は一部腐っていた。日付はかなり前だ。

「……………」

他にも風呂の扉や押し入れなど、普段閉めているはずの場所が開けたままになっているのもおかしい。

自分以外の誰かが入ったとしか思えない。カレンダーについては「6月」から進んでいないときた。

書斎にしていた部屋はないものの、使っている——例えば歯磨き粉やシャンプーなどは同じだ。ただし染料材はなく、眼鏡置き場もない。

服もわたしの趣味であるが、シャツの枚数やサスペンダーなど、微妙に違う箇所がある。

自室の日記やアルバム、集めている爪などはなかった。

「わたしの家で間違いはないが、違う。……ハハッ、これじゃあまるで何ヶ月も……「人」が住んでいないようじゃあないか」

否が応にも思い出すのは、電話ボックスで見た「生氣」のない自身の姿。

「……違う……次元? いや、そんなSF染みた話があるわけ……」

一応身分証明書や財布は持っているが、この家主が不在の理由を考えれば、身分証は使うのを避けた方がいいだろう。口座も恐らくは停止されている。

仮に、もし仮にわたしのいた世界線と違う時空ならば、ここの吉良吉影^{わたくし}は死んで
いる可能性が高い。

ただあくまで、まだ可能性の話でしかない。

「調べるにもまず、衛生が先だ」

一先ず無難なシャツ数枚とスラックスを持ち出し、出張用のカバンに入れる。

そして万が一の時に備えて隠してある金(幸い場所は同じで、盗られてもいなかった)
を取り、家を出た。

「気味が悪いな…」

家を物色し見つけた、リビングの写真立てや賞状の品。

社内で撮られたであろう写真のわたしは地毛で、目立たない位置に映っている。確かに自分らしいが、それ以上に頭が目立つだろ、染める。

賞状の『3位』もよくわかるが、全部3位なのもいかなものか。入賞程度に留めてもよかつたのではないか？

1位を取れる己のプライドが、譲歩しての「3位」ならば仕方ないとも思うが。

やはり調べれば調べるほど、この世界がわたしのいた世界ではないと思ひ知らされる。

ちなみに仏壇の位牌にわたしの名はなかった。単純に作られていないだけかもしれないので、正確にはわからない。

その後家を出て、周囲に人がいないことを確認してからリゾート近くのホテルに泊まった。

約一ヶ月はホテル暮らしも可能な金銭はある。だがなるべく早くこの世界の実情を調べ、帰る方法を見つけなければならぬ。

初めに必要なのは情報である。

わたしが家にいられない原因は何か。もしくは本当に死んでおり、いないだけなのか。

まずこの世の自分の安否についてだが、翌日霊園を訪れ『吉良家』の墓を確認し、己の名が刻まれていることを確認した。

死んだのは今から二ヶ月ほど前の日にちである。

やはりあの顔の潰れた男はわたしで、その死に方も轢死か何かだったのだろう。オヤジがいけないということはつまり、成仏したのか。

猫草についてはわからない。

そのままその足で図書館で墓に刻まれていた日にちの新聞を調べ、自分の名を発見した。

「お前はもう既に死んでいる」な、オーバーブローを食らった気分だ。別にこの世界の己が死んでいようがわたしではないので、極論構わない。

ついで人物についてだ。

一人で調べるにも限度があるため、知り合いに助けを求めたい。

なるべくならわたしが別世界の人間であると理解させた上で、協力を仰ぎたいな。それも全て、この世界の吉良吉影が取っていた行動次第だ。

——鈴美彼女と関わりがなかったのは、家の私物を見て判断できた。彼女に関連するものが一切ないのだ。

爪や日記などがなかったので第三者に押収された可能性もあるが、それでも彼女の映った写真一枚残っていないのはおかしい。

ゆえに、「この世界のわたしと杉本鈴美は他人である」と判断できる。

その事実に至り、妙な安心感を覚えてしまった。

勝手に目頭が熱くなる。

『S一家殺人事件』について記事を探してもなかったゆえ、やはり死んではないかと考えられた。

生きているのだ?彼女が。そう、生きて——生きている。

逆に言えば、わたしと関わらなければ「幸福」に過ごせたことの裏付けのようで滑稽でもある。

この場合「滑稽」はわたしで、その被害者が彼女か。

それから数日間、一応その他様々な本を漁り政治や社会を調べたが、やはりわたしの世界と同じだった。

大まかな情勢はわかったので、そろそろ戻り方を考えねばならない。

何度か原因たる公衆電話にも行ったが、大きな変化はなかった。

今は猫の手も借りたい。ネコ相棒の手が役に立たないから殊更に。

そろそろ日も暮れ始めホテルに戻ろうと、席を立った。

連日訪れる見知らぬ男に、司書の視線が少し刺さり始めた気がしてならない。今後訪れる回数は減らした方が賢明だろう。

しかして接触を図るなら、誰にしたらよいものか。

「鈴美」という繋がりがないわたしは、この世界でどのように生きて死んだのか。とか何で救急車に轢かれたんだ。

思った以上に天然キャラだったのか？ 三十路の天然キャラ？ ……気持ち悪いな。

「……ハア……」

持っていた薬が尽き、かなり、事は急いている。

病院には行きたくはないが、行かなければならないものの、しかし行けない。

身分証はこういう時に大きな力を持つ。仮に使って死んだ人間が生きていました——なんて知られてみる、大きなニュースになるぞ。

長引くほど精神が不安定になる。既にキャラではないことを言った気しかならないのだ。

頼むから、平穩に暮らさせてくれ。

「おっと……」

「わっ！」

図書館から出ようとして、不意に誰かとぶつかった。完全なるわたしの不注意である。

返却用のバッグを提げていた少年は尻餅をつき、呻き声を上げている。濃い緑のランドセルを背負った子供の顔は、しのぶくんと似た容姿で。

中性的な顔立ちは変わらぬものの、以前より身長が伸びたように感じた。

「すまな……かった」

「…別に、大丈夫です」

まさかこんなところで、川尻早人と遭遇できるとは思わなかった。

昔からやたら「図書」がつく場所で人と出会うのはさておき、この機会を逃すわけにはいかない。

少年がずっと俯き気味のせいでこちらに気づいていないが、顔見知りの可能性は大いにある。

転んだ拍子に地面に散らばった本を拾い手渡してやれば、向こうは小さくお礼を言った。

そしてようやくこちらの顔を視界に入れる。瞬間、少年の瞳が大きく見開かれた。その視線が向かうのは、わたしの瞳の位置。

「……え」

「…? 何かな」

喉仏も出ていない細い喉元が、ゴクリ、と音を立てる。

「写真で、そんな、嘘、だって」と呟き、ついでこちらの全体を見るようにして、一歩後ろへと下がった。

「…失礼だが、君の知り合いだったかな？」

相手の出方を待つ。急変した相手の様子を見て、暑さも和らいだはずなのにじつとりとした汗が頬を伝う。

こういつた時の嫌な予感当たってほしくないものだ、切実に。

「どうして、吉良吉影——殺人鬼のお前が、生きてるんだ………ツ!!!」

ああ、なるほど。そういうことか。

どうやらこちらのわたしは、堕ちてしまっているらしい。

72話 しもしもく?ボックスー!②

普通の人間なら、この見た目と素顔のわたしが同一人物であると気づくのに時間を要するだろう。

流石は川尻早人といったところか。しかしこの褒め言葉は、できれば今はいらなかった。

固まったままの少年をよそに、その場から逃げ出す。

参ったな。この杜王町に留まっていること自体危険なのか。

この世界のわたしが「悪」だと分かった以上、「正義」側——東方仗助は敵関係ということになる。つまり向こうに助力は望めない。

今とるべき行動は、滞在場所を移すこと。そして「吉良吉影」と似つかぬ格好にすること。

今着ているのがこの世界の本人の私物であるから、余計にわかりやすかったのだ。

「ハア、ハア……!」

ダメだ、呼吸が整わない。ホテルへ戻るまでに救急車なんて呼ばれたら最悪だ。

この世界のわたしは「殺人鬼」であった。

それはどこか、家を探っていた段階で予想はできていたのだ。その可能性を抱きつつも、情報を得る方が重要だった。

薬も処方しておらず、平穏とした植物のような日々を送っている雰囲気は感じ取れた。わたしと違い、安定していると言うべきか。

しかし、鈴木がいるから安定しているわけではない。この世界のわたしと彼女は関係がないのだから。心理的な、関わりはないのだ。

なら何故、殺人欲求と女の手の執着を持ちながら、「普通」に生きていられるのか。

答えは単純だ。

発散させる術を身につけているからだ。

それ即ち、人を殺していることに他ならない。わたしではないが、わたし自身であるからこそ、わかってしまう。

この世界のわたしは既に作動した爆弾である。人を殺し、その悦に浸る快楽者。美しい彼女たちを我が物にできているのだと、考えるだけで羨ましい。

しかしヤツのせいであらう、わたしは不遇な目に陥っている。あと五回ぐらいいは爆死しろ。

「……ハア、クソツ……」

考えたくなかった。自分の墓へ行つた時、『杉本家』の墓を偶然見つけ、その中に彼女の名前があつたことが。

そして墓石に刻まれていた日付けを調べれば、確かに一家の殺人事件があつた。

しかも少女の遺体の片方の手首から上だけ、刃物で切り取られたようになつた。そうだ。

誰が殺したかなど、明白である。信じたくは、なかつた。

しかし川尻早人の言葉で、現実叩きのめされる。

わたしが、殺したんだ。この世界の吉良吉影は、彼女を手にかけてのだ。

その事実が狂おしく、自身の脳を揺さぶる。元の世界でもこの世界でも、わたしは結

局彼女を犠牲にして生きている。

——なんて、愚かなのだろう。なんて、羨ましいのだろう。

冷たい彼女の手はさぞかし美しかっただろう。死に際表情はどんなものだったの
だろうか。

動物ではなく人間を刃物で刺し、殺す時の感覚はいいかほどの「快樂」をもた
らすのか。

「……ハハハッ！」

そう考えてしまう自分が、一番笑えてしまう。

指一本動かすのが億劫になり、扉にもたれかかるように蹲った。

脳が思考を放棄し始め、いよいよ吐き気が抑えられなくなってくる。

「——と、いうわけなんだ康一くん。読み切りの元ネタはねえ」

「へー、週間連載の合間に描けちゃうなんて、流石露伴先生というか……」

今出会ってはいけない上位に入る奴らの声が、後方から聞こえた。

こちらが酔った人間だと思っただのか、少年が声をかけてくる。

その合間に何か鉛筆を走らす音が聞こえた。おい、何人のことを勝手にスケッチしてるんだ、殺すぞ。

「吐いてくれればさらに酔っ払いのリアリティが出るんだが……。そういや、吐かせる時は病院だと直接胃に管を通して、胃洗浄をするんだったか？」

「ろ、露伴先生、ちよつと…」

「いったいコイツは何を飲んで、ここまで酔ったんだ？」

まずい、と思う間もなく岸辺露伴のスタンドが発動する。

一瞬意識がなくなつた直後、次に見えたのは青年の無表情な顔だった。先まではネタを見つけ、喜色めいた表情を浮かべていたというのに。

「露伴先生、ちよつとだけ読んで、急に何か書き加えて見るのやめちやつたけど……。どうしたんですか？」

「…いや、よくよく考えたら吐いた拍子に、僕の服が汚れたらたまったものじゃないと気づいてさ。だから『吐き気が治まる』と書いたんだ」

「へエー……。？」

「オイオイ康一くん、何だいその胡乱な目は。僕だつて偶には人のためになることをするんだぜ？」

「あつ、僕道こつちなんで、また」

あの岸边露伴をロデオのように乗りこなす広瀬康一。やはりタダモノじゃあないな。吐き気は全く治まっていない以上、書き込まれたのは違うことだろう。

「おつと……一応僕に攻撃できないよう書き加えたが、下手なマネはするなよ、吉良吉影」
「……………」

先ほど書いたのはセーフティーロックの類か。

試しにキラークイーンで殴ろうとしたが、相棒は殴る以前に動かない。え……？

まさか前に「黙れ」と言ったことに対して、まだ怒っているのか……？

『ニヤァ』

背後から人の首に腕を絡めるようにして漫画家を見つめるキラークイーンは、まるで観察しているようだ。

それを奴のスタンドと本体は、訝しげに見ていた。

「一先ず貴様の記憶の続きを読みたいしな、付いてこいよ」

「……………今は、無理だ」

「ツハー！さつき少し見た時「精神疾患」とあったが、マジにそうなのか？あのお前が？面白い冗談もあったもんだな。まあ：観察するにはちようどいい機会か」

その後、わたしはタクシーを拾った奴に引きずられ、岸辺邸へ訪れる羽目になった。元の世界でもこの世界でも、他人に自分の内側を読まれるなどごめん被る。

精神的疲労でソファアにぐったりしていれば、 balan 小僧が戻ってきた。隣には広瀬康一が……ン？

「僕の読み切り面白かっただろ、康一くん」

「露伴先生の描く漫画は面白いですからね（人間性はともかく）」

「ハハハ！流石クソツタレ仗助と違って見所があるねえ、君は」

「えっと、それで……」

こちらにチラチラと視線を送る康一少年。黒い心の声が一瞬見えた気がしたが、今は置いておこう。

漫画家に大層気に入られているのは知っていたが、まさか家に軟禁されているのではあるまいな？

岸辺露伴ならばあり得る。

「あの、その……」

視線の正体は「助けてくれ」という意味か。わたしは奴に攻撃できないが、今なら逃げることが可能だ。

警察に連絡して——いや待て、わたしが警察にお縄になる側じゃないか……？

調べられたら色々まずいのはバラン小僧ではなく、わたしの方だ。だからこそ奴による拘束は『岸边露伴に攻撃できない』だけでも十分なのだ。

そもそも奴が口にしていないだけで、他にも何か書き加えられた可能性はある。厄介この上ない。

「吉良さん……じゃなくて、『星ノ桜花先生』って言えば、分かってもらえますか？」

「……………」

この少年は「広瀬康一」でも、わたしと同じ世界の広瀬康一だ。

向こうも同じく——少し前の朝方、愛犬の散歩中に電話を取り、こちらに彼だけ来てしまったらしい。

電話ボックスで起きた現象はこちらと同じである。名前を後ろにいた自分に尋ねられ、答えた瞬間に意識がなくなった。

やはり原因はあの公衆電話か。戻る鍵はあそこにあるだろう。

「自宅に戻ったんですけど、ドツペルゲンガーを見たら死ぬって、よく言うじゃないですか。それで窓越しに朝食を食べてた僕がいて……怖くなって逃げた後、偶然露伴先生と出会ったんです」

「記憶は康一くんの許可を得て見たから、概ねは把握しているよ。流石に最初読んだだけじゃ、別世界なんて信じられなかった。第三者にスタンドで記憶を改ざんされた可能性も大いにあったしな。しかし康一くんがこの世界に二人いる事実と、貴様が現れたことによつて、「異世界」の存在が一気に信憑性を帯びたよ」

人を殺していない吉良吉影など、信じがたいがな——と、青年は続ける。

「貴様で言うところのこの世界の岸辺露伴——まあ今日の前にいる僕だが、幼少期に杉本家に泊まっていたらしくてな。僕にその記憶はないんだが……杉本鈴美の機転によつて、助け出されたんだよ。さつき「人を殺していない」と言った時、貴様は驚いた様子がなかったな。つまり、この世界の現状については大体把握してるってことだろ」

「流石星ノ先生だなあ……」

「康くん、気のせいかな君の瞳が輝いて見えるんだが？僕よりコイツへのリスペクトの方が高そうに見えるんだが？ナアナア、康くん。今とても心外な気分なんだが」

「あ、あの………サインいただいてもいいですか？」

「………わたしは既に、作家は辞めたんだが」

というかかなり精神的に参っている状況で、やめて欲しいんだが。

まあ辞めたとはいえ「星ノ桜花」であつたのは事実なので、渡された色紙に一応書いてやった。恐らく色紙はこの家の主の私物だろう。売れっ子漫画家だしな。

「吉良吉影が作家ね……。それこそネタになりそうじゃあないか。なあ、星ノ桜花先生？傑作だよなあ、女みたいなペンネームで。是非とも康くんだけじゃなく、向こうの僕までもファンになっちまうような、星ノ大先生の御作品を読んでみたいものだなあ!!
………」

黙った直後、青年は己がスタンドを出した。大丈夫だろうか、コイツ。

「しかし、事情を知っている僕が見つけてよかつたな。仮にこちらの康くんや東方仗助にバレていたら、今頃どんな目に遭っていたかわからないぞ」

「………わたしの記憶を読む気か」

「無論だ。そのために連れてきたといっても過言じゃあない。人を殺していいとはいえ、貴様が「吉良吉影」であることに変わりはない。「殺人鬼」であった男の思考回路を覗けなかった分、今ここで同じ脳を持つ人間を読まなければ、岸边露伴失格だ」

「……………」

「僕の見聞きした吉良吉影はよく自分語りをする奴だったらしいが、貴様は黙ってばかりだな。その違いも興味深い。そも、戻るまで身の安全を提供してやるって、提案してるんだぜ? 貴様じゃないとはいえ、吉良吉影に一度殺されかけた——いや、川尻早人からすれば何度か爆破されて死んだらしいが……………」

「それって、わたしの面倒を見るってことか?」

「…ああ、言うなればそうだな」

詰まるところ、安全面は保証してやるから、記憶を読ませることのこと。

コイツが岸边露伴なら問答無用で読みそうだが、そうしないのは康一少年がいるからか?

まさか「勝手に人の記憶を読んではいけない」なんて、常識があるわけがないしな、この男に。

その最たる理由がわからず、判断に困る。

「わからないって顔をしているな、僕が譲歩している理由について」
「……ああ」

「単純だ。向こうの僕が貴様の記憶を読んでいないことを、康一くんから聞いたからさ。些か信じられないが、何か向こうの僕にも考えがあるってことだろ」

「他人の意思を尊重しているのか、君が……？」

「他人じゃない、「僕」だからだ。あとこちらの知った風な口を聞くな、吉良吉影。……いや、確かあつちの僕は、貴様と古い知り合いだったんだよな？まあその点も含めて、全て読ませてもらうが」

無慈悲に近づくシルクハットのスタンド。殺せばいいものを。殺せないからこそ歯痒い。

爪が急激に伸びるこちらを観察する青年の視界を遮るように、少年が立った。一気に漫画家の眉間に皺が寄る。

「……康一くん、退いてくれ」

「嫌です」

「……話しただろ。ソイツは、杉本鈴美を……それだけじゃない、幾人もの女たちを己の「欲望」のためだけに殺した、殺人鬼と同じ男なんだ」

「知ってます。でも、「人を殺してはいない」って言ったのは、『ヘブンズ・ドア』で吉良さんの内側を見た露伴先生じゃないですか」

「ツ……だが!」

—— ——— いつ人を殺しても、おかしくはないだろうツ!!!

らしくもなく大声で、岸辺露伴は叫んだ。

確かに、わたしはいつ人を殺してもおかしくはない。むしろ杉本鈴美を手にかけたこの世界の吉良吉影を、羨ましいとさえ感じた。

その感情の中には美しい女の手を得られる「幸福」と、彼女を永遠に我が物にできたという、歪んだ考えがある。

この世界のわたしは単純に「欲望」のために殺したんだろうが、鈴美を愛するわたしとしては、少し異なった感情が浮かぶのだ。

「人の本質とは、そう変わらないものだよ」

二人の視線がこちらに向く。漫画家の方は射抜くような視線だ。彼からすれば、それみたか、といったところだろう。

「この世界のわたしは彼女を殺した。理由は、手が綺麗だったから……だろうな。それ以外の感情などないだろう。そしてわたしもまた、彼女を被害者にした。殺してはいない、けれど何度も傷つけたんだ」

彼女はもう、この世にはいない。

その事実はこちらでも、向こうでも、揺るがない真実である。

「読みたければ読めばいい、岸辺露伴。しかし読んだ場合、対価はきちんと払ってもらおうぞ。元の世界に戻るまで、世話になるからな。面倒、見てくれるんだったよな？」

「なっ!? 僕は、面倒を見るとは言ってな——」

「言っていないな、確かに。しかしわたしが「面倒を見る」意味かと聞き返した時、肯定の意をみせた。まさか自分から肯定した内容を、今更「ナシ」になんてしないよなあ？ 貴様が——「岸辺露伴」が、そんなガキっぽいことを」

「……………ツ……………」

青年は凄まじい形相を浮かべ、小さく「わかった」と呟く。

割り切るしかない。自身の内側を見られても、元の世界に戻ればこの男とは関係なくなる。

むしろ身の潔白を晴らす上で、記憶を読まれるのは有用な手段ではないか。

「いいん、ですか?あつちの先生は止めたのに…」

「かまわないよ、康一少年。早く平穏な生活に戻りたいからね、わたしは」

そうだ、静かな人生に戻るのだ。一刻も、早く。

平穏で「普通」な日々こそ、わたしの望みじゃないか。

「…読む前に一つ、聞いておきたい、吉良吉影」

「何かな?」

青年はこちらを暫し見つめ、口を開く。こちらの記憶を読む前だからこそ、わたし自身の口から聞いておきたい内容だそうだ。

「貴様は何故、「死にたい」んだ?めくって早々この言葉があつたんだ。気になって仕方がなかった」

不意に「ミンミン」と、セミの鳴き声が聞こえた。かなり大音量で、脳を揺らす勢い

で耳元に響いている。この時期の夕方ともなれば聞こえなくなりそうだが、まだ生き残りがいたのか。

「セミが……」

「えっ？」

「ハ？」

側にいた少年は首を傾げ、目の前にいた男はしかめっ面をする。

彼らには聞こえていないのか？セミが鼓膜を破る勢いで鳴いて、脳を揺らして、吐き気が。

「ッ、……う、あ？」

瞬間、立ってられないほどの嘔吐感が襲う。小僧連中の前で、いい大人が失態を見せるわけにもいかない。

機転を利かせた少年が、トイレまで引っ張ってくれた。

呆然と突っ立っていた漫画家には、本日何度目かの殺意が湧いた。この世界のわたしは何故殺しきれなかったのだ。

連日固形物を拒否していた胃には何も入っていないはずだが、収縮する感覚が奇妙に体内でその存在を主張している。

「フ、フフ……ゲホッ!……ハハッ」

生きる意味なんて、この世のどこにあるのだろうか。

誰か答えを知っているなら、教えてくれ。

73話 しもしもく？ボツクスー！③

広瀬康一にとって吉良吉影という男は、あまり接点がない人間だ。

実際に面と向かって話したのは、逃げ出した康一の愛犬を吉良が交番へ届けようとしていた時である。

露伴の「星ノ桜花」探しても一応会ったが、ゴタゴタのせいで会話はしなかった。

ゆえに康一の中の「吉良吉影」という男の像は、伝え聞いた情報で構成されている。

男の古い知人である岸辺露伴は、吉良を「いけ好かない奴」だと語っていた。

嫌う理由については、子供の頃によくいじわるされたからだ…と本人は話していた。だが、別の理由もあると康一は思っている。

時折エゴイストな一面とはかけ離れた暗い一面を、漫画家の男は見せることがある。恐らくその「影」の部分が、露伴が吉良に複雑な感情を抱く理由の一つなのだろう。

対し、異なる考えを持つのが東方仗助だ。

仗助は幼少期に吉良と遊んでもらっていたらしく、近所のお兄さん、という印象が強

いそうだ。初期は「おじさん」と呼んでいたらしいが、失礼だから——と、母親に言い直すよう注意されたという。食事を共にすることもあつたようだ。

仗助と露伴の違いはいつたい何だろうか。

まあ、単純に気が合う・合わないの問題だろう。

ただ両方の視点から見ても、吉良へ抱く同じ印象がある。

犬猿の仲（と言っても、露伴が一方的に仗助を毛嫌いしているだけのような気がする）な二人の意見が合わさるのだから、相当なものだ。

露伴曰く——、人間として欠けている。

仗助曰く——、繊細で壊れそう。

少し異なつた意見の気もするが、欠けているということはつまり壊れやすく、壊れそうということはつまり、既に欠けた部分があるかもしれない——と、康一は考えた。

実際に小説を読み、繊細さと脆さのようなものは感じ取れた。

そして、現在。

嘔吐感がようやく治つた男は、ソファアに座り死んだ目で水分を摂っていた。その

後、見かねた露伴がスタンドを使って眠らせた。

吐いた拍子に落ちた眼鏡の奥。そこにあつた深い隈が、この世界に来て十分に眠れていないことを証明していた。

精神に難がある——とは自分の世界の岸边露伴から聞いていたが、ここまでひどいものだとは思わなかつた。

由花子の件もあり、精神に少し問題がある人間について理解した気でいたが、彼の考えは甘かつたと言える。

康一の友人は暗い過去を持つ人間が多い。仗助だったり、億泰だったり。

しかしみな持ち前の性格で前向きに生きていて、自身の弱さを見せることが少ない。だからこそ人間の脆さというのを、彼はあまり身近に感じたことがなかつた。

しかし今、目の前に「死にたい」と考えている人間がいる。

康一はそんな男に対し、何もすることができない。

スタンドを手に入れ、杜王町で起きた数々の奇妙な事件を経て、強くなれたはずなのにだ。

「生きてください」と、言えばいいのか。

だが喉元まで出かかつたその言葉は、ついぞ出ることはなかつた。

そんな、そんな軽はずみな言葉を、言えるわけがない。

「生きろ」だなんて。順風満帆な日常の中で生きている自分が、言っていないわけがない。そしてその判断は、正解だった。

仮に康一が言っていたら、殺意と共に絶対零度の視線を向けられていた。

吉良の「殺意」は、こちらの世界の吉良吉影と違い、溜まりに溜まっている。本気でその視線を向けられようものなら、呼吸さえままならなくなるだろう。

見え透いた「偽善」など要らない。

吉良が求めているのは「生」きる理由か、もしくは「死」神だけだ。

「僕は何も…できないのか?」

己の無力さを嘆く広瀬康一。

その姿は成長し、そして立ち塞がった困難に悩むような——まさしく漫画の主人公のようである。

「フン…本当に地で「主人公」の道を進む男だな」

漫画本を手に取り、露伴は康一の様子を見つめていた。

仮に彼ならば、「死にたい」と考えている男の思考をスタンドで書き換えることができるし、人を殺せぬよう制限しておくこともできる。

だが実際に書いたのは『岸边露伴、広瀬康一に危害を加えることができない』と、先程書き加えた『朝までぐつつり眠れる』というものだけだ。

前者の内容については、吐きそうな男が吉良吉影だとわかったタイミングですぐに書き加えた。

ある意味向こうの吉良吉影も悪運が強いのだろう。

会っていたのが露伴ではなく仗助や億泰だったら、問答無用でボコボコにされていたはずだ。康一だったら立ち回り次第で話ができるチャンスはある…かもしれない。

ちなみに吐きそうな男が「吉良吉影」とわかった時点で、能力を使うのは確定だった。家に連れて来たのは隠すためと、じっくり本の内容を読みたかったからだ。

「……」

吉良が眠っている今なら抵抗なく読めるだろう。しかし露伴はまだ、行動に移せていない。

『わたしは人を殺さない』

『「普通」に暮らしたい』

『鈴美、ぼくは——』

「君を愛してる……か」

少なくとも吉良吉影と杉本鈴美は、向こうでは全く異なる関係らしい。

あちらの自分と吉良の関係がどのようにして生まれたのか疑問であったが、「鈴美」という仲介になる存在がいたならば納得もいく。

流石に今眠っている男が一方的に彼女へ好意を抱いているとは思いたくない。

「彼女を傷つけた」という発言が、「ストーカーをして傷つけた」という意味合いを持っているだろうか。

いや、ストーカーは基本自己中だ。

吉良に「自分が傷つけた」という認識があるからこそ、一方通行な恋愛ではなかった。そもそもあちらの岸辺露伴が付き合いを続けている。

それだけで、ストーカーの線は薄れるだろう。

「そう言えば、露伴先生」

「何だい、康くん。……ああ、自殺志願の内容を書き換えろ、つてのならナシだぜ」
「それは……どうしてですか？」

「どうして、ねえ」

露伴の「ヘブンズ・ドア」は使い方によって強力な力を発揮する。

「僕は、尊重しているのだよ。ソイツの「殺人鬼」のサガに抗う生き方を」

「運命」に抗おうとする人間が、岸边露伴は好きだ。人間として好感が持てる。

例えば広瀬康一や、ジャンケン小僧だ。

双方追い詰められた時こそ、その内側にある「覚悟」を決め、彼に打ち勝とうとした。その結果康一には負かされて、その人間性に魅かれた。一方ジャンケン小僧には、勝ったもののその成長力に目を見張った。

逆に「運命」を「命を運んでくる」と称した吉良吉影の生き方は心底反吐が出る。

だが殺人鬼としてのサガに抗い、生きようとする男だからこそ、岸边露伴は「敬意」を抱かざるを得なかった。

「そんな奴の生き方を、ぽつと出の僕が書き換えるなど言語道断だ。ただ人を殺さない

ように、制限だけはかけておいた方がいいのかもしれない」

だがそれをすれば確実にプラスチックが溜まり、精神バランスが崩れる。その最悪の結果は自死の道だ。

あまりに繊細で、かえって頭が痛くなる。

ここまで精神が脆い人間は露伴も中々見たことがない。まあだからこそ、吉良への配慮が欠けていた。

彼の周囲はみな、強い意志を持つ者ばかりで。

何故あの「吉良吉影」がここまでぶつ壊れているのか、今すぐに読みたい。読みたい——が、露伴は疼く欲求を抑えている。

「微妙なバランスの精神——いや、既に崩れかかっているが、その状態で僕が見たら、何だか恐ろしいことになりそうだと思えてね。向こうの僕の「読まなかった」という選択が、少しわかった気がするよ」

ジェンガでいう、あと一手で崩れる状態で自分の番が回ってきた感覚だ。

露伴の取った行動で向こうの吉良吉影がどうなろうと構わないが、康一や、その他の人間に被害が出たら困る。

「……まあ、そういうわけだ。放置しておく方が、賢明な手段だろ。——おっと、これだこれ」

「え、何ですか？」

露伴の手にあるのは、青狸が表紙に描かれた漫画だ。

「藤子・F・不二雄で有名なのは言わずとも知れた『ドラえもん』だ。ギャグやコメディーが特徴的だが、あまり知られていないSF作品も作者を語るなら外せない。昔はデフォルメ傾向が強くて『AKIRA』が出るまではあまり写実的な——リアルな絵柄は少なかったが、それでもこれはこれで良さがある。デフォルメされていようが写実的であろうが、リアリティを感じさせる作品はあるからね。それで藤子・F・不二雄の話に戻るが、SF作品だと特に当時としては前衛的な『ミノタウロスの皿』が——」

「ちよ、ちよ、ちよつとお!!」

「何だい、康一くん？」

「話が逸れてません……？作者の話をするために僕を呼んだんじゃないですよね？」

「おっと、そうだった。これを見せてくれ」

露伴が指したのは、暴君ジャイアンにいじめられて泣きつく少年に、やれやれだぜ、と青狸先生が出した秘密道具である。

「もしもボックス……?」

「そう、もしもボックスだ」

康一と吉良の話で分かった共通点。それこそが、〃公衆電話〃。

「漫画だと『もしもこんなことがあったら、どんな世界になるか』を体験することができ
る道具だ。願った内容と多少差異が生じる場合もあるけれどね」

「つまり……どういうことですか?」

「おいおい、君の記憶にもあっただろ、似たような内容が。確か願いを叶える犬……だつ
たよな。似ているとは思わないかい?」

「ツ……でも、影犬はもう消えたはず……!」

「違う。注目して欲しいのは「願いを叶える」部分ってだけで、犬の方は例を挙げるため
に出しただけだ」

露伴曰く、公衆電話は「スタンド」とは違う何かなのではないかと言う。

スタンドでは一概に片付けられない非現実的な体験をしてきたことがあるからこそ
の、漫画家の意見である。

そういったものは、何かしら「意味」があって存在している。

その存在する意図を探ることが、戻るきっかけになる可能性があるると、露伴は語った。

「なるほど……」

「君が何か頼んで、何かしらの力が働いた——ってわけじゃないのは、確かだよな？ 無意識に人の心理を読み取って、働きかけてるんじゃないかと思うよ。公衆電話がね」

「それって幽霊なんですか？」

「それはわからん。ただもう一度、こちらの世界に來た時のことを思い出してみる価値はあるんじゃないか？」

それに康一は、唸るような声を出す。

眠る男の横でちよこんと腰かけ、室内の蛍光灯をじっと見つめた。

「何かって言うっても、週末にデートに行く服を考えてたくらいだし……」

「随分と呑気だな。もう少し違うことはなかったのか？ 例えばその日食ったものが違うとか、犬の散歩道を変えたとか。あとは……」

「あつ」

「……何だよ、その「あつ」は」

「道……! 道ですよ!! ポリスがねだるから、その日はいつもとは違う散歩コースを通ったんです!!」

「ハァー……何でそれをもっと早く言ってくれないんだ…」

「え、えへへ…すみません」

露伴は額に手を当てた。

頼もしい男ではあるが、広瀬康一は抜けているところがあつた。

その欠点すら、露伴には漫画の主人公の魅力を引き立たせる「キャラ」のように感じられるのだが。

「おい、ちよつと起きろ、確認したいことがある」

「ん……?」

露伴は自身を書き加えた内容を消し、吉良の頬を軽く叩いた。

ゆつくりと開いた重い瞼。その瞳の奥底に沈んだ色は、不機嫌を露わにしている。

「康くんは普段とは違う散歩コースを通じて、公衆電話に行き当たったそうなんだが、貴様はどうなんだ? いつもと同じコースを通ったのか?」

「……………仕事が遅くなったから、近道を通った」

「そうか、わかった」

「何かわかったの——」

吉良の言葉は続かず、強制的に彼はまた眠りの世界へ旅立った。

お互い普段とは別の道を通り、電話ボックスに行き着いた。

次に露伴は杜王町の地図を取り出す。そしてこちらの康一が学校に行っている間に、あちらの康一と共に行った、公衆電話の場所をみる。

大通りから外れた細道は周囲に住宅街がある。車も通れなくはないが、すれ違う際は片方が止まらなければならぬ狭さだ。

まだ大通りにあるのならわかるが、改めて地図で公衆電話がある場所を確認すると、設置されている場所が不自然である。

この場所に公衆電話を設置する必要があつたのか？この疑問は、現場に行った際も一度脳裏によぎった。

別段、一般人に見えていない——というわけでもない。

ただ吉良と康一が通つた時はそれぞれ周囲が静まりかえつていたり、電話ボックスの中に入ったのちに閉じ込められて、外の世界が真っ暗くなつたりした。

もしかしたら電話ボックスに問題があるのではなく、その道自体に何かあるのではな

いか?

小道の件もある。あり得なくはない。

「奇妙な事象が起こるには、相応の理由がある。……なあ、康くん」

「はい?」

「本当に、デートの件で悩んでいただけか?他に何かなかったかい?」

「他につて、いうと……?」

「他にだよ、他に。不可思議な現象に君が巻き込まれたリアリティのある「原因」が知りたいんだ。薄っぺらいと言っちゃ失礼だが、服以外で何か悩んでたことは本当じゃないのか?」

「……………」

康一は俯き、黙り込んだ。

「…ちよつとテストで、悪い点を取っちゃって……………」

「……………ああ、君は確か勉強が苦手な方だったね」

「それで、母さんと姉さんは割と何でもいって感じなんですけど…父さんはちよつと、成績に厳しくて……………」

優秀な大学に入つて、いい企業に就職する。父親のそんな考えは康一としてもかまわない。

厳しいとは言つても息子のプライベートを尊重しているし、勉強も苦痛なほど強いられているわけではない。

ただこれまでの事件もあり、成績がかなり落ちてしまった。

さらにヤンキーの見た目な仗助と億泰の付き合いが知られ、それがさらに父を怒らせる要因となつた。彼女に現を抜かしているのではないか？…とも言われた。

確かに忙しさを理由に、勉強をサボっていた自覚はある。

しかし自分はまだしも、友人や彼女のことを悪く言われるのは許せなかつた。

その結果が父との大喧嘩だ。そのせいで父と母の関係も最近悪くなつてしまった。

姉は「そのうち仲直りするわよ」と楽観的に言っていたが、負い目もあり、康一は悩んでいた。

家族の悩み。それを仗助や億泰にはなかなか相談できず。

かと言つて由花子の場合は過剰に心配された挙句、「康一くんが困つてるのよ!? 仲直りしなさいよオ!! このツ、(自主規制)」と家へ乗り込んでくる未来が見えたため、話さなかつた。

「——なるほどね」

康一から本当の悩みを聞いた露伴は腕を組む。

電話ボックスが恐らく「強い悩み」を持つ人間を、引き寄せるのだ。

そしてこちらとあちらの世界を繋いでしまうのだろう。

電話を取らなければきつと普通に出られ、取つても自身の名前を言わなければ、別世界へ誘われることはないのではなからうか。あくまでこれは推測に過ぎないもの。

露伴も試してみたくなつたが、やめておいた方が賢明だろう。

「で、康一くん」

「はい？」

「何で向こうの僕が相談する対象に入っていないんだ!!？」

「え?だって解決しなさそうだし…面倒なことにはかならなさそうだし…」

「僕ら友人だろ? ツレないこと言うなよ。こういう時こそ歳上を頼るもんだらう」

「……どの道、根本的な解決にはならないと思うんだけどなあ…」

漫画家に凄まじく肩を揺すられていた少年は、遠い目をする。

岸部露伴は頼りになる時はなるが、基本的に康一に面倒ごとばかり持ち込む。それは向こうでもこちらでも、同じだろう。

「まあ、確かに僕じゃあ家族云々の話は、解決できないだろうね」
でもと、彼は続ける。

「クソツタレ仗助でもアホの億泰でも、頼ったって別に問題ないと思うぜ」

仗助はジョセフとの問題があり、億泰は父親しかいないから、「家族」の問題を相談するべきではない？

否、違う。

「友人」が真剣に悩んでいるなら、どんなことでもしつかり受け止めてくれるさ。それに、難しい家庭事情を持っている奴らだからこそ、康一くんじゃ得られない「答え」を持つていると思うよ」

「露伴先生……」

「友だちって、そんなもんだろ？僕らのように」

最後の「僕ら」からは、ちよつと疑問だったが、漫画家の言葉は康一の胸に刺さった。

時には頼ってこそ、主人公というものは成長する。

本当にカッコいい奴である——と、岸边露伴は思わずにはいられなかった。

「でも、戻れるんですかね?元の世界に…」

「こういうのは悩みを解決すれば戻れるってのがお決まりなんだが…君は戻っていないね。案外『もしもボックス』みたいに、電話で「元の世界に戻してくれ」って言えば、戻れるんじゃないか?物は試しだ」

「そんな単純な方法で戻れるのかなあ…。もし戻れなかったら……」

「ネガティブに考えてもしょうがないだろ。もつと気楽に考えろよ」

「……そうですね!」

考えたって、どうしようもないのだ。

だったら肩の力を抜くくらいが丁度いいのかもしれない。

「でも、僕の悩みは大丈夫ですけど、吉良さんは…」

「重すぎる悩みはそれこそ、君が背負うべきものじゃない」

「…けど、何か力になりたいんです」

「……………いいかい、康一くん。少し厳しいことを言うけど」

——誰でも救えると、思わない方がいい。傲慢が過ぎる。「人」は所詮、人でしかないんだ。

「欲を求め過ぎれば、いずれその欲は自分に返ってくる。僕だつてコイツに本当の意味で……「生」きるつて意味で、何かをしてやることはできないだろうし、君にだつて難しいよ」

「……………」

人が救えるラインを、とうに越してしまった男。

救われるのは「殺人」に身を染めた時か、死んだ時くらいだろう。

しかし「死にたい」と思えども、きつと生きる。自分で勝手に解決してしまうに違いない。

露伴にはその生き方がこの上なく気色が悪く、哀れに見えた。

「……………明日、吉良さんと公衆電話に行つてみますね」

「ああ、人目には気をつけてくれよ。君もそうだが、この男もね」

そして翌日、素性がわかりにくいよう変装した二人は岸辺邸を後にし———そして、戻ってくることはなかった。

露伴も向かいたかったが、生憎仕事があつた。

果たして二人がきちんと元の世界に戻れたかは、彼にはわからない。

もしかしたら束の間の夢だったのかもしれないが、後日川尻早人から情報を得たのだから、康一たちから「吉良吉影が生きていたらしい」と、話が来た。

彼はそれを「死人が生き返るわけがない」と鼻で笑った。

結局、時間が経ち吉良吉影らしい人物は見つからず、「本当に気のせいだったのでは？」と意見が出て終わった。

それから露伴も電話ボックスがあつた場所へ向かった。

だがそこに、公衆電話はなかつた。

あつたのは、電柱のみ。近所の人間に聞けども、「公衆電話などあつたか？」という反応しか帰ってこない。確かに一度訪れた時はあり、近所の人間にも見えていた。

その時は一同「いつからあつたかはわからないが——」と述べていた。

人の「認識」とは、ひどく曖昧なものである。

普段見慣れている道でも注視しなければ、存外見逃していることが多いのだ。

「本当に……頭が痛くなる話だな」

これは漫画家、岸辺露伴が体験した、実に奇妙な話である。

74話 I F 泉飛鳥✓

S英社の有名な漫画家と言えば、あなたならば誰を挙げるだろうか。

今回挙げるのはS英社の中でもトップの売り上げを誇る、某週刊誌の売れっ子漫画家——岸辺露伴にしよう。

デビューは人にもよるが、基本は20代が多い。

その点、岸辺露伴は異例の16歳という若さでデビューし、それからデビュー作の『ピंकダークの少年』を長期にわたって連載している。

長らく人気であり続ける理由の一つは、やはり彼の才能ゆえだろう。

週刊連載を一人でこなしているのだから、もはや人外である。

彼は「リアリティ」を求め、常に面白い漫画を描くためにネタを探している。

その姿は漫画家としての理想像である——と、彼が原作の作画を手がけたこともある荒木氏は語っている。

しかしこの男には、性格面で非常に難があつた。

彼が週刊連載を一人で行っていることは先ほど話したが、単にこれはアシスタントを

雇っていないからである。

ネタのため、また己の好奇心のためなら、降りかかる火の粉の中に躊躇せず飛び込んでしまう男。

そんな姿に周囲が引くのは仕方のないもので。

さらに生来の傲慢不遜、傍若無人とも取れる振る舞いの数々だ。

しかしそんな男でも歳を重ねれば、必然と人との付き合いが上手くなる。

若さがなりを潜め、角が取れて少しは丸くなった。

「新しい編集ねえ……」

平日の午後。カフェ・ドウ・マゴに、特徴的なヘアバンドをつけた一人の男の姿がある。

両耳に漫画のペン先をモチーフにした紐ピアスを付け、男は気怠げに頬杖をついていた。

電線の上に止まる鳥のチュンチュンとかしましい声や、周囲の人間の話し声に、車の

騒音。

その一つ一つが、岸边露伴の機嫌を逆立てる。

単なる打ち合わせであれば、彼もここまで苛立つことはなかった。

露伴がここにいる理由は、新しい編集との顔合わせのためだ。

前の担当だった貝森かいもりという男は、自分から希望して編集を下りた。

貝森が担当を辞退した理由を露伴は知らない。さして興味もなかった。

おぼろげな記憶では、彼が破産した理由を聞いた後から様子がおかしかったようにも思う。

そりゃあ岸边露伴がモン無しになった原因が、取材の延長線上にあるのだと知れば、「コイツ正気か…!？」と思いたくもなるだろう。

そしてこの出来事を「イイ経験になった」で昇華するのだから、下手なホラーより怖い。

露伴も流石にこの時は参ったが。

そも待ち合わせに編集が6分早く着き、それを「礼儀知らず」と言うほど気難しい性格な岸边露伴は、貝森にの手に余りすぎた。

果たして、この漫画家に合う編集者などいるのであろうか。

担当だった男は真摯に思ったに違いない。

「あつ、遅れちゃつてすみませ〜ん！」

間伸びした声と共に、露伴の席の前に現れた一人の女性。

明るい髪とアップにした前髪が印象的である。

長めの髪は肩先でカタツムリの殻のように内側に向かって巻いていた。

初日から堂々と遅刻した女になんと言うべきか、漫画家の男は思考を巡らせるはずだった。

しかし、思考が先に進まない。

「あれえ、どうされたんですか、露伴先生？」

「いや……」

「あ、遅刻したのは申し訳ありません！ちよつと電車を寝過…………道に迷つちやつてえ
く……」

「おい、今「寝過ごした」つて言おうとしたらろ」

「いえ、全然言おうとしてませんよ！気のせいです、気のせい!!」

「ハア……」

岸辺露伴はいつたい何に思考を奪われたのだろうか？

答えは女の容姿と、彼女の名字にある。

「確かに名前は……「泉京香」だったよな、君」

「はいッ！本日から先生の担当になりました、泉京香です。よろしくお願いしますねエ、先生。……あ、コレ伊勢丹で買ったお土産です。今OLに人気のお菓子らしくてエ〜」
「あ、ああ……いただいておりますよ」

露伴は紙袋を受け取り、テーブルの端に置く。

彼の脳内で「泉」の名がグルグルと回る。前にKO談社に赴き「星ノ桜花」について調べた時、その担当をしていた女の名が「泉飛鳥」であった。

その容姿については、星ノ桜花と編集が打ち合わせしていたところを目撃したので覚えてる。

似ている――。

「泉飛鳥」との血縁関係を疑わざるを得ないほど、泉京香は彼女に似ていた。

「なあ、ちよつといいか？」

挨拶から打ち合わせの話となり、店員にドリンクを頼んだ女に彼は話しかける。

「はい、なんでしよう」

「君さあ、もしかして『姉』とかいないか？いとことかでもいいんだが……」

「姉ならいますけど……どうして急に？」

「いや、随分前にK O 談社に仕事の都合で向かうことがあつて、その時君と似た女を見たんだ。名前も「泉」だったから、気になったんだよ」

「ああ、なるほど。あたしはS 英社に勤めてるんですけど、姉はK O 談社に勤めてるんです」

彼女は「コレはほんとは内緒な話なんですけどオ」と前置きし、姉があつた星ノ桜花の担当をしていた経験があることを話した。

それに露伴は「へえ」と、軽いリアクションを返す。

「えっ、驚かれないんですか!? あつた星ノ桜花先生ですよ!!」

「だつて知つてたからね、君の姉が星ノ桜花の担当をやつていたこと」

「えっ!!」

「ついでに星ノ桜花に会つたこともあるからなあ、僕は」

「ええっ!!!」

店員の持つてきた紅茶が、彼女が身を乗り出したことにより揺れて溢れる。

お互いの顔の距離が鼻先近くまで近づいたところで、露伴が舌打ちして椅子ごと身体を後ろに下げた。

京香のリアクションから察するに、彼女は星ノ桜花の相当なファンのようだ。

「ウソツ…星ノ先生の性別つてやっぱり女性なんですか？それとも男性？歳は？住まいは？血液型とか誕生日は？」

「個人情報を教えるわけがな…：ちよつとストーカーくさいぞ。君が知らないってことは、姉は教えてくれなかったのか」

「担当する作家の情報を口外するわけにはいきませんからね。あたしだって、姉の立場だったら言いませんもの」

「自分が矛盾したことを言ってるのに気づいてるのか…？」

「はい。それでもファンとして知りたいんですよおん…：！！」

「まあ、その気持ちもわからなくはないが」

若かりし頃に露伴も同じ行動を取った。そして、星ノ桜花本人に行き着いた。

仮に相手が東方仗助と同レベルに嫌いな相手でなければ、岸边露伴のキャラが完全に崩れていたかもしれない。

逆に言うと、少しは崩れてしまっていた。

「星ノ桜花」の名を知らぬ人間の方が、今は少ないだろう。新刊を出したらすぐにメディアア化される。

しかしそれは恋愛ものに限った話で、作家の本領が発揮されるダークな作品については、未だ映像や漫画化などはされていない。

ある時その理由について、映画の試写会で行われた質問コメントで、作者の意見が述べられている。

『深淵をのぞく時、深淵もまたこちらをのぞいているのだ』という言葉を『善悪の彼岸』の著書で残したのは、ドイツの哲学者「フリードリヒ・ニーチエ」でしたね。

わたし 私の暗い作品は、完全なる自己満足の産物なんです。

ありがたいことに映画化させていただいた今作とは違い、読者を意識して書いているわけではありません。調理されないうまま、私の内側が解体されて、そのまま皿の上に並べられている感じですかね。

それを食べる人間は——ええ、ごく少数でしょう。分かっています。万人受けするとは思っていませんので。

それで、最初のニーチエの言葉を借りますが、私の内面を覗いている方々は、私にそ

の内面を覗かれていますのでしうか？

いえ、覗けませんよね。

私の内面が作品に昇華されていると言つても、読んでいるだけで、覗くまでには至つていないと思います。

例えるなら私が映つた写真を見ているだけで、実物の私がどんな人間かを知っているわけではない。

好きな食べ物ですとか、趣味ですとか、想像するしかないんです。

人見知りなので、私が今後も表舞台に出ることはないと思いますが……。

しかし、ただ読んでいるだけ、というわけでもないでしょう。

何度も言う通り、作品には私の内面が反映されています。そしてあなた方はそれを読む立場です。

そうして物語に没入し主人公と自分を重ねた時、同時にあなたは無意識に己の内面と向き合っているはずですよ。

——つまりあなたは、その時自分の内側を覗いている。

私が言いたいのは、この一言に尽きます。

まあ、恐れ多いですが、私の自己満足の作品を好きで読んでくださる方もいらっしゃるでしょう。

それで——長くなりましたが結局、メディア化のお話をいただくこともございますが、自己満足で書いた作品を出したくないわけです。

本音を言いますと、恥ずかしいんです。

メディア化されたら爆発する自信まであります。

そんなス様な、私の首を振る態度に、「ならば誰であればよいのか」と聞かれたこともございます。

「この人間ならばかまわない」と思える人物が一人おりますが、そこはご想像にお任せします。

長々と書くとお悪感情ばかり連ねてしまいそうなので、このくらいにしておきます。

私が後書きを書かないのも、これが理由です。

それと単純に何を書けばよいのか悩み、その末、その日の眠りが浅くなつては嫌だからです。

そもそも後書きを書いても読む読者は少な……おっと、これ以上は黙った方がいいですね。

最後に、映画制作に関わった方々、またご覧になる皆様方に感謝の意を述べます。どうぞ家族や恋人、あるいは友人と、今作を楽しんでいただけでしたら幸いです。かく言う私は「おひとり様」で行くでしょう。

(「映画を観に行く」とは書かれていない)

これが、試写会で読まれたコメントの全文である。

実際に現場で聞いた者の中には「先生らしい」と笑ったり、苦笑いする者もいた。京香はこの時いたらしく、珍しい作者のコメントに歓喜していた。

星ノのコメントが出るだけで、「おおっ!」と会場から声上がるのだから、相当である。

「露伴先生は見に行つてなさそうですね。私は行きましたけど」

「行くわけないだろ、興味ない」

露伴は一応、星ノの作品全てに目は通す。

だがやはり恋愛系は読者を意識して、ウケるように描かれているのが面白みに欠ける。

彼ほど「リアリティ」を求め過ぎていると、虚構の作品に心がときめかない。

しかしこれが読者を意識せず書かれた、人間心理のドロドロ狂気本だと「面白い」と思えるのだから、チグハグである。

「メディアア化させてもいい。一人の人間” っていうのは、誰なんだろうなあ……」

「ええ〜っ、意外に露伴先生だったりして！」

「ハア？ 何で僕が？ ありえないね」

「そうですね？ あの売れっ子漫画家岸辺露伴で、しかも星ノ先生と面識があるなら、可能性があると思いますけどオ」

「ないない。ほら、とつとと打ち合わせを続けるぞ」

「はぁーい、わかりました」

それから、小一時間たった後。

話も終わり露伴が席を立ったところで、ふと彼は、かつてK O 談社で聞いたことを思い出した。

「なあ、ちよつといいか」

「どうしました？」

そう言えば、K O談社で星ノの情報を探していた時、「星ノ桜花」について詳しい情報を知る人間はいなかった。

作家の担当事情は詳しく知らないが、漫画の編集は定期的に代わる。長いこと連載を続ける彼も、何度か代わっている。

途中で岸辺露伴にギブアップした者も含めて、泉京香が何人目かは覚えていない。

作家もおそらくずっと同じ人物：というわけではあるまい。星ノの方が、露伴よりも経歴は長いのだ。

その点を踏まえ、7年前の当時、星ノ桜花を知る編集者はいなかった。

泉飛鳥の前に何人が担当が代わっており、その人物たちは諸事情で辞めた。

その他、編集長が代わる前の担当については不明である。

恐らくは前編集長が代わる時に、星ノの身バレを避けるため、別の出版に移らせるなどの対処を取ったのだろうと考えていた。

だが吉良吉影の素性を知っている露伴は、どうにも嫌な予感が拭えない。

身バレを避ける男が、今まで担当していた編集に何かしら手を打っていてもおかしく

ない。

泉飛鳥が五体満足——そして精神健やかに過ごしているか、一抹の不安しかなかった。

「君の姉ってさ、今もK〇談社で働いてるんだよな？」

「はい？ さつきも言いましたけど……」

「ビョーキとか、してないよな？ 作家の担当はきつと大変だろ？」

「あたしの姉が病気？ ハハハ！ やだなあゝあり得ませんって！」

「なんなら写真見ます？——と、ガラケーを出した京香は鼻歌混じりに携帯を操作する。

そしてさほど時間もかからず、画面を露伴に見せた。

「これこれ、私の隣で笑ってるのがお姉ちゃんです。今年の春に姉妹で初詣に行った時撮ったんですよ」

「……………」

「お姉ちゃん美人なんですよね。でもカワイイって感じもあつて……露伴先生？」

「…………お、おいおいおいおい、おい」

「な、何ですか、そんなに画面を見つめて？……あつ、ダメですよ！ お姉ちゃん婚約はしてないけど、彼氏がいるんですから!!」

「違うよ君、そうじゃあない！よく見てみるよ、この写真！！君の姉の腕の方をさッ！！」
「え？腕の方……？ああ」

コートを羽織った二人の女性。京香の左にいる女性の腕の中。

そこには紅いニット帽をかぶり、厚手のジャンパーとジーンズを着た、6歳ほどの子供が抱っこされている。左手を飛鳥の首に回し、視線はガッツリとカメラ視線だ。

髪は長めのストレートで、肩にかかっている。顔は前髪に隠れ見えにくいのが、性別の判断がつかぬほど中性的な見目をしている。どちらにせよ、容姿端麗であることは確かだ。丸いくくりくりとした目がどこことなく、飛鳥と似ていた。

「お姉ちゃんの子息です、女の子に見えるほど愛らしいんですけど、男の子なんですよ！」

「ハ、ハハ……」

見覚えのある幼児の金髪と、薄い紫の瞳に、露伴の思考は止まった。

「名前は吉照くんよしてゐるって言って……」

「グハッ」

そしてオーバーキルの情報に、漫画家は完全にトドメを刺されたのである。

75話 IF泉飛鳥【1+1】

「わんわん!!」

穏やかな朝の日差しが、縁側に差し込む。そこにドダバタと、元気な足音が響いてきた。

ニット帽をかぶった子供は床に寝ると、そのまま転がり出す。

その騒音についさつきまでイイ気分で日向ぼっこしていた猫草は、瞳孔を細くした。

一方、同じ場所で新聞を広げた上に爪を切っていた男は、完全無視だった。

『シャーッ!!!(オレの側に近寄るんじゃあねエ——ッ!!!)』

「わうん?」

興奮する猫草と、それに首を傾げる子供。

二者の戦いの火蓋が今切られる……ことはなかった。獣人型の猫が砂浜に打ち上げられた魚のような子供をさつきと回収したからだ。

「さて、朝食を作るか」

「ごはんごはん!」

「いい子にしていな子供に、朝飯があるわけないだろう」

「……………ごめんなしゃい…」

「ハア、全く……。ほら、手を洗っておいで。服も着替えてきなさい」

「はーいー」

子供はまだパジャマ姿のままだった。

顔立ちこそ端正な男と違い、愛らしい造りをしている。

長い髪も相まって、恐らくほとんどの人間が「彼」を見たら「少女」と思うだろう。

今年で6歳になった子供は、男と似た金髪や薄紫の瞳を持っている。その容姿は愛らしい容姿を伴い、一つの芸術品のようでさえある。

少年が動く度にサラサラと、帽子から溢れたストレートの髪が揺れる。

太陽に照らされるだけで、美しく色を輝かせる。正しく少年が持つ名の「照」を体現している。

少年は毎朝母、またはこの男に櫛で髪を梳かされるのが好きだ。

ちなみに保育園や幼稚園には行っていない。通うにしても、色々と問題があるからだ。

「クシクシしてー」

「料理が終わってからね」

「やだやだ!!いま!いまでしよとかすの!!」

短パンとシャツに着替えた子供は、また転がり始めた。

男は腕を一振りし、フライパンで卵焼きをひっくり返しながら、邪魔者たる少年が足にぶつかる寸前で器用に避ける。

そのまま大人と子供の格闘が10分ほど続き、二人分の朝食が出来上がった。

「皿は気をつけて運ぶんだよ」

「はあい」

「コラ、頭に乗つけて運ぶんじゃない」

子供が落としそうになった皿を男の背後から現れた獣人が掴み、テーブルへと運ぶ。

子供はピンク色の獣人が運ぶ様子をじっと見つめた。

そして、ようやく少年の待ち望んだ「クシクシタイム」である。

ニット帽を取り男の膝に座った少年は、尻尾を揺らすのがごとく嬉しそうに笑う。

口の隙間から覗いた歯は一部鋭く尖っており、その中でも特に犬歯は下の歯を覆うほどに長い。

「きもち〜」

「バタバタさせるな、鬱陶しい」

少年の尻に空けられたズボンの穴から飛び出すのは、金色のフサフサした物体だ。埃を取るにはちよいどいいモップになりそうだ——と、男はその物体を捕まえて思った。

対し尻尾を捕まれ、驚いた少年の頭にある二つの耳がピンと立つ。

「づうー……」

男は唸る子供を抱きかかえ、立ち上がる。

そしてやつとこさ朝食の時間である。少年がいる間は、普段の二倍は疲れる。

「手をきちんと合わせなさい。ソワソワしない。食べた箸を持ったまま席を立たない、あと——」

「ごはんたべたいー!!」

「……わかったよ、じゃあいただきます」

「いただきますー!」

暴れていた少年であったが、箸使いなど、マナーはしっかりしている。食べカスも滅多にこぼさない。それも全て男の教育の賜物だ。

母親が監督では、こうはいかなかつただろう。

「……………」

男——吉良吉影は、頬を赤くさせて、半熟の目玉焼きを頬張る少年を見つめる。名を「吉照」という子供は、吉良と泉飛鳥の息子である。

DNA鑑定もしたため間違いない。しかしこの二人は籍を入れていなかった。ちなみに子の名をつけたのは、母親の方だ。

結婚という考えも、泉が妊娠を伝えた段階で吉良は考えた。

途中のエコー検査で、子供に耳や尻尾のようなものがあるとわかった時は白目を剥いたが。

イヌ、犬、DOG。

彼の脳内で過つたのは、言わずもがな「影犬」である。「生」まれることを願い、「死」ぬことを恐れていた存在。

スタンドであるのか、はたまた妖怪の類なのか、掴みどころのないものだった。

犬は吉良の中に入った後、最後に自分自身に願うことを決めたのだ。

その時の願いが叶いこの世に生を受けたのが「吉照」ならば、吉良にとってこれ以上

なく迷惑な話だ。

そもそも女性遍歴を遡ればキリがない。特に作家になってからは。

相手を孕ますなんてヘマは一度だって犯したことはないし、そうならないように過剰なまでに注意は払ってきた。

殺人欲求を紛らわすために女を抱く彼には、子など不必要なものでしかない。

さらに言えば、ガキは嫌いだった。自身が子供を持つなど、絶対にあり得ないと思っ
ていたくらいだ。

だというのに、運命は吉良ではなく、ワンちゃんの方に味方した。

「……ハア」

科学がすでに血縁関係を証明している。どうあがいてもワンコな少年は彼の血を継
いだ子供である。

吉良は固まりきっていない卵白が唇から伝っている子供を見て、ティッシュで拭う。
それを丸めてゴミ箱に捨てた。

妊娠当時は、母体の影響が少ないうちに泉に中絶を提案しようかとも考えた。

しかし腹をさすり幸せそうに笑む彼女を見て、吉良は息を飲んだ。

幸福を享受する泉飛鳥の姿は、彼が生涯で何度か体験したことのある「美しい」という感性をもたらした。

無論美しい彼女相手には、常日頃から「愛らしい」「綺麗だ」と感じている。

それを抜きにして、手以外のものに心を奪われた。

その感覚は保健医が最期に浮かべた表情を見た時や、鈴美に対して抱いたものとそっくりで。

——紛うことなき、「恋」の感情だった。

それを自覚した男は、悩んだ末に自分の感情を受け入れることにしたのである。

「鈴美」の代わりとしてこれまで泉と関係を続けていたが、それに区切りをつけるべきだと考えた。

自分が代替品だと理解した上で男に笑いかけながら、影で暗い表情を浮かべる飛鳥に心を動かされていた時点で、彼の恋心は確かなものとして確立されていたのだろう。

だから泉が子を産むことに何も言わなかった。ただ書類上「父親」になることだけは、認めなかった。

新しい誰かを好きになることがあっても、吉良の中で一番になることはない。

それはずっと、彼が生きている限り引きずる、杉本鈴美への想いだ。

あり得たかもしれない彼女との未来。子を作ったかはわからないが、少なくとも結婚はしていた。

ゆえに鈴美以外の女と結婚することは、考えられなかった。例えそれが好きになった相手だとしても。

これが、吉良が泉と結婚していない理由である。

「ねーねー」

「なんだい?」

コップに入った牛乳を両手で持ち、チビチビ飲んでいる少年が彼をじつと見る。

もしこの子供に「影犬」時代の記憶があり、他人の願いを叶える能力が残っていたら、吉良は自身の平穩のために泉には悪いが殺していた。

だが吉照には当時の記憶がない上、能力もない。恐らく人としての命を得る代わりに、自身の力や記憶を代償として払ったのだろう。

今でも残っているのは犬のような見た目や、若干の要領の悪さだろう。

考えれば泉が意図せずつけた「吉照」という名前は、生まれても死んでもいない暗闇から抜け出せた子供にとって、皮肉であり、あるいは祝福を象徴する言葉なのかもしれない。

「ヨシカゲは、ボクの『おとーさん』なんだよね？なのに、なんで「パパ」っていつっちゃダメなの？」

「わたしはお前の父親じゃあないよ。前にも言っただろ」
「そーだっけ？おんなじにおいするのに」

子供は椅子から立ち上がって、スン、と男の匂いを嗅いだ。ふんわりと石鹸みたいな匂いがする。

そのまま遠慮なくスンスンしていたら頭を掴まれ、マジのトーンで「やめろ」と言われ、少年の耳と尻尾が下がった。

「ボク、「ヨシカゲ」じゃなくて「パパ」っていいたい」
「君のパパはパパじゃない」

「キレイなの？チャーシューリキ長州小力。お笑い芸人。「キレイでないですよ」の人。みたいなの？」

「変な知識はつけてくるんだな……。それより早く食べさせてくれ。皿が片付けられない」話を流された少年は朝食をかき込むと、お怒り四足^{ステツ}歩^ブ行で玄関の方に駆けていった。

「ハア……。早くアイツを連れ帰ってくれないかな、泉くんは…」

ちなみに吉良と泉は未だにお互いを「泉くん」「先生」と呼び合っている。

もう長いこと仕事の関係がある二人だからこそ、続いている呼び方だ。「星ノ桜花」の一声で編集が代わっていない。

しかし情事中にはお互いの名を呼ぶこともある。「飛鳥」と初めて呼ばれた泉の衝撃といったら凄まじく、暫くニヤニヤしてしまったほどだ。

妹は、姉がずっと星ノの編集を続けているとは知らない。上手く飛鳥が過激派の星ノ桜花フアンの妹を騙しているからだ。

チヨロいは妹だがやはり、可愛いものである。

「ママー!!」

瞬間、玄関先から吉照の大声が聞こえた。

吉良は子供のはしやぎ声に無意識に口角が上がっていることに気づかぬまま、皿を水切りに置き、手を洗って玄関へと向かう。

泉は仕事の都合で、M県の近くに一週間ほど滞在していた。

午後に戻るとのことだったが、どうやら仕事が早く終わつたらしい。連絡の電話を入れ忘れていたところが、うっかりなどころのある女らしい。

「ママー!!おかえりなのだあーっ!」

「ただいま吉照くん!あああ……ほんとうちの子つて世界一可愛い……!!」

息子の方は尻尾をちきれんばかりに振って、母親の方はそんな子供を抱っこしながらデレデレな顔で頬擦りする。

そんな二人の元へ歩み寄つた男は、腕を組んで壁に寄りかかった。

「おやおや、帰つて来たら家主に一言くらいないのかい、君」

「あつ、ドモ」

「ドモ、じゃないよ。子供のついでに声をかけるような感じはよしてくれないか」

「ははっ……じゃあただいま、吉影さん」

子供を抱いたまま意地悪く笑つた女に、男の目は虚をつかれたように丸くなった。

鼻を鳴らした男は一度瞼を閉じ、視線を床に移した。

そして、彼女の方をもう一度見やる。随分と、挑発的な笑みを交えて。

「おかえり、飛鳥」

午後の——雲がゆつたりと流れる世界のような二人の「幸福」が、確かに今、ここに存在していた。

76話 I F保健医√【悪魔は誰だ】

身代金目的で未成年を誘拐した罪で、刑務所に服役していた佐藤安希恵あきえ容疑者。

数年後、出所した彼女の元に現れたのは愛する弟——ではなく、ブランドもののスーツを身に纏った、かつて彼女が誘拐した相手だった。

社会人となった男は黒髪から金髪に戻し、スーツと同じ色の瞳が彼女を捉えている。そのケモノの如き紫目の奥に宿るのは、思ったよりも夙い色だった。

まあ薄々、あの崖の上で少年に「好きです」と伝えられ、生きてほしいと説得されたので、来る可能性があるとは思っていた。

佐藤はどう切り出せばいいか悩み、ひとまずいつものテンションで行くことにした。

『シャン！』『スタツ』『グウウン』『バア——ン』のデイト手順を踏み、ムシヨから娑婆に降り立った女。

「君は吉良吉影だね？」

だがしかし、その台詞は頭デイトの方ではなく、肉ジヨナサンの方である。

男は佐藤の言葉を無視し、その手を引くとさっさと駐車場に連れて行つた。そして女を助手席に乗せ、運転を始める。

助手席の位置は右側だ。外車である。

「ねえほら、久しぶりの再会なんだしく先生とお話ししようよ、ねっ?」

「懲役に処された時点で、養護教諭の免許は失効してゐるだろ」

「おお、詳しいね! さっすが吉良くん!」

「褒められてゐるのに、貶されてゐる気しかないな」

そうだ。このふざけた感じのやり取りこそ自分と彼の間柄だと、佐藤は大袈裟に頷く。

だがすぐに沈黙が訪れる。

気まずさに彼女が視線を外の景色から運転席に移すと、男の横顔が見えた。

学生時代にネクラで通してゐた容姿は一転して、エリートっぽい気品ただよう顔と物腰になつてゐる。

前髪と眼鏡で秘されてゐた瞳は、今や晒し放題だ。

「ほーんと……キレイな顔」

他の女たちはこの容姿を普通に拝めてゐたのかと思うと、彼女の中で黒い感情が生ま

れる。

「何だい。不機嫌そうな顔をして」

「別に、嫉妬なんてしてませんけどお？」

「…ああ、わたしの見た目か。社内ではそれなりにモテているとは思うよ」

「うわあ、ソレ自分で言うの？アツキー引いちやう」

「そんなわたしがあなたは好きなんだろ？」

「ええ、そうね。好きよ」

佐藤の喉元からスルリと出た言葉に嘘はない。

数年経つても変わることはなく、むしろ時が経つほどに恋焦がれた。またあの青年に会いたいと。彼女自身の手で乱して、乱された相手に。

まあそれ以外で、生きるために縋るものがなかったと言えようか。

他の女受刑者がいる中で、その美しさから嫉妬された佐藤は、中々に壮絶な目に遭った。

トイレに顔をつつままされたり、虫を食事に……なんてことはしよつちゆうだった。

同部屋の女たちはその後、暴力沙汰を起こして嚴重に罰せられた。

どうやらいじめていた仲間内で揉め事になり、争いになったようである。唯一無関係だった彼女だけ罰を免れた。

もちろん、意図的に同部屋の女たちの陰口をそれとなく周囲に流させ、暴行沙汰になるよう仕組んだのは佐藤の仕業である。

人心掌握に長けた彼女は、誘拐事件にもその手腕を発揮した。

そのため疑われてべきだったが、彼女が「いじめられた」立場であったことと、精神的に憔悴していた様子。そして何より疑われることなく騙し通すことのできる技量から、周囲の目を欺いた。

もし佐藤が女優になっていたら、天職でただだろう。もしくは詐欺師か。

「相変わらずあなたは、死にたがりのようだね」

「死にたがり？私はいつだって前向きに生きてるわ」

「地平線に向かって走るくらいか」

「ええ。でも今は恋の逃避行中みたい」

「このまま向かう先は、男の自宅だろう。」

スーツを着ていたので、てっきり仕事の合間に来たのかとも考えたが、今日は休暇を取つたらしい。

スーツは仕事着で、着てきたのは単純に気分から。そういう気まぐれなところがネコのようにだと、彼女は前から感じている。

して、高速道路を乗り継ぎ、車窓を眺めること一時間と少し。

男の家に着いた彼女は、外から開けてもらった扉から降りた。

このムーブを佐藤に求めたのは向こうである。吉良は細い手を見つめ、小さく息をこぼした。

何気に彼女と会ってから変わらなかつた表情筋が動いた瞬間だ。

「今、私の手首から上がいらぬ——って、思ったでしょ」

「ああ、そうだが？しかし殺す気はないから、安心し給えよ」

「うーん……そつかあ」

少々残念な気持ちになりながら、佐藤は屋敷へと足を踏み入れた。

「靴が吉良くんの分しかないみたいだけど、ご両親はもう亡くなったのね」

「わたしが大学四年の時に、二人とも亡くなったよ」

「ふーん。君のしがらみは無くなったんだ」

「しがらみ、か」

居間の中を、外から差し込む光がぼんやりと照らしている。

障子に遮られ一部光の当たらぬ場所に、吉良は佐藤を手繰り寄せた。

「美しいね、相変わらず。ここまで耐えたわたしが素晴らしいよ、本当」

「私に言つてないわね？」

「フフフ、フフ………舐めていいですか？」

「えっ、嫌」

何故再会して早々、舐められなければならないのだ。

いやまあ、別に構わないのだが。

佐藤の生きる目的が、「吉良に求められること」になっている時点で、どのように扱われてもいい。

それはけして、自己犠牲ではない。もっと別の問題だ。

彼女の根幹にある“自己”は極端に薄い。

病的な嘘つきであるのも、彼女の意味そのものがフラフラと彷徨っているからだ。

己という存在が何者なのか、佐藤は三十路を過ぎた今でもよくわかっていない。

佐藤安希恵とはいったい、何なのだろう。

何のために生まれて、今こうして生きているのだろうか。

「まあ、キスぐらいならいいけれ……」

彼女の言葉が終わる前に、可愛らしいリップ音がした。吉良は白くしなやかな手を堪能していく。

見目の良い男が跪き取るその行動は、まるで姫に誓いを捧げる従者のようでもあった。

倒錯的な光景に、思わず佐藤は視線を逸らす。

直視できないほどに相手の興奮が見て取れて、少々気恥ずかしくなってしまった。異性との接触がそもそも久しぶりだ。

こそばゆさに身じろぎすると、逃さんとばかりに腕ごと絡み取られる。両者の息はすでに荒かった。

異常な空気が、部屋を支配している。

ドロ口ついて、ムワツと匂い立つような、そんな狂気でできた蛇の交尾のような情景。

「え」

吉良がかしずいている中、不意に彼のスーツ裏の胸ポケットから何か落ちた。

ゴロンと、転がった物体。数滴の畳を染めた紅い液体が、彼女の目を引く。額から流れた冷や汗を拭つたのは、男の伸ばした手だった。

吉良は落ちた物体に視線を移し、もう片方の手でそれを撫でながら、艶めいた表情で笑う。

「君もかわいらしいよ。やだな、ぼくに嫉妬したのかい？浮気をして悪かったよ、でも彼女の手の方が君より綺麗で、美しいんだ」

——だから、手を切ろうね。

直後、青白い女の手らしきものは、跡形もなく消えた。

目を白黒させる佐藤に、吉良は視線を戻す。震えた彼女の唇から、押し殺すような息が漏れた。

「……君は、何を」

「わたしが、なんですか？」

「……ダメ、だったのね。君は……そうか」

墮ちて、しまったのだ。

しかし佐藤が震える理由は、恐怖ではない。

ならば自分が吉良を墮とした原因になったことを後悔している？——いや、それも違う。

イかれてしまったこの男の瞳は、この上ないほど綺麗だった。

過激なまでに手だけを愛する。底の見えぬドロドロとした狂気の覗く人間の目は、うっかりするところらがぶつ飛びそうなくらいには悍ましく、美しい。

そして墮ちてしまった男がこの上なく、愛おしかった。

「初めて殺したのは、誰だったの？……いえ、予想はできているけど」

「あなたの弟だ。鈴美が奴に殺されてね、抑えが効かなくなった。初めては手の美しい女がよかったが……」

「……そう、やっぱりそうなのね。アンジェロくんが亡くなったのは悲しいけど……ああ、でも今この時、あなたのその瞳が見られたのなら、いいのかもしれない。彼の犠牲が、今の君を生んだのなら、喜ばしいことなのかも……しれないのかな？」

『S一家殺人事件』は今から数年前、吉良が大学四年の時に起こった。

その一件で杉本鈴美は死に、彼の依存先がなくなった。

佐藤はだからこそ、自分が杉本鈴美の代わりに選ばれたのだろうと考えている。

もちろん、「代わり」の自分にはなれないだろう、とも。

ちなみに事件については、刑務所にいた頃ニュースのテレビを見て知った。

吉良が自身を「好きだ」と言った時、相手が恋愛感情を理解できたのだと察した。

ならば杉本鈴美を愛することも予想できた。また出所した弟が、自身が捕まったことを知り、何かしら行動に移すことも。

しかし流石に杉本鈴美を含め、一家を全員殺してしまうとは思わなかった。

恐らく吉良も同様に狙われたのだろう。：いや、むしろメインは吉良で、杉本鈴美の方がオマケか。

心理学を学んだ佐藤でも、片桐安十郎という男の内側を完全に理解することはできなかった。

「何か、勘違いしているようだが」

「……うん？」

「わたしがあなたを鈴美の代わりにしようと考えているとしても、思っているのだろうか」

「………違うの？」

ならやはり、佐藤は殺されるのだろうか。ついと彼女は、手首だけになった自分を愛でる男の姿を想像した。

「鈴美の代わりにあなたがなることはないし、逆を言えば、あなたの代わりに鈴美がなることもあり得ないんだよ」

そして、吉良は乾いた笑みをこぼす。彼女の手に釘付けだった視線を、佐藤の瞳に向けて言う。

「ぼくは、「普通」に生きたいだけなんだ」

だが、もうタガは外されてしまった。外したのは誰でもない、吉良自身の手によって外されたのだ。

人を殺す快楽を、冷たく美しい彼女たちの愛らしさを、何より人を殺し満たされる感覚を知ってしまった。

もう誰かを殺さずには生きられない。

誰かを不幸にすることでしか、彼は生きられない。

そしてその中に「罪悪感」など一切なく、ただただあるのは、「普通」に、平穩に生きたい感情のみだ。

既に人を殺した時点で「普通」になど、生きられるわけがないというのに。

「ぼくは、どうすればいいんだろうね、保健医。……ああ、もう「保健医」じゃあないんだった」

「……………」

佐藤の手に頬擦りし、微笑みながら静かに涙を流す男は、壊れていた。元より壊れていたが、完全に精神の方がボロボロになっていた。

自身の矛盾した生き方。「平穩」と「殺人欲求」の狭間で、その心は長年雨風に晒された錆びた鉄の如く、腐食している。

きつとそこには、依存先にしてきた杉本鈴美を失った影響も強くあるのだろう。

「貴様は悪魔^{リリース}なのだから、わたしに救いの手を差し伸べなければならぬんだよ」

「…………断つたら、殺してくれそうね」

「なら、死ぬよりももつと悍ましい生き方を、強要させてもいい」

「……………そうね」

佐藤は、吉良の頬に手を伸ばした。随分と冷たい体温はそのまま、以前よりもさらに頬が瘦けた。まだ二十代だというのに、彼女と同年代に見えるかもしれない。

「これじゃあどちらが悪魔か、わからないわね」

リリースは微笑んだ。さながら、あの時——朝焼けの元で浮かべたものと同じよう

に。

美しいその姿に、吉良はゆっくりと口元に顔を近づけた。

相変わらず口紅を付けない唇は、妙に甘かった。

77話 心音は、さざ波と共に流るる

鈴美と図書室で出会ってから、数ヶ月経った。

ジメジメとした季節が過ぎ、迎えたサマーシーズン。彼女と再会して早々訪れる受験勉強に、嫌気がさす。

他の奴らと比べ、わたしには前の記憶（恐らく己の身体もろとも過去にタイムスリッ プしたと思われる）があるし、地の頭が悪いわけではない。

殆どの教科は問題ないのだが、しかし唯一、専攻した日本史にダメージを削られていた。

他の教科とは違い、とにかく覚えることが重要な科目。一度やったことはあるのだから、他人よりも覚えやすいと思うことなかれ。

過去の三十数年の記憶と今の十数年の記憶を足すと、それなりにいい歳になる。

精神年齢……というよりわたしらしさは変わっていないが、それでも物覚えは前より悪くなった。

身体は若いというのに、奇妙な話である。また、精神状態も過去の脆弱さを引きずつ

ていた。

しかし本当に巻き戻った直後は驚いた。赤ん坊の頃の鮮明な記憶など、最初の一回で十分だった。

そして同時に、乳児の頃の記憶があるという共通点から考えたのは、遡る前が一回目の人生ではなく、二回目——あるいは、さらに数を重ねている可能性。

まあ遡ったのか、はたまた「前世」なんて笑止千万なものがあったのかはわからない。知る術がないから殊更である。

わたしはわたし、「吉良吉影」だ。

依然変わりなく、その事実が自分の生き方を導いている。

「何か上の空だね？」

「……ちよつと過去に、想いを馳せていただけだよ」

「過去って、吉影くんの中学生時代？それとも……もつと前の方？」

「さあね。それより勉強を進めたらどうだ」

高校の夏休み、今わたしと彼女がいるのは図書館である。

学校の図書室よりこちらの方が長い時間利用できる。

カッパルで勉強する状況は一見人目につきそうだが、上手く受験生に紛れていた。

心配しそうな親——特に母親は、前の時より束縛が減った。まず、時が巻き戻った”

と自覚した上で、初めに行動に移したのが母に関してだ。

とにかく親の言うことをよく聞き、反抗期などなかったわたしは「NO」と言える人間を演じた。絶賛反抗期扱いである。

だがその結果、苦勞の甲斐あり多少の自由がある。

それでも母の執着があるのは仕方あるまい。わたしが拒絶反応を起こす視線ではなくなっただけマシだ。

ちなみに鈴美には、わたしが「前世で不遇な別れを遂げた恋人だった」と話してある。

実際は前世ではなく、「時間が遡る前の世界」だ。

しかしうる覚えではあるが、彼女は姿形のわからぬ相手（＝わたし）を探していた——という記憶を有しており、そこからその不思議な感覚が自分の「前世」の記憶である……と解釈していたので、それで話を合わせた。

「ああ、ほんとイヤだわ。夏休みだからせつかくパーつと二人で遊べると思ってたのに、何で高校つてこんなに課題多いのよ…」

「ぼくが受験生つてこと覚えてるかい、鈴美」

「ええー、でも今の段階で第一志望のD学院は〔A〕判定でしょ？日本史だけ他と比べたら微妙な点数だったけど」

「そうだよ。だから一夏の思い出を、共に勉強にしようじゃあないか。旅は道連れだ」
「嫌よッ!!しかも「世は情け」の部分が消えてるじゃない!?水着を買った意味がなくなっちゃうなあ…」

「水着?」

前の話から察して、わたしと行くつもりだったのだろう。

彼女はこちらが性的な意味で食いついたと思ったのか、シャーペンを持った手でニヤける口元を隠す。

「やだなあ。私でやらしいこと考えたでしょ?」

「いや、女子力のなかった君が、ここ数ヶ月でよく成長できたと思つてね」

「なっ——私は麗しき乙女じゃない!どこからどう見ても!」

「まあ…君の水着姿は確かに、興味があるよ」

「ほら、やっぱり」

貧相な胸に合う水着が売ってた事實は、純粹に感心す――、

「痛ツツ!!」

「じゃあ誰かさんのお望み通り、勉強の続きしよつか」

人の手にシャーペンの先を突き刺した彼女は、それは綺麗に笑っていた。何故女は人の心を読むのが上手いのだろう。

「どうしたの、急に笑って？」

小首を傾げる鈴美に、何でもない、と返す。

彼女と過ごす些細な時間の中にも「幸福」があり、ぼくの心をとかす。今この一瞬が夢ではないのだと、手の痛みが主張していた。

???????

ザザアと響く、波の音。

一面に広がるのは青白い闇世の世界。その天上には無数の煌めきが点在し、それぞれが輝きを誇り合っている。

その中でも我が物顔で中央を陣取るのは十三夜月。左が二割ほど欠けている月だ。

あと二日もすれば満月を拝めたらろう。風景に心を奪われるほど、わたしの心はお安くないが。

「うわあ〜夜の海って綺麗だね〜」

だがあくまでわたしに限った話で、あと一時間もすれば明日になる時間に連れてきた鈴美は、夜景に感嘆している。

月明かりに照らされる彼女の横顔の方が、よっぽど目を奪われるだろうに。

「遊びに行かないとか言いながら、何だかんだで連れて来てくれるんだから」

「まあ、この時間帯は人がいないからね」

サマーシーズンとは言っても、夜の海を楽しむ人間は中々いない。陽が出ている時間はともかく、夜は不気味さが増すのだ。

それは奇妙な因縁をもたらす、この土地柄が原因なのかもしれない。

水難事故の数も全国平均の五倍以上だ。夜にハメを外して、そのまま沖へ攫われた連中もいたらしい。

そのため、夜に浜辺へ侵入するのは禁止されている。

つまりわたしたちがこの場にいるということは、設置された柵と看板を無視してきたということに他ならない。

鈴美は優等生のわたしがルールを破るとは思わず驚いていた。それを言ったら彼女も同じ括りだ。

「結構ドキドキしちゃうね、こういうのって」

「とんだデンジャラスガールだな」

「そういう吉影くんが乗ってたバイクは、盗んだものでしょ？」

「そんなわけないだろ。ネタは尾崎豊か」

「そうそう、パパが好きだね。カセットテープでよく聞いているの」

体感で二度目の人生ともなれば、既に経験したことを繰り返す状態になる。リアルコナンくんだぞ、彼はよく小一の苦行を耐えたと思う。

他の子供がひらがなを覚えている中で、わたしは一人字体を崩すのに苦労した。

集団の中で別のものと戦っていた自分に拍手を送りたい。本当に、色々大変だった。これまで「絶対に大人ってことバレルだろ？」と冷ややかな目で見てきたコナンくんには、今や敬意しかない。

ちなみにバイクについては暇な時間を使って取得した。

狭い行動範囲を広げるには、有用な手段であると判断したからだ。

「お昼はショッピングに付き合ってもらったし、一日中デートって楽しいね」

「…ん？今日が初めてだったか？今まで何度も…」

「初めてだよ。ずっと、ってのはね」

「……ああ、そうだった、そうだったね」

大学時代にしょっちゅう付き合わされていたが、アレは前の話だ。今じゃない。

時折誤作動を起こす脳は、きつと血中の酸素が足りていないのだ。それもこれも、肺が真面目に働かないせいである。恥を知れ。

「でもパパから奪つ……もらったお小遣い、ほぼ使っちゃったよ」

「フフ…ぼくが稼いだら、好きなもの何でも買ってあげるよ」

「わーい、貢がれる風俗嬢になった気分！」

「言葉に反して嬉しそうじゃないな」

「そう？だつてさ」

浜辺に隣り合わせで座っていた彼女の手が、わたしの手を握る。白く、たおやかな彼女。

胃が勝手にムカムカし出し、溜飲が上つてきた。しかし実際に胃酸は上がっていない。

無理やり唾を飲み込んで、激流のようなその感情を押し込む。

ガチツ、と鳴った音は彼女に聞こえこそすれ、こちらが俯き気味だったことから表情を見られることはなかった。

君の彼氏はどうしようもなく、イかれているヤツだ。

「私の欲しいヒトものは、もう既にあるもの」

わたしの肩に小さな顔を乗せて、鈴美は瞳を閉じた。垂れた横髪に、その表情はすぐに隠されてしまう。

先程まで荒ぶっていた鼓動が嘘のように緩やかになる。

「…夜は少し、寒いね」

「うん。でももう少し、ここにいよう？ 私の………誕生日になるまで」
「………ああ」

一度目は保健医の事件に巻き込まれ、波乱の時を過ごした。

しかし二度目の今は、わたしの前に嘘つきの女が現れることはなかった。それが何故かはわからない。

もしかしたら彼女はわたしと同じようにすべての記憶があり、意図的にこちらと接触を避けたのかもしれない。もしくは単純に、別の職に就いているだけなのかもしれない。

ただ恐らくは、わたしと鈴美の会おう時期が大幅にズレたように、前回と完全に同じではないのが「今回」なのだろう。

願わくば海で腐乱死体にならず、平穩に過ごせていることを望んでやろう。

だがそれでも、鈴美の誕生日に起こった佐藤の一件や、片桐安十郎の『S一家殺人事件』。あまつさえ自分の「死」を体感したこちらとしては、警戒せざるを得ない。

杉本鈴美が歳を重ねる日である明日、わたしたちの「運命」に禍をもたらず出来事が起こるかもしれない。

だからこそ、誕生日である前後を含めて彼女の側にいる。この後はホテルに泊まる予定だ。

もちろん手は出さない。流石に前回の分を踏まえた年齢差がある。子供のようにはいやいでいる彼女にも、恐らくその気はない。

「どこにも、行くなよ」

「ん？うん、一緒にいるよ？」

「……ずっと、ずっとだ」

「うん、いいよ。ずっとね」

「……ぜったいだぞ」

ゆったりと流れる彼女の心音が、耳に届く。それに合わせてさざなみが聞こえ。唼が重くなる。

そのまま睡魔に手を引かれ、意識が段々と落ちていく。

「起こしてあげるから、ちよつと寝てもいいよ」

「…ダメだ」

「じゃあ、眠くなくなるようにしてあげます」

直後、頬に柔らかいものが押しつけられた。

いつものあどけなさや、愛らしさが何処へやら。あの女のように、綺麗に笑う彼女がいた。

「ハア………煽つたのは君だからな。この後どうなっても知らないぞ」
「……うん」

横目で見た彼女の耳は、真っ赤になっていた。

それにこちらまで、何故か顔に熱が上る気がする。

彼女に誘われたら、わたしだって断れない。

偶にじやれつく姿は子猫のようで、しかしよく噛みつかれる。ワガママな一面のある彼女に、わたしは魅了されているのだ。

そんな彼女はぼくの、キラークイーンだ。

78話 吉良ちゃんと杉本くん。

世界が巻き戻った後、わたしに待っていたのは苦難の連続だった。

まず身体のコントロールが利かぬ乳児時代だ。それを乗り越えて保育園、幼稚園と過ごしてきたわたしに立ちほだかるさらなる難関が今、目の前にある。

両親にはわたしの両親がいる。

「来年で我が子も小学生か。感慨深いなあ…」

両親に連れられて訪れた場所は百貨店。そこでランドセルを買おうというのが、本日のミッションである。

使い勝手がよく、身体に合えば何でもいいので、さつさと済ませたい。済ませたい――が、なにぶん足取りが重い。

「これなんていいんじゃないかしら？」

手に取ったランドセルを、母は徐にわたしに背負わせる。フィット具合はいいが、首を横に振った。

「色がイヤだ」

「でも見た感じ、すごく似合ってるわよ?」

「イヤ」

頑なな我が子に、両親は顔を見合わせて困った表情をする。

今は前以上に我が子に甘くなった父がしゃがみ、こちらに視線を合わせた。

これまでは規定された黄色い帽子を被り、青い制服とチエツクの入ったこげ茶の短パンを着ていた。しかし小学生ともなればその規定がなく、普段着での登校となる。

特にランドセルは六年間ずっと使うもので、小学生の象徴たるものだ。

「赤は、イヤだ」

——そう。今世のわたしは、あろうことか性別が変わっていた。

周囲がほとんど変わらぬ中、明確にわたしだけ性別がオスからメスになっていたのだ。

あるべきはずのものがなかった衝撃と叫びたなら、凄まじいものだった。

幸いこれまでは女のように振るまわずとも、少し変わった子供として認識されるだけだった。

こちらとしても犬の糞クノ並みなおままごなどをせず、静かに本を読む生活が送れたのはよかつた。本は本でも絵本だった。

しかし小学生になれば、次第に子供にも「個性」が出てくる。同様に己の「性」に従つた男と女の精神的、また肉体的差異も如実になつてくる。

身体的変化は胃が痛いものがあるが、慣れるしかない。

ただ最も危惧すべきことは、身体の変化とともに己の精神も変わる場合だ。

面倒な「サガ」は変わらずだというのに、「性」についても悩まなければならぬのは本当に苦痛だ。

そもそもこの世界のわたしは「吉良吉影」ではあるが、吉良吉影ではない。性別が女のわたしに付けられた名前は、「吉影」ではなく、「吉能よしの」だ。

『名は体を表す』——と言うが、その理屈で言えば「吉能」であるわたしは、「吉影」ではないということ。

自分の存在が真つ向から否定されているような気分だ。

当初、女つ気のない娘を心配した母が、気を利かせて可愛らしい服やおもちゃを買つて来たこともあった。

だが殺人欲求が溜まっていたわたしがガチ切れして以来、両親は気を遣うようになった。

あちらの認識は性同一性障害と似たものだろう。

今の時代まだ一般的でない考えだが、父が色々調べ、かような認識へと至ったようである。

何故、己の性別が女になったのか。

これは彼女に会うことのできなかった「運命」のなす業カルマであり、わたしへの罰なのか。

「吉能ちゃん…」

渦巻く黒い感情に俯いていたわたしに、母が柔らかな声をかける。

前回は散々人を苦しめたというのに、「息子」が「娘」になった途端これだ。鼻で笑いたくなる。

いや、ある意味このことを見越して、運命はわたしを女にしたのかもしれない。

とんだお節介だ。まだ男であった方が上手く立ち回った。要らぬ「性」の悩みまで抱えさせて、何が目的なのだ。

この先女のように振る舞わなければ好奇の目に晒される。「性」への理解が深まって

いく未来ならともかく、この時代は女が男の、男が女の格好をしていれば、後ろ指を差される。そして異分子として扱われ、社会で生きづらくなるだろう。

この上なく「普通」に生きたいわたしの人生を、否定するかのようだ。

「……………」

不意に感じた、急速に爪が伸びる感覚。

皮肉だ。殺人欲求と手フェチシズムがわたしを、「吉良吉影」であることを表している。

「じゃあ緑にしないか？少し目立ってしまうと思うが」

父がそう口にする。赤や黒しかないガキどもの中で、緑は絶対に浮く。

いじめられることは別に痛くも痒くもないが、屈辱的なことに変わりはない。

母も娘がいじめられるのは避けたいようで、父に反発している。

父はそれに、なら——と、付け加えた。

「お前が決めなさい、自分がどうしたいか」

娘が年不相応の聡明さを持っているとわかっているからこそその、父の言葉だ。

時折オヤジが見せた、本当の、父親らしい顔。
わたしは少し考え、口を開く。

「茶色にする」

それに両親は、瞳を丸くした。

???????

それから数年後。吉良吉影、もとい吉良吉能は高校生になった。
何度も精神をえぐられつつ、何とか日常を過ごしてきた。

そんな彼女は「平穩」を第一目標に、自尊心を犠牲にして女のように振る舞った。

といってもそれは仕草や行動のみで、服装や言葉遣いは中性的にした。「ぼく」っ娘ここに爆誕である。

しかし「吉能」のように振る舞えど、彼女はやはり根底は「吉良吉影」だった。

中学時代は「文学少女」な見た目で、三つ編みの黒髪を二つ揺らした。

見た目のイメージは、某ネコ耳の委員長である。違う点は目元を隠す長い前髪だろう。

そうして地の顔を隠し、目立たぬように過ごしていた吉能。

胸については着痩せする体質なのか、それなりに大きかった。

男たちは目に見えてわかる水泳授業の水着より、プールサイドで毎回見学する彼女のジャージの奥底に、世界の真理を見出したのである。

男子生徒に告白されたことも何度かあったが、全て断った。想い人は今も変わらず、杉本鈴美一人である。

しかし当時彼女が通っていたのは、ぶどうヶ丘高校の中等部。やけにヤンキー率が高い学校だ。

無理に詰め寄ってきた輩には、物理的（キラークイーンを重ねて殴る）に黙らせた。

また男子トイレに連れ込みゲスの極みな顔をしていた奴らは、ボコボコにした後、さ

らに相応の報復をした。

文字どおり半殺しである。

退学はおろか、今後人生をまともに生きられないように徹底的にやり返した。

この時彼女は人生で一番生き生きしていたかもしれない。キラークイーンが思わずドン引きするくらいには。

かくあれ、吉照は平穩に過ごしている。

彼女に——吉良吉影に、乗り越えられぬ「試練」などないのだ。

現在は、それなりに現状を楽しんでいる。考えてみれば女であるということは、同性に近づきやすくなるということだ。

小学はさておき中・高となれば、彼女たちも愛らしくなってくる。美しい手を持っていても、男を苦手とする女はいるのだ。

それを踏まえ、吉能は好みの手を我が物にした。

蜜にたかる虫が如く、その妖しさを以って女子生徒に近づき、複数人と同時進行で関係を築く。その内容は「手」を愛でることから、肉体関係まで多岐に渡る。

女たちは同性同士の付き合いであるがゆえに、彼女に捨てられても、周囲に話すこと

ができない。

巧みに吉良は「依存」関係を結ばせたのだ。そうして食い潰された女生徒は幾人もいる。

「彼女に求められたい」「あの女に吉能を奪われたくない」

そんな心理が働く女たちの姿は、女を取り合う男よりもドロドロとしていた。吉能には彼女たちの手しか見えていないというのに、皮肉なことである。

この時点で吉良は、そのクズさからあるルートでは女に包丁で滅多刺しにされ、あるルートでは隣にいた彼女の首を関係のあった女が包丁で——といった道を辿る、伊藤藤誠のような目に遭う可能性が十分にあった。

閑話休題。

そんな乱れきった人間関係を送っていた吉能にも、春がきた。

杉本鈴美——彼と出会ったのは、図書室だった。

彼女が本を取っていた時、その後ろを通ろうとした男とぶつかった。

どうやら運命的な出会いを感じたのは、向こうも同じらしい。

しばしお互い、呆然と魅入った。

少年の、中性的な顔立ちに男ものの制服はかなり違和感があった。

それでも吉能よりすこし高い身長が、今世の「杉本鈴美」が男性であることを物語っていた。

正直顔だけ見れば、元の鈴美とほぼ変わらない。声色は元の声を低くしたようなイメージだ。

唯一大きく違うのはベリーショートな髪型で。スポーツ少年といった印象を受ける。

なんと今世の名前も「杉本鈴美」なのだから、吉能は驚かざるを得なかった。

聞けば検査で「女の子」と思われていた彼は、生まれたらあら驚き、男の子だったらしい。

父親が仕事の都合で出生届を出す余裕がなく、代わって男の父親（鈴美の祖父）が出生届を出す際、元々聞いていた娘の名前のままで出してしまった。

これは息子用の名前を伝え忘れた父親に非があり、名前と性別に違和感を持たぬまま

——孫の誕生で心が浮ついていた——、役所に出生届を出してしまった祖父にも落ち度があつた。

この一件以降、杉本家のパワーバランスは大きく変わる。現時点で父親はアーノルドにさえ尻に敷かれている。

当の鈴美は昔はかなり気にしていたが、今は良い名前だと感じている。

話を戻し、運命的な再会を果たした二人であるが、杉本鈴美には世界が巻き戻る前の記憶がなかつた。

しかして「杉本鈴美」であれど、彼の性別は「男」である。

精神は男である吉能からすれば同性。

容姿が女の時の面影を強く残しているとはいえ、骨格やアルトな声が男であることを証明している。

鈴美の言葉遣いや行動も、当たり前であるが男性的である。

何より男にしては細く白いものの、骨張った手が決定的に違った。

彼女が受け入れるにはやはり、難しいであろうか。

「鈴美、鈴美鈴美、鈴美——」

「お、落ち着いてよ吉能ちゃん」

否、そんな心配など必要なかった。

むしろ心配すべきは、吉良の精神の方だった。

長年にわたつて摩耗した心。ろくに癒す術がなかった彼女は、ようやく依存先を手に入れたのである。

彼女が心を本当の意味で潤せるのは、殺人と、女の美しい手と、杉本鈴美しかない。性別の壁がいったい何であろうか。肉体的に考えればオスとメス。人類に用意された二つの種類だ。

愛しているのだから、大小の問題など関係ないだろう。

「週末デートに連れて行ってくれよ、鈴美」

放課後の図書室。勉強を共にする中、鈴美を眺めていた吉能は不意に呟いた。

年上のメンヘラ気質ただよう女は、そのメガネの奥で十数年溶かし続けた狂気を瞳の奥で燦らせている。

願わくば一分一秒、一瞬でも鈴美との時を刻んでいたい。そうして、自身を蝕む全てのしがらみを頭の隅に押しやりたかった。

「で、でで、デート……?」

「そうだよ、デート。わたしをデートに連れて行き給えよ」

「僕が、吉能ちゃんを……?付き合ってもないのに?」

「何を言ってるんだ。付き合ってるじゃないか」

「………付き合ってるじゃないよ?」

これが運命の出会いを果たして、まだ二日目の会話だ。

吉能は鈴美と出会った時に、頭のネジを数本落としてしまったらしい。彼女はおつちよこちよいである。

彼女が少しヘンであるとは理解し始めている鈴美は、苦笑いする。

彼が「じゃあ付き合おうか」と眩き、軽く吉能の頭に触れた。黒髪は細く柔らかいが、元々ハネる髪質なのか、所々ぴよんぴよん飛び出ている。

「吉能ちゃんはちよつと、男の子っぽいよね」

「そんなわたしが嫌いだ………ってことかい?」

「ううん、違う。どんな吉能ちゃんでも僕は好きだよ」

「……それは、わたしが「吉良吉能」だからか? 「吉能」でなければ、わたしはいけないのか?」

「……?なんか、急に難しいこと言うんだね」

結局彼女は、吉良吉影は、この世界において自分の存在にずっと心の平穩を奪われて
いる。

男の精神に女の肉体は、大きな違和感にしかならない。どんなに受け入れようとして
も、心の底では否定が勝ってしまう。

果ては自分の存在意義がわからなくなってしまった状態で吉良は今、日々を過ごして
いる。

「僕は吉能ちゃんが好き。あなたが、好き」

「……うん」

「だーいすきです」

「……ああ」

「だから、笑ってる吉能ちゃんが、僕は見たい」

どう足掻いたところで器である肉体に、精神は左右される。静かに顔を抑えるようにして泣き出した彼女もまた、魂は女へと引つ張られている。これはもはや強制的な影響力である。

それでも男の自我を保っているのは、彼女の魂がタフだからだ。壊れ切つても、ギリギリのところまで耐える。

「これが「運命」なら、わたしは受け入れるよ。君が、一緒にいてくれるのなら」

吉能はそう言い、笑った。

そのぎこちない表情を見た鈴美は、テーブル越しの彼女をぎゅうと、抱きしめたのである。

絶対に自分が彼女を、「幸福」にすると誓って。

79話 山岸由花子は広瀬康一を愛している

その日は、はるか遠くまで青空の広がる快晴であつた。

「ハア……」

しかしそんな天気の良い一日の昼下がりに、カフェ・ドウ・マゴにあつたのは、憂いた表情を浮かべる一人の女性の姿。

テラス席で緩慢とした動きで紅茶を口に運ぶ様に、通りがかった男は思わず振り向く。

美しい顔立ちは元々吊り眉ということもあり、冷たい印象を抱かせる。例えるなら深冷の美少女であろうか。

「康一くん……」

彼女——山岸由花子は現在、彼氏の広瀬康一のこと物思いに耽っていた。

彼と付き合い始めてから、かれこれ数年。由花子の愛の指導もあり、お互い同じ大学に通い来年成人式を迎える彼らは、相変わらずラブラブである。

社会人になったら結婚するという考えは、二人の総意だ。子供に関しては結婚しても数年は儲けられないだろう。長い目線で考えると、子を育てるにもお金がかかる。大学まで、と考えれば尚のこと。

ゆえに専業主婦ではなく由花子も会社に勤め、頃合いを見て三人、四人の幸せを育てていくだろう。

理想は女の子一人に、男の子一人だ。いやでも、康くんが望むならもつと——、
な心境の彼女だ。

「ハア……」

人生の理想図（老後まで事細かに彼女の中では作られている）ができあがっていると、何故由花子のため息を吐いているのだろう。

それは単に、彼氏との距離感にある。

高校生ならばまだしも大学生のカップルともなれば、最後まで致すのが普通であろう。

由花子も康一とキスはしたし、手も繋いだ。「あーん」をやったりいろんな場所へデートに行ったり、互いに時間を多く共有し、「幸福」の時を過ごしている。

しかして未だ、「行為」にまで至ったことはない。
理由としては、二人で決めた「結婚してから」という約束があるからだ。

康一の部屋に彼女が初めて訪れた時、そういう雰囲気になり、彼女をベッドに押し倒した康一が、緊張してしまった由花子を見て、慌ててその上から退いた。

そしてお互いのために約束を決めたのだ。ちなみにその時康一の家族は出かけていた。

彼女はけして、今の現状に憤っているわけではない。むしろ毎日のように彼氏と共に過ごす日々は、幸せの連続である。

ただやはり、付き合い程度の女たちから彼氏との情事に関するあれやそれやを聞くと、焦りのようなものが生まれる。

もちろん由花子と康一の繋がり、そこらの女どもに負けるわけがない。

だが目に見える繋がり、彼女はどうしても欲しくなった。

彼氏が出した「約束」であるので、自分から「しましよう？」とは言えない。康一の意志を曲げさせるのは、彼女も本意ではない。

「……あらっ？」

そんな時偶然通りかかったのは、ヘアバンドを付けた黒髪のボブヘアの女性。

年齢は二十代後半か、三十代前半そこらに見える女は、ヒールの音を鳴らし由花子の元まで近づく。

ピンクの長袖シャツに白いパンツルックスは、スタイルの良さを物語っていた。

由花子とは違い女性から醸されるオーラは、“オトナの女”——といったところか。

手に持たれた複数の紙バッグと本日が休日であることから、導き出される真実は、いっつも一つ。

「えっと、仗助くんのお母様……ですよ。お買い物帰りですか？」

「あら、覚えててくれたの？そうそう、休日だからちよつと奮発して買っちゃったのよ。あなたは確か仗助の高校の頃の友達、康一くんの隣にいた女の子よね」

「はい。広瀬康一くんとお付き合いをさせていただいております、山岸由花子と申しませう」

「へえー、礼儀正しい子ね」

プツン、もしくはヤンデレ要素を持つ由花子は、意外にも常識はしっかりしている。

康一の友だちその一……程度の認識しかない仗助の母親にも、しっかりと挨拶を交わ

す。

いや、むしろ社会の常識に関しては、康一よりも上である。

「由花子ちゃんは康一くんのこと待ってたの？」

「いえ、今日は一人で……」

「ふーん……あつ、じゃあ私も同席しちゃおうかしら。お代は持つから……ちよつとおー
店員さーん！」

「えっ、あの……」

「いいのよいいのよ！偶には女二人で女子トークでもしましょう」

由花子は押し切られ、朋子とアフタヌーンティー（二杯目）と洒落込むことになった。
仗助の母親とは話したことがなかったが、意外にも接しやすく、普段彼女が感じる他人への気苦労のようなものがない。

間違いなくそれは朋子の人柄の良さと、職が「先生」であることが大きな理由だろう。

話の内容は愚痴ばかりだったが。

「本当さー、仗助ったら心配だから定期的に電話しろ——って言ってるのに、いつつも忘

れた頃に連絡してくるのよ！」

「仗助くんは今、東京の大学に通っているんですよ」

「そう、一人暮らしだね。もう少し近場に警察官を目指せる学校はあったと思うんだけど、アイツつたら頑ななんだから」

「はは……」

「まあ、本人が自分の意志で決めただから、全力で応援してやるわよ」

そう言い笑った朋子の目は、「母」の目であった。

由花子はい、その表情に見入ってしまう。

東方家の家庭環境が複雑なのは、康一から少しだけ聞いたことがあるので知っている。

確か以前、街に訪れていたジョセフ・ジョースターと大学時代の東方明子が懇ろな仲間となり、仗助を授かったとか。

朋子は今でも、ジョセフ・ジョースターのことを愛しているのだろう。

その気持ちは由花子にもよくわかる。万が一彼氏と別れることになっても、彼女は広瀬康一を愛し続ける。

「ねえ、由花子ちゃん」

「…はい？」

朋子は手のひらを口元に当て、ナイシヨ話をするように小声で話す。

「何か悩みがあるなら、話を聞くわよ？」

「…！」

「伊達に人生経験が倍なわけじゃあないから。多分悩みは彼氏…：…康くんのことかしら？」

「……！！」

凶星だ。一瞬話すべきか迷った由花子は、思い切つて話すことにした。

「実は——」

そうして由花子は彼氏との悩みを打ち明けた。

「あー、なるほどねえ。仗助アイツも純情ムーブピユアかましてたけど、あなたたちも清い関係が続いてるってわけ」

「…はい」

「由花子ちゃんが望むなら、康一くんも快くOKしてくれると思うわよ」

「…で、でも、康一くんの意志を私のせいで曲げたくないし…」

「なら、どうする?」

「……うう」

康一と、イチヤイチャしたい。ものすごくイチヤイチャしたい。

きつとそれができた時、彼女は人生で一番幸せになるだろう。

そして、その幸福をさらに塗り替える出来事が二人の人生に待ち受けているのだとしたら、武者震いがする。

でも——でも?..

「由花子ちゃんは、怖いのね」

「こわ…い?」

「ええ、怖いだよ」

性行為は愛情表現の一つだ。

だが愛の表現方法は、別にそれだけではない。

何のために「愛」を囁く口が、言葉があるのか。

何のために相手を抱きしめる腕があるのか。

そして何のために、相手の喜怒哀楽を捉える瞳のカメラがあるのか。

由花子は怖いのだ。愛情表現たる性行為を遠ざけた康一が、もしかしたら自分のことをその分だけ遠ざけているかもしれないと、考えてしまうことが。

康一は平凡だ——否、平凡であつた。

スタンドを手に入れ、この杜王町の中でも最も大きな成長を見せた少年。

その姿にあの岸辺露伴が一番目を留め、最強のスタンド使いがその成長ぶりに感嘆した。そしてついには杜王町の平穏を守る一翼を担った。

既にカノジョの座は由花子があるので狙う輩はいないが、もし彼女が康一と付き合っていないかったら、絶対に他の女がアタックしていた。

それほど康一は凛々しく、カッコいい男になった。

「セックスしないからって、「愛」がない——なんて、思つてないわよね？ 大体セックス

しないと愛情がない、なんて考えがおかしいのよ。今じゃ昔の「結婚してから行為」って考えが古臭くて笑われるかもしれないけど、私はその考え、とてもステキだと思うわよ」

「…本当ですか？」

「ええ。それにイイ男つてのはね、女のことを一番に思ってくれるの」

ジョセフみたいだね——と、艶っぽい笑みを溢した朋子。

脳内お花畑に移行しようとしたアラフオー女性を、由花子は慌てて引き止める。

これは絶対に『ジョセフと私の出会いのエピソード♡』が始まる流れだ。勘でわかる。

「つ、つまり！康くんは、私のことを思つて『行為』をしない選択を選んだ……つていうことですか？」

「多分初めてイイ雰囲気になった時、あなたが怖がつたんじやない？それが理由だと思わよ」

「あ……」

確かに由花子は康一に押し倒された時、期待と興奮と、恥ずかしさを感じた。その反面、自分がこれから体験する未知に対して恐怖を抱いた。

それを感じ取り康一がやめたのなら——いや、やめたのだ。だったら、そうなのだ

したら——。

「ういちつ、くん……!!」

真つ赤にした顔を手で覆い、いつもの淑やかな皮を脱ぎ捨てて足をバタつかせる由花子。

彼女の彼氏はとんでもないイケメンだった。既に由花子はその事実を、かつて彼女自身が起こした監禁事件で知っていたはずなのに。

乙女全開な女に、朋子は優しく微笑む。

一人の迷える女性を救った彼女はやはり、東方良平の娘であり、東方仗助の母であり、あのジョセフ・ジョースターが惚れてしまった女である。

その後も女子トークは続き、予想以上に盛り上がった。

別れ際、スツキリとした表情の由花子に、朋子は一つ置き土産を残すことにした。

「そう言えばこの町の霊園の方にね、神社があるらしいの。知ってる?」

「…ああ! 知ってますよ」

「最近学校の女の子たちが…何か、恋愛成就する?——つてので、盛り上がってるの。お

守りとか買つて来てね。元々あそこは、恋愛運アップのご利益があるらしいわ。二人なら全く問題ないと思うけど、もし興味があるなら行ってみたらどう？」

「わかりました、時間がある時に行ってみます」

「じゃあ今日はありがとね、由花子ちゃん」

「はいっ、朋子さん」

今の自信が戻った由花子には、神社の御利益は不要だ。

ただ純粋に興味を抱いた彼女は、その神社へ訪れることにした。内容が「恋愛運」に関する場所なので、康一を誘うのはやめ、一人で。

そして由花子は、目にしてしまう。

夕方の神社。人の少ない時間帯の境内。

そして紅く染まる世界と鬱蒼と生い茂る森をバックに、社の上で寝転がっている存在。
周囲の人間がその存在に気づかぬ中、彼女は認識してしまった。

人々を観察していたらしいソイツは、由花子が凝視していることに気付くと、地面に降り立ち彼女に近づいた。一定の距離を置いたまま顎に手を当て、興味深そうな視線を送る。

吸い込まれるような黒い瞳に、思わず彼女の背筋が寒くなった。

「……あなた、何なの」

黒い髪が風に吹かれながら、微かにうねりを上げる。

向こうはその様子にさえ好奇心が湧くようで、マジマジと見ていた。

『へえー、面白い。まるで生きてるみたいな髪の毛だな』

宙に浮くソイツは、その言葉とは裏腹に、明らかに死んでいる存在だった。

80話 流浪に幽霊

わたしの名前は吉良吉影。仕事をしながらフラフラとこの世を彷徨っている。

わたしは俗に言う「幽霊」という存在である。

生憎それ以上自分の生前について覚えていないので、自己紹介はここまでにさせてもらう。

ただ名前以外の記憶はないものの、一般常識は不思議なことに持っている。

何故自分が死んだのかはわからない。気付けば道路の中央線に足を揃えるようにして突っ立っていて、ぼんやりと空を眺めていた。

生と死がある人間とは違い、「魂」だけのこの体は厄介だ。

己が着ていた三高帽やネクタイ（シャツは着ていない）、胸元のはだけた深緑のスーツはわたしの魂のイメージが反映されているのだろう。しかし自分がこのファッションが好きかどうかと聞かれれば、「わからない」としか言いようがない。

本当に頭からわたしの趣味嗜好、記憶などの情報がすっぽりと抜けている。

しかしそんなわたしにも、己の指針とする生き方——否、死に方がある。

わたしは、心の「平穩」を求めている。

「普通」の人間なら、当たり前前に享受できる平穩たる生活をだ。

幽霊つてのは人間が思っているように、自由にあちこち存在しているわけじゃない。大体は死んだらそのまま成仏する。この世に残るヤツは何か現世に未練を残しているヤツか、成仏したくても生きている奴らの「執念」に引つ張られて、上へ上れないパターンが多い。

ならば何故わたしがあの世に逝かないのか疑問に思うだろう。実際これは、以前フラリと訪れた神社の尼僧に聞かれている。

理由は単純に、あの世が本当にあるのか懐疑的であるから……と言いたいが、本当の理由は別にある。

——わたしは、何かを探しているのだ。

ソレがこの世に本当にあるのかはわからないし、どこにあるのかもわからない。むしろ何を探しているのかもわからない。

曖昧な考えはしかし、わたしの平穩を求めぬ信念と同レベルで存在している。

あの女坊主はこの話を聞くと、「そうですね」と、難しそうな表情を浮かべた。

わたしの話が奴の道徳心に触れたらしいが、それは別にどうでもよい。

探しものが何か分ならずとも、今のわたしは特に困っていないのだから。ゆえに、協力申し出た女の話を通した。

自分の悩みや試練は、己で乗り越えたい気持ちがある。他人に頼つてしまえばラクではあるが、それでは面白くない。

何より普通の人間と違い死に続けているわたしには、膨大な時間がある。そんなヒマな時間を潰すには、何か目標がなければやっていけない。

わたしは「探しもの」と、平穩に死にながら己が存在する「価値」を見出すため、仕事をし、現在いまを過まごしている。

言つておくと、死んでいるのも社会を生きる人間と同じでかなり大変だ。

理由としては、幽霊に存在する多くの制約が挙げられる。

例えば人間が住まう家の中には、その家主の「魂」の許可が必須である。また生きている人間や動物にこちらから触れるのはいいが、向こうが触れてくると、接触し

た部分からバラバラになる。

一応くつ付ければすぐに戻るので、問題はない。

だがわたしは普通の幽霊とは違うのか、誤って生きている連中に触れられても、身体がバラバラになることはない。ない……が、極端に精神が疲れる。

もし人通りの多い場所にいた場合、地獄の目に遭う。

あと畜生の中でも、特に犬は人間より視える奴らが多い。最悪無理やり体の一部を引きちぎられて持っていかれる。

また幽霊がバラバラになる理由だが、恐らく死者の「魂」が、生者の「魂」に耐えられないからだと推測している。

当たり前だが、生きている連中は死んでいる我々より「魂」のパワーが強い。

その上で、なぜ幽霊のわたしが他の幽霊のように「制約」が適用されないかについてだが、原因は多分コイツにある。

『ニャー』

自分の背後を見つめると、ソイツは現れた。

例えるなら、二足歩行を習得した人間のような猫だ。

ゴムの質感を想起させるピンクの肌が、不気味さを助長させる。

たまに玉砕覚悟で人間の後ろをストーカーするアホな幽霊はいる。しかし幽霊をストーカーするなど聞いたことがない。

そもそもコイツが幽霊ではないことは感覚でわかる。

しかもコイツの存在は、幽霊が視えるあの尼僧にも認識されなかった。

人間でも幽霊でもない存在。まさか神じゃあないだろ。そんな目に見えぬ存在などいるわけがない（盛大なブーメラン）。

まあそうして、わたしは幽霊の日常を送っている。

しかし幽霊生活にも金はある。そんな時は「仕事」で稼いだ金をあらかじめ壁の隙間などに隠し、必要になったら使う。

無賃乗車はこの身体なら簡単だが、やはりルールを守ることは重要だ。

ちなみに仕事は、「何でも屋」をしている。

見える奴らで、尚且つこちらと話が通じる連中の依頼を聞き、対価として金を受け取

る。

商売の対象は子供が多い。幼い奴らの方が幽霊が視える人間が多いからだ。それに大人だと、金を払わずに逃げる場合が多い。

はじめはそのケースが多かったので、上手いやり方を覚えた。

狙うのは主に神社や寺など。こちらが意識すれば、その声を人間に聞かせることもできる。そうやって神様になりすまし、悩みを聞くのだ。

肝心なのは、それとなく子供に『願いを叶える神様がいるらしい』と噂話を流すこと。そこから軽い依頼から引き受けていく。

子供でよく多い「テストの点数が良くなりたい」という願いには、テスト前に夜の学校（公共機関や施設には不特定多数の人間が出入りするので、「魂」の許可が生じない場合が多い）に忍び込み、答えを移す。

それを『オレオレ、神様（意識）』で聞き出しておいた子供の情報と重ねて、該当する席に忍び込ませておくのだ。この時神の仕業だと信じやすくするように、達筆で書くといい。最後に「神より」と書くのは少しマヌケな気がするが、この方が子供は信じる。

同様にこれまた多い恋愛は、好きになつてもらいたい相手が依頼人に意識が向くよう計画を立てる。子供ならば感情を操作するのは容易い。

最初のうちは金銭のリターンは諦める。

一応、「賽銭」願いを聞く——という流れにしているが、子供ではたかが知れている。

しかして噂話がはずれ子供づてに高校生や大人に伝わると、金額が跳ね上がる。

金を多く積む奴らの願いは「アイツと別れたい」やら、「復讐したい」やら、暗いものが多い。そして本気の願いであるからこそ、金を先に賽銭箱に入れる。

基本的にそういった人間は夜に訪れる。ほら、丑三つ時に五寸釘と藁人形で人を呪うのと同じ心理だ。賽銭ドロボーについても心配ない。大金を積まれても、その一部しか持つていけないからな。

依頼に関しては、殺人以外であれば引き受ける。

不意に思い出すのは、あの女坊主の言葉だ。

『死者が死者を生み出すなど、神が許しません』

幽霊に成り立てで、わたしがこの世での過ごし方を考えていた時。

金を稼ぐ方法を語った後で、殺人を行う可能性を話した。

あの女坊主の言葉は、それはそれは胸に響いた。自国の選手が相手と接戦を繰り広げ、ようやく金メダルを勝ち取る光景よりも感動を、感銘をわたしに与えたのである。

無論ウソだが。感動も感銘も受けるわけがない。人の不条理に憤り、生きる人間の魂を救うには時に人殺しも必要であると考え始めていた女が語るにしては、矛盾にもほどがある。

しかし死者が死者を作るなんて、そんなバカバカしい話があつてたまるかど、わたしが思ったことも事実だ。

人間が法で嚴重に罰する「殺人」を、人間ではない、幽霊のわたしが行う。その姿は、滑稽に他ならない。

——ころしちやだめ。おねがい……人を、ころさないで

脳内に浮かぶその言葉。誰が呟いたのかは分からない。恐らくはその言葉は、わたしに残るかつての記憶の残骸なのかもしれない。

人を殺すのは別にいい。しかしそう思った時に、この言葉が浮かぶ。だからこそ、わたしは人を殺さないのだ。

以前図書館に侵入し、自分の名前を新聞で調べていた時期もあったが、関連するものはなかった。

パソコンで調べても『吉良吉影』は該当しなかったのだから、情報に頼るのは諦めた方がいい。

ただでさえ、人の多い図書館で行動するのは大変なのだ。新聞一つ見るだけで、フルマラソンぐらいの労力を使う。

結局色々試し、自分の足を使うことが最適だと結論づけた。ゆえにわたしは全国各地をフラフラしている。

いずれ自分の探すものが、見つかるかもしれないと信じて。

記憶はないがきつと探しものを見れば、わたしは絶対に気付くだろう。

何せ魂に刻まれた、「吉良吉影」の情報なのだから。

そして今現在わたしがいるのは、M県S市。

自分が気づいた時にいた街である。山もあるし海もある、実にいい街だ。

当初街を適当にぶらついたが、自分の手がかりになりそうなものはなかった。

むしろこの街全体から感じられる何か引力のようなものが恐ろしく、早々に別の街へと逃げた。

それでもいつの間にかこの街に戻っているのだから、奇妙だ。

願わくば金が貯まり自分の家が持てたその時は、眺めのいい場所に住みたい。

早く空を眺めるこの虚しさから卒業したいものだ。

想像してみよう。有名な作曲家の音楽を聴きながら、優雅に読書する。読むのは宮沢賢治でも、江戸川乱歩でもいい。

もちろん「幽霊が出ます」なんて騒がれたらたまつたものじゃないから、そこは苦勞がある。自分で乗り越えるのが不可能なこともあるため、その時は幽霊が視える人間の手助けが必要だ。尼僧にでも頼んでみるか。

欲しいのはひとまず、わたしだけの「結界」がある場所だ。

他の幽霊のように、ぶつかるとを恐れてビクビク怯える生活はまっぴらゴメンである。

それで、もし「探しもの」を見つけたら、ソレと共に暮らすのもいいのかもしれない。このわたしが探し求めてやまないのだ、相当ステキなものなんだろう。

思考に耽りながら拠点にしている神社の社の上で寝転がっていれば、女が来た。ビジンなのは認めるが、少々目付きがきつい。

『……おっ？』

こちらを見て、女の表情が驚いたものに変わった。

わたしが視えているようだ。興味本位で近づくと、露骨に警戒された。

『そう怖がるなよ。オレは確かに幽霊だが、アンタに害をなそうって気はない。望むならここから一步だつて動かないさ』

幽霊生活で重要なのはイメージだ。さらに想像するだけじゃなく、自分の魂も操作しなければならぬ。

それができるようになれば、わざわざ階段を上らずとも体を浮かして屋上に行くことができる。

しかし東京タワーでそれをしると言ったら無理だし、精々十数階を上げるのが限度だ。それ以上は魂に負担がかかる。

また立ち寄った古本屋で読んだ悟空のように、瞬間移動をすることはできないし、人の域を超えた速さで動くこともできない。

幽霊の特権はすり抜けたら、睡眠やメシ要らずだったり、先ほど述べたくらいしかポイントがない気がする。

「……一歩でも近付いたら、その肢体をバラバラに刻んでやるから」

『ああ、約束する。その不思議な髪じゃ本当にできちまいそうだしな』

よくよく見ればこの女、他の人間よりも魂のエネルギーが強い。偶に似たような奴を見かけたことがあるが、この街は異様に多過ぎる。土地自体が呪われてるのか？

して、女はどうやらわたしが流した噂話……ではなく、「恋愛成就」の場所だと聞いて来たらしい。

やたらと今回は恋愛話が多いと思ったが、噂話が人の語りによってかなり変えられていたみたいだ。

隠す必要はないと判断し、願いを叶えていたのが自分であることを告げると、女の眉がさらに吊り上がった。

「願い……ね。見たところアンタ、犬って見た目じゃないし、色も黒くないけど……」

『犬ウ？……何で犬の話になるんだ？人を狒犬と勘違いしてるなら、全然違うからな』

「じゃあ何なのよ」

『だから、幽霊だ、って言うてるだろ。不思議なパワーで願いを叶えてるわけじゃない。』

物理的にオレが動いて解決してるんだ』

金を稼いでいる理由も聞かれたので、「自分の家を買うためだ」と答えれば、深いため息を吐かれた。

今猛烈に殺意が湧いている。

「幽霊が家を買うって、何よそのフィクションみたいな話」

『別にオレが何をしようが構わないだろ。幽霊だとしても』

「でもそれで人に迷惑をかけているなら、康一くんがきつと許さないわ」

『そのコウイチくんって、君の彼氏か？何かを悩んでいるようには見えないが…』

「悩みはないわよ、もうね。それで、本当に悪さはしてないんでしょうね？」

『ああ、してないよ。神に誓ってもいいさ』

神社の前で平然と嘘を吐くわたしは、天国に逝かせてもらえずあの世に送られちまいそうだと。

再三言うが、あの世なんてないだろうが。

「……まあいいわ、今日は一先ず帰る。そろそろ暗くなりそうだし」

『その方がいい。あんたみたいな美人を狙う輩はきつと多いだろうからな』

「ねらう？ 愚問ね」

葉を散らして、ゴウト、一際大きな風が吹く。人がいつの間にかいなくなった境内には、沈みかけの紅い世界ばかりが広がる。

その中心で生き物のように蠢く女の黒髪は、心臓を凍らすような恐ろしさがある。振り向きざまの女の冷えた笑顔が、それを助長していた。

思わず一歩後ずさった瞬間、女の瞳が丸くなる。視界の先はわたしの背後のようであつられて振り向いたが何もいない。

「さつき、そこに頭蓋骨?……が、浮かんだ気がしたんだけど……」
『……おいおい、まさか死神なんて言わないよな? やめてくれよ』

静まり返った場。それから硬直が解けた女は、少し駆け足気味で境内を後にした。

『ニャー』

女をビビらせた犯人は完全に人がいなくなつてから現れ、呑気に毛繕いをし出す。

手の甲をヤツが舐めると、自分も同じ場所に舐められた感覚がする。その不快さにあちらを睨みつけた。

『ニャー』

心なしか寂しげな声を出し、ソイツは消えた。

わたしの背後を陣取るヤツが何者なのか、わからないままだ。まあこちらに危害を加えず、むしろ守るように動くから、様子見のままにしている。

『……取り敢えず、多少被害が出てるってのがバレる前にこの街を去るか』

いずれはまたこの街に引き寄せられるのだろうが、今を乗り越えられれば現状はいい。

わたしは自分の「平穩」を求めて、そして己の探しものを見つけるために、これからも全国各地を放浪するだろう。

そうすればきっと、己の「幸福」を得られるはずだと信じて。

今日もわたしは、死に続ける。

81話 わるいこ

四月某日。日和もよく、満開の桜が花びらを落としている。

新学期、あるいは新生活が始まる季節だ。人々の心に新しい風が吹く。

そんなとある日の午後、カフェ・ドゥ・マゴのテラス席に二人の男女の姿があった。客もまばらな中、男は時折カップを口につけながら空を眺める。その一方で、女は茶封筒から出した紙の束に目を通していた。

「先生、大丈夫ですか？ なんだか心ここに在らずな感じですけど」

眼鏡の奥に秘された男の瞳は、空に浮かぶ青空を掴んでやまないようだ。

「……空が青いと思いませんか。知人に瞳の青い少年がいるから、少し思い出していました」

「青って……外国の方ですか？」

「いえ、母親は日本人です。父親の方はわからないですが」

男の知人である少年は、青い瞳を持っている。かく言う彼も紫の瞳を持っていた。

目は人の感情をよく表す。男は白衣を着た悪魔リリスにそう教えられた。

「時に泉編集。たまにぼくは思うんですが、ヒトが目を閉じている時っていつも真つ暗ですよ」

「そんなの当たり前のことじゃないですか」

「ええ、当たり前のことですね。目を閉じれば視界にあるのは闇。でも何も見えていないように、実際は瞼の裏を見ているじゃないですか」

「え？…ああ、確かに」

「実際に見ているはずのものが、見えていない。これは人間にも当てはまると、男は言う。」

「まあ、人は見た目で判断しがちですもの。仕方ないですよ」

「逆に見えていながら、見えていないフリをするのが得意でもありますかね」

仮に他人が困っているとして、手を差し伸べられる人間はどれだけいるだろうか。

それにこれは国民性によっても大きく変わる。

「…で、先生は結局何がおっしゃりたいんですか？」

「簡単なことですよ。ぼくの編集になったばかりのあなたに、気をつけていただきたいことです」

要は、見極める『目』を持って——とのこと。

作家のプライベートに踏み込みすぎないように、という忠告だ。

「任せてくださいよ先生！私って口固いですしい」

「不安です」

「大船に乗ったつもりでドンと来てくださいい！」

「不安しかない」

まだわずかな付き合いながら、「泉飛鳥」という人間のヌケ具合を見ている男にとって、圧倒的に信頼ができない。

「適当に流してもかまいませんが、ぼくの親切心の言葉ですから」

「わかりました、先生」

此度の編集の手が美しいからこそ、出た男の発言だ。まだ編集との距離感を模索している段階でもある。

男の秘密を考えても、慎重になりすぎるくらいがちょうど良い。

しかしして彼女に向けたアドバイスには、少し足りない説明もある。

それは『見えたもの』が、人が理解できないものであった場合である。

——忘れてはならない。彼の、吉良吉影の本質を。

それは彼に歩み寄り、その面倒なサガを理解しようとした杉本鈴美でさえ、「理解した」という表現に至ることがなかったのだから。

???????

最近爪の伸びがまた早くなっている。

まだ今年に入って三ヶ月程だというのに、10cm以上は伸びていた。

あまりピンと来ないかもしれないが、成人の大人であれば一日で約0.08〜0.12mm伸びる。間を取り0.1mmと考えると、一ヶ月で約3mm、一年では約36cm伸びることになる。

年にもよるが、爪の伸びの速さは年々早くなっている。わたしの場合、爪の伸び＝殺人欲求の表れだ。美しい手の女を殺せば収まるとは思いますが、生憎人を殺す予定は今後もない。

そろそろ女を引っ掛けようかと思ひ、休日午後、S市の繁華街に車を走らせた。

メガネはそのままだに髪は上げ、白シャツに黒のスニーカーパンツ、また少し肌寒いので下が長めの薄手のカーディガンを羽織っている。靴は黒のスニーカーだ。

「…ん？」

信号で止まっていた時、数十メートル先で男に絡まれている少女の後ろ姿を見つけた。

少し汚れたジャージを見るに、ぶどうヶ丘高校の生徒か。部活動の帰りらしい少女は倒れた自転車もそのままに、地面に座り込んでいる。

カップル：…というわけではないだろう。男は紫のシャツにボンタンという不良の出立ちであるし、女生徒に詰め寄っている様子だ。状況がイマイチ掴めないな。

「まあ、わたしには関係ないが」

少女を助けたところで何の得にもならない。

信号が変わりアクセルを踏んで二人の横を通り過ぎた時、急に車が止まった。

「っ！」

体が勢いよく飛び出し、シートベルトが胸元に食い込んだ。直後後続車からクラクションを鳴らされ、さらに通りすがりに「危ねえだろクソ野郎！」と暴言まで吐かれた。殺意が湧いたが、それよりも急に車が止まったこの状況をどうにかしなければならぬ。

『ニャー』

「……………はあ」

どうやら犯人である我が相棒は、例の少女を助けたいらしい。仕方なく車を傍に止め、ハザードを出してから件の場所に向かう。

『ニャー』

人の背後から、いつものように手を絡ますキラークイーン。普段表情を変えない我が相棒は、今日は何故か男の方を見て、目を細くしていた。

それに少し肝が冷えたのは、気のせいだったのかもしれない。

???????

何故こうなってしまったのだろう。

一人の女生徒は、真っ赤になった袋を見ながら顔を青ざめさせた。

午前中の部活が終わり、友人とカフェでランチを過ごした後の帰宅途中のこと。彼女はほんの少しよそ見をした時に、いきなり横から飛び出してきた袋を轢いてしまった。

避けようとした勢いは止まらず、そのまま体は地面へ投げ出された。幸い頭へのケガはなかったが、体の至るところがズキズキと痛む。

そして転倒した原因に視線を向けた時、血の気が引いた。

「ミ、や……ア」

前輪に潰された袋から血が染み出している。その中身が鳴き声から、猫であることがわかった。それもサイズからして子猫だ。

おそらく袋に入れられ、道端に捨てられていたのだろう。

「あれれ、キミ大丈夫ですかあ？」

その時声をかけてきたのは、彼女の高校の卒業生を名乗る「小林玉美」という男だった。

玉美は動揺する彼女のケガを気にかけて、袋の中身を確認した。袋に入っていたのはやはり子猫である。

女生徒が袋から覗いた血まみれの小さな前足を見てしまったその時、彼女の胸に錠が出現した。

しかしそれは彼女には見えず、玉美には見えていた。

「ああ、なんてかわいそうに…。捨てられた挙句に、こんな形で殺されるだなんて…!!」

「わ、私はそんなつもりじゃ……」

「でも、アナタが轢いたのは事実じゃあないですか」

「う、うう……」

責めるような言葉を玉美が投げかけるたびに、どんどん女生徒の錠が肥大化していく。

それを見た男は内心口角を上げた。

何を隠そう、この状況を作り出したのがこの男である。

小林玉美は春に虹村形兆の矢で射られて以来、不思議な力を手に入れた。本人が『ザ・ロツク』と呼ぶこの能力は、普通の人間には見えない。

ザ・ロツクは人が抱く、「罪悪感」に応じて、錠をかけた人間の心に「重圧」を与える。罪悪感が大きければ大きいほど、彼に優位に働くのだ。

方法はまず、山から捨てられた子猫や子犬を拾ってくる。

小さな命を利用することに少しの罪悪感があったが、所詮は消えかけの命だ。

それに本物の動物を仕組んだ方が、死体を見た人間の罪悪感が大きくなり、より稼ぐことができる。色々と思考錯誤をする中で、彼はこの方法に行き着いた。

そうして袋に詰めて、学生の通りが多い道端に置いておく。

それから遺体を埋める代わりに、相手から金を巻き上げる。

普通ならば偶然居合わせた人間に金を渡すわけがない。しかしザ・ロツク的能力がかけられた人間は、「罪悪感」のせいで正常な判断ができなくなる。

だからこそ、玉美に金を渡してしまうのだ。

そしてさらに轢き殺してしまったことをネタにして、「学校にバラされたくなければ——」とゆする。

初めは数万で、要求する額は回を追うごとに大きくする。大金を持たぬ学生は家の金を盗むことで、さらに「罪悪感」が大きくなっていく。

本当に良い能力を手に入れたものだと、玉美は思っていた。被害に遭った者からすれば、たまった話ではないが。

「どうし、よう……」

そんな哀れな被害者となった女生徒は、子猫を埋める代わりに金を要求されてしまった。

カフェで崩した金が、男の手に渡る。それだけでなく、この一件を学校を引き合いに出し、さらに金を要求される。

男の話す内容がおかしい、というのは分かっている。

しかし息さえままならない「重圧」が、この苦しさを抜け出すためには、この男に金を払う以外方法はない——と、彼女に訴えている。

「バイトとかしてないわけ？」

「し、してます……」

「働いたことへの「誠意」を見せるなら、分かってるよねエ？」

「……………」

女生徒は黙り込む。

お金は持っていた。小さい頃から貯めた分と、高校に入ってからコツコツバイトをして貯金しているお金が。しかしそれは、彼女が夢のために努力して貯めたものだ。

その心がギリギリで彼女に「NO」と言わせる。

「——ツハ、夢がシンガーだって？なるほどねえ。キミ、現実を見れてないかわいそうな子だったのね」

「つ……………！」

“罪悪感”ではない別のナニカが、彼女の中でバラバラと崩れていく。

込み上げる感情は荒い呼吸を引き起こし、暑くもないのに汗がいくつも地面に落ちた。

「大丈夫ですか？」

その時、少し甘めの声が聞こえた。

今にも倒れそうな彼女が顔を上げれば、黒髪を後ろに撫でつけた三十代ほどの瘦身の男が立っていた。

「あ……」

「おや、怪我してるね」

その、メガネの奥の血と空を混ぜたような妖しい瞳が見えてしまった瞬間、彼女の思考が停止する。

誰も気づいていなかったが、男の視線は一瞬だけ女生徒の胸元に止まった。

「ツチ……いえね、その彼女が捨てられていた子猫を自転車で轢いたんですよ」

状況を説明する玉美を無視し、男は少女の元へ歩み寄る。

そして許可を得てからジャージの袖をまくり、ケガの具合を見た。微かな香水の匂いを感じた少女は、さらに体を小さくする。

「ジャージのおかげで血は出ていないが、ひどいアザになりそうだな。ええと……足の方も見ていいかい？」

「は、はい……いたっ!」

足は特に右膝のケガがひどく、患部は赤くなっていた。打撲だろう、と吉良は判断する。

「なるべく早く病院に行くべき……」

「ちよつとちよつと、待つてくださいよ!まだ私の方は彼女に話があるんですがね?」

「……話とは?そちらはただの目撃者のようにお見受けするが」

「ええまあ、通りすがっただけですけど、小さな命でも殺したことには変わりない。私が見ていた限り、彼女はよそ見をして轢いていましたから。これが仮に歩行者だったら大きな事故になっていたかもしれない。だからこそ、今大人として叱っている最中で……」

「不注意は悪いことだと思いが、それよりも先にケガの方を優先すべきだと思いますよ、普通」

女の子なんだから余計に、と続いた言葉はかなりおっさん臭かった。しかし男の見目の良さもあり、不快さはない。

「帰宅はできそうかい?」

「できな、くは……でも、自転車に乗るのはちよつと無理かも……」

「家の人はいないかな?」

「両親とも仕事だから、今の時間はいないです」

「そうか、困ったな……。わたしが送ってあげることできるが、流石に赤の他人の車に乗るのは嫌だろうしね」

「いや、割と平——」

「タクシーを呼ぶから、少し待っていなさい」

彼女の言葉を遮って、男が立ち上がる。近くに公衆電話があつたのは幸いだ。

「クソツ、せつかくイイとこだったのによお……邪魔すんなよオッサン!!」

声を荒げたのは玉美だ。歩き出した男の肩を掴み、噛み付くように睨めつける。

それを吉良が振りはらつた瞬間、「うわあ!」とわざとらしい声が上がつた。

「うう、うう……いてえ、いてえよお……!!」

肘で押された程度の玉美は、腹にかめはめ波でも食らつたように勢いよく吹っ飛んだ。

そのままガードレールに身体を打ちつけ、縁石に顔をぶつける。その衝撃に前歯が一本抜けた。

この歯はあらかじめ抜けやすいように細工してある入れ歯なのだが、他人がそれを知

る由はない。

「おっと、そんなに強く振りはらったつもりはなかったんだが…」

「どうしてくれんだ…：歯ア入れんのもって保険利かねえのによお〜！」

下を向き、ぶつけた頬を押さえながら苦痛に叫ぶ玉美の芝居。見事な演技はもはや「玉美劇場」ここに開演！」と言っている。

邪魔をされたのはアンラッキーだったが、結構金を持っていそうな男を捕まえられた。何せ相手に乗っているのは外国製、それも高級車だ。

あとはザ・ロックの能力で錠をつけてしまえば、玉美の独壇場である。

「…へ？」

男の白シャツの胸元には、何も無い。

——— 何も、ない？

「えっ？錠が…：な、何でえ…：…？」

「すまない。手持ちで悪いがこれでいいかな」

「あ、え……」

渡されたのは、量の指では余裕で足りない数の諭吉紙幣。

いや、いやいや、それよりももつと恐ろしい事実があるではないか。

玉美が混乱する原因が、今、目の前に。

「な、何で、錠がねえんだよ……!?!」

「……錠? 何を言っているんだい?」

「だから、錠だよ!! なん、なんで、人が自分のせいでケガして、歯まで折ったつてのに……!! なん、で——」

その時、玉美は見てしまった。否、見えてしまった。男のメガネの奥に隠れ、見えなかった瞳を。

どこまでも深い色が、彼を捉えている。底の見えぬその色に背筋が凍った。

しかして瞳以外のパーツは、本当に心から申し訳なく思っているような表情を浮かべていて、そのチグハグさが心底気色悪い。

悍ましきを感じさせる端正な顔が、玉美のすぐ近くに迫る。

「悪、かつたね」

それは果たして、ケガをさせた自分が悪かった、という意味で咳かれたものなのか。はたまた女生徒をこの状況に追い込んだ——玉美が、なのか。

「失礼したね」

吉良は玉美から離れ、公衆電話へと向かった。

するとどつと、一気に汗が吹き出す。この時女生徒に付けられていたザ・ロックは、能力者の無意識によって外された。

——悪い、悪い、悪い。

その言葉が頭の中で回りながら、玉美は札束を持ったまま立ち上がり、そのままフラフラと立ち去る。

女生徒は呆然としつつ、突如軽くなった身体と思考に首を傾げた。

「……あの、ちよつといいかい」

「え？」

男が再び戻ってきた。何か不備があったのだろうか、少女はまた反対に首を傾げる。

思えばタクシーを呼ぶとは言ったが、普通タクシー会社の電話番号を覚えているだろうか。よほど使う機会がなければ、なかなか覚えていなさそうなものだが。

「……………その、テレフォンカードって持つてるかい？」

吉良は女を引っかける際、一般人にとつてかなりの大金を持ち歩く。ただ財布が嵩張るため、極力小銭は入れないようにしていた。それが仇となった。今彼は羞恥心とともに、心の底から己のスタンドに呪詛を吐いている。

「も、持つてます…」

頬をかく男に、少女は胸がぎゅうと締まる感覚を受けた。そして頬を真っ赤にさせながら、転がっていたカバンからカードを取り出す。

それから男は現在地を電話で伝え、袋に入った猫の遺体を車に乗せる。予定を変えて埋めに行くらしい。

「君も災難だったね。ケガした上にお金も取られたんだろう?」

「ええ、まあ…数千円くらいですよ」

あの札束に比べたら、かわいいくらいだ。男はそのままタクシー代だと、彼女に金を手渡し去って行く。見れば、分裂した論吉がいる。

彼女は痛む身体ながら、慌てて後を追った。

「こ、こんなに受け取れません!!」

男は車の窓から顔を出し、「投資だ」と告げる。

「音楽は好きだからね」

「き、聞いてたんですか、夢の話のところ!?!」

「ああ、正確には聞こえた、が正しいが。堅実的な将来ではないかもしれない。——が、わたしもそんな堅実的には入らない職種なこともある。歌うジャンルは何かかな?」

「え、あつ……じゃ、ジャズです」

「ジャズか。クラシックが一番好きだが、ジャズも好みだよ」

「頑張つてね——」と言い残し、男は去っていった。発言した男にとっては、熱のな

い言葉である。

ただ彼女にとつては誰かに認めてもらい、そして応援される行為だけでも、魂を揺さぶられるのには十分だった。

「——私絶対、歌手になります!!」

それから数年後、日本で一人の女性歌手がデビューし、のちに日本を代表するジャズミュージシャンとなるのはまた別の話である。

彼女は尊敬する人物として、歌手を目指すきっかけとなった「空条貞夫」ともう一人、名前も知らない一般人の男性をあげていたそうだ。

【車の中】

『ニヤー』

「押すなよ、絶対に押すなよ」

『ニヤー』

親指でボタンを押そうとするキラークイーンを、運転しながらどうにか宥める吉良。予定は完全に総崩れ、このまま家に帰って相棒の望みのため子猫を埋める予定である。

「あの男に金を渡す前、人の手に重ねてこつそりと紙幣を爆弾に変えたのは気づいてるからな」

『ニヤー』

雰囲気からしてこの『ニヤー』は、ずっと「コロス」と言っているのを、本体の吉良は感じ取っている。

その後スイッチが押されることはなかったが、その日一日キラークイーンは子猫の墓から離れることはなく、ひたすら吉良の精神が削られたのだった。

82話 ガタンとゴトン

ガタンゴトンと揺れる車内。休日の昼間ということもあり、電車にいる客は多い。

「やっぱピンクダークの少年は面白いよなあ」

「……あつ、最新刊の発売日もうすぐじゃん！」

午前の部活帰りであろうか、制服を着た二人の少年が漫画雑誌を見ながら話している。

他にも杖を握りしめたまま居眠りする老人や、読書に耽っている女性——さまざまな人間がこに電車内にいる。特にスマホを触っている者が多い。近年普及し始めた文明の利器だ。

「……………」

そんな中、一人ぼんやりと虚空を眺める男がいた。

針のむしろな黒髪に、ラフな服装。その瞳は光を一切通すことなく死んでいる。否、死人よりも死んでいる。

歳は実年齢より十歳ほど若く見えるが、男の年齢は四十を過ぎている。仮に大学生の

ような服を着れば寡黙な見た目も相まって、そこそこモテる男子大学生に見えるだろう。

「……………」

男の視線の先は吊り革よりも先の場所、荷物置き場に向いている。

『もしかしてあんた、オレのことが視えてるのか?』

そこにあつたのは、奇妙、としか言いようのない光景だった。

電車内の座席の上に設置されたそのスペースは、あくまで荷物を置くための場所だ。

しかし、その場所に人間がいる。しかも子供であればまだイタズラで済むが、成人の男が広々と使い寝転がっている。いや、「広々と」というのは語弊があるか。

それでもその場所に収まるようにして、その男は前方に座る人間を観察している。

そして向こうは死んだ目の男の視線に気づき、お互いに「何だコイツ?」と見つめ合う状況が出来上がったのだ。

無論「何だコイツ?」どころか、通報されるべきは荷物置き場の男だ。そもそも話、三高帽にやたら胸元のはだけたスーツというのもヘンテコだ。

しかし死んだ目の彼以外に、その男に気付いている者はいない。

ゆえに川尻浩作は、一つの結論を出す。

まるでその答え合わせをするように、三高帽の男は薄く口角を上げた。

『わたしは所謂「幽霊」という奴らしい。となるとあんたは、靈感がある人間……と言いたいところだが、少し違うようだな。理由はわからないが、あんたは片足をこちら側

——幽霊側に踏み入れているらしい』

幽霊は荷物置き場から身を乗り出し、ちょうど空いていた川尻の隣に座る。

『あんた、名は何と言うんだ？』

「…川尻浩作」

『ふーん、川尻浩作ね。どこにでもありそうな、平凡な名前だな』

「……はあ」

『わたしは……そうだな。「死んだ人間」だから、「デッドマンQ」とでも名乗っておこうか』

「………」

『おいおい、反応が薄過ぎやしないか？まあ…わたしとしては好感触の人間だよ。あの女坊主よりはね』

「女坊主……？」と、一瞬川尻の中で疑問がよぎり、そのまま流れて行つた。
川尻浩作は確かに普通のサラリーマンだ。嫁がいて、妻に似た大学生の一人息子がいる。

ただ彼には普通の人間と少し異なる点がある。それは一度記憶を失つたことだ。そして、その記憶は未だ戻っていない。今まで自分がどのように育ち、そしてどんな生き方をしてきたのか、丸々と抜けていたのだ。幸い一般教養は残っていた。

何もわからない中、記憶喪失の男を一心に支えたのが妻である。その妻がかつて愛した女であることも、川尻は忘れてしまつていたのである。

最初は苦勞の絶えぬ——というよりぼんやりし、そのまま迷子になるような男の世話をする、妻と息子の苦勞が絶えない毎日だった。

だが今では普通の家族のように、幸せな毎日を送っている。何故なら彼には、愛する妻と息子がいるのだから。

複雑な事情がある川尻に、死人の男はあえて深入りせず世間話をする。

主に幽霊が、幽霊として暮らす上で苦勞する愚痴。川尻はそれに曖昧な返事を返す。

『あんた機械みたいだな。「そうですね」とか「はあ……」とか。まだSNSのbotの方

が気の利いた返事をするよ』

「…よく言われます」

『こちらとしては視える人間で、それもこうやって話ができるだけで、いい気分転換にはなるんだがね』

「オレも喋りかけてくるタイプは初めてです」

『ツハ、わたしを電柱や茂みに隠れているような、バラバラのヤツらと一緒にしないでくれ給え』

「……………」

川尻は徐に、幽霊に背後にいる何かを見つめた。その視線に気づいたのか、デッドマンも後ろを向く。

そこにいたのは幽霊の肩に手を置き、川尻を覗き込んでいる獣人型のネコである。

幽霊の表情が驚きが変わった。

『あんたコイツが視えるのか!?!』

「……………?ええ、まあ……」

『おお!初めてだよ、コイツを視える人間ってのは!……まあ、視えたところで何だという話だが……』

「生前のペットですか?」

『ペット?こんな不気味な猫をわたしが飼っていたわけが——』

幽霊の言葉は続かず、デカ猫ちゃん（川尻の認識）のねこばんちが決まった。威力は恐ろしく、幽霊の叩かれた上半身が吹っ飛んで床に転がる。猫は猫でも、ネコ科のパンチだった。

『クソカスがッ……なんてヤツだ!!』

「やっぱり愛猫だったんですよ」

『いや、絶対に違う。生前のことなんぞ微塵も覚えちゃいないが、コイツは絶対にわたしのペットじゃないね』

「…覚えてない?」

『幽霊なら割と多いんじゃないか?同類と語ったことなどほとんどないがな』

「そういうものなんですか」

記憶のないデッドマン。対し、記憶を失った川尻。幽霊の「こつち側に足を踏み入れている」というのは、川尻に記憶がないことが影響しているのかもしれない。

身体を直した幽霊は、再び川尻の横に座る。そしてまた周囲の客を観察し始めた。

『本当に流行っているよなあ、スマホ。幽霊のわたしには持ち歩くのに実用的でないし、必要ない代物だが。ただ電話を使うにしても、数の減った公衆電話を探さなくちゃいけ

ないから不便だ』

「仕方ないですよ。幽霊なんですから」

『ハハ、生きている人間が羨ましいものだよ。無いものねだりつてやつだ』
ところで、と幽霊は足を組み替える。

『不思議に思わないかい、川尻浩作』

「何がですか？」

『側から見れば、あんたは今ブツブツと独り言を呟くヤバい奴だ。しかし他の人間はあんたのことを一ミリも目に留めちゃいない』

「影が薄いからじゃやないですか？」

『それもあるかもね。だがわたしはこういつた時、思うことがある。普通に考えれば一人で呟いている人間がいたとして、明らかにソイツは“異常”なわけだ。果たしてその時、幽霊のわたしとこうして話しているあんたが“異常”なのか、それともブツブツ話している男に気づかない、周囲の人間たちが“異常”なのだろうか？——つてね』

「オレに気づかないフリをしている人間もいると思いますよ」
『そうかい？ 周りをよく見てみる。あんたのことなんかこれっぽっちも、意識の片隅にも置いちゃいない』

「……何が言いたいんですか？」

『何が言いたいというか…本題は別だ。さつきスマホの話をしたが、わたしはあんたに気づかない人間に注目して欲しいんだ』

「…ああ、スマホしてますね」

『そうだ。随分と熱心に見ているだろ？』

川尻はそこでふと、近年問題になっている歩きスマホの件を思い出した。

画面に意識を取られて事故に遭った——なんて話を、ニュースで目にしたこともある。

『もしスマホを見ていたせいで何かが起きてしまっても、それは見ていた連中の自業自得ってことだ』

「確かに……そうですね。けれど電車に乗っている時くらいはいいんじゃないですか？」

『まあね。わたしとしてはよそ見してくれている方が、荷物を奪いやすくてありがたい

よ』

「………」

川尻は横に置いていた荷物を膝の上に移動させた。泥棒はすぐ側にいるらしい。

『時に川尻浩作。今この電車はS市杜王町内を走っているわけだが、この町が行方不明者が多いことは知っているかい?』

「…いえ」

『仮にスマホを見つけていて、開いていたマンホールに落ちちまった……なんてマヌケな人間も、この町だったらいそいだよね』

そう言い、デッドマンは嘲るような笑みを浮かべる。

「幽霊ギャグだろうか?」と川尻が見当違いなことを思った時、気づいた。

——人が、少なくなっている。それも、スマホを使っていた人間たちがごっそりと、最初から電車に乗っていないなかったように。

「……ッ!?!」

咄嗟に彼は幽霊へ視線を戻す。相手は三高帽を目深にかぶり、片目だけ川尻に向けていた。

黒い瞳。それは川尻と似ているようで、彼とは一線を画す深淵を宿している。それこ

そ、生者と死者を線引きする決定的な違いなのかもしれない。

漠然とした恐怖が、川尻の内に襲う。

『どこに、連れていかれたんだろうね』

瞬間、川尻は立ち上がり外へ出ようとした。しかし電車が走っている今、降りることなどできない。

いや、それ以上に窓から外の景色を見れば、いつの間にか真っ黒に染まっている。夜というわけではない。一寸先が闇、といった具合に、先の景色が見えないのだ。

彼の頬に冷や汗が伝い、死んだ目の瞳孔が焦りを見せる。別の車両へ移ろうと扉を開けようにも全く開かず、川尻が目の前を通り過ぎても、他の人間たちは見向きもしない。恐怖一色に染まった川尻は、近くにいた男の肩を揺すろうと手を伸ばした。だが、横から伸びてきた手によって阻まれる。ヒヤリとして、触れられた部分からゾワゾワと鳥肌が立つ。

実際には触れられていないにもかかわらず、視える彼には視覚的な、あるいは聴覚的にその感覚を生々しく感じてしまう。

『まあまあ、少し落ち着こうじゃないか。わたしとしてはもう少し、この雑談に興じてい

たいんだがね』

「……離してくれ」

『あまり表情が変わっていないが、内心恐怖でいっぱいというところか。そんなあんたにサプライズだ。後ろを見てみる』

「後……ろ？」

促された先に広がるのは、無数の青白い手と顔。窓ガラスに張り付き、ソイツらは川尻を凝視している。電車は相変わらず走っているはずだ。なのに、ソイツらが消えることはない。

生唾を飲んだ川尻は、幽霊を振り返った。

「えっ」

幽霊がいなくなっている。それどころか、スマホをいじっていた人間たちも元に戻っていた。外を包む暗闇も、窓ガラスに張り付いていた無数の顔や手もない。

あるのはウロウロと辺りを見渡す彼に向く、周囲の怪訝な視線だ。

耐えきれなくなった男は、目的の駅に着く前に降りた。

全く何がなんだかわからない。そもそもかなり前に杜王駅で乗ったというのに、ずっ

と次の駅へ着かなかったのも奇妙だ。いつも通勤に使っている線路ゆえ、だいたい一駅にかかると時間は把握している。

「…考えても仕方ないか」

一先ず気分が落ち着いてから、電車に乗ろう。

恐ろしい目に遭つてもなお電車を利用するその根性は、肝の据わっている川尻浩作らしいと言え、川尻浩作らしい。

「早くプレゼントを買つて帰るか…」

明日は夫婦の結婚記念日だ。夫が今日出かけている理由を察しながら、妻はルンルン気分で待っている。それを息子が見たならば、「はいはい、リア充」と言っているだろう。

川尻家の日常は、多少スリリングな時もあるが、それでも穏やかに進んでいた。

???????

場所は神社の境内である。そこに箒を持ち、掃除をしている女坊主がいた。

彼女は側にある灯籠の上に視線を向ける。

「依頼、終わったんですね」

『ああ、すぐにな』

灯籠に腰掛けている、三高帽の男。幽霊たる彼は一つ、ため息をこぼした。

彼が女坊主に頼まれた今回の依頼。それは人を誘い込む電車の怪奇事件の解決である。この事例に近いのは、都市伝説の「きさらぎ駅」であろうか。

事件の内容は大体こうだ。

電車に乗っていると、いつの間にか窓の外が異様に暗くなり、人の数も減っている。

それに驚いた人間が次の駅で逃げるように降りると、謎の駅に着く。おまけに看板に書かれた駅名は黒く塗りつぶされていて、読むことができない。

周辺は真つ暗で、線路はない。というより、線路の下にある地面すらない。

向かい側のプラットホームも存在せず、頼りになるのはその人間がいるホームの明かりだけ。

ホーム唯一繋がるのは地下への階段だ。その先も真つ暗で、スマホなどの明かりがなければとてもじゃないが歩けないし、その先に行こうとする猛者もない。

そうやって悩んでいると、音が聞こえてくる。グチャグチャと、泥を踏み潰すような音が続く。そして気づくのだ。その何かがゆっくりと、地下から地上へのぼって来ていることに。

その後ガタンゴトンと音を出し、電車がやって来る。迷い込んだ人間が死に物狂いで乗り込むと、いつの間にか元の場所に戻っていた——というような話だ。

こんな相談がいくつも女坊主のもとに来ていた。先に言っておくと、彼女の神社はそういう怪奇ごととも請け負っている。

また似たような相談で、電車に乗っていた最中に外が暗くなり、無数の手と顔が窓に張りついていて、恐怖にずっと震えていたら元に戻っていた、という話もあった。

これに関しては電車を降りなかったパターンだ。

『あんたの言うとおり、行くだけで終わった。気づいたら電車の中に戻っていたしな。それよりも一番大変だったのは、人と接触しないよう電車に乗ることだったよ』

「君に憑いているネコくんの能力は、本当に凄まじいですね」

『ああ、一瞬で爆発して消えた。我ながら恐ろしい……よくわからんヤツだが』

幽霊はついでに、誘い込まれそうだった死んだ目の男についても話した。

最近歩きスマホが原因で人間の視線や動作が読みにくくなり、人とぶつかることが多くなってしまった幽霊の身としては、「殲滅すべしッ！スマホオ!!」な意見である。

ゆえにつらつらと、川尻に愚痴を言ってしまった。

ちなみに尼僧はすでに何度もこの話を聞いている。

『概ね誘われるのは波長の合った人間だ。あの人間は恐らく一度死にかけた経験があったゆえ、半分あの世に足を突っ込んでいたんだろう。逆に電波を扱っている人間——スマホなんかをいじっていると、向こうの飛ばしている波長が阻害されるのか、真つ先にスマホ人間は除外対象になった』

「私もガラケーから変えましようかね。……というか、そういう君はいつまで現世こちらにいるんですか？」

『さあね』

幽霊は女坊主から視線を外し、夕焼けがかった空を眺める。

「ところで、人を誘う正体は何でしたか？」

『ン?……えつと、何だっけな…そうだ、アレだアレ。タタリ神っぽいやつだ。アシなんとかの』

「もののけ姫ですね」

『そうそう、そのタタリ神のイメージだ』

「なるほど。中々に強烈だったのですか」

『そのイメージを巨大な人間の肉塊に変えて、そこから人間の手足を無数に生やした感じだ』

「……………」

『ホオー…尼僧でも顔を青ざめさせることがあるのだな。まあ、あれは…なんだ。人を殺す類でなかったのは確かだ』

「…そうですか」

『あれは人を誘い、そして伝えたかったのだらうな』

瞳を閉じ、幽霊はまた一つ、ため息ともつかない息を零す。

私たちは、ここにいて——と。

83話 盗んだ自転車で衝突する

両親が国内外を問わず頻繁に旅行に行っていたのに対し、わたしは基本的に出かけない。

最たる理由は、自分のテリトリーから出たくないためだ。

また自分の物でない枕や、ベッドで寝ることに大きなストレスを抱く。その上、長時間観光名所をめぐる中で歩くことも疲れる。

原稿用紙を相手に仕事をしなればならない以上、現地取材などは逃れられないのだが。

しかし取材は国内にしか行ったことがない。海外は数える程度だ。それも子どもの頃、両親に連れられて、というもの。

作家になってからそれなりの月日経ち、決まった渡航。

行くことになった理由は複数ある。

一つは、編集者から持ち出された話。

元々能動的に自分が書きたい、と思うことが少ない性分のため、基本的に編集者から

編集部の意向で決まったテーマに沿ったものを書いてほしい、と頼まれることが多い。その時の流行りやターゲット層によって色々と注文は変わるが、どれも恋愛ものが多い。

流石にコテコテの、少女漫画のような内容を求められた場合は断る。が、余程でない限りは話を呑むことが多い。

そして編集者が今回持ち出したのが、純愛ものだった。イメージとしては『休日のローマ』である。

学生時代、鈴美がテレビでその映画を観たとかで、押し切られる形で彼女を自転車の荷台に乗せ、坂道を下った思い出はある。

二人分の重さに乗せた暴走車輪は、それは面白いようにスピードをのせた。しかし映画自体は観たことがなかったため、一度ビデオを貸りて見た。

確かに男と女がスクーターでニケツしていた。なんなら女が男を後ろに乗せているシーンもあった。

二つ目はオヤジだ。

わたしとは違い、アウトドア派だった父。もう長年旅行していないこともあり、映画を共に観ていたオヤジは久々に出かけたがった。

編集部が求めるものが、出会った二人が付き添った末に最後は別れる純愛ものとするなら、別に設定地が海外でなくともいいだろう。

わたしも英語は父の影響でそれなりにわかるが、そこまで流暢に話せるわけではない。

「ここに適任の通訳がおるだろう、吉影！」

話を逸らそうにも父の付いた旅行魂は中々鎮火せず、最終的に『モナ・リザ』の件を持ち出されたわたしが折れた。

父がわたしの思春期のエピソードを知っているわけではない。

だが息子の部屋に絵が飾ってあったことを思い出し、わたしのフェチを照らし合わせて、それを利用してきた。

予定としては新作の構想も兼ねて、最初は『ローマの休日』をなぞらえて現地を観光する。

その後は、『モナ・リザ』が展示されているルーブル美術館に向かう。

現物ははじめてだ。公衆の中で精神的に危ない状態になりそうな気しかない。

その直後キレイな女の手を見つけたら本当にまずい。しかしそれ以上に本物のあの、美しい手を、この目で拝みたい。

一度付いた火は旅行魂を燃やすオヤジと同じで、自分でも消せなかった。

世界最大級の美術館の、世界的に有名な作品。来館者は多く、鑑賞できる時間も限られている。

それでも一見の価値がある。

「……やはりダメかもしれない」

画集でも気が狂ったんだ。本物は無理だ。自分の厄介な性癖を存分に体験してきたからこそ、余計に。

正気を失うとわかっていることもあり、かつて何度かよぎった「本物を見たい」という感情を押し殺してきたんだ。

それを、それを……………。

「だが行こう」

ぼくは負けた、己の欲望に。

???????

イタリア、ローマ。

首都ということもあり、人通りが多い。

空港に着き、移動してホテルにチェックインを済ませて、二週間程度は観光名所をめぐる。

持参したミケランジェロの画集を持ち歩いてしまう辺り、完全に脳が『モナ・リザ』に侵食されている。

親に連れられて付き合った国内旅行も、学生時代に行った遠足や修学旅行も、その前日に気持ちが昂って眠れなくなったことなどない。むしろ面倒だとは思っていないかった。

今回はしかし、すでに浮き足立っている。

全くもつてこの吉良吉影が、一枚の絵画に心がもって行かれているなど、普段の自分からは想像がつかないだろう。仕方あるまい、わたしの原点にして頂点なのだから。

「よ、吉影が今まで見たことがないほど、ワクワクしておる……」

そう呟いたのは、上着のポケットに潜んでいる父。

念のため持ってきたインスタントカメラ（撮影直後に自動的に現像を行って写真を作る）は、首に提げている。

ちなみに服装は白シャツにジーンズと、ラフな格好でいる。バックパックを背負つての移動はかなり体力を使う。

先人という名の父の助言で、キャッシュ類は分散して所持。カードやパスポート、薬は服の裏に仕込んである。

さらに先達はぼつたくるタクシーの見分け方や、近寄るべきでない場所。

これまでの人生経験を活かして語られるそれを、右から左へ聞き流しながら歩いた。

まさか20代後半にもなって、一人旅をするとは思わなかった。

古い宮殿やはるか昔に建てられた建築物に、珍妙な顔をする円状の彫刻など。

脳内の大多数を占める理想の手への慕情の外ガワで、純粹に観光を楽しむ自分がいる。

悪くはない。父と違って楽しいかどうかはともかく、経験としては良いものだ。

杜王町と比べるまでもなく人の数は多く、名所ぞろい。それでもわたしとしては静かな故郷の方がいい。あそこはあそこで、秘された魔窟の一面があるが。

そして、昼も過ぎた頃。

寄った観光スポットの近くにある喫茶店に、遅めの昼食を取ろうと立ち寄った。

座ったのは店の奥の窓側の席。ちょうど通りが見える場所だ。日が差し込み、店内の光もあつて少々眩しい。

一応本題の取材も兼ねて、物語の着想を考えながら、頼んだりゾットとコーヒーを食す。

ノートに走り書きで書いていき、時折外の電灯や人間、車を眺めては視線を下に戻す。すでに食事もお食べ終わり飲み物を取るだけの日本人客に、何か言ってくる店員もいない。人が多いならまだしも、混雑が過ぎた時間帯に来店したのが功を奏したのか。

人の話し声もなく、店内の音楽を聴きながら書き物をできるのは、幸運だった。

「ん？」

気づけば来店してから、約2時間。腕時計を見てかなり居座っていたことに気づいた。

男の店主は座って雑誌を読んでおり、声をかけてから支払いを済ます。

イタリアでも英語はそれなりに通じる場合が多い。さすが観光大国。ゆえに意思疎通であまり困ることはなく、オヤジの出番もほとんどなかった。今のところ居てもいな

くても変わらない。

それから店を出て、まだ少し早いですがホテルに帰ろうと進み出す。

その直後だった。

前方から歩いてきた人間がその前、わたしと同じ進行方向の人間とぶつかり、道路側に体勢を崩す。

何段にも積み重なったコーンアイスを食べていたソイツは転倒し、危うく轢かれかけた。

飛び出てきた人間に、運転手は怒鳴り声を上げながら走り去っていく。

『D……d o o l o r e……（い、イテテ……）』

さらに運悪く、少年は水溜まりに落下。服を盛大に汚し、困った表情を浮かべる。

『A h!!』

少年にとって今日はツイていない日だろう。わたしは朝からテレビのコーナーで占いを見るような人間じゃあないが、不運な人間を見れば、その人間の運気の良し悪しを考えるくらいはする。

ああ、実に不幸だ。

『Mi scusi... asiatico? Il mio gelato...
 (すみません...アジア人かな? 僕のアイスが...)』

「.....」

『Oh, non capisco, italiano? Ebbene, all
 ora...』 *“I'm sorry”*

(あれ、イタリア語はわからないのかな。えつとじゃあ... 「すみません」)

わたしの服に直撃したアイス。真ん中に積まれていた物体からほのかに香ったミント臭が鼻腔を掠めると、途端に殺意が湧く。

落ち着け、と自分自身に暗示をかけながら、倒れていた少年に手を差し出す。

別に触れたどさくさに紛れて爆弾をしかける、なんてことはしない。思っているだけで、実行に移すことはない。

そう、思っているだけだ。

「...気にしてないですよ。あなたも不運でしたね」

伸ばした手を掴んだ少年を引っ張り上げ、立たせる。身長はわたしより少し低いくらいか。

向こうは英語で返したこちらにホッと、息を吐く。

言葉が伝わったことと、こちらがそこまで怒っているように見えないため、安堵したのだろう。

「え、えっと、お詫びとかした方がいいですよね……」

「お気になさらず。替えの服は持っていますから」

「でも……あつ!!」

さつき男とぶつかり、少年が転んだ拍子に落としたベージュのバッグ。それが無くなつたようだ。

彼とぶつかった人間とは別の奴が盗んでいったが、恐らくグルだ。どうでもよいが。

「ど、どど、どうしよ……アレには財布とか、ボスと繋がる電話が……」

「ボス?」

「………あ!!その、「ボス」っていうのは「社長」のことで、僕はえーつと……そう、秘書

——秘書なんですよ!!」

「……そうかい」

マフィアの構成員か。オヤジも海外では気を付けろと言っていたし、事前に調べた情報では、イタリアは近年犯罪件数が右肩上がりになっている。特に麻薬の犯罪が横行していると聞いた。

鈍臭さが神がかっているが、「ボスと」繋がる電話を持っているということとは、ただの

下つ端ではないのだろう。

この少年がまさか幹部には見えないが、ボスの腹心、という可能性もある。関わるべきではないのは確かだ。元より面倒ごとに突っかかる気もない。

わたしの辞書にあるのは「平穩」。この二文字。

犯罪を犯して、警察にビクビクと怯えて過ごすような肩身の狭い人生などではない。

「まあ大変だと思いますが、警察に相談なりしてください。ぼくはこれで、失礼しますよ」

「本当にすみませんでした……」

「いえ、では」

項垂れきつた少年と別れ、ひとまず着替えようと近くの店でトイレを借りることにした。

「中性色の塊みたいなヤツだったな……」

全身ほぼ紫。髪はキツめのピンク色だった。

へソだしセーターのルックに何も言えなかつたが、相手はギャング。アレくらいの個性がむしろ普通なんだろう。

まだまだローマ観光は日数がある。

ギヤングとの接触に一気に平穩から遠ざかった気がしたものの、帰国するわけにはいかない。

旅行の本題は取材で、メインは『モナ・リザ』。ここまで来て帰るわけにはいかない。あのふつくらとした手を視界に焼き付けるまでは、故郷の土を踏むわけにはいかないのだ。

「わたしの『モナ・リザ』……」

【お前のものではないだろう、吉影】

一言多い写真はゴミ箱に捨てて、帰路についた。

???????

この日はコロッセオの見物。

ローマ帝政期の西暦80年に、ウエスパシアヌス帝とティトウス帝によつて造られた円形闘技場である。古い建物のため、何度か修復も行われているようだ。

事前に買ったチケットを持って並び、セキュリティチェックを受けてから入る。

日本なら歴史ある観光名所でも、そこまでしつかりと観光客を調べることは少ないだろう。

西側の入り口から入って二階に上がると、内部をよく観察できる。身分によつて座席が異なつたらしい。

映画では王女が男に、家がコロッセオだと答えていたが、天井のないここでは完全に吹きさらしだ。

観光客らしく写真を取り中を巡つて、南側出口から退場した。

その後、気さくそうな男からミサンガを渡されそうになつたが断り、また渡されそうになつて断り――を繰り返しながら通り過ぎる。

男は諦めたようですぐに別の人間をターゲットにしていた。こういうつた詐欺まがいが多く、すでに何度も受けている。

やたら回数が多いのは、わたしが日本人ということもあるのだろう。これだつたら、地毛のまま来ていた方がまだよかつたかもしれない。

「えっ、200ユーロ!?!」

前方には、ミサンガを腕に巻かれてしまった哀れな観光客がいる。

押しに弱いのか断りきれず、ソイツは出した財布を取られ、明らかに掲示された金額以上を奪われていた。

「ローマに来てから不連続きだ……」

全身中性色の男がまたいる。数日ぶりだがコイツ、ギャングのクセに普通に観光をしているのか……？

関わる気は変わらなないため、過ぎ去ろうとしたが、奴から逸らそうとした視線が合ってしまう。

向こうは少し驚いた顔をし、近寄って来た。わたしの側に近寄るな。

「先日会ったアジア人の方ですよね！」

「……ああ」

こんな偶然はいらない。

そのままわたしの隣に並び立つ少年は、「ドツピオ」と名乗った。

曰く、仕事がひと段落したので、今は残った滞在期間で観光をしていると。

「まだ子どもだろうに、大変だね」と返したいところだが、向こうの言葉を借りれば、子どもが社長の秘書をしている事になる。ゆえに不要なツツコミは避けた。

時刻は昼になろうという頃で、時間を確認したと同時に、隣から腹の鳴る音が聞こえ

た。

視線を向けるとジツとこちらを見つめているんだが、まさかタカる気じゃないだろうな、コイツ。

「……………」

「無言でぼくを見つめるんじゃない」

「……………」

「残念ながらお人好しじゃないんですよ、そこまで」

「ニホンジンは優しいと聞きました…」

「アジア人の見分けが付いたようで嬉しいですよ、では」

しかし、少年は付いてきた。

結局、ギヤングというトラブルメーカーが己の側に付き纏う現状にストレスが急速に溜まり、仕方なく、ランチを共にすることにした。これが終わったら、離れることを条件にして。

「あ…ありがとうございます！」

嬉しそうに笑う少年が動くたびに揺れる、うねった前髪。こうして見ると頭の生え際がジグザクになっている。

頭部を眺めていると、少年に名を聞かれた。偽る理由もないため「吉良」と答える。

「キラ……名前ですか？」

「苗字ですよ。年下に名前呼びされるのは、あまり好きじゃないんです」

「文化の違いってのもんですかね？……あつ、僕のフルネームは「ヴィネガー・ドツピオ」です」

「ヴィネガー・ドツピオか。君は、何というか……」

腕にあるミサンガをわたしが見ていることに気付くと、少年は口をへの字にする。

わたしがコイツの上司だったら、軽作業でも任せるのに躊躇する。

まあ人は、見かけによらない。かく言うわたしもそのタイプであるのだから。

外見は気弱で小心者。しかし意外に計算高い可能性もある。

「おつ、とつ、と……」

わたしと話しよそ見をしていたドツピオ少年は、危うく街灯に衝突しかける。

いや、ただのマヌケかもしれない。

???????

彼の名はヴィネガー・ドツピオ。

一見気弱そうで優しい雰囲気を持つ彼はしかし、イタリアを裏で牛耳る組織「パツシヨーネ」のボスの腹心である。

何か重要な任務を任された時、彼が動く。任務をこなす際にボスと繋がる電話は、彼にとつてかかせないものだ。

そんな彼はローマでひと仕事を終えた後、不運にもバッグを盗まれてしまった。

ボスと繋がる携帯電話も無くし、警察に向かったものの、一応調べてみる——という話で終わった。

事情聴取した警官は、恐らくグルの犯行だろう、と語っていた。

その後は困り果てていたところを、ボスから来た電話を受けてどうにか新しい携帯電話などを調達し、今に至る。

現在ドツピオは、日本人の男と昼食を共にしている。

名を「キラ・ヨシカゲ」という男。イタリア語はサツパリなようだが、英語は遜色なく聞き取れるほどには話せる。

この男は先日、仕事終わりに彼が持っていたアイスを、シャツにぶちまけてしまった

人間だった。

黒髪に丸刈メガネと首に下げているカメラに、黒の大きいバックパック。ただの旅行客にしか見えない男をしかし、ボスは不審に思った。

曰く、ドツピオがアイスをぶちまけた直後、看過できないほどの鋭い殺気を男から感じたという。

腹心の彼にさえ正体を明かさないうボス。

己をもしかしたら狙っている可能性がある、ドツピオに接触しよう命じたのだ。

（ボスはすでにこの男が僕がギャングであることも、ボスと関わりの深い人間であることも勘付いている————と言っていた。もしもボスの正体を暴こうとしているんだったら、始末しなきゃならない……）

とは言っても、ドツピオが接する中で、彼に敵対するような雰囲気は今のところ感じられない。

むしろ露骨に距離を取ろうとしている。当然といえば、当然だ。吉良にとつて彼はシャツを汚した人間で、あまつさえ太々しく昼食を奢らせている人間なのだから。

「へえー、キラさんはフランスにも行かれるんですね」

「一人旅自体、あまり経験はないですよ。フランスへは美術館を見に行きます」
「もしかしてルーブルですか？」

「ええ、人生で一度は行ってみたいと思っていたもので」

フォークでスパゲッティを巻き、口に運ぶ吉良。テーブルマナーがすっかりしている。

話の中で特に嘘を言っているようにも見受けられない。ちなみにローマ観光は取材で行っているようだ。職業はボカされたが、ライター関係だという。

「その、僕のことには聞かないんですね。ギャングだつて、気づいてるんでしょ？」

「……人にも色々あると思いますから。それに君が子どもである点を踏まえたら、余計な口出しをするわけにはいかないでしょう」

「まあ、そうですけど……」

「バッグを奪われた件といい、君がよく生き残っていると思いますよ、裏社会で」
「アハハ……」

ぐうの音も出ない。そもそも、吉良がドツピオとボスの関係性に気づくような発言をしてしまったのは、ドツピオ自身だ。

その事でボスにキツク叱られたのは、記憶に新しい。

ボスの害になる人間なのか否か、彼は見極める必要がある。その判断材料はまだ、大

大きく欠けている状態。

会話に変化球が必要と感じたドツピオは、あからさまにならない程度で、相手のことを探る。

「そう言えばさつき「一人旅自体……」って言ってましたけど、家族とか友人とかとは渡航の経験があるんですか？」

「両親となら、幼い頃に少しは。友人はほとんどいません」

「奥さんとかとは……」

「結婚はしてませんよ、生憎ね」

フウ、と息を吐いて、吉良はコップを手に取り、水を胃に流し込む。

残り3分の1ほどの量であるその向かい側の皿は、すでに空になっていた。

「一人旅なら気楽でいいですね」

「いや、そうでもないですよ。すでにホームシックですから」

「え……ライター関係だったら、取材のために結構出かきなきやいけないんじゃないんですか？」

「元々やりたい職業ではなかったんだが、その時の流れでね。願わくば定時で出社して退勤できる、サラリーマン生活がよかったですよ」

「サラリーマン……また、平凡な生活ですね」

「ぼくの文字書きも、君のギャングも、側から見たら少数派なんでしょう。一般的な道を外れるのはよくない。ヒトの平均の輪から逸れると、途端にその人間は異物になってしまうのだから」

「つまり、『普通』がいいってことですか？」

「ああ。なるべく大多数の生き方に沿ってぼくも生活したい。静かに、穏やかにね」
「なるほど……」

口を開け、スパゲッティを食べようと瞳を閉じた吉良を見ていたトツピオの瞳が一瞬、誤作動を起こしたようにブレる。

しかしフォークに巻かれた麺が口の中に収まった時には、戻っていた。

「でも、普通だったら逆なんじゃないですか？」

「……何がですか？」

「それこそ普通の人だったら平凡な人生じゃなくて、極端に言えば大金持ちとか、普通じゃない人生を望みそうじゃないですか」

「……ぼくは普通な生き方を望んでいますが、だからといって普通の人間の、普通な価値観を持ちたいというわけじゃない。例えば子どもの「野球選手になりたい」とか、「アイ

ドルになりたいとか」、そういった夢でも抱くように、ぼくは「普通に生きること」を信条としている」

「じゃあ人の上に立つこととかには、興味がないと」

「ぼくは人の上に立てるような人間じゃないですよ。性分にも合わない」

ドツピオは消費されていくスバゲッティに留めていた視線を上げ、男の顔を見る。

一回目に会った時は気づかなかつたが、二回目に会い間近でよく観察した時にわかつた、長い前髪とメガネに隠れた瞳。

その色は滅多にお目にかかれない、バイオレットを宿している。

「獰猛な目だと思った。吉良の語った『普通の人生』というのは本音である。だがその獰猛さと、いささか食い違う信条のように思えてならない。

透けて見える吉良の歪さを、彼は感じ取った。

この獰猛な部分があるいは、ボスを害する存在たり得るかもしれない。

「キラさん、もし仮にですよ。あなたの平穏な人生を脅かす存在が現れたとしたら、どうしますか?」

「警察に通報します」

「いや……あの、じゃあ警察は無しで。僕の場合はいざという時に頼れませんから」

「うくん」

「僕今、真面目に聞いてるんです。だからキラさんにも、真剣に答えて欲しいです」

「麺類はやはり頼まない方がよかったかな。もう腹がいっぱいだ」

「……………」

「そうジト目になるな、ドツピオくん。答えは出ているが、あまり言いたくないんですよ」

と意味つつ、どうにか最後の一口を食べ終えた吉良は、ナプキンで口元を拭う。

「例えば『勝ち負け』であったり、対人やそれ以外から生じる『トラブル』であったり……悩みを引きずったまま眠りにつくのは嫌だね。過度な感情の起伏に晒されるのもごめん被りたい。『植物のような心』が望ましい」

「僕じゃ絶対に送れないような人生だ……」

「それは君が、ギヤングだからかい？」

「え？」

「人の在り方というのは、しょせんその人間が選んだものに過ぎない。逆に言えばギヤングをやっている人間も、サラリーマンをやっている人間も、貧乏な人間も、彼らがそうだったのは、彼ら自身が選択をして進んだ結果だ。つまり君がギヤングになったの

も、君自身がギャングになろうとしたからだ」

吉良はコップを手に取り、揺れる水面を見つめる。

「ただし「運命」というものは存在する……と、思うよ。これは個人的な意見だがね。その運命に流されて過酷な生き方を強いられたり、運が味方をして金に困らない奴らもいるだろう。だが変えようと思えば、いくらでも人生というのは変えられるはずだ。——いや、変えられると思えなければ、到底生きられないよ……わたしなんかはね」

「……ヒトの生き様は、その人間次第でことですか？」

「ああ、そんなわたしの意見を踏まえた上での、回答としては」

この吉良吉影の平穩を邪魔するのなら、誰であろうと、始末する——。

吉良は笑って言った。

「と、言いたいところだけど」と、続けて。

「人を殺したら捕まってしまうからね。当たり前のことだが」

「はは、それで言うよ、僕はもう捕まっちゃいますね」

「何も聞かなかったことにするよ」

ははは、と笑い合う両者。

吉良はすぐに真顔に戻り、勘定だけドツピオに託し、荷物を背負いながらさつさと去ろうとする。

「え、行っちゃうんですか!?!」

「わたしの生き方の指針は聞いただろう、君。ギャングと知り合いになるなんて真つ平ごめんだ」

「僕たち似てると思ったのに……」

「冗談言わないでくれ。金は渡したからな、もう二度と会わないことを祈るよ」

「ええ……」

店の扉を開けて、男はドツピオに見向きもせず去っていく。

店から顔だけ覗かせた少年はその後ろ姿を見つめ、顔を引つ込めた。

「……あれ、僕何で、似てるって思ったんだろ」

自分の平穩を脅かす者は、誰であろうと許さない。

その姿が己と似ていると思つたドツピオは、首を傾げる。

「まあいいか、ボスの害にはならなさそうだし」

直感的に、もうあの男とは会うことはないだろうと感じる。

店主に支払いを済ませた彼は、余分に余ってしまった金をカバンに入れ、歩き出す。

「オレの、永遠の絶頂……」

ローマは今日も、観光客で賑わっていた。

84話 ヤツらの心霊探訪記 in S市

季節は夏。

全くもって関係のない話から始めるが、彼のノストラダムスが残した『予言集』の中にある「恐怖の大王」というものをご存じだろうか。

1999年7カ月に空から恐怖の大王がやって来るだろう、と続くものだ。

日本では五島勉が著者の『ノストラダムスの大予言』を受けて、さまざま憶測が飛び交った。

宇宙人であったり、天体の衝突であったり、核ミサイルであったり――。

それから1年以上経ち、世界が滅んだ、なんて事はない。

でなければわたしも当然死んでいるし、こうして仕事をしているはずがない。そもそもそんな話を信じること自体、バカバカしい。

しかし知り合いの青年はその内容を真に受け、内心恐れていたようだ。

ただし虹村形兆の“矢”の件やスタンド使いとの戦いで、そんなことを考えている暇はなかったと聞く。

かく言うわたしも、昨年は「1987年」の再来と言うべき厄年だった。

いや、本来の厄年はおろか、前厄や後厄に当てはまる歳でなかったにも関わらず。厄についても信じていないが、本当の厄年が来た時わたしは死ぬのかもしれない。

さて、そろそろ話の本題に入るとして、時期は8月。

東北だろうと茹だるような暑さが襲来している一方で、改造学ランを着た青年が今、目の前にいる。

特徴的なリーゼントを見ているだけで暑苦しい。だがこの男にとって髪への発言は地雷である。踏んだら最後、わたしの明日はない。

唐突に、アポもなく我が家に押しかけた青年、東方仗助。

凶々しく思いながら客間に通し、扇風機をつけ、麦茶と菓子を出してやっている。ただでさえすでに暑さで機嫌が悪いこちらに、青年は広い肩を狭くさせた。

「何の用件だ。夏休みを謳歌している学生さまと違って、わたしは仕事があるんだ」「いつにも増して毒がキツイ…」

「課題を教えてほしいとかだったら、殺すからな」

「いや、宿題の方は大丈夫っス。実はお願いがあつてですなー…」

「お願い?」

どうやら学生たちで夏の思い出を作ろうということ、心霊スポット巡りをしよう、

という話になつたらしい。

胆のようだ。昨年 of 七不思議の件を思わず思い出したが、もつとメジャーな場所を回ろうという魂

「なぜわざわざ心霊スポットなんだ。杜王町には海に川に、山もあるだろう。貴様らの目は節穴なのか？とつとと虫かごとアミでも持つて遊んでこい」

「そんな、小学生じゃないんすから……。夏といえばやつぱしホラーでしょ？億泰や康一と行こうつて話になつたんですよ」

「お前たちの中で一番マトモな広瀬少年も賛成なのか……。？というか、学生どもで行けばいいだけの話で、わたしは不必要だろ」

「それはちよつと、俺たちだけじゃ怖いつつーか……」

「じゃあ行かなければいい」

「そこを何とか、頼みますよオウ！こういうのつて一応、保護者がいた方がいいと思うんで」

「岸辺露伴」

「——は、康一が最初に話したみたいなんですけど、俺がいると知つて断つたみたいです」

「……………待て、お前がいなければ行つたということか？」

「お、気づいてくれたっすか、そこに」

得意げな顔で持っていた学生カバンから、何か雑誌のようなものと、地図を取り出す
仗助。

扇風機の風を受け、少し乱れた髪をクシで直しながら、まず仗助は雑誌の表紙を見せる。

ホラースポットの特集らしく、折り目のついたページを開くと、M県にまつわる心霊スポットがランキング形式で載っていた。

他のページにも似たような形で県ごとの心霊スポットが書かれており、その内容についても記載されている。

「俺たちじゃバイクの免許もないし、他県には行くのは難しいっつーことで、県内の心霊スポットにまず行こうってなってますね」

ページに載っているM県の心霊スポットの場所を調べる中で、コイツらはS市に異様に心霊スポットがあることに気づいた。

20個ほどある中で、うち7カ所がランキングに入っている。しかも上位10位の中に6つもだ。

「二つや二つは知っている名前があつたんですけど、知らなかった場所も含めて流石に

ここまでS市内にあるってなると、「じゃあS市の全部回ってやろうぜ」ってノリになつて……」

せつかくならランキングの順でS市のホラースポットを回ろうと、仗助たちはコピーして用意した地図に、その場所を記していった。

その結果を見て、一同は戦慄した。同時にこの内容が、岸辺露伴の興味を誘うものにもなった。

さらにコイツらが三人だけで回る勇気をなくした、理由の一端にも繋がる。

「随分とまあ、杜王町に集中しているね」

中心から外れているものが多いが、それでも杜王町に吸い寄せられでもしているように、ホラースポットが多い。

意外とそこに住んでいる者でも、興味がなければ知らない——という人間も多いだろうが、まさかここまで多いとは。7つのうち6つも集中している。

もはやここまで来ると、逆に多過ぎて目立っていないとさえ思える。

いや、その考え方が正しいのかもしれない。

しかしこの内容も岸辺青年にとっては、仗助の存在を前にしては劣るものだったのだ

ろう。

そもそもヤツなら、後で一人で行きそうだが。広瀬少年も連れて。

「で、再三言うが、行く前からビビってるなら、行かない方がいいだろう」

「けど行きたいんすよ、思い出作りに」

「ビビって絶叫して、半ベソかいてる君の未来しか見えないな」

「イイネタになると思うんですけどねエー!…?」

「わたしをどこぞの漫画家と同じ思考回路をしていると思つたら大間違いだぞ、東方仗助」

コイツや虹村億泰は高校二年。来年は三年である。つまり、就職か受験。

ゆえにまだ最後ではないが、思い出作りをしているのだろう。

また海や山で遊ぶのは何度も経験しているため、一風変わった内容を行おうとしていることも。

しかしわたしには関係がない。薄情で悪いが。

ちなみに影犬の件でわたしが作家であることを、単細胞コンビのコイツと虹村億泰は知つたが、作家名までは知らない。

どの道小説なんぞ読まない奴らだ。

それでも一応、火の無いところに煙は立たぬというように、わたしが作家とわかつて

しまうような発言が他者の前でできぬよう、漫画家に制限をかけてもらっている。

「第一お前の母親でも何でも、他に頼れるオトナはいるはずだ。わたしでなければならぬ理由がない」

「…その、聞いたんですよ、吉良さんがそーいうの視えるって」

「誰の証言だ、ソレは」

「岸辺露伴」

「岸辺露伴……………」

あの小僧、適当なことを言ったのではあるまいな。

幼少期など関わるが多かったため、何か勘づいていたのかもしれないが。

「ハア…………たしかにまあ、オヤジの存在もあるし、幽霊が存在することは認めている。だからってわたしが視ているものが絶対的に幽霊とは限らない。何せオヤジは視える他人が、視えていないものなのだから」

【呼んだかい、吉影？】

「どわあっ!!」

又ルツと、襖の隙間から出てきた写真。

わたしの冷めた目にお呼びでないことを察したのか、静かに戻って行った。

父が靈感のないコイツにも視えているのは、偏にオヤジがスタンド使いであるからなのか。

しかしあの小道の保健医を、広瀬康一やその彼女は視えたという。ゆえに、一概には言えないのだろう。

「ちなみにお前の後ろに下半身のない女が生えていて、お前を見ていると言ったらどうする?」

「え?……………ギイヤアツ!!」

「嘘だよ」

仗助は部屋の隅に逃げ、頭を抱える。念仏を唱えているが意味はない。

というより、このビビリ具合で7つも回ろうと考えているのか、この少年?よつぼど星の入った玉を集める方が楽そうに思える。

「俺も引くに引けねえんだ、億泰のヤツと度胸試しになつててよ……………」

「男の度胸を試すなら、女の数にしたらどうだい」

「じよ……………仗助くんは一途なんス!!」

「君まだ経験がないのか?…?その両親譲りの見目の良さで?」

「……………俺今貶されてんのか?それとも、ホメられてんですか?」

「両方だ」

肩の力を落とし、ハアと、深い息を吐く青年。

仗助は両手を頬に当ててしばらく襖の絵を見つめ、立ち上がった。

「行きましょう、吉良さん」

「嫌だと言っているんだが」

「ヘエー……もしかしてアレですか？」

「何？」

「いや、いいんですよ、アレなら。俺たちは三人で行くんで」

「……まさかわたしが怖がっていると思っているのか？」

「いや、いやいや、そんなあ、思っていないですよオウ！そりゃあ一回りも年の離れた俺たちに情けないトコ見せるのイヤでしょうし……ねえ？」

見えすいた挑発だ。岸辺露伴ならまだしも、まさかわたしが安い挑発に乗るわけがない。

だが少々気になるところはある。

杜王町ならばもつとホラースポットはあるだろう。それこそ人々に知れ渡っていないだけで、そのような場所が多くありそうなものだ。

それを踏まえて、仗助たちが挙げたS市にあるホラースポットは7つ。

偶然だろうが、この「7」の数字に、思考が七不思議へと引きずられる。

気のせいだとは思ふ。だが怪談というものには『百物語』というものもある。その内容の場合は100話語り終えた後、本物のモノノケが現れるという。

それが本当かどうかはともかくとして、時にこの決まった数字というものは侮れない場合がある。

それは日本人が「4」の数字に「死」を連想するように。

あるいは西洋で「13」を忌み数として、階数に「13」という数字を使わず、「12a」と表記したり、13を飛ばして14階にしているように。

人間というものは数字に縛られる側面がある。

仗助たちで回りそれで何もなく終わるかもしれないが、もしかしたら、場合もある。だからといって思い出作りにホラースポットへ行くアホウどものお守りなど、してやる義務などわたしにはない。

ましてや心配してやる必要など。何かあったら自業自得だ。

「……………ハア、わかった、行くよ」

仗助はわたしが挑発に乗ったと思ったのか、ガッツポーズを取る。

別にそれに、腹だたしさを覚えたわけではない。ほんの冗談というヤツだ。

帰り際、靴を履いて歩き出す少年に「足元には気をつけてね」と言うと、血相を変えて叫びながら走り出した。

「フン、ザマアない」

玄関の戸を閉めて振り返った直後。天井からぶら下がっていたソレをすり抜けて、わたしは仕事へと戻った。

???????

本来なら家でゆっくりしている日曜。

昼食を済ませた後家を出て、集合場所の杜王駅に移動した。運転はわたしだ。当然のことだが自分の車に乗せる気はないため、わざわざレンタカーをこの日のために借りている。普段は左ハンドルということもあり、右ハンドルの運転に少々のやりにくさを覚えた。

経路についてはここから西に向かい、ランキングと近い順を考慮して回っていく。

シャツとジーンズのこちらに対し、助手席に座った広瀬少年は、パーカーとゆるいスウェットパンツだ。

後ろは半袖短パンの男と、革ジャンにジーンズな男のコンビ。

なぜ億泰の方は高校生にもなって、小学生のようなスタイルなんだ。

なぜ仗助の方は革ジャンが、ピンクと水色のツートーンなんだ…？似合っているからとやかく言う気はないものの。

「だ、大丈夫ですか吉良さん？目が死んでますけど…」

「別に、元気だよ」

「絶対嘘だ……」

というか待て、一瞬広瀬少年が頬をかいた時に、何か腕に巻いてあったんだが見れば明らかに髪の毛だ。それも見間違えというわけじゃなく、ナマモノ。

「あ、これですか？由花子さんがお守りつてことで、渡してくれたんです。数珠代わりになるって」

「ホラースポットとか、君は好いていないと思ったんだがね」

「いや、怖いですけど、まあ思い出作りには悪くないかもなあ、つて」

「君の彼女は来なかったんだな」

「由花子さんは結構靈感があるらしくて、僕も止められはしたんですけど行きたかったです。そしたら髪の毛、毛を……」

「お守りになるのかい、本当にソレ」

「マーキング？みたいなものにはなるそうです。「康一くんに手を出したら殺す……」って念を込めたから、万が一があっても僕は大丈夫だそうです」

「……億泰や仗助はどうなるかわからないと」

広瀬康一の彼女と面識はないが、噂どおり彼氏以外にはかなりドライらしい。

後ろで騒いでいた二人も、前の話を耳にして固まった。まだ一ヶ所目に到着もしていないというのに、その調子でいいのか。

そして、一ヶ所目に来たのが沼。沼自体は公園内にあり、初冬になると白鳥やカモなどの水鳥が越冬のための休息地として使う。

雑誌では入水自殺が多く、特に雨の日は霊が出現しやすいという。

「い、いかにも出そうって感じだよなア、仗助エ……」

「な、なな、なんだ、もうビビってんのかよ億泰？」

暑さではない汗を流している二人。仲良くくっついて震えている様に、暑苦しさしか

感じられない。

水辺は比較的涼しく感じるが蚊が多い。愚かな半袖短パン男は局地的な被害を受けていた。

二ヶ所目はランキングどおりではないが、先ほどの沼から近い場所。また沼である。ここもまた水鳥の休息地だ。前の沼より美しい風景の印象を受けつつ、周辺を回る。

白装束の人間が現れるというが、真相は定かでない。大抵こういった内容は、後から尾ひれがついたものがほとんどだ。

「し、白装束の人間は視えたっスか？」

「いや、白装束の人間は、視えないよ」

わたしの言葉に仗助はホッと、息を吐く。

対し康一少年だけウラの意図を察したのか、顔を青くしていた。

三ヶ所目はかつてのS藩の刑場跡。幾千もの人間が処刑されたといわれ、地蔵が建てられていた。

すぐ近くに民家もあり、高校生三人はそろって地蔵に手を合わせていた。

四ヶ所目は、Y県に近い山奥にあるトンネル。

他六ヶ所と比較すると場所が離れており、時間がかかる。陽も傾き始め、近くの停められる場所に車を置き、舗装されていない道を歩いていった。

体力的に疲れたこちらと違い、若者たちは森の中を歩くだけでもビクビクとしていく。

頭上で鳥が飛んだ音にさえ反応し、ガタイのいい男二人が抱き合っていたので、置いていこうとした。泣かれた。

中は柵で塞がれ通れないため、外から中を見て引き返す。

帰りは逆に仗助たちに置いて行かれた。もっと体力をつけなければならなさそうだ。

五ヶ所目は、これまたトンネル。

建設途中に多くの犠牲者が出たらしい。

この時点で辺りが薄暗くなり始めたので、一旦近くの店に寄って夕食を取ることになった。

年下に払わせるわけにも行かず、奢りと知った途端に覇気の無くなっていた様子はどこへやら、学生たちは美味そうに食べていた。

わたしもあと二ヶ所巡るのに差し支えない程度の量を食べる。

夕食を食べたのち、訪れた六ヶ所目は霊園。

わたしの両親や虹村億泰の兄、それに仗助の祖父のお骨がある霊園とはまた別の場所であり、S市最大の霊園である。

ライトは用意しておいたが、流石にお骨が実際にある場所是不謹慎だろうと、外から眺めるだけとなった。

ホラースポット巡りをしている時点で不謹慎もクソもない気がしたが、先ほどの取り戻した元気をなくした学生たちを見て、言及するのは避けた。

噂については、霊園内の頂上にある塔の周りを3〜5周すると何か起こるらしい。

そして最後は、ランキングの一位でもある場所。S市にある橋のひとつだ。

テレビの類でも特集された、屈指の自殺スポットの名所。

雑誌には「霊能力者も二度と行きたくないと言った！」とあった。

自殺名所となっている所以はかつて吊り橋であったこともあり、昭和初期は特に身投げが多かったことで名が知られるようになった。

やがて自殺防止の欄干を設けたにも関わらず自殺は止まらず、現在では2メートルを越えるフェンスと、それだけでなく鼠返しや有刺鉄線までも設置されている。

だが結局死のうと思う奴は、フェンスも有刺鉄線も意に介さず死ぬのだろう。自殺の方法は人それぞれだ。首吊りが一番ラクに死ぬるそうだが、薬を多量に摂取して自殺を図る者もいるし、他にも入水や飛び降りをする者もいる。死ぬ人間には、死ぬだけの理由がある。

昼はそれなりに通勤や通学で人通りが多いであろう道も、夜はさっぱり、といった様子。子。

車を橋から少し離れた場所でハザードランプを出したまま止め、橋を渡り、そして帰ってきて終わりにしよう、という流れになった。

「じゃあ一人一人で行こうか」

と言ったわたしに、億泰と仗助は首を横に激しく振る。

ならばペアにして行こうかと提案すると、誰がわたしと行くかで争いになった。

唯一ビビっていないため頼りにされているんだろうが、確か億泰と仗助は度胸試しを行っていたはずだ。

だったらやはり、この二人だけ一人一人で行って、わたしと広瀬少年で最後に行けばいい気もする。

「だってさ、仗助くん、億泰くん」

「ヤだよツツ!!!」

結局わたしが先に一人で行って、次に学生三人が続く。

そして彼らが戻った後にわたしも戻る、という流れになった。なぜだ……？

まあ、元々今回のホラースポット巡りは、この三人の思い出作りが本題だ。ならば間にオトナが入るのも邪魔だろう。

だったら最初から三人で行けばいいだろ、と最初の考えに戻ってきてしまうが。

そして先にライトを持ちながら歩いて行き、橋を渡る。

距離は短めで、中央部分に明かりはなく、ここから見ると暗闇の先に街灯のある橋の終わりが浮かんで見える。

隅を歩きながら時折フェンスの下を覗いて、渡り終えるまであつという間だった。

学生たちは怖いだなんだ——と騒ぎながら、車の通りが無いのいいことに、中央に三人ひしめき合いながら歩いてくる。

間に挟まれた広瀬少年もこれまで比較的怖がついていなかったが、悲鳴を上げている。

短い距離にも関わらず遅い奴らを見かねて、疲れた足を屈伸させて解した。明日は絶対に筋肉痛になっているだろう。

「早くしろ、学生ども」

「だ、だだ、だつてめっちゃ怖いんすよオオオ!!」

「仗助くん、僕の足踏んでる!」

「怖エよ兄貴イイ!!」

阿鼻叫喚とした図。ここに岸边青年がいたら、嬉々としてこの三人の情けない痴態をスケッチしそうだ。

中々進展がないので仕方なく、持たされていた雑誌を開く。

表紙は恐怖を煽るようなフォントが赤文字で並べられていて、中央に長い髪の女の青白い顔がアツプで載っている。

その他、特集の項目がいくつか書かれており、適当にページを捲っていく。

そして最後のページを開き、固まった。

「初版発行、7月7日……」

発行年のところはなぜか油性ペンのようなもので引かれ、読むことができない。

気のせいだと思いつながら本を閉じる。バーコードが右側の上であり、その横には“本体価格＋税”と書かれていた。

740円＋税。

「おい、仗助」

「な、なんすか…?」

ようやく橋の半分まで渡り終えた奴ら。

この雑誌の持ち主が誰なのか聞くと、持ってきたのは億泰だそうだ。

曰く、買ったものではなく、コンビニの前にあるベンチで置かれていたものを学校帰りに拾ったらしい。

その時すでに折り目は付いていて、開いたらちようど、M県のホラースポットのランキングの載っているページを見つけた。

そのあと帰りながら、広瀬少年と帰っていた仗助と出くわし、自然と話が雑誌へと向かったという。

「高校生の君たちに問題だ。本体価格が740円の雑誌を税込みにする、いくらか答えろ」

戦力外の億泰は除いて二人は暗算に苦心しながら、仗助の方が少し早く「777円」と答えた。

———そう、777円だ。

しかも7月7日に刊行されているにも関わらず、雑誌は7月号。

普通なら日付的に、8月号であるはずなのに。

それに一応作家をやっている職業のため、出版社にはそれなりに詳しいが、雑誌の裏にある「×社」という出版社は聞いたことがない。

興味が無いと思わず、もつと最初からしつかりと雑誌に目を通すべきだったのかもしれない。

今回何が一番奇妙かと言えば、この雑誌だ。ここまで「7」が揃うと気色悪い。

キラークイーン的能力をコイツらの前で見せるのは憚られるため、空間を削る能力を持つ億泰に任せるべきか。

途中まで渡りかけていた奴らに戻るようにながして、自身も道を引き返す。

いくつかすれ違いながら中央の暗闇を通りすぎて、わたしの奇行に首を傾げている奴らが目に入る。

詳細について語るのはやめておいた方だいいだろう。知らぬが仏だ。

億泰には二度と拾い物をしないように、岸辺露伴にこのネタを提供する代わりにヘブ
ンズ・ドアーを使ってもらおう。

「億泰くん、ちよつとい——」

橋と道路の境界線へ一步、足を踏み出した時。

比喩ではなく、世界がグルリと、回った気がした。

地球の自転が狂つちまったと言われても、納得が行きそうなほどの目眩がして、たまらず座り込む。

ドツと汗が流れて、コンクリートにシミが作られる。

その時、人間のような足が見えた。

なぜ、「ような」なのかと聞かれると、形は人間の足そのものだが、色が赤いからである。

視線を上げていくと、駆け寄ってくる仗助たちが見える。

目の前にいたのは人間の形をしたもの。全身が赤い。

服も何も着ていない。人間の形をしていて、目や鼻はない。唯一顔の部分に口があり、それが弧を描いて開き、真つ黒な口がのぞく。

「あ……………」

次の瞬間には、意識が落ちていた。

??????

吉良が目を覚ました時、彼は教室の中で、机に突っ伏すようにして寝ていた。窓からはキラキラと輝くような光が、室内を照らしている。

彼は首元の襟を引っ張りながら、自身が学生服を身に纏っていることに疑問を覚えつつ、辺りを見回す。

どうやら中学当時にいた教室らしい。体もいくらか小さくなっているようだ。

『……まさか死んだのか?』

最後に見たのは赤い人間。信じる・信じないの曖昧な存在に殺されるなど、情けない話だ。

ふと視線を感じて教室の扉へ向けると、上と下の窓に赤い色が見える。

例の人間もどきが、へばり付くようにして彼の方を見ていた。

『キラークイーン』

すると、男の背後から喉を鳴らすキラークイーンが現れ、机の上で丸くなる。

その様子から死んではいなさそうだと、吉良は判断した。

『始末してこい』

『ニヤ』

『「やだ」じゃあない、早く行け』

キラークイーンは、主人の言うことを聞く気分ではないらしい。彼が深いため息を溢すと、背後から何かに突かれる感覚がした。

窓が開いていないはずの中で、桃色を乗せた茶髪の髪が、ふわふわと揺れる。

瞳を丸くして男は固まり、頬をかいた。

『……やつぱり死んだのか、ぼくは？』

後ろにいた少女はそれに少し怒ったような顔を浮かべ、また吉良の頬を突く。

眼前に晒された生白い肌に男の喉仏が動き、薄紫の瞳の中に熱が生まれた。獯猛な色だ。

彼はそれを、無理やり飲み込む。

『君が守ってくれた……というわけかい？』

少女は首を横に振る。彼女は両手をまごの手にして、顔の横で招き猫のようなポーズをとる。

猫の手も借りたい思っていた吉良だが、肝心の猫はどうやらすでに、仕事をしていたようだ。

『となると、ここが仮に現世と常世の狭間だとして、あのヤツは消えていくのか』

『ニヤ、ニヤツ、ニヤ』

『わ……わかったから、褒美はやるよ』

吉良に顎を撫でられ、ご満悦そうなキラークイーン。

こんな時でも共有される感覚に男は半目になりながら、今この場にいるピンクの猫が見えているのか、少女に尋ねる。

『…視えてはいないのか。じゃあどうしてコイツが仕事をしたとわかったんだ？』

少女曰く、いつも男のことを守っているのは猫だから——と。

的を射た発言ではないが、まあいいかと、吉良は椅子ごと後ろに向け、少女の机に突っ伏す。

2歳離れている少女と、同じ教室になったことはない。それこそ、この一連の出来事

は夢なのかもしれない。

しかし男に笑いかけるその笑みは、鮮明に残る記憶の、彼女の姿そのもの。不意に視界にピンクの花が映り、吉良は視線を移す。

いつの間にか開いていた窓から、チラホラとサクラの花が吹き込んでいた。

『フフ……綺麗だね、同じ桃色だ。君に似合っているよ』

『ニヤァ』

『お前には言つてない』

たしかにキラークイーンも全身ピンクの珍妙な猫……いや、スタンドだが。

少女は手で口元を隠して、クスクスと笑う。

たおやかなその白くて美しいカノジョも、手の隙間から覗くほんのりと紅い口元も、瞳も、風に吹かれてたなびく髪も、少し甘い匂いも。

感覚のすべてに刻まれる内容に対し、男の中で出てくるのは、「好きだなあ」という感情。

教室内の甘い雰囲気、完全に廊下の赤い人間もどきは忘れ去られ、吉良は感じる眠気にまぶたを下ろす。

『もう会えないと思つてたけど……いい時間だったな』

彼の中で蘇る、少女が成長した姿の女性。

崖の上で会った彼女は待つていた。誰でもない、吉良を。

待ち続けるその悲しみはやがて人を呼び寄せる、立ち入ってはならない魔の場所へと変貌させた。

その場所に居続ける女性は、さながら疑似餌。ナニカは彼女を人を呼び寄せるエサとして使い、人を取り込んでいくことで肥大化する。

いわゆる地縛霊に、彼女はなっていたのだ。

『君は……ずっとここに居るのかい？』

首をまた、横に振る少女。

『成仏するって言ってたのに、詐欺にあつた気分だ』

吉良と会い、男としては十年以上の空白の分を語って、彼女は消えた。

彼が一度辞めようとした作家が続けているのも、少女があまりにも意外すぎる職業を知り、続けてほしい、と告げたから。

半ば冗談だったそれを、男は真に受けた。相手の発言が冗談であるとわかりつつ。

『繋がりだから……ね。君との……寝てしまえそうだ……』

少女は吉良の金髪を撫でる。いよいよ睡魔に耐えきれなくなりそうだ。

『鈴美、すきだよ』

そこは「愛している」じゃないのか、と少女は苦言を呈す。

しかしすぐに笑った。その表情を見たのが吉良の最後で、瞼に柔らかい感触がしたと同時に、意識は暗闇へと吸い込まれた。

???????

今回の後日談というか、オチ。

わたしが目覚めたのは心霊探訪をした翌朝で、起きた場所はS内にある、とある寺の一室だった。

その女坊主曰く、昨晩心霊スポットでぶっ倒れたわたしや、血相を変えた学生どもがお祓いを受けたという。

女坊主は広瀬少年のカノジョのツテで、紹介されたいらしい。

まずわたしが倒れた後、仗助たちは近くの民家に行つてわたしを病院へ運ぶか、お祓いのため寺に運ぶかの二択になった。

そしてカノジョに相談した広瀬少年が紹介されたこの寺の住所をメモして、タクシーを使い移動した。

レンタカーの方は、電話を借りた民家の人間に頼み移動してもらつたという。

お祓いを受けた学生三人もそのまま、寺に泊まつたそうだ。

そのあと仗助たちが寝ている部屋に行き、雑誌や赤い人間のことにについて尋ねたが、雑誌の方はいつの間にか消えていて、赤い人間はそもそも奴らには見えていなかったらしい。

とんだ目に遭つた腹いせに詳細を語ると三人は震え、もう一晩寺に泊まる——とまで言い出す始末。

怯える根拠として、わたしが倒れた際に広瀬少年が腕につけていた髪が、切れたこと

も理由の一つに挙げられるようだ。

先で述べた二つについては、キラークイーンがこっそり始末したと思われる。

「御三方はもうしばらく、この寺に泊まって行かれた方がよいでしょう」

結局、女坊主に太鼓判を押されてしまった三人。

広瀬少年の方は二人より早めに穢れが取れるだろう、とのことである。これがカノジヨのパワーか。

「俺たちって、そんなにヤバいもんじゃ憑かれちゃったんすか……?」

「いえ、憑かれてはいません。その瘴気に当てられてしまっただけです。しかしそれだけでもその付いた残り香に釣られて、よくないものが寄つてきます」

億泰と仗助は白目を剥いていた。イイ思い出になってよかつたな。

「憑いた……といいますが、憑こうとしたのは貴方の方ですから」

女坊主はそう言い、わたしを指す。

赤い人間の正体は何なのか、雑誌の件も話し、女坊主に見解を求めた。

「……わかりません。しかしよくないものである事は確かです。杜王町にはそういった、よくわからないものが多い。それらは幽霊とも、妖怪とも言えない存在です。私も

いくらか心構えがありますが、対処しきれないものもしばしばあります」
「そ、そういうのつてよオ、どうしたら避けられんだ？」

億泰が尋ねる。

正体不明の存在を避ける方法は、「見ざる・聞かざる・言わざる」——だそうだ。
「でも、何で一番重症だった吉良さんがもう帰れるのか、納得いかねえ……」

「君のようにわたしがビビりじゃないからだよ、仗助」

「な、ニヤにをオ——ッ!!」

さっさと帰って風呂に入ろう。

その前に世話になった民家に礼を言いに行き、その家に置きっぱなしのレンタカーを返しにいかねばならない。

朝食を断って、呼んだタクシーがそろそろ来るだろうという帰り際、女坊主が見送りに立つ。

「吉良吉影さん……でしたよね？」

「ええ、そうですよ」

「一つ、よろしいでしょうか」

「……何ですか？」

どうやら寺に入ったそう。依頼の解決する手伝いを、お願いしたいらしい。きちんと謝礼と、協力のお願いがそこまでの頻度ではないことも告げられて。答えはもちろん「ノー」だ。

「そうですか……もし気が変わりましたら、ご連絡ください。名刺は差し上げますので」
もらった名刺を胸ポケットに入れて、境内を後にする。
何ともまあ、疲れた。しかし悪いことだけでもなかった。
階段を降りていけば不意に、甘い香りがした。

後日「×社[×]」という名前を調べたが、やはりそのような出版社はなかった。
あの雑誌が一体何だったのか、別段調べる気もない。
これを知った岸辺露伴は、大層悔しそうな顔をしていた。

85話 ウチユウジンとネコ

ふとした時に、まったく関係のないことを思い出す——なんてことはないだろうか。

その内容がスーパーに買い物に行つてある商品を買ひ忘れた、くらいならいいんだが、それが過去のもので、しかも自分でも曖昧にしか思い出せないものとなると、まるで喉に魚の小骨が刺さっているような、もどかしい気分を味わう羽目になる。

まさしく今のわたしがそうだ。思い出せず、悶々としている。

始まりは、数日前のこと。

仕事を終えて、軽い運動をしてから夕食を作り、なんだかんだと過ごして時刻は夜の9時過ぎ。

リビングで時代劇を見ているオヤジの横で小説を読んでいた時に、不意に思い出した。

その時に関連する内容を思い出したのであれば、まだよかつたのだ。「この俳優は最近結婚した」やら、「〇〇〇の番組を見逃していた」やら。

しかし思い出したのは、関係のない事柄。

その内容は幼少期、それも未就学児だった頃のもの。

普段は母親だが、その時は珍しく父親に連れられて歯医者に行ったものだった。

名はたしか「K歯科医院」で、わたしが小学生だった頃にいつの間にか廃業していた。潰れた理由の真意は定かではないが、歯科医師も務めていた院長の男が高齢だったため、おそらくはその人間が亡くなったことで潰れたのだと思う。

父親がまだ定年退職しておらず、学校関係やそれこそ歯医者といった病院などは、母に連れられて行くことがほとんどだった。

オヤジも休みの日に学校行事があつた時は、夫婦そろって来ていたが。

授業参観に父と母に見守られながら、「ヨシカゲちゃん」と言われていたあの苦痛は忘れられない。

それで、だ。

少し話が逸れたが、定期的に虫歯がないか連れられて来たその健診で、オヤジだったこともあり、少し羽を伸ばしたのだ。

「イイ子の吉影ちゃん」ではない。肩の力を抜いて、自然体でいるべく。

肉体年齢に精神年齢が合わない中で、子どもらしく、でも“普通”の範疇からはみ出ないようにするのは何とも、息苦しさしかない生き方だ。

そんなコナンくんわたししが健診を終え、待合室で待っている間に手に取ったのが、一冊の本。

取ったのは人が混んでおり、会計までの時間が長かったため。要するにヒマだったのだ。

院内に置いてあるテレビを見る気はなく、隅っここのソファで腰かけていたわたしは、横にあつた本棚に目を留めた。

下には幼児用のぬいぐるみ。その上には絵本が並べられていて、歯科医院のパンフレットが中央の棚に表紙を向ける形で置かれていた。

テイクフリーの薄いその冊子を読む気はなく、それよりもその上にあつた厚い小説……の左横、小説よりも一回りサイズの小さい本を取った。マンガだ。

宇宙人やら、ロボットやらが表紙に描かれていたはずだ。

父に取ってもらった絵ツラの子ども向けではなかったが、止められはしなかった。息子のワガママが尊重されたのだろう。

見たはずの内容については、ひどくおぼろげである。

宇宙人が人間をさらった事例が19××年云々——とあった気もするし、超能力者が動物に念じていた描写があった：ような気もする。

実際に中を父が見ていたら、流石に止められるシーンが多々あった。

わたしがちようど思い出したのが、そのマンガを歯科医院で読んでいた部分だったのだ。

そこからそのマンガの内容を詳しく思い出そうと当時の記憶をたどって、何がどこにあったかなどを、思い出していった。

にも関わらず、肝心のマンガについては表紙も内容も曖昧にしか思い出せない。

そもそもここままでして思い出せないということは、読んだ当てもその場のキブンで取っただけに過ぎなかったのだろう。興味もなかったに違いない。

しかし、思い出したい。

思い出すマンガの中身やタイトルは、至極どうでもいい。

「思い出す」ということが大切なんだ。

この痒いところに手が届かない感覚。気持ちが悪い。

思い出してスッキリしたいという気持ちだが、日増しに強くなっている。

当時使っていただろう「K 歯科医院」の診察券はすでに捨てられていたよう存在せ

ず、その場所もとつくの昔に更地になって、今は住宅が建てられている。

オヤジにも万が一という思いで尋ねたが、マンガを息子に取つてやったことすら覚えていなかった。とんだ老碌ジジイだ。

【そ、そこまで言うことはないじゃろ、吉影……】

歯科医院の医院の親族や、そこに通っていた客など、調べればそのマンガについての情報が得られるかもしれないが、イイ大人がマンガ一つのために調べ回っているという凶を客観的に考えてみる。頭がイかれているのか？と、思われるに決まっている。

このままでは夜にグッスリ眠れない。いや、すでに眠りが浅い。

マンガのことを思い出そうとして、当時の母親のことを鮮明にたどつたその夜は食欲もなくなった。

解決策として出てくる人間はいるのだ。岸辺露伴が。

だが、ヤツがスタンドでわたしの内側を見ることはない。少なくとも、わたしが「星ノ桜花」であり続ける限りは。

そもそも、自分のこの内側を他人に見られたくない。ゆえにヘブンズ・ドアの手は

使えない。

それにあの男にこの件を話しただけでも、鼻で笑われるに決まっている。

第一「SF」のマンガなんぞ、今の時代大量に存在する。その一冊を曖昧な記憶を頼りに探せというのか。そこまでにかける労力がムダだ。

しかしやはり思い出したい。最悪のループである。

忘れようと意識すればするほど、あやふやなマンガの存在は肥大化していき、いよいよストレスで気がどうにかなりそうだった。

耄碌オヤジは解決策として、シヨック療法がいいのではないか？——と提案してきたが、その具体的なシヨック方法までは思いつかない。

すでに吉良吉廣は死者だ。したがって爆散させたところで、何も問題はない。

そこまで思考が進んでいた、朝。

眠い目をこすりつつ、縁側の戸を開けてサンダルを履き、夜は中に入れている猫草を日当たりのいい場所に移動させる。

こんな猫草かわからぬ珍妙な生き物を近所に見られでもしたら、明日の朝にはニュースになりそうだが、家の四方には塀がある。

ついでにしつけもしている。エサのやり忘れさえなければ死人は出ない。

「……………」

朝の外気が寝巻き越しに刺さり、思考が浮き沈みしながら上つていく中で、ソイツはいた。

言っておくが、場所は庭である。寝ぼけてわたしがよその庭にいた、なんてトリックキーなことはしていない。

100パーセントわたしの家の庭だ。四方はそれなりに高い塀で囲われている。

そこに、人が大の字で寝ている。わたしの庭の土をベッドと思い込んでいる薬物中毒者なのだろう。

持ったままだった猫草を縁側に置いて、室内に子機を取りに戻った。

不法侵入者の見た目は、北欧系の顔立ちである。前髪もまとめて後ろに流している長いブロンドヘアで、耳が妙にとがっている。日本人でないのは確実だ。

ぶどうヶ丘高校のものと思わしき学生服を着ており、すぐそばにカバンが転がっているが、学生なわけではない。

自分を高校生と信じてやまない、わたしの庭の土をベッドと思い込んでいる一般薬物中毒者が、これから「1」「1」「0」の導きによって逮捕優勝するされる。

——今日病院に行って、睡眠薬を多めにもらってこよう。

「……ん？」

親指がもう少しで「0」を押すところで、止まる。

不法侵入者は体を起こすと、あたりをキョロキョロ見回した。そしてわたしの顔を見ると、言う。

「あなたは誰ですか？」

「わたしの台詞なんだが」

「私ですか？ 私は又・ミキタカゾ・ンシです」

「又、ミキ………何だって？」

「又・ミキタカゾ・ンシです。地球の名では「支倉三起隆」はぜくらみきたかと言います」

「……………要は、外国国籍の名がその「ヌ・ミキタカ……」で、日本国籍の名が「支倉未起隆」ってことだね？」

「ガイコクということとは、宇宙^{外の国}、ということですよね？——ええ、それで合っています」

「通報するけどいいね？」

「通報……なぜですか？」

最後の「0」を押した。プルルと、通話音が鳴る。

だが、腕を掴まれた。その瞬間わたしの背後で、キラークイーンが出現する。

「通報はいけません」

「するよ。わたしの家の庭に知らない人間がいる。今通報せずして、いつ通報するんだ」

「通報するとあの音が来るのです。あの、音が……」

「……………パトカーのことを言っているのか？君はてつきり薬物中毒者と思ったんだが、

もしかして精神疾患の方なのか？とすると、病院か……………？」

「……………ダメだ!!ヒトが病院へ行く時に、救急車が来るんです!!」

相手が強く手首をつかんだ拍子に、手から滑り落ちた子機。

落ちかけたそれは、キラークイーンでキャッチした。

「！」

その時、不法侵入者が目を丸くする。その先は我がスタンドの方向。

脳裏に「スタンド使い」の文字が並び、腹のムカつきは連日のストレスを伴って、別の感情に昇華されていく。

伸びていく爪。相手に触れようと伸びる、ドクロの手。

一步踏み出した男はそのままわたしの横を通り、キラークイーンも通りすぎ……。

「えっ?」

男の向かった先は縁側。そこで毛づくろいをしていた珍妙な生き物の前で足を止めると、座り込む。

いったい今、自分の前で何が起きているのかわからない。

狐につままれているのだろうか。それともまだ、夢の中にいるのだろうか。

呆然と立っていると我が相棒は手を伸ばし、人の頬を餅か何かと勘違いしているように、遠慮なく伸ばそうとする。あまりの痛さに眠気が吹き飛んだ。

「これはネコのように見えますが、植物と似た体の構造も持っていますね。非常に興味深いです……」

「……………」

「これはネコなのでしょいか？それとも、植物なのでしょいか？」

「……さあね」

「これに名前はありますか？」

「…「猫草」だ。わたしの知人がつけた」

「ネコグサ………猫草」

『アニヤ？』

観察するように青年は首を動かして、猫草を眺める。

そして恐々と手を伸ばし、相手が攻撃しないとわかると、葉や幹、花の部分を触り出す。

猫草が呼吸をしているとわかった途端、瞳を輝かせた。

「動物でありながら、この生き物は植物の特徴を有している。とても不思議です」

「……ああ」

「…？なぜあなたは、そんなに疲れた顔をしているのですか？」

「主に君のせいなんだが」

相手に敵意はない。それだけはわかったため、声のしていた子機を切った。

わたしはともかく、すでにキラークイーンはマナーモードになっている。本人の意思を汲み取ると、「ネコ好きに悪いヤツはいない」という認識なのだろう。

「……どうしてわたしの家の庭で寝ていたか、話を聞いても？」

「ええと……気づいたらここにいたのです。昨晩わたしが苦手な音を聞いたのですが、それから逃げて、苦しきそのまま眠ると、ここにいました」

「その苦手な音っていうのはさっきの言葉を踏まえると、救急車やパトカーなどのサイレンの音ってことかい？」

「はい、そうです」

「それを聞いた後、うちにいたと」

「そのようです」

「……わざと敷地に入ったわけじゃないんだな？」

「はい。そう言えば聞き損ねたのですが、あなたの名前は何と言うのですか？」

「…吉良だ。もういいだろ、この事は不問にするから帰ってくれ」

「もう少しこの猫草を見ていてもいいですか？」

「わたしは「帰ってくれ」って言ったんだが、聞こえていたか？」

「聞こえていましたよ。ですがこの生き物と、もうしばらく触れ合いたいのです……ダメでしょうか？」

「ダメだ。何ならタクシーを呼んであげるから、帰れ」

「…わかりました。帰ります」

青年は深く腰を曲げて「失礼しました」と言うと、落ちていたカバンを拾い、そのまま塀を登って去っていった。

床を叩いて、朝メシのコールをする音が聞こえる。

色々と考えていた内容がすべて吹っ飛び、これがオヤジの言っていたシヨック療法なのかと、思わずにはいられない。ともかく、すべてがバカバカしくなってしまった。

きつとあの青年の前で“常識”というものを持ち出すことすら愚かで、意味のない行為なのだろう。

「……今日は、休もう」

その日、担当医に事情（と言っても例の青年の件は出さなかった）を話し、普段より強めの睡眠薬を処方してもらい、それを飲んで1日ゆっくりと寝た。

サイエンス・フィクションな夢は、見ずに済んだ。

86話 読者とは何たるか【前編】

褐色肌に、白い髪。頭部で左右にクロスするように分かれた長い前髪。

高校生ほどの少年。しかしただの少年ではわかりにくいため、ここは「少年E」と呼ぶことにしよう。

この「E」は彼の名が「え」から始まるから、「E」を使っているわけではない。

少年が春先に身につけた奇妙な能力の名が「エ」から始まるため、それを採用して「少年E」と呼ぶのだ。

その特殊な力とはスタンドである。一人の男が放った矢に射抜かれ、少年はこの力を手に入れ「エニグマ」と名付けた。

元々彼は一般的な少年であった。

少し他人と違うところがあるならば、少々難な癖を持っていたこと。

小学生の時から、好きな女の子にチョツカイばかりかけていた少年。

その行動は日増しにエスカレートして、ある日少年は少女に大ケガを負わせてしまった。

担任が朝の会に行う健康観察。

それが終わった後に、担任の記した健康観察板を保健室にまで届けるのが「ほけんがかり」の役目で、少年と少女は同じ係だった。

いつもどおり保健室にまで健康観察板を運び、二階にあるクラスに戻る途中。

少年は廊下を走り少女を残して、三階側に上る場所の裏に隠れ、息を潜めた。少女が階段を上ってきたあと、驚かせようと。

結論として、驚かせることには成功した。

少女も、彼自身も、同じクラスの間も、担任の先生も。

おろか学校中の生徒がその日、その事件に驚愕した。

突然飛び出てきた少年に驚き、少女は足を踏み外して、階段から落ちた。

そして死にはしなかったものの、体の複数を骨折するなど重傷を負った。

この件で当然、被害者側の親は激怒した。加害者側の親に損害賠償を求めようと。

だが法律における問題で、未成年者の場合、自己の責任を弁識するにたりる知能を有していない時は、その行為についての賠償の責任を負わない——というものがある。

特に12歳未満の子どもがこれに当てはまり、当時少年は6歳だった。

となると、少年の代わりに賠償の義務を負うのは誰か。それは親……と言いたところ

が、この場合学校で起きた出来事であり、監督者は学校側になるため、賠償の対象は加害者側の親ではなく学校側となる（事例にもよるであろうが）。

少年はこの事件を機に、転校することになる。

周囲の目を逃れてのものだった。

ケガを負わせてしまった少女への罪悪感に、少年が塞ぎ込んでしまった——なんてことはなく、むしろ彼は生き生きとした。

なぜなら少年は、少女が階段から落ちて行く様子を見て、理解したのである。

生き物が魅せる、「恐怖」という表情の甘美さを。

少年が少女にイジワルばかりしていたのも、その子のことが好きだったというのもあるが、怖がる姿に彼は胸をときめかせていたのだ。

親や両親、その他の人間に叱られて、叱られて——。そうして自分を顧みた時に、ようやくたどり着いた真実。

以来少年は大事にならない程度で、ヒトの「恐怖」を観察した。

それは両親や新しい場所でできた友人に、好きな女の子、同級生や担任に留まらず、猫や犬など多岐にわたった。

他人を怖がらせ、それを観察することに精を出す少年は間違いなく、サイコパスの部類。

現に少女を大ケガさせたにも関わらず、「悪いことをした」と思うことはなかった。むしろやり過ぎては、周囲の目が厳しくなり行動しにくくなるのだと、学んだ。

だがしかし、抱えた性癖に頭を悩ませることはあったのである。

人が恐怖する姿に興奮を抱く、異常な性癖。

他人を怖がらせるためならどんな変態的な方法でも取れると思う一方で、このままでは社会に馴染むことができないと、懊悩した。

そんな悩みを抱えて小学高学年になった時、少年が出会ったものこそ、一冊の本。

作家名は『星ノ桜花』。作家がデビューを果たした作品だった。

元来彼は本が好きということもあり、図書室だけでなく、図書館を利用することも多かった。

明らかに子どもが読んではならない内容。

まあ学校はともかく、図書館は探せば官能本も置かれている。

『星ノ』の静かでありながら滲み出る熱く狂気的な部分が、少年にとってはドストライクな内容で。

出ているすべての作家の作品も読んだが、言うまでもなく、狂氣的な作品の方が好きだった。

少年はその作品を読んで、異常な性癖を持った己が肯定されているような感覚を抱いたのである。

そして次第にその気持ちは膨らみ、自身の理解者は『星ノ』先生だけであると、思うまでに至った。

それから少年は自分の性癖を肯定し、前向きに人間の「恐怖」を観察するようになった。

無論、生活に支障がでない範囲で、ひっそりと。

歪む人の顔を見て、脳ぢるをドピュツと、溢れさせる気持ちで。

さらに奇妙な力を得た「少年E」の悪質な手口は、加速した。

高校生になった彼は通り魔的犯行で、休日に出かけ、その場のキブンでターゲットを決める。

その日のターゲットは書店。

あわれ彼の被害者となる人物は、新刊が出た『星ノ桜花』のコーナーを怪訝な表情を

して横ぎった男だった。

彼が敬愛する『星ノ』に対する侮辱。そう受け取った少年は、男の跡を追った。ラフな装いで、黒髪に丸刈メガネをかけた細身の男を。

??????

参考にした資料が図書館になかったため、本屋に向かったわたし。

目当ての本が見つかり会計を済ませようとレジに向かっている最中、デカデカと設置されていた自分のコーナーを見つけて気分が悪くなりつつ、本屋を出た。

自分——吉良吉影と、作家『星ノ桜花』は切り離して物事を考えているが、やはり自身の作家名が目立っているのは気に障る。

名がすでに知れていて、今更だろ、という話なんだが。

そして帰ろうとしていたところ、本屋の隣にあるゲームセンターで、見覚えのある顔が店内に見えた。

店自体はドアが開いたままで、入ってすぐ手前にはクレーンゲームなどが

今時本格リーゼントなど一人しかいない。杜王町でその髪型を見かけた時は、確定演出でその男だとわかる。

店にいたのは東方仗助、虹村億泰、広瀬康一の三人。時間帯は夕方であり、学校帰りだろう。

後ろ姿しか見えないが、背を丸くして、かじり付くように中央でクレインゲームをプレイしているのは仗助。その左側にいるのが億泰で、右側にいるのが康一少年。

「……ん？」

青春だな、と適当な感想を抱きつつ自身の車に向かおうとするが、体が動かない。

むしろゲーセン側へと横向きで一步、二歩と、まるでパントマイムでもしているように目的地から逸れて行く。

スタンド攻撃か？と思いつつながらゲーセンに視線を移した時、我がスタンドが見えた。「き、キラークイーン……!?!」

勝手に発現しているキラークイーンは、本体の意思など無視して突き進んでいく。

制止をしようにもまったく歯が立たず、結局わたしは三人並ぶ高校生に突っ込むようにぶつかった。

驚くそれぞれの顔が、わたしを捉える。格闘した末に体力を失ったため、ゼエゼエと、

無様な姿をさらすことになった。

「吉良さんじゃないっすか」

「おっ、ドーモっす」

「こんにちは、吉良さん」

「……………やあ」

キラークイーンが顔を突っ込みながら見ていたのは、クレインゲームの景品。

そこそこの数がある手のひらサイズのぬいぐるみである。猫の形をしたソレに、我が相棒の真意を悟った。欲しいのだろう。

「なんか意外ですね、吉良さんがこーいうの好きなんて」

「わたしじゃない、キラークイーンが欲しいらしい」

「またまたあゝ。それとも俺たちを見かけて、普通に話しかけるのが気恥ずかしくて、スタンド使ったんじゃないんすかあ？」

ニヤニヤと笑う仗助。億泰はさらに人を煽るような笑みを浮かべており、康一少年は苦笑いを浮かべている。

その間もクレインゲーム内に侵入したキラークイーンは手で取って、穴の中へとホイホイと投げ始めた。

高校生三人はその行動に慌て、わたしも止めようとするがまったく制御が利かない。何なんだコイツは。

結局クレイジー・ダイヤモンドに取り押さえられ、中から外へ引つ張り出される我がスタンド。

瞳孔を小さくさせて暴れる分身の姿に、頭が痛くなった。

「欲しいならお金入れてプレイしないとダメですよ、吉良さん」

「違う。だから、キラークイーンが……」

三人から送られる、大人の尊厳を疑う視線。

そもそも聞けば、コイツらはたまたま遊びに来て、康一少年がこのぬいぐるみを彼女にプレゼントしたい——というところから始まり、プレイしているらしい。

しかし数千円かけても一向に取れず、もはや是が非でも取れるまで帰らない、という風な状態になっている。

金の使い方に呆れたが、所詮は他人の金。どう使おうが、わたしが口出しするものでもない。

一応仗助の方は朋子婦人と既知な間柄のため、注意はしておくが。

『……………』

我がスタンドが、完全にエモノを狩る時のネコの目で、こちらを見てくる。

無言の圧力と、取らない限り帰れないことを察したわたしは、早々に抵抗を諦め財布を取り出した。

して、ゲーセンと縁のない人間のわたしがクレイニングゲームをした事があるかと問われれば、ない。

操作は単純で、右(↓)と上(→)の順で矢印のボタンを使って操作し、最後に「決定」のボタンを押すとアームが動く。値段は一回100円。制限時間あり。

流石にはじめから取れるとは思っていない。数回プレイして感覚を掴んでからでない、取るのは難しいだろう。

一回目、当然のことながら失敗。

二回目、アームがねらったぬいぐるみの腹に食い込む。

三回目、ネコの首元についた輪っかにアームの先を引っかけようとして、失敗。

四回目、小銭がないため札を崩してトライ、失敗。

五回目

「やっぱこの台簡単そうに見えて、チョームズイって…」

「……………」

「ムリしなくていいんだぜ？吉良さんよオ」

「……………」

「あの…大丈夫ですか、吉良さん？」

「…ちよつと黙ってろ、貴様ら」

わたしは静かに、シャツの袖をまくった。

???????

吉良がクレインゲームを始めてから2時間。

数々の苦難を経て一つ目のぬいぐるみをゲットした男に、そばで見っていた三人は胴上げ…はせず、むしろ心境的に引いていた。

シャツの袖をひじまでまくった辺りから雰囲気が変わり、メガネを外し、長い前髪を

後ろに撫でつけてプレイし続けた吉良。

高校生が見守る中で、クレインゲームにガチになった大のオトナの姿が、そこにできあがった。

台の横や後ろに移動し、ぬいぐるみとの正確な距離を測る様は、完全にハンターのソレである。

最初取られたぬいぐるみの後、キラークイーンに所望され、男は次々にネコを下に落とすとして行った。

完全にコツをつかんでからは、失敗することもほとんどなくなった。

結果、無慈悲な乱獲者によつて台はカラに。また途中でぬいぐるみをお裾分けしてもらった学生組も、1時間を越えた辺りで飽き出し、帰路に就いた。

すべて取り終えた吉良は床に置かれたネコたちを真顔で見つめて、いくつかは本屋のレジ袋に入れ、残りは店員に頼み往復しながらぬいぐるみを車の後部座席に乗せる。

店員は悟った表情の客に、どう声をかけていいかわからなかった。

そして車を走らせ始めた男は、バックミラーに映るぬいぐるみを視界に入れ、振り返った時に「(⊠ ⊠ ⊠)」の顔を浮かべる分身を見た。

「何をしているんだ、わたしは……………」

87話 読者とは何たるか【後編】

吉良邸。

陽も暮れ始め、吉良は人目がないのをいいことにスタンドにもぬいぐるみを運ばせ、玄関に置いた。

一歩踏み出せばニヤンニヤンパラダイスである。

どこに置くか考えるのは後にして、庭に出しておいた猫草を取り込む。

『ニヤツ——!!』

今日はなぜか、こ機嫌ナナメな様子の珍妙な生き物。

ぬいぐるみに反応しているのかと、男がその側に猫草を置けば、睨んだあと表情を一変させ、葉っぱの手を使ってじゃれ始める。

「何だ、人がいなくて寂しかったのか？」

『アニヤ、ニヤンニヤ』

所詮は草のようなネコ。屈んで話しかける家主に目を向けず、ぬいぐるみにかじり付く。

吉良はため息を吐くと立ち上がり、着替えてから日課のランニングに出かける。家にいる者は猫草と、吉廣のみ。

『ニヤツ、ニヤツ』

猫草が目の中のエモノに熱中している中、カタカタと、かすかに閉じられた玄関の扉が揺れる。

その音に猫草が意識を向けた時、見えたのは紙。

白いそれが扉のスキマから這い出てくる。

瞬間、植物でいうところの花弁の部分を萎ませ、つぼみのような顔へと変わった猫草。花弁の奥で瞳を吊り上げ、威嚇した。

『ニヤツ?』

ズ、ズズと、床を移動する紙。折り畳まれている紙の間から出ているのは、猫じやらしである。

それが猫草の前に差し出され、右へ左へ揺れる。本能を刺激する動きに、彼は翻弄された。

その目には猫じやらしをつかむ手が見えているのだが、一匹のケモノになっている猫草には視界に映らない。

もう一本紙のスキマから生えてきた手が彼の眼前にきた直後、「パン！」と、手のひら同士が合わさって、大きな音を立てた。

驚いた猫草は瞳孔を大きくし、耳（に当たる部分）を垂直にさせた。

猫が怯えるものの一つに、大きな音がある。

猫草もまたネコ時代にブイブイ言わせたオスだが、されど猫。

どんなにケンカが強くて種付けが上手く、スタンドを手に入れ植物の要素を多大に持つ生き物になっても、リビアヤマネコが家畜化されたとされる食肉目ネコ科ネコ属の生き物。

本能から大きな音を恐れた彼は、その力が適用されるに至る条件を満たしてしまつた。

床に落ちた、一枚の紙。

対し両手がスキマから出ていた紙が開いて、その正体を現す。

2時間ゲーセンで吉良がクレインゲームをする姿を観察し続け、男の目が向いていない隙に車へと侵入した人物——「少年E」。

彼は靴を脱ぎ片手で持ち、もう片方の手で珍妙な生き物を封印した紙を拾い上げ、ポ

ケツトに入れる。

「2時間だ……2時間もオツサンがひたすらクレイジーゲームにかじり付いている様子を見させられて、正直気が狂うと思った。でも待った甲斐はあつたさ……」

少年の正体にいち早く勘づいた猫のような植物のような生き物は、すでに『エニグマ』の能力によって紙にした。

猫草は見知らぬニオイがテリトリー内に入ったことに気づき、騒いでいたのである。

少年にとってこの珍妙な生き物もそうだが、他にも少年と似た力を持つ男や、おそらく同じ能力者である学生三人組のことも気になっている。

少年のエニグマが、これまで他者に認識されたことはない。

彼の見解として自身の精神と繋がっている存在——という風に、漠然とした考えを持っている。

しかしゲーセンでの一件で、彼以外にも似た力を持つ人間がいることや、同じ能力者にはその存在が見えることも知った。

そして間違いなく、少年よりも男や学生たちの方が、これらの能力について知っている。

ヒトを「人間」と言うように、エニグマにもその種類を表す名が存在するのだろう。

これはその情報を知る大きなチャンスにもなる。

同時に2時間待たされた気持ちも相まって、イラ立ちも募っている。

「にしても、大きな家だな…」

古き良き日本家屋といったところか。少年には縁のない広い屋敷である。

廊下を通つて、順々に部屋を見る。

家こそ広いが中にお高そうなツボが飾つてある、ということはなく。どれもごく一般的なラインナップだ。

「ん？」

居間に彼が入った時、不意に目にしたもの。

テーブルに置かれている一枚の写真。普通な家の中身だ、と思つていた折、その写真だけが妙に少年の気にかかる。

綺麗に並べられた靴の中で、一足だけ脱ぎ散らかされたままになっているような。

違和感。その違和感に彼は目を細め、自身の手を伸ばすのを避け、エニグマを使う。

裏向きになっていたそれをひっくり返すと、この家で撮つたものであろう背景が見え、その中央の右側、ダンスの陰に隠れるようにして老人が膝を抱えて座っている。場所は寝室だろう。

「フム……」

じつくりとその写真を眺めた後、何度か裏と表を交互に見ても、不可思議なところはない。

だがやはりこの写真から少年は、何かを感じ取っている。

「一応紙にしておくか」

そう言い、少年がエニグマで封印しようとした時。

写真の中で座っていたはずの老人が、動いた。見間違いかと目を擦れども、やはり動いている。

膝を抱えていた老人は背後に隠していた包丁を持ち、ゆっくりと近づいてくる。

まるで某幽霊が井戸から出てくる時のような、ジワジワと迫る恐怖感。

真顔で迫りくる老人に、少年は慌ててエニグマを使った。

【この家から出て行ッ——！！】

振りかざされた包丁は写真の中から外へと出て、彼の顔面直前で落ちる。

落下した刃先はそのまま畳へと垂直に突き刺さった。

「ハア………ビックリした……」

エニグマの力が効いたということは、「生物」ではない。

彼の力はその生物特有の「恐怖のサイン」を見抜かなければ、行使することができない。

ネコやイヌといった生き物であればそのサインを見抜くのは簡単であるが、人間など思考が複雑な生き物になると、人によって「恐怖のサイン」が異なる。

そのため見抜くのに、アレコレと手を回す必要が生じる。

逆に言うとう見抜いてしまえば、あとは少年の独壇場。

春先にこの能力を手に入れた彼は、様々な人間を紙にし、ファイリングしてきた。

さらに物質に関しては、無条件で封印できる。

その大小は問わない。やろうと思えば飛行機さえ可能なかもしれない（流石にそこまで大きな物は試したことはないが）。

果ては電気や水といったものまで封印できる始末。これには青ダヌキ先生も驚きだ。

以上を踏まえて写真の老人の男は、エニグマの封印に対して「物質」の反応を見せた。

いわゆる幽霊というヤツに間違いない。

その存在が「生物」の枠組みに入るのか難しいところではあるが、少年の力が効いた

のだ。今はそれでよしとしておこう。

「あとは、あの男が帰ってくるのを待つだけだ」

男の「恐怖のサイン」を見つけようと、観察していた少年E。しかしまだわかっていない。

幸い場所は男の自宅。何に恐れるのか、そのヒントが見つかるはずだ。

老人の幽霊が男の関係者であるかはわからないが、少なくとも猫草がいなくなった以上、不審に思われる。

ゆえに時間をかけて相手のサインを調べるのは難しいだろう。

そう考え、少年が部屋を探った時。

書斎らしい場所には入った正面から背を向けるようにして、奥の隅に細長い机と椅子がある。その横には背の高い本棚が複数並んでいた。

結婚している様子もないあたり、この書斎は男のもので間違いない。

本が種類や大きさによって綺麗に整頓されていることから、几帳面な性格であると思われる。

その種類は何かしらの論文やら、健康に関する本やら、文豪の小説やら、少年マンガの本やら——てんでバラバラ。

単純に読書が趣味と考えても、中には若い女子が好きそうな恋愛ものもある。

「人は見かけによらないってことか……ん？」

中に足を踏み入れ、本棚を眺めていた少年。

机にたどり着いた彼は、テーブルランプやパソコン、少し散らかって置いてある本や万年筆、そして中央に置いてある茶封筒を目にした。

そこで男が何か書き物を職にしているのではないかと、察した。

でなければ平日の、まだサラリーマンが働いている時間に、出かけていないだろう。単純に仕事が休みの可能性もあるが。

「こんな家に住んでいるんだから、そこそこ稼げているのか、どれ……」

小説でも批評文でも、読めるのであれば目を通す価値はある。

少年は最初のタイトルを目にし、次の場所へ視線を移した。

その瞬間彼の中で、ウチュウネコが誕生した。

???????

ランニングを終えて家に帰った吉良は、すぐに違和感に気づいた。

人に反応して点く玄関外の明かり。

すると中のシルエットがぼんやりと見えるのだが、やけに静まり返っている。

カギを開けて中に入り電気を点けると、ニヤンニヤンパラダイスはそのままだが、猫草がない。それも植木鉢ごとなくなっている。

基本的に移動はできないはずだ。単純に不法侵入されただけなら、猫草に簡単に返り討ちにされるはずである。

血の一つはおろか土一つ落ちていないというのは、不可思議だ。

猫草の場合暗闇に包まれると活動が鈍くなるが、まだ玄関から陽の光は差し込んでい

る。
「まさか……スタンド使いか？」

であるなら、なぜ吉良が狙われるのか。

人に恨まれるようなことは正直言つて、それなりにしている。

彼が一夜限りの関係だと思つても本気になる女性はたまにいるし、どこぞで彼が『星ノ』であることを知った厄介なファンの説も無きにしも非ず。

ファンが家に押しかけた、ということはないが、あり得なくはない。

どの可能性も思い当たる。仗助たちと関係があるからと、狙われた可能性もある。伝え聞いた話でしかないが、もし仮に音石明のような一筋縄ではいかない敵なら、隠しているキラークイーン的能力も使わざるを得ない。

「……キラークイーン」

と、言う前に、彼の背後から現れた相棒。

瞳孔が細まっているキラークイーンに、吉良はキレている、と感じた。

「家の物は破壊してくれるなよ、絶対にだ」

『……………』

しかしてスタンドを使つての戦闘経験など、ほとんどない。

それこそ本格的な戦闘は、かつてアンジェロと対峙した時以来かもしれない。

最悪直すのは仗助に任せて、シアーハートアタックで人がいる場所を突き止め、キラークイーンで叩くべきか。相手の能力がわからない以上、不用意に動くことは躊躇われる。

「こう考えると、仗助たちはすごいものだな…」

歴戦の最強のスタンド使い、空条承太郎ともなると、次元が違うのだろう。

空条承太郎を前提にしてスタンド同士の戦いを考えてしまう辺り、やはり吉良は思考

が悪側だ。

猫草がやられたということはつまり、必然と父——吉廣も敵の手にかかったと考えていい。

家の番犬が猫草なら、吉廣は留守番にしてセコム。

そう簡単に倒される存在ではないと、何より息子の吉良自身が理解している。相手はそこまでの手練れであるのか。考えていく中で沸々と彼の中で、たぎる感情。

「人の家に勝手に入って、それだけで胸糞が悪いというのに……」

吉良は今、怒っている。

それは家に侵入されたことより、猫草が消えたことより、父親が敵にやられたかもしれないという事実には、殺意が湧いている。

伸びる爪を他の爪でガリガリと削りながら、眼光鋭く廊下を踏み出した。

部屋を回り、最初に気づいた異変は居間。

畳に何か鋭利なものが刺さった跡があった。おそらく包丁であろう。

キッチン行って本数を確認したが、やはり一本足りない。

敵が取って使ったにしては、違和感がある。推測として吉廣が包丁を持ち出したと考えるのが妥当だ。

となると、これは猫草にもいえることだが、包丁や吉廣はどこに行ったのか。

吉良の脳裏に億泰の空間を削る能力がよぎったが、犯人が億泰であることはない。彼を狙う理由がないからだ。

敵は『ザ・ハンド』に近い能力を持っているのかもしれない。特定の人物だけを、消してしまえるような。無論その能力も何か制限があるはず。

でないとならば無条件で人を消してしまえるなど、強力すぎる。

猫草や吉廣がすでに死んでしまったかはわからない。いや、後者に関してはすでに死んでいるのだが。

縁側まで見てあと確認していないのは、書齋と風呂場。

先に書齋に入った吉良はそこで、もう一つの異変に気がつく。

正確には異変というよりはそれは、“変化”である。

机に置いておいた原稿の入った封筒の位置が、少し変わっている。

これまで敵が残した痕跡がまったく見つからない中で、この変化は十分に警戒するに足りるものだった。

だが何かの罫であったとしても、確認せねば始まらない。

あるいは触れた瞬間敵の力が発動するかもしれないとして本で叩いてみるが、変化はなし。

不審は拭いきれず吉良は茶封筒を手にとって、原稿を出した。その時斜めにした封筒から滑って、床に何かが落ちる。

「紙……？」

見覚えのないものだ。敵が残したメッセージであるかもしれないと考え持ち、中身を開こうとした。

「……………ッ!!」

四つ折りになったそれを開こうとした時、のぞいたのは障子から入る赤い陽を受けて、光った切っ先。

飛び出た包丁を咄嗟に吉良はキラークイーンで殴り、吹き飛ばした。

吹っ飛んだ刃物はふすまに刺さって、落ちた拍子にビリビリと破く。

開きかけていた紙が開き中から現れたのは、褐色肌に、白い髪が特徴的な少年。

その背後には紫色のスタンドがいる。やはり敵はスタンド使い。それも紙を能力と

して使うようだ。

少年が紙の中から出てきたのなら、しまうことも可能なはずだ。猫草や吉廣もそのようにして、紙の中に閉じ込められているのか。

「不法侵入だよ、君。未成年者だからって、どんな罪を犯しても許されると思わないことだ」

「オトナに口うるさく説教されるのはごめんだ」

「……どうやって入ったかはともかくとして、玄関にいた猫っぽい生き物と、写真の老人を知らないか？」

事を穏便に済ませようと、暗に「ここで解放するなら咎めない」とする意思を見せる吉良に、少年は瞳を細めて、懐から紙を二枚取り出す。

「確かにヘンな生き物と、写真のユーレイは紙にした。今持っているけど……おっと、近づかないでくれよ。うっかり手が滑って、この紙を破つちまうかもしれないぜ？」

「……何が、望みなのかな？」

「僕の望み？そんなの、センセイだったらお見通しでしょう？」

原稿の入った茶封筒に潜んでいたのだ、作家の名前もしっかり見られていたようである。

厄介なファン説が有力になってきた。

「一応言っておくと、僕はあなたのファンだ、『星ノ桜花』先生。でもあなたが『星ノ』先生と予め知っていて、狙ったわけじゃない。狙った相手がたまたま先生だったんだ。これを『運命』と言わずして、何と呼ぶでしょう」

「運命、か………で、結局何が目的だ」

「なに、ちよつとしたゲームをしませんか?」

「ゲーム?」

少年曰く、二つの紙のどちらかを選択して行うゲームのようだ。選択肢は猫草か、吉廣。

選んで名を言った紙が正解なら、二人とも解放する。失敗した場合は両者とも破る。

それ即ち、『死』を意味する。

「僕の力は命あるものを紙に封印することができる。身につけている物も一緒にね。この力——エニグマは純粋な力自体は弱いけれど、能力は強力だ。どうですか、ゲームに乗りますか?」

「やらなかつたら破るだろう、絶対」

「ええ」

キラークイーンは近距離パワー型。同じタイプの承太郎や仗助のスタンドと比べるとその力は見劣りするが、それでも強い。

相手を殴ればそれで終わりそうだが、その拍子に破られては元も子もない。

そもそも場所が自宅である以上、吉良はなるべく暴れたくない。すでに畳とふすまが犠牲になったものの。

「まあ、いいよ。その代わり、合っていたのに破くなんてマネはするなよ」

「……もししたら、どうしますか?」

「信頼をなくすような発言を、自分からするんじゃない。家に侵入している時点でこれを言うのも変だと思うけどね」

吉良の肩に両手を置き、その背後から少年を見つめているキラークイーン。

無表情なその顔から感じられる、無機質な不気味さ。ゾワゾワとした感覚に、少年は喉を鳴らす。

「約束を破ったら、そうだね。当然だが、殺すのはいけない。だから死ぬのがマシと思えるような報復を行おう。それがいいだろ、キラークイーン?」

『ニヤァ』

うつそりと、笑う男。

少年は『星ノ』の狂氣的な一面を今、間近に体験しているに違いない。背中で冷や汗が流れるのに反して、気持ちが昂つていく。心臓の音もまた、速くなつた。

「じゃあ、選ぼうか」

手入れされていると一目でわかる手が伸び、右へ左へとさまよつて、右を選ぶ。

「右でいいんですね？ 本当に」

「……………」

「どうしたんですか？ まさか失敗したらと思つて、怖くなつちやつたんですか？」

「いや、そう言えばと思つてね」

「…何ですか？」

「君、「ヘンな生き物と、写真のユーレイは紙にした」つて、言つたな。「今持っている」とも」

「それが何ですか？」

「少し変じゃないか？ 普通言うんだつたら、「ユーレイは」じゃなくて、「ユーレイを」つて言う方が、日本語として正しくないか？ それに今君が持っているのは本当なんだろうが、「手に持っている」とは、一言も言っていない」

そもそも、と吉良は続ける。

「自分でペラペラとスタンドの力を語る事自体、怪しいじゃあないか。わたしは戦闘経験が全くといいほどないが、自分の力を敵に伝えることは普通しないだろ。よほど自分の力に自信があるヤツか、嘘を吐いているヤツじゃないとね」

平然と嘘を吐く男だからこそ、感じた違和感。

前提としてゲームを始める前から少年が手に持っている紙に猫草や吉廣がいないなら、絶対に当たることはない。

「——ふふっ」

瞳を丸くしていた少年の顔が、歪んで。

まるで欲しかった物を親に買ってもらった子どものように、嬉しそうに笑う。

「気持ち悪……」と吉良が率直な感想を抱いていれば、少年は二枚の紙を落とし、懐から『ユレイ』『ネコ?』とそれぞれ書かれた二枚の紙を取り出した。

名前が書いてあるのは、見分けが付くようにするためだろう。

「さすが、さすが先生。さすがです先生」

「……本当に目的は何だ？ 厄介なファンにしても、まるで試すようなマネをする」

計画的に犯行を起こすなら先ほどのルールといい、もう少しどうにかならはすであらう。

だとすると、狙った相手がたまたま『星ノ桜花』であった——というのは、本当なのかもしれない。

「僕のエニグマが紙に封印できるのは『命あるもの』じゃあなくて、『生物』だ。他にも本やテープルなんかも封印できてしまう」

「四次元ポケット……？」

「でも封印するには、一手間が必要なんです。生物の場合その対象物がみせる「恐怖のサイン」がなくてはならない。そして先生、あなたのサインは包丁が飛び出た後にわかった」

吉良はふすまに刺さった包丁を見ながら、髪に触れようとした。

実際に「恐怖」したのかはわからないが、「怯え」なども恐怖の内側に入る。

心を宥めようとして思わず髪に伸びかけた手。それが実際に触れれば、あとは少年の勝利である。

「言われて、おいそれと髪に触れると思うかい？」

「触れますよ。人とはそういうものだ」

少年の手が紙を破こうと動く。

それに待ったをかけた、吉良。

「あの写真の老人は一応わたしの父親なんだ。破られたら最後、気が滅入って小説に手が付かなくなるかもしれない」

「僕に脅しはきかない」

「…なるべく、家で暴力沙汰は起こしたくないんだがな」

少年に明確な隙を作らせて、紙を奪うにはどうしたらよいか。

言葉でダメなら、目に見えたショックを与えるのが有効だろう。

「…そう言えば、わたしがさつき報復云々の話をした時、ビビってたよな。君の「恐怖のサイン」が出てた。片目を瞑ってたね」

「報復の脅しも、ききませんから」

「まあ、最後まで話を聞いてくれ。ちなみにわたしは右利きだ」

前に出して、開いた手のひらを見せる吉良。

「この手でいつも万年筆を握っているわけだ」

「……何かあるのか？近づかせようたって無駄だ」

「とは言いつつ、しっかり見ているじゃあないか」

タネもかけもない。

あるのは男の背後から手刀を繰り出す、キラークイーンのみ。その手に思わず後方に下がった少年は次の瞬間、愕然とした。

ボトリと、落ちた。

血が落ちた。畳が赤いシミを作って、いつて。

「先生の……手がッ……!!!」

落ちたのは、吉良の手。いや、『星ノ桜花』先生の手か。

キラークイーンが切り落としたそれに近寄って、少年は震える。

痛みに呻く男はそのまま少年の頭を踏みつけ、紙をひったくる。

中を確認しようと開けば、出てきたのは猫草。落ちかけた植木鉢を寸前でキラークイーンが掴み、二匹(?)は感動の再会を果たした。さながら映画のクライマックスシーンのように。

もう片方は吉廣だ。紙の中でも意識はあつたようで、息子の行動に思考が固まっている。

もつとマシンな方法があつたかもしれないが、戦闘経験が少ないことと、相手の力が信

用できないこともあり、ならばと、本体の隙を無理やり作らせた。

どの道、手は仗助に治してもらえる。

その言い訳をどうしようか考えつつ、吉良は左手で右手首を圧迫させながら、少年の頭から足を離す。

あとは思う存分、気の済むまでいたぶり殺し——否、殺しはダメであった。

「とりあえず気を失うまで蹴るよ、いいね？ スタンドじゃ加減がわからんからな」

吉良が東方宅に血相を変えて電話を入れにいくのを横目で見て、毎度の精神錯乱の手をおおうと考えた。

あとは能力が相当強力な以上、岸边露伴に制限をかけさせることも必要だろう。

ついでに、この件の記憶も忘れさせなければならぬ。かなり貸しを作ることになるだろう。

「君が心からわたしのファンでよかった。いち作家として嬉しいよ」

「……………」

「そんなにショックを受けるな。手は治る」

「……………え！」

「…予想以上に嬉しそうだな」

時折いるタイプの作品に感化されて犯罪を犯した——というような、ファンの中でも指折りのヤバイ人間であることは間違いなさそうだ。

吉良は顔を上げた少年の顔を蹴った。
蹴って、蹴って、笑った。

??????

後日談。

スタンド使いに強襲を受けたことと、腕を自身のスタンドで切り落とした件や少年に重傷を負わせた吉良は、しばらく精神科に入院することになった。SPW財団と繋がりのある病院である。

この一件で一番の精神的被害を負ったのが仗助であることは、言うまでもない。
少年に重傷を負わせたのは問題であるが、その少年自体露伴が能力を使つてわかつたことだが、かなりの悪事を行っていた。

人を殺してはいないが、人を恐怖させ、その人間をファイリングする。

吐き気を催すド変態な内容を興味深そうに読むのが、さすが岸边露伴と言うべきなのか、否か。

相対的に吉良はお咎めナシとはなったが、当分は家に帰れないだろう。

入院とはいっても、四肢は拘束されていない。どの道スタンドで破壊できる。その前に十分に意思疎通ができるというところもあつた。

「新刊だ、読めよ」

そして何より、書齋に『ピンクダークの少年』があることが少年の記憶を読んだ岸边露伴にバレたこと。

またかなりの父親想いだったことが吉廣にバレたのが、今回の汚点かもしれなかった。

差し入れて露伴本人からマンガを手渡された吉良は、苦い顔で土産のモモをかじつた。ご丁寧の中にサインまで書かれている。

別にファンではない。

ただ興味本位で読み始めたら、いつの間にか最新巻まで買っていただけである。

「で、少年……名前はたしか「宮本輝之輔」だったな。彼やその被害者はどうなったんだ？」

「宮本輝之輔は、僕がすでにスタンドを悪事に使えないよう制限をかけたからな。誘拐の件は立件が難しいようだぜ。ただでさえスタンドと法は相性が悪い」

そもそも音石明よりも若い少年に、法が適用できるかどうか。まずそこが問題である。

今のところSPW財団の監視下で入院しているが、退院した後は監視を続けながら、普通の生活を送ることになるだろう、という。

また被害者については、無事解放された。

「まあ、宮本自身が人を傷つけておきながら罪悪感を抱いていない時点で、将来事件を起こしそうではあるな。現にスタンドを使う前からコソコソと、人の「恐怖」を観察していたんだ」

気を失った宮本少年は吉良邸に仗助が駆けつけた後、そのまま岸边邸に運ばれた。

「もつと戦い方はあったと思うがな。どこぞのアホウかは知らないけどね、手首を斬ったらしいぜ？それも、自分のスタンドで。東方仗助から聞いたときは耳を疑ったさ

「……「商売道具だろう！」ってな」

「へえー、そんなクレイジーな奴がいるんだな」

「……………」

ジト目で見つめてくる露伴を無視し、吉良はモモを眺める。

キラークイーン的能力は、間違いなく強い。それこそ彼自身が言った「自分の力に自信がある」という意味で、他人に能力を話した上で戦えるだろうとも思う。

しかし爆破というのは、あまりに殺傷性が高過ぎる。

スタンドとはその人間の精神が反映されている。

人を殺す殺人鬼なら、この上なくキラークイーン的能力と相性が良い。だが人を殺す予定は今後もない。

その爆弾の殺傷性の高さ「人を殺さない」という吉良の指針を踏まえると、キラークイーン的能力がヘタに使えなくなる。

露伴に自身の能力を暴露するわけにもいかない。

話せば過去の片桐安十郎の件が掘り返される。そして「真実」が明るみになるかもしれない。

その真実が明るみになるくらいなら、吉良は自分が殺人鬼であつてもよいと思える。

自分が片桐安十郎を殺したのだと、言うだろう。

彼女との約束は破ってはいないのだ。本当に人を殺さなければまだ、彼は人を殺す鬼にならずに済む。

「しかしサイコパスの心理ってのは、よくわからないな」

「……急に何だ」

カタカナ5文字の並びに反応した吉良に、露伴は視線を送りつつ、宮本少年の記憶を読んだ内容を明かす。

「てつきり敬愛する作家の絶望する様子を見たいから、ヤツが行動を起こしたと思ったけど、違ってたんだ」

「…違うのか?」

「ああ、複雑なフアンの気持ち……で済ませるには、行きすぎていると思わざるを得ない」

宮本輝之輔は、『星ノ桜花』にネタを提供したかった――。

それゆえの、凶行。

た。
露伴の口から語られた言葉に、吉良は「ふーん」と、なんとも間伸びした感想を送った。

88話 てテ手ハーレム

青から深い闇色へと変化する。眼前には大量の気泡があつた。細かい粒は浮上していく。白い光の放射線が目には刺さるようだ。

ぼくの目に映つたのは美しい、白い手。暗い水底から白く伸びるその手は、目も眩むようだった。

???????

「吉影くん、起きてよ吉影くん！」

体を揺り起こされ、目が覚めた。人間の騒がしい声に唸りながら固いベッドから身を起こす。

もう使うこともあるまいと、特に品質も気にせず安いビーチベッドを買ったが、きち

んと選んでおいた方が良かったかもしれない。体がバキバキと、異様な音を立てる。

そもそも、わたしはこの場所に来るのに乗り気ではなかった。

「フーン……。かわいいかわいい私というのに、そんなつまらなそうな顔しちゃうんだ」

「三十路イイ年した女性が自分を「かわいい」とか——グハッ！」

彼女の持っていた二つのうちの一つのペットボトルが、中途半端に上体を起こしているわたしの腹に向けて落とされた。冷たいソレは跳ね返って砂の上に転がる。自販機で飲み物を買って行ってくれる優しさとは裏腹に、彼女はわたしを殺す非道さも持っているのだ。

「いいですよーうだ。吉影くんが暑さでへばっている間に知り合いと会ったから、そっちに行かせていただきます」

「知り合いだつて?」

「旦那様はどうぞ、ゆっくりビーチパラソルの下でへばつててください」

「ちよ、……鈴木!」

影の下から日向に手を伸ばした瞬間、灼熱の暑さが腕を焼いた。紫外線は人を殺すつてこの事なんだな。一気に体から汗が噴き出た気がする。

「……………」

無理だ。朝来て、ただでさえ人の多さと暑さ。そして小一時間鈴美との遊びに付き合
わされ、体力がほぼ残っていない。嫁より体力がないのは何故なんだ？

…いや、当然かもしれない。彼女は常日頃、仕事ではしやぎ回る子どもを相手にして
いる。対し、わたしは家が仕事場。これは由々しき問題だ。

「何だか吐き気もしてきた…」

キヤツキヤと騒ぐ周りの音が耳につく。

どうして人間は海に来るのか。そんな言葉が哲学的に思えてきてしまうわたしは、い
よいよ家に帰りたい。

ちなみに今来ているのは杜王町のビーチではない。地元の家など、それこそ地元の人
間なら幼い頃に何度も訪れている。

わたしも歳が一桁の頃は親に連れられ行った覚えがある。あの頃はろくに泳げな
かったが。

独身なら絶対に訪れないランキング上位に入る場所にしかし、わたしは来ている。ひ
とえに鈴美が所望したからだ。こちらも向こうも仕事のスケジュールを調整して来た
のだから、別の日に変えることはできない。『その日』が夏一番の猛暑日と謳われるほ

どの暑さである。天候に呪われている。

果たして、帰るまでに車を運転する力が回復できるのか。

「ハア……」

少しペットボトルの中身を飲んでから、タオルを目隠しにして光を遮断する。それでもうつすらと瞼の裏が明るい。

悪くはないのだ。プロポーションがまったく変わらぬ（本人曰く「努力の賜物」らしい）鈴美の水着姿を見て、率直に綺麗だ、などと感想を述べてしまったし。

ラッシュガードのトップス・レギンス・ボードショーツの3点セットで、肌をほとんど出していないわたしとは対照的である。でも紐はどうなんだ、紐は。露出をもう少しだな、控えるべきだろう。何せ彼女を見る男連中が……。

いや、彼女の薬指に付けてある物を見て、わざわざナンパする愚か者なんぞいはずだ。

「……………」

しかし脳裏には、若い、いかにも軽薄そうな男連中のイメージが張り付く。

知り合いに会いに行っているみたいだが、本当に大丈夫なのか。彼女の手にも他の男が触れでもしたら、殺してしまうかもしれない。

「……………仕方ない、起きるか」

さながら吸血鬼の心境で、ペットボトルを片手に彼女の向かった方角へ足を進める。多少ふらつきながら人混みを縫うように彼女の姿を探していれば、存外すぐに見つかった。わたしが元いた場所とはかなり距離がある。

そこで案の定、髪を茶や金に染めた男数人に囲まれていた。彼女は毅然とした態度で断っている。過去に色々体験すれば、今日の前に立っている男共など仔猫のようなものだろう。

「さて、どう懲らしめてやるか」

THE文系のこの見た目だ。その上で煽れば拳の一発はもらえるだろうな。そうすればこちらも手を出す理由ができる。

「んっ」

こちらがたどり着く前に、彼女と男たちの間に入り込んだ青年がいた。

普段着ている服よりは薄手だが、それでも水着の多い場所では浮いている服装の男。特徴的なヘアバンドと手に持たれたスケッチブックで、遠目からでも一瞬で誰かわかった。何故ここにいる。

「おや？その死にそんな顔をしている男は、吉良吉影じゃあないか」

「吉影くん？………えっ、大丈夫!?顔青白いよ!!」

たしか、ほんの少し前に杜王町に現れたあの白い悪魔が言っていたが、「スタンド使用は引かれ合う」……だったか。

確かに引かれあつたさ。ぶどうヶ丘高校の学生連中に、小生意気な漫画家やその他諸々。

虹村形兆が持っていた矢と、形兆を殺しそれを盗んだ音石明。

件の一件を調べた中で、過去の事件を洗った空条承太郎がたどり着いた一つの答え。それこそ、もう一本矢はあつたのではないか？——というもの。

我が家に訪れた奴とわたしで、危うく殺し合いに発展しかけた。片桐安十郎の死因を探るなら、殺すしかないのだ。止めに入った鈴美のお陰で殺さずには済んだが。

少し過去のことを思い出しながら、ゆっくり自分の体が傾いていく。

——と、わたしが感じているだけで、実際はそれなりのスピードで倒れた。貧血である。

こうしてわたしは、漫画家の男に格好の「ネタ」を提供することになってしまった。ついでに、笑いの種の方でも。

岸辺露伴、いつか必ず殺してやる。

そう、社会的に。

???????

ゆつくりと我が身が沈んでいく。冷たい温度だ。

息ができない。

息が。

「——ッ!!」

飛び起きれば、そこはビーチベッドの上だった。パラソルの下で簡易的な避暑地になっっているその場で、呆然とする。

「大丈夫、吉影くん?」

隣には鈴美がいて、ズズズと、太いストローで飲み物を飲んでいる。君のその、黒い豆が大量に入っている物は何だ。

「これはタピオカって言うの！台湾発祥の飲み物なんだって。前に東京に行った時に偶然見かけてね、売ってたから思わず買っちゃった」

「カエルの卵みた、グエツ」

電光石火の如く、彼女の指がわたしの横腹に刺さる。

その結果、盛大にカエルのような呻き声を出すハメになった。

「…さつき倒れちゃったけど、体調は大丈夫？」

「ああ、問題ないよ。わたしをここまで運んだのは岸边露伴か？」

「うん。露伴ちゃんは漫画の取材の一環で今日このビーチに来てたんだって。吉影くんを運んだらどこかに行っちゃった」

「お邪魔虫が消えてよかったじゃないか」

「もう！どうしてそういう意地悪なこと言うかなあ…」

「わたしと奴は合わんのだよ、性格がね」

腕時計を確認すると、時刻は昼を回った辺り。食欲はないが何も食わないと体力が保たないゆえ、軽い物でも食べよう。

ふいに立った時、海に視線が吸い込まれた。

視界の先では若い男女や親子連れにサーファーなど、様々な人間が海の中を楽しんでいる。

その中で、手がある。

白い手が水面から生えるように伸びて、指の先がゆつくりと上下する。まるでそれは、こちらを。

「吉影くん?」

その声と共に、腕を掴まれた。

白く細い女の手が、わたしの腕に触れている。バクバクとやけに煩い心音を宥めるように、白い手を握って自分の頬を擦り寄せる。わたしの温度より冷たくて、美しい手だ。口の中で唾液が溜まる。

「よ、よよよ、吉影くんっ」

「……………何だい?」

「(っ)、(っ)人があるから!」

「……………そうだね」

顔を真っ赤にして、口をパクパクと動かす鈴美。

相も変わらず美しい手だ。だが海の中から見えた生白い手もやけに脳裏にこびり付く。あの手も美しかった。触れてみたい。指を絡ませたら、肌に吸い付くのだろうか。

「…行くよ、吉影くん」

わたしの手を引き、鈴美は歩き出した。

あの手はきつと、とても綺麗だと思うんだ。

???????

時刻は夕方。海に来ていた人間たちも減り、浜辺や海にはまばらにしかいない。

昼食を食べ、午後は過度にならない程度で遊んだ。童心に戻って砂の山を作ったり、電車を乗り継ぎ遊びに来ていた学生連中に出会したり。

スタンド使いが引かれ合い過ぎだ。魔境でもある我が杜王町から出ているというのに、なぜ一日に何度も知り合いの顔を拝まなければならないのか。

仗助と虹村億泰、それと広瀬康一とその彼女の面々。カップルは二人で海を満喫し、男二人も全力で遊んでいた。

そして学生たちも帰り、日も暮れ始めた頃。

地平線の上には真つ赤な夕日がある。それを持つてきた道具を片付けながら、鈴美と眺めた。

「遊びに来て良かったね、吉影くん」

「……まあ、一夏のいい思い出にはなつたよ」

「ふふ、結構焼けちゃうと思つたけど、吉影くんがしつこく日焼け止め塗つてきたから大丈夫そうかも」

「焼けたら大変だからね、綺麗な肌が」

「女子力高い旦那さんですこと」

女子力じゃない。わたしはただ美しい手の維持のために万全を尽くしているだけだ。パーツモデルでも余裕でやっていけるだろう、鈴美の手なら。……いや、他人にこの手を見せびらかしたくないな。わたしのものだ。彼女も、彼女の手も。

「ねえねえ、吉影くん」

「何だい？」

「えい！」

片付けを終えて荷物を持つとした背後から、彼女が飛びついてきた。

そこまで鈴美が重いわけではないが、今日の疲れもあつて足がもつれる。そのまま砂

の上に倒れた。

仰向けになったわたしの上に彼女が乗ってくる。

重い、と冗談で言えば両頬を遠慮なしにつねられた。

「ほんつと、肉がないね」

「おかしいね、手料理を食べているはずなのに。君がわたしの」

「そうそう。旦那さんの手料理を食べて、すっかり私の体重も増えて——って、叩いていいかな？」

そう心の中で思ったその時にはすでに、彼女の行動が終わっているんだが。要するにもう、わたしの腹が叩かれているんだが。

「ふふ、何だか寒くなってきたね」

「夏でもここらじや夜は肌寒くなるさ」

「吉影くんはあつたかいね」

「そうかい？君の、方が……」

抱きついてくる彼女の背に手を回す。まだまばらに残っている人間に見られるかもしれないが、周辺にはいない。

それにここは海。男女が抱き合う情熱的な光景があつてもおかしくはない。

「…吉影くんさ、お昼辺りから様子が変だったよ？何かあったの？」

「何も無いよ。ちよつと綺麗な手に目移ってしまっただけだ」

「フーン…」

「安心してくれ。わたしの一番は君だよ、鈴美」

「本当に？」

「ああ、本当だ」

「よかった」

起き上がった鈴美は、わたしの手を引いて歩き出す。真つ赤に染まった海へ向かって、一歩一歩と。

血のような色だ。冷たい。彼女の手を払いたい。

彼女が振り返る。真つ直ぐ前を向いていた、鈴美の顔が。

「そう言えば文豪の太宰治も、こうやって女性と心中を何度も図つたんだっけ」

ねえ、平成の太宰さん？などと、彼女は続ける。

わたしは女性と心中を企てたことはないぞ。共に死んでもいいと思つた事は、人生で何度かあるが。

「フフ、まさか一緒に死んでくれ——なんて、ロマンチックなこと言ってくれるのかい、

鈴美?」

「……………」

「鈴美?」

もう腰ほどまで水に浸かった。彼女の方は胸より少し下辺りまで浸かっている。

いつの間にかわたしたちの周囲では、無数の白い手が生えていた。遠目で見た海の中にあつたものだ。それらがゆっくり上下に手を振る。まるで誘うかのように。暗い水底へと、わたしたちを。

ギユウと、わたしに手を握る彼女の手に力がこもる。

「そんな泣きそうな顔しないでくれ、鈴美」

「……………本ツ当に、吉影くんはバカだよ!!」

そうだな。確かにわたしは愚かかもしれない。君の冷たい温度を感じてから、夢が覚めてしまったような気持ちになってしまったんだから。

いよいよ全身が水の中に浸かった。そのまま歩く動作をやめ、水の流れに身を任す。

だというのに彼女は変わらず進む。暗い水底へと向かう。

「ガハッ!」

大量の気泡が自分の口から溢れた。息ができない。異様なほどに白い彼女の手が視界に入る。目も眩むような手である。美しい、杉本鈴美の手。

——今は、私だけを見てて。

意識が遠のいた時、彼女のそんな声が聞こえた。

??

??

???? ??
??

???????

??

目覚めたのは病院だった。

起きた後に医者から説明を受けたのは、自分が溺れたこと。

そうだ。わたしはこのクソ暑い夏に、これまた人間まみれのビーチに来ていた。仕事の取材がてら来ていたが、なぜ溺れるハメに――。

「……ああ、そうだ。岸辺露伴と学生連中に会って、それで……」

わざわざ杜王町から離れた場所に来たというのに、出会ってしまった。

そこで学生たちに泳ぎの勝負を吹っかけられ、入念に準備運動をしてから水泳に臨んだ。さすがに「吉良さんまさか泳げないんすか？」と煽るような笑みを浮かべ言われてしまえば、断れない。ここは大人として、奴らを文字どおりギャフンと言わせねばならなかった。

で、溺れたんだな。

「……………フウー……」

大人の尊厳もクソもないじゃあないか。いや、泳げなかったのは小学時代の話で、その内泳げるようになった。

水泳の授業は苦手だったゆえ、いつも適当な理由を作って休むことが多かったものの。

一人冷静になっていたところ、病室に学生たちが入って来て謝罪を受けた。そうだな、元はと言えば貴様らがわたしを挑発しなければ今の事態に陥っていなかったさ。

最初に溺れたわたしを引き上げたのは仗助で、わたしたちが泳いでいた近くでビーチボールでカノジョと遊んでいた広瀬康一も、一部始終を見ていたらしい。

「……まあ、足が付く場所で溺れたわたしが一番原因アリか……」

泳げたはずなんだがな、高校時代は。

落ち込んでいた仗助と億泰に気にしないように言う。わたしは念のため一日入院になつてゐる。対し他の奴らは帰りだ。時間的に電車は難しい。

「俺はお袋が迎えに来て、億泰も乗せてきます。家ちけーし」

「僕の方は母さんが迎えに。由花子さんも一緒にね」

「スタンド使いの仕業、とかじゃあなくてよかったわね」

そう言うのは、「山岸由花子」という綺麗な彼女を持つている女。

この女もまたスタンド使いのようだ。普通溺れるはずのない場所でもわたしが溺れたことと、さらにスタンド使いが集まった（元々仗助&億泰と、康一&由花子はビーチで偶然出会った）ことを受け、必然とスタンド使いの仕業かもしれない、という考えが彼らの内に過ぎった。これは少し前に虹村形兆の矢から始まった杜王町の件があつたことも原因だろう。

彼らの中で、「不可思議なことⅡスタンド使い」という先入観が育まれてしまったのだ。

だがスタンド使いはおらず、単純にわたしが溺れただけだった。

「とりあえず無事でよかつたス………本当に申し訳ありませんでした……」

「俺も悪かつたぜ……」

「もういいと言つてるだろ。そろそろ君たちは帰りの支度でもして来なさい」

タツパのデカいはずの男二人の背が、非常に小さく見える。仗助と億泰に続き広瀬康一も病室を出て、その後に山岸由花子も続く。

そこでふと彼女が振り返った。

「そう言えば、吉良さん……でしたよね」

「ああ」

「突然突拍子もないお話をしますけど、貴方は俗に言う『幽霊』とかつて信じてますか？」

「幽霊かい？まあ、存在するかもしれないね。かと言って「いる・いない」の議論をする程興味もないが」

「あたし昔から結構そういうのが『視』えるんです。それでこれは、康くんにも言っていないですけど……」

一瞬言いづらそうに口籠った山岸由花子。

「あたし視たの。あの時、康一くとビーチボールをやっていた時に、貴方の足に無数の白い手が絡みついていたのを。その手はまるで引きずり込むみたいに、貴方を沖の方へ引つ張ろうとしていた。すぐに仗助がスタンドで助けて事なきを得たけど……」

白い、手か。

泳ぐ前から、招き猫のように手を動かしてたんだがな。

「そうか。それは考えると……恐ろしいな。いやはや、本当に助かってよかったよ」

「けれど一本だけ、一本だけよ。他の手とは違う動きを——」

「山岸、由花子くん」

「……ッ、はい？」

殺気は抑えなければならぬが、少し漏れてしまったかもしれない。そんな美しい手で二人きりにされると、今は特に滅入ってしまうよ。

本能的な怯えと警戒が覗く黒い二つの目は、それでもしつかりとわたしを見ている。意思の強そうな女だ。

「助かった。それでいいだろう。悪いが疲れているんだ、出て行ってくれ」

「……でも、あの手は貴方を」

「キラークイーン」

出てきた我が相棒を使い、無理やり病室から追い出す。精神的にキている状態でスタンドを使うのはまずかったかもしれない。一気に疲れがドツと来た。

『ニャー』

しかしこういう時、本体を気遣わないのがこのスタンドである。

「ああ、覚えてるさ。目も眩むような美しい手が、ぼくの手を浜辺の方へ引つ張ろうとしたんだ」

わたしは手に招かれていた。

それを知った上で海に入った。ふいに思ったんだ、居ないはずの君がいるかもしれないって。

だって君はあの崖の上で、幽霊とも似つかない存在になっていたからね。でも君は君のままだった。ただ、人を招くようになってしまっただけで。招くエサになってしまっただけで。

だからそう。だからぼくがこの手で。君が望んだから、消したんだ。

だから時折、コンビニへ行くくらい感覚で、自分の命を軽んじてしまいたくなるんだ。

ああでも、消えてもぼくの側にいるのだね、君は。

確かにどうしようもなくバカだ、ぼくは………鈴木美。

暫くシートに顔を埋めて、呼吸をして、思考が限りなく鈍って。

そんな中で見た夜空はとても、綺麗だった。

89話 アメリカ滞在記【前編】

突然だが、わたしは自由の国アメリカに来ていた。

事の発端は、自宅にSPW財団を名乗る黒服の男が訪ねて来たことから始まる。

21世紀に入りすっかり平和を取り戻した我が故郷^{ふるさと}、杜王町。

その裏では変わらず奇々怪界とした事件が蔓延しているが、平穩に暮らすことをモットーにしているわたしに不足はない。要は関わらなければいいだけの話。

しかしスタンド使いである以上、奇ツ怪な事件・事象を避けるのは、どだい無理な話である。

それでもこういった厄の多くは、あの漫画家を筆頭に広瀬康一などが引き寄せている。

さらに杜王町には頼れる新米警察官もいる。

さすがに髪型はガチガチのものから、ソフトなものへと変わった（社会人として変えざるを得なかったとも言ふ）。だが逆に、生粋のハーフの顔立ちと両親譲りの端正な顔立ちがソフトリーゼント革命を起こし、ついでにあのヒトデ博士程ではないものの、1

90近い長身から特に女性の間では杜王町で知らぬ者がいないほど有名になっている。この街だけで限定すれば、岸边露伴に匹敵する知名度。これで新米警官は人柄もいいのだから、もはや無敵である。

話を戻そう。

我が家に訪れたSPW財団の男は、一通の招待状をわたしに届けに来た。

内容はジョセフ・ジョースターに関するもの。一瞬「とうとうあの老人も……」と失礼千万な考えが過ぎつつが、予想は違った。

どうやらアメリカでジョースター氏の米寿祝いを行うらしい。還暦はともかく、果たしてアメリカに日本のように米寿を祝う文化があったのだろうか。

「米国」だけに「米寿」か——と、背筋も凍るシャレが浮かんた。わたしの思考は確実に、面倒ごとを前にして逃げんとしていた。

「吉良様にもぜひパーティーに参加してほしい旨を、ジョースター氏から受け賜っております」

「ありがたいお誘いですが、突然話を持って来られても困ります」

書き物を主にした自由業の仕事と、渡航にかかる費用。その他もろもろを理由に行くのを渋る。とにかくわたしは忙しいのだ！——と。

聞けば、仗助にも招待状と共に話が回っているらしい。

これはジョースター氏が直接頼んだわけではなく、財団の職員の手違いで渡つてしまつたとのこと。

当然、世間の体裁がある。仗助もそれを考慮し話を断つた後、手違いがあつたことが判明しようだ。

ただ、それでも仗助はジョースター氏にお祝いの言葉と、ささやかな装飾品のプレゼントを贈つたそうだ。本当にデキた人間である。というか稀代の聖人である。

後日ミスを起こした職員が土下座しに行ったそうだが、それも「誰にも間違いはありませんよ」で返したらしい。生ける御仏か何かか？

一方わたしの方は、パーティーの開催自体はまだまだ先であることと、渡航費用や宿泊費などの一切をSPW財団が肩代わり致します——と述べられ、退路を塞がれていった。

次第に断れる空気ではなくなつて行き、社会を円滑に生きるために必要な社交性を重視する考えと、「めんどくせえ!!」の考えで脳内が二分する。

アメリカの不動産王を祝うパーティー？魔の巣窟に決まっているだろう。著名人も世界レベルだ、格が違う。

ハリウッド関係者が道端の石ころのようにゴロゴロいそうな場所にわたしのような一般人が存在してみろ、浮くなんてもんじゃない。

何よりジョースター氏を祝うなら、当然その孫も来る。天敵たる人間に遭遇する場所に、好き好んで行きたいわけがない。

「返答はすぐにはなくとも構いません。決まった場合はお渡しした名刺の番号にご連絡ください」

「はあ……」

覇気のないこちらに深々と頭を下げ、財団の男は帰って行った。

そして日が経ち、ホームグラウンドの居心地の良さに不参加の意思が頑なになりつつあった頃。

SPW財団と度々関わりがあるらしい広瀬康一にも件の話が回っていたようで、その際わたしの話も出たらしい。

広瀬康一は恐縮して断ったようだが、伝聞された情報が歪に伝わって、いつの間にか

わたしが参加する方向で話が広がっていた。広瀬↓虹村間で歪んだようだ。

後日、たまたま巡回していた仗助と出会った結果知った。

仗助は虹村億泰から「吉良さんアメリカ行くらしいぜ、羨ましいよなあ〜！」と聞いたそうである。

あの小僧、広瀬康一の話をきちんと聞いていなかったに違いない。

「まあ俺は行けないし、一人ぐらい杜王町の知り合いが行ってほしい気持ちはあるんすよねえー……」

頬をかきながら、若干気まずくに仗助は話していた。こちらに視線を送ることも忘れずに。

仗助の内心は察せた。大方、血のつながる父親の現状がどうなのか知りたかったのだろう。

しかし、私生子の己が行ける場ではない。センチティブな問題を康一らに話すのも中々、気が引けるものだった。

それで白羽の矢を、わたしに立てたわけだ。

「…ハア、いいだろう。君には時折世話になっているわけだしな」

「……！本当っスか！」

世話というか、面倒ごとが起きた時になすりつけているだけである。

イイ大人として、年下にこれくらい器量の良さは見せてやるべきだろう。

その時東方仗助は笑い、そして。

「あつ、お土産も頼みます！」

と、ちやつかりしていた。

???????

そうしてこの吉良吉影が、アメリカに馳せ参じたわけある。

オヤジについては置いてきた。わたしが自宅に不在の間、猫草の面倒を任せるためだ。

別に知り合いに任せればそれで済む話だが、わたしとてこの年で親と旅行なぞごめんである。

ちなみに旅費については丁重に断った。向こう持ちとなれば、飛行機や船など指定の場所を選ばれそうであるし、海外旅行一つで金に困るほど懐が寂しいわけではない。

プレゼントについては……相手が相手だ。悩みに悩み、漫画にした。

どんな高級なものも、ジョースター氏からすれば簡単に手が届くものであり、そんな人物に例えばデパートに売ってそうな菓子折りを持つてくのも言語道断。「気持ちだけでもありがたい」と、彼なら言うと思うが。

そこで思い出したのが、ジョースターの趣味である。漫画を集めるのが好きだった。色々どんなものがあるか出版関係の人間にも聞きつつ、有名どころではない、かつマイナーながら確実に面白いものをいくつか選んだ。有名なものならすでにジョースター氏が持っているだろうしな。

言語は日本語であるものの、「漫画を集めること」が趣味ならさほど問題にはなるまいし、そも、ジョースター氏はある程度日本語の読み書きができていた。

ついでに、岸辺露伴に米寿祝い用の色紙をもらいに行った。

——そう、最近破産したばかりの岸辺露伴くんのもとに。一時、奴は広瀬康一の家に住候していた。

破産の話聞いた時笑いのツボに見事に刺さり、わたしは人生で一番笑った。涙を流して、笑い死ぬところだった。これほど愉快痛快なことはなかった。

話を聞いたのは岸辺露伴本人からである。

奴は最初住まいに困り、年下である広瀬康一に頼むか、年上のわたしに頼むか悩んだ。以前ほどではないが、それでも人付き合いがよろしいとは言えない奴が頼れる人間はハナから少数であつたわけだ。

広瀬康一に頼むには年上としての面子が邪魔をし、わたしには頭を下げること自体嫌という二択。だが、わたしの家にはじめに来た。わたしが爆笑したのち、すぐに帰つたがな。——いや、この表現は少し違うな。何せその時は帰る家がなかつたんだからな……フフツ。

このわたしが爆笑した一件以降、さらに小僧の視線が鋭くなつたが構うものではない。視線で人は殺せないからな。

色紙をもらいに行つた時もスタンドバトルが起きる勢いだったが、奴との付き合いは長い。扱いは心得ているゆえ、無事プレゼント用の色紙をゲットした。

とまあ、プレゼントも量が多いためSPW財団経由で先に運んでもらい、気持ち身軽に空港に到着。

それからホテルのチェックインを済ませ、着替えてから予定時刻に待ち合わせの場所で財団の人間と合流し、目的地まで運んでもらった。

住む世界が違うな——と呆気に取られる豪邸と、だだっ広い庭園。パーティーはその広大な庭で行われ、人がとにかく多かった。

着ている物も上質で、ドレスを着ている人間なんぞ特に身につけた宝飾が日光を浴びて輝いていた。

これがバルスなのか。知る必要もないムスカの気持ちがよくわかった。

わたしの服装は眼鏡はそのままだに、染めてある髪はオールバックにし、衣装はドレスコードを意識しつつ、フォーマルなセットアップスーツにまとめた。しかし周囲が煌びやかなせいで、逆に浮く恐れがある。それは杞憂に終わったが。

飛び交うのは当たり前だが英語。もしくは違う言語。

肝心のジョースター氏が前日体調を崩してしまっただけ、主役が不在での開催と

なった。

それでもこの規模のパーティーだ。ジョースター氏の快方を願う言葉もありつつ、各界の交流の場として機能している。

わたしはジョースター氏の婦人に挨拶したのち、パーティーの中央から離れた。人に話しかけられることもあるが、職はライター関係ということで適当にぼかし対応する。

嘘で「ビジネススマンです」とも言えないだろ。この場にそんなド一般人がいるのが違和感過ぎる。

かと言って別の職にしても、専門の知識を聞かれたら返せるわけがない。

だから嘘にならない、そして多少専門の話もできる「ライター関係」で通すのが一番無難なのだ。「無職です」は論外である。

(帰りたい…)

慣れない場である。すでに気疲れし、出されているビュツフェ形式の食事を取る気も起きない。

だが気を紛らわすために酒を飲むにしても、下手な酔い方をしそうでアルコール類は避けている。

今のところ、人混みの中に白い学ランの姿は見えない。一方で、スージー・Q婦人とお会いした後、その娘のホリイ婦人とは話した。

還暦を過ぎていているらしいが歳の割に若々しく、言葉にすると「ふわふわ」している印象の女性だった。

彼女は日本住まいらしい。もちろん日本語は流暢。夫は空条貞夫と聞いて驚いた。有名なジャズミュージシャンである。旦那はジョースター氏によつて半永久的に出禁らしい。

曰く、大事なワシの娘を盗んだからと。笑つてその娘本人は語っていた。

とんだ親バカの一面もあつたんだな、ジョースター氏は。

ホリイ婦人は空条承太郎とも、ジョースター氏とも対照的な性格だが、妙な鋭さは血を感じさせた。

顔に出しているつもりはなかったが、「疲れてそうね」と言われたのだ。

空条承太郎とはまた別のベクトルで苦手な人物。

あの、「母親」という生き物を感じさせるところが特にダメだ。母親といつても、正常な、それこそ理想像の母親らしいという意味である。

だからこそ、近づき難い。畏怖に近い感情が湧き起こってしまったがゆえ。

まあ、納得できたな。一見すると寡言な男の母親が彼女であるというのは。

遅い植物子というのは、やはり温かな太陽母の光を浴びて育つものだ。

そんな思わぬ接触も、余計に気疲れする原因になっている。

だがこれで終わりなわけがない。ああ、知っているとも。

「あつ、キラさーん!!」

緑を基調とした、体の線がくつきりと出るドレスを身につけた少女。

こちらに気づいた少女は手をブンブン振り、ドレスであるのも構わず駆けてきた。

ヒールでよく走れるものだ。

視線がついと手の方で固定されかけたわたしは、少女の顔に移した。

???????

「久しぶり！あたしのこと覚えてるウ？」

「あ、ああ……」

随分と曖昧な返事になってしまった。体格のよい、それでもしなやかな線の手に魅入っていたが、近づくと別のことにも驚いた。

高い、身長が。ヒールの分わたしが見上げる形になっているが、それ抜きにしてもほとんど同じ目線ではなからうか。

これが遺伝か……。あの白い悪魔も2メートル近い巨躯だしな。

「空条徐倫、空条博士の娘の……以前日本で会ったね。君が幼い時に」

「そう！あたしもうハイスクールに通ってるのよ！」

「……たまげたなあ」

時が経つのは早いな。白い学ランの中に潜んでいた子どもが、ここまで大きくなったのか。

「日本語も流暢だ。勉強しているのかい？」

「ええ、日本の文化に興味があつてね。中学の頃おばあちゃんの家にステイして、短期留学していたこともあるのよ」

「そりゃあ……さぞその期間は、お父さんは寂しかっただろうね」

「ふふつ、そうね。ダディは口にしなかったけど、帰った時長いことハグされたから」

身長のほかにも、親バカも遺伝するようだな。ホリイ婦人も息子の話になった際、花を飛ばしながら語っていた。

「そう言えば、空条博士はお見えになっっていないようだが……」

「ダディは仕事の都合で少し遅れるみたいよ。ダディが来たら、吉良さんが会いたがった、って伝えておいてあげるわ」

「やめてくれ」

「え？でも、ダディと吉良さんって友人じゃないの？」

「いいや。知り合いというか………赤の他人だな」

「……もしかして仲悪かった？ケンエン、ってやつ？」

「仲はあまり……良くはないね。娘の君に言う話ではないだろうが」

「フーン、そうだったんだ」

空条娘は大仰に頷いたのち、じつとこちらを見つめてくる。そしてしばらく何か考えるような素振りを見せ、わたしを手招きした。少し怪訝に思いつつ近づくと、耳打ちしてくる。

「えっーと……偶然さつき向こうで話してるの聞いたんだけど、キラさんってさ、ライター

関連の人なんですよ?」

「ああ、そうだよ。あまり有名ではないけどね」

「どんなの書いてるの?」

「先も言ったが名乗れるほど知られているわけじゃない。恥ずかしいんだ、そこは察して欲しい」

「ええー…まあ、じゃあ仕方ないわね」

一歩離れて、徐倫ははにかむように笑う。

表情筋が死んでいそうな父親とは対称的である。

「じゃあ、わたしはそろそろ…」

さつさとこの場から離れた方が良く、適当に話を終えようとした。だがその前に遮るように圧をかけて、少女は続ける。

「さつきさ、あたしが日本文化に興味があるって話はしたでしょ、キラさん?」

「…ああ」

「興味が出たきっかけがあつて、それがダディが持つてるには意外すぎる恋愛小説だったの。趣味とかお仕事系の本の中にあつたから、見つけた時はメチャクチャ驚いたわ。マジで」

徐倫はその筆者の名前を調べ、かなり有名な恋愛小説を書く作家であることを知った。

のちにドロついたものを書いていることも知ったようだが、そちらは肌が合わなかったらしい。

「はじめはただの興味だったけど、読んだらさ、面白かったわけ。愛の力って偉大なのよ！」

「そうかい」

「それで、日本語の生の文から伝わる雰囲気を知りたくなつたから、日本語も勉強したの！今じゃスラスラ読めるわ。でね、ここからが本題！」

彼女は父親の日本語版の蔵書を改めて読んだ時、気づいた。本に作者の直筆と思しきサインがあつたことを。

調べればその作家が一切表舞台に出ず、そのためサイン会なども開かないから直筆サインのある本が希少なことが知れるわけで。

空条徐倫は一つの可能性に気づいた。父親がもしかしたら、直接作家本人から本をもらつた可能性を。

それは寡黙な、恋愛小説など絶対持っていなさそうな男が持つていたという事実を踏

まえ、より強固な可能性として浮上した。

「あたしは考えたの。もしかしたら今日、ひいおじいちゃんこのパーティーにだったら、その先生が来てる可能性があるかもつて。財団の人やダディに聞いても情報は得られなかったけど。でも、可能性はゼロじゃないじゃない？」

「君はそれで、その先生を探しているわけだね。見つかるといいね」

「ちよつと待つてよキラさん、まだあたしが話してる途中よ」

「すまない、体調があまり良くないみたいだ」

「おねがあい！もうちよつとだけだから！」

「……わかったよ」

徐倫は考えた。コナソくんに憑依された気持ちで。

先生を「X」と仮称して、「X」はまず日本人であることは確実である。

サインに書かれていたサインの筆跡からその性別を考えようとしたが、これは流石に無謀だった。

唯一面識であるだろう父親に聞いても、「さあな」と流されて終わり。

ならば曾祖父にも探ってみるが、ボケた様子で「知らないの〜」と返され、情報を

得られそうになかった。

承太郎が持っていた本の発行日から、何年前にもらったのかは予想できる。

ただ、年がら年中世界中を回っているような父親が「X」と日本で会いサインをもらつたとして、国一つの中から一人を探すのは不可能な話。それも個人で探すなら。

結局色々考えた彼女は、このパーティーに賭けることにした。

対象は日本人で、書き物を生業にしている人間。なおかつ、その「X」の徹底的に表を避けている性格上、作家名や書いている作品名は絶対に語らない。

「X」が書き物をしている職であることを言わない可能性が高かったが、彼女は見つけた。該当する人間を。

そうつまり、わたしだ。すべては空条承太郎のせいに違いない。あの白い悪魔め。

「ねえ、セ・ン・セ・イ」

「ちよつと吐き気がしてきた。君のその綺麗なドレスを汚す前に離れてくれ」

「この秘密は墓場まで持つてくから！だから………その、握手して、ほしいな……つて

!!

「……………」

「お、おねがい！本当にファンなんですっ！」

「……………」

———手。手。

「手」を「握」と書いて、「握手」。

触れられるのか、この手に。

美形で、肉体にも巡られたの一族であるジョースターの人間の少女は、手こそ美しい。彼女が幼い時からすでにその片鱗が見受けられた。

だがわたしも未成熟の手に高ぶるほど節操がない人間じゃない。成熟した時こそ、女の手は一段と愛らしくなる。幼さと成熟の間の両方を持った少女の手もいいがね。

この話をし出すと欲求が加速するからやめておこう。

必要なのは冷静さだ。ああ、喉が渇く。

幸い手袋をしているため、爪の伸びには気づかれていないだろう。雰囲気の変化には気づかれたかもしれない。

努めて、笑う。相手に本能的な恐れを抱かせないように。わたしの衝動的な欲求に気

付かれないように。そしてそれを表面に決して出さないように。

細く息を吐いて、息を深く吸った。

「サインの方がいいんじゃないかい？可憐な少女が、わたしのようなおじさんに不用意に触るといふのもね」

「え、キラさんって幾つなの？」

「君の父親よりは年上だよ」

「へ〜30代くらいと思ってたけど、もしかして40越えてるの？」

「まあ、それくらいだよ」

と、ちやうどその時。普段のわたしなら死神にさえ見える姿が目に入った。今は助け舟である。

少女の後方、そのはるか遠くで頭一つ飛び抜けた男の姿が見えた。あの学坊は間違いない。色が白ではなくなっているが、あの学ランをこの自由の国で堂々と着こなすのは一人しかいない……と、思いたい。

「あれは……空条承太郎か？」

「えっ、ダディやつと来たの？」

さあ今だと、空条徐倫の視線が後ろに向いた隙にとつと逃げようと、歩を進めて――

「体が、動かな——ッ!？」

少女が、振り返る。悪びれもなく、少しジト目でこちらを見た。

「ああ、あたしってダディと同じ特別な力を持つてるの、知らなかったわよね。肉体を解いて糸のようにできるの。気付かれないようあたしの足元から地面に忍ばせてたんだけど……やっぱり、逃げようとしたわね。保険をかけといてよかった」

見れば、確かに少女のドレスの下、長い布地からかすかに見えた足元は一部が不自然に欠けている。

通常の間人ならどう見えるかわからないが、普通の足の状態には見えないだろう。

「まあ、あたしも色々危ない目に遭うことがあつて……。でも自分の身を自分で守れないのって、辛いじゃない？それこそダディに守られてばかりじゃ。だからあたしはこ

の力を得たの。自分自身の、意志で」

「……………」

「ふふ、じゃあ握手ね、センセイ！」

大人びていた少女は年不相応にあどけない笑顔で、嬉しそうに笑った。

そして、わたしの手を——握った。

手袋の上からでも柔らかい女の手の感触が伝わる。むしろ布地があるからこそ、その生々しい感触に直に触れてみたい衝動に駆られる。

脳が手から伝わった刺激に痺れるようで、息を詰めた。

お分かりいただけただけの通り、わたしの女の手への欲求が年齢と共に薄れた…なんてことはなく、変わらず殺人欲求に付随して存在する。

いや、一層餓えている。

女を殺せれば話は変わるが、人類のほとんどが理解しているように、殺しはいけないのだ。理解できないのはそのうちのごく一部の、異常とされる存在。

まあ、わたしは決して異常ではないがね。異常であつても、それを認める気はない。本当に人を殺してしまった時は認めざるを得なくなるが、まだ、殺してはいないのだ。

足掻いているとも、いうのさ。殺虫剤をかけられて苦しみがいているような、害虫のようにね。

「キラークイーン」

脳内が真っ黒に染まり、もう己の意志をまる無視して我がスタンドの名を呼んでいた。キラークイーンは目を細くし、手を伸ばす。

女の手が。ほしい。喉が渴いた。

多分もう殺気も抑えきれなくなっている中、手を切ろうと動いた。

この場合「手を切る」のは物理的な意味である。そして切る対象は少女ではない。

頭がろくに回らずポンコツ具合に磨きがかかっている中、わたしが狙ったのは自身の手。

女の手を切る前に、殺す前に。美しい手が触れているなら、その触れている部分を切つてしまえばいい。

もつとマトモな方法はいくらでもあるが、都合のいい手段を今この時、頭は毛程も見出してくれそうになかった。

きつとわたしの行動が終わりきる前に、奴ならば娘を助け出すだろうとは思ったが。

「……………ダ、デイ？」

不意に気づいた時には少女は目の前から消え、少し離れた場所で父親の腕の中にいた。

わたしが狐につままれたような心境になり、一周回って冷静を取り戻した中、我が相棒はというと。

『ニャー』

空条徐倫に手を伸ばしていたキラークイーンは、彼女から伸びている糸をつかみ荒ぶっていた。

「……………」

気のせいだと思いたい。最強のスタンド使いと、その腕の中にいる娘の生温かい視線が突き刺さっているという事実が。

娘に手を出されかけ、怒り心頭だった男の毒気が抜かれたのは幸いである。

いや、結果的にわたしがあらぬ辱めを受けている。全くもって幸いじゃない。

「何してんだ、テメエ……」

「わたしに聞くな。KQコイツに聞け……」

「えつとお……キユートな猫ちゃんねえ！」

最後に娘の方からトドメを食らい、己の口角がひくつくのを感じながら、この一幕は幕を閉じる。

ただし空条承太郎には娘に手を出しかけた件に対し、問い詰められた。

これについては現状溜まっているストレスと精神疾患を引き合いに出し、どうか容赦された。

奴はわたしから殺気が漏れていたことを、しっかり感じていたようである。

娘には丁寧に謝った。大して気にした様子もなく、徐倫は「いいのよ。もしやられたらセンセイでも倍にして返すから」と笑顔で話した。

ああ、確かに、この父にしてこの娘あり。わたしよりよっぽどスタンド使いとの戦いに場慣れしているようだ。

パーティーの人のほとんどいない隅で起こっていたこの一連の出来事は、人目を集めず大事にはならなかった。

目立たずに済んだ。それだけは、よかった。

90話 アメリカ滞在記【中編】

パーティーも程々に、黒服の連中に拉致されたわたしは豪邸の一室に足を運んでいった。

椅子に座っているわたしの目の前にあるのは、例えるなら石油王が使っているようなデカイサイズのベッド。

そこに横になっている老人は顔に深い皺を作り、ニコニコと笑っている。

ジョセフ・ジョースター。以前よりも老け、顔色もあまり良くない。そんな状態だが老人はわたしとの会話を望んだ。わたしもまたアメリカまで来た以上、一言二言話したい気持ちはあった。

すでにパーティーで起こった件は耳に入っているようで、注意を受けた。

「そう言えば君がくれた漫画、さっそく読んだが面白かったよ」

「それは何よりです」

88歳じゃあ少なからずボケが進んでいそうなものだが、ジョースター氏の受け答えは淀みない。むしろ精神的な面で、若々しささえ感じる。

それも日々、養子にした赤ん坊の成長を間近で見ているからだそうだ。
静・ジョースターの姿もパーティーで見かけた。会話することはなかったが。

「それで……オホン！ 仗助くんは元気かね？」

「貴方ならSPW財団の人間から、いくらでも情報を得ていそうなものですが」

「…イジ悪いことを言うのう」

「おや、どちらがイジ悪い性格なのやら」

肩を竦めて見せてから、わたしは現状の東方仗助について話した。

杜王町のアイドルで、幼い少女から腰の曲がった老婆まで骨抜きにしている事実を告げれば、ジョースター氏は微妙な顔をする。絶対に今「不倫」のワードが頭で回っているな。

「そう心配する必要はないですよ、奴は純情ですから。あのルックスですが、付き合った人数も片手で数えられる程しかないと思いますよ」

「うむむ……耳の痛い話じゃ」

仗助がジョースター氏に贈ったものの詳細は知らないが、概ね予想はついた。

老人の手首に付けている腕時計。身につけている服と比べて、値段が明らかに異なる。

そして「グレート」な奴のセンスを踏まえて、プレゼントはこの腕時計なのだろう。

「……君に面倒をかけてしまうが、杜王町に戻ったら仗助くんにわしが「すまなかつたと言っていた」……と、伝えてくれんか？」

「仗助への招待状の件は財団の人間の手違いが原因なので、貴方が気に病む必要はないでしょう」

「下の者の失敗の責任を負うのは、上の者として当たり前のことじゃよ。それに、仗助くんにも不憫な思いをさせているのは事実じゃからの……」

「……わかりました。ですからそんな意気消沈しないでくれませんか」

「すまんのう……」

わたしが断り、また白い悪魔がこの祖父の言伝を伝えるためだけに、杜王町へ足を踏み入れるのは絶対に嫌だからな。

その可能性は限りなく低いことはわかっている。しかしそれでも、ジョースター氏から言い出しそうなものである。主に、わたしの反応を楽しむために。

「それと贈り物のお返しに、仗助くんにコレを渡してあげて欲しい。成人祝いもさせてもらえんかったからの」

「構いませんが……中身は何ですか？」

「それはヒミツじや。君からの「土産」として頼むよ。ワシ名義じや受け取って貰えんかもしれん」

「……ハア、まあ、いいですよ」

「ホッホ、助かるよ」

綺麗にラッピングされた小さな箱に入った物。帰国したら仗助に渡してやろう。

それからまた、いくらか話をした。

途中、ジョースター氏の武勇伝話で、「若いころ究極生命体と死闘を繰り広げた」と語ったため、やはりボケは進んでいると思わざるを得なかった。「柱の男」など、いかにも漫画っぽい響きである。

ただ、単にわたしをからかっている線が一番濃厚である。

そしてパーティーの後、ホテルで私服に着替えて、忘れず土産を買おうと街へ繰り出した。

今回はすぐに帰らず数日滞在して、仕事の現地取材を兼ねて観光地を回る。

岸辺露伴の追求する「リアリティー」というのは、アーティスト系の人間には切つて

も切り離せぬもので、それは作家のわたしも例に漏れない。

「1+1」を習っていない者が、突然かけ算を持ち出されてもわからぬように。

アーティストが何か生み出す時は、いずれかのものから影響を貰いインスピレーションを受けている場合がほとんどだ。

「無」から「有」を生み出すのではなく、かいつまんだ「有」を繋ぎ合わせて、真新しく感じる「有」を作り出す。

それが創作というものの真相であろう。

帰りたい気持ちは大いにあるが、これもまた仕事。わたしは逞しく生きねばならない。薬入れを懐に忍ばせて。

「岸边露伴くんには『アイラブNY』Tシャツを五枚送ってやろう」

漫画家への純然たる嫌がらせを企みつつ、他にも知り合いに渡す土産を適当に選ぶ。

ジョースター氏の時とは打って変わり、何でもいいだろ、というスタンスだ。一応最低限の配慮はしてやる。

そうして過ごし、一日目は終了。わたしのアメリカ滞在は二日目を迎えた。

その日は滞在するホテルから、二時間程度離れた場所に向かい、観光スポットを巡った。

昼食はスキンヘッドにタトゥーを体のほうぼうに入れた、タクシーの運転手から聞いた食事処で済みます。見た目に対し気さくな男だった。

はじめこそコイツがわたしをカモろうものなら軽く痛い目に遭わせてやろうとも思ったが、人は外見で判断してはいけないな。

この田舎町をよく知っていると思つたら、地元らしい。日本人の、それも一人旅というものが珍しく感じたようで、色々世話を焼いてくれた。

その分チップも要求されたが、十分なギブアンドテイクである。

「そーいやアンチャン、一つ面白い話を聞かせてやるよ」

「…何だい？」

「この街には、俺がガキの時から親に教えられる話があつてな」

田舎ではあるものの、観光スポットが付近にありそれなりに栄えているこの街。

「ここにはこんな話があるそうだ。」

「この街には夜、吸血鬼が出るって噂があんだぜ」

それはきつと、親が子に夜の危険性を一つの教えとして例え話にした結果、出来上がったものなのだろう。

日本は夜に女性が出歩いてても安全性が高いが、海外はそうも行かない。スタンドを持つわたしとて、不用意に夜は出歩こうと思わない。

荒唐無稽な作り話として、その時はなあなあで話を聞いた。

そしてその夕方。ここから少し離れているがまだ回る場所があるため、街のホテルを借りようと思っていたところ。

坂道。人で賑わうその場所で、一つのリングゴが転がってきた。

ありきたりな映画のワンシーンが脳に過りつつ、それを拾い前を見る。

すると前方から十数メートル離れた坂道の上で、人が立っていた。

ほかにも人間がいるが、周囲はこちらに気づいた様子はなく、活気付いている。赤い瞳と、視線がかち合った。

「ありがと、おじさん！」

「…いや、ああ、気をつけてね」

結われていない、金髪の長い髪を振り乱して駆けてきたのは少女。手にはリンゴの他に色々と食材が入ったバスケットが提げられており、服装はお世辞にも小綺麗とは言えない身なりだった。

少女は礼を言う傍ら、名を告げた。その次にわたしの名前を尋ねてくる。

どこか浮世離れた気持ちで「吉良吉影」と答えると、少女は「そうなんだ！」と無邪気に返した。

いや、偶然に違いないのだ。しかしどうも怪奇事件で鍛えられてしまった頭が、この奇妙な巡り合わせを偶然で済ますのを良しとしない。

ジョースター氏が話していた「柱の男」とは別の、かつて戦ったジョースター家と因縁のある、全身真っ黄色で、瞳は紅い吸血鬼の男の話。

それと、タクシーの運転手から聞いたこの街の噂。

夜に、吸血鬼が出るといふ話。

いや、吸血鬼はそもそも日の光には当たれないはずだ。

空を見上げれば、ほら、快晴日和——。

「まったく日の光が漏れていない曇天だ……」

いや、曇り空でも日の光は適用されるだろう。わたしの気にし過ぎだ。

リングゴを拾ったお礼をしようと付いてくる少女に、深いため息を吐く。

運命もそこまで、わたしの胃を苦しめに来ようとはしないだろう。そう、きつと考え過ぎだ。

???????

名を「マイン」という少女の圧に負け、わたしは少女の家で夕飯をいただくことになった。

一度は断ろうとした。しかし道端で泣きそうな顔をされ、周囲の好奇な視線を受けたせいで断れる空気ではなくなった。

少女について行く途中で姿を眩ます手もあったが、しつかり手を握られていたし、曇り空のせいで辺りが暗くなるのが早かったこともあり、家まで送ってやることにした。

これで事件に巻き込まれました、つてのも後味が悪いしな。

そもそも、少女一人にお使いに行かせた親はどういう神経をしているのか。常識に欠

けている。

——と、アレコレ考えていたが、狭い路地に入つて道を何度か曲がつた末に着いたレンガ造りの家に入ったのち、わかつた。少女は老婆と二人暮らしのようである。

腰の曲がつた老婆は杖をついて歩き、少女から話を聞くと深々と頭を下げた。

髪は総白髪で、深い皺が刻まれた顔と少女の瑞々しい肌を見比べてみる。顔立ちはあまり似ていない。

「じゃあおじさん、椅子に座つて待つてて！ばあばと夕ご飯作つてくるから！」
「わ、わかつたよ」

この時すでにわたしが宿を探しているのも二人に伝わってしまったっており、泊まる宿が見つかつていないなら泊まっていつてもよい、と勧められたが、そこまで厄介になる気はない。

それに十分な設備が整つたホテルならまだしも、他人の匂いが染み付いている家で安眠など望めるはずもない。

ゆえに、そこは丁重に断つた。

時間的に食べ終わつてから宿を探しても、まだ余裕はある。ダメだった場合はタク

シーを捕まえて、手間だが元のホテルに戻るさ。

包丁とまな板がセッションする音をBGM代わりに料理を待つ間、旅先で購入した本を耽読する。

ズラツと並ぶのは日本語ではなく、英字。目で追うスピードは普段よりも遅い。

本に関しては、普段から広く浅く読んでいる。健康など関心の高いものは深く読んでいるがね。

例えば、図書館で常設されている新着やおすすめコーナーは一通り目にする。特に恋愛ものはしつかり目を通して、今時の流行りや風潮を捉えるようにしている。特に恋

気づけばデビューしてから十数年。あと数年経てば二十年の節目を迎える。

『星ノ桜花』がすでに恋愛作家として確立している以上、今更バトルものなどに手を出すわけにも行くまいし、書く気もない。ホラーは時折書いているが。

恋愛ものは時代の変遷が色濃く出る側面と、『源氏物語』のように今にも通ずる人間のドロドロとした、不変的な側面を持つ。

どちらも取り入れてこそ、良質な作品が書ける。片方だけでは味気がない。

だからこそ、若い女性が読んで共感するような作品を読んで強烈な胃もたれを覚えな

がらも、これも仕事の一環だと割り切っている。

「——さん、おじさん！」

「……さん？」

肩を揺すられ、睨めっこしていた字から目を離すと、頬を少し膨らませた少女が立っていた。

「呼んでるのに、ずーつと本を読んでるんだもん！ ご飯できたよ！」

「ああ、悪かったね。皿を運ぶのかな？ 手伝おう」

客人の厚意を少女は素直に受け取り、共に料理を運んだ。

老婆の方は杖がないと歩行が難しい関係上、いつも料理の運搬をするのは少女の役目なのだそうだ。

夕食はポーク・ビーンスをメインにした食事である。少女が転がしていたリングはバラバラ死体にされ、虚しくもその身を皿の上に並べていた。

「……」

「どうしたの、おじさん？」

「……いや、美味しそうだと思ってね」

「当然よ！ばあばと一緒に作ったんだもの！」

トマトの濃厚な香りを漂わせる真っ赤なポーク・ビーンズが、血を想起させて仕方ない。

「そう言えば、ご両親が見えないようだが……」

「両親？んー……両親はいないよ。顔も見ることがないから」

「そうかい……失礼なことを聞いたね」

「いいの。別に気にしてないもの。だってマインにはばあばがいるから」

本当に両親への気持ちなど一切ないというように、少女はあっけらかんと笑ってみせた。

その間に料理も運び終わり、三人席の一つに着いた。

少女と老婆は隣合わせに座り、わたしは二人の正面に腰掛けた。位置的にちようど二人の間の前である。

「ばあばの料理美味しいでしょ、おじさん！」

「……………そのだね、別におじさん呼びでも構わないが、一応わたしの名前は教えてあげた
だろう？」

「キラおじさん！」

元気よくわたしの名前を呼んだ少女に、老婆が要らぬ知識を授けた。

「マ イ ン、 知っ て いる か い。」

『Twin^きkle Twi^らnkle Lit^らtle Sta^星r』があるだろう。日本語

で「Twin^きkle」の部分で、「キラ」と言うそうだよ」

「…!Twin^きkle Twi^らnkle おじさん!!」

「ハハ……………」

楽しそうで、何より。反面、己が子どもと相性が悪いと再認識できた。

この、いかにも生命力溢れた姿はまあ良いのだが、そのエネルギーが他者にまで影響を及ぼすのが何ともな。

その一挙一動でこちらの感情までかき乱してくるのだとしたら、それは平坦な起伏の人生を望むわたしとは相容れない。

「ふふ、疲れた顔をしていらっしやいますね」

表情に出さないようにしていたが、老婆にはバレていたらしい。口元の皺をさらに深めながら、笑っている。

「察するに、子どもが苦手なようですね」

「えっ、キラキラおじさんはマインのこと嫌いななの…?」

「いや、別に君のことは嫌いじゃあないよ」

無難な言葉を選び、「笑顔が素敵で可愛らしいよね」と話した。少女はポカンとしたり、赤くなったり、一人百面相に興じている。

ああ、嫌いじゃないさ。好きでもないが。

「そう言えば吉良さんは旅行中とお聞きしましたが、この近くの観光スポットへ行かれたのですか？」

「いえ、まだです。この街に一晩泊まってから、明日向かう予定です」

「あら、そうなのですね」

少量ずつ真つ赤な料理をスプーンで口に運んでいた折、老婆が尋ねてきた。

ついでに、わたしのチマチマ食べている様子を見て、料理が口に合わなかったのか心配された。

料理はトマトの酸味もあり味が多少濃いものの、普通に美味い。

「いえ…その、実はここに来た時に噂話を聞きましたね」

「噂話ですか？」

「ええ、曰く、この街には昔から吸血鬼が出るとか。神だの悪魔だのは信じないタチですが、どうも、赤いスープで血を連想してしまいましたね……。あと、純粹に元から食が細いのです。ですので気にされなくて大丈夫ですよ」

「そう、ですか……」

一瞬、老婆の視線が少女がいるだろう場所へ向かった。

件の少女と言えば、食事を終えてから残っている家事のため部屋を出た。今ダイニングに居るのは、わたしと老婆のみ。

「……お嬢さんはわたしに、両親の顔を見たことがないと語っていました」

「……はい」

「不躰ですが、事故で亡くなられたのでしようか？」

「……あの子は、元はスラムの子なのです」

「スラムの？」

老婆が語るに彼女は元々独り身で、偶然少女と出会い拾ったらしい。

路地裏でひどくやつれ、死にかけていたところを不憫に思い連れ帰った。ただし、法的な手続きは行っていない。

少女を養子にするにしても、古い先短い老婆では少女と離れ離れになるだろう。そして、何よりそれを恐れたのが少女だった。

「私と離れるくらいなら、あの子は「死ぬ」と言ったのですよ」

「……そうですか」

「本当に、困った子です」

しかしその言葉とは裏腹に、老婆の顔には慈愛の色がたっぷり含まれていた。少しの…切なさを残しながら。

独り身の老婆にとって、同じく天涯孤独の少女は似た者同士のように感ぜられるのだろう。

そこにあるのはきつと、深い――、

「吉良さん…？」

「……………」

ゆつくりとわたしの臉は、下りて行った。

ベッドの上には、一人の男が横たわっている。まだ紅い色を残していた窓の外はすつ

かり暗くなり、暗闇に染まる部屋に月明かりが伸び、男の顔を照らしていた。

男が普段かけている丸渕のメガネは、用無しと言わんばかりにベッドサイドのテーブルに置かれている。

閑寂とした世界の中に、キシキシと床板を踏む音が近づく。ついで耳障りな音を立て、男が眠る部屋の扉が開いた。

「…眠ってるわね」

部屋に入ってきたのは金髪の少女。差し込んだ月光に浮かび上がる眩いブロンドは、妖しくも感じられる。

小さな懐中電灯を片手に忍び足でベッドに近寄った少女は、男へ手を伸ばす。

「——ッ!!」

だが、少女が男に触れることは叶わなかった。

少女の手は空中で止まり、そこから一步も動かない。否、足は動くが、何者かに腕を掴まれているように動かせず、移動できない。

「何でっ…起きてるの」

「なぜ、か」

少女の赤い瞳を射抜くように、それまで窺い知れなかつた紫の、凍てつく色が覗く。その瞳を見た瞬間、少女の背筋が凍りついた。

獯猛なその色は、捕食者のものである。喰らわれる側ではなく、喰らう側が持つもの。

「料理の中に睡眠薬が混ざっていたらどう？ 味付けを濃くして気づきにくくしてあつたが、生憎飲み慣れた味なのでね。すぐに気づいたさ。だから都合のいいところで寝たフリをした」

「……………」

「わたしを運ぶのにどうするのかと思つたが、あの老婆は普通に歩けたのだね。協力して引きずられたせいで服がいささか汚れたよ。そして、わたしの行き先はベッドと来た。奇妙な行動だ」

「……………」

「稼ぎのない老婆と子供の組み合わせ。老後の資金があるのかもしれないが、もしあるのだつたら睡眠薬など入れる必要もない。

—— ああ、あの椅子も違和感を抱く理由の一つだよ。長テーブルに三つの椅子。二脚はテーブルと同じ製品だが、もう一脚はそもそも材質が違つた。二人暮らしなら二つで十分だろう。

単純に別の部屋で使っている可能性も考えたが、椅子をはじめからこの部屋にあった。テーブルがある場所にね。

隠れたもう一人がいる可能性も疑ったが、棚の食器など見た限り二人暮らしなのは確実だ。日頃からこの家を住居に使っている痕跡もある。

その上で料理に入れられていた睡眠薬の件を、改めて吟味しようじゃないか」
「うう……」

ギシリと、細い腕が軋む。思わず少女は呻き声を上げた。

「わたしが君と出会ったのも偶然ではなかった。狙いやすい人間を選び、この家に連れ込んでいるのだろう。大方、旅行客を対象に。それで言うと、お人好しな日本人なんかはちょうど良いカモってところか」

そして、連れ込んだ客を眠らせた末に行われるのなら、盗み。

だが盗むなら警察沙汰になるであろうし、それならばこの家がすぐに見つかり捕まる。

だとしたら家に生活の痕跡が残っているのも不自然であるし、効率も悪い。だが少女の人を誘う手口は熟れている。

「なら、人身売買かもしれない。しかしそれこそ旅行者がこの町で次々と行方不明になっているなら、絶対にニュースになっている。

だからこそ、目的がわからない。それも、君が持っているその鞆を見れば分かると思
うがね」

男は、少女が床に置いた黒いアタッシユケースに手を伸ばす。

「ふっ、う、うう……」

「泣くなよ、面倒くさい」

「開けちゃダメエ……!」

「知らないのかい? 人間、ダメと言われるほどしたくなってしまうものなのさ。わたしは単純に中身を確認するだけだが」

男は鞆を開いた。直後、紫目が大きく見開かれる。

「……………どういう、ことだ……?」

パンドラの箱が開かれた、と言うほど仰々しいものではない。

だがその「物」は、一つの結論を男に抱かせるに至る代物であったのに、間違いはな

い。

??????

今回の件は少女とあの老婆がグルで行っている。主体で動いているのは少女だ。

アタツシユケースを持ち部屋を出てリビングに行く、暖炉の側で老婆がロツキング
チェアに腰掛け編み物をしていた。ゆらゆら揺れながら、黙々と手を動かしている。

「貴女が歩けたとは、詐欺に遭った気分だ」

「あら、私は一言も「歩けない」とは言っていないわよ」

「そうですか…もつと優しく運んで欲しかったものです」

それぞれ足を掴んで引きずられたからな。所々体が壁や扉にぶつかったし、髪も服も汚れた。

「fox, sleep」^{理 寝 入} していたあなたがよく言うものね

「わたしも「寝ているのか?」とは、聞かれていないもので」

「ふふふ……しかし随分と真っ赤ね、吉良さん」

「ああ……これは寝込みを襲われかけたものでね。少々黙ってもらったんだ」

「黙って?……アッハッハ!!」

かすかに目を見開いたのち、老婆は口を大きく開けて笑った。

わたしの服は白いシャツに赤い斑点が染みを作っている。紛うことなき血である。

「わたしは仕事柄色々と本を読みますがね。吸血鬼ものの作品もそれなりに目を通している。金髪に赤目つてのは、ありがちといえればありがちな吸血鬼の設定だ」

「面白いことを言うのねえ。あの子が吸血鬼だとでも?」

「それはどうでしょう」

わたしはアタッシュケースを開き、中に入っていたものを取り出す。

それは先の鋭い、わたしも苦手意識があると自覚している代物。

「注射器だ。さて……そろそろ答え合わせをしようじゃないか、老婆。いや、

—吸血鬼—

すると、老婆は裂けんばかりに口の端を吊り上げた。

91話 アメリカ滞在記【後編】

「わたしの推測はこうだ」

まず警戒心の薄い旅行者をこの家に連れ込み、睡眠薬で眠らせる。

その点、子どもで、しかも少女というのは相手の警戒心を緩める上で非常に有効な手段だ。

そして眠らせたなら注射器で血を抜き取る。客には次の日起きた後、「旅の疲れで眠ってしまったようだ」とでも話せばいい。多少の貧血も「疲れ」で誤魔化せる。

これで客の私物が盗まれていなければ、相手は怪しみもしないだろう。

「ふふふ…でも、注射器の痕は残るんじゃないやありません？ そうしたら怪しまれるでしょ」

「確かに、ね。だが治す手段はあった」

「へえ、そうなのね」

「白々しい言い方をするな」

アタツシユケースに注射器とは別にあつた、複数の小瓶。

赤い液体が月の光越しに見てとれ、まさかと思ひ使つてみた。無論自分を人体実験よろしく使う気はない。少女を使った。

「小さい切り傷を作り、瓶の血を垂らしてみれば治つた。結果、血に再生能力を促す効果があることがわかつたよ。それで少女が吸血鬼になつた様子はなかつたが……」

「吸血鬼が作れるのは、吸血鬼の下位互換のゾンビくらいよ。その作り方も血ではないわ」

「その気になればゾンビパニックが起こせるのか……恐ろしいな。まあ、貴女はそのようなことは起こさないだろうね」

「へえ?」

「人間社会に溶け込むようにして生きている。血の確保の仕方からしてもね。」

つまり、目立たないように、生きている。わたしの人生の指針とよく似ていると思つてね、親近感が湧く」

「そうねえ……人間社会は昔と違って戸籍だの何だのと、とにかく生きにくくなつた。」

昔は森に潜んで人間を襲ひ殺しても、悪魔や魔物の仕業にされたのに。

近代革命が起こつたと思えば、あつという間に銃だの戦車だの、果てには核兵器だの、

私でも死ぬブツを生み出して恐ろしいと思ったらありやしない」

「……………」

「レディーに失礼ね、今私の年齢のことを考えたでしょう」

姿とは対照的に軽快に立ち上がった老女の容貌が、変わっていく。

黒い影のようなものに全身が覆われたかと思えば、服装はそのままに麗しき女へと変身した。

死人の如き白い肌。骨と血管が浮き出ていた手が、目も眩むような美しさで。

思わずわたしは口を開けて固まってしまった。

この世で一番美しいカノジョはモナリザの手だと思うが、この手も素晴らしい。人間でない以上、合法的に爆殺し奪うことができる。

——待て、手だけでも再生してしまうか？ 不死性にも個体差があると思うが、手から再生してしまうなら諦めるしかないのか……………？

「おい、キサマ、おい」

「……………」

「おいつー」

頬を叩かれ、ハツとした。警戒して吸血鬼から距離をとっていたはずが、わたしはいつの間にか近づいて、剩れアイドルの握手会に来たファンのように両手を握っていたんだ？ スタンド使いの仕業か……？

「吸血鬼は身体変化もできるのか、驚いた」

「いやらしい目で見ないで欲しいわ。……まあ、“人間の神”と呼ばれるようになった存在を、この目で見たことがあるくらいだからねえ。それくらい容易いわ。だから、あなたの服についている血の匂いも、誰のものか分かるわよ」

「取り乱さないと思っていたが、気づいていたか」

わたしの服についているのは少女のものではない。小瓶に入った吸血鬼の血をキラークイーンに持たせぶちまけた。

肝心の少女は意識を刈り取り、ベッドの上で眠ってもらっている。

「変なマネをするのね。それはあなたが“普通”の人間と違うからかしら？ よつぽど“吸血鬼”側に近い、血でしか喉を潤せないような、バケモノ」

「勘違いしないでくれ、わたしはいたって普通の人間だよ」

「フウン、殺したくて殺したくて、しょうがないって目をしているの？」

「ああ」

「……そう」

「貴女の疑問に答えるとしたら、純粹に気になったからだよ。」

貴女が吸血鬼だと確信に至った時に、その捕食者の瞳が人間の少女へ浮かべていた穏やかな色。

捕食者と被食者がひよんなことから共生している例はなくはない話だが、それは果たして、吸血鬼と人間という構図でもなり立つのか。私的な好奇心が湧いた」

「怒った私に殺されるとは、思わなかったのね」

「殺せるからね」

「……………本気でそう、思っている目ね。なら、本当にあなたはできるのかもしれない。分かるわ、そこらの人間エサと雰囲気が違う。仙道使いじゃあないようだけれど、ね」

「仙道……？」

「いえ、こちらの話。気にしないで」

吸血鬼はそう言うと、歩き出した。わたしの横を過ぎ、そのまま少女が眠る部屋へ向

かう。

ついて行けば、寝息を立てている少女の側に女は近づく。

また、吸血鬼の瞳は穏やかな、春の陽気の如き温度を保っている。

「この娘を偶然拾ったのは本当よ、人間」

「わたしにも名前があるのだが」

「ハツハツハ！お前など、「人間」で十分よ。小さかった死にかけの命を拾ったのは、本当に気まぐれだった」

一年、二年と、この吸血鬼が生きている年月からすれば短い年月が過ぎていき、だがその日々の積み重ねは濃厚で、不思議と充実したものだつた。

それこそ、空虚だつたこれまでの人生と比べれば短いのに長く感じ、その上で、なぜか短いと思う年月だつたと。

「非常食兼、利用道具程度にしか考えていなかったのに——そして、私がそれを説明した上で、この子は私に懐いているのよ？ふふ、可愛らしいでしょ」

「…それが、貴女とその少女の関係性というわけですか」

「いえ、そんな単純なものじゃあないわよ」

吸血鬼は、少女の頭を撫でる。

美しい、カノジョが……とまた気が狂れかけて、こちらに気づいた女に足を踏まれた。割と容赦なく。

「痛つ………しかして、わたしの本質に気付いていたならば、わたしと少女を二人きりにしたのは愚策だったのでは？ 本当に殺していたかもしれませぬよ。それに、わたしが貴女の正体を第三者にバラすかもしれない」

「前者の質問については、匂いで分かったわよ。同属を殺す人間は、血の匂いをプンプン漂わせている。それがあなたには全くなかった。だからこの子に手を出せども、殺しはしないと確信していた」

「『予想』ではなく、『確信』ですか」

「経験則の賜物よ。それでももし本当にこの子が殺されかけて、私が助ける前に死んでしまった時は………それがこの子と私の、「運命」だったということでしょう」

「………運命、か」

「生物は始まりがある以上、終わりがある。それは吸血鬼である私とて同じである。大いなる運命の流れがこの世界を支配し、統轄している。少なくとも私はそのように感じているわ」

「嫌な話だ」

「ふふふふ、確かにねえ。——で、先ほどの質問に戻るけど、後者についてはバラされたら困るわね。ここにはそれなりに長くいるけど、場所を移さなくちゃならなくなる。結構気に入っていた街なのだけれど」

「貴女の平穩をかき乱す可能性のある根本を、先に断つという考えはないのだな」
「過激に生きることほど、平穩とは程遠い。人生回り道をするのが長生きのコツよ」

都会はダメで、田舎がいい。だが、あまりにも辺鄙すぎると利便性に欠ける。

その按配がこの街はちょうど良かった、と語るこの吸血鬼は、一体どれほど長くここに居着いているのか。

少なくとも、都市伝説になるくらいは長くいる。

「ならばその時は、少女を置いて行くのだな」

「いやね、置いて行かないわよ」

「……そうかい」

「意外、止めないのね。人間なら正義の理論を持ち込んで来そうなのに」

「いや、貴女たちのような在り方も肯定したいのだよ、わたしは」

「……やっぱり変わっている人間ね、あなた」

吸血鬼の撫でる手つきに、一瞬少女がむずがるようにして、また寢息を立て始める。

夜、ひっそりと寄り添い合うように存在する、双子の星のような。

そんな隔離された世界が、わたしの目の前にあつた。

「おまえは、おまえがシワクチャになっても、私の非常食。私のもの、M_マI_イN_ンE_ンよ」

悪い吸血鬼だ、とわたしが言うと、女は少しバツの悪い顔をした。

これが吸血鬼と出遭つてしまったわたしの、事の顛末である。

その後、この一人と一匹がどうなったかは知る由はないが、恐らく場所を移してこの世のどこかで仲良く暮らしているのだろう。

深い愛を抱えて、ひっそりと。

???????

アメリカを発つ日の朝。

わたしは空港で手荷物を預けた後、まだチェックインまで時間があるため、空港内にあるカフェで時間を潰していた。

人混みは多く、頼んだサンドイッチを食べながら本を読む。

途中店員に相席を求められ、視線は文字を追ったままなあと承諾した。

パン類を食すと必然、口内の水分が奪われる。サンドイッチ同様頼んでいたコーヒを飲む。悪くない味だ。

「何の本を読んでいるんだい?」

「……………ん?」

唐突に声がして、視線を前に向ける。

どうやら相席になった男が話しかけてきたらしい。男の手には新聞紙がある。

付けていたブックカバーを外しタイトルを見せると、男は眉を寄せた。

「『魚を殺した情婦』……?」

表紙には女性下着に絡まった魚の絵が描かれている。表紙と内容を見ただけでは一体何が何なのか分からないだろう。

「内容がとても気になるね」

「情婦が魚を殺す話です」

「……そのままだな」

「侮っちゃあいけませんよ。作品を読めばこの「魚」が何を例えているのか、情婦がなぜ「魚」を殺したのか、分かってきますから。かく言うわたしもまだ途中までしか読んでいませんがね」

女性下着に「魚」が絡まっているこの表紙の絵も、とあることを暗示していたりする。「ギャグのような表紙でも、中身は全く違う風味なのですからよくできています」と思います

「面白そうだ。私も後で読んでみよう」

男はそう言うと、新聞に目を通し始めた。

その後も、ポツポツとわたしたちの会話は続く。相手は仕事の都合で出かけた帰りら

しい。

不意に男を見ていたわたしの中で、此度の旅で体験した吸血鬼の話が頭によぎった。今日知り合ったばかりの人間に、この話を出すのも如何なものか。だが今後の人生でもう出会うことはないだろうからこそ、話してもいいのでは？——と思ってしまう。

何より、相手の「私に話してみるといい」という気持ちにさせる不思議な、この独特の雰囲気、わたしに口を開かせる。

「実は、わたしは書き物の仕事をしているんですがね…」

と切り出し、吸血鬼の話を「今練っている物語の構想」として話した。

男は新聞から目を移し、興味深げにわたしの話を聞いた。

相槌の打ち方や時折挟んでくる質問のタイミングなど、やはり聞き上手である。

「吸血鬼が出るならば、物語には悪魔祓いも出すのかい？」

「…確かに、退魔する聖職者を出すのも展開としては良さそうですね」

「物語の主軸が少女と吸血鬼の二人なら、聖職者は悪役になってしまいそうだ」

「ああ…そのような意図で言ったわけじゃなかったんですが…：：：気を悪くしたなら申し

訳ない」

「いや、ありきたりな「聖職者＝正義」ではなく、悪として出すのは創作物としては真新しく、面白いと思うよ、私は」

それに、と男は続ける。

「その者のあらんとする場所が正義か否かなど、他人が軽率に推しはかれるものではないからね」

穏和そうな顔とは裏腹に、瞳の中に強い意志を宿す男。

会話の中でわたしの作家名も聞かれたが、言葉を濁した。こちらの様子を窺うと、あの空条の娘とは対照的にすぐに引き下がった。

むしろ「詮索されるのは嫌だったようだね」と、謝罪を受ける。こういうデキた人間はリスペクトに値する。

「おや……そろそろチェックインが可能な時間だ」

「そうか。アメリカの旅はどうだったい？」

「疲れましたね」

「ハハッ！これはまた正直な感想だ」

「事実ですから」

ようやくわたしは日本に帰れるのだ。

さらばだジョースター。白い悪魔に、イジの悪い老人。それと、厄介ファンの娘。では、東の間の相席でした。が失礼しますよ。ええと……」

そこでわたしは、相手の名前をまだ聞いていなかったことに気づいた。取り敢えず無難に相手の服装を見ながら、「神父」と話す。

「私はプッチ、エンリコ・プッチだ」

「そうですか、プッチ神父。わたしは吉良吉影。どうぞ良い一日を過ごしてください」
「ああ、君もね、吉良」

しかし、これまた十字架をデカデカとあしらった祭服だな。

服装はまあいいが、聖職者が坊主の頭に剃り込みを入れていいものなのか。日本の坊さんだったら非難されそうだ。

そして、わたしは日本に帰って来た。

家に到着してすぐ死人のように倒れ、復活してから知り合いに土産を配りに行った。『アイラブNY』Tシャツを渡しに行った岸辺邸では門前払いを受けたので、通りすがった編集らしき女に渡した。

「ええと、露伴先生に直接渡されなくていいですか？というか、どういうご関係で？」

「古い知り合いです。露伴くんのは彼が幼い時から知っていますよ」

「へえー、先生にも子ども時代があったんですね。∴いや、そりや当然誰にもありますけど、想像が付かないっていうか」

この女がS英社から来ているということは、わざわざ東京から時間をかけてここまで来ているということ。

パソコンの普及も高まり、わたしもすでにアナログからデジタルに移行し作業している。編集とのやり取りの多くもパソコンだ。

対し岸辺露伴はアナログ。漫画作業用のデジタル機器もあるようだが、奴の執筆速度に機械の処理の方が追いつかないらしい。人間をやめていないだろうか。

「あの…露伴先生ってえ、どんな感じのお子さんだったんですか？」

「今と変わりませんよ」

「アツ（察し）……何か私の想像通りのイメージかも」

編集の女との雑談も程々にして、岸辺邸の前に停めてある車に向かおうとした矢先。

編集の悲鳴が聞こえたので振り返ると、玄関の扉がほんの僅かに開いていた。ご丁寧にチェーンがかけられている。

その隙間から、こちらを覗く人影があつた。ホラー映画的一幕に出てきそうなシーンである。

「やあ、泉くん」

「あ、こつ、こんにちはー、露伴先生」

「……泉くん？」

妙に見覚えのある顔だと思つたが、なるほど。

確かに彼女は妹も編集になつた——と話していた記憶がある。しかし妹の担当が岸辺露伴とは、世間も存外狭いものだ。

「そしてそこにいるのが、吉良吉影」

わたしは今にもスタンドをけしかけて来そうな勢いのこの青年から、さっさと退散すべきだろう。

「いや、——星ノ桜花先生?」

瞬間、己の歩が止まった。何を馬鹿なことを、と軽口を挟んでやるつもりが、ガッツリと腕を掴まれたことで失敗する。

編集の女が、もの凄い形相でこちらを見ていた。

「星ノ桜花先生……………?」

「いや、違っ」

「星ノ桜花先生!!!」

「人の話を聞いてくれ」

一体どこからそんな力が出せるのか、編集の女に半ば引き摺られる形でわたしは岸边邸に連れ込まれた。

色々質問責めを受けたが、途中から記憶がない。

その原因は漫画家のスタンダード攻撃を受けたからではなく、残っている旅の疲れの上にさらに疲労を重ねられる形になって、早々に考えるのをやめたからだった。

その間岸部青年は、それはもう楽しそうにニコニコしていた。

一方で、アメリカ土産はなぜか編集の女が持つて帰ることになった。

そして、さらに後日。

平穏な生活に戻っていた我が家に一本の電話が入った。仗助からである。

用件はわたしが渡した「土産」に関してだった。

本当はジョースター氏からのプレゼントであるコレについては、「仗助には普段から世話になっているから」と、前置きして渡した。

これならば中身がいくらか高いものであっても誤魔化せる。

「あの、おつ、お袋に指摘されて、ししっ、調べたんすけど……」

「何だい?」

「い、頂いたやつが、す、すすす、数千万の時計ってマジすか……?」

「数千万……??」

ああ、と思った。

今頃アメリカにいる米寿を迎えた老人は、イジ悪い笑みを浮かべているに違いない、と。

9 2 話 純情ボーイズと、BLACKアダルツ

暫く道端の隅で溜まっていた桜の花びらが無くなった時期。春の陽気と初夏に挟まれ、ぶどうヶ丘高校に入った新入生も学校生活に慣れ始めていた。

一部進級の危うかったメンバー含め、仗助たちも二年生に上がった。

その中で進級が危ぶまれた組筆頭の強面な男は、一人帰路についていた。

「ハア、康一の奴はいいよなあ……」

普段は男三人で帰ることが多いが、今日は珍しく億泰一人。康一が恋人の由花子と帰るのはままある事だとして、仗助が所用でないのは珍しい方だ。

「仗助の野郎……抜け駆けしたら絶ッテエタダじゃおかねえぞ！」

仗助の用事とは、体育館裏イベントである。不良どもに面を貸せ、と言うならば億泰もメンチを切りに参加したが、二年ともなれば上背があり、しかも厳つい野郎ども二人に絡む先輩というのでもない。そもそも一年の夏休みに入る手前で億泰と仗助コンビに喧嘩を売る輩などいなくなつた。イキつた一年坊も二人を一度見れば戦意を喪失する。

話を戻し、仗助は現在告白を受けている。それも四月に入ってからほぼ毎日、場所を

変え時を変え、後輩のラブコールが舞い込んでいる。

これには億泰も面白くないというもの。唯一の救いは仗助が恋人を作る様子がないことである。

「一回アイツがホモなんじゃねえかと疑った時もあったがよオ、あの女たちの絡まれ具合を見ちゃあなア〜…」

仗助をアイドルに例えて、特定の女子と付き合つたとしよう。するとファンである女子たちは当然相手の彼女に反感を持つ。仗助にも非難の矛先が向くだろう。

そんな様々な理由もあり、仗助は本気で「好き」と思う女子が現れるまでは純情を貫くつもりでいる。しかし普通にナイスバディなねーちゃんの尻を追っかけてしまう心はある。

「…おっ?」

校門を出て、歩くこと数分。空をボオーと見ていた億泰の視界に、一人の少女の姿が目に入った。

電柱の後ろに並ぶようにして、道路の方を見つめている。背は小動物といった感じで小さく、愛らしい顔立ちだ。

「……あっ!」

少女は億泰に気がつくくと、駆けてきて鞆から何かを取り出す。

そして「あ、あのつ、コレ、をつ……!!」と、吃りながら手紙を億泰の胸に押し付け、逃げるように去って行った。嵐のような少女だ。

近づいてわかったが、校章から一年生というのも分かった。となると。

「……………」

億泰は押し付けられた手紙を見る。名前は書かれていない白い封筒。糊付けするよ
うに貼られたハートのシールが、この封筒が何であるのかを示している。これが漫画
だったらきつと億泰は血涙を流していたに違いない。

「クツソオ!! 仗助め、羨ましいぞオ——!!」

もう両の手ではとうに足りない億泰から仗助へ渡すため託されたラブレター。

この封筒を粉微塵に破り去ってしまいたい。しかし乙女の愛の告白を無碍に出来る
人間でもなかった。億泰という男は。

「ハア、明日仗助に渡してやるか」

そして翌日の朝。いつものメンバー三人で登校している最中、億泰は仗助に昨日受け
取ったラブレターを渡した。

「つけ、モテる男は何トカカントカってやつだな」

「相変わらず仗助くんは女子に人気だねえ」

我関せずな康一もしかし、可愛さと凛々しさを両立させた姿に魅かれる女子も少なからずいる。だが由花子ガードが強烈かつ凶悪なため、誰も近寄る事ができない。

「お、おお、億泰!」

「あ? 何だよ」

手紙に目を通していた仗助は、億泰の肩を遠慮なく叩いた。その表情は未確認生物でも見つけたような驚愕の色に染まっている。

「このラブレター、オメー宛だよ!!」

直後、仲良くそろった康一と億泰の「エエ——!!?」という声が、朝の杜王町にこだました。

して、放課後。

待ち合わせの場所を指定された億泰は、緊張のし過ぎて人殺しさながらの顔で校舎裏にいる。

少し前の時期なら桜の下ということもあり、格好の告白スポットだったこの場所。

友人の一大事だと駆けつけている仗助と康一は、校舎裏の様子が見える建物内で窓にへばり付くようにして見守っている。

「億泰くんが告白されるのって、僕初めて見たよ」

「それを言ったら俺もだぜ、康一。アイツ大丈夫かな…」

「女の子の罰ゲームとかじゃなかったらいいね…」

「その可能性もあると思ったから、余計心配なんだよ」

億泰の顔は十人中十人が恐れる程には怖い。さらに平生は物腰柔らかい仗助と違い、年がら年中「ア、アン？」な男である。

友人として接していれば表情豊かで飽きない奴だと分かるのだが。

「おつ、来たようだぜ」

「結構可愛い女の子だね」

桜の木の下、直立不動の男の元に小柄な女子生徒が近づいてきた。

少し開けてある窓から聞こえてくる外界の音に、二人は意識を集中させた。スタンドを使えばもつとハッキリ外の音を聞き取れるはずだが、そこまで頭が回っていない。

少女は暫しモジモジとして、意を決したように顔を上げる。

「わた——と、——い!!」

風の音に紛れ、正確な声までは聞き取れなかった。

「——」

少女に億泰は何か言葉を返す。すると少女は口元を両手で隠すようにし走り去ってから、立ち止まってまた振り返り、右手をブンブンと振った。

「これは……成功か?」

「いや、まだ分からないよ。「騙されてやんのー!」って手を振ってた可能性もある」
緊張が残る二人は突っ立ったままの男の元へ向かった。

告白現場に着くと、億泰が口を呆然と開けたまま間拔けな面を晒している。

「結果はどうだったんだ、億泰!!」

「大丈夫!たとえ恋が儂くても、僕らの友情は砕けないから!!」

「……………つてよ」

「「え?」」

——デートしてくれ、ってよ。

虹村億泰の少し遅れた春が、始まろうとしていた。

??????

「で、来てやったが話とは何だ？」

先日、東方仗助から「相談したい事がある」と電話先で告げられ、週末の午後、東方宅にお邪魔することになった。

朋子婦人は留守にしており、リビングにいるのはわたしと仗助、それと虹村億泰と広瀬康一の四人であった。

今回仗助の頼みを断らなかつたのは、過去に幾つか恩があるからだ。

「おつ、美味そうだぜ！」

手土産に持ってきたケーキに一番最初に億泰が食いついた。行列のできる店の甘物

だ。味は保証する。

買ってきた：というより、金だけ渡して編集に買って来させたものであるが。

ちやんと編集の分も、何なら朋子婦人の分も用意したから異論はないだろう。

「吉良さんは食わないンスか？」

「結構だ。甘い物は好きじゃない。それより本題に入ってくれ」

「ウツス」

まず初めに聞かされたのは、虹村億泰が後輩の女子生徒に告白された、というものだった。

正確に言うと「好きです」をすっ飛ばして、「私とデートしてください！」と言われたらしい。

「うん。それで、わたしが呼ばれる理由がどこにある？」

「いやほら、恋愛の専門家じゃないツスカ、吉良サン。いっぱいそういう本書いてるでしょ」

「専門家じゃないが？」

この場に彼女がいるのは広瀬康一のみ。なら彼の体験談を参考にすればいいとも思うが、広瀬少年の彼女は当初、それは独占欲丸出しな女性だったらしい。

というか恋人にもなっていない少年を拉致監禁したらしい。ソレ普通に犯罪じゃな

いか？

「仗助はどうなんだ。飢えた魚群に食い漁られる釣り餌のような有様だろ」

「俺は恋愛経験がほぼゼロなんで。つーか人の例え方ッ！」

「恋愛の知識を付けたいんだったら本でも読め。わたしを呼ぶな」

「最初は億泰に読ませようと思っただんスけどおっ……」

「オレ、本とか読むとすぐ寝ちまうからよ！」

わざわざ親指を立てて笑う億泰の口元には、見事にクリームが付着していた。

要するにコイツらは恋愛指南役としてわたしを呼んだ。主にデート当日に向けての先生として。

例えばデートにはどのような服を着て行ったら良いか。女子を不快にさせないように気をつけるべき事は何か、など。

「……百歩譲ってわたしが手伝ってやるとして、アドバイスを貰うなら同性から得た方がいいだろう。朋子婦人とかな」

「考えてもみてくださいよ、億泰だってダチの母親から意見もらうの恥ずかしいでしようよ」

「吉良さんなら百戦錬磨ですよ！何てったって、あの大先生ですからね！」

「作品で描く恋愛模様と実際の恋愛は、似て非なるものだよ康一少年」
過剰な期待痛み入るが、本当に過剰だ。

デートは来週の日曜で、杜王駅で待ち合わせてから遊園地に行くことになっているよ
うだ。

そこに広瀬康一は彼女とデートのついでに様子を見、仗助も行くらしい。その構図だ
と一番見目の良い男が彼女ナシという愉快的図が出来上がる。

「そこは吉良さんも行きましようよ」

「貴様と、だと……?」

「露骨に嫌そうな顔やめてもらっていいスカ。俺が小学校低学年くらいの頃までは、市
民プールとか連れてつてくれたでしょ」

「へー、本当に仗助さんと吉良さんって親戚の子供とおじさ……お兄さんって感じだね」
「年齢的にはもはや親子って感じじゃねえか?」

コイツらとわたしの年齢差は十八だ。十は……じゅうは、ち……!?

まあこの歳だったら、子供の一人や二人いておかしくはないか。しかし現実で年齢を
直視させられると結構くるな、精神的に。

そう言えば年下のあの海洋学者——いや、確か博士になったんだか?——にも娘がい
たくらいだしな。

「……………」

「吉良さん、急に死んだ顔してどうしたんスか？」

「仗助くん、僕らが不躰な話しちゃったからだよ」

「康一けどよオ、歳とってんのは事実だろ」

「もう、億泰くんまで！」

全員その個性的な頭を爆破させてやろうか。

そんな物騒な考えが脳裏に過ぎりつつ、一人紅茶を黙々と飲み進めた。

恋愛指南については結局引き受けることにした。

と言っても、デートで引かれない服を見繕ったり、そのコワモテな面で相手を萎縮させないための立ち振る舞いだったり、最低限のマナーを教えたくらいだ。

一旦亀ユードパートに行ってから再び仗助の家に戻ってきた現在は、三人が座って人の話を聞いている。うち二人はいらない気もする。

遅刻は当然厳禁であるし、紳士然とした男の方が好まれやすい。仗助なんかが良い例だな。

奴は頭に触れさえしなければ誰に対しても基本紳士に接する。不用意に敵を作らな

い処世術を知っている。

まあ相手の女子生徒が虹村億泰のどこを好きになったかで、話は変わるだろうがな。もしかしたら敵つい姿に好意を抱いた可能性もある。

「一番重要なのは自分本位に動かず、常に相手を慮って行動することだ」

「おもんばかる?……誰が「バカ」だとコラア!」

「ちよ、億泰!」

「バカじゃない、「ばか」だ。胸倉を掴むんじゃあない。人を思いやれ、と言ってるんだ。そうだな、今のわたしの状況じゃ君に他人を「慮る」のは無理な気がするがね」

「………すみません」

多少煽ってみたものの、存外大人しく億泰は頭を下げた。この分だったら大丈夫だろう。

…多分、だが。後のことまでわたしが保証する気はない。

「オレすぐ頭に上つちまうからよオ…」

「二度目に返れる理性を持つているからそこまで重く考える必要はない。さらに煽られた場合は…そのまま手を出さだろうが」

アレコレとしているうちに、時刻は夕方を回った。

解散になった手前帰宅した朋子婦人と出会い、土産のケーキが冷蔵庫にあることを告

げる。

「なになに、男四人が揃って話し合いなんて怪しいわね」

「お、お袋お帰りい……」

「ふーん、へえ……」

仗助の上から下を見て何か考え込むようにしていた婦人は、指を鳴らす。ズバリ恋の話ね、と。

「アンタにも春が来たって事かしら？」

「お、俺じゃねえよ！……あつ」

「俺じゃねえ」ってことは、康一くんか億泰ってことになるけど、康一くんには可愛い彼女いたじゃない？ってことは……」

婦人がニヤニヤと億泰へ視線を向けた瞬間、「うおおおお!!」と叫びながら億泰が家を出て行った。

自宅がある方向かわず、夕陽に向かって走っている。アホか？

「ふふ、康一くんも仗助と遊んでくれてありがとね！またいつでもうちに遊びに来てい
いわよー！」

「は、は……」

相変わらずエネルギーな母親だ。若者三人の気力を合わせても婦人には敵わな

い気さえする。

「吉良さんもいつも悪いわね」

「いえ……」

日が明るいほど影を色濃くするように。自分の暗闇が際立つて感ぜられるようになった辺りで、形骸的な笑みを返して東方宅を後にする。

「あんまし変な事は、仗助たちに吹き込まないでやってよ！」

わたしが振り返ると婦人は肩を竦めてみせる。仗助は「変なコト？」と首を傾げた様子。

彼女の発言はまだ未成年である彼らに18歳以上の知識を与えるな、という訳ではなく、もっとわたしの本質に即して言っている。

「ピュアな奴らに、大人の話はまだ早いですよ」

「大人な話ってまさか……!!え、エロいはな」

「仗助、扉閉めるから邪魔」

最後まで言い終わらず、母親に耳を引つ張られながら仗助は扉の奥に消えて行つた。とある一家の様子を観察するのも悪くないが、ドツと肩に乗った疲れに溜息が出た。

???????

星ノ大先生の恋愛講座が終わった夜の事。

夕食を取る仗助は、エロい話の方に頭が引つ張られていた。

それに目ざとく気づいた朋子が息子に呆れた様子を見せる。

「アンタね、鼻の下伸びてるわよ」

「エッ」

「これだから思春期ボーイは……」

数日前から何やら仗助がコソコソとしていることには朋子も気付いていた。露骨に「週末出かけて来たらどうかなあ……つて……ハハ！」などと、意味深な発言をする息子。

コレはついに女でもできたかと勘繰りつつ話に乗ったが、蓋を開けてみると仗助ではなく億泰だったらしい。

虹村億泰が近所な事と、不良だからこそ抱く可愛がりたい精神、それとその複雑な家

庭事情も相まって、朋子は億泰を目にかけている。

偶に食事に呼んでやることもあった。すると「美人のカーチャンの飯はやっぱうめエ!!」と涙ながらに食べるものだから、殊更可愛いというものだった。

「アンタももうちよつと億泰の素直さを見習いなさい。じゃないといつまで経つてもカノジヨできないから」

「お、俺には俺のペースがあんだよ」

「別に私は「カノジヨ作るな」とは言つてないわよ。学生の恋愛以上の行為はするな、つて言つてるだけで」

「学生以上の、こと……」

「責任の取れないセックスはするなつてこと」

「ゴフオツ!!」

味噌汁を飲んでいた仗助は、気道に入ったそれに咽せた。そしてそのままテーブルに額をつけ、プルプル震えた。ちいかわのように。

「つーか、母さんが吉良さんに言つてた「変なコト」つてよオ、どーゆう意味だったんだ？」

「ああ、あれねえー……」

朋子はリモコンを取り、息子が見ていた番組から変える。非難の声が上がったが、どこ吹く風だ。

「……………ほら、あの人、昔色々とあったじゃない」

「ん？……………そうだな」

『S一家殺人事件』。その事件があった前後で、東方家も良平の死や一時危篤状態にまでなった仗助の件があり落ち着く間がなかった。

その事件の渦中に吉良がいたのは仗助も何となくだが知っている。だが男の自殺未遂の件は朋子も知らない。仗助だけが、知っている。

「お父さんと関わりがあったのも一つの縁だったから、気にかけるようにしてたけど、見る度死にそうな顔してたでしょ？というか、よく死にたいのを我慢したと思うわ」

「……………まあな」

「当時ね、心配だったのもあったから、新しい恋を勧めたのよ」

「母さんが？」

「そう。それから徐々に回復してっただのは覚えてる。けど、うーん……………」

「何だよ、歯切れがわりいな」

「子供だったアンタは気づかなかったでしょうけど、吉良さんって纏う香水の匂いがちよくちよく違ったのよ」

「香水？単純に付けるもんを毎日変えてたんじゃねえの？」

「明らかに女の物の香水を、男の人が好きで付けると思う？」

「アツ……………」

「それとこれは女の勘でしかないけどね、あの人危ないわよ。死にそうって意味じゃなくて、近づいた方が危ない目に遭うってこと」

「そうか？怒ると怖いだけの平凡な人……って俺は思うけど」

「だからあ！女の勘、って言ったでしょ。明確な根拠は香水の匂いくらいよ」

「つまり母さんが言いてえのは、吉良さんが遊び人ってことか？」

「……まあ、そんな所ね。女を弄んだら夜道にグサツとイかれるかもしれないでしょ」

朋子は持っていたフォークで、グサグサと息子の腕を刺す素振りを見せる。

一方母の言った「変なコト」の意味を理解した仗助は、へえーと、ため息ともつかぬ声を漏らす。

「人は見かけによらねえなア……」

「女の子にモテモテなアンタが純情なみたいに？」

「そこは「ギャップ」って言えよオ……！」

東方家の食卓は、今日も賑やかであった。

???????

当日。目立たない服装に身を包み、遊園地に召喚されたわたしは早速グロッキーになつていた。

「メリーゴーランドで酔う人間がいたんスね」

「わたしもノリノリで馬に跨る高校生がいるとは思わなかつたよ」

「いやあ、はは、ちよつちテンション上がつちまつて。何せ遊園地つて久しぶりなもので」

電車や飛行機など一定の方向に進むの乗り物は平気だが、不規則に動くものはダメなんだ。

ジェットコースターなど過激なアトラクションに乗らなければ大丈夫と高を括つていたが、全くダメだった。

空いているからと乗つたあの馬畜生は、上下にも揺れやがったのだ。

……いや、アレくらい大丈夫だろうと判断した自分にも落ち度がある。

「わたしはいいから、貴様は行け」

「わかつたツス。——おしつ、全部のアトラクションを制覇してやるぜ！」

すでに億泰を見守る会は存在せず、広瀬康一も普通に彼女とのデートを楽しみ、仗助も童心に帰って遊んでいる。

序盤だけしか億泰の様子は見られていなかったが、緊張し過ぎず話も普通に交わしていたし、あまり心配いらぬような気がした。

「気持ち悪い……」

薬は飲んだがまだ吐き気が治らない。

日陰になつていているベンチを丸々一個占領し、シャツの上に羽織っていた上着を顔にかけて眠りの体勢に入った。貴重品は財布から抜いた数枚のお札を除いて仗助に預けてある。

そして、そのまま眠りに入つたわたしが起きたのは、夕方頃だった。

途中心配した係員に声をかけられたが、問題ない、と返した。

お昼に到着してすぐにダウンしたので、かれこれ数時間は寝ている。伸びをすると体がパキパキと鳴った。吐き気はほとんど治っている。

「虹村億泰はどうなつたんだ……？」

確か、事前の予定ではそろそろ観覧車に乗るんだったか。暗くなり始めるところではライトアップして、それを観覧車から眺めるのがカップルの定番なんだとか。

調べた学生連中が語っていた。

「そう言えば鈴美と遊園地に来たことはなかったな…」

主に、わたしが酔うからという理由で。情けない話である。

『ニヤァ』

懐古の念に浸っていれば、キラークイーンが突如現れた。

呆然とする主を他所に、観覧車に向かつて行く。するとあら不思議、わたしの体も引きずられて行く。

「おい、何が悲しくてカップルばかりが並ぶ場所にお一人様で乗らねばならんだ」

『ニヤァ』

おれがいるやろ、な雰囲気纏わす我がスタンド。お前は実質わたしだから一人だ。

いや、そうなるどわたしが本当は観覧車に乗りたいと思っていたことになるな…？断じて乗る気などない。

つまり、一応お二人様になるのか…？

「ハア…わかった、乗るよ」

『ニャー!』

そうして乗り込んだわけだが、まさかの前列に億泰と女子生徒がいた。妙にしんみりとした空気で、カップルにしては距離が離れている。

順番を待つ間、双方の話を盗み聞いた。億泰の方は後ろにわたしがいると気づいていない。

「……そっか、お前転校しちまうのか」

「……うん」

どうやら少女の方は、転校するため想いを寄せていた億泰に思い切ってデートを申し込んだようだ。

告白が「付き合ってください」ではなかったのも、すぐに離れてしまうからこそその内容。

もし億泰がデートを渋れば事前に転校の話をして、思い出作りの上でお願いするつもりだったらしい。

しかし即億泰がOKしたため、喜びで舞い上がってしまいその時は話すのを忘れ、その後話を切り出しにくくなり今日に至った。

「ごめんね、言えなくて」

「気にすんな。今日はオレも楽しかったからよ!」

「……!! あ、ありがとうっ！」

二人が観覧車に乗り込む。わたしの隣では今か今かと相棒が瞳孔を細くさせている。その顔は獲物を狙う表情だぞ。

「わたしには眩し過ぎるな」

自分の番が来て、眼下に広がる景色にチラリと視線を向ける。幸い吐き気は襲って来ない。

広瀬康一とその彼女も、億泰とその相手も、仗助も、皆純朴で真っ直ぐだ。

真っ直ぐであるからこそ、歪みを知らぬ。正確には歪みそうになっても、持ち前の正義感によって正しく修正される。

穢れを知らぬ若者は文字通り「眩しい」。

自分とは違う生き物のようにさえ感じられる。

でも腹を裂いてみれば同じ臓物があって、赤い血が流れているとわかる。

「………フウー」

ギギギと、爪が伸びた。そろそろ欲求が抑えきれなくなる。

今夜にでもどこぞの女を引っ掛けるか。

「と、その前に猫草がじゃれつく用の土産でも買ってくか」
『ニヤッ!』

わたしの言葉に、キラークイーンはご満悦そうだった。

??????

杜王駅に帰って来た。

億泰は迎えに来た少女の車に手を振り、デートは終わった。

「ふわあ…眠ッ」

「貴様は友人そつちのけで遊びおって…」

「へへへ、まあいいでしょ。俺だけ悲しい人間だったんスから」

閉園ギリギリまで遊び、本当に全てのアトラクションを制覇した少年は、電車内で熟睡していた。

車が見えなくなるまで手を振っていた億泰は、突っ立ったままである。

彼女を送り届けるため康一少年はすでに帰路に就いており、残ったコイツらはコイツ

らで、二人つるんで帰るだろう。

「何だかんだ文句言いつつ、おれたちに付き合った吉良さんは優しいツスね」

「お前らというか、お前には個人的な貸しがあったからね」

「そんな優しい大人は俺たちを家まで送ってくれたりとかは——」

「歩け。嫌なら母親に泣きつけ。「全力で遊んだせいでもう歩けません」ってな」

「トホホ……」

「…おつ、仗助に吉良さん!」

ねだる少年を振り払い払い駐車場に向かっていると、億泰がこちらに気づいた。

顔は晴々としている。奴は今日の大まかな経緯を話した。

わたしが知っている部分は省き、純粹に気になっていた少女がこの男のどの部分を好きになったか尋ねると、億泰は頬をかきながら語る。

「向こうが数学の先生に用があつてクラス分のノートを運んでた時よ、不良にぶつかつて倒れたらしくてな」

億泰は覚えていなかつたが、偶々そこに通りがかつた奴が少女に詰め寄る男どもにガンを飛ばし、窮地を救つたのだそうだ。

そしてノートを拾つてやり、お礼を言つた少女に「気にすんな」と返した億泰を見て、

少女は己の恋心を自覚した。

「オメーいい所あんじゃねえかよオ！」

「そりやこの億泰様にだつて美点の百個や千個あるわい！」

「じゃあ具体的にその百個や千個を今ここで述べてみたまえよ」

「エツート……まずカツコいいだろ！次に……カツコいいだろ？」

傷心に浸っている様子は見た所ないか。それか隠しているだけで、家に帰ってしんみりとするのか。

まあまだ若いのだから、これから恋の一つや二つ、いくらでも経験する。

今この時の感情が、この少年にとっては大きいものなのかもしれないが。

「周りが恋人を持つ友人とモテ男の友人に囲まれているが、君をきちんと見て好きになる女子はいるということだ」

「大先生……オレ今ジーンと来てるぜ」

「大先生はやめろ。億泰くんはだから、自分の良いところを大切にするといい」

「ウツス!!」

「俺にも何かアドバイスくださいッス！」

「ない」

「ひでえ!!」

お前は女がよりどりみどりだろ。何を助言することがあるんだ。

それから二人と別れ、別市の歓楽街の方へ車を走らせた。服は上着をカジユアルなジャケツトに変えた。髪も後ろに撫で付けている。

そして信号待ちをしている間、駄弁りながら歩く男二人に再び遭遇した。

仗助はこちらに視線を留めると、目を丸くする。いったい何だと言うのだ。窓を少し開けると、明瞭に声が聞こえる。

「あ、遊び人だ!!」

「遊び人ってなんだよ、仗助エ」

「これから女を食い物にする気だぞ、この人!!」

「な……何だってエ……!!?」

途中で煩わしくなり窓を閉めた。

尚も何か言っているが、信号が変わったので走り出す。

「奴らにはまだ、恋より友情の方がお似合いだな」

『ニヤー』

さて、夜はまだ長い。

93話 これでも「吉」が二つある

キヤツキヤと騒がしい音が瘦身の男の耳に入った。

彼は今子供向けのアミューズメント施設にいる。自宅から車で小一時間程で来られるこの場所は、最近オープンしたばかりだった。

その施設内の一角、遊具が立ち並ぶ隅で男は自動販売機で買った水をチビチビ飲む。親が子供を見守れるようにと設置された複数のベンチ。男が座る横では赤子を抱き抱えている女と、ママ友らしい女が雑談に花を咲かせている。

「葛西さんとこの旦那さん、浮気したんですって」

「あら本当？子供もまだ小さいのに」

丸聞こえなその声に、男は内心舌打ちした。そもそも場違いな場所に来ているのだ。それもこれも知人の女性に、仕事の都合でどうしても一日家を空けなきゃいけないの——と、その息子を預けられたのが原因だ。

本当なら家で本を読んで、クラシックでも聞きながら穏やかな一日を過ごすはずだった。しかし女性の頼みを断れなかった。相手の複雑な家庭事情を理解しており、さらに男と遊ぶために息子を押し付ける女性ではない事も知っていたからだ。女は尚も「じよ

せふ」の虜である。

「ハアー……」

家に帰りたい。

男が少年をチラ見すると、仲良くなった子供と楽しそうにボールが敷き詰められたプール（水はない）で遊んでいる。

少年が友達からこの場所の話聞き、「つれてつて！」とねだられたことで訪れたが、はしやぐ子供の声を聞くほど萎れていく錯覚さえ覚える。こう、内側から精気が奪われる。

「まあ、預かったからには怪我しないよう見てやらんとな」

ほんの一瞬と、そして予想だにしないキツカケが大怪我に繋がる。

ガキは予測不能の生き物だ。男の経験則である。

「あの balan 小僧と比べれば、仗助は何倍も利口だしな……」

制御不能の人間魚雷の如きキテレツなヘアバンドを付けた少年。その子供をあしらえるのは彼女くらいだった。

男は散々振り回され、脳の血管が切れる音と共に何度置き去りにしてやろうと、或いは殴つてやろうと思ったか分からない。いや、むしろ保護者を置き去りにするのが子供の方だった。

「吉良さん！俺のジューズちようだい！」

子供ながら将来有望なご尊顔を匂わせる少年が駆け寄り、男が片手に持っていたペトポトルを受け取った。

炭酸のソレは口に含むとパチパチと弾け、少年は思わず口をすぼめる。

「すっげえ、シユワシユワした」

「いつまで遊ぶつもりだ、仗助」

「あと五時間！」

「無茶を言うんじゃない」

すでにアフタヌーンティーでも嗜むような時間だ。

男はあと一時間、と約束を取り付け、再びボールの海に飛び込む少年を見送る。

「元氣な奴だな……」

「あのお〜」

「…はい？」

隣で談笑していた女二人が好奇の色を滲ませて男を見ている。

面倒だな、と思う間もなく会話に巻き込まれ、男の目はずいぶん死んだ。それでも幼少期から培った愛想笑いだけは崩さず、適当に受け答える。

そして帰り道、熟睡する少年を乗せた車は杜王町へと向かった。

???????

月一の薬の処方と、経過観察。

エネルギーシユな仗助を連れ出かけた数日後、仕事を休んだ午前中に病院を訪れた。

担当医とは長いもので、もう十年近い付き合いになる。わたしが過去に体験した事件の特殊性ゆえか、特に目に掛けてもらっている。

「何か表情が暗いですね」

「あ、わかる?」

医者の中の男の目元にはうつすらと隈があった。

「本当は他の患者の情報は言っちゃダメなんだけどね。君ならいつか」

「いえ、やはりいいです」

「そう言わず聞いてきなよ」

医者曰く、最近自殺を図った少年が病院に運び込まれたらしい。一度事故で重傷を負った事もある少年は、仗助とさして歳の変わらない子供だった。

「少し前から学校にも行かず引きこもっていたようですね。同級生から虐められていた、つていう話を保護者側から伺っている。まだ幼い子供が自殺を凶つた事実がね、キツいんだ……これが中々」

「内容を聞く限りだと、わたしに話したのには理由がありそうですね」
「ああ。少し君の意見を聞きたい」

少年の事情を詳しく知る医者からすると、わたしと重なるものがあるそうさだ。

担当医は「医者とは万能ではない」と語る。

「僕は精神科医だが、カウンセラーではない。症状を診断して薬を処方したとしても、患者の根幹にある問題を解決するに至らないことは多い。勿論その手助けは最大限に行うよ。しかし絶対に心の病が治るとは限らない」

わたしのように生きている間は治らない殺人欲求レのように、ずっと拗らせ続ける人間だっているのだろう。

「その点、僕が思っていた以上に君は君自身の内面と上手く向き合えている。正直言うと五年前を思えば、もう助からないときえ思っていた」

「患者を諦めていたつてわけですか？とんだ医者も居たものですね」

「……そうさだ。僕は何の役にも立てなかつた」

「ハア……湿っぽい話は置いといて、話の続きをしましょう」

他人が助けられるなら不治の病な「コレ」だつてすでに治つてゐる。医者に勧められて心療内科に通つた事もあつたが、過去の出来事をズケズケ他人に踏み込まれると、無性に殺意を抱いてしまう。

だから早々にカウンセリングは捨てて薬に絞つた。そもそも効率のいいストレス解消法はすでに知つてゐるからな。人殺し以外の方法で。

「その少年は意識を取り戻したが、暴れるんだ。これには看護婦も僕も参つてゐる。この腕の傷も押さえようとして引つかかれた痕だよ」

そう言い担当医が白衣の袖を捲ると、最近ついたばかりであろう生傷があつた。

少年はその他に自傷行為も目立つらしい。

「なるほど。先生は自分の心と上手い付き合い方を知つてゐるわたしに、何か案を出して欲しいということですか」

「軽いアドバイスでいい。僕も色々と考えてゐるが難しくてね。それに……」

「それに？」

「虐められて精神が不安定になつてゐるにしては、様子が少し違うようにも感じるんだ」
耳を覆つてブツブツと呟いたり、大声で叫び近づいた看護婦を殴る。食事は食べられないこともあれば、途中で吐いてしまうこともあるらしい。かなり重症だ。

これはあくまでわたしの個人的意見だが、確かに子供が虐めで自殺を選ぶにしては精

神的に追い込まれ過ぎな気がする。

未成年の自殺において確かに小学生の自殺は亡きにしもあらずだが、中高生と比べればその数は圧倒的に少ない。

それは成長するに連れて子供に個性が生まれ、彼らを囲む社会が複雑化していくからだろう。大人になるにつれ必然生じる軋轢だ。

しかし同時に彼らは子供が持つ無邪気さも抱えている。子供の社会を知っているが、大人の社会はまだ知らない。

子供が素顔のまま学校に向かうとしたら、大人は会社に行く前に自分の顔を覆う「マスク」を被る。そのマスクは大人が社会を生きる上で必ず必要なもので、それを被らなければ忽ち他者に異物扱いされてしまう。

「何か他にトラウマとなる出来事があるのでは？例えば少年が遭ったという事故ですか」

「それも考えたよ。彼は約二年前の事故以降から様子が一変したと聞く。でも事故が原因で他人との関わりを恐れるようになるだろうか？」

「普通なら事故のトラウマを思い出して震えそうですね」

「そうなんだよ。だからこそ分からないんだ」

親に虐待されている可能性も考えたが、それはないらしい。「だって彼は……」と言い

かけて、医者は口をつぐんだ。そこは完全にプライベートな部分らしく、話すのは躊躇われたようだ。

話せない部分は流させて、しばし考える。だが解決の糸口になりそうな案は思い浮かばなかった。

強いて言えば、「熱中できる趣味を見つけろ」くらいだ。ストレスを軽減させ、少年が苦しむ記憶を一時的にでも忘れさせる。

「例えば先生の給料で高い寿司を奢つてあげるでも、トラウマから遠ざける良い方法になりますよ」

「H A H A H A、君の方が稼いでいるだろう？簡単にこの病院に勤める職員全員に高級寿司を奢れるくらい」

「さて、何のことやら」

とぼけてみせると、カルテに書き込みながら担当医が笑う。この医者の言葉を真に受けなければ、わたしは今頃素晴らしいサラリーマンライフを謳歌していたのに。

「あつ、これあげるよ」

と、何故か最後に医者が子供に渡すシールを押しつけられ、診察室を後にした。ドラえもんがその存在をこれでもかと主張している。わたしが子供に見えるとは、いよいよ毫碌してきたな。まだ若そうなのに残念なことだ。

ドラえもんの行き先は仗助にするとして、待合室で処方箋の受け取りまで本を読み待った。それから会計も済ませて外に出る。

それなりに大きい病院ということもあり、予約をして朝から並んでも時刻はお昼近くになっていた。昼は外食で済まそうかと駐車場に向かおうとしたところで、体がつんのめるようにして止まった。

「ハ？」

病院の敷地の奥側、人気のない日陰の場所に視線が釘付けになっている。わたしの、ではなくキラークイーンの、だが。

「いいか、わたしは帰る。ただでさえ嫌な病院に来て気疲れしているんだ」

「……………」

「そんな見つめたって無駄だ。わたしが主人なんだから言うことを聞け」

「……………」

キラークイーンの視線の先にはベンチの下で丸くなる猫がいた。

無視して歩こうとしたが、やはり一定の場所から進めない。コイツとわたしが離れられる距離が限界だ。

「ニャー」

結局獣人型のヤツに負け、ベンチを占拠することになった。正面には植えられた樹木

とよく手入れされた花壇がある。木で陰になってこの場所は夏ならちよいどいい涼みスポットになるだろう。

ベンチの後ろは建物に隣接した植え込みが生い茂っている。猫はどこかの飼い猫なのか、鈴のついた首輪をしていた。キラークイーンはベンチの下に潜って猫をじつと見つめている。何なんだろうか、コイツは。

「しかし子供も自殺を選ぶとは、闇深い時代だな」

自殺未遂の少年がどのような経緯で死を望んだのか、作家をしている手前気になりはする。だが作家として調べるならまだしも、個人で関わる気は全くない。面倒だろう。

「もういいかい、キラークイーン」

『ニヤー』

時計を見れば一時間が経とうとしている。途中何度か引つ込めようとしたが無理だった。本当に何なんだコイツ。

「あつー！」

そうだ。コイツが動かないなら、その元凶を移動させればいい。

普段から持ち歩いている手袋を靴から出して、身に付ける。これで引つかかれたり噛まれても素手よりはマシだ。

「みやあ〜……ん」

寝ぼけた声を出した食肉目ネコ科ネコ属の生きものが持ち上がった。脇を掴まれる形でだらしく伸びきっている。これが野生を忘れた獣の末路だ。

ベンチの上に置いたソイツは逃げるでもなく、呑気に毛繕いし始めた。このお間抜けさじや毒入りの餌を与えられたら簡単に食っちゃまうな。

「ほら、猫も昼寝から起きた。——おっと、「昼」と言えばまだ昼飯にもありつけていないな、わたしは」

『……………』

「いい加減にしろ」

渋々、本当に渋々な様子でキラークイーンは引っ込んだ。

これでようやく帰れると思った矢先、腹を舐めていた猫の視線が上に向いた。

「鳥か？」

つられてわたしが上を向いたのと、視界の隅で猫がベンチからジャンプしたのは同時だった。

一瞬体が固まったが、脳がすぐに動いて最適解を見出す。ベンチから数メートル横に逸れた場所。そこに向かって走り、腕を伸ばす。咄嗟の判断でキラークイーンと自分の体が連動した。

常識的に視界に入れておきながら、無視を決め込むわけにもいかなかった。

いくら階層が低かろうが、打ちどころが悪ければ死ぬ。逆に高くても命が助かる場合だってある。飛行機事故で数千メートルから落下しつとも一部の乗客が奇跡的に助かった、なんてのがその例だ。

「っ……!!」

小柄な物体が植え込みに衝突する前に、体に触れることができた。

最初はキラークイーンで衝撃を緩和して、次に己の腕にその肢体が収まった。勢いは殺しきれず、額が硬い壁にぶつかかった。受け止めた衝撃は当然あり、植え込みに自分の体が沈む。しかし幸いにも植え込みがクッションになった。

——ミシツ。

いや、肋に嫌な音がした。ついでに視界が急速にブラックアウトしていく。

「ははっ……」

首に触れたら生ぬるい感覚がした。植え込みの枝に血管を掠ってしまったらしい。プシュ、という明らかにやばい音がする。まさかここで死ぬのかと、もはや笑いしか出なかった。

まあでも、鈴美に会えるなら悪くない。だがもしあの世があるとして、彼女がいるなら天国だ。ならばわたしが堕ちるのは地獄で、会うことはできないだろう。そもそも死後なんてもの無いだろうが。

それでももし彼女に会えたなら、こんな愚行を犯したことに意味ができるというものだ。

「なんでっ…!!」

起き上がった子供と目が合う。深淵を映すような瞳は驚愕に染まっていて、病院服から覗く細い手足には至る所に包帯が巻かれていた。哀れなほどその肢体は震えている。そこまで考えて、わたしの意識は落ちた。

94話 真夜中の面談

起きたら視界に白い天井が広がっていた。

飽きるほど押んだ光景に辟易しつつ、上体を起こそうとして胸部に激痛が走った。頑張れば立てそうだが、その前に全身脂汗まみれになる。

部屋は個室で誰か呼ぼうにも、細く息をする分なら違和感程度で済むが、声を出そうとすると途端に激痛が襲う。肋は骨折しているようで、胸部を覆うように固定具のベルトが巻かれていた。

頭と首元にも包帯が巻かれている。点滴の水音が耳障りだ。

「医者、呼ぶか……」

このまま看護婦が来るのを待つ必要もない。ナースコールを鳴らすと、程なくして廊下から騒がしい音が聞こえた。

???????

医者から聞いた話によれば、首の血管が切れたものの動脈ではなかったらしい。それでも首の血管だ。応急処置により失血死は免れた。

肋の方も骨折こそしているが数週間もすれば回復に向かうとのこと、内臓に刺さってもいなかった。

運はわたしに味方してくれてい……いや、味方もクソもないな。どの道一ヶ月以上は入院が確定だ。ここが地獄だ。

命が助かったただけマシと思うが、まずガキを助けなければ重傷を負っていなかった。愚の骨頂である。

しかしあのまま見捨てていてもな。この病院は今後も利用する。訪れる度に今回の件を知っている人間に後ろ指を差されるかもしれない。

子供を咄嗟に助けろ、なんて無理な話でも、やらないよりはやった方がいい。

常識に——「普通」に振り回されて死ぬなんて、本末転倒で馬鹿馬鹿し過ぎる。涙が出そうだ。

「いいですか？ぜったいたい安静です」

見覚えのある歳をとった看護婦がいつそ清々しい笑顔で忠告し、去って行った。まさかわたしが病室から逃げ出すとでも思っているのだろうか？

部屋も人通りが多い場所だし、窓の位置も高く、イスでも用意しなければ身を乗り出せない高さにある。その前に横に広く縦に狭い造りで、成人の大人では通れそうにない。

「婦人には感謝しないとな…」

入院にあたって必要になる用品は、朋子婦人が準備してくれた。と言っても、家主不在の自宅には入って欲しくなかったため、婦人の出費である。

かかった費用は必ず返す。おんぶに抱っこで我ながら顔を覆いたくなくなった。「イヤねえ、気にしないでちょうだい！」と語った彼女の肝っ玉ぶりに、実は自分の母親だったのではないか…？とさえ思った。

冗談でそれを告げると、「あらじやあ養子にでもなる？」とさらに冗談で返されたが、全く敵わない。

見舞いに来た仗助はクレイジー・ダイヤモンドで治す気満々だった。でも考えてみて欲しい。重傷の患者が一日で全快したら、それはもはやホラーである。丁重に断った。

その代わり入院している間、わたしが指定した本を図書館から借りてくる任務を与えると、への字だった口もいつもの笑みに戻った。

そして肝心の飛び降り少年の方だが、まさか、と思つたがそのまさかだった。どうやらあの日、三階から自殺を図つたらしい。

わたしと違い、少年は植え込みの枝で少し手足を切つただけで軽傷だった。少年を助けたわたしは多数から感謝されると同時に、「無茶しやがって……」な呆れをもらつた。主にわたしが過去に色々とやらかしていることを知っている面々から。

少年の保護者も謝罪に來た。ただ、その子供の實の親ではない。担当医が語らなかつた込み入つた内容が、訪れた女性が少年の母親ではないことから察して頂けるだろう。訪れた中年女性は深々と頭を下げ、見舞いの品をわたしに渡した。

少年の方は窓のない部屋に変えられ、病室から出ることも禁止になつたらしい。

自分から関わつてしまつた以上、わたしは女性に氣になつていたことを尋ねた。

事前に看護婦たちにそれとなく探りを入れて話は聞いていたから、此方が大まかな情報を知つていても不自然ではない。

「少年はなぜ、自殺を図つたのでしょうか」

「ええと……」

「ああ……すみません。赤の他人が突然不躰に。それでも、どうしても氣になるのです」

「それは…どうしてかしら？」

「ぼくと似ていると思つたからでしょうか」

「あなたと？」

「ぼくも昔、死にたいと思つたことがあるんです」

ヒュウ、と引きつったような音が聞こえた。女性とは視線を合わせず、本の置かれたテーブルをじつと見つめる。

そこには頼んだ翌日、早速仗助が借りてきた『初心者向け 栄養管理本』と、ノートにボールペンがある。他の本は正面のテーブルとは別のサイドテーブルに、貸し出し用の袋ごとペン、と乗っている。

女性の職業を意識して、少し陰りのある雰囲気では話さず、同情されやすいように。いくらかあどけなくなる前髪も下りているから、殊更取り入りやすいだろう。

案の定、女性はわたしに同情し、少年の情報を話し始めた。

それは担当医が語っていた内容より、さらに発展したものであった。

「お医者様にはどうしても話せなかつたの。言えば白い目で見られると思つたから。状況が違えば人目を引く特別なものであつても、今のあの子の惨状を見てはマイナスな印象にしかありません」

「特別なもの、ですか」

「あの子は記憶力がいいんです。それも、常識では考えられないくらい。神様の贈り物に違いないと私も最初は喜びました。でもそれは勘違いで、むしろ呪いとしてあの子を蝕んでいる」

一瞬見たものを瞬時に記憶できる。聞いた事がある。実際にそのような能力を持つ人間と会ったことはないが。

瞬間記憶能力。目から入った情報をそのまま記憶できる能力で、見たものをソックリそのまま思い浮かべることができる。一見すると素晴らしい力にはしかし、欠点も存在する。

「忘れる事ができない。それはたとえどんなに嫌なことであっても」

「……存知だったのね。そうですね。あの子を苦しめるのは、確かに事故の記憶もありません。でもそれは一部でしかなく、あの子が経験した記憶自体があの子の首を絞めているの」

「だから、自殺を」

「お医者様にも謝罪して、包み隠さず全てお話ししました。現状解決は難しい、とのことでしたが……」

「そうでしょうね。忘れる事ができないなら、トラウマはいつでも少年を襲ってくる」

「代われるものなら、私が代わってあげたいわ……」

涙ながらに女性は話した。慈愛深い人物だ。

わたしは急速に冷めていく自分の心を引き留めながら、ありきたりな慰めの言葉を返す。お涙一つで起こる奇跡があったら、それは何とも薄っぺらくて、軽いものだろう。

「ごめんなさいね、本当はあの子も一緒に連れて来たかったのに……」

「いえ。大丈夫ですよ」

女性は最後にもう一度頭を深々と下げ、部屋を出て行った。

「ハア……」

話を聞いたが、わたしの愚行が徒勞でしかなかったとわかった。むしろ助けられない方が結果として良かっただろう。

上手くいけば少年は大怪我、もしくは望みどおりに死ねる。わたしも一ヶ月以上入院なんてバカなことにはならなかった。

少年の心の根本的な解決が望めない以上、今後もし自殺を図るだろう。この怪我を代われるなら代わって欲しいよ、彼に。

「我が家が恋しいな」

病院の電話でこっそり自宅に電話を掛けたから、オヤジは大人しく留守番している。

時間はたっぷりある。そして肋が折れていても書き物はできる。入院中は休むことになってるが、何せ暇だ。ついでにフラストレーションも溜まっている。

栄養管理の本を立てかけ、ベッドごと状態を起こした体勢でノートに文字を連ねている。早弁を教科書で隠す男子生徒のような凶だ。看護婦が来たら「栄養士の資格を取りたくて……」などと話す。

その間、時折キラークイーンは窓から顔を覗かせて、猫の姿を探しているようだった。元はと言えば全部コイツのせいだ。

『ニャー』

ニャーじゃない。

???????

少年は記憶の海で溺れていた。

荒れ狂う波の中必死にもがけど、それは子供に捕まった虫のように愚かなあがきにしかならない。

この苦しみから逃れたかった。だが頭の中で起こる記憶の再生は少年の意思ではどうにもならなかった。

記憶は生々しく、ずっと新鮮だ。視界だけでなく、五感全ての情報がリアルに残されている。

そして限界に達した時、少年は思った。己の救いは、この世から命を絶つ方法以外にない。

だから鉛色に煌めく鉄を手を取って、両の腕に突き刺した。

その時は痛みよりも、地獄から解放される安堵の方が強かった。でも少年は死ねなかった。

次は窓から飛び降りた。

子供でも工夫すればどうにかなる高さで、同級生と比べれば背の低かった少年でも身を乗り出せた。

半狂乱だった。記憶の洪水は止まることを知らない。頭では負の記憶が延々と繰り返されているのに、現実の時間も並行して流れている。「自分」は頭の中に存在しているのか、それとも現実存在しているのか。それとも両方に存在しているのか、いないのか。

自分の存在さえ、少年は分からなくなつた。

そしてまた、少年は死ななかつた。たまたま居合わせた男に助けられたのだ。

軽傷な自分とは対照的に、男は重傷だつた。他人の血がピューツと噴き出すのを少年ははじめて見た。その血は自分の体にも掛かつて、生温かかつた。

瞬間、記憶の海で溺れていた少年は現実へ引き戻された。

男は自分を助けた。すぐに助けを呼ばなければいけなかつたが、動けない。噴き出る血もそうだが、気が狂つたとしか思えない様子で笑う男が恐ろしかつた。ホラー映画にありそうな感じだ。

動けたのは男が意識を失つてからで、幸運にも男の一命は助かつた。

よかつた、という気持ちもあつたが、少年はまたすぐに記憶の海へ落ちてしまう。

しかし一冊の本と出会つたのを機に、少年の精神は見る見るうちに安定した。医者も看護婦も驚いた。

ダークブラウンの革製で、所々表面に傷のあつたその本は、一瞬のうちに消えてしまつた。

それが何処に行つたのか、少年にはわからない。病室を訪れた看護婦にも尋ねてみた

が、首を横に振った。

「『アレ』はいったい、何だったんだろう……」

疑問は残るものの、見つからないならば仕方ない。

それより一つ、彼には気になることがあった。それは自分が男に助けられた時のこと。落ちる寸前に目を強く瞑った後、背中に感じた硬い感触。その次に先程よりは柔らかい感触が触れて、激しい音がした。

そして瞳を開けて視界に入ったのが、血を首から噴き出しながら笑う男だった。

「二回目のあの感触はヒトの腕だ。でも、一回目の感触が分からない……」

精神が安定している今なら思い出しても、雪崩のように記憶の決壊が起こることはない。それでも目を閉じていた影響が大きく、感触以上の情報は得られなかった。

「……やっぱり聞くしかないかあ」

それにまだ自分はお礼も言えていない。代わりに行ったのが院長だ。

状態も安定してから退院も今週中に決まり、数日後には施設に戻る。その前に再度院長と会いに行こう——という話になっていたが、少年はその男とどうしても一対一で話したかった。

二人きりでなければあの硬い感触の正体は知れないと、確信があったのだ。

ゆえに少年は約束を破り、病室を出た。一人、それも夜に。時刻は深夜の十二時。いつどの時間帯に看護婦が見回りに来るかは入院中に把握した。

病院で、しかも夜という特殊な空間で漠然とした恐怖はあったが、記憶の海より恐ろしいものはないと首を振る。

窓から差し込む月明かりを頼りに、院長から聞いていた部屋の情報を頭に浮かべて歩く。スリッパでは足音が目立つから、素足で盗人のように抜き足差し足。明るい時間とは違いひっそりとした空気が、自分が悪いことをしているんだと自覚させ、妙に胸が高鳴った。

「……だ」

扉横のネームプレートには『吉良 吉影』と書かれている。おみくじで見る『吉』が二つもあるとは、運の良さそうな名前だった。少年の自殺に巻き込まれたのだから、一概に良い、とは言いきれないが。

慎重に扉を開けると、まず薄明かりが視界に入った。天井に届きそうな位置に窓があり、少し進むと開けた室内が目に入る。

ベッドの上は人型に盛り上がりがあつて、掛け布団で覆われた顔はうかがい知れな

い。耳を澄ますと微かな寝息も聞こえた。

「あれ、髪色が少し変わってる……？」

黒かったはずの男の髪は少し色落ちして、茶に近い色合いに変わっていた。

しかし、ここまで来たはいいものの、少年は起こし方を考えていなかった。

揺すって起こすのは血を噴き出しながら笑っていた姿が脳裏に過り、どうしても躊躇われる。怖いのだ。

悩みながら視線を彷徨わせていた黒い瞳は不意に、サイドテーブルに止まる。

そこには図書館の貸し出し用のバッグやペットボトル、ティッシュなどがあり、栄養学の本もあった。バッグの中は文学が多めで、かなりの読書家らしい。

少年は一瞬見た本のページだって、次々と映像が変わるアニメだって、そのまま鮮明に思い出せる。

読書は覚える意味合いが強かった。得た知識は必ず役に立つから。そうして次々とページをめくってしまうと、物語に心を没入させることができなくなる。

だからこそ、最近は読書で「楽しむ」という感覚が薄れつつあった。

確かに後から思い出してじっくり読み返すこともできるが、「楽しむ」のだったら前に見たアニメを頭の中で再上映する方が面白い。

「うわあ、ボクより薬が多いぞ」

サイドテーブルにはまた、処方薬も置かれている。睡眠薬や痛み止め、精神安定剤など。薬を飲むだけで水で腹が膨れそう——と少年が呑気に思っていた時、横から伸びてきた腕に悲鳴が出た。

「——ッ!!」

しかし口は大きな手で覆われて、くぐもった声しか出ない。

「しーっ」

少年の口を押さえる手とは反対の方の人差し指が、男の口元に添えられる。

閉じていたはずの目は開いていて、細まった紫目がパラパラと落ちた長い前髪から覗いている。

少年の心は恐怖で震え上がった。頭の映像ではなく、本当の幻覚として男の首元から血が噴き出ている気がした。

「人の病室に、それも夜中に勝手に侵入しておいて、何だその顔は」

「(っ、(っ……」

「(っ(っ」

「殺され、る……」

目を丸くした男は次の瞬間笑い声を上げようとして、肋を押さえた。痛みでジツトリ汗をかいている。

「殺すだなんて人間きが悪いな。それも君の「恩人」に向かって」

「……ボクが誰か気づいてたんだ」

「ん? ……ああ、病院服の袖の隙間から腕の傷が見えたから」

「……………」

少年は男から離れるようにして、隠すように両腕を押さえる。鋏を刺した傷の他にも、深く爪で引っかけて痕になった傷もある。他人が見ればその痛々しさに、思わず顔を顰めるだろう。

「わたしにお礼を言いに来たのかな?」

「そ、その件は、ありがとうございました」

「噂に聞いていたが、本当に心が安定したようだね。良かったよ」

「はい……」

男は微笑んでいる。でも、その笑みが少年には少し恐ろしく映った。夜の冷たい雰囲気、彼自身の心が吞まれているせいかもしれない。

「それで、夜の小さなお客さんは、お礼とは別に何か用があったのだろうか? でなきやこん

な時間に訪れんだろう」

「……少し、話がしたくて」

「そうかい。わたしも少し嫌味でも言つてやろうかと思つたんだ。危うく死にかけたからぬ」

「……………」

「嘘だよ。そう縮こまらなくてくれ。子供をいじめる気はないんだ」

男は病室を抜け出し、同じ階層の西側、廊下の行き止まりの場所へ移動しようと提案する。

その場所には自販機があり、休憩用のベンチもあつた。

「飲み物を買つてやつてもいいが、音でバレる。実はね、次勝手に病室を抜け出していることがバレたら「精神病院送りにする」と医者から脅されているんだ。ひどい話だろう？」

悪びれた風もなくあつげらかんと話す男に、少年はどうリアクションしたものか悩む。

ひとまず寝ていたところを起こしたことを謝り、男の後を追つた。

「気にするな。病院だと元々寝つきが悪いんだ」

そう話す男の顔は、少年を助けた頃よりも明らかに寝れていた。

存外こういう人間が夜中にトイレに立った患者に幽霊と間違われるんじゃないかと、

少年はぼんやりと思った。

95話 ねれない子たち。

蓮見琢馬。はすみたくまそれが飛び降り少年の名前だ。

仗助の一つ歳上で、背は奴より少し低い。無表情が基本のようだがそこはまだ子供、若干変化がある。

少年は生後間もなく神社の境内に捨てられていたところを拾われ、児童養護施設で育った。

「隣、座るといいよ」

「……うん」

横を促すと、おずおずと少年はベンチに座った。

「えつと……ボクは記憶力がいいんだ」

「いきなり自慢かい？驚いたな」

「……それで、おじさんに助けられた時、ちよつと変な感覚があつたんだ」

もしかしなくとも、衝撃を緩和するためキラークイーンで最初に触れた時の感覚が、この子供は気になっているらしい。「気のせいだろうか？」と誤魔化せど、引く様子は見られない。

「ちよつといいい?」

「何だい?」

初年は無遠慮にわたしのパジャマの袖を捲つて、小さな手で何か確認するように掴んでは離し、掴んでは離し…を繰り返す。そして満足したのか頷き、袖を元に戻した。

「やっぱりの感触だ。ボクに二回目に触れたのは」

「あの時は此方も咄嗟だったからね。わたしに君が抱いた違和感を尋ねられても分からないよ」

「本当に?ボクに最初に触れたのは、硬い…それも手みたいな感触だった。人間の手じゃなかったのは確かなんだ」

「それこそ幽霊なんじゃないか?」

「本の中ならまだしも、お化けが人を助けるもんか」

ど正論だ。わたしだつて信じちやいない。

相当少年は頑固で、「教えてくれないと出歩いてたことをバラす」とまで言ってきた。向こうも同罪だろう。

別段キラークイーンの存在を明かしてもいいのだ。何せコイツは他人に見えない。

不可視の存在を信じろ、というのは難しいし、信じさせる手間も面倒だ。最悪「意味不明なことを言っていた」で、本当に精神病院に送られる。担当医の冗談が現実になつ

てしまう。

「じゃあわたしの背後霊みたいなやつが助けた、って言って信じてくれるかい？」

「見せてくれれば信じる」

「生憎だが、他人には見えないんだ」

「……ボクのこと、またからかつてる？」

「いや、今のは嘘じゃない。信じさせる手段がないんだ」

「信じさせる手段がないのは嘘でしょ。ソイツは見えなくとも、人には触れられるはずだ。現にソイツが本当にボクに触れたんだとしたら」

「フフ、ヤツは気まぐれだね。私の意思とは無関係に行動するんだ」

正確には無関係に行動することが多いだけで、自分の意思でも操れる。比べると自由行動が多いから、四捨五入の理論で嘘は言っていない。

「……ソイツってどんなヤツ？」

「ん？……猫みたいな耳があって、目が鋭くて——」

「待って、人間じゃないの？背後霊、っておじさんが言ったんじゃん」

「別に動物が人間の後ろについて回っても構わんだろ」

「飼いだつたの？名前は？」

「質問が多いな。施設は動物を飼えないだろうから気になってるクチか？猫は飼ってな

いよ。捨て猫を拾ったことはあつたけれど」

「家で飼えなかつたんだ」

「母親が動物嫌いだったからね」

「……………なら、捨てたの？」

薄ぼんやりと明るい中で、吸い込まれるような真つ暗闇が二つの穴から覗いている。

「捨ててないよ、里親を探すことになつたんだ」

「そっか」

「死んだけどね」

「……………えっ？」

「母親はガーデニングが趣味で、家の庭にはそのためだけの倉庫があつた。猫はそこに入られていたんだが、農薬を摂取して死んでしまった」

白い少年の肌がさらに青白くなり、小さく震える。話を止めるつもりはなかつた。

「農薬は、でもね。しつかり保管されていたんだ。子猫が自力で食べられたはずがないんだ。けれど子猫は死んだ。ぼくはね、家に帰ってきてから子猫を庭に埋めたよ。すごく小さな体だった。子供の両手にすっぽり入る大きさだ」

「じゃあ、誰かが餌に農薬を混ぜて……………」

そこで、少年は口を開けたまま固まる。わたしが出した問題の答えを言おうとして、言葉に詰まっているようだ。

その様子を見ながら笑ってみせると、青白かった少年の顔は忽ち赤くなった。

「う、嘘ついたんだな!? ボクを何回からかえば気が済むんだッ!」

「子供をからかうのが趣味だからね」

「大人として恥ずかしくないのか!」

すつかり怒ってしまった少年は、本来聞きたかったであろうキラークイーンの話も途中なまま、ベンチから降りて早歩きで去って行く。

わたしもそろそろ病室に戻ろうかと小さな背の後ろに続いていた中、曲がり角で人間と出会った。少年が悲鳴を上げる。

その人間は、わたしに絶対安静を告げた看護婦だった。今日の夜勤担当だったのか……。

「トイレに行こうとした患者の一人が、「だれかの声がする……」と震えてナースステーションまで来たんですが……ええ、なるほど、そういうことでしたか」

「あつ、ボクは……」

少年が口を挟む前に子供が謝罪のためわたしの病室を訪れ、そこから病院探索をねだってきた……という体で行こうとした。

「おじさんがボクを無理やりあそこまで連れてつたんだ」

「言いがかりはよしなさい、琢馬くん」

「ボク、怖かった…」

と、少年は看護婦に抱きついた。冷ややかな視線が看護婦から突き刺さる。なぜわたしは冤罪をかけられているんだ？

「お話は後で聞きますが、もう夜中もいいところです。ひとまず病室に戻って寝てください」

少年は看護婦に抱っこされ、病室に戻されて行った。

看護婦の肩口から顔を覗かせて舌を出してたこと、絶対に忘れないからな。覚えてろ。

「——痛ッ!!」

病室に戻ると、現れたキラークイーンに頭を叩かれた。何だか機嫌が悪そうだった。よくわからん奴だ。

???????

再び自殺少年と出会ったのは、町立図書館だった。

昔からよくこの場所で知り合いと出会す。平日の午前中なら人も殆どおらず、そこで調べ物をするつもりだった。休日だったり平日の午後だと、『しずかに』の貼り紙が見えないガキの騒々しい声も嫌でも耳に入ってしまう。

一階には閲覧スペースがあり、そこで読むため何回かに分けて必要な本を運んだ。持ち帰り限度を越える冊数だ。目を通せなかったものだけ最後に借りる。

「ん？」

残りの数冊を持って戻ったら、積み重なる本があるテーブルとは別のテーブルに少年が座っていた。

すぐ側の文学コーナーから持ってきた本を読んでいるらしい。ページをめくるペー
スは一定で、秒針が刻むのと同じ速度で一ページずつ紙の擦れる音が聞こえる。自分も読むのは早い方だが、少年のペースを見ていると内容が頭にきちんと入っているのか疑いたくなる。

「あつ」

人の気配に気づいた少年と目が合った。相変わらず一切の光を通さない真っ黒な色だ。

「学校はサボりかい、琢馬くん」

「アンタには関係ないだろ」

「おや、随分と嫌われたものだ」

ランドセルはなく手ぶらだ。図書館には貴重品を預けられるロッカーがあり、そこに入れたのだろう。

最後に琢馬少年と会ったのは、彼が施設の女性に連れられ、再度謝罪に来た時だ。夜中に勝手に出歩いていたこともしつかりと注意された。担当医からは「似た者同士だね」的なことを言われた。心外である。

「あれから調子はどうだい？」

「普通。おじさんは？」

「怪我也治って退院できたよ。入院は二度とこりごりだ」

「平日に調べ物？ 仕事は休みなの？」

「むしろ仕事のためにこうして調べてるんだ」

「……何か書く仕事してるの？」

「ライターなんだ。本名では活動してないけどね」

「どういうの書いてるか、見てみたいなあ」

「ダメダメ、子供には早い内容だ」

ノートが入っている人の鞆に手を伸ばすがギキの手をあしらった。入院していた時も夜中に看護婦が入ってくる可能性を考慮して、人目のつかない場所に隠していた。

「ふうん、そういうの書いてるんだ……穢れたオトナだ」

「大人はみんな穢れてるさ」

マセた知識はあるようだ。

子供との会話も早々に終わらせ、調べ物に取りかかった。少年は何冊か持ってきては本に目を通し、戻してはまた持ってきて——を淡々と繰り返す。

視界の隅でチラチラ映る色素の薄い髪が気になった。

「君……それで物語を楽しめてるのかい？」

「楽しむために読んでるわけじゃない」

一度目を通せば羅列された全ての文字を覚えられる、とのこと。羨ましい力の反面、記憶の洪水が起きるならやはり不要だと感じる。

読書を楽しむか否かは確かに人それぞれだろう。だがせつかくなら本の本質に触れるべきだ。特にまだこれから心身ともに心が成長していく子供なら。

「もしかして全部の蔵書を読んでやろう、とか思ってるのか？」

「そうだけど」

「ハア：すごいね。でも焦つてもしようがないんじゃないか？」

ゆつくり読んで心を育ませたらどうか、という提案は却下された。

普段なら突つかからないが、どうやらわたしは本を記憶する道具としか見ていない少年に不満を覚えているらしい。一応作家ということだな。「読むならもつと噛みしめて読め」という心境だ。

だが言った所で耳を此方に傾ける気配はない。

時間は刻々と過ぎ、空腹を覚えた時にはすっかりお昼を過ぎていた。

調べ物はあらかた済んだ。見切れなかったものを借りるため、カウンターに向かった。ついで読み終えた本を戻そうと閲覧スペースに行くと、少年が姿を消していた。手洗いにでも立ったのだろうか。

「こいつは持つてきた覚えがないんだが…」

わたしが借りた本に混じるように、一冊の本があった。ダークブラウンの革表紙の本はしかし奇妙なことに、図書館のほぼ全ての本に施されている透明なカバーがない。背の部分にある区別用のラベルもないと来た。本能的に触れるのはやめた方がいいと感じたため、持つていた本で小突く。

「あの小僧が持ってきたのか？」

ならばこちらが席を立った際に紛れ込ませたのか。何の意図があつて？

小僧はこの本を最初持っていなかった。わたしがカウンターに向かい、戻るまでに要した時間はわずかだ。その隙にロッカーから持ってきたとも考えづらい。そんな不審な動きをしているならそもそもも気づく。

結論、置き去りにするのが一番無難な策だろう。

「……………」

まさかな、と内心思いながらエントランスに出た。

「帰るの？」

外を出たすぐ横に少年はいた。黒いランドセルを背負って、その闇深い瞳を向けている。扉はガラス製で外の景色が見えるが、一部死角もできる。玄関口を出たすぐ真横だ。そこに潜んでいたらしい。

「ハア~~~~……………」

そして何より、少年の手にはダークブラウンの本があつた。

通ったルートを考えれば、絶対に少年とすれ違わなければ本の回収はまず不可能。このガキは今はどこにいるが、先程まで奇妙な本を見つけたわたしの様子を観察していた可能性が高い。

「何だよ、その深いため息」

「自分の運の無さに絶望してるんだ。……先に聞いておくが、わたしの隣に座ったのは狙ってやったのだとして、この場に居合わせたのはたまたまだよな？」

「オレにアンタをつけ回す趣味はないから」

少年が持つ本は他人には見えないものらしい。ただ、見えないだけで、キラークイーンと違い実体はあるようだ。

わたしの説明した「背後霊」と類似点があり、図書館でもし会えたら話そうと、機会を探していたらしい。学校をふけたのは本当にキブんだそうだ。

本についてもその普通の人間には見えない特性上、周囲には話していない、とも語った。

向こうに敵意はない。あるならガキだろうが容赦しないがね。

「見せてよ、アンタの力」

「…キラークイーン」

「名前が「吉良」だから、「キラ」って付けてるの？」

「そんな寒い名前の付け方はしていいない」

少年の本に名はないようだ。キラークイーンを出すと、少年は好奇心を隠さずその周囲を回る。触れようとしたが、生物側からは触れない。

「逆はできるよ」

「……あ、この感触だ」

少年の手にキラークイーンの手を重ねた。琢馬少年はちよつと感動まで覚えてるらしい。頬がわずかに紅潮している。

指摘されたキラークイーンの格好については無視した。「そういう仕事してるからだね」じゃない。

「オレの本には特別な力があるけど、この猫にも何かあるんでしょ？ 教えてよ」

「無理だ。ちよいと危ない力だからね。それに話してもわたしには何の得にもならない」

この子供も本の力を明かす気はない。お互い様だ。

さつさと帰るように告げる。学校を無断欠席しているのがバレたら、施設に戻ってからさぞ職員に怒られることだろう。

「あ、最後にもう一つだけ」

駐車場に向かうわたしを引き止めた少年。吹き抜けた風が嵐のようになり声をあげた。傘は念のため持ってきていたが、夜はかなり土砂降りになりそうだ。

「吉良さんは誰かを殺したくて狂いそうになったこと、ある？」

一瞬、その発言がわたしの本質を見抜いて告げたものなのかと思った。

しかしその質問は少年の内部から発生しているものだとかわかった。そうでなかったら、本気でわたしを害す気でいたのなら、スイッチに手が伸びていたかもしれない。ダメだな、感情的になり過ぎている。

「人間誰しもヒトを殺したくなることはあるさ。どんな聖人君子だろうと」

「……………」

「わたしも勿論あるよ。普通の、大多数の人間の例に漏れずに」

「…そう」

「傘、持っていくかい？この分じゃ早めに雨が降りそうだ」

「でも」

「どうせビニール傘だ。返さなくていいよ」

「……………」

少年は渡された傘を無言で受け取る。歩き出そうとした手前、小さく頭を下げ去っていく。

前見た時とは明らかに雰囲気違った。外見の無機質さに拍車がかかった。

「……ハア」

あの子供が住んでいるのは杜王町にある唯一の児童養護施設だ。

そこには昔、ヤツも——思い出すだけで吐き気を催す男もいた。

自分でも、今抱いている感情の正体があまりにも煩雑としてわからないが、ヤツとあの子供を重ねている節があるのかもしれない。

あの果てしない深淵の出所は、おそらく社会の闇だ。

今後は一切の関わりを避けるべきだろうか。だがあのまま落ちていきそうな子供を放っておくべきなのか。

もしそのままにすれば、第二の杉本鈴美のような被害者が、生まれてしまうのではないだろうか。

わたしが救ってやることはできない。自分がそんな大層な人間じゃないと知っている。あの子供の救いになる存在がいればマシなんだがな。

本当に、らしくないことをしようとしている。

「まあ、挺入れはしておいた方がいいか。あの子供が手を汚す前に」
なら、まず施設に行ってみるか。自殺少年の恩人でもあるのだ。いくらでも話のつけ
ようはある。

「っ……っ？」

いつの間にか握りしめていた手からは、血が流れていた。伸びた爪が深々と手のひら
に刺さっていたらしい。

9 6 話 羊水の中

施設へは思いのほか簡単に見学できた。「ライター」として児童保護施設の現場を知りたい、そして現在蓮見琢馬がどのように過ごしているのか気になっている——と話せば、快諾された。

時間帯は夕方。学校から帰った大小様々な子供が庭で遊んでいる。児童は普通の子供と変わらない生活を過ごし、門限もあるらしい。

施設によって定められたルールは異なるが、それを守り彼らは過ごしている。この施設にいる子供は二十人にも満たない数だ。

「ご存知かもしれませんが、施設にいられるのは高校卒業までなの。例外はありますけど。小学生以下の子供たちは夜に同じ部屋で寝るので、トラブルもよくあります」

院長は子供たちのエピソードを交えながら部屋を案内する。高校生になればバイトや、場合によっては一人暮らしも可能なのだそうだ。

琢馬少年が自殺する前、引きこもっていた部屋にも訪れた。四畳半ほどの大きさで、壁や床の所々に引っかいたキズや凹んだ部分がある。

今でも少年は帰ると、この部屋によく籠っているらしい。少量の少年の私物が棚や

テーブルに置かれている。図工の教科書をパラパラめくっていると、院長に取られ、勝手に物色しないよう注意された。

「彼は一人部屋なのですね。他の子供は一部屋を数人で使っていましたか？」

「いざ……という場合がありますから」

「琢馬くんは自傷行為こそ目立って、ほかの子供に手を出してはいなかったのでは？」

少年は人に避けられていた。精神状態が安定した今は周囲との関係も回復したと思っていた。しかし、今度は自発的に人を避けるようになった。

院長は蓮見琢馬が心の距離を一定以上空けるようになった……と感じているらしい。彼の心に踏み込む明確な一歩を、拒絶していると。

「……………昔、これは琢馬くんではありませんが、同室の子供に大怪我を負わせた少年がいたの。琢馬くんの場合事情が違います、それでも万が一がありますから、一人部屋にしています。それに一人の方が彼には居心地がいいのも本当ですから」

そんな暴力的な少年がいたのか。白々しく聞いてやろうと思ったが、上手く声を出せない。

暑くもないのに額から汗が流れて、浅い呼吸を繰り返した。

「大丈夫ですか？ 顔色が急に悪く……」

「大丈夫です。ちょっと風邪気味なもので」

腹の底が熱かった。負の感情が全て混ざり合って、今にも嘔き出しそうだ。これで案内するのが手の綺麗な女だったらまずかった。理性が一瞬で消し飛んだかもしれない。

「風通しのいい部屋に行きましよう」

背を押されて、部屋を出る。

死んだ人間をもう一度殺す方法はないか、そんなことをクソ真面目に考えていた。

???????

それから職員室と思しきデスクが並ぶ部屋で院長と話すことしばし。来客が気になるのか、時折子供が開いている扉の隙間から顔を覗かせる。どこからか噂が広まっていたようで、「あれが塚馬を助けた例の?」「血まみれで笑ってたっていう?」と、コソコソ話が耳に入った。

蓮見塚馬はというと、小学生の門限ギリギリに帰ってきた。事前に人が来るのは知らされていたが、それがわたしだとは知らなかったのだろう。

子どもたちに連行され、わたしを見た瞬間露骨に嫌な顔を浮かべた。どうせ図書館に行っていたのだろう。

「やあ、塚馬くん」

「ドーモコンバンハ」

前方では院長がニコニコしている。「あらあら、まあ」と。

病院で夜中に二人で出歩いていた件を踏まえて、仲が良いと思われているらしい。何なら施設を訪れる前の電話のやり取りで、わたしが蓮見塚馬を里子にしたいと考えているのか？——と聞かれた。無論答えは「NO」である。

もし仮に病気であるとか、朋子婦人に何かあった場合は仗助を預かってやってもいい。そこが最高のラインだ。

扉から顔を引つ込めた塚馬少年は、しばらくして戻ってきた。片手にはビニール傘がある。

「コレ、この間はありがとうございました」

「あの後ちようど降ってきたから、濡れずに済んでよかったね」

その様子を覗き見ていた子供たちが、またザワザワし出した。

見かねた職員の一人在扉の奥に消えて、騒がしい声が遠ざかっていく。彼らが話していた「里親」の言葉を耳にした少年の眉間に皺が寄った。

「……オレを、里子にしたいの?」

そんな睨むように見るのか?そもそも、特定の気に入った子供の里親になるのは難しい、と院長は語っていた。

「いや、ないよ。わたしに子供は育てられない。精神病も患ってる」
「そう」

傘を押しつけ、少年は退室した。

図書館で聞いた話を思えば、あの子供には殺したくてやまない人間がいるのだ。自分をいじめた人物を殺したい、なんて可愛いレベルじゃない。

真つ黒だ。齡十歳の子供が見せたあの憎悪を生み出した人間は、いったい誰なのだろう。今日施設を見て、それに該当しそうな人物はいなかった。

この手の原因は親にあると思うんだが、詳細はやはり蓮見琢馬の口から聞き出さないと分からない。

「今日はありがとうございました」

帰る頃には、辺りはすっかり暗くなっていた。院長の横では、庭や職員室の扉から視線をよこしていた子供が手を振っている。小学低学年ほどの見た目だ。

「琢馬はね、ほんとはね、イイ人なんだよ——っ！」

院長が語っていた蓮見琢馬に特に懐いている二つ歳下の子供のようだ。

軽く手を振り返し、車に向かう。

一人ではない環境で孤独になろうとし、無機質に生きる少年。

関わるほど、深みにハマる。わたしはいったい何をしているのか。

助けたのは本当に偶然だったとして、それ以上関わる必要はない。面倒ごとに突っ込むと昔から碌なことがないだろう。

「それとももう……巻き込まれちまってるのか？」

車内で思わず爪を噛んだ。

そして。

「ああ、そうか」

ふと担当医の、奴とわたしが似ている——という話を思い出した。自分でも院長の女に出来かせで「似ている」と語ったが、なるほど。

「本当に、自分と重ねているのだ」

本で言うなら、わたしはすでにあの子供に感情移入しているのだ。

そこまで考えて、もう蓮見琢馬と関わるまい、と誓いを立てた。厄介ごとに巻き込まれて、自分の平穩を捨て去るのは阿呆の極みだろう。

ハンドルを握ろうと思った頃には、爪はすっかりボロボロになっていた。

???????

ダークブラウンの本と蓮見琢馬が会ってから、彼は一つの大きな目的を持った。その目的を果たすのが、自分が生まれた「意味」であるのだと。

「本」は少年の記憶そのものが文章化し、現在進行形で綴られている。精神状態が改善されたのも、頭の中に蓄積され続けていた記憶が「本」に移されたからだ。

それを検索エンジンのように、特定のワードや物体の形で検索して、該当する記憶を探し出すこともできる。

そして、その力で琢馬は己の過去を知った。

少年は一人の男に復讐する。時間をかけ、死よりも悍ましく、男が最も苦しむ方法で地獄へ突き落とす。

そのために準備を始めた。男の情報調べの時、「本」の力は大きいに役立つた。赤ん坊の頃に聞いたその男の名前までも、すっかり「本」に綴られていた。

その男には今家庭があり、妻と娘がいる。娘は琢馬より一つ歳下の、愛らしい顔の少女。その顔は母似で、父親の要素は薄かった。

自分の母親や、祖父母についても調べた。祖父母は健在のようで、杜王町の田園地帯に住んでいる。年寄りは何かと病院の世話になることが多い。それを見越して、バスを利用する祖父母と接触したこともある。

向こうは微塵も目の前にいる子供が自分の孫なのだ気づく様子はなかったし、琢馬も名乗り出ることにはなかった。

バスに揺られながら、相席になった祖母と談笑しつつ、「この人の血がボクにも流れているのだ」と思った時、彼は無性に胸を締めつけられた。

ナイフを盗んで、「本」の力を活かし、それを的に確実に当てる技術も習得した。

また、記憶を振り返った時に遠くの間人間が話す言葉を読み取れるように、読唇術も自己流で学んでいる。マスターするにはナイフと違って時間がかかりそうだった。

そんな中だ。琢馬の下に「恩人」が現れたのは。

本音を言えば、彼は吉良吉影という男に感謝こそしているものの、その感情はコンドームのように薄っぺらかった。再度謝罪に行った時、男に頭を何度も下げていた院長の反応が過剰だとさえ思ったほどだ。

だが同時に、吉良は唯一と言つていい琢馬と同類の人間である。

男は獣人型の「キラークイーン」という力を持つ。少年が持つ「本」と能力こそ異なるけれど、似た力だ。

「もしかしたらこの街には、同じ力を持った人間が他にもいるのかもしれない……」
夜。琢馬は掛け布団から顔を出して、少し開いたカーテンの隙間から夜空を眺めていた。

夜中にうなされ叫びながら起きてしまうこともあり、寝る時もいつも一人だ。その方が気楽に過ごせる。彼の叫び声に他の子供が飛び起きて文句を言われることも、過剰に心配されることもない。

「そんな人間がオレの計画に邪魔になることがあるなら……その時は、きつと戦う必要も出てくる」

障害になるものは、取り除かねばならない。そうならないようにも、殊更慎重に行動しようとする琢馬は心に決める。

そして、すでに邪魔になりつつある吉良に対して警戒心を強めた。

図書館で偶然その姿を発見した時は、琢馬からアプローチをかけた。それきり関わることはないと思っていたら、男はわざわざ施設に訪れたのである。自分の周囲を嗅ぎ回っているとしたか思えなかった。

今日だって、今寝る自室に戻ってみれば、置いた記憶のない図工の教科書がテーブルにあつた。他の子供が入った可能性も考えたが、みな「勝手に人のものはいじらない。借りたりする場合は本人から許可をもらうように」と、院長から厳しく教えられている。個人のプライバシーを尊重しての決まりだった。

琢馬に懐いている昔『なきむしぼうや』と呼ばれていた二つ下の子供は、院長が男をこの部屋に案内していた様子を見た——とも話していた。

幸い、ナイフなど、彼が一等大切にしているものはここではない別の場所に保管している。それでも自分のテリトリーを侵された気がして、イイ気分ではなかった。

「……向こうがオレを探ってるって言うなら、こつちにも考えがある」
さすがに、殺してやろうとまでは考えていない。少し、子供のかわいい嫌がらせをし
てやろうという魂胆だ。

例えば男の家に忍び込んで、タイヤが地面と設置する隙間に釘でも置いて、いざ発進するタイミングでパンクするように仕掛けてやるとか。

男の名前は知っているから、公衆電話ボックスにある『ハローページ』で調べれば住所は簡単に分かる。琢馬が復讐を望む男の住まいを調べる時も、『ハローページ』は強力な味方になった。

「男の情報も得なくちやあな。案外人には言えない犯罪を犯していて、それをネタに脅せる可能性もある」

「本」で調べると、学校帰りに男が乗る車とすれ違ったことは何回かあった。男そのものと出会ったことは病院がはじめてだ。読書好きの男なら図書館ですれ違っていそうなものだが、互いの利用する時間が違うため、姿を見たことはない。少なくとも、気まぐれを起こしたこの間の一回までは。

『吉良吉影』の個人名で該当する項目は、病院で看護婦から聞いた情報が少しある程度。

曰く、何度か病院に入院したことがあり、病室をよく抜け出す常習犯である。

曰く、独身で、(脱走の問題を除けば)目立たない影の薄い男であるが、不思議と看護婦の間で人気のある患者である。

曰く、過去に事件に巻き込まれたことがあるらしい――。

「事件、か」

ふと、琢馬は図書館での男の発言を思い出す。

人間誰しもヒトを殺したくなることがある。男もまた、誰かを殺したいと思つたことがある。それは普通の、世間一般の人間の例に漏れずに。

その内容が少年の頭の中で、「事件」の隣に埋まる。パズルのピースのように感じられた。

「看護婦の人たちが話してたから年齢は知つてる。その年齢を踏まえながら、杜王町で起こつた過去の事件を探ってみよう」

他にも、定期的に琢馬が通う精神科の先生が、吉良の病気を診ている。少々嫌だが「仲が良い」と強調すれば、情報を得られそうだ。男が施設に来たくらいだ。「自分を里子にしたいのかもしれない」とまで話せば、医者の口も軽くなるに違いない。

時計の短い秒針は、すでに二時を差していた。

「……………」

目を閉じた少年の視界が暗闇に覆われ、瞼の裏に感じる赤い色が闇と混じつた。

その色はまるで、母の胎内のようなだった。

9 7 話 木工用ボンドルド

都内某所。

首にチエツク柄のマフラーを巻いた少年は、上機嫌に人通りの多い道を歩いていった。ちやうど帰宅時間、部活帰りの学生やサラリーマンが少年の横を通り過ぎていく。

街路樹や立ち並ぶ店には、イルミネーションが煌めいていた。

「歌でもひとつ歌いたいような、実にイイ気分だ」

学校を出て一度家に帰り、そこから出掛けるまで少年の足取りは無駄がなく、かつ驚くべき速さで行われた。朝からすでに上機嫌だった彼に親が苦笑いしていたくらいだ。

「無事に買えてよかった」

少年が向かったのは本屋だった。本日は尊敬している作家の新刊発売日だったのである。ただ、リスペクトしているとはいえず、その作家の作品全般を好んでいるわけではなかった。大衆向けにウケるように描かれているのが感じられてしまい、どうも恋愛ものは好きになれない。その作家本来の良さが殺されてしまっている。

その点、今回の新作は少年の好きな部類の作品である。表紙は裏表がほぼ真つ白で、表の上部の中央に黒い明朝体のフォントでタイトルが書かれている。

その名前は『シ』だった。このタイトルからして意味の分からなさだが、普段の作品とは異なる証拠だ。

彼はまた、薄々と感じている。この作家の恋愛ものが「仕事」として書かれているなら、闇深い作品は「趣味」として書かれているのではないかと。

これは少年の中で大きな矛盾だった。

人に読んでもらうために書かれているのが恋愛ものであるはずなのに、彼はそうではない。闇深い作品の方が好きなのだ。だが、リアリティの面では、後者の方が目を背けずにはいられない人間の生々しさを描き出している。そして、そこが「イイ」のだ。これ以上なく。

この『シ』も、あの冷たくて無機質で、しかし人間の熱がしかとある、読者まで深淵に突き落とすような悍まじさが内包されているのだろう。

「読めばわかるが、何故『シ』なんだ？きつとこの白い表紙も何らかの意味が込められているに違いない」

家に帰るまで我慢できずに冒頭だけ読んでみたが、初っ端から「シロイ」で始まり、次の行は「シカクイ」だった。

「全部カタカナ、だと……!？」

ハツとして、少年は表紙を見る。下部にある作者の名前もそう言えば、今回は漢字ではなくカタカナだった。

「……………僕がいつか漫画家としてデビューしたら、先生と会うチャンスがあるかな？」

その三年後、少年は本当に『ピンクダークの少年』で漫画家デビューする。

???????

最近何者かのイタズラを受けるようになった。他人に恨みを買うようなことは正直している、その対象を絞るのは難しい。どこかしらでわたしが「星ノ桜花」だと知ったアンチによる犯行か。もしくは、一番可能性が高そうな同衾した女性による仕業か。

寝る時は観光客に絞りワンナイトを条件にしているが、粘着質な女からストーリーカーに近い被害を受けたことはある。

それでも自分の本名は名乗っていなかったし、家は突き止められていない。向こうが

わたしを連日探し回っていたようで、偶然歓楽街で別の女と歩いていたところを見つかり、殺されそうになった。

「フム……」

片桐の侵入を機に設置している、玄関周りを映す防犯カメラには何も映っていない。車庫にも一台あったが、夜中にシャツターを開けて入った犯人の姿は暗いせいで判別しにくく、その上服も全身黒かったから、余計にわからなかった。

さらにその後、カメラ部分にカラスプレーをかける徹底ぶりだ。

その犯行の翌日、カメラの異変に気付かぬまま車を使おうとしたため、見事にタイヤがパンクした。他にも似た手口でカラーボールをカメラに投擲、からの玄関の鍵穴をボンドで塞がれたり、悪質な被害を受けている。

警察には事情を話していない。どうせ犯人の解決に至るまで時間がかかるだろうし、何なら見つけれないとまで思っている。奴らの手腕はハナから信じちゃいない。

「それに自分の手で犯人を吊るし上げてやりたいしな」

半殺しにしてやる。鍵穴のボンドの件は本気で殺してやろうと思った。何せ家に入れなかったものだから。オヤジが気づいて窓を開けてくれたからよかったものの。

……いや、そもそもしつかり留守番をしていなかったオヤジに非があつたんじゃないか？

車庫の件はともかく、玄関の件はすぐに気づくべきだろう。写真ごと燃やして骨壺にぶち込んでやろうか。

「わ、悪かったよ、吉影。だからライターを下ろしておくれ……」
「ツチ」

イタズラは今月に入ってから全くない。こちらが気づき、見つけて殺——半殺しにしてやろうと動いたタイミングで、パツタリなくなった。

犯行の性質から、向こうに悪意こそあれ殺害を目的とはしていない。また相当慎重な性格だ。犯人の証拠が出ていないことから、緻密に計画を立てて動くタイプであるとわかる。

鍵穴の件があった時は日中だったため、周囲に目撃者がいないものかとも考えた。しかし、ここら一帯は別荘地帯で住んでいる人間が少ない。休暇中だけ利用している、という人間も多い。

また我が家は別荘地帯の中心から外れた場所にある。殊更近所が少ない。一応聞いて回ったものの、有力な目撃情報は得られなかった。

「見つけたら全身の穴という穴にボンドを詰めてやる……」

慈悲で口だけは勘弁してやるさ、口だけは。

【吉影、爪を噛むのはやめなさい】

慌てて絆創膏を持ってきた父を、写真ごと払いのける。

イラ立ちながらカレンダーに目を移し、そこで赤丸のついた日付が明日であることに気づいた。

月一の受診日だ。うっかり忘れるところだった。

???????

そして、翌日。

「病院に手袋で訪れる人は珍しいねえ」

と、席に着いたわたしに担当医はいつもの笑顔を見せる。

入院中に読んでいた『栄養学』の本を話題に出して、「実は料理で失敗ばかりしていて……」と話を逸らそうとしたが、有無を言わさず手袋を盗まれた。

「料理に失敗して、ほとんどの指に絆創膏を貼るハメになるんだねえ、へえ」

さらに無遠慮に絆創膏を剥がされた。本当は仗助にドーピングを頼みたかったんだ

が、いかんせん向こうと都合が合わなかった。

「肉まで嘔んだところもあるみたいなんだがねえ……?」

「最近ストレスが酷いんですよ」

「ストレスの原因に心当たりは?」

「黙秘します」

頑ななわたしに医者には絆創膏が貼られていた場所に包帯を巻きながら、ため息を吐いた。

そして、ただ聞くだけでは堂々巡りだと判断したのか、雑談を踏まえてこちらの原因を探る方法に変えた。

テレビはそもそもあまり見ない。音楽は少し共通点がある。最近のニュースの時事ネタはそれなりに盛り上がったが、「そうだ。最近と言えば、新刊がさ——」と向こうが宣ってきたため、途中で話を切った。

「僕も買ったんだ」

「へエ」

「随分と気のない返事だねえ」

医者がカルテを持ち上げると、その下に真っ白い本があった。病院の天井に張り付け

たら同化して、そのまま消えてなくなりそうな色だ。

スツと、さもそれが自然な動作だと言わんばかりにボールペンと本が渡される。人間が二人しかいないこの空間で、今いったい何が起きているのだろうか。

表紙にデカデカと猫を描いた。

「おいおい猫つて、君……………」

「以前病院の近くで見かけた猫も白かったので、ちょうどいいですね」

「首輪に鈴がついた猫かい？あの猫は近所のおばあさんが飼っているんだ。半分ここに棲みついてるのさ。あの子もこの間見かけて、触ったって言ってたよ」

「あの子？」

「ほら、君が里子にまで考えてる男の子だよ」

「…………里子を迎える予定は無いですが」

「特定の子を引き取るのは制度上、難しいもんね」

「…ええ、そうですね」

「まあ、里子を迎えること自体は悪くないと思うよ。君の人生でさ。あの…ほら、見舞いに来てた子供がいたじゃない。その時の君の様子を少し見たけど、楽しそうだったよ」

「いえ全く」

「否定が早いねえ」

今日はシールを二枚分渡され、退出した。

一枚は仗助用についてことか。もう一枚は相変わらずなぜ渡されるのか分からない。

「朝から憂鬱だったが……収穫はあったな」

まだ確定で犯人が決まったわけじゃないが、この偶然を偶然のまま見逃すこともできない。

何か向こうにわたしの行動で引つ掛かることがあったと考えるのが妥当か。それで気分を害したのだろう。しかし、少し度が過ぎていたな。

ひとまず、帰りにホームセンターに寄ることにした。

「全部買うか」

お目当ての品は、十分に並んでいた。

???????

琢馬はあたかも「吉良が里子にしたいと思っっているほど、自分は気に入られている」と

医者に印象付けることで、男の情報を得ることに成功した。

「吉良が自分を里子にしたいと思ってるようだ」と言わずとも、図書館で偶然出会った時に傘を貸してくれたことや、さらにその後施設にまで琢馬の様子を見に来た——と話せば、自然と医者に「吉良は蓮見琢馬を里子にしたいとまで考えているのだろう」と思いつまらせることができる。

吉良が琢馬の様子を見に来たのもけして嘘ではない。男の目的は少年の周囲を探るため、であるが。

「なるほどねえ、相当彼は君を気に入って……いや、気にかけているんだね」

医者は琢馬が吉良とよく似ている、と語る。男もまた数年前、すぐにでも自殺しそうな状態だったらしい。

少年のように半狂乱になって暴れ、他人を傷つけることはない。弱い部分を隠して、普通に他人と接するのだ。心がいくらボロボロでも、その「普通」の仮面は外さない。だからこそ医者は余計に気を揉んでいたらしい。

「今は精神的に回復している。どうやって立ち直ったのかは教えてくれなかったけど」「立ち直ったって、何からですか？」

「うーん……もしかしたら彼と仲の良い君なら、他の看護婦から聞いたかもしれないけどね」

吉良には過去に付き合っている女性がいた。その女性は男の精神的に大きな支えとなっていた。しかし、その女性は若くして亡くなってしまったのだ。

「優しくて、可愛らしい子だったな。結婚してたら旦那の方が嫁の尻に敷かれてたと思っ
うよ」

「……あ！吉良さんがその女性の名前を覚えてくれた気が……えっと、何だっけ……」

「杉本鈴美さん、って方だよ。二人とも幼い時からの幼馴染だったんだって。彼女さんが教えてくれたんだ」

—— 杉本鈴美。 杉本鈴美。

同伴している施設の職員がいる待合室に戻ってから、琢馬は聞いた女性の名前を「本」で調べた。しかし名前で一致するものはなかった。これは『S一家殺人事件』が有名な事件であるが、被害者の名前は親族の意向で公表されなかったため、『杉本鈴美』のワードでは引つ掛からなかったのだ。

琢馬は今度吉良が巻き込まれたという『事件』と『杉本鈴美』を踏まえ、さらに男が住まう『杜王町』をキーワードに、過去の事件を調べた。

すると、五年前に起こった『S一家殺人事件』にたどり着いた。

当時S一家は一人娘の誕生日で、家族はリビングに集まりケーキを食べていた。そこに宅配業者を装った片桐安十郎が訪れ、まず両親を殺害。

その後、娘の彼氏に身代金を要求し——と話は続いて、最終的に交渉は決裂。片桐は海へ逃亡した。

現在も指名手配されており、娘は片桐に殺され、彼氏は重体となったが一命は取り留めた。

この事件には「なぜ片桐安十郎がS一家を狙ったのか？」という疑問がある。それについては、片桐が起こした過去の事件で、警察の取り調べ中に話した内容がその理由だろうとされている。

「イイ気になっていたから」。これが警察に片桐が語った内容だ。被害者はまったくの赤の他人だった。

さらに片桐は、まるで自慢話をするように犯行の方法や、被害者が自分に絶望した表情を見せたのかも饒舌に話したのだという。

当時S一家では娘の誕生日だった。これが「イイ気になっていた」に当てはまる。そして赤の他人であろうと平然と殺せるような残酷さは、片桐が少年期から犯した犯罪歴を遡れば十分に読みとれた。

また、ここまででもう一つ浮かぶ「いったいいつ、どの場面で片桐はS一家に目を付けたのか」については、元々宅配業者を装い家を訪れ、そこで「イイ気になっている」奴がいたら殺す。ある種、通り魔的犯行であったのだと警察は考えている（——そう、彼らは表向きでは語っている）。

つまり、S一家が殺されたのは不幸な偶然だった。

身代金については彼氏が裕福な家庭であったため、突発的に片桐が行った犯行だろう、とも。

この事件は犯人が捕まっていないことや、残された物的証拠の少なさから、「その彼氏が犯行に加担していたのでは？」という根も葉もない噂も当時生まれた。

警察もその事件の特殊性ゆえ、表に開示できる証拠が少なかったのである。

「片桐安十郎……」

琢馬は片桐についても調べた。今まで記憶していた内容とさらに新しく得たものを合わせると、多くの情報が手に入った。

幼少期の父による虐待。自分とさして変わらない歳で強姦と強盗を犯したというのは衝撃的だった。以降、牢屋に出たり入ったりの人生を繰り返している。

男の出身が、杜王町ということも分かった。そして父親が事故死してから強姦と強盗

を犯す事件の間、わずかであるが児童擁護施設にいたことも分かった。琢馬が読んでいた新聞には、『親の虐待がもたらす子への精神的被害』とある。

「片桐はオレがいる施設にいたんだ…」

そう言えば、施設でも過去に少年が同室の子供に重傷を負わせたことがある——という噂を聞いたことがある。その少年が間違いなく、片桐だろう。

「……オレの考えは少し、間違っていたのかもしれない」

『S一家殺人事件』の全体図を知ると、吉良が「殺したいと思つたことがある」相手が片桐安十郎であろうことは、想像についた。片桐が身を投げた海は海流が激しく、もし落ちれば命はまずないと、地元の漁師が話すような危険スポットである。

その岬に向かう道の途中には現在『立ち入り禁止』の看板とともに、柵などの自殺防止措置がなされているようだ。

しかしそこからの飛び降りが尽きないということは、その措置も破られているということである。上がった死体は海流の都合で、基本同じ浜に漂着している。

「もし、かしたら……」

片桐安十郎はすでに死んでいるのではないだろうか、彼は思った。その根拠は、あの猫である。琢馬の「本」と同様、キラークイーンにも何かしらの力がある。

その力がどのようなものであるかはわからないが、その力で吉良が片桐を殺した可能性に少年は至った。至ってしまった。

そのように考えるのはひとえに、少年もまた地獄に突き落とすと決めた男がいるからだ。身の内から溢れる憎悪が人間をどのように動かすか、齢十歳の少年は知っていた。だからこそ「吉良が片桐を殺した」との考えに、真実味が増す。

これは間違いなく、男をゆるするいいネタになるに違いない。交渉に使い、「オレの周囲を探るな」と持ち出すことも容易だ。

でも、琢馬はこのネタを使わなかった。

むしろ吉良を調べる間に動しんでいたイタズラもやめた。イタズラは向こうが対策を講じてきたタイミングだったので、引くにはちようど良かったのかもしれない。

愛する人が殺されて、その犯人を殺し、吉良吉影は生きている。

「目的」を持つ琢馬と違って、男は何に縋り、あるいは成し遂げようとしているのだろうか。もし目的地もなく、ただ広漠とした海を彷徨うように生きているのだとしたら、それはどれほど苦痛なのだろうか。

「相手に同情するなんて、オレもまだ甘いな…」

蓮見琢馬は紛れもなく、己と男を重ねた。似ていると感じた。大きな闇を抱えて生き

る様が。

同時に男もまた琢馬を自分と重ねたからこそ、色々嗅ぎ回っていたのかもしれないと気づいた。

そこまで考えてしまえば、少しやり過ぎたと自覚のあるイタズラを申し訳なく思う気持ちさえ生まれた。謝る気はなかったが。自分が犯人であるとバレたら、絶対に倍返しで報復されると勘付いていたからだ。

そうして月日は過ぎ、少年は五年生に進級した。

その日、学校帰りに琢馬は図書館で、数ヶ月の貸し出し戦争により読めなかった一冊の白い本を手にすることができた。

「同級生で読んでる奴はいないだろうな…」

多くの本の情報が少年の頭の中に入っているが、特筆して好きな作家を挙げるならこの作家だ。それも普段「見る」ようにする読書が、「読む」に変わっているのがその証左である。

この作家のデビュー作はちよつとした衝撃だった。以来、作家の新刊が出るたびに必ず目を通して。「作者絶対病んでるな？」としか思えない深淵ものと、「別人が書い

てるのか？」と感ずる恋愛もの。

だが文の調子や、言葉回しに息づかいなど、確かに同じ作家であるとわかる。分かるからこそ、その二面性が恐ろしい。

作家の「別人説」はテレビで取り上げられたことがあるくらいには有名である。

琢馬は本を片手に、いつもの閲覧スペースに向かった。しかし彼が座る定位置にはすでに、先客がいた。

「やあ、蓮見琢馬」

丸渕メガネの奥底で獰猛な紫目を光らせる男が、足を組み座っていた。

98話 『シ』アワセ

ふたばてるひこ
双葉照彦。

琢馬の前に現れた吉良は、一人の男の名前を語った。

「……」

「おっと。手荒なマネはよしたまえよ。周りには一般人がいるんだ」

吉良は琢馬の手の内に出現した「本」を消すように告げる。吉良の背後ではキラークイーンが男の首に腕を絡ませ、無機質な視線を少年に向けていた。

ひとまず吉良の話に乗り、琢馬は場所を移すことにした。

読むつもりだった本を戻し、図書館の外に出る。向かう先は駐車場だった。男の車は他の車から離れるようにして、人気のない場所にポツンと一台停められている。

(大丈夫。最悪「本」の力を使って逃げればいい)

琢馬の「本」には、彼自身の記憶が文章化し残されている。

一見攻撃性とはかけ離れている能力のように思えるが、ページを見せることによつて、その記憶をそのまま第三者に植え付けることができる。これを彼は「感情移入」と

呼んでいる。

例えば昨日、琢馬の夕食を食べているページを見せれば、相手は彼と同じ物を昨日食べたと認識する。ケガをした記憶を見せれば、同様のケガが肉体に生じる。

この力で彼が過去に体験した自殺の瞬間でも、事故の場面でもいい、一目見せてしまえば逃げるができる。

それで男が死んでしまっても仕方ない。何せ、『双葉照彦』の情報を開示してきたのだ。

その男は琢馬が地獄に落とすと決めた人間である。己の復讐劇の邪魔をするなら、少年は人殺しに手を染める覚悟もできている。

(図書館の中には人目もあつたし、移動せざるを得なかつたけど……)

ただ、関係のない一般人を進んで巻き込むつもりはない。琢馬の近くには児童書を選ぶ子とその親や、返却された本を戻す司書員がいた。周囲に誰もいなければ能力を使つて負傷させ、さっさと逃げた。そうすれば病院に運ばれるだろうから、意識が戻らないうちに病室に忍び込んでトドメをさせばいい。

(フウ……落ち着け。冷静さを欠いたら足を掬われる。隙を見せちゃダメだ)

“感情移入”のためには相手が二メートル以内において、尚且つ暗闇に遮られていない、視界が良好な必要がある。

車内は一步入ると少し薄暗かったが、能力を使う分には十分な視覚がある。

しかし肝心の「本」が、相手の警戒心が強いせいで出現させることができない。

ナイフも今は持ち合わせていなかった。最悪怪我を承知で「本」を使うしかない。

「アンタさつき、オレが持っていた本を見た時に顔を顰めたけど、あの作家のこときらいなの？」

「好きではない」

「面白いよ？読んでみたらいいのに」

「結構だ」

存外話してみると、対話の余地はあるように感じられた。

吉良は荷物から透明なクリアファイルを取り出す。書類はクリップや付箋などで几帳面にまとめられており、ダッシュボードの上に並べられる。

「うわっ」

琢馬は目を見開いた。一瞬見えた男のバッグには、木工用ボンドがたくさん入っていた。

思わず声を上げた少年を見るなり、男の口角が上がる。ニイ、という感じだった。

琢馬の中で赤いサイレンが回り出す。コイツは完全にイタズラの犯人が自分だとバ

れている。しかし何故木工用ボンドなのか。

「コイツを使うのは最後だ」

「えっ……？」

「君が学校帰り、だいたい同じ時間に図書館に来るのは分かっていたからね。会うのは造作なかった。が、君の身边を調べるために予想以上に時間がかかってしまったよ」

「……………」

「先にわたしにケンカを売って来たのは君じゃないか。調査をして君の人物像を推測すると、動機は概ねわかった。周囲をうろつくわたしが目障りだったのだろうね。君の、復讐のために」

「いったいどこまで知っているのか。吉良は塚馬の「目的」にさえたどり着いている。

「双葉照彦について、どこで知ったんだ」

「探偵を雇って、君の行動を細かく探らせた。他にも個人的なツテを使って、色々やっただよ。君、双葉照彦の娘をストーリーカーして家を見ていたことが何度かあっただろう？ ついでに君が誰かを殺したくてやまなそう発言をしていたから、その一家を調べさせたところ、双葉照彦の黒い情報が出てきたというわけだ。嫁と娘は驚くほど真つ白だったよ」

双葉家は夫が婿入りで、照彦の旧姓は『大神』おほのみである。職業は会社勤めの、一級建築士だ。

しかしこの男、裏では違法建築によつて多額の金を得ていた。暴力団との繋がりもあるようだ。

吉良は違法建築のいくつかの証拠が載せられた資料を手に取る。

「あくまでコイツは一部だ。より詳しく調べればまだまだ出てくるだろう」

「……それ、見てもいい?」

「構わないよ」

「……………」

「また男の周辺を調べると、複数の女性との関係が発覚した。この女たちの中で、特に『織笠花恵』おりかさはなえという人物は双葉照彦と高校時代からの先輩と後輩の仲で、女は働いていないにも関わらず、それなりの暮らしをこの杜王町で送っている。二人は今でも繋がりがああり、女は金銭面で双葉照彦からの援助を受けている。織笠花恵が双葉照彦を脅しているのかは分からないが、この女は男とより密接な関係なのは確かだ」

大神照彦と織笠花恵が密会している写真も、吉良が用意した資料の中にあつた。

「それで、これが君の根幹に関わるであろう内容だ。双葉照彦——いや、大神照彦と関係のあつた女性で、十年以上前に行方不明になつた女性が一人いる。名を『飛来明里』ひらいあかり。彼

女の祖父母は現在も杜王町に住んでいるが、かなりの高齢だ」

「……………」

握りしめている琢馬の手が、震えた。

「わたしにはね、君の大神照彦へ抱くその復讐心と、行方不明になった飛来明里という女性性が、点と点の上を定規でまっすぐ引いた線が走るような、そんな関連性があるように思えて仕方ないのだよ」

ダッシュボードには複数ある写真の中で、飛来明里と思しき女性のものもあつた。「飛来明里の行方不明事件を調べている」という体で、探偵が彼女の祖父母から入手したものだ。

吉良はそれを持ち、少年と交互に見る。

「こうして比べると似通った部分があると思——」

言葉は少年が男の手を叩いたことで止まる。唇を噛みしめ、今にも食ってかかりそうな表情で、琢馬は吉良を睨めつける。

やめろ、と言おうとした声はひどく掠れていた。

「お前にオレの何がわかる」

「さあ？ 調べた情報以上のことは知らないさ。君がどうやって母親の情報を知ったのか……とも考えたが、瞬間的記憶力の持ち主だっただろう？ だったら、本当に幼い時の記憶があってもおかしくはない。ただその記憶はこれまで忘れていたのだろう。そしてその記憶を取り戻したのが、君の「本」と関連しているんじゃないかとも薄々察している。そう考えれば、自殺を図った後の君の行動や雰囲気の変化にも説明がつく」

「…何が、目的だ」

「最終的な目標は、イタズラへの仕返しかな」

仕返しというには男が取っている方法は手間と時間、それに金もかかっている。

じっくり調べていこうと塚馬が思っていた違法建築の証拠さえあるのだ。

「言っておくけれど、わたしに手を出したらこの情報はマスコミや警察に漏れるからね。そうなれば、大神は捕まるだろう」

「……それじゃあ、飛来明里の件は裁けないだろ……!」

「司法ではね。だからといって、子供の君がわざわざ手を汚す必要があるのかい？」

「オレが生まれた理由が、復讐だ。アイツを地獄に落とすために、オレは母の体の中から出て、この世に生まれ落ちたんだツ!!」

「君の母親が、それを本当に望んでいるとでも？」

「黙れ!!!」

少年の持つていた紙束が、宙を舞った。硬く握られた拳が男の顔に当たる。鉄製の眼鏡のフレームはひしゃげて、額の上に不恰好な形で持ち上がった。ツツ、と吉良の鼻から血が流れる。

「これも仕返しのうちに入れとくよ」

また、拳が振り上げられた。

何度も何度も、琢馬は男の顔を殴った。いつも俯瞰的に物事をとらえ冷静につとめていた頭が、感情でグチャグチャに混ぜられていく。

視界は歪んで、殴る度に呻き声ともつかない声で叫んだ。

母の死。犬よりも惨めに死んでいった母。大神照彦の悪事を知った末、建物と建物に囲まれた隙間に落とされ、四角い地獄の中で彼女は琢馬を産んだ。泥の中でもたくましく生きる蓮のような、やさしくて、強い母親だった。

だが何かに揺られる感触とともに赤ん坊の琢馬が目を開けた時、視界に空が映って、細い紐のようなものが上へ上へと続いていった。

その先に紐を手繰り寄せる男がいた。その男は赤ん坊が乗る籠ではなく、もつと下を

見ていた。

大神照彦の目は飛来明里をとらえていたはずだ。しかしその目はもつと、違うものを見るような目だった。

赤子の視界は閉じられて、あとは揺れる感覚と周りの音が聞こえるばかりになる。

アレでは人間ではなく、「犬」だな――。

泥の中で気高く生きる蓮が、男には汚らしい、人間ではない畜生に見えていた。

「本」の力に目覚め、自分の過去を知った時、蓮見琢馬は大神照彦を地獄に突き落とすことに決めた。

そうしなければ絶対に、飛来明里は報われないと。

「お前はオレについて調べたようだけど、逆にオレがお前について調べていないと思わなかったの？」

琢馬の手は吉良の流す血ですっかり汚れた。

吉良は浅く呼吸を繰り返すものの、余裕な表情は崩れていない。所詮子供の拳だ。だが『杉本鈴美』の名を聞いた瞬間、瞳孔が細まった。

「『S一家殺人事件』の犯人に殺された杉本鈴美の彼氏っていうのが、お前だ」

「そうだよ。よく調べたね」

「お前が片桐安十郎を殺したんだろ？」

「ぼくが、誰を？」

「だからッ、お前が片桐安十郎を……」

「フハッ！」

断続的な笑い声が車内に響きわたる。吉良は腹を抱え、愉快でしようがないとばかりに笑う。

血で汚れた顔で浮かべるその表情に、琢馬は飛び降りて助けられた時の男の顔を思い出した。

空気が一気に張りつめる。言葉一つ発することが、静寂の水面に石を投擲するかのような緊迫感と化す。冷や汗が少年のこめかみから落ちた。恐怖で身が竦み、震え出す。

「フフフ……片桐安十郎は警察が来て、わたしの目の前で崖から飛び降りたのだよ。わたしが殺したなんて、酷いことを言うじゃあないか」

「でも、片桐は確実に死んでいる」

「ほう。何故そう思うんだい？」

「生きていたなら、絶対にお前を殺しにやって来るはずだからだ」

片桐の人物像を踏まえれば、約束を破り警察に連絡した吉良に（表ではそう公表されている）、恨みを抱いても何ら不思議ではない。むしろそのくらいの事を平然と行う。

それに特別な力キラークイーンを持つておきながら、ただやられて終わり、とは考えられない。『S一家殺人事件』以降に力に目覚めた可能性もあるが。

「警察が再び調べたところで、証拠は何も出ないよ」

「世間はどうかだろうね。「彼氏が犯人に加担していた」「真犯人は実は彼氏だった」って噂が流れたくらいだ。使いようによっては、面白おかしく騒がれるに違いない。そうなたらアンタは否が応にも注目を集めるだろうぜ」

「それは、困るな」

カヒユ、と少年の口から息が漏れた。

キラークイーンの片手が琢馬の首を掴み、座席に押しつけるように絞め上げている。琢馬はその手から逃れようにも敵わず、空いている手に「本」を出現させる。

しかしページを開く前に、もう片方のキラークイーンの手が掴んでしまう。

「何らかの攻撃も可能だが、それには「本」が必要不可欠って感じだな」

「……………!!」

「そう言えば、以前わたしが君にした話があったらどう？」

それは幼き日の吉良少年が、子猫を拾ってきたという話だ。

「泡を吹きながら、踊るように死んだんだ。わたしは最初、本気で飼おうと思って連れて来たんだよ。だが里親に出すことになってしまった。そうなると急に冷めてしまったね。その時ふと「コレを殺したらどうなるのか」と思った」

何の感情も映さない紫目が、豚馬を捉えている。少年から酸素を奪う男の口元は、うっすら上がっている。

「殺した後に土に埋めたが、奇妙なことに何も思わなかったんだ。「土で手が汚れた」とは思っただけだ。「殺して悪かった」とは思わなかった。思えなかった。そして自分が罪悪感を抱いていないことに気づいたら、無性に面白くなってしまったね。笑っていたところを父に見つかってしまったよ」

「……………あ」

「おっと、死んでしまうな」

解放された少年は荒い呼吸を繰り返す。一瞬、脳裏に母の顔がよぎった。バックミラーに映る彼の顔は、熟れたリンゴのように真っ赤だ。

「わたしは別に君の復讐を否定しているわけではない。むしろ理解して、同調すらしている。憎い相手を殺してやりたいと考えるのは当然のことだ」

「な、っ、ら……!!!」

「だが、君が手を汚すことを飛来明里は望んじやいない」

「そんなのアンタには分からないだろッ!!!」

「そうだ。わからない。しかしそれは君も同じだ。母親が君に「大神照彦を殺せ」と言ったのか？ 違うだろ」

「うるさいッッ!!!」

ゴツ、と塚馬が持っていた「本」が男の頭にクリティカルヒットした。

吉良は大きく呻いて窓に頭を打ちつける。切れた頭からはかなりの勢いで血が流れた。

「……君は、前に問うたな。誰かを殺したくて狂いそうになったことがあるか、つて。それで言えば、わたしはしょっちゅう他人に殺意を覚えている。これはでも、感情で左右されることはあるが、今すれ違っただけの女を殺したいと思うことが大半だ」

「え……？」

「殺すと、きつとすごく満たされる。ぼくがずっと抱えているこの『狂おしき』が一気に消え去って、平穩に植物のように暮らせる」

琢馬は咄嗟にノブに手をかけた。出ようとして、そう言えば車に乗った後に鍵をかけたことを思い出す。

幸い自分から開けられる位置にあり、手を伸ばしてロックを解除しようとした。

しかし、横から伸びてきた手に阻まれる。冷たい手だった。

「だが人を殺したことはない。どうして分かるかい？ 今だって、君の首をへし折って、この世にその痕跡を一つ残らず消し去ることだってできるんだ」

「……………」

「それは、ぼくを愛してくれた人がいたからだ」

その人物が誰なのか、少年には想像がたった。

杉本、鈴美。

「君には誰よりも君の味方をしてくれる人間がいるじゃないか。母親に愛された記憶だって、あるんじゃないのかい？」

「……………」

「だからこそ、手を汚すなど言いたいんだ。…………ハア、本当に、ここまで関わる感じじゃなかったのに」

「それ、じゃあ」

「何だい？」

「誰が、大神照彦を裁くんだよ。誰が、飛来明里の恨みを晴らすんだよ！それができるのは、オレしかない…………!!」

「まあ、待ちなよ。わたしは「司法では裁けない」と言ったが、それ以外の方法で地獄に落としてやる方法はある」

「どうやって…………」

「最初に「暴力団と関係がある」と言ったら。そこを突けば、連中が逆恨みして殺してくれる。それも想像を絶する方法でさ」

そのための前段階を吉良はすでに進めているらしい。

「双葉家はなんと最近旦那の浮気や過去の女のいざこざが発覚して、離婚するそうじゃないか。親権は離婚が父親が原因ということもあって、母親に渡るそうだよ」

「えっ」

「この話はまだ知らなかったか。本音を言えば、わたしは君が犯罪に手を染めることよ

り、双葉家の一人娘が不幸に巻き込まれることの方が胸糞悪いんだ」

「……少女が、好きなの……？」

「また首を絞められたいようだな」

「……杉本鈴美と、重なるから？」

「そういうこと……だろうね。とにかく離婚したら、大神を釣り上げる。それでも自分の手で復讐をやり遂げたいというのなら、せめて腹違いの娘は巻き込むな。——

貴様の不幸は、貴様だけで噛みしめて、苦しめ」

今日イチ冷たい表情で、吉良は吐き捨てるようにそう語った。

「オレ、は」

「考える猶予はやる。離婚の話がついた頃にまた来るよ。この資料は君にやる、原本のコピーだが」

「……どうして、オレにそこまでするの？」

「君がわたしに似ていたから。同時に片桐にも、知り合いの眼鏡のアバズレ女にも似ている。色んな色が混ざり混ざって、真っ黒な君に似ていると思わせる」

「……………」

「まあ、お節介だと思えばいい。それと、ここからが本題だが」

「……………えっ、今から?！」

「おや、忘れてないだろうな。君がわたしにした悪質なイタズラの数々を」

「アッ」

琢馬はすっかり忘れていた。何をされるのか、一気に血の気が引いていく。

吉良は鞆から木工用ボンドを取り出した。

「口以外の全身の穴に詰めてやろうと思っただが、少し可哀想だと思っただ。だから二択にしよう。目と耳にボンドを詰め込むか、それとも用意した分全てを尻の穴に詰め込むか……………どちらがいいかね?」

清々しい笑顔で吉良は笑った。

琢馬は瞬間的にロックを解除し、開けた扉から資料を片手に走っていく。

笑顔＋血＋木工用ボンド(?)という相乗効果で、恐ろしい姿となっていた男から決死の逃亡を果たした。幸い、向こうに追ってくる様子はなかった。

「……………はあ」

そしてその日、施設の門限を過ぎて帰宅した琢馬は、院長からこつてり叱られた。最初は服についた少量の血に驚かれたが、そこは鼻血を流したことにして誤魔化した。

首の痕についても服で隠し、資料もランドセルに入れてやり過ごしている。琢馬は一人部屋であるし、風呂も小さい子は職員や歳上の子供が監督として付き添うが、彼も思春期に入る年頃だ。普通に一人で入る。ゆえに一番目立つこの痕は、余程のヘマをしなければバレる心配はない。

何か一つでも向こうの都合が悪くなるのがバレれば、吉良が握っている大神の情報が明かされてしまう。

まだ復讐を捨て切れない琢馬からすれば、この上ない脅しだった。

「どうするか…」

「琢馬？」

その時、部屋をノックする音が聞こえた。『なきむしぼうや』の声だ。考え事と着替えを同時進行で行っていた彼は、二つ返事でOKを出してしまう。

あ、と思ったがすでに遅かった。

「その痕…どうしたの？」

「何でもない。誰にも言うな」

「でも……」

「……お願いだよ」

「ツ、………わかった」

『なきむしぼうや』は琢馬が五歳の時に義理父の虐待で入所した子供だ。

当時はよく泣いていて、琢馬が記憶の中の本を読んでやってから仲良くなった。数少ない、彼の友だちのような存在だ。

「ねえ、今日さ、いつしよに寝てもいい？」

「みんなと寝ればいいだろ」

「いいでしょ？今日は琢馬と寝たい気分なんだ」

「……勝手にしろ」

「やったあ！」

少年は職員に話をし、本当に二人で寝ることになった。他人と距離を空けていた琢馬を知る職員からすれば、『なきむしぼうや』の提案は都合が良かった。

「一人でいつも、さみしくない？」

「…別に」

「たまにはみんなといっしよに寝ようよ。みんながいるから夜も怖くないし」

「……………」

「考えといてね」

「…つたく、わかったよ」

琢馬が『なきむしぼうや』とこうして他愛なく話すのは、久しぶりだった。「本」の力を得てからは、人をずっと避けていたからだ。

今日は色々とあつて疲れたせいもあり、床についてから直ぐに琢馬の臉は降りて行く。

その時ふと、男の言葉を思い出した。

彼を、愛してくれる人。飛来明里は——母親は、生まれたばかりの赤子に惜しまんばかりの愛を捧げた。短い時間でも、それに縋つて少年が生きるには十分過ぎるほどの愛情だった。

「お前は」

「え？」

「お前は、オレのこと好きか？」

彼が逸らしていた体を向けると、二人が向き合う形になる。目を丸くしていた『なきむしぼうや』は、溢れんばかりに笑った。

「うん。琢馬も、ほかの子も、院長先生も、職員さんたちも、みんな大好きだよ」
「……そっか」

「大丈夫。僕らは一人じゃないんだ」

『なきむしぼうや』が布団から手を出して、琢馬の手を握る。一瞬琢馬は驚いたが、その手を握り返した。

今日は不思議と、よく眠れそうな気がした。

???????

白い。

四角い。

見覚えのある光景に、目覚めて早々に絶望した。

どうやら蓮見琢馬が逃げていった直後、わたしは気を失ったらしい。頭の血が思っ

いた以上に流れていたのが原因だった。

車で倒れていたところを通りすがりの人間に発見され、救急車を呼ばれたのだそう
だ。

わたしの顔に明らかに他者に殴られてついたあざや、助手席側の扉が開いていたこと
から、最初は第三者の暴行と考えられた。

しかし事件にされるのは嫌だったため、精神に難があるのを引き合いに、「自分で殴つ
た」などと話してどうにか警察沙汰は免れた。

少年にたどり着いて首の痕がバレたら面倒だ。首を絞めたのはキラークイーンだし、
わたしと手の大きさが合わないため、万が一の場合は証拠不十分で言い逃れできるが。

あの小僧もこちらが「鍵」を握っている以上は、余計なマネはできない。本当は首を
絞めなければよかつたんだが、殺すのを我慢できただけマシだと思つてほしい。

また、カバンに大量にあった木工用ボンドも不審に思われていた。

これと扉が開いていたことから、木工用ボンドを使った際の匂いを換気するためだつ
たのでは——？と考えられたらしい。ボンドの使用用途は自殺にされた。

木工用ボンドを多量に摂取して…の時点で、もし本当にわたしがそれで死のうとして
いたなら、お間抜けにもほどがある。

しかし否定も肯定もしなかった。事実から遠ざかるならもうそれでいい。

ここまですで、再び入院生活を余儀なくされたわたしの精神が投げやりになつていたのは、言うまでもない。

それから一週間ほど経つた中、病室に蓮見琢馬が現れた。定期検診のついでに医者から愚か者の話を聞いたらしい。

そこで答えをもらつた。ついでにイタズラの件に関して、きちんと謝罪を受けた。

ボンド以外でわたしの恨みを晴らすことに決まり、奴の頭をほかの患者から借りたバリカンで刈り上げ、丸坊主にした。これで少しは腹の虫がおさまつた。

そしてさらに月日が経つた頃、大神照彦が行方不明になつた話を聞いた。離婚していた妻と娘は、別れてから杜王町を出ていた。

いったい大神はどうなつてしまつたのだろうか。清く正しく生きないから足を掬われたのだろう。今頃魚の餌になつているかもしれない。

一方、行方不明になつた大神の件で「もしかしたらあなたにも危害の手が……」という感じで探つた織笠花恵から、飛来明里の真相を聞き出すことができた。

彼女は大神照彦の犯行を知っており、協力者の立場にあつた。この件を知っていたが

ゆえに金をもらっていたのだそうさ。

というか、飛来明里に大神の悪事をバラしたのがこの女だった。事の元凶である。

織笠花恵が話をしていなければ、少なくとも飛来明里は死なずに済んだ。彼女がビルの隙間に突き落とされた時点で蓮見琢馬を身ごもっていたから、本来なら親子二人で暮らすことができていた。

この件は少年に教えなかった。

その代わりに、彼女が大神の関係者だと裏に売った。これは完全にわたしのお節介である。程なくして、織笠花恵も杜王町から消えた。

殺されはしないだろう。その手の界限はアダルト業界と繋がりがあるから、大神よりも悲惨な目に遭っているかもしれない。手の綺麗な女だったから、その部分だけ切ってもらっても良かったかもな。

まあ、美味しい餌の味を知ったら本格的に自制が利かなくなる。頼まなくて正解だった。

直接わたしに繋がるようなハマはしていないし、殺しもしていない。死を呼び込んだのはわたしでもなく、蓮見琢馬でもなく、飛来明里でもない。奴らの業が、然るべき報いを与えたのだ。自業自得というやつだね。

わたしは少し、この杜王町の掃除をする手伝いをしただけだ。やり終えた心境としては、実に清々しい。

だが二度と面倒ごとと分かっていながら、首を突つ込むことはしないと決めた。

それと…：そうだ。

蓮見塚馬の里親が決まったそうで、彼もまた杜王町から離れた場所に移り住むことになったらしい。

色々とおつたが、収まる場所に収まったという所だろう。

必要だったとはいえ、蓮見塚馬に自分の殺人鬼のサガを教えてしまったのは少々不安が残るが。

まあ、そのためにも念のため、今後一切知り得たお互いの情報を他者に漏らさないことも決めた。もし破るとどうなるか、少年は大神の一件で理解しただろう。

保険として、小僧が復讐のために犯していた盗みなどの犯罪の証拠もいくつか得ている。いざという時はコレを使うさ。

多分、大丈夫だとは思うがな。最後病室で会った少年は、どこか晴々とした表情だったから。今更わたしを陥れよう、という気はないだろう。

それから数年後、時代が二十一世紀に入って間もなく。居間でバックトゥーした編集と話していた時のことである。

人の過去作品を話題に出し盛り上がる泉くんは、その作品を書いた当時の裏を聞いてきた。

「あの『シ』って色々な憶測がされてましたけど、どうして全部カタカナだったんですか？すべての文の最初が「シ」縛りだったのも不思議でしたし」

「さあ」

「書いた本人なんですからわかるでしょう？先生ッ！」

「そう言えば君ってパソコン使えるかい？」

「ちよつとお、話を逸らさないください」

「いい加減慣れておくべきだと思ってるね。使い方をレクチャーして欲しい」

「……意外とテクノロジーに疎いですよ、先生は。携帯電話もせつかく持ったのに、固定電話使ってるじゃないですか」

「パソコンでスムーズに執筆できるようにになったら、わざわざ君と顔を合わせなくて済

むから嬉しいよ」

「ほ、本気で言ってるんですか、それ…!? こんな美人な編集ちゃんと会えなくなるんですよ!! たまにしか!」

「君は美人じゃなくて、可愛い方だろ」

「ふえっ」

「ときめくな。顔がムカつく」

話しながら飲んでいたココアはすっかり無くなった。

今回執筆とは別に、K O 談社で行う恋愛をテーマにした賞の審査員をしてほしい、と話が来た。

非常に面倒だが、仕事ならやる。というかすでに募集でいくつか届いていた作品をコイツが持つて来ている。人の了承を取ってからにしろ。猫草の件といい。

「この『フタバチホ』って子の作品なんか、わたしも一度読みましたけど、面白かったですよ! 甘酸っぱい感じの禁断の愛で……」

「禁断の愛は甘酸っぱくないだろ」

「それは先生だったら、でしょうね。禁断の恋がいつもドロドロのヤツだと思わないでください」

原稿を見せてもらったが、たしかに甘酸っぱい風味だった。内容も拙い所は多いが、

一つの作品として十分読める。

というか、執筆者の名前に見覚えがあったが気のせいだろうか。この図書館で会ったっていう男の性格とか、「すごく記憶力がいい」って設定も、何だか見覚えがあるんだが。

「うん、気のせいだな」

「他にもあるのでジャンジャン見てくださいね」

今あの小僧がどのような人生を送っているのかわからないが、もしこの小説が元になっっているなら、悪くない人生を送っているのだろう。

【とある図書館での】

「兄妹愛……つてのはちよつと重かつたかな、設定的に？」

「面白いんじゃないか？ コレを読まされた時の俺の心境を察して欲しいけど」

「ハア……大好きな先生に読んでもらえるなんて、ドキドキしちゃうなあ。結果が待ち遠しいよお……」

「千帆ならまあ、大丈夫さ」

「はああ……」

一人娘を持つ女性と、里子を持つ男性が結婚した。

そうして奇妙な運命の巡り合わせをした兄妹がいるとか、いないとか。

99話 呪いのビデオ（笑）

「先生、「呪いのビデオ」ってご存知ですか？」

ある日の打ち合わせ中、客間の一室でわたしの担当はそんな事を聞いてきた。

「ほら、前にK O談社の作家陣が集まって、短編のホラーを書く企画があったじゃないですか」

「君が無理に勧めてきた件だね」

「あはは…その節はすみませんでした。でもすごい好評だったじゃないですか！それで、今回もなんですけどおく……」

つまりまたホラーものを書けと。そういうことらしい。所謂幽霊の類を信じていないわたしに何故書かせようとするんだ、君は。

「需要があるからこうしてお話をお持ちしてるんですよ。何だかんだ仕事だったら引き受けてくれるし」

「後半本音がダダ漏れだったぞ」

「おっと、うっかり口を滑らせてしまったみたいです。泉くんだけに」

「そうだね。君は尻も軽いが口も軽かったね」

「殴りあそばしますわよ？」

泉くんは茶を飲み、「はあ、……」と中年臭い声を出す。向こうが仕掛けてくるならわたしも返す。何方かが倒れるまで続くロシアンルーレットだ。勝率はもちろんこちらの方が高い。

「——で、最初の話に戻しますが、「呪いのビデオ」はご存知なんですか？」

「ああ。少し前に流行った映画のネタだろう？」

「そうです。井戸から女の霊が出てくる例のやつです。呪いから逃れるには、一週間以内にビデオを他人に見せなければなりません。来てんですよ、ホラーのビッグウェーブが！この波に乗らなきゃ呪われますよ！」

「君が仕事を取ってこいと言われた編集長に？」

「……………へっへっへ」

凶星みたいだな。職場からここまでの移動だけでも大変だろうに。わたしは杜王町を出んがね。

「今日持って来たのは『ネタ』です。ただあくまで噂話でしかありませんけど」

最近本当に「呪いのビデオ」が出回っているという話を、この編集は聞きつけたらしい。若者を中心にその噂がまことしやかに囁かれているそうだ。

「実物が手に入ったらしいんですけどね…。例えばホラー特集の雑誌に『いわく付きのもの募集中心!!』ってコーナーを設けるとか」

「ホラーが苦手な人間の発言とは思えないね」

「先生って確か靈感ありましたよね?」

「零感^{ゼロ}だよ」

「レール感だけに?」

「……………へつくしゅ!」

「そんなに私のギャグ寒かったですか!」

客間じゃ寒いな。早くこたつの恩恵に与りたい。

それから色々と話し合い、打ち合わせが終わった。仕事は仕事であるし、あまりにも無茶な話でもないのでホラーの件は受けた。

編集の勘と言うのだろうか。泉くんの持つてくる「ネタ」には時折奇妙なものがある。そしてその「奇妙なネタ」が目前に出された時、引っ張られるような感覚になることがある。スタンド使いが引かれ合うのと似たものかもしれない。こちらが願ってなくとも、深淵の方から歩み寄って来る。困った話だ。

「探るなど言っても、君はまた突っ走るんだろうな……」

「モチのロンです！美味しいネタを持ってくるのも編集の仕事ですからね！」

「ハア……」

わたしの目を盗んで調べ、やばいものを知らず知らずのうちに持ち込まれても困る。ならば協力し、ネタにしなから解決してしまった方が早い。

前に四国に行ったとかで、七つのよく分からんものを引き連れて家に入られそうになった時は本気で止めた。その時猫草が嵐を吹かせていたからな。

???????

わたしの知り合いで若い連中と言えば、思いつくのはあの漫画家と高校生連中だ。

岸辺露伴は耳が早い。ゆえに「呪いのビデオ」についてすでに何らかの情報を得ている可能性がある。それどころか現物を手に入れてもおかしくない。

しかしこいつとはあまり関わりたくない。理由は妙なものを「引きつけやすい」男だからだ。親交を深めた拍子にその流れ弾を食らうのは御免である。

そうすると残るのは学生連中。奴らの中には漫画家と親しい広瀬康一もいる。探りを入れるなら丁度いい。

というわけだ。某日、仗助を釣ってカフェ・ドウ・マゴに学校帰りの三人トリオを集めた。奢りと聞いた虹村億泰はこれ見よがしに高い物を頼んでいる。いや、仗助もだ
な。

「このデカ盛りのパフェ、一度は食ってみたかったんだよなあ！ウンめエ〜!!」

「億泰くん、眉間にクリームがついてるよ…」

「吉良さんが俺たちに話して珍しいっスね」

「少し聞きたいことがあってね」

端的に、呪いのビデオが実際にあるらしい——という話をする、反応が分かれた。露骨にビビったり、ビビっているのを顔に出さないようにしたり、パフェに夢中になつて話を聞いていなかったり。

「俺はねえかな。康一は？」

「僕もないよ」

「そうか…。実は仕事の延長線上で少し調べていてね。広瀬くん、君はこういった話に敏感そうなあの変人漫画家から何か聞いてないかい？」

「露伴先生ですか？ウーン……特には何も」

「スゲエ……スゲエぞ！食っても食っても底が見えねえ…!!」

「…おい億泰、お前ちゃんと話聞いてんのか？」

「アア？このいちごがブランド品かって話か？」

「ちげーよツ!!」

話を聞いていない奴は無視しようと思ったが、仗助が上手く対応した。概要を聞き、なるほどなア、と呟いた億泰少年は一旦スプーンを器に戻す。

「呪いのビデオってアレかア？映画のヤツ」

「中身が映画と同じかは分からないけど、実際に「呪いのビデオ」があるみたいなんだよ」

「それなら聞いたことあるぜ？」

「えっ？」

「その話はどこで聞いたんだい？」

億泰少年は授業をさぼって屋上で寝ていた時、偶然上級生の話を耳にしたらしい。しかも彼らの会話からして、現物を渡していたようだ。果たしてそれが本物なのかは分からないが、意外なところから収穫を得た。話を聞いたのは少し前のようだ。

「先輩を探ればすぐに見つかりそうだなア…」

「うん、そうだね。ところで君たち、最近何か欲しいものはないかい？」

ココアを飲むわたしに、学生どもの視線が向く。初っ端からブランドの服を口にした
仗助には呆れた。

「物」で与えるとは言っていない。個人で差が生じるからな」

「……そう言う吉良サンはどうなんスか？学生を金で釣るなんて、イイ大人としてどう
かと思えますけどお？」

「貸し借りを作るのが嫌だから報酬制にただけだ。そもそもわたしが今調べている件
は「仕事の延長線上」と言っただろ。つまりはまあ、短期間のアルバイトだと思ってい
れ」

少し考えていた康一少年も、そういう話なら、と納得したようだ。与える金額はか
かった期間と奴らの働きぶりで決めることにした。最低額は先に掲示してある。

「現物を手でできたら連絡してくれ。わたしはそろそろ行くよ」

「ちよつと待つてくださいいっす!!」

億泰少年は叫ぶと、パフエをかき込んだ。大声を出すな。せつかく目立たん席を選ん
だのに台無しだろうが。

会計のため財布を持ったこちらを見ると、奴は人差し指を出した。

「お代わりいいっすか!!」

がめつい少年のテーブルには、新たにもう一つパフエが運ばれた。

???????

仗助から連絡があったのは一週間後のこと。例のビデオを見つけたと。

ただ貸し出しの順番があり、彼らに回ってくるにはしばらく時間がかかるらしい。持ち主は調べたが、わからなかったようだ。

「呪いのビデオなのに随分と人気だな」

『これもホラーブームってやつなんスかねえ?』

報酬は現物と交換で渡すことにして、ビデオの中身は一度確認した方がいいだろう。わたしの気のせいならそれでよし。『本物』ならば、七つのよく分からんものの時のように爆破すればいい。

『吉良さん、見るんならせつかくだしみんなでどうスか?』

「断る。それに万が一本当に呪われたらどうする」

『大丈夫つスよー！どうせ本物じゃねえだろーし』

そこなんだよな。嫌な感じがする割には目に見えた被害者がいない。仮に呪われて死んだ人間がいたなら、学校で噂が立つはずだ。

しかしビデオを見たという奴らは特に何ともなく、感想も「アレはスゲエせ、見りやわかる…」と、大体こんなものらしい。だから仗助たちも中身が気になっているのだ。

『頼んますよオー！』

「ならお前たちで先に見ればいいだろ」

『……………』

「怖いんだな？」

『そ、そそ、そんなわけないつスよ〜』

まあ、こちらから頼んだのだ。鑑賞を共にするくらいならいいだろう。

見る場所は奴らの都合を踏まえてわたしの家になった。

やはり了承するべきじゃあなかったと、後悔した。

休日。吉良邸に四人が訪れた。吉良の編集もここぞとばかりに参加している。

「君らの後ろに何か憑いてる気がするんだが、わたしの気のせいかい？」

「「エツ」」

高校生三人が固まる。吉良は頑なに認めないが、「視える」側の人間だと彼らはすでに知っている。

当の男の視線は康一の背後に向けられていた。

「なに、康くんから興味深い話を聞いたものでね」

「帰れ」

「せんせーっ！私が客間をイイ感じに怖くしときましたよ——!!」

「勝手な真似をするな」

編集は何やらカシヤカシヤと音を鳴らしながら玄関に來た。音の正体は手の中にあるマツチの箱である。その中身が歩く振動で音が出ている。

「あれ、一人多くないですか？……あつ！あなた前に先生を殴った男ツ!!」

「岸辺露伴だ。君が先生の担当編集か……」

「……岸辺露伴って、あの『ピンクダークの少年』の岸辺露伴先生ですか!!?」

「騒がしくするなら全員帰れ、今すぐに」

漫画家にサインをねだっている編集を置き去りにし、吉良は呆然と立っている高校生トリオを中に案内する。

客間は縁側のカーテンが閉められていることで薄暗かった。テーブルに置かれた口ウソクの火は受ける風圧でゆらゆらと揺れ、何とも頼りない。ついでに、部屋の隅には新聞紙の上に置かれた植木鉢もある。その中で猫草は眠っていた。

「仏壇から勝手に出したのか…」

口ウソクの火を消した吉良は正方形のペンダントライトに手を伸ばし、部屋の明かりを点けた。茶菓子を用意しようとした矢先、ノートにちよつと豪華なサインをもらえた編集がスキップでやって来る。

「家宝にしよ……あつ、先生！この有能泉くんがポップコーンを準備してますよ!!」
「やたら大荷物だったのはそのせいかな」

キッチンには確かに紙包装の箱に入った大きめのポップコーンが五つある。道中で買ったのだろう。食べる気になかった吉良はそれを漫画家に譲った。

そして客間にそろった六名。座る位置は長方形のテーブルを囲うように、奥が露伴、中央が右から順に康一、仗助、億泰。手前に泉で、彼女の後ろにあぶれた吉良が座った。「ふーん、これが「呪いのビデオ」ね」

「あ、ちよつと取らないでくださいよ、露伴先生！」

康一がカバンから出したケースを見分する露伴。パッケージは白く、何も描かれていない。中を開けると一枚の紙が出てきた。

「勝手に触るな、岸边露伴くん」

「別に見るくらいいいだろう、ケチくさい中年だな」

「……………」

吉良は胃を押さえた。朝からこの調子である。

畳に落ちた紙には血のようなミミズ文字で、いかにもな文面が書かれていた。

『部屋才暗クシマシヨオ。一人デ見マシヨオ。最後マデ見マシヨオ』

高校生組は顔を青白くした。対し大人組は興味深そうに見たり、眉間に皺を寄せたりする。

「これを一つでも破ったら呪われるんですかね？それとも全部守ったら呪われるのか……」

「それなりの人間が見ているなら、すでにどのパターンも該当済みなはずだろう」

吉良は泉から視線を外し、中身を手に取る。見た感じ、普通のビデオと変わらない。

背の白いテープが貼られた部分には、『これは呪いのビデオ!!!!』と書かれている。紙にあつた筆跡とは異なるため、貸し借りされるうちに誰かが書いたのかもしれない。

「じゃあ見るぞ」

部屋が暗くなり、卓上に心許ない光源が点く。ゴクリと、誰かの喉が鳴った。静寂の中にテープの巻き取られる音が響く。

そして、映像が始まった。

数十秒続いた暗闇から暗転したその中に、一人の男がいる。スーツ姿の、40代ほどの平凡な見た目の男だ。

部屋は自宅のようで、男はネクタイを緩めると、ベッドに寝転がる。ちょうどその時、ピンポンと音が鳴った。

男の背後を追うように、その映像が続く。

またピンポンと、音が鳴った。

床を歩くペタペタという足音。玄関の前に立った男は、その扉を開けた。そこに、いたのは。

胸元が大きく強調された服を着た、えっちな感じのお姉さんだった。

「デリバリーヘルスデリヘルやないかいっ!!」

コンセントを引き抜いた泉が叫ぶ。言葉の意味を知らなかった高校生たちは恐怖と、困惑と、ちよつとよぎつたモヤモヤした感情の中で首を傾げる。

「あの…デリバリーヘルスって何ですか?」

「お、オホホ…それは、ええーと…」

「H^{ヘル}ealthは「健康」って意味だから…健康を配る?」

「ケンコー配ってどうすんだよ。だったら普通医者行くだろ」

「……………おい、仗助エ、康一。もしかしてコレってよお…」

「あつーくく!!あそこに貞子がいるぞお!!」

編集はチラツ、チラツと吉良に助けを求める。未成年が真実（18禁）にたどり着く前に、何が何でも話題を逸らしたいようだ。

ハア…と、彼はため息を吐く。

「貴様ら食べカスを落とすすぎだ。一旦掃除するから廊下に立ってろ」

元々食べこぼしにイラついていた男の剣幕は恐ろしい。少々高校生三人は編集に背

を押される形で部屋を出た。

箒とちりとりを取ってきた吉良はさっさと掃き始める。その間、漫画家は取り出したビデオテープをじつと見ていた。

「……………」

「何だ、欲しいんだつたらあげるよ。学生には不健全なものだしね」

「……………」

露伴はビデオをテーブルに置き、今度はカバーをじろじろと眺める。

「……………ん？」

カバーの貼られた保護フィルム。そこはポケットのようになっており、表面と裏面が一体となった一枚の紙が挟んである。

それを抜き取った露伴の目が丸くなった。

「ナア、なあオイ、星ノ先生……………じゃなかった、吉良吉影」

吉良は胡乱な顔をしながら漫画家の手元を覗き込んだ。

『これおみましたか？』

『うしろ』

『みましたね?』

『いまいきますね?』

『いきますよ?』

『死ね』

ピンポーンと、音が鳴った。

露伴は目を見開き、吉良を見る。男の顔は玄関の方に固定されていた。

「なあなあなあ、コイツア本気^{マジ}にヤバいんじゃないか?!?」

「これだから貴様がいるのは嫌だったんだ……」

廊下の先にはちようど玄関がある。廊下に出ている四人からはガラス越しに見えて
いるだろう。その場所に、立っている人物が。

二人が客間を出ると、すぐ側に億泰たちがいた。全員玄関の方に視線が釘付けになっている。

ガラス越しにぼんやりと映るその姿は女のものだ。

「せんせーい！遅れてすみません!!」

声は泉のものだった。高校生三人と、漫画家の視線が中にいる彼女に向く。

「えっ……え!!?何で外から私の声が!!?」

「先生すみません！新幹線が遅れちゃって……」

中の編集に向いていた視線が、今度は吉良に向けられる。半目だった男は、何かに気づいたように「あ」と声を漏らした。眼鏡の奥の紫目が捉えるのは、外——ではなく、中。

「君、わたしと二人の時は「吉影さん」と言うのに、今日はずっと「先生」呼びだったな……?」

「ツ………「ヘブンズ・ドアーツ」!!」

露伴が泉を本にした。気を失った女は倒れ、パラパラ、と本がめくれる。一方で仗助たちは「ギャア——ツ!!」と絶叫し、奥のキッチンへ逃げた。

「ク、ソツ、意識が……」

岸辺露伴が遠のく意識で見たのは、ため息を吐く男の後ろ姿だった。

『ニャー』

猫の、声？

そう口にしようとした露伴の声が、音になることはなかった。

???????

倒れた連中が起きたのは一時間後のことだった。泉くんが一番最初に起き、客間を出ようとしたその瞬間、廊下に並べられた男四人を見るなり悲鳴を上げた。奴らは置く場所がないから廊下に転がしておいたんだ。

玄関のよく分からんやつについてはキラークイーンで真つ二つにしたビデオテープを見せ、「消えた」と言った。

「……………」

岸部青年だけ納得の行かない様子である。

「その……………このテープはどうするんスか？」

「お祓いに出しとくよ。完全にアレが消えたかは分からんからな」

仗助たちは自分たちもお祓いに行った方がいいか聞いてきたが、知らん、で一蹴する。

奴らは結局、神社に向かう泉くんについて行くことにしたようだ。情けない奴らだな

…。

そうして四人が去った。

岸辺露伴が帰らない。

「……………お前、アレをどうしたんだ？」

「さあ？向こうが用事を思い出したんじやないかな」

「……………」

面倒くさい奴に捕まってしまった。貴様の好奇心を満たさせないとダメなのか？

「そもそもの話だ。「呪いのビデオ」はここ杜王町だけでなく、もつと広範囲に噂が広まっている」

ビデオの本体は成人指定のもので、学生らは「呪いのビデオ」と銘打って中身を暗号化していたんだろう。そこらの感性に共感することはわたしには難しい。まあおそろく、本棚にミケランジェロの画集を他の画集に紛れ込ませると似たものではなからうか。性的なコンテンツに隠したい心理が働くのは当然なはずだ。

わざわざ「呪いのビデオ」の名を使ったのも、映画の流行が関係しているのではなからうか。

「だが何故康一くんが「被害がない」と言っていたにも関わらず、僕らに実害が起きたんだ？」

「カバーがあるだろう？もしかしてと思って裏側をわたしの編集に見せたが、ただの白い紙だ——と、言っていたよ」

「……………!!」

わたしやこの漫画家と彼女の相違点は、スタンドの有無だ。

スタンドで一括りにされるものかは分からないものの、「特別な力」を持つ者が裏側を見た時、条件がそろいのだろう。もしくはその条件さえ本当はもつと緩いもので、力を持つ人間がビデオを入手した時点でアウトなのかもしれない。

「ビデオもダビングすれば数はいくらでも増やせる。そうすれば広範囲に噂も広まる」

「…いったい誰が広めてるんだ？」

「知らないよ。まあ、何者かがわたしたちと同じような、特別な力を持つ誰かを探しているのかもしれないね」

—— 相当な、恨みを持って。

そう続けると、岸部青年は息を飲んだ。

「単純に、探す対象が違うとわかったから消えたんだろ。あくまでここまで話したものはわたしの憶測でしかないがね」

「……………」

「不安ならお祓いに行くことをオススメするよ」

沈黙のまま、岸辺露伴は帰宅した。これでようやく我が家の平穏が戻った。

「しかし、仮にわたしの考えが真実の核心をついているのだとしたら……」

爆破させる前に消えたアレは、いったい誰を探しているんだろうな。

100話 魔女の一撃

40代になり、人生ではじめて腰をやった。掃除のため客間にある長テーブルをキラークイーンと移動させようとしたところ、ピキッと音がして、死んだ。

オヤジには「吉影、とうとうお前もか…」と哀れまれ、痛みも相まって並々ならぬ殺意が湧いた。

しばらくの安静期間ののち、わたしは予防策を講じることにした。

ぎっくり腰は長時間同じ体勢だとなりやすいようだ。仕事中は適度に休憩を入れて体をほぐしているが、これにも限界がある。

手っ取り早いのは体幹を鍛えることだ。この時脳裏に過ぎたのは、ヨガとジムである。ヨガは女ばかりで浮くイメージしかないので却下だ。

「となると、ジムか…」

自分に潔癖のきらいがあるのは理解している。すでに潰れたが、前にぶどうヶ丘高の方にジムができた時も、衛生面を疑い行かなかった。

「ジムかあ……………」

わたしの手元にはチラシがある。S市内で我が家から比較的近くにあるのは、杜王町グランドホテルの八階にあるトレーニングジムだ。今は完全個室のジムもあるらしいが、生憎と近場にはない。

グランドホテルのジムは30日で27万のパーソナルトレーニングがある。果たして相場的に高いのか安いのかはイマイチわからん。

「我が身の健康と腰を思うならこの際、専門的な知識を持つ人間に指導してもらった方がいいか……」

チラシが謳う『徹底指導!』は、信じていいものなのか。申し込むにしても、一度視察してからだな。

???????

あれからジムに行ったが、思ったよりは衛生がしっかりしていた。シャワーも完備されており、終わった後に汗を流して帰ることができる。他の奴が使っていると思うとかなり嫌だが、汗だくで帰るよりはマシだろう。

また指導するパーソナルトレーナーが合わないと思うなら、変えられるそうだ。他にも特典が色々あったが、詳細は省く。

少し悩んだ結果、わたしは個別指導を受けることにした。

服装は速乾性の高い上下黒のアンダーウェアの上に、黒の半袖短パン。邪魔になるメガネは外し、長い前髪は後ろに撫でつけた。

メガネと言えば、最近手元のものが見えにくくなったな……。

担当になったのは20代半ばの女性である。肌は色白で、猫のようになやかな筋肉だ。

「今日から一か月間、吉良さんを指導させていただきます。よろしくお願ひしますね。もし何か質問があれば、いつでも気軽にどうぞ」

「よろしくお願ひします」

渡した問診表をトレーナーは読んでいく。紙には名前や年齢などを書いた。

「トレーニング目的は体幹を鍛えるためですか。具体的な目標はありますか？」

「ああ…その」

「？」

「腰を最近、少し……」

「え？……ああ、なるほど。ぎっくり腰ですね」

「わたしの場合、首から横にかけて体の表面にある脊柱起立筋に負荷がかかり、ポキッとやらかしてしまっただ。」

「その予防には脊柱起立筋を助ける腹横筋や多裂筋などの、インナーマッスルを鍛えるといいそうさ。」

「ではインナーマッスルをメインに、全体的な体幹を鍛えていきましょう。これまでの既往歴は——え、っ」

「人の顔をチラチラ見られても困る。精神病や手術歴を書かないわけにはいかないだろう。」

「……う、運動は毎日30分ほどランニングされてるんですね。日頃の食事内容も見た目感じ、健康的で素晴らしいと思います」

「気を遣わなくて結構ですよ」

「す、すみません……さすがに驚いてしまっただ……」

「注目の多い料理店ならぬ、手術歴の異様に多い客として、裏で話のネタにでもされるのだろうか。憂鬱な気分だ。」

「では次に体組成計で体重や筋肉量、体脂肪量などを測りましょう」

体組成計測定が終わった後はいよいよトレーニングが始まり、まずストレッチから行った。寝る前のストレッチとレベルが違い、筋肉が酷使されて腹の潰れたカエルのような声が出た。

衛生面だなんだと言ってる場合じゃない。死ぬか否かの瀬戸際だ。

「あ、あ……………」

「座る時間が多いお仕事らしいですが、やはり普段使われていない筋肉が多いですね」「みずつ、のんで、いいですか…」

「ご自由に大丈夫ですよ」

そんなこんなで、初回のトレーニングが終わった。

翌日は筋肉痛で、勘違いした父が「吉影、またなのか…………!？」と宣ってきたので、本当に爆殺してやろうかと思った。

??????

ジムに通い始めてから数回目のある日。個別指導の後、わたしはトレッドミル（ランニングマシン）で軽く走っていた。

この機械は便利だと思う一方で、推進力を機械側が生み出すため、実際の道を走るのとは大きく感覚が異なる。機械の方が力を使わずに済むな。

他にも走る人間がいる。下のベルトが巻き取られる音や、他人の息遣い、他のトレーニング機器の音。そういった雑音が耳に入って、上手く消えない。

ランニングは機械より普通の道を走った方がわたしには向いているようだ。景色が動き、自分の体のエネルギーが使われていく中で、意識は「走ること」に集約される。集中せずともその形に自然となるのだ。

「フウー……」

速度を落とし、今度はゆっくりと走る。その間に水分を取っていたら、横から話しかけられた。

「中々いい走りだな」

「ありがとうございます」

「吉良吉影」

「……ん？」

なぜわたしの名前が出てくるのだろう。答えは緑の balan にあった。

「時代錯誤の丸刈メガネもないし、髪を上げていたから一瞬気づかなかったが、そのいけ好かない顔で誰か分かったよ」

「……………」

隣をいかなかったものとして再び走り出そうとしたが、機械が急に止まった。

漫画家の————岸辺露伴の手には、万が一の時の緊急停止用リモコンがある。

「……………何か用かい」

「せっかかここで会ったんだ。少し勝負しないか？」

「遠慮する」

「なに、僕はちよつと仲良く走ろうって言うてるだけじゃあないか。それとも年下に負けるのは、貴様のお高い矜持が許さないのか？」

見え透いた挑発である。すっかり萎えてしまった。もう少し走りたかったが、シャワーを浴びに行くとしよう。

「帰るんだな」

「ああ、誰かさんのせいだね」

「そうか、じゃあな。」

ぎっくり腰の男

はたしてその情報をコイツがどこで手に入れたのか。恐らくわたしのトレーナーから知り合いを装って聞いたのだろうが。

隣にいたのも偶然ではない。前にわたしをジムで見かけ、そして情報を集めた。

奴の粘着質な行動の理由はまず間違いない、こちらが散々と破産の件をネタにしたからだろう。

足を戻し、口角が上がるのを感じながら奴を見る。

「いいだろう、岸辺露伴。受けて立つ」

まあ戦いの結論を言うと、わたしが負けた。普段から漫画家のくせに鍛えている奴は敵わなかった。

勝負方法は徐々に早まる速度の中、スピードが『20.0km』に達した瞬間、リモコンを取って自分の機械を止める——というもの。リモコンを取れなかった方は速度に耐えきれず、床に転がることになる。

まあ勝敗は仕方ないとして、無理に走った結果が過呼吸である。

勝負の途中、呼吸音がやばいなと思つた矢先、意識がフツと飛ぶように気を失つた。最後の気力で「びよういんはやめ…」と言つたのが功を奏し、白い天井を拝まずには済んだ。

バランの男から謝罪されたような気もするがすべて無視し、家に帰つた。

???????

吉良は露伴との勝負で、「クツツツツツ……」と久しぶりにブチ切れていた。まあ、元はと言えば、漫画家の破産をメスガキ並みに煽り嘲笑つていたので、自業自得ではある。

ジムを変えようかと彼は真摯に悩んだが、コースはまだ序盤だ。それに近場がいいジムはないし、ぎっくり腰の痛みを二度と味わいたくない。そのため通い続けた。

仕事の時間を考えると、ジムに充てられる時間は土日に限られる。

そしてその時間だと、露伴とも被りやすかった。

二度目の遭遇は土曜の午後、澄み渡る晴天がまぶしい日だった。

「……………ツチ」

更衣室で運動着に着替えていた吉良は、入ってきた漫画家に気づくなり舌打ちする。

露伴はわざわざ一つ分ロッカーを空けた隣に立った。

「ナア、まだ怒ってるのか？ 僕はちゃんと謝罪しただろ。「煽って悪かったよ」と」

「……………」

「お互いイイ大人なんだし、僕も破産以前の件は水に流してやるからさ」

「……………」

直後バアンと、ロッカーが派手な音を立てて閉められた。遮るものがない垂れ気味の目は、甘い雰囲気とは打って変わって苛烈さを宿す。現れたキラークイーンは上体を吉良に預け、じろっ…と露伴を見つめた。

「おっと、いたのか岸边露伴。全然気づかなかったよ。その、センスを疑う中途半端に割れたたまごの殻みたいなヘアバンド、今日も似合ってるね」

ニコニコと笑い、吉良は更衣室を出て行った。

それから30分後。パーソナルトレーニングの休憩中、トレーナーの水野がふと吉良に尋ねた。

「そう言えば、吉良さんってあの人と知り合いだったんですね？ほら、今日も来てる……」

「岸辺露伴」

「そうです。漫画家なのにかなりしつかり鍛えてて、すごいですよ」

「ここだけの話ですけど——と水野は続け、露伴が女性トレーナーから人気があることを語る。売れっ子漫画家で、顔も肉体もいい。ただ女性トレーナーが話しかけても無愛想だという。

「あれでも、子供の頃よりはマシになった方ですよ。水野さんは岸辺露伴のファンで？」
「いや……少年漫画は読まないんですけど。でも少女漫画は読みます。これはちよつと古めなんですけど、『ぼくの地球を守って』っていう作品が学生の頃に刺さって、色々読み漁ってました」

「ああ、日渡先生の……」

「……………おつとお？」

青年と会話している漫画家の後ろ姿を見ていた吉良は、そこで「ん？」となった。

「すごい意外です」

「ハハ……」

娘の漫画を偶然……と、一瞬誤魔化そうとしたが、頬をかこうとした薬指に指輪はない。前に仕事で調べた、夫婦が指輪を付ける割合はいくらだったか。流れるように思考が進む。

「偏見とかないので、大丈夫ですよ」

「……まあ、趣味で」

仕事の一環で読んでいる、と言えるはずもない。

吉良はあくまで自然に、トレーナーの視線から自分の手を隠す。

特にストレッチだと筋肉の動きを意識させるために、トレーナーの手が触れることがある。これは事前に「体に触ることが……」と説明を受け、彼もそれに了承した。しかし実際に健康的でたおやか手が触れると、意識してしまう。

「じゃあ、そろそろトレーニングに戻りましょう」

「はっ」

「……あ、あと」

水野は吉良に顔を近づけ、コソコソ話をする。

「おすすめの少女漫画があったら、ぜひ教えてください」

思わず吉良は至近距離に迫ったカノジョに、生唾を飲む。

だから、肉食獣のような女の目は見ていなかった。

ジムの女トレーナーの間では、この男もまた人気だった。

??????

個別指導後、いつものように吉良はランニングを始めようとした。

ズラリと並ぶトレッドミルに二名の先客がいる。他に走っている者はいなかった。

「岸辺露伴と……奴がさつき話していた青年か」

二人の間にはテーブルがあり、その上に緊急停止用のリモコンがある。前回の吉良と露伴のように勝負しているのだろう。しかし時速は『20.0km』より速い。両者はすでに息が荒かった。

負ける、岸辺露伴——と吉良は名も知らぬ青年を応援する。

「ぐっ……！」

リモコンを先に取ったのは露伴だった。速さに耐えきれず青年は前のめりになり、顔をベルト部分に強かに打ちつけた。

「僕の勝ちだな」

「……………」

青年は納得のいかない顔をしている。二人のリモコンを取るタイミングは同じだった。だがリモコンを取る前に露伴の指先がテーブルに触れ、その振動でリモコンが露伴側に傾いた。

「…………おっと、そろそろ時間だ」

帰ろうと歩き出した漫画家は、その途中で吉良と出会った。また嫌味の一つでも言われるのかと顔を顰めた彼は、すぐに横を通り過ぎようとする。

「セコい真似をするものだな」

「負け犬の遠吠えか？ いちやもんをつけるんだったら、実力で僕に勝ってみろよ」

「……………」

バチバチと火花が散る。最後に吉良が一言発し、「ハ？」という顔をした露伴はそのま

まトレーニングルームを後にした。

「さて、走るか…」

最初は時速8キロで、そこから徐々にスピードを上げて時速15キロまで行く。

人の少ない隅を選んだ彼だが、隣で例の青年が走り始めた。時折吉良の顔に視線が刺さる。

「……何だい?」

「…いえ、さつきあの先生と話していたから、知り合いなのかと思って」

「まあ、知り合いではあるよ」

ポツポツと会話が続く。この青年は「橋本陽馬ようま」と言うらしい。職業はモデルや俳優をしているそうだ。

「吉良さんは何をされてるんですか?」

「わたしは……」

チラ、と横目で陽馬の顔を見る吉良。そのあと「ライター関係だよ」と話した。

「パーソナルトレーニングを受けているってことは、それなりの稼ぎがあるんですね」

「本名で活動はしていないけれどね」

「どんなものを書かれてるんです?」

「…あまり公共の場で言えるものじゃないんだ。察してほしい」
「へえー？」

「ハハ……それより君は都市部で活動してないんだね？一昔前と違って今は新幹線一本、片道一時間半で東京に行けるんだから、便利な時代になったよ」

「本格的に収入を得られるようになったら引越すつもりです。トレーニング設備もここより充実しますから」

「そう……ハア」

話しながら走っていたため息の切れた吉良は、速度を緩めた。一方で陽馬は彼よりもっと速いスピードで走っている。

「若いのは羨ましいね……。いや、これを言ったら本格的に年寄りくさいな……」

「おいくつなんですか？」

「人生の折り返しには入ったかな……」

「40代？そうは見えないけど……オレの親と歳が近いですね」

「中々刺さる言葉はやめてくれないか」

ちなみに陽馬は21歳らしい。ハハッ、と吉良は乾いた笑い声を漏らした。

それから20分ほど経ち、吉良はトレッドミルから降りた。陽馬から今度『勝負』し

てみないかと誘われたが、前回の漫画家との件を話し丁重に断る。「やたら手術歴の多い人」だけでなく、「過呼吸の人」の称号まで得てしまったのだ。とにかくこれ以上目立ちたくない。

「……露伴先生に再戦リベンジしようとは思わないんですか？ いや……そもそも過呼吸で倒れたなら、その勝敗は決まっていけないはずだ。それなのに先生が「勝ち」っていうのはおかしいだろ」

「それは君とわたしの価値観の相違だよ。わたしは勝ち負けにこだわっていない。あの時は奴に少々キレてしまったが、次また戦おうとは思わないよ」

あくまで、同じ方法ではな——と、内心で吉良は呟く。

「アンタ、見てたでしょ。オレと先生が勝負していたところ」

「ああ、あの小僧はセコい真似をしていた。君は勝敗が不満のようだね。去る奴を睨むように見ていたからさ」

「オレは次に先生に会ったら再戦リベンジするつもりです。今度は「公正」のもとに行く。勝負とはそういうものだ、オレは思っている」

「それが君の価値観というわけだね」

「ええ」

フウー、と吉良は息を吐く。橋本陽馬の瞳には揺るぎない意思があった。それも、奪

われたものを追いかける熊の執着心のような、そんな凄まじさだ。

この青年の闘志を岸辺露伴は付けてしまったわけである。

「まだトレーニング終了までに期間があるんだがなあ……」

「……それがどうかしたんですか？」

「いや、こちらの話だ。君が勝負の公正さを重要視するならば、わたしは自分の平穩を望むというだけだよ。まあだが……これは一つ提案なんだがね」

吉良はその再戦の審判を申し出た。陽馬の求める「公正」役として立ち会おうと言うのだ。

「……アンタは勝ち負けを求めないんだろ？ それなのにどうして公正な審判ができると言うんだ？」

「それは自分に限った話だ。他人ならばルールに従って白黒はつきりさせるよ。それでも信じがたいならば……君に「わたしが公正な人間である」……と、信じられる根拠を見せよう」

「フーン……じゃあ、オレと『勝負』してください。自分の目で見極めます」

「……わかった」

ただすでに吉良は疲れ切っているため、日を合わせた次回に勝負を行うことになった。

そして当日。

勝負の方法は速さではなく持久力。『20.0km』だと吉良がまたぶつ倒れる可能性があるため、『15.0km』を長く走っていられた方が勝者とする。

「じゃあいいかい、吉良さん」

「いいよ。ただもし過呼吸を起こしたら、勝負は君の勝ちにしてくれ。あと絶対に救急車も呼ばないでくれ」

「……あれですか？呼ぶなよ、絶対に呼ぶなよ、的な」

「フリじゃない。病院が嫌いなんだ」

こうして二人の持久力対決が始まった。

年齢を考えれば、平等な戦いではない。そこは陽馬も分かっているだろう。ただ橋本陽馬が求めているのは全力を出し切る、ズルのない正しい勝負だ。

だからこそ吉良は今できる全力をもって相手し、負けた。最後はベルトの巻き取られる速度に負けて後ろに押し出され、そのまま気絶した。後ろの器具に体を打ちつけそうになったが、キラークイーンがキャッチし、床に転がす。

「あれ？……あ、あの人また倒れてる!!」

——と、こんな感じで軽い騒ぎになった。

陽馬が間に入ったことで救急車は呼ばれず、吉良自身も数分後に目覚めた。

「いいですよ。審判役、アンタに任せます」

「それは………はは、よかった…」

らしくない事をするもんじゃないと、吉良は心の底から思った。

???????

戦いの火蓋が切られる。予定を合わせる羽目になった漫画家は、面倒そうな顔をしている。

「何で僕がさア………」

「貴様がまいた種だろ。正々堂々戦え」

「ハア………」

ただ、露伴の表情もパーカーを脱いだ陽馬の肉体を見て固まる。ボディビルダーの

ようにゴリゴリにその体が鍛えられている、というわけではない。その筋肉は例えるなら彫刻のような、計算された美しさがある。同時に普通人間なら付かないであろう場所に、筋肉が隆起していた。青年の呼吸一つで、その一つ一つが生き物のようにうごめく。唾を飲み込んだ男のこめかみに、汗が伝う。

岸辺露伴は橋本陽馬から強い意思を感じ取った。色々と奇妙な目に遭ってきた彼の勘が、ここでようやくサイレンを鳴らし出す。露伴はつい、椅子に座って水を飲む吉良を見た。

「いいかい、ズルはなしだよ」

ルールは前回、露伴と陽馬が戦ったルールと同じ。『25.0km』の速度に達した後、先にリモコンを取った方が勝ちである。

「公正に勝負だ、露伴先生」

「……ああ、分かった」

そして二人のリベンジ・マッチが始まった。

吉良は完全に高みの見物だ。彼もまた、短期間で異常な肉体の仕上がりを見せた陽馬に引いている。

二台の速度はどんどん上がっていく。それに連れて呼吸の音も大きく、激しくなる。
(よく走れるものだな…)

速度はいよいよ時速20キロオーバー。途中で陽馬に筋肉のことなど聞いていた漫画家も、走りに集中するよう言われてから無言で走っている。

「……………」

背後から戦いを見ていた吉良の目が丸くなった。キュツ、と細まった瞳孔は獲物をとらえた時の猫のそれに似ている。

橋本陽馬の背中。肩甲骨部分のそこが、羽のような形に盛り上がった。ふくらはぎにも似た形が生まれる。

なおもゴオンゴオンと、ベルトの巻き取られる音が響く。

23・2 km …… 23・8 km …… 25・0 km までもう間もなく。

ラストスパートだ。露伴は唸るような声を上げ、陽馬もまた激しく息をする。

そして、25・0 km。先にリモコンを取ったのは——。

「オレの勝ちだッ!!」

25キロの勢いのまま後ろに転がることになった露伴は、トレーニング器具に背中をぶつけて呻いた。

「痛ッてえ…」

敗者の前に審判が立つ。吉良は漫画家を見下ろし、フツと、嘲笑った。

「貴様の負けだ、岸辺露伴」

「言われなくとも分かかってるさ…」

「橋本くんも満足できたかい？」

「ええ」

清々しい表情を青年は浮かべる。かくして、漫画家VS筋肉の神に愛された男の戦いが終わった。

??????

パーソナルトレーニングの最後の日、橋本青年と会った。

岸辺露伴とはあの日以降会っていない。シャワーを浴びる前に入れ違いで現れた奴

は、「ジムを変えろ」と言っていた。

他にも空いている中で、青年はわたしの隣で走る。

「この間は場を繕ってくれてありがとうございました」

「構わないよ。それより、何だか今日は機嫌が良さそうだね」

「ちようど前に事務所から連絡が来て、東京での大きな仕事が決まったんです」

「それは良かった」

「引越しもそろそろする気です。今オレ、人生の「最良」の日を歩んでいる気分ですよ」
「『気分』じゃないさ。実際に君は最良の日を歩んでいるんだ。大変なことも多いだろうが、東京でも頑張ってるね」

愛想のいい笑みを浮かべてやると、向こうもまた笑みで返す。

「そう言えば露伴先生を最近見ないんですけど、どうしたんですかね？」

「…ああ、奴はこの間シャワールームでちよいと怖い目にあつたらしくてね。ジムを変えたみたいだ。わたしとしては顔を拝まらずに済むからラッキーだったよ」

「ふうん…？」

「虫でも出たんじゃないか？家庭内害虫とか」

「ゴキ『その名を口にするな』……」

いくら衛生に気を遣っていようが、奴らは必ず現れる。何度爆殺しよう、気づけば

そこにいる。人類はいつだって奴らに勝利したことがないのだ。

「あと、一つ吉良さんに聞きたかったんだ。アンタは先生のことを苦手としているみただが、何でわざわざオレの信頼を勝ち取るようなマネまでして、審判役を引き受けたんだ？」

「奴の敗北顔を拜んでやりたかったからだよ」

「それは本当に、アンタの望む「自分の平穩」を覆してまで見たかったものなのか？」

「…フフツ」

隣り合う二台の機械は、すでに止まっていた。わたしはタオルで汗を拭いながら、窓の外に広がる杜王町の景色を眺める。

「では、何と言ったら君の機嫌を損ねずに済むんだい？」

「正直に言ってくれれば」

「そうか……。まあ、奴のことは嫌いだ、わたしの知り合いの忘れ形見でもあるんだ。下手に顔をつつ込む性格だね。襟首を掴んでやらないと、本気で危ない時がある」

「それが、オレとの戦いだっただと？」

「知っているかい、橋本陽馬くん。人の目は、口ほどにものを言うんだ。君が岸边露伴を見ていた時、わたしはね、「ああ面倒事が……」と、心底あの小僧を殴りたくなったよ」

この青年は「そういう」目だった。わたしと同じだ。しかもすでにその経験がある。

同種の人間だからこそ分かる。わたしとこの男の違いは、ボーダーラインを超えていくか否かだ。

「君がわたしの平穏な人生に意図して介入するというなら、こちらも相応の手を考えなければならぬ。どうするかは君次第だが、お互いこうしてジムで隣り合って走るだけの関係の方が、都合がいいだろう？」

「……そうですね」

「「NO」と言われずによかったよ」

「平穏をどうこうと語ったアンタの目も、口ほどにもものを言っていたからさ」
「おや、上手いことを言うね」

橋本陽馬がその後、わたしの前に現れることはなかった。

【トンデモ・ガール】

「鈴木……」

潮風の中に一人の男が佇んでいる。供えられた花束が揺れて、落ちた花びらが海へと吸い込まれていった。

今し方幽霊の女が消えていった場所を彼は見つめ続ける。相変わらず彼女は彼女のままだった。

『——あつ！吉影くん、一つ言い忘れてたんだけどね！』

「え？」

『露伴ちゃんのことお願い！すーっごい心配だから!!』

「え、ちよ、鈴」

『じゃあ今度こそ行くね!!』

「待つ………待つてくれ!!鈴美イ——ツツ!!」

吉良はその時、多分人生で一番叫んだ。

杉本鈴美は本当に最初から最後まで彼氏を振り回していった。

まあそんな彼女を、吉良は愛し続けている。

101話 一月三十日

ケーキのフィルムを舐める奴が許せない。

例えばわたしはそういう人間だ。

誰にでも譲れない一線があるだろう。目玉焼きにかけるのは絶対に醤油だとか、まあそんな些細なことでもいい。

わたしの場合特に行儀作法について目につく場合が多い。

小学生の時など思い返してみれば地獄だった。文字の書き順が違ったり、消しゴムのカスを床に平然と捨てていたり、檻のなくなった動物園の如き有様だ。

そんな中で毎日生活していると必然としてスルーできるようになる。人間は適応できる動物だ。子供の頃のわたしが十分その証明になる。目に入ったものをなかつたことにして心の平穏を保つ。でなければストレスで胃に穴が空いていたとせ。

一見突拍子のない考えが頭の隅で顔を覗かせたのは、ふとカレンダーが目に入ったから。

大抵が地面から足が離れ浮つくような時期。サンタが消息を絶つてから慌ただしい

年始年末がやってくる。独り身だがイベントを楽しむ遊び心は持ち合わせている。年末はこたつの上で丸くなるキラークイーン横で大晦日の番組を見た。マイクを持つ司会の女の手が綺麗だったのは記憶に新しい。

そうして新年や成人式が過ぎ、人々の正月ボケも鳴りを潜めた頃わたしの誕生日が来る。

オヤジは抜きにしてわたしの誕生日を祝う人間はいない。いや、いないこともないが、知り合いを招いて——あるいは招かれて祝われてもサラリーマンのような営業スマイルを浮かべて終わるだろう。

自分の誕生日ながら、白米に梅干しが一つ乗っただけの弁当のような淡白さだ。関心がない。

——ああ、それで、ケーキのフィルムの話に戻そう。

「二応ケーキでも買うか」と我が誕生日を見て思った。

一月三十日。一年が積もるたびに、次の一年が加速している気がした。

子供にとってお菓子は体の毒だ。虫菌の原因にもなる。

そのような家庭で育った幼い頃の吉良でも、ケーキを食べる機会があった。それが誕生日である。

当然ケーキのフィルムを舐めることなどしない。お行儀が悪い。いくらクリームがついていようとゴミ箱にポイだ。これが綺麗な女の手だったら全く話は違ってくるのだが。

「実はケーキがあるんだけど、吉良くんも食べる？」

「……ケーキ？」

そこは甘ったるい空間でありながら、室内にガスが充満しているような黒ヒゲ危機一髪の間所だった。次の瞬間には爆発しているかもしれない。危険な関係性の男女がベッドの上で横になっている。

女はうつ伏せで両手に顎を乗せて、その重みがかかった分、肘がシーツに沈む。長い亜麻色の髪が大胆不敵に周囲へ散らばっていた。

対して男、と言つても少年の面影を残す人物は仰向けでぼんやりと天井を見ている。

お互い何も着ていない。その代わり薄い毛布が腰あたりまでかかっている。

「そう、ケーキ。私の誕生日なのよねん」

「いよいよ三十代の世界に入ったと」

「まだ私アラサーよ?」

「そうですね。お誕生日おめでとうございます」

「めんどくさい感じで流すとアツキー泣いちやうぞ?」

行為後の気だるさで眠気を覚えている吉良は、やかましい方向から体ごと逸らして目を瞑った。少しだけ寝て体力を回復したい。

後ろからちよつかいを出してくる女に肘で抗議すると、ツンツンと突かれていた背中
の感覚が消える。

「ねえ、用意したら一緒に食べない?」

「……………」

「吉良くんく〜」

「……………」

吉良は毛布を顔にまでかぶって完全黙秘の体勢を取った。どうも折れそうにないと判断した佐藤は、四つん這いで毛布の上を横切りベッドから立ち上がった。肩にテーブ

ルに畳んであつた彼シャツを勝手に引つ掛け冷蔵庫に向かう。

中にあるケーキは二つ分。相手が部屋に来るのを見越して用意されたものだ。

それを皿に乗せて、ついでにフォークも乗せたら両手で店員の如く運ぶ。そこで「あつ」と声が出た。派手に皿の割れる音がすれば、流石に吉良も丸くなる術を解いて毛布から顔を出した。何事か、と見れば下に転がつていた己の衣服に足を取られ、ずつこけた佐藤が浜に打ち上げられた魚のようにうつ伏せで倒れている。二つの皿は割れあたりに散乱し、ケーキも床に落ちてしまっている。唯一、一つだけ佐藤の手に救出された生き残りをのぞいて。

「ドジっ子はキャラ付けじゃなかったんですか、先生」

「痛いたつつく……いったい誰がこんなところに服を投げ捨てたのよお!!……私か」

「あなたですね」

「今までは吉良くんがお母さんみたいに畳んでたのに……」

「人に頼るな。恥を知れ」

佐藤は落ちたケーキを見て、「ああ……」と本気で残念そうな声を出す。散らばつた皿の破片に彼女が動けずにいる中、大きなため息が一つ聞こえ、吉良が毛布を引きずりながらベッドを立つた。部屋から出た吉良は間もなくスリッパを履き戻ってきた。手には佐藤の分のスリッパもある。それを彼女の足元に置いた男はそこで、手に握り潰される

ようにしてあるケーキに気づいた。先ほどまで眠たげだった目が丸くなる。瞳孔がキュツと細まったことに、足元へ視線を向けている佐藤は気づいていない。

「ありがと吉良くつ、う?」

刺身を目の前でぶらつかされた猫が果たして『待て』をできようものか。

ほんのりと香る刺身の鉄くささ。猫は到底我慢などできまい。腹が減っているなら尚更だ。

普段の吉良なら相手が利害関係で成り立つ佐藤相手でも、*“許可”*は取った。無理やりというのはいけない。暴力的なほど、その在り方は彼の本性に近づく。だからこそ紳士的に、壊れ物を扱うように接する。多分それは他の女を抱いても同じだろう。

生ぬるい感覚と共に赤い舌が這う。引つ込めようとした佐藤の拒否は通らず、腕を強く掴まれる。

「吉良、くん」

「……………」

「……………それ、私のケーキなのに」

「一緒に食べてるじゃないか」

「どい」が……」

上目遣いに吉良は佐藤を見る。ストローでジュースを吸った時のような、艶かしい音

を立てて薄い口元が離れる。

「ぼくは食べていて、あなたは食べられてる。ほら、一緒に食べてるだろ」

ついさっきのまぐわいよりよっほど熱の孕んだ少年の目に、佐藤の背がブルリと震えた。

その後買い直したケーキでこの女がフィルムを舐めとると知った吉良は、心底嫌そうな顔をした。

それを吉良が言えるものなのか、佐藤は甚だ疑問だったが。

夏休みのある日。ちょっと遠出しようかと電車を乗り継いでデートを楽しむ。

空からはカンカンと日差しが降り注いで、皮膚から汗が滲み出る。元気な彼女を前にして、そこら辺に転がっていきそうな蟬のように死にかけな彼氏は「これが若さか…」な

どと思った。そういう自分は高校生である。

「ちよつと休憩する、吉影くん？」

「お言葉に甘えるよ……」

鈴美は手早く近くにあつたカフェを見つけ、二人でそこに入った。時間帯は三時ごろ。ちょうどアフタヌーンティーと洒落込める時間だった。メニユーと睨めっこしていた彼女は「すみませーん」と大学生と思しき店員に声をかけ、ココアとショートケーキを頼んだ。

吉良もメニユー表をざつと見た。腹は空いていないのでコーヒーだけ頼む。ニコニコしている彼女に、皿が来た後に起こるのであろうイベントは薄々予感できた。

「はい、あーん」

糖質がたっぷり乗せられたフォーク。吉良吉影は空気の読める男だ。ここで「だが断る」なんて言うはずがない。

口を開けて、ついでに正面に座る彼女へ顔を近づけるように前のめりになる。甘さが口の中で溶けて、そのまま体内に流れて行った。

「どう、美味しい？」

「…ぼくがあまり甘いものが好きじゃないって知っていて、それを聞くんだね」

「もお、そこは「美味しいよ」って微笑んで返してよ！」

「美味しいよ（ニコツ）」

「ニコツ」って音が聞こえてくる、恋人に向けるお手本のような笑顔を浮かべるんじゃないかってえ……」

自然に笑え、と鈴美は思った。今の吉良の顔はドラマの俳優が恋人に向けてキザった言葉でも呟きそうな甘いフェイスをしている。

鈴美の反応に吉良は口元を手で隠して小さく笑った。今度のは天然の笑みだ。吉良はこういった、少しのSっ気を見せることがよくある。イジワルをして相手の反応を見るのだ。鈴美もよくやられる。お返しに叩くとそれでも笑っているので、少しのMっ気もあるんだろうか。彼女は首を傾げた。

「いや、単純に性格が悪いのか、吉影くんの」

「え？」

「吉影くんの性格が悪いって話よ」

「ぼくは今、仮にも恋人に貶されているのかい…？」

「事実を言ってるだけじゃない」

「デートの最中で？」

「こういう時こそ相手の本性が際立って見えちゃうこともあるでしょ」

「ふうん…」

吉良の視線がケーキを頬張る彼女から窓へ移った。人や車が行き交う道を紫目が所在なきげにとらえる。そこに目を移した意味はあまりなくて、通りすぎる者たちは工場の流れ作業のように右や左へ通り過ぎて視界から消えて行く。でも粘土の如き柔らかな疑問だけはふてぶてしく頭の中に居座っている。

杉本鈴美との距離感。『恋人』である彼女とこうしてデートをしながら、行動一つに淫靡さを醸せる女とも関係を築いている。ぬるま湯と冷水に交互に浸かって、その中で愛し方を学ぼうとしている吉良はいったい何なのだろう。美しい手を目の前にぶら下げられたらそれしか見えなくなってしまう男が、その異常性から脱そうとしている。もがいている。セミファイナルを迎えた奴らのように？

「はぁー、美味しかったー」

皿にスプーンを置いた音が聞こえ、次に鈴美の声が聞こえた。視界に映る景色のさらに遠くへ向かおうとしていた吉良の意識がそこで引き戻される。今度は冷房の音がすぐ耳元で聞こえてくるようだった。

「…大丈夫？ 顔色がちよつと悪いけど」

「……いや、何でもないよ」

お会計は彼女が何か言う前に彼氏が。店を出た後はじーっと愛らしい視線が吉良に刺さる。鈴美としては自分の分は自分で払いたかつたのだろう。どうしたものか。吉良は少し悩んで、背を丸めた。人差し指で自分の頬をトントンと叩くと、その意図を鈴美は察したようだ。

「これでチャラだ」

「…しようがないなあ」

ちゆ、と音がした。感触は頬ではなく唇に。目を丸くした吉良に、鈴美は一步分ジャンプするように離れて、してやったりなあざとい笑みを浮かべた。

ついでにこれは余談だが、カフェのケーキの件でまたもや彼女がケーキのフィルム（とは言っても子供の頃に）舐めていたと知った吉良は眉を寄せた。その代わり今は行儀よく、フオークでフィルムからクリームを追い剥ぎして食べているらしい。

人生にはいくつかの避難所がある。酒、ギャンブル、趣味、エトセトラ。

酒に溺れることもなく、煙草も吸わない。賭け事もせず、趣味は読書。健康的でいて平穩たる日常。夜はぐっすり寝て、朝起きたら縁側の扉を開けて新鮮な外の空気を吸い込む。さあステキな一日の始まりだ。——なんて日々を送れたらよかった。

ある事件ののち、大学を休学していた吉良。一時は重体だった体も後遺症なく回復した。新しく付き合ひのできた東方仗助や母の朋子とも、親戚のような距離感で間を取っている。

矢は休学中探していたが、結局見つからなかった。それならばまあ仕方ない。割り切ることも必要だ。小骨が喉に刺さったような感覚をそのままにしておくのは、吉良としては非常に嫌だったのだが。

進級した、あるいは単位を落として絶叫したかもしれない奴らと同室で講義を受ける。

完全にぼつちで過ごした。「ぼつち・ぎ・きらー！」である。格好つけて、「友達は作らない。人間強度が下がるから」みたいなことを思っていたわけではない。ただ、意図的に人間と関わっていないのは確かだ。

くり抜かれた腹の穴は塞がらず、そこから満たされたはずの熱が逃げて行く。当時の

吉良はギリギリだった。平穩のふた文字が砂漠のオアシスのように遠い。文字通り気が狂いそうな日々。人間の皮が剥がれてバケモノの本性が今にも現れそうになる。

殺したくて殺したくて、仕方なかった。爪の伸びる速度は絶好調。だのに精神も肉体も絶不調。眠れない食べられない殺したい植物のように平穩に暮らしたい殺したい殺したい。自死の選択も彼のメニュー画面にはあった。

そんな時にリーゼントにシビアコしている少年のエネルギーを浴びると、わずかに眩しい方へ引つ張られた。ギリギリだった吉良に転機となる言葉をもたらしたのは朋子で、いざ肉欲に浸つてみるとこれがよかった。

足りなかったのは熱だ。女と肌を重ねると喉の渇きが紛れる。まあ乱れていく中で自分の冷たさを自覚して脳が白けることもあった。

そして気晴らしに書いていた趣味とも言えない小説を吉廣誰かさんが見つけてしまったせいで、まっすぐ進めようとしていた車が急カーブを切り、吉良は作家になった。

人生設計とは上手く行かないものである。彼は常々思った。

???????

わたしの編集が箱を持ってきた。亀ユードパートで買った品を泉くんはテーブルに置く。その品はカレンダーの日付からしてケーキだろう。以前誕生日を聞かれたことがあり話したが、覚えていたようだ。

勝手に皿やスプーンを用意し始めた彼女。家主の許可を取ってからにしてもらいたい。

「そもそもホールケーキを買ってくるな。これで二等分したら半円柱の物体ができあがるぞ」

「まあまあまあ。食べきれなかったらご近所にも配ってください」

「近所の間人が分けられたケーキを持つてくる絵を想像してみなよ、君」

「美味しそうですね」

「気は確かか？」

「人間が」

「ドラマの方向性が急に変わったんだが？」

包丁を持ちながら言われると余計に発言の血生臭さが増す。

泉くんは剥がしたフィルムを皿の上に置き、包丁を当て少しずつずらしながら綺麗に

付着していたクリームを取った。それをホールケーキの側面に塗りつける。

「私の腕前中々でしょう、先生」

「……舐め取ったりはしないんだね」

「セクハラ警察です！担当編集へのいかがわしい発言はやめてください!!」

「警察の出勤が遅すぎやしないか？」

合意の上での肉体関係があるんだ。今更すぎる。

泉くんは「おギョーギが悪いですからね」と言った。そこらの躰はすっかりされていたらしい。

「じゃあ食べましょう、先生。お誕生日おめでとうございます」

「待て、切るならもう少し細かく……」

ケーキの全消費は当然できるはずもない。残った部分は知り合いの連中に、一つ抱いた好奇心がてら渡した。

『ケーキにフィルムが付いていたらどうするか』

その回答はそれぞれで、ふと小説のネタになりそうだとわたしは思った。